香椎B遺跡

―香椎住宅地造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告―

－本文編－

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集

香椎B遺跡
御飯ノ山城
寺熊窯跡
大日古墳群

2000

福岡市教育委員会

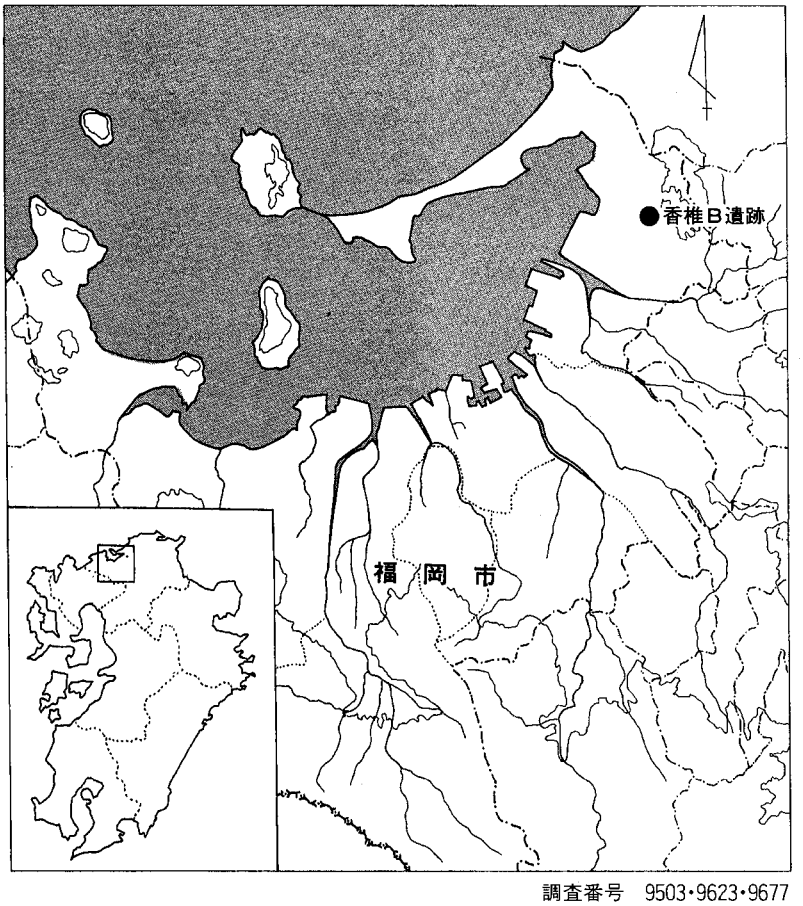
KASHII

香椎B遺跡

—香椎住宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

—本文編—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集



調査番号　9503・9623・9677
9740・9779・9806
調査略号　KSB－1～6

平成12年

福岡市教育委員会

序

福岡市は、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が遺っています。このため、先人たちの足跡である文化財保護に努めております。

今回報告いたしますのは、香椎住宅地造成工事に先だって実施したもので、本市東部に位置する古代から中世の複合遺跡である香椎Ｂ遺跡を平成７～10年に実施しました発掘調査記録です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた地権者および国際興業株式会社をはじめ、御指導と御援助をいただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成12年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西　　憲一郎

凡　　例

1．本書は、福岡市教育委員会が東区大字香椎字寺熊他地内の宅地造成工事地内において、1995年(平成7年)～1997年(平成9年)に実施した香椎B遺跡第1～4次調査の発掘調査報告書である。関連資料として香椎B遺跡第5・6次調査と香椎宮境内出土資料を掲載した。

2．本書における各調査の細目は下記のとおりである。

3．遺構実測図に付した座標値は平面直角座標系第II座標系による座標値である。方位は磁北で、真北に対し6°18′西偏する。

4．本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSA(柵・塀)SB(建物)、SD(溝)、SE(井戸)、SG(池・苑池)、SK(土壙)、SX(その他)などの遺構の性格を示す分類記号を付した。

5．本書の執筆は下記のとおりである。

I，III，IV－1・2－(1)～(7)，V……瀧本正志
II，IV－1－(1)－3)・(6)－3)・(7)－3)…田上勇一郎
IV－1－(8)・(9)……吉留秀敏
VI－1……千田嘉博
VI－2……村田修三
VI－3……山崎龍雄
VI－4……坂上康俊
VI－5……佐伯弘次
VI－6……堀本一繁

6．遺物実測図は、作成の一部を有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、成果品を本書において使用した。

7．各種分析については株式会社古環境研究所に委託し、分析結果についてはIV－8・9に収録した。

8．本書では、遺構・遺物の撮影は下村智、瀧本正志、田上勇一郎、本田浩二郎、遺構・遺物の実測は茨木浩一、坂本憲昭、犬丸陽子、上野裕子、中村智子、高木誠、上方高弘、春田城二、藤野雅基、山野祥子、下村、瀧本、田上、本田、トレースは二宮忠司、大庭友子、末次由紀恵、長浦芙美子、上野、高木、中村、春田、藤野、山野、拓影採拓は加賀宏子、持原良子がおこなった。

9．本書編集は瀧本正志が担当し、中間千衣子、上野、中村、山野、末次の助力を得た。

10．発掘調査に係る遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調　査　地	調査面積	調　査　期　間
第 1 次	9503	KSB-1	東区大字香椎字寺熊他	17,638m²	1995. 4 . 3～96. 7 .19
第 2 次	9623	KSB-2	東区大字香椎字寺熊他	3,100m²	1996. 7 .22～97. 4 . 1
第 3 次	9677	KSB-3	東区大字香椎字寺熊	22,800m²	1996.11.18～98. 1 .22
第 4 次	9740	KSB-4	東区大字香椎字大日	1,516m²	1997. 9 . 4 ～98. 3 .31
第 5 次	9779	KSB-5	東区大字香椎字生水	167m²	1998. 1 .19～98. 4 .15
第 6 次	9806	KSB-6	東区香椎３丁目	300m²	1998. 4 .14～98. 4 .15

本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査の組織……2

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境……5
1．遺跡の位置と立地……5
2．遺跡の歴史的環境……5

第Ⅲ章 調査の記録……9
1．調査の概要……9
2．調査の経過……11

第Ⅳ章 遺構と遺物……13
1．香椎B遺跡第1～4次調査……13
(1) 生水・寺熊調査区……13
(2) 稲戸前調査区……192
(3) 小作調査区……197
(4) 大日調査区……199
(5) 大日西調査区……201
(6) 御倉谷調査区……203
(7) 里城調査区……213
(8) 旧石器・縄文時代の遺物……222
(9) 古墳時代の石製品……229
2．寺熊窯跡……230
3．大日古墳群……234
4．御飯ノ山城……247
5．香椎B遺跡第5次調査……270
6．香椎B遺跡第6次調査……272
7．香椎宮境内出土遺物……277
8．放射性炭素年代測定……282
9．土壌分析……285

第Ⅴ章 小 結……304

第Ⅵ章 付 論……308
1．御飯ノ山城の構造……308
2．御飯ノ山城の縦堀について……312
3．福岡市内の中近世城館……316
4．香椎B遺跡出土の木簡について……332
5．中世の香椎と香椎宮……346
6．福岡市博物館所蔵「三苫文書」……358

Figures

挿 図 目 次

Fig. 1 調査区位置図(1/300,000) ……6
Fig. 2 調査区周辺航空写真 ……6
Fig. 3 調査地周辺遺跡分布図(1/70,000) ……8
Fig. 4 調査区位置図(1/3,000) ……10
Fig. 5 生水・寺熊調査区位置図(1/2,500) ……13
Fig. 6 生水・寺熊調査区遺構配置図(1/400) ……折り込み
Fig. 7 溝SD01・05～10・43土層実測図(1/40) ……28
Fig. 8 溝SD51土層実測図(1/40) ……29
Fig. 9 溝SD100・101・103土層実測図(1/40) ……30
Fig.10 溝SD102・104・105・216・250・300・301土層実測図(1/40) ……31
Fig.11 溝SD316・318・320・486土層実測図(1/40) ……32
Fig.12 井戸SE11実測図(1/40) ……38
Fig.13 井戸SE12実測図(1/40) ……38
Fig.14 井戸SE50実測図(1/40) ……39
Fig.15 井戸SE98実測図(1/50) ……40
Fig.16 井戸SE120実測図(1/40) ……41
Fig.17 井戸SE123実測図(1/40) ……41
Fig.18 井戸SE127実測図(1/40) ……41
Fig.19 井戸SE157実測図(1/40) ……42
Fig.20 井戸SE302実測図(1/40) ……42
Fig.21 井戸SE481実測図(1/40) ……42
Fig.22 井戸SE711実測図(1/40) ……42
Fig.23 井戸SE718実測図(1/40) ……43
Fig.24 井戸SE724実測図(1/40) ……43
Fig.25 井戸SE752・753実測図(1/40) ……44
Fig.26 苑池SG488実測図(1/60) ……46
Fig.27 土壙SK99・125実測図(1/30) ……48
Fig.28 土壙墓SK126実測図(1/30) ……49
Fig.29 掘立柱建物SB81出土遺物実測図(1/3) ……54
Fig.30 溝SD07・08・09・10出土遺物実測図(1/3・1/4) ……55
Fig.31 溝SD18・51出土遺物実測図(1/3・1/4) ……56
Fig.32 溝SD100出土遺物実測図(1/3・1/4) ……57
Fig.33 溝SD101中層出土遺物実測図(1/3) ……58
Fig.34 溝SD101上～中層出土遺物実測図(1/3・1/4) ……59
Fig.35 溝SD101下層出土遺物実測図 1 (1/3) ……60
Fig.36 溝SD101下層出土遺物実測図 2 (1/3) ……61
Fig.37 溝SD103上層出土遺物実測図(1/3) ……62
Fig.38 溝SD103中層出土遺物実測図 1 (1/3) ……63
Fig.39 溝SD103中層出土遺物実測図 2 (1/3) ……64
Fig.40 溝SD103中層出土遺物実測図 3 (1/3) ……65
Fig.41 溝SD103下層出土遺物実測図(1/3) ……66
Fig.42 溝SD216・221・222・300出土遺物実測図(1/3) ……67
Fig.43 溝SD251出土遺物実測図(1/3) ……68
Fig.44 溝SD257出土遺物実測図(1/3) ……69
Fig.45 溝SD301出土遺物実測図(1/3) ……70
Fig.46 溝SD309・310・311・316出土遺物実測図(1/3) ……71
Fig.47 溝SD318出土遺物実測図(1/3・1/4) ……76
Fig.48 溝SD320出土遺物実測図 1 (1/3) ……77
Fig.49 溝SD320出土遺物実測図 2 (1/3・1/4) ……78
Fig.50 溝SD320下層出土遺物実測図(1/3・1/4) ……79
Fig.51 溝SD321・322・323出土遺物実測図(1/3・1/4) ……80
Fig.52 溝SD327上層出土遺物実測図(1/3) ……81
Fig.53 溝SD327下層出土遺物実測図(1/3) ……82
Fig.54 溝SD332・333・334出土遺物実測図(1/3) ……83
Fig.55 溝SD337・338・343出土遺物実測図(1/3・1/4) ……84
Fig.56 溝SD349・364・365・371出土遺物実測図(1/3) ……85
Fig.57 溝SD397・433・707・709・730出土遺物実測図(1/3) ……86
Fig.58 溝SD486出土遺物実測図(1/3) ……87
Fig.59 溝SD710出土遺物実測図(1/3) ……88
Fig.60 溝SD727・730出土遺物実測図(1/3) ……89
Fig.61 溝SD740・750・751・756出土遺物実測図(1/3) ……90
Fig.62 井戸SE11出土遺物実測図(1/3) ……91
Fig. 63 井戸SE120出土遺物実測図(1/3・1/4) ……92
Fig. 64 井戸SE481・711・718・724・752・753出土遺物実測図(1/3・1/4) ……93
Fig. 65 苑池SG122出土遺物実測図(1/3・1/4) ……95
Fig. 66 苑池SG488出土遺物実測図 1 (1/3) ……96
Fig. 67 苑池SG488出土遺物実測図 2 (1/3) ……97
Fig. 68 苑池SG488中層出土遺物実測図 3 (1/3) ……98
Fig. 69 土壙墓SK126出土遺物実測図(1/3) ……100
Fig. 70 土壙SK335出土遺物実測図(1/3) ……101
Fig. 71 土壙SK392・418・420・456・476出土遺物実測図(1/3) ……102
Fig. 72 土壙SK489・499出土遺物実測図(1/3) ……103
Fig. 73 土壙SK708・719出土遺物実測図(1/3) ……104
Fig. 74 溜SX127・128出土遺物実測図(1/3) ……104
Fig. 75 溜SX129出土遺物実測図(1/3) ……105
Fig. 76 溜SX136・407・423・493出土遺物実測図(1/3・1/4) ……106
Fig. 77 溜SX716出土遺物実測図(1/3) ……107
Fig. 78 溜SX717出土遺物実測図(1/3) ……108
Fig. 79 黒色土層出土遺物実測図 1 (1/3) ……110
Fig. 80 黒色土層出土遺物実測図 2 (1/3) ……111
Fig. 81 黒色土層出土遺物実測図 3 (1/3) ……112
Fig. 82 黒色土層出土遺物実測図 4 (1/3) ……113
Fig. 83 上層黒色土層出土遺物実測図 1 (1/3) ……114
Fig. 84 上層黒色土層出土遺物実測図 2 (1/3) ……115
Fig. 85 上層黒色土層出土遺物実測図 3 (1/3・1/4) ……116
Fig. 86 上層黒色土層出土遺物実測図 4 (1/3) ……117
Fig. 87 上層黒色土層出土遺物実測図 5 (1/3) ……118
Fig. 88 上層黒色土層出土遺物実測図 6 (1/3) ……119
Fig. 89 上層黒色土層出土遺物実測図 7 (1/3) ……120
Fig. 90 上層黒色土層出土遺物実測図 8 (1/3) ……121
Fig. 91 上層黒色土層出土遺物実測図 9 (1/3) ……122
Fig. 92 上層黒色土層出土遺物実測図10(1/3) ……123
Fig. 93 上層黒色土層出土遺物実測図11(1/3) ……124
Fig. 94 上層黒色土層出土遺物実測図12(1/3) ……125
Fig. 95 上層黒色土層出土遺物実測図13(1/3) ……126
Fig. 96 褐色～灰褐色土層出土遺物実測図(1/3) ……128
Fig. 97 灰褐色土層出土遺物実測図 1 (1/3) ……129
Fig. 98 灰褐色土層出土遺物実測図 2 (1/3・1/4) ……130
Fig. 99 灰色～暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1/3) ……131
Fig.100 黒色泥炭土層出土遺物実測図(1/3) ……132
Fig.101 下層黒色土層出土遺物実測図 1 (1/3) ……135
Fig.102 下層黒色土層出土遺物実測図 2 (1/3) ……136
Fig.103 下層黒色土層出土遺物実測図 3 (1/3) ……137
Fig.104 下層黒色土層出土遺物実測図 4 (1/3) ……138
Fig.105 下層黒色土層出土遺物実測図 5 (1/3) ……139
Fig.106 下層黒色土層出土遺物実測図 6 (1/3) ……140
Fig.107 下層黒色土層出土遺物実測図 7 (1/3) ……141
Fig.108 下層黒色土層出土遺物実測図 8 (1/3) ……142
Fig.109 下層黒色土層出土遺物実測図 9 (1/3) ……143
Fig.110 下層黒色土層出土遺物実測図10(1/3) ……144
Fig.111 下層黒色土層出土遺物実測図11(1/3) ……145
Fig.112 下層黒色土層出土遺物実測図12(1/3) ……146
Fig.113 下層黒色土層A・B・C群出土遺物実測図13(1/3) ……147
Fig.114 下層黒色土層D群出土遺物実測図14(1/3) ……148
Fig.115 下層黒色土層D群出土遺物実測図15(1/3) ……149
Fig.116 下層黒色土層E・F・G・H・I・J群出土遺物実測図16(1/3) ……150
Fig.117 下層黒色土層L・N・O群出土遺物実測図17(1/3) ……151
Fig.118 下層黒色土層P群出土遺物実測図18(1/3) ……152
Fig.119 下層黒色土層S群出土遺物実測図19(1/3) ……153
Fig.120 下層暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1/3・1/4) ……153
Fig.121 暗灰色泥炭土層出土遺物実測図(1/3) ……154
Fig.122 溝SD51出土木製品実測図(1/3) ……156
Fig.123 溝SD100出土木製品実測図(1/3) ……157
Fig.124 溝SD103出土木製品実測図 1 (1/3) ……158

Fig.125 溝SD103出土木製品実測図2(1/3) ……159
Fig.126 溝SD103出土木製品実測図3(1/3) ……160
Fig.127 溝SD103出土木製品実測図4(1/3) ……160
Fig.128 溝SD103出土木製品実測図5(1/3) ……161
Fig.129 溝SD103出土木製品実測図6(1/3) ……162
Fig.130 溝SD103出土木製品実測図7(1/3) ……163
Fig.131 溝SD103出土木製品実測図8(1/3) ……164
Fig.132 溝SD216出土木製品実測図(1/1) ……164
Fig.133 溝SD250出土木製品実測図(1/3) ……165
Fig.134 溝SD316出土木製品実測図(1/3) ……165
Fig.135 溝SD710出土木製品実測図(1/3) ……166
Fig.136 井戸SE98出土木製品実測図(1/4) ……168
Fig.137 井戸SE120出土木製品実測図(1/3) ……168
Fig.138 井戸SE123出土木製品実測図(1/3) ……169
Fig.139 井戸SE157出土木製品実測図(1/3) ……169
Fig.140 井戸SE481出土木製品実測図(1/3) ……170
Fig.141 井戸SE718出土木製品実測図(1/3) ……170
Fig.142 土壙SK738出土木製品実測図(1/3) ……171
Fig.143 苑池SG122,溜SX127・129・137・716・723出土木製品実測図(1/3,1/4) ……172
Fig.144 溜SX717出土木製品実測図(1/3) ……173
Fig.145 暗灰色粘質土出土木製品実測図(1/3) ……175
Fig.146 黒色泥炭層出土木製品実測図1(1/3) ……175
Fig.147 黒色泥炭層出土木製品実測図2(1/3) ……176
Fig.148 包含層出土木製品実測図(1/3) ……177
Fig.149 Tr.2出土木製品実測図(1/3) ……177
Fig.150 木簡実測図1(2/3) ……179
Fig.151 木簡実測図1(2/3) ……180
Fig.152 寺熊・生水出土銅銭拓影(1/1) ……184
Fig.153 軒丸瓦拓影・実測図1(1/4) ……186
Fig.154 軒丸瓦拓影・実測図2(1/4) ……187
Fig.155 軒平瓦拓影・実測図(1/4) ……189
Fig.156 板碑・五輪塔拓影(1/4) ……191
Fig.157 稲戸前調査区位置図(1/2,500) ……192
Fig.158 稲戸前調査区遺構配置図(1/400) ……折り込み
Fig.159 井戸SE600実測図(1/30) ……194
Fig.160 土壙SK602・603・604・607・609実測図(1/30) ……195
Fig.161 小作調査区位置図(1/2,500) ……197
Fig.162 小作調査区遺構配置図(1/300) ……198
Fig.163 大日調査区位置図(1/2,500) ……199
Fig.164 大日調査区遺構配置図(1/300) ……200
Fig.165 土壙SK20出土遺物実測図(1/3) ……200
Fig.166 大日西調査区位置図(1/2,500) ……201
Fig.167 大日西調査区遺構配置図(1/300) ……202
Fig.168 柱穴出土遺物実測図(1/3) ……202
Fig.169 御倉谷調査区位置図(1/2,500) ……203
Fig.170 御倉谷調査区遺構配置図(1/250) ……204
Fig.171 埋甕SK956実測図(1/30) ……205
Fig.172 SK956甕実測図(1/6) ……206
Fig.173 御倉谷調査区出土遺物実測図(1/3) ……207
Fig.174 御倉谷調査区出土銅銭拓影(1/1) ……208
Fig.175 中世墓遺構配置図(1/250) ……209
Fig.176 中世墓A群遺構配置図(1/40) ……210
Fig.177 中世墓B・C群遺構配置図(1/50) ……折り込み
Fig.178 中世墓B群18～25実測図(1/30) ……折り込み
Fig.179 中世墓A群3号墓蔵骨器実測図(1/3) ……212
Fig.180 里城調査区位置図(1/2,500) ……213
Fig.181 里城調査区遺構配置図(1/500) ……214
Fig.182 溝SD258土層実測図(1/40) ……215
Fig.183 土壙SK917実測図(1/60) ……216
Fig.184 窯SX918実測図(1/30) ……216
Fig.185 焼土壙SK920実測図(1/30) ……216
Fig.186 焼土壙SK919実測図(1/30) ……216
Fig.187 里城調査区出土遺物実測図(1/3) ……219
Fig.188 里城調査区暗褐色土出土遺物実測図(1/3・1/4) ……220
Fig.189 里城調査区青灰色粘質土出土遺物実測図(1/3) ……221
Fig.190 SX608出土縄文土器実測図(1/3) ……223
Fig.191 石器実測図1(1/1) ……224
Fig.192 石器実測図2(1/1,2/3) ……225
Fig.193 石器実測図3(1/2) ……228
Fig.194 子持勾玉実測図(1/2) ……229
Fig.195 寺熊窯跡位置図(1/500) ……230
Fig.196 1号窯実測図(1/40) ……231
Fig.197 1号窯出土遺物実測図(1/3) ……233
Fig.198 大日古墳群位置図(1/600) ……234
Fig.199 1号墳墳丘実測図(1/100) ……235
Fig.200 1号墳石室・墳丘土層実測図(1/50) ……236
Fig.201 1号墳墓壙・地山整形実測図(1/100) ……237
Fig.202 1号墳出土遺物実測図(1/3) ……238
Fig.203 2号墳墳丘実測図(1/100) ……239
Fig.204 2号墳石室・墳丘土層実測図(1/50) ……240
Fig.205 2号墳墓壙・地山整形実測図(1/50) ……240
Fig.206 2号墳出土遺物実測図(1/3) ……241
Fig.207 3号墳墳丘実測図(1/100) ……242
Fig.208 3号墳石室・墳丘土層実測図(1/50) ……243
Fig.209 3号墳墓壙・地山整形実測図(1/50) ……243
Fig.210 4号墳墳丘実測図(1/100) ……244
Fig.211 4号墳石室・墳丘土層実測図(1/50) ……245
Fig.212 4号墳墓壙・地山整形実測図(1/100) ……245
Fig.213 4号墳出土遺物実測図(1/4) ……246
Fig.214 4号墳出土ガラス製品実測図(1/1) ……246
Fig.215 御飯ノ山城現況地形図(1/1,500) ……249
Fig.216 御飯ノ山城地形図(1/1,500) ……250
Fig.217 御飯ノ山城現況地形図(1/1,000) ……251
Fig.218 御飯ノ山城遺構配置図(1/1,000) ……252
Fig.219 御飯ノ山城遺構配置図(1/700) ……折り込み
Fig.220 御飯ノ山城主郭遺構配置図(1/250) ……256
Fig.221 掘立柱建物SB01実測図(1/100) ……257
Fig.222 掘立柱建物SB02実測図(1/100) ……258
Fig.223 掘立柱建物SB03実測図(1/100) ……258
Fig.224 掘立柱建物SB04実測図(1/100) ……259
Fig.225 掘立柱建物SB05実測図(1/100) ……259
Fig.226 掘立柱建物SB06実測図(1/100) ……260
Fig.227 虎口・通路実測図(1/200) ……261
Fig.228 虎口断面実測図(1/120) ……261
Fig.229 虎口通路断面実測図(1/120) ……262
Fig.230 門SB13・櫓SB14実測図(1/80) ……263
Fig.231 1号竪穴状遺構実測図(1/100) ……265
Fig.232 2号竪穴状遺構実測図(1/100) ……265
Fig.233 掘立柱建物SB03柱穴出土遺物実測図(1/3) ……267
Fig.234 掘立柱建物SB04柱穴出土遺物実測図(1/3) ……267
Fig.235 竪堀12出土遺物実測図(1/3) ……267
Fig.236 山城主郭整地土出土遺物実測図(1/3,1/4) ……267
Fig.237 山城斜面出土遺物実測図(1/3) ……268
Fig.238 山城出土銅銭拓影(1/1) ……268
Fig.239 第5次調査区位置図(1/1,000) ……270
Fig.240 第5次調査区遺構配置図(1/200) ……271
Fig.241 第6次調査区位置図 ……272
Fig.242 黒色土出土遺物実測図(1/3) ……273
Fig.243 灰色粘土・暗灰色粘土出土遺物実測図(1/3) ……274
Fig.244 第6次調査出土木製品実測図1(1/3) ……275
Fig.245 第6次調査出土木製品実測図2(1/3) ……276
Fig.246 香椎宮境内出土遺物実測図(1/3) ……278
Fig.247 香椎宮境内出土軒丸瓦拓影・実測図(1/4) ……280
Fig.248 香椎宮境内出土軒平瓦拓影・実測図(1/4) ……281
Fig.249 香椎B遺跡遺構変遷図 ……305

第Ⅰ章　はじめに

1．発掘調査に至る経緯

昭和54年(1979年)6月14日付で日本電建株式会社から福岡市へ、福岡市東区大字香椎字寺熊1519番地外の227,480㎡における宅地造成の開発計画事前審査願いが提出された。該当地は、香椎宮の東500mに位置する低丘陵と谷部水田であった。

福岡県文化課からの踏査依頼を受けた本市教育委員会文化課(現在の埋蔵文化財課)は数回にわたる現地踏査を行なった。その結果、谷の水田部において顕著な遺物の散布などが認められなかったものの、丘陵部においては尾根を分断した二条の堀切、山頂部において13m×50mを測る平坦地を確認するとともに、九州大学名誉教授の森貞次郎氏から「山頂部は『大宰府管内記』に記されている老ノ山城の推定地にあたる」との教示を受けた。以上の踏査結果もとに、開発に当たっては山頂部の試掘調査ならびに調査が必要であり、他の地区に関しては遺跡の包蔵は認められない旨の結果報告を昭和55年2月29日付で日本電建株式会社へ通知したが、開発計画の具体的進展はみられなかった。

その後、教育委員会では埋蔵文化財保護の周知化を図る基礎資料として昭和53年(1978年)から市内全域を対象とした遺跡の分布調査および分布地図の作成事業を進めていた。当該地域も含む市内北東部も昭和57年(1982年)に実施した結果、昭和55年の踏査で発見された山城関連遺構のほか、谷部においても遺物の散布状況などから遺跡が存在することが明らかとなった。このため、昭和58年3月刊行の遺跡分布地図(東部II)では、谷部を香椎B遺跡、丘陵山頂部および周辺を香椎D遺跡として登録した。

平成2年(1990年)9月12日付で開発計画事前審査の変更に伴う再説明願いが日本電建株式会社の親会社である国際興業株式会社から福岡市へ提出された。これを受けて同年10月4日から国際興業株式会社と埋蔵文化財課との間で協議が再開された。協議では昭和55年の踏査結果を基に、計画地が埋蔵文化財包蔵地域内に位置することから踏査・試掘調査を行う必要性を中心に行われた結果、平成4年(1992年)9月2日から22日に国際興業株式会社の費用負担で谷部の水田・畑の29,000㎡を対象として試掘調査調査を埋蔵文化財課が行なうこととなった。試掘調査はバックフォーを用いて32個所の試掘溝を設定して行なった。その結果、谷部の中央部および西辺部に限って12世紀～13世紀、15世紀～16世紀の二時期の生活面が存在する報告がなされた。しかしながら、調査着手後に改めて実施した試掘調査において、遺跡が存在しないとされた広範囲な地域において遺跡が存在することや生活面（遺構面)が三時期にわたる事が明らかとなり、調査計画の混乱を生じさせる元となった。この原因は、試掘調査担当者の経験不足に基づく粗い試掘溝の設定と学識不足に基づく土層観察や遺構の見落としに他ならない。今後このようなことが二度と起こらないようにしなければならない。

結果的には不十分な試掘調査成果をもとに協議を行い、国際興業株式会社を委託者、福岡市を受託者とする埋蔵文化財包蔵地発掘調査に関する協定書を平成6年8月22日付で締結した。しかし、調査着手時期に変更が生じたために平成7年3月31日付けで協定書を再度締結した。協定書は、発掘調査は平成7年(1995年)4月1日から平成10年(1998年)3月31日まで、資料整理は平成10年(1998年)4月1日から平成12年(2000年)3月31日まで行い、これらの業務に必要な費用は国際興業株式会社が支払うものであった。さらに、各年度ごとに委託契約書を締結し、各年度業務の内容と支払費用を明確にした。

2．発掘調査の組織

(1) 地　権　者（平成７年時）

国際興業株式会社　荒牧テル代　安東桂子　安東勉　石川直亮　井上アヤ子
江頭木材株式会社　株式会社アブニール福岡　久保山隆司　柴田成人　柴田兵馬　柴田征義
竹内彪二　竹澤脩　永田虎幸　永田初太郎　永田優　永田ヨシノ　中村善起　西尾寛治
西尾清　西尾常美　西尾トヨ子　西尾フジエ　西尾雄二　西原口勝麿　本郷イソノ　本郷賢二
本郷公朗　本郷虎子　本郷博昭　本郷義則　簑原トクヨ

(2) 委　託　者

	国際興業株式会社	（現地施工者） 竹中土木株式会社
【平成７年(1995年)】		
代表取締役	小佐野政邦	代表取締役　長沢不二男
事業担当取締役	吉田三郎	九州支店長　筒井徳三
現地事務所代表	茶園親男	事務所所長　境　浩詞
【平成８～11年(1996～99年)】		
代表取締役	小佐野政邦	代表取締役　長沢不二男
事業担当取締役	吉田三郎	九州支店長　筒井徳三
現地事務所代表	茶園親男	事務所所長　安達義則

(3) 調査主体

福岡市教育委員会

【昭和54年度】

	教育長	西津茂美
	文化部長	志鶴幸弘
	文化課長	井上剛紀
	第１係長	三宅安吉
	第２係長	柳田純孝
事前審査		二宮忠司
事務担当		國武勝利

【平成４年度】

	教育長	井口雄哉
	文化財部長	川崎賢治
	埋蔵文化財課長	折尾　学
	第２係長	塩屋勝利
事前審査	主任文化財主事	横山邦継
試掘調査	文化財主事	荒牧宏之
事務担当		吉田麻由美

【平成7年度】

	教育長	尾花　剛
	文化財部長	後藤　直
	埋蔵文化財課長	荒巻輝勝
	第2係長	山口譲治
調査担当	文化財主事	下村　智
	〃	田上勇一郎
事務担当		西田結香

【平成8年度】

	教育長	町田英俊
	文化財部長	後藤　直
	埋蔵文化財課長	荒巻輝勝
	第2係長	山口譲治
調査担当	主任文化財主事	下村　智
	文化財主事	瀧本正志
	〃	本田浩二郎
事務担当		西田結香

【平成9年度】

	教育長	町田英俊
	文化財部長	平塚克則
	埋蔵文化財課長	荒巻輝勝
	第2係長	山口譲治
調査担当	文化財主事	瀧本正志
	〃	田上勇一郎
事務担当		浅原千晶
		河野淳美

【平成10年度】

	教育長	町田英俊
	文化財部長	平塚克則
	埋蔵文化財課長	柳田純孝
	調査第2係長	山口譲治
整理担当	文化財主事	瀧本正志
事務担当		河野淳美

【平成11年度】

	教　育　長	西憲一郎
	文化財部長	柳田純孝
	埋蔵文化財課長	山崎純男
	調査第2係長	力武卓治
整理担当	文化財主事	瀧本正志
事務担当		河野淳美

【調査整理補助】

茨木浩一　犬丸陽子　上野裕子　大庭友子　小野千佳　大神真理子　上方高弘　清永啓子
加賀宏子　葛谷知子　坂本憲昭　佐田裕一　佐藤貴海子　佐藤留美子　末次由紀恵　高木 誠
俵 寛司　長浦芙美子　中間千衣子　中村智子　春田城二　平田利栄　福島紫乃　福田杏子
藤野雅基　本多桂子　三宅八重子　持原良子　山口とし子　山野祥子

【調査協力者】

荒川直子　荒牧幸子　荒牧テル代　安藤峰生　石田豊　池田福美　生田武士　石坂博文　五十川雅也
石塚正芳　石橋忠治　伊藤郁子　伊藤健太　伊藤貴史　井上愛子　井上英子　今別府序子　岩崎良隆
岩隈史郎　上野龍夫　馬崎千登美　梅木繁良　江崎美恵子　江嶋光子　小川秀雄　大賀一　大塚俊司
大平さと子　岡部静江　鬼塚努　甲斐康完　鴨井憲一　川井田明　川井田ムツ子　河野一一
北村幸子　久保敦紀　久保山勝弘　久米憲一　黒木佐千子　黒瀬千鶴　近藤澄江　権藤利雄
河内一泰　古賀義博　酒井次憲　坂口剛毅　坂本真一　桜井慶子　佐々木美帆　佐藤アイ子
真田弘二　志堂寺堂　篠崎伝三郎　柴田栄子　島本初代　菅野シゲ　世利陽子　芹野謙蔵　園田豊
大長正弘　高木美代子　高崎英巳　高野瑛子　武田潤子　武田トミエ　立水清　田崎アヤ子
田中フキ子　田上智雄　谷英二　陳洪　堤正子　手嶋こずえ　徳永栄彦　徳永静雄　富永正美
富永久子　友光正樹　豊丸秀仁　永田律子　永田八重子　長野恵子　中野満代　中野美穂子
中野めぐみ　永松伊都子　永松トミ子　夏秋弘子　西尾聡　西尾哲夫　西川譲　西本スミ　二宮白人
布江孝子　野口未幾　野口ミヨ　野角たえ子　橋本幸樹　長谷川葉子　羽多憲正　花島拓　花田勇
日尾野典子　樋口康子　久野隆志　平田敏彦　平岡俊哉　広田安平　弘中秀平　吹春哲男　福田美星
福本美智子　渕上鶴美　別府俊美　本郷満子　前田純　真子裕吉　松井一美　松尾文江　松永正義
宮崎雅秀　宮地正　村田敬子　村田トモヨ　村山市次　室英二　本村久利　森垣隆視　諸富有
森本勇夫　森山恭助　森山琢也　森山タツエ　安田光代　山口耕平　山下智子　山田史　山本后代
山本斉　柳瀬亜紀　横田有優　吉住クニ子　吉住政光　吉田博昭　吉峰勤　米倉国弘　渡辺淑子

上田 興（香椎宮）　武内公磨（香椎東公民館）　佐伯弘次（九州大学）　坂上康俊（九州大学）
下村 智（別府大学）　千田嘉博（国立歴史民俗博物館）　宮本長二郎（東北芸術工科大学）
村田修三（大阪大学）　二宮忠司（福岡市教育委員会）　吉留秀敏（福岡市教育委員会）
田中克子（福岡市教育委員会）

第II章　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の位置と立地

博多湾にのぞむ広義の福岡平野は、博多湾へ向かって派生した油山、月隈の各低丘陵を境として、3つの小平野に区分され、西から早良平野、福岡平野、粕屋平野と呼称されている。最も東の粕屋平野は北は立花山、西は月隈丘陵に挟まれ、南から東は三郡山系と犬鳴山系に囲まれた地域で、北西部の博多湾に向かって開けている。犬鳴山系に源を発する猪野川と犬鳴山系と三郡山系の接点に源を発する篠栗川の合流である多々良川と、三郡山系に源を発する宇美川と須恵川の沖積作用により形成された平野である。

香椎B遺跡群は粕屋平野の北縁の丘陵地に位置する。この丘陵は香椎丘陵と呼ばれ、第三紀の堆積岩によって構成されている。

遺跡は標高180mの城ノ越山から西に伸びる丘陵部と、丘陵に挟まれた谷部に立地する。遺跡北部は丘陵部であるが、城ノ越山との間に谷が入り、明治33年の地図に「老ノ山」と記されている標高90mの独立した山としてとらえられる。「老ノ山」は貝原益軒が著した「筑前國続風土記」に「御飯（おい）の山古城」と記され、立花城の端城であるとも伝える。遺跡南部は西側に開口した幅70m、奥行き800mの谷であり、標高は14m前後である。北側は「老ノ山」、南側は標高約36mの住宅地に挟まれる。南側の住宅地は以前丘陵地であり、宅地造成の際、谷部の南側を埋めており、谷の幅はかつて102mであった。

2．遺跡の歴史的環境

粕屋平野内では旧石器時代の遺物が断片的ではあるが、発見されており、古くから生活の場であったことが証明されている。縄文時代晩期末（弥生時代早期）には江辻遺跡で農耕集落が営まれている。

弥生時代では蒲田部木原遺跡、蒲田水ヶ元遺跡で中期～終末期・古墳時代の集落や中期の甕棺墓が検出されている。香椎B遺跡の南方1kmの青葉台遺跡（椛の谷遺跡）でも中期の甕棺が出土している。また、青銅器鋳型の発見も多く、多々良大牟田遺跡では有鉤銅釧と広形銅戈の鋳型、土井遺跡で中細銅戈と中広銅剣の鋳型が発見されている。そのほか八田出土と伝えられる中細銅戈鋳型がある。

弥生時代終末から古墳時代初頭には多々良川左岸の多々良込田遺跡で外来系土器を多数持つ集落が検出されている。博多湾東岸の砂丘上に位置する唐の原遺跡では漁撈関連遺物を出土する集落と性格不明の多数の炉跡が発見された。

古墳は多々良川河口近くの右岸、丘陵上に名島古墳がある。全長約30mの前方後円墳で、三角縁吾作銘九神三獣鏡が出土している。猪野川左岸の舌状丘陵上にある天神森古墳からは三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡と小型の盤龍鏡が出土している。香住ヶ丘古墳からは三角縁天王日月獣文帯二神二獣鏡が発見されている。これらの古墳より、この地域がはやくから畿内勢力と結びつきがあったことをうかがわせている。香椎B遺跡の南1kmに所在する舞松原古墳は4世紀後半の造出付きの円墳で、主体部は木棺直葬であることが近年の調査で明らかになった。南東1kmには三留古墳群や湯ヶ浦古墳群がある。唐の原遺跡では6世紀代の円墳が調査されている。

古代においては多々良込田遺跡で、多量の越州窯系青磁や緑釉陶器、灰釉陶器、石帯、硯、墨書土器など、官衙を想定させる遺物が出土しており、注目される。

古代末から中世にかけては、多々良遺跡で、輸入陶磁器や在地の土師器などが多数出土し、方形区

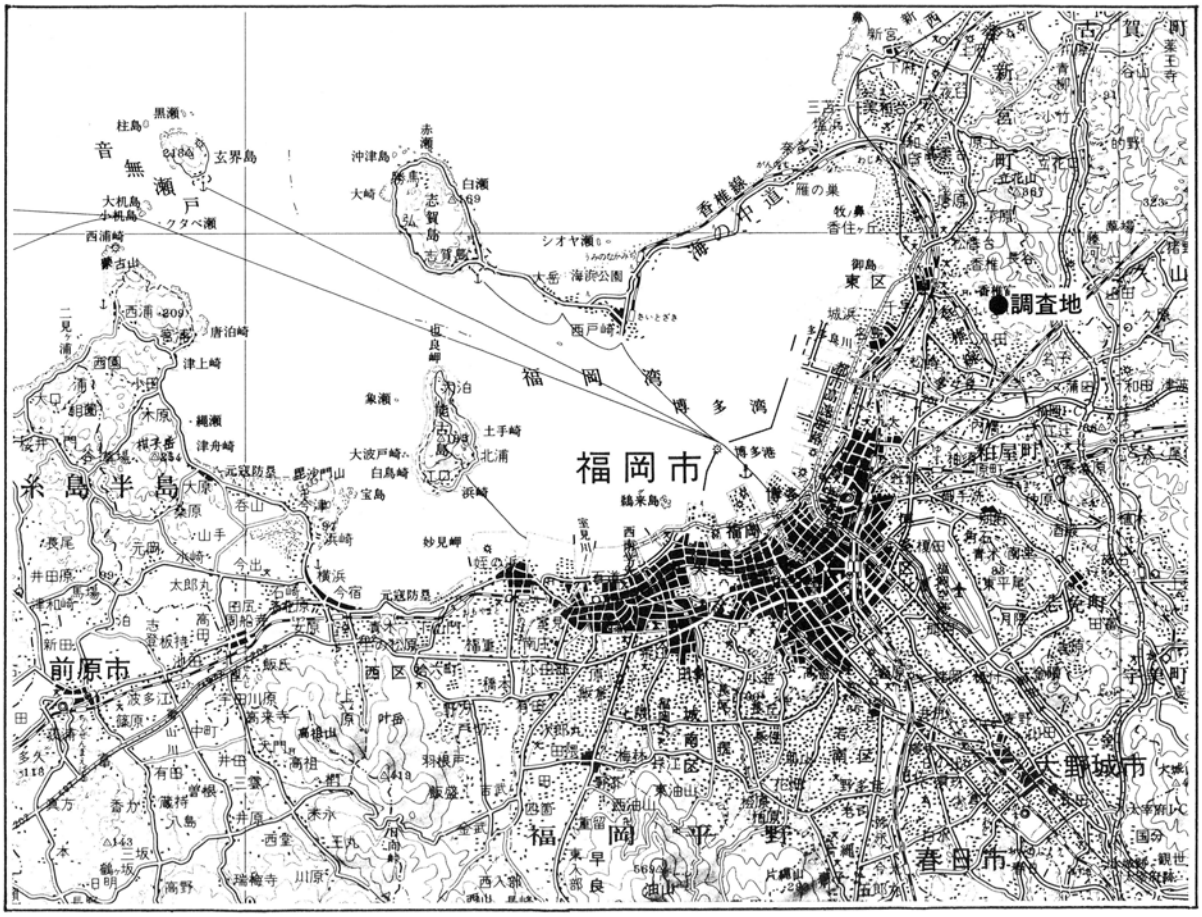


Fig. 1　調査地位置図（1/300,000）

Fig. 2　調査区周辺航空写真

画溝をもつ集落が検出されている。戸原麦尾遺跡でも12世紀から14世紀にかけての方形区画溝をもつ屋敷地や集落、水田址が調査された。香椎Ｂ遺跡の谷を隔てた西側には香椎Ａ遺跡がある。２次調査では12世紀後半から15世紀の建物や井戸が検出されている。

多々良込田遺跡の対岸には顕孝寺址がある。14世紀前半に大友貞宗により建立されたもので、大友氏の対外的な通商拠点となっていたと考えられる。

次に香椎Ｂ遺跡をとりまく歴史的環境をみていくことにする。

神亀元年(724)に創建と伝えられる香椎宮は香椎Ｂ遺跡が所在する谷の開口部にある。古くは香椎廟といい、奈良時代以来勅使がつかわされた勅祭社である。儺県橿日宮で崩御した仲哀天皇を、神功皇后が祀ったのが起源とされる。その後香椎宮は大宰府領や蓮華王院領、石清水八幡宮領に編入されている。

建久２年(1191)、２度目の入宋から帰国した栄西は臨済宗を広めるが、翌年、香椎の地に建久報恩寺をたてている。日本最古の禅宗寺院である。

文永11年(1274)の元軍襲来の後、博多湾岸には元寇防塁が築かれる。香椎地区を担当したのは豊後国の大友氏である。これ以降、香椎宮周辺の大友領化が進んでいく。

元徳２年(1330)、大友貞載が立花城を築いたとされている。立花城は香椎Ｂ遺跡の北方約３km、標高367ｍの立花山に築かれた山城である。戦国時代を通して筑前の軍事拠点として重要な城であった。

元弘３年(1333)、鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武の新政が行われた。建武政権と対立した足利尊氏は京都で敗れ、九州に逃れるが、再起をかけて菊池武敏と戦ったのが建武３年(1336)の多々良浜の戦いである。足利尊氏は合戦場の多々良川河口に向かう途中に香椎宮へ戦勝祈願をしている。また、近世初頭に成立した「九州軍記」には足利尊氏・直義兄弟が「笈の山」に登ると記されている。「笈の山」とは「老ノ山」を指している。

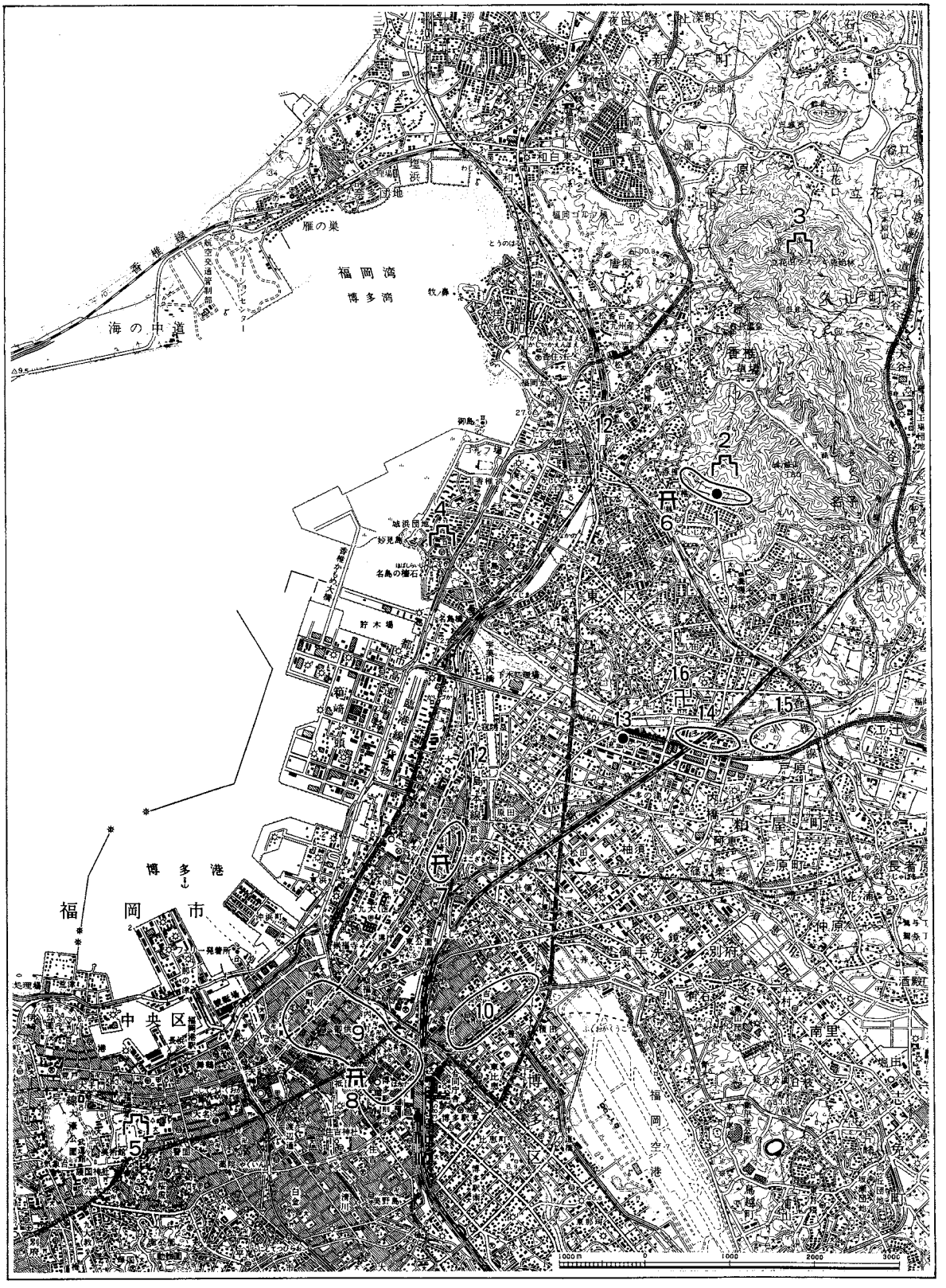
大友貞宗は建武政権から博多息浜を恩賞として与えられていたが、室町幕府よりいったんこの地を取り上げられる。しかし永享元年(1429)には支配が復活している。その後、貿易の利権が得られる息浜支配をめぐって、周防の大内氏と大友氏の争いが激しくなり、立花城は幾度となく争奪戦が繰り広げられた。永享３年(1431)大内氏が立花城を攻略するも文明元年(1469)ごろには大友氏が奪回している。天文元年(1532)には大内義隆が立花城を攻略したが、大内氏滅亡により、天文23年(1554)、大友氏へ復帰し、立花鑑載が城主となった。大内氏滅亡の後には、陶晴賢を討った毛利氏と大友氏による立花城争奪戦が続けられ、永禄11年(1568)には立花鑑載が毛利元就と通じて大友宗麟に反旗を翻した。毛利・大友間で激しい攻防が繰り広げられ、立花城支配は二転三転したが、元亀元年(1570)大友方の戸次鑑連(立花道雪)が立花城を奪回し、同２年(1571)、立花城城督となった。

天正14年(1586)、薩摩の島津軍が北部九州に攻め上り、立花城を攻め、博多や香椎を焼き払い、香椎宮も焼亡した。「筑前國続風土記拾遺」によると、香椎宮前大宮司家の息子が「老ノ山」に篭もったと記されている。

豊臣秀吉の九州平定後、筑前国守となった小早川隆景はいったん立花城に入ったが、多々良川河口に名島城を築いた。しかし関ヶ原の戦いの後、新たに筑前に入った黒田長政は福岡城を築き、名島城は廃城となった。

近世の香椎周辺は、黒田氏により香椎宮神殿の再建や補修が行われたものの、かつての繁栄はなくなり、一農村となった。

以上のように香椎Ｂ遺跡は古代からは香椎宮、中世からは大友氏、戦国時代には立花城と深い関係にあり、これらの動向が遺跡の変遷に大きく関わっているのである。



1.香椎B遺跡　2.御飯ノ山城　3.立花城　4.名島城　5.福岡城　6.香椎宮
7.筥崎宮　8.櫛田神社　9.博多遺跡　10.吉塚遺跡　11.箱崎遺跡　12.元寇防塁推定線
13.多々良遺跡　14.多々良込田遺跡　15.戸原麦尾遺跡　16.顕孝寺

Fig.3　調査地周辺遺跡分布図(1/70,000)

第Ⅲ章　調査の記録

1.調査の概要

発掘調査は、工事計画との調整で平成7年(1995年)4月6日から谷部の水田・畑地に着手、その後に山城を含む丘陵部の調査を行い、平成10年(1998年)3月25日に終了した。出土遺物の整理、報告書の刊行は平成10年(1998年)4月～平成12年(2000年)3月に行った。

第1次調査は下村智が担当したが、調査途中の平成9年(1997年)4月に別府大学文化財学科の助教授へ転出した。このために第1次調査を含む全整理作業は第2次調査以降を担当した瀧本があたった。

調査地区名は調査地の小字名をそのまま使用したが、調査では寺熊地区で最も東に位置する調査区を小字名とは異なる「稲戸前」を使用した。混乱を避けるため、整理・報告書でもそのまま踏襲した。

調査次数別の調査概要は以下のとおりである。

(1)第1次調査（生水・寺熊・稲戸前・小作調査区)

谷部水田の調査で、奈良時代～戦国時代の堀などで区画された屋敷地を検出した。遺構はその性格から二分され、前者の奈良時代～平安時代は香椎宮に関連し、後者の鎌倉時代～戦国時代は武家の屋敷地に関連する。総計で200棟近い掘立柱建物、区画溝、井戸などのほかに多量の輸入陶磁器が出土している。遺物では旧石器時代の石器、縄文時代の土器も出土している。

(2)第2次調査（大日・里城・御倉谷・生水・寺熊調査区，寺熊窯跡)

御倉谷地区では中世の火葬墓群、他の地区では第1次調査と同様な遺構・遺物を検出した。寺熊窯跡は須恵器窖窯で、遺構の大半は残存していない。生産時期は大日古墳群と同時期である。

(3)第3次調査（御飯ノ山城)

寺熊・生水調査区の背後に位置する御飯ノ山に築かれた山城の調査である。山頂に築かれた単郭の主郭には掘立柱建物・柵を設け、周りを堀切・竪堀・切岸・小郭などで防御している。城への出入り口は地山の岩盤を箱堀状に掘り下げた階段部と平坦部とを組み合わせ、二箇所で直角に折れ曲がる。主郭の近くには櫓門を設けている。山城の南裾部に位置する館推定地も囲むように堀を廻らしている。また、南斜面には館へつながる通路を設けている。

(4)第4次調査（大日古墳群・大日西調査区)

谷部奥に位置する丘陵の緩斜面の一部と裾部に位置する古墳群の調査である。古墳群は4基の横穴式石室古墳からなるが、4基の古墳とも後世の開削により石室の前半部が壊されていたり、天井石などを失っていた。出土遺物から7世紀中葉に比定される。

(5)第5次調査（生水調査区)

宅地造成地の西側隣接地を嵩上げするための擁壁建設に伴うもので、3箇所で実施した。生水調査区で検出した東西溝・掘立柱建物などの遺構がさらに西に広がることを確認した。

(6)第6次調査（武内屋敷)

香椎宮大宮司家のひとつである武内家の屋敷地内の共同住宅建設に伴うものである。試掘調査でも12～15世紀の遺物が地表下1.2ｍの黒色粘土層から出土したものの、工事計画では影響が無いことから慎重工事とした。しかし、地元から工事地で遺物が出土している旨の通報があり、現地に赴いたが掘削工事は既に終了しており、出土遺物の採取、土層を記録するにとどまる。

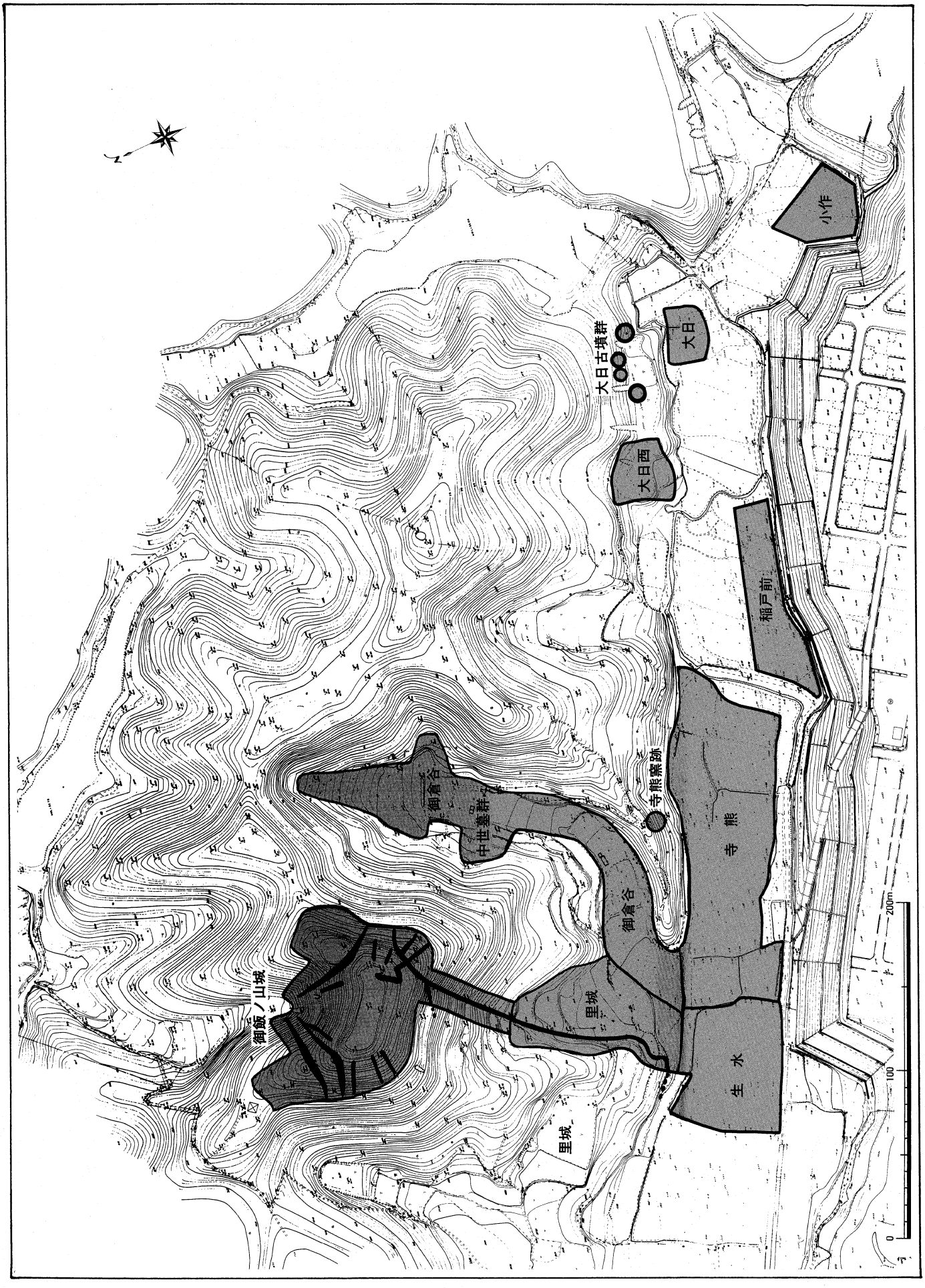


Fig. 4　調査区位置図(1/3,000)

２．調査の経過

調査日誌

1995年

４月　６日から生水地区の表土除去を開始。試掘調査では小規模な建物がまばらに分布していると考えられていたが、実際は遺構群が全面にわたって検出された。

５月　寺熊地区の表土除去を開始。新たに試掘溝を入れたところ、上層から15～16世紀、12～13世紀、10世紀前後の三層の生活面が展開していることが判明。地元で寺跡と言い伝えられている地点では、瓦の詰まった溝、礎石に使用したと思われる大石、五輪塔、宝篋印塔の一部が出土した。

６月　寺熊地区の東側部分の調査に着手。

７月　生水・寺熊の両地区を並行して調査。前回(1992年)の試掘調査地点も含めた谷部東半部全面において26本の試掘溝を入れて試掘調査を実施。新たに三地点(稲戸前・小作・大日)で3,177㎡の遺構の存在を確認。

８月　寺熊地区の東を区画する南北大溝が15世紀代、方形に廻る溝が出土した白磁碗・皿、土師器坏・皿、瓦器碗などから12世紀代であることが判明。全景を気球で写真撮影。

９月　木簡出土。生水地区の大半は遺構面が２面あることが判明。

10月　小作地区の表土除去を開始。２面の中世水田面を検出。

11月　18日から稲戸前地区の表土除去を開始。縄文時代の土壙、古代の掘立柱建物柱・井戸を検出。

12月　小作地区・寺熊東部地区の全景を航空撮影。寺熊地区から應永28年(1421年)の板碑が出土。同地区の木棺土壙墓から磁窯産の緑釉水注が完形で他の副葬品とともに出土。８日に現地遺跡説明会を開催。約80名の見学者。25日に地権者から発掘調査期間短縮の要望書が出される。

1996年

１月　寺熊地区中央部の表土除去を完了し、遺構検出を行う。予想どうり濃密な遺構分布状況を確認。稲戸前地区では掘立柱建物、井戸、道路状遺構などのほかに縄文土器が出土。

２月　寺熊地区で敷地を区画する溝を検出。大溝から鬼瓦が出土。寺熊東部地区で検出した遺構につながる庭園遺構を検出。

３月　寺熊地区の中心に東西南北を方50mで囲むＶ字形の大溝を検出。多量の瓦や多種類の鬼瓦が出土し、大型の建物を想定させる。小作地区の調査終了。

４月　稲戸前地区の調査終了。寺熊地区では第２面の遺構検出をおこない、鎌倉時代を中心とした掘立柱建物、井戸、溝などが多数検出した。また、青磁類をはじめとする陶磁器・土師器のほかに仏教関係の遺物が出土した。

５月　寺熊地区の第２面の遺構検出作業を継続。

６月　連日の大雨で寺熊地区の調査が遅延し、埋蔵文化財課職員３名を増員して記録作成を行なう。字律院の水田部分の試掘調査を行い11世紀代の土師器坏・皿、白磁などが出土したが明確な遺構は無く、発掘調査は必要なしとする。

７月　寺熊地区の下層から11世紀の大型建物や、「□岐嶋雑掌直成安」と記された木簡が出土。13日に寺熊地区の調査を終了。22日から大日地区の表土除去を開始。10～11世紀代の軒瓦、白磁、瓦器、土師器が出土。

８月　30日までに大日地区の調査終了。

９月　12日から山の伐開が開始される。これに伴う工事用路の開削のために立会調査を行う。

11月　山城跡の地表に残る雑木・腐葉土の除去作業を開始。

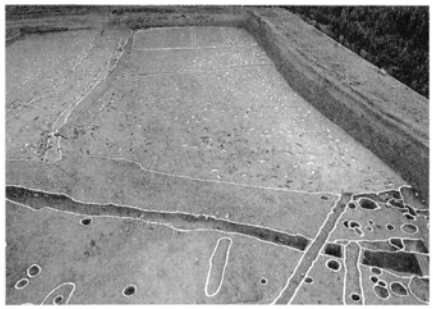
12月　山城跡の現況地形図を作成するとともに、写真撮影。里城・御倉谷地区で人力による試掘調査を行う。里城地区では土師器皿、瓦器椀、白磁、染付が出土するとともに、調査地の縁には五輪塔の火・空・風輪にあたる石が散在している。

1997年

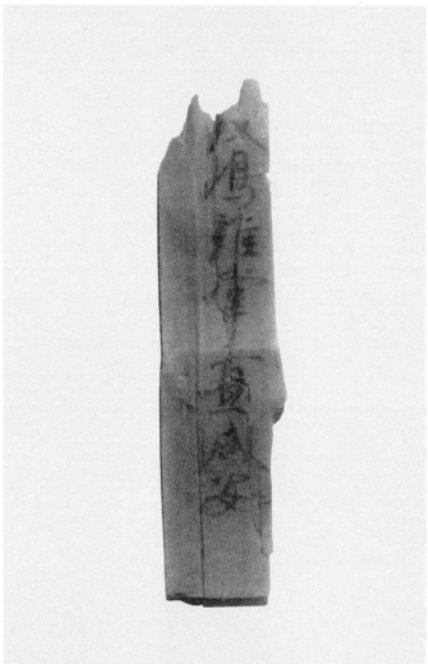
１月　山頂部の表土を除去し、櫓列を確認。委託者側の希望で、生水地区と里城地区の境を中心とする範囲の調査を開始。御倉谷地区の谷部手前を重機で掘り下げを始め、大規模な堀の存在を確認するとともに奈良時代の須恵器が堀底から出土。生水地区では昨年の調査で検出した堀が北辺で折れ曲がり、敷地が堀で区画されていることが判明。

２月　里城地区で山裾を廻るように掘られた大規模な堀を検出。御倉谷地区では谷部の堀を掘り下げるとともに、樹木移植予定地の試掘調査を行い５基の中世墓を検出する。このため全面調査に変更し、中世墓が30基前後の自然石の墓標を有する火葬墓からなることを確認。用水路の関係で未調査であった寺熊地区の北辺部を調査。井戸・掘立柱建物・自然流路を検出するとともに、丘陵裾と敷地との境に沿って区画溝・堀が存在することを確認。

瓦塚検出状況



小作調査区



木簡「壱岐嶋雑掌直成安」

堀SD258

3月　山城南斜面の竪堀を掘り下げ始める。御倉谷地区の火葬墓群が13～14世紀にかけて築かれたことが判明する。御倉谷地区の堀を掘り下げ、12～14世紀の遺物が出土。

4月　山城の表土除去作業を継続。寺熊・御倉谷地区堀の調査を終了。山城の北側裾部で、防災施設建設に伴う試掘調査を実施し、柱穴を確認。山城山頂の南東部で出入口の通路を検出。

5月　山城の出入口通路の掘り下げ作業を継続した結果、通路は岩盤を箱堀状に削り出した階段と平坦部とを組み合わせ２ヶ所で直角に折れ曲がることが判明。里城地区の表土を除去し、遺構検出を開始。奈良時代の遺物や柱穴を検出。大日地区丘陵部の試掘調査を行った結果、丘陵斜面で４基の古墳と緩斜面で柱穴を検出。

6月　山城の北と西の斜面の表土を除去。堀切１・２の全容が明らかとなる。斜面には切岸などの存在を確認する。城の出入り口の階段部で柱穴を検出し、門と櫓が設置されていることが判明。御倉谷地区の表土をバックフォーで除去し、柱穴を確認。

7月　山城の北と西の斜面の表土除去作業を継続。斜面の途中に狭い平坦部を削り出している部分を発見。表土からすり鉢、甕、中国製陶磁器などが出土。里城から應永６年(1399)の自然石による板碑が出土。

8月　長雨により調査が遅れる。山城の全面的な検出作業を行う。南側斜面の竪堀が山裾の堀と一体化していることが判明。竪堀からは人の頭ほどの大きさの石が出土。里城地区では、山裾部で中世火葬墓と窯跡を発見。

9月　寺熊地区の窯跡の調査に着手。焼成室の前半部が残存していない。御倉谷地区中世墓の記録作成終了。中世墓は確認を最小範囲とし、立ち割りなどは行わずに現状保存に決定。山城・里城地区の写真測量を実施。

10月　寺熊窯跡は実測を行い作業を終了。窯は須恵器窯１基からなり、煙道部と一部の焼成室が残存していた。御倉谷地区で井戸・柱穴を検出するとともに、13世紀を中心とした遺物が出土。

11月　６日に御飯ノ山城について記者発表。９日に山城現地説明会開催。1,800余人の見学者。山頂部の調査を継続し、建物群の規模を確認。さらに、南斜面において里城へつながる通路を発見。

12月　山城の建物群が３回以上の建替えが行われていたことが判明。御倉谷・里城地区では、掘立柱建物や焼土壙や木炭が集中する箇所を検出。

1998年

1月　大日古墳群、大日西地区で調査を開始。４基の古墳を東から１号墳と命名。山城頂部の西北部を立ち割り、整地状況を確認。整地土から16世紀後半の備前焼のすり鉢が出土。擁壁工事に伴う第５次調査を生水地区で実施。

2月　５日に山城の調査を終了。主郭の建物について記者発表。大日西地区では柱穴が確認されたが建物としてまとまらなかった。古墳群は大半が壊されており、石室奥部のみ残存。

3月　25日までに大日古墳群の調査を終了し、全調査を終了する。

中世墓Ｂ群

山城調査状況

山城出入口調査状況

現地説明会風景

大日古墳群４号墳調査状況

第Ⅳ章　遺構と遺物

1．香椎Ｂ遺跡第１～４次調査

（１）生水・寺熊調査区

１）　位置と概要

生水・寺熊調査区は、香椎宮の位置する場所を開口部とする東西方向にのびる谷の中央部に位置する。この谷は、北側を御飯山（老ノ山）、南側を今は消滅した丸山とに挟まれ、幅102ｍを測る。調査地の現況は水田と一部が畑で、標高は15～18ｍを測る。谷の北辺地は低丘陵の裾部であるが、いずれも裾部は急激な斜面を呈し立ち上がる。これは、中世を中心とした谷部の造成地業において、山裾を掘削した土砂を用いたためである。このような整地作業は幾度となく実施されている。

調査地の基本的層序は、上層から耕作土、暗灰茶褐色粘質土（整地層）、黒色土（遺物包含層）、褐色土（整地層）、灰褐色土（遺物包含層）、黒色土（遺物包含層）となっている。遺構は暗灰茶褐色粘質土層面、褐色土層・灰褐色土層面、地山の各上面で検出した。時期的には、15～16世紀、12～13世紀、10世紀末～12世紀と捉えることができよう。ただし、各層間にもこれ以外の遺構面が複数存在しており、簡単に三面の文化面だけで捉えることはできない。

検出した遺構は、平安時代から戦国時代に造営された掘立柱建物、門、井戸、溝、塀、土壙墓、苑池などである。これらの遺構は大きく時期的、性格的に二分される。前者は11～13世紀を中心とし、後者は14～16世紀を中心とするものである。

出土した遺物は、縄文時代から江戸時代までの多種多様なものである。国内産の土師器、陶器、瓦類、中国産陶磁器の他に、織物関係の木製品、箸や碗などの日用木製品、祭祀用木製品、鍋や茶臼などの石製品、板碑などの石塔品などである。これらの遺物などから、中世における大規模な寺院の建立、貿易に関係する屋敷などの存在が明らかになった。

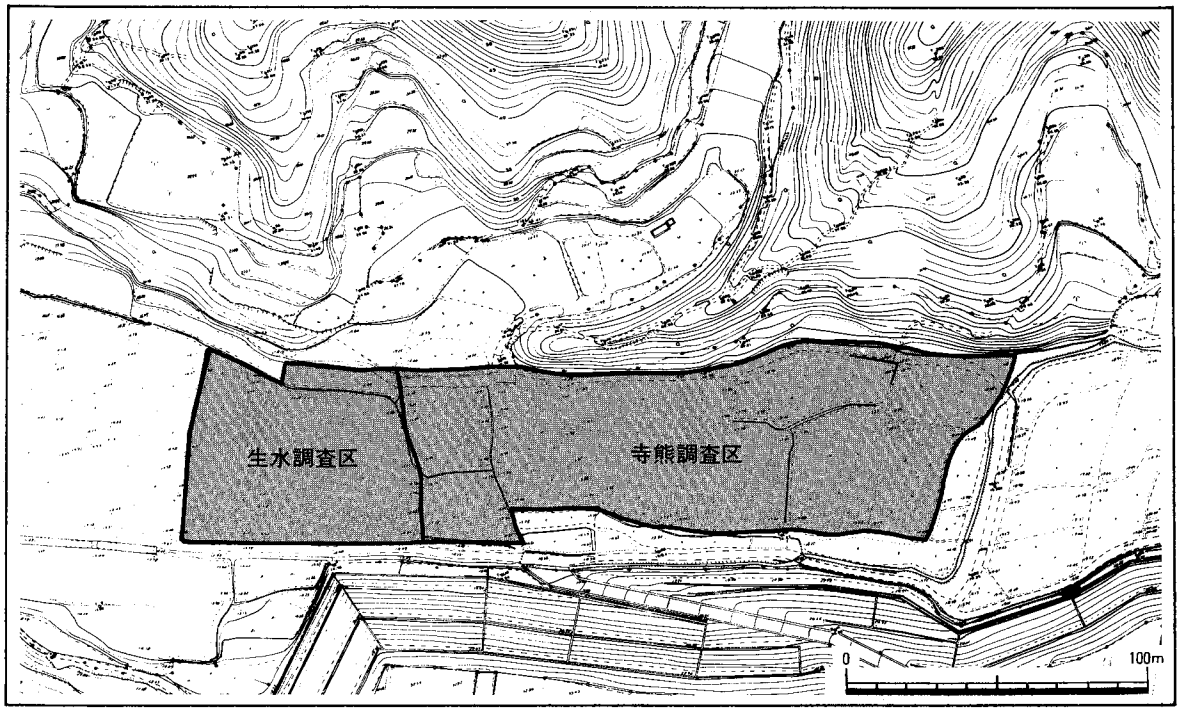


Fig.5　生水・寺熊調査区位置図（1/2,500）

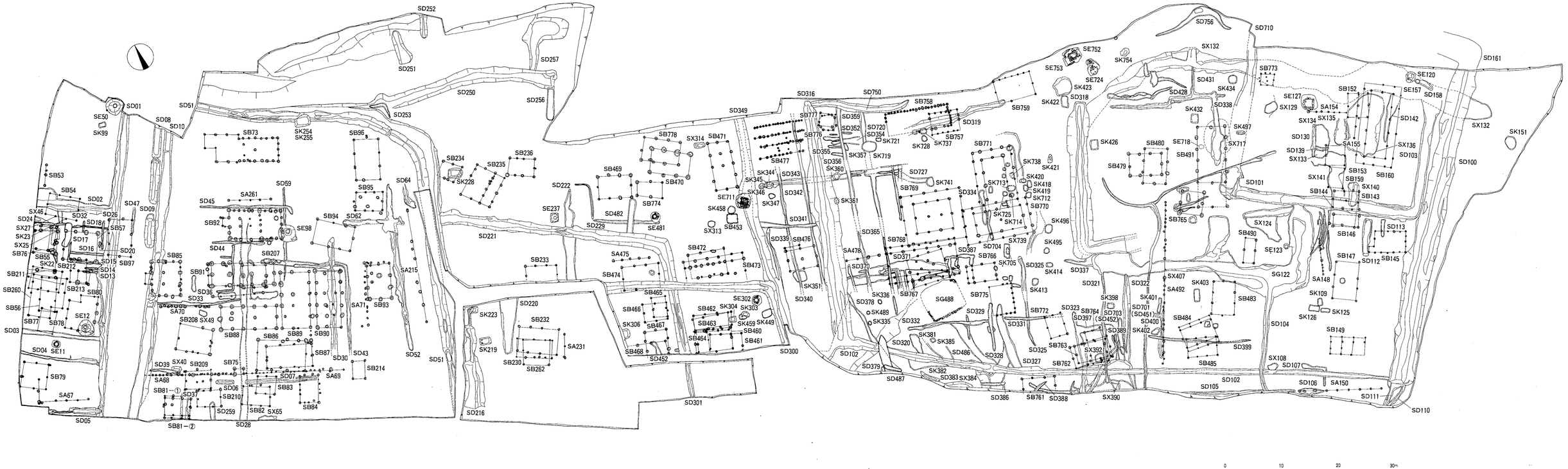


Fig. 6　生水・寺熊調査区遺構配置図(1/400)

2） 遺　構

検出した遺構は、平安時代末から戦国時代にかけての屋敷地を区画する塀・柵・堀・溝などの施設と屋敷地内を構成する掘立柱建物・井戸・苑池・土壙墓・土壙などに大別される。

塀・柵列（ＳＡ）

SA67（PL.15-2）　生水調査区

南西部隅、SB79の南にある掘立柱の東西塀である。塀の南に位置する溝SD05により柱穴を壊された可能性があり、東西棟の掘立柱建物の可能性が残る。

SA68（PL.15-2,19-1･2）　生水調査区

南辺部にある掘立柱の東西塀で、門SB75に取り付く。SA69とで南辺を画す一連の塀となる。SB209と重複する。

SA69（PL.15-2,19-1･2）　生水調査区

南辺部にある掘立柱の東西塀で、門SB75に取り付く。SA68とで南辺を画す一連の塀となる。SB86と重複する。

SA70（PL.15-2,19-5）　生水調査区

中央部、SB85の南にある掘立柱の東西塀である。掘立柱建物SB88北側の桁柱筋と同じくする。

SA71（PL.15-2）　生水調査区

中央部、SB90の南東隅柱から東へ３間の後に北へ折れ曲がる。

SA215（PL.15-2）　生水調査区

東辺部、溝SD51と52の中央にある掘立柱の南北塀である。方向を溝SD51・52と同じくする。

SA261（PL.15-2）　生水調査区

東辺部、SB92の北にある掘立柱の東西塀である。

SA148（PL.18-2,20-1）　寺熊調査区

東部中央、SB147の西にある掘立柱の南北塀であるが、柱筋の方向が他の施設と異なり北で大きく西に偏する。

SA150（PL.18-2）　寺熊調査区

南辺部にある掘立柱の東西塀である。調査区内で65ｍを測り、さらに西の調査区外へ続く。溝SD105と重複する。

SA154（PL.18-2,20-2）　寺熊調査区

東北部、SE127の南から東へ続く掘立柱の東西塀である。

SA155（PL.18-2）　寺熊調査区

東北部、SB160の西にある掘立柱の南北塀である。

SA478（PL.18-1,17-2）　寺熊調査区

中央部、SB476とSB770とを結ぶ掘立柱の東西塀である。SB476・SB770と柱筋を同じくする。

SA492（PL.18-1,20-4）　寺熊調査区

中央部、SB480の南から南へ一直線にSD102まで続く掘立柱の南北塀である。SD102とは直角に交わることから同時性が高い。

建　物　(SB)

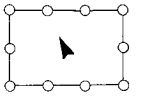
建物は96棟を確認し、すべてが掘立柱建物であった。多量の軒瓦の出土は礎石建物の存在を示唆するが、明確な遺構は存在しなかった。建物の立地条件から、柱穴に礎板や根固石があるものが多い。

SB53 (PL.15-2,21-1)　　生水調査区

西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。建物東側部分は調査区外に位置する。桁行2間以上、梁行2間(3.66m)で、柱間寸法は梁行1.83mである。柱掘形は径35cm・深さ30cmを測る円形である。

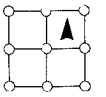
SB54 (PL.15-2,21-2)　　生水調査区

西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.5～5.64m)、梁行2間(3.81～3.95m)で、柱間寸法は桁行1.75～1.97m、梁行1.81～2.01mで、不揃いである。柱の掘形は径25cm・深さ33～53cmを測る円形である。重複する溝SD02より古い。



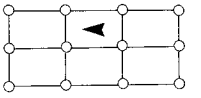
SB55 (PL.15-2,21-3･4)　　生水調査区

西辺部中央にある総柱の掘立柱建物である。桁行2間(4.1m)、梁行2間(4.03m)で、柱間寸法は桁行1.95～2.15m、梁行2.00～2.03mである。柱の掘形は径45cm・深さ40cmを測る円形で、大半の底に板石の礎板がある。SB56･57の建物と棟通りの向きが同じか直角関係にある。



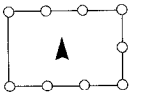
SB56 (PL.15-2,21-5)　　生水調査区

西辺部中央にある南北棟の掘立柱建物で、棟通りにも柱を建てた、いわゆる総柱建物である。桁行3間(6.06m)、梁行2間(2.75～2.90m)で、柱間寸法は桁行2.02m、梁行1.37～1.53mである。柱の掘形は径25～30cm・深さ30cmを測る円形である。SB55・57の建物と棟通りの向きが同じか直角関係にある。



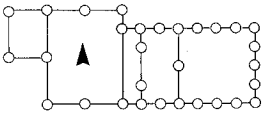
SB57 (PL.15-2,21-6)　　生水調査区

西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.06m)、梁行2間(5.13m)で、柱間寸法は桁行1.93～2.10m、梁行2.55～2.58mである。柱の掘形は径40～50cm・深さ60cmを測る円形である。SB55・57の建物と棟通りの向きが同じか直角関係にある。SB212と重複する。



SB73 (PL.15-2,21-7)　　生水調査区

北辺部中央にある東西棟の掘立柱建物で、二棟の建物からなる。東半部をなすA棟は桁行3間(6.26m)、梁行2間(4.04m)で、柱間寸法は桁行0.88～1.10m、梁行0.94～1.10mと不揃いである。西半部をなすB棟は桁行2間(4.85m)、梁行2間(4.19m)の母屋の西面北間一間にのみ廂がつく。柱間寸法は桁行2.32～2.53m、梁行2.01～2.04m、廂の出は1.91mである。A棟とB棟の南側柱通りは同じくする。柱の掘形は径30～40cm・深さ25cmを測る円形である。

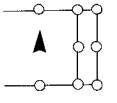


SB75 (PL.15-2,19-1～4)　　生水調査区

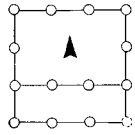
南辺部中央にある4本柱の門で、門の東と西に取り付く柵列SA68・69とで屋敷の南辺を画す。柱の掘形は径50～60cm・深さ48cmを測る円形である。間口は1.6m、奥行1mを測る。

SB76 (PL.15-2,21-8)　　生水調査区

西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物で、建物の西端は調査区の外に位置する。桁行2間以上、梁行2間(4.22m)の母屋の東面に廂がつく。柱間寸法は不揃いで、桁行1.90～2.13m、梁行2.05～2.17m、廂の出は0.95mである。柱の掘形は径40cm・深さ50～60cmを測る円形である。

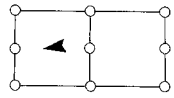


SB77（PL.15-2,22-1）　生水調査区



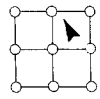
西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(5.96ｍ)、梁行２間(5.31ｍ)の母屋の南面に廂がつく。柱間寸法は不揃いで、桁行1.93～2.06ｍ、梁行2.08～3.23ｍ、廂の出は2.04ｍ。西妻柱間の柱間が極端に異なる。SB56･78･260の建物と重複する。柱の掘形は径30～45cm・深さ25cmを測る円形である。

SB78（PL.15-2,22-2）　生水調査区



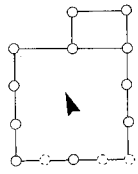
西辺部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.08ｍ)、梁行２間(2.72ｍ)で、桁行き中央の棟通りに柱が建ち、間仕切りを持つ。柱間寸法は、桁行2.01～2.07ｍ、梁行1.34～1.42ｍである。SB56･77の建物と重複する。柱の掘形は径20～25cm・深さ10～20cmを測る円形である。

SB79（PL.15-2,22-3）　生水調査区



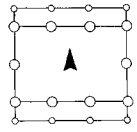
南西部隅にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.68ｍ)、梁行２間(4.45ｍ)で、桁行き中央の柱筋の棟通りに柱が建ち、いわゆる総柱建物である。柱間寸法は不揃いで、桁行2.24～2.44ｍ、梁行1.87～2.58ｍである。柵列SA67と重複する。柱の掘形は径25～35cm･深さ25～47cmを測る円形である。

SB80（PL.15-2,22-4）　生水調査区



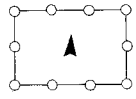
西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行４間(5.08ｍ)、梁行３間(5.05ｍ)で、柱間寸法は不揃いで、桁行1.20～2.05ｍ、梁行1.49～1.72ｍである。井戸ＳＥ12より古い。柱の掘形は径30～40cm・深さ30～47cmを測る円形である。柱穴の大半には礎板もしくは根固石がある。

SB81（PL.15-2,22-5）　生水調査区



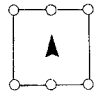
南辺中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.58ｍ)、梁行２間(3.05ｍ)の母屋の南北両面には廂がつく。ただし、柱穴の規模や廂の出などから縁の可能性も高い。柱間寸法は桁行1.36～1.73ｍ、梁行1.43～1.62ｍ、廂の出は北面が0.38ｍ、南面が0.62ｍである。柱の掘形は径25～40cm・深さ30～40cmを測る円形である。

SB82（PL.15-2,22-6）　生水調査区



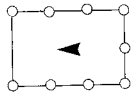
南辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.87ｍ)、梁行２間(3.29ｍ)で、柱間寸法は桁行1.54～1.75ｍ、梁行1.50～1.79ｍと不揃いである。SB83の建物と重複する。柱の掘形は径25～35cm・深さ40～50cmを測る円形である。一部の柱穴に礎板と根固石がある。

SB83（PL.15-2,22-7）　生水調査区



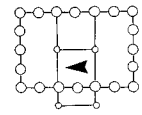
南辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(3.35ｍ)、梁行１間(3.10ｍ)で、柱間寸法は桁行1.60～1.75ｍ、梁行3.10ｍと不揃いである。SB82の建物と重複する。柱の掘形は径30～35cm・深さ40cmを測る円形である。

SB84（PL.15-2,22-8）　生水調査区



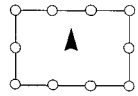
南辺部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.84ｍ)、梁行２間(3.29ｍ)で、柱間寸法は桁行1.50～1.73ｍ、梁行1.54～1.75ｍ不揃いである。北妻柱は未検出。柱掘形は径30～35cm・深さ23～33cmを測る円形である。

SB85 (PL.15-2,23-1～5)　　生水調査区



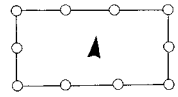
中央部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行6間(5.94m：18尺)、梁行5間(4.95m：15尺)の西側柱の中央2間にのみ廂がつく。柱間寸法は不揃いで、桁行0.90～1.24m、梁行1.09～1.51mである。廂の出は1.14m。1尺は33cm。廂の通り筋にあたる建物内に2本の柱が立つ。桁行の柱穴では奇数目の柱穴が著しく小規模であることから、小柱穴を床束と考えると建物は桁行3間、梁行2間となる。掘形は径45～55cm・深さ35～55cmを測る円形である。巻絵などから持仏堂が想定される。溝のSD10より新しい。

SB86 (PL.15-2)　　生水調査区



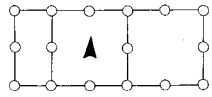
南辺部中央にある東西棟の掘立柱建物で、桁行3間(8.58m：26尺)、梁行2間(5.44m)である。柱間寸法は桁行の西側2間が2.64m(8尺)、東間が3.30m(11尺)、梁行2.27～3.17mである。1尺は33cm。他の建物と異なり西で北に偏している。柱の掘形は径35～50cm・深さ60cmを測る円形である。塀SA69・掘立柱建物SB87と重複する。

SB87 (PL.15-2)　　生水調査区



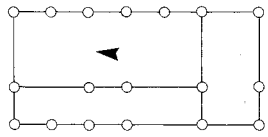
南辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(8.20m)、梁行2間(3.96m：12尺)で、柱間寸法は桁行2.47～3.25m、梁行1.98～2.07mと不揃いである。特に、側柱列の東端の柱間が突出する。1尺は33cm。柱の掘形は径25～40cm・深さ20～40cmを測る円形である。掘立柱建物SB86と重複する。

SB88 (PL.15-2,24-1～5)　　生水調査区



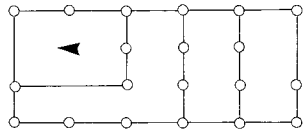
中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間(7.92m：24尺)、梁行2間(3.96m：12尺)の母屋の西面に廂がつく。母屋の桁行き中央で、妻柱筋の棟通りに柱が建つ。柱間寸法は、桁行、梁行、廂の出ともに1.98m(6尺)である。1尺は33cm。柱の掘形は径40～50cm・深さ50～80cmを測る円形で、総ての柱穴底には板石の礎板がある。柱痕から径20cm前後の柱規模である。掘立柱建物SB89・90・91と柱通りを同じくすることから、これら4棟の建物で大規模な建物を構成している。

SB89 (PL.15-2,25-1･2)　　生水調査区



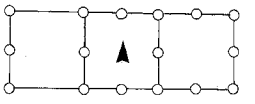
中央部、SB88の東にある南北棟の掘立柱建物である。桁行5間(9.90m：33尺)、梁行2間(5.04m)で、西面に廂がつく可能性がある。妻柱および棟通りの柱は梁行の中央より西に寄っている。柱間寸法は桁行1.98m(6尺)、梁行は1.98m(6尺)と3.06mである。1尺は33cm。柱の掘形は径30～40cm・深さ40～75cmを測る円形で、底には板石の礎板がある。一部の柱穴には2枚の板石を重ねた礎板もある。柱痕から径15cm前後の柱規模である。掘立柱建物SB89・90・91と結合して大規模な建物を構成する。

SB90 (PL.15-2,25-1･3)　　生水調査区



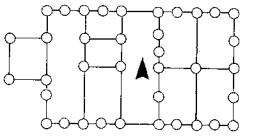
中央部、SB88の東にある南北棟の掘立柱建物である。桁行5間(9.90m：30尺)、梁行2間(4.20m)で、中央に柱がある。妻柱および棟通りの柱は梁行の中央より西に寄っている。柱間寸法は桁行1.98m(6尺)、梁行は1.98m(6尺)と3.06mである。1尺は33cm。柱の掘形は径30～40cm・深さ45～75cmを測る円形で、底には板石の礎板、角石の根固石がある。柱痕から径15～20cm前後の柱規模である。掘立柱建物SB88・89・91と結合して大規模な建物を構成する。

SB91（PL.15-2,26-1～5）　生水調査区



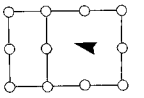
中央部、SB88の北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行５間(11.24ｍ：34尺)、梁行２間(3.96ｍ：12尺)で、桁行き中央で棟通りに柱が建ち、間仕切りを持つ。柱間寸法は、桁行は西端間だけが3.3ｍ(10尺)で、ほかの桁行と梁行はともに1.98ｍ(６尺)である。１尺は33cm。柱の掘形は径40～50cm・深さ60～70cmを測る円形である。掘立柱建物SB88・89・90と結合して大規模な建物を構成する。

SB92（PL.15-2,27-1～5）　生水調査区



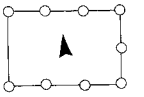
中央部にある桁行５間(9.30ｍ)、梁行２間(5.04ｍ)の東西棟の掘立柱建物で、西に廂がつく。棟の中央に柱が有り、間仕切りか。柱間寸法は不揃いで、桁行1.90～2.04ｍ、梁行1.78～2.20ｍである。廂の出は1.97～2.04ｍ。柱の掘形は径40～50cm・深さ50～70cmを測る円形で、柱痕から径15～18cm前後の柱規模である。桁行き、梁行きともに間柱がある。

SB93（PL.15-2,28-1）　生水調査区



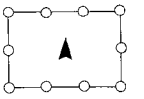
西半部中央にある桁行３間(6.08ｍ)、梁行２間(4.12ｍ)の南北棟の掘立柱建物である。北妻柱側から１間で間仕切りがある。柱間寸法は不揃いで、桁行1.98～2.12ｍ、梁行1.92～2.20ｍである。柱の掘形は径40～50cm・深さ50～75cmを測る円形である。柵列SA71と重複する。

SB94（PL.15-2,28-2）　生水調査区



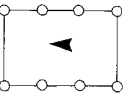
西半部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.92ｍ)、梁行２間(4.40ｍ)で、柱間寸法は、桁行1.83～3.09ｍ、梁行2.08～2.32ｍと不揃いである。他の建物と異なり西で北に偏している。柱の掘形は径30～45cm・深さ40cmを測る円形で、西妻柱は未検出である。溝SD62と重複する。

SB95（PL.15-2,28-3･4）　生水調査区



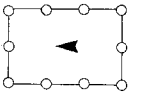
北東部隅、SB96の南にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.83ｍ)、梁行２間(3.27ｍ)で柱間寸法は桁行1.50～1.81ｍ、梁行1.59～1.68ｍと不揃いである。柱の掘形は径30～35cm・深さ30～40cmを測る円形である。

SB96（PL.15-2,28-5･6）　生水調査区



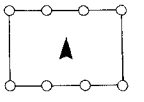
北東部隅、SB95の北にある南北棟の掘立柱建物である。桁行３間(7.32ｍ)、梁行２間(4.36ｍ)で、柱間寸法は、桁行2.38～2.49ｍ、梁行2.09～2.27ｍと不揃いである。南妻柱は未検出であるが、北妻柱の状況から棟持柱を有する。柱の掘形は径25～30cm・深さ20～37cmを測る円形である。

SB97（PL.15-2,28-7）　生水調査区



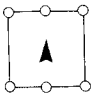
西部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.38ｍ)、梁行２間(4.06ｍ)で、柱間寸法は桁行1.84～2.45ｍ、梁行1.63～2.43ｍと不揃いである。側柱の中央間が両脇と比べて狭い。柱の掘形は径30cm・深さ30～45cmを測る円形である。SD01と重複する。

SB143（PL.16,18-2,29-1）　寺熊調査区



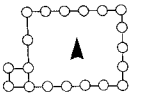
東辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.37～4.67ｍ)、梁行１間(2.93～3.09ｍ)で、柱間寸法は桁行1.10～1.84ｍ、梁行2.93～3.09ｍと不揃いである。特に、桁東端の柱間が他と比べて極端に広い。柱の掘形は径30～45cm・深さ30cmを測る円形である。掘立柱建物SB144と重複し、溝SD101より新しい。

SB144（PL.16,18-2,29-2）　寺熊調査区



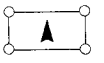
東辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.56ｍ)、梁行１間(4.42ｍ)で、柱間寸法は桁行2.20～2.36ｍと不揃いである。柱の掘形は径35cm・深さ30～40cmを測る円形である。掘立柱建物SB143・146と重複し、溝SD101より新しい。

SB145（PL.16,18-2,29-3）　寺熊調査区



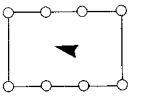
東辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行は５間(5.44ｍ)、梁行は東妻柱側が４間、西妻柱側が３間(3.64ｍ)と変則的である。母屋の西面に廂がつくが、現況では南１間分だけ検出した。溝SD112により消失した可能性も残り、西面すべてに廂も考えられる。母屋の梁行は、東妻柱側が４間、西妻柱側が３間と変則である。柱間寸法は桁行1.02～1.16ｍ、梁行0.88～1.30ｍと不揃いである。柱の掘形は、大径と小径の柱穴が交互に配置され、径25～35cm・深さ30～35cmを測る円形である。

SB146（PL.16,18-2,29-4）　寺熊調査区



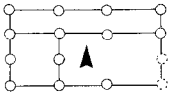
東辺部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行１間(4.54ｍ)、梁行１間(2.14ｍ)を測る。柱の掘形は径35～40cm・深さ30cmを測る円形である。掘立柱建物SB144と重複する。

SB147（PL.16,18-2,29-5）　寺熊調査区



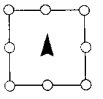
東辺部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.77ｍ)、梁行１間(4.36ｍ)で、柱間寸法は桁行1.58～2.88ｍと不揃いである。特に東面柱間の不揃いが際立っている。掘形は径30～40cm・深さ35cmを測る円形である。

SB149（PL.16,18-2,29-6）　寺熊調査区



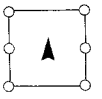
南東部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.15ｍ)、梁行３間(3.13ｍ)で、柱間寸法は桁行1.79～2.10ｍ、梁行0.88～1.23ｍと不揃いである。掘形は径25～30cm・深さ20cmを測る円形である。

SB152（PL.16,18-2,29-7）　寺熊調査区



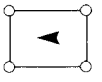
北東部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.29ｍ)、梁行２間(3.79ｍ)で、柱間寸法は桁行1.95～2.34ｍ、梁行1.82～1.97ｍと不揃いである。柱の掘形は径25cm・深さ20cmを測る円形である。柵列SA154・155、掘立柱建物SB160と重複する。

SB153（PL.16,18-2,29-8）　寺熊調査区



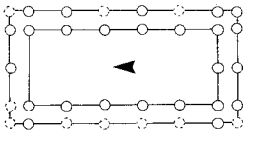
北東部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(3.47ｍ)、梁行１間(3.36ｍ)で、柱間寸法は桁行1.70～1.77ｍと不揃いである。柱の掘形は径25～30cm・深さ25cmを測る円形である。

SB159（PL.16,18-2）　寺熊調査区



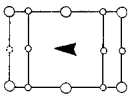
北東部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行１間(3.57ｍ)、梁行１間(2.56ｍ)を測る。柱の掘形は径20～30cm・深さ20cmを測る円形である。

SB160（PL.16,18-2）　寺熊調査区



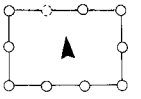
北東部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行５間(11.69ｍ)、梁行２間(3.86～3.96ｍ)の母屋の4面に廂もしくは広縁がつく。柱穴の規模が母屋に比べて小さいことから束柱の可能性が強い。柱間寸法は桁行2.15～2.49ｍ、梁行1.90～2.00ｍ、廂の出は1.28～1.32ｍと不揃いである。柱の掘形は、母屋が径30～40cm・深さ20cm、廂はやや小型で径25～30cm・深さ15cmを測る円形である。底に板石の礎板を持つ柱穴は全体の1/3である。掘立柱建物SB152と重複し、溝SD103より古い。

SB207（PL.15-2,28-8）　生水調査区



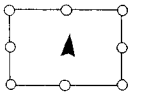
中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.08ｍ)、梁行２間(4.12ｍ)の母屋の北と南の両面に廂がつく。柱間寸法は、桁行1.84～2.24ｍ、梁行1.95～2.02ｍ、廂の出は南が1.15ｍ、北が1.30ｍと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ30～50cmを測る円形で、廂の柱穴規模は母屋と比べて小型である。

SB208（PL.15-2,30-1）　生水調査区



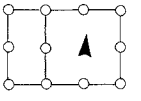
中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.13ｍ)、梁行２間(4.65ｍ)で、柱間寸法は桁行1.90～2.14ｍ、梁行2.02～2.63ｍと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ20～40cmを測る円形で、隅柱の柱穴には礎板がある。他の建物と異なり西で北に偏している。

SB209（PL.15-2,30-2）　生水調査区



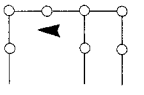
南部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.50ｍ)、梁行２間(3.23ｍ)で、柱間寸法は桁行2.07～2.43ｍ、梁行1.42～1.81ｍと不揃いである。柱の掘形は径20～30cm・深さ30～60cmを測る円形である。柵列SA68と重複する。

SB210（PL.15-2,30-3）　生水調査区



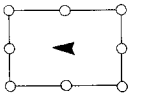
南部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(3.08ｍ)、梁行２間(2.95ｍ)の母屋の西に廂がつく。柱間寸法は桁行1.22～1.74ｍ、梁行1.32～1.63ｍと不揃いである。柱の掘形は径25～30cm・深さ15～20cmを測る円形である。

SB211（PL.15-2,30-4）　生水調査区



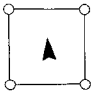
西辺部中央にある東西棟の掘立柱建物であるが、西端部は調査区の外に位置する。桁行２間以上、梁行２間(3.96ｍ:12尺)の母屋の南面に廂がつく。柱間寸法は桁行2.97ｍ(9尺)、梁行1.98ｍ(６尺)、廂の出は2.97ｍ(9尺)である。柱の掘形は径50cm・深さ35～50cmを測る円形で、母屋の柱穴底には板石の礎板・角石の根固石がある。

SB212（PL.15-2,30-5）　生水調査区



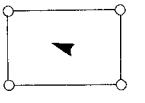
西部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.06ｍ)、梁行２間(2.84ｍ)で、柱間寸法は桁行2.01～2.05ｍ、梁行1.30～1.54ｍと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ30～50cmを測る円形である。掘立柱建物SB57・213と重複する。

SB213（PL.15-2,30-6）　生水調査区



西部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行１間(2.34ｍ)、梁行１間(2.19ｍ)を測る。柱の掘形は径40cm・深さ30～60cmを測る円形で、一部の柱穴に礎板と根固石がある。掘立柱建物SB212と重複する。

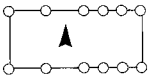
SB214（PL.15-2）　生水調査区



南東部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行１間(3.24ｍ)、梁行１間(2.15ｍ)を測る。柱の掘形は径25～30cm・深さ20～25cmを測る円形で、西側柱の柱穴底にだけ板石の礎板がある。掘立柱建物SB212と重複する。

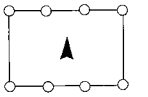
SB230（PL.16,17-1,31-1）　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行５間(6.34ｍ)、梁行１間(3.06ｍ)で、柱間寸法は桁行0.84～1.74ｍと不揃いである。特に、側柱列の中央間を含む東３間と他の間とで極端に異なる。柱の掘形は径20～30cm・深さ30cmを測る円形である。掘立柱建物SB232と重複する。



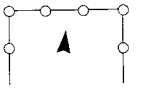
SB232（PL.16,17-1,31-1）　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(7.02ｍ)、梁行１間(4.47ｍ)で、柱間寸法は桁行1.90～3.02ｍと不揃いである。特に、側柱列の東柱間は他の間と比べて極端に広い。柱の掘形は径25～30cm・深さ15～30cmを測る円形である。掘立柱建物SB230と重複する。



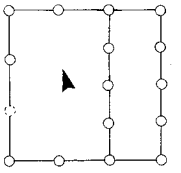
SB233（PL.16,17-1,31-2）　寺熊調査区

西部中央にある南北棟の掘立柱建物である。桁行３間(5.53ｍ)、梁行１間以上で、柱間寸法は桁行1.72～2.01ｍ、梁行1.66～1.72ｍと不揃いである。南側柱列は未検出。柱の掘形は径25～30cm・深さ20cmを測る円形である。



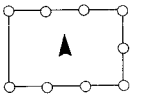
SB235（PL.16,17-1,31-5）　寺熊調査区

北西部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(5.94ｍ)、梁行２間(3.60～3.75ｍ)の母屋の東面に廂がつく。柱間寸法は、桁行1.05～1.70ｍ、梁行1.65～2.00ｍ、廂の出は1.15ｍと不揃いである。柱の掘形は径30cm・深さ20～35cmを測る円形である。他の建物と異なり西で北に偏している。



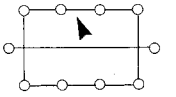
SB236（PL.16,17-1,31-6）　寺熊調査区

北西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.67ｍ)、梁行２間(3.12ｍ)で、柱間寸法は桁行1.13～2.10ｍ、梁行1.54～1.58ｍと不揃いである。特に、側柱列の東端間と他の間とでは極端に異なる。柱の掘形は径25～40cm・深さ40～55cmを測る円形である。



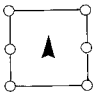
SB260（PL.15-2,30-7）　生水調査区

西部中央にある東西棟の掘立柱建物で、棟持ち柱を持つ。桁行３間(5.36ｍ)、梁行２間(3.87ｍ)で、柱間寸法は桁行1.79ｍ、梁行1.94ｍで、妻柱間は6.24ｍである。柱の掘形は径25～30cm・深さ30～50cmを測る円形である。掘立柱建物SB56・77と重複する。



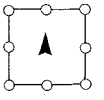
SB262（PL.16,17-1）　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行１間(4.70ｍ)、梁行２間(4.37ｍ)で、柱間寸法は桁行4.70ｍ、梁行1.80～2.57ｍと不揃いである。柱の掘形は径25～35cm・深さ20～35cmを測る円形である。



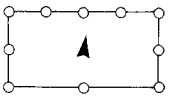
SB453（PL.16,17-1）　寺熊調査区

西部中央、SB471の南にある東西棟の掘立柱建物である。形状的には縦穴式建物的である。長方形の平面形で30cmほど掘り下げた床面の壁際に柱穴を配する。桁行２間(1.70ｍ)、梁行２間(1.38～1.50ｍ)で、柱間寸法は桁行0.78～0.91ｍ、梁行0.62～0.75ｍと不揃いである。柱の掘形は径15～20cm・深さ10cmを測る円形である。



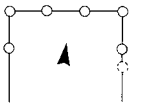
SB460 (PL.16,17-1,32-1)　　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間(6.55m)、梁行2間(3.74～3.94m)であるが、南桁柱側は2間である。柱間寸法は北桁行1.52～1.78m、南桁行2.98～3.59m、梁行1.70～2.24mと不揃いである。柱の掘形は径35～40cm・深さ30～45cmを測る円形である。柱穴のすべてに板石もしくは角石の礎板をもつ。掘立柱建物SB461・462・464と重複する。



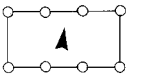
SB461 (PL.16,17-1,32-1)　　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.78m)、梁行2間(4.56m以上)であるが、南桁柱側は調査区外にあるために梁行は不明。柱間寸法は桁行1.85～2.06m、梁行2.28～2.44mと不揃いである。柱の掘形は径35cm・深さ32～45cmを測る円形である。掘立柱建物SB460・464と重複する。



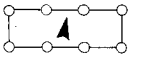
SB462 (PL.16,17-1,32-1)　　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.07～6.29m)、梁行1間(2.98m)で、柱間寸法は桁行1.94～2.21m、梁行2.98mと不揃いである。柱の掘形は径25～30cm・深さ30～60cmを測る円形である。掘立柱建物SB460・463・464と重複する。



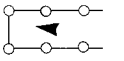
SB463 (PL.16,17-1,32-1)　　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.79～7.04m)、梁行1間(1.91～2.25m)で、柱間寸法は桁行2.09～2.55m、梁行1.91～2.25mと不揃いである。柱の掘形は径30cm・深さ20～38cmを測る円形である。掘立柱建物SB462・464と重複する。



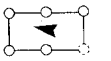
SB464 (PL.16,17-1,32-1)　　寺熊調査区

南西部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行3間以上(3.93m以上)、梁行1間(2.04m)で、建物の南端は調査区の外に位置する。柱間寸法は桁行1.48～2.45m、梁行2.04mと不揃いである。柱の掘形は径25～30cm・深さ30～50cmを測る円形である。掘立柱建物SB460・461・462・463と重複する。



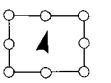
SB465 (PL.16,17-1,32-2)　　寺熊調査区

南西部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行2間(3.83m)、梁行1間(2.23m)で、柱間寸法は桁行1.52～2.31m、梁行2.23mと不揃いである。柱の掘形は径25cm・深さ15～35cmを測る円形である。掘立柱建物SB466と重複する。



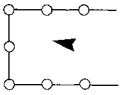
SB466 (PL.16,17-1,32-2)　　寺熊調査区

南西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行2間(4.24m)、梁行2間(2.90m)で、柱間寸法は桁行2.05～2.18m、梁行1.30～1.60mと不揃いである。柱の掘形は径20～30cm・深さ25～45cmを測る円形である。掘立柱建物SB465と重複する。



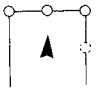
SB467 (PL.16,17-1,32-2)　　寺熊調査区

南西部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行3間以上(3.56m以上)、梁行2間(2.04m)で、建物の南端は調査区の外に位置する。柱間寸法は桁行1.60～1.90m、梁行1.94～2.02mと不揃いである。柱の掘形は径35～45cm・深さ45～70cmを測る円形である。掘立柱建物SB468と重複する。



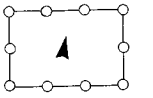
SB468 (PL.16,17-1,32-2)　　寺熊調査区

南西部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行2間以上、梁行2間(2.04m)で、建物の南端は調査区の外に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟建物である可能性も残る。柱間寸法は桁行2.35m、梁行2.43～2.73mと不揃いである。柱の掘形は径35cm・深さ50cmを測る円形である。掘立柱建物SB467と重複する。



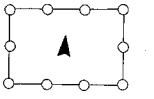
SB469 (PL.16,17-1,32-3)　　寺熊調査区

北西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.85m)、梁行2間(4.06m)で、柱間寸法は桁行1.88～2.04m、梁行1.88～2.18mと不揃いである。柱の掘形は径35～50cm・深さ30～60cmを測る円形である。



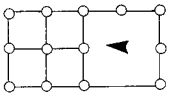
SB470 (PL.16,17-1,32-4)　　寺熊調査区

北西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.92m)、梁行2間(4.24m)で、柱間寸法は桁行2.18～2.52m、梁行1.86～2.38mと不揃いである。妻柱の柱穴規模は桁柱の柱穴より小型である。柱の掘形は径40～60cm・深さ25～50cmを測る円形である。



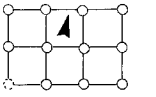
SB471 (PL.16,17-1,32-5)　　寺熊調査区

北西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行4間(8.48m)、梁行2間(3.88m)で、柱間寸法は桁行2.00～2.18m、梁行1.87～2.01mと不揃いである。柱の掘形は径40～50cm・深さ30～50cmを測る円形である。桁行の中央および北側で棟通りに柱が建つ。すなわち、建物北半分の2間×2間だけ総柱建物様式となる。柱穴規模の比較から柱を床束と考えたい。



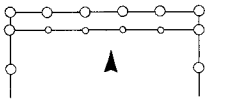
SB472 (PL.16,17-1,32-6)　　寺熊調査区

西部中央にある東西棟の総柱掘立柱建物である。桁行3間(6.52m)、梁行2間(4.39m)で、柱間寸法は桁行1.99～2.48m、梁行2.06～2.30mと不揃いである。柱の掘形は径35～50cm・深さ20～30cmを測る円形である。掘立柱建物SB473と重複する。



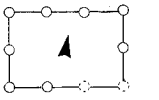
SB473 (PL.16,17-1,32-6)　　寺熊調査区

西部中央にある東西棟の掘立柱建物で、南桁柱は調査区の外に位置する。桁行5間(10.74m)、梁行2間(4.26m)の母屋の北面に廂がつき、状況から南面にも廂がつくと考えられる。柱間寸法は桁行2.07～2.26m、梁行2.13m、廂の出は1.13mである。柱の掘形は径30～50cm・深さ30～40cmを測る円形である。掘立柱建物SB473と重複し、溝SD300より古い。



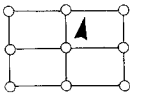
SB474 (PL.16,17-1)　　寺熊調査区

西部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.49m)、梁行2間(4.21m)で、柱間寸法は桁行2.11～2.26m、梁行1.84～2.17mである。柱の掘形は径30～40cm・深さ20cmを測る円形である。2箇所の柱穴底には割石を配する。溝SD300より古い。

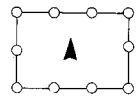


SB476 (PL.16,17-1,32-7)　　寺熊調査区

西部中央にある東西棟の掘立柱建物である。桁行2間(5.16m)、梁行2間(3.68m)の母屋の北面に廂が西端間だけつき、桁行の中央で棟通りに柱が建つ。柱の規模から床束であろう。柱間寸法は桁行2.53～2.63m、梁行1.71～2.30m、廂の出は0.68mである。柱の掘形は径35～45cm・深さ30cmを測る円形である。

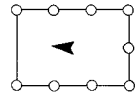


SB479 (PL.16,18-1,33-1)　　寺熊調査区



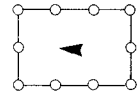
中央部にある東西棟の掘立柱建物で、桁行3間(5.76m：18尺)、梁行2間(3.84m：12尺)である。東妻柱は梁行きの中央に位置するが、西妻柱は南に寄る。柱間寸法は桁行1.92m(6尺)、梁行1.92m(6尺)、西梁行は1.60m(5尺)と2.24m(7尺)である。1尺は32cm。柱の掘形は径40～50cm・深さ30～40cmを測る円形で、大半の柱穴底に板石の礎板と角石の根固石がある。掘立柱建物SB480と重複する。

SB480 (PL.16,18-1,33-1)　　寺熊調査区



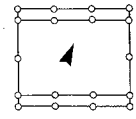
中央部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行3間(6.20m)、梁行2間(4.23m)であるが、北妻柱は未確認。柱間寸法は桁行1.90～2.25m、梁行2.03～2.20mと不揃いである。柱の掘形は径40cm・深さ35～45cmを測る円形で、一部の柱穴底に板石の礎板と角石の根固石がある。掘立柱建物SB479と重複する。

SB483 (PL.16,18-1,33-2)　　寺熊調査区



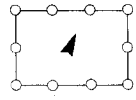
中央部南辺にある南北棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.86m)、梁行2間(3.93m)で、柱間寸法は桁行1.87～2.06m、梁行1.76～2.17mと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ30cmを測る円形である。

SB484 (PL.16,18-1,33-3)　　寺熊調査区



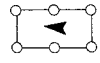
中央部南辺にある東西棟の掘立柱建物で、棟持柱がある。桁行3間(5.86m：18尺)、梁行1間(3.25m：10尺)の母屋の南北両面に広縁がつく。柱間寸法は桁行1.95m(6尺)、梁行3.25m(10尺)、広縁の出は0.65m(2尺)である。棟持柱間は6.17m(11尺)で、梁行柱筋より16cm(5寸)出る。他の建物と異なり西で北に偏している。柱の掘形は径30～35cm・深さ30cmを測る円形で、棟持柱の規模は他より大きい。掘立柱建物SB485と重複する。

SB485 (PL.16,18-1,33-3)　　寺熊調査区



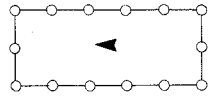
中央部南辺にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.38m)、梁行2間(3.33m)で、東妻柱は梁行きのほぼ中央に位置するが、西妻柱は極端に不揃いである。柱間寸法は桁行1.66～1.86m、東梁行1.64mと1.69m、西梁行1.48mと1.84mである。柱の掘形は径25～30cm・深さ10～25cmを測る円形である。掘立柱建物SB484と重複する。

SB490 (PL.16,18-1,33-4)　　寺熊調査区



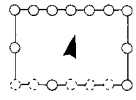
中央部にある南北棟の掘立柱建物で、苑池SG122・124に囲まれる位置にある。桁行2間(4.40m)、梁行1間(1.92m)で、柱間寸法は桁行2.08～2.32m、梁行1.92mと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ20～35cmを測る円形である。

SB491 (PL.16,18-1,33-5)　　寺熊調査区



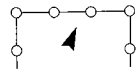
中央部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行5間(9.90m)、梁行2間(4.95m)で、柱間寸法は桁行1.98m、梁行2.47mである。柱の掘形は径40～50cm・深さ25～50cmを測る円形で、半数の柱穴の底には板石の礎板がある。

SB759　　寺熊調査区



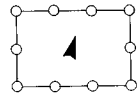
中央部北辺にある南北棟の掘立柱建物である。桁行6間(6.63m)、梁行2間(4.21m)で、柱間寸法は桁行1.04～1.22m、梁行1.97～2.17mと不揃いである。柱の掘形は径20～30cm・深さ10～15cmを測る円形である。

SB761（PL.16,17-2）　寺熊調査区



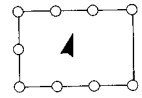
中央部南辺にある東西棟の掘立柱建物である。建物南辺部は調査区の外に位置する。桁行３間(5.75ｍ)、梁行２間で、柱間寸法は桁行1.74～2.20ｍ、梁行1.59～1.87ｍと不揃いである。柱の掘形は径35～40cm・深さ10～30cmを測る円形で、一部の柱穴底には板石の礎板がある。

SB762（PL.16）　寺熊調査区



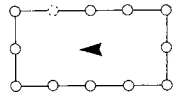
中央部南辺にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.89ｍ)、梁行２間(3.84ｍ)で、柱間寸法は桁行2.15～2.52ｍ、梁行1.84～2.00ｍと不揃いである。柱の掘形は径30cm･深さ30cmを測る円形で、一部の柱穴底には板石の礎板がある。掘立柱建物SB763･764と重複する。

SB763（PL.16）　寺熊調査区



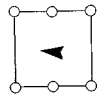
中央部南辺にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(5.97ｍ)、梁行２間(3.13ｍ)で、柱間寸法は桁行1.86～2.20ｍ、梁行1.55～1.58ｍと不揃いである。柱の掘形は径30～40cm・深さ20～40cmを測る円形である。掘立柱建物SB762・764と重複する。

SB764（PL.16）　寺熊調査区



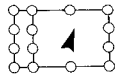
中央部にある南北棟の掘立柱建物である。桁行４間(5.88ｍ)、梁行２間(2.88ｍ)で、柱間寸法は桁行1.39～1.55ｍ、梁行1.41～1.47ｍと不揃いである。柱の掘形は径30cm・深さ20～30cmを測る円形である。掘立柱建物SB762・763と重複する。

SB765（PL.16,17-2）　寺熊調査区



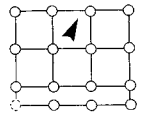
中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行１間(3.96ｍ:12尺)、梁行２間(3.96ｍ：12尺)で、柱間寸法は桁行3.96ｍ、梁行1.98ｍ(６尺)である。１尺は33cm。柱の掘形は径50cm・深さ30～40cmを測る円形である。

SB766（PL.16,17-2）　寺熊調査区



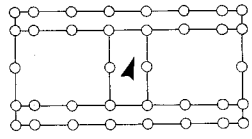
中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.08ｍ)、梁行３間(3.05ｍ)の母屋の西面に廂がつく。柱間寸法は桁行1.75～2.33ｍ、梁行0.75～1.31ｍ、廂の出は1.05ｍである。柱の掘形は径30～45cm・深さ10～40cmを測る円形で、一部の柱穴底に板石の礎板がある。

SB767（PL.16,17-2）　寺熊調査区



中央部にある東西棟の掘立柱建物で、総柱である。桁行３間(6.35～6.63ｍ)、梁行２間(3.96ｍ)の母屋の南面に廂がつく。柱間寸法は桁行1.98～2.31ｍ、梁行1.83～2.15ｍ、廂の出は1.23ｍである。柱の掘形は径40cm・深さ35cmを測る円形で、半数の柱穴底には板石の礎板と角石の根固石がある。

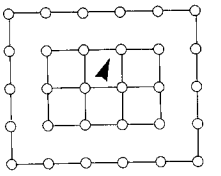
SB768（PL.16,17-2,35-1）　寺熊調査区



中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行７間(12.53ｍ)、梁行２間(4.15～4.33ｍ)の母屋の南・北の両面に廂がつき、棟通りの中央間には柱が建つ。桁行の柱間は変則的で、両端間以外の柱間はほぼ等分であるのに対し、両端間は極端に狭い。柱間寸法は端間を除く桁行が2.10～2.16ｍ、西端間0.90ｍ、東端間0.96ｍ、梁行2.03～2.25ｍ、廂の出は1.09ｍである。柱の掘形は径35～50cm･深さ35～50cmを測る円形で、一部の柱穴には板石の礎板がある。柵列SA478・掘立柱建物SB767と重複する。

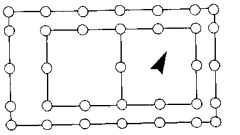
SB769（PL.16,17-2,35-2）　寺熊調査区

中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(6.40～6.55ｍ)、梁行２間(5.29～5.32ｍ)の母屋の東・西・南・北の四面に廂がつく。棟通りにも柱が建つが、床束であろう。柱間寸法は桁行2.09～2.35ｍ、梁行2.24～3.05ｍ、廂の出は1.80～2.09ｍである。柱の掘形は径35～50cm・深さ30～50cmを測る円形で、一部の柱穴には板石の礎板がある。柵列SA478・掘立柱建物SB768・770と重複する。



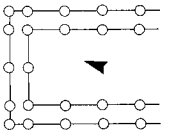
SB770（PL.16,17-2,35-3）　寺熊調査区

中央部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行４間(8.56ｍ)、梁行２間(3.84～3.99ｍ)の母屋の東・西・南・北の四面に廂がつく。桁行の中央で棟通りに柱が建つ。柱間寸法は桁行1.91～2.23ｍ、梁行1.89～2.08ｍ、廂の出は西面だけ広く1.83～1.97ｍで、他の面は1.08～1.22ｍである。掘形は径35～50cm・深さ30～50cmを測る円形である。掘立柱建物SB769・771と重複する。



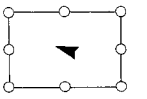
SB771（PL.16,17-2,35-3）　寺熊調査区

中央部にある南北棟の掘立柱建物で、南端部は未確認である。桁行４間以上(9.37ｍ以上)、梁行２間(3.96ｍ)の母屋の東・西・北の三面には廂がつく。柱間寸法は桁行2.15～2.50ｍ、梁行1.87～2.09ｍ、廂の出は1.32～1.53ｍである。掘形は径40～50cm・深さ50cmを測る円形である。掘立柱建物SB770と重複する。



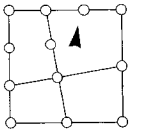
SB772（PL.16,17-2）　寺熊調査区

中央部南にある南北棟の掘立柱建物である。桁行２間(3.90ｍ)、梁行２間(2.96ｍ)で、柱間寸法は桁行1.84～2.06ｍ、梁行1.42～1.59ｍと不揃いである。柱の掘形は径25～30cm・深さ20cmを測る円形である。



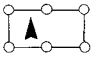
SB773（PL.16,18-1）　寺熊調査区

北東部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行(3.90ｍ)は北面が３間、南面が２間、梁行(1.93ｍ)は東妻柱側が２間、西妻柱側が３間である。柱間寸法は桁行1.84～2.06ｍ、梁行1.42～1.59ｍと不揃いである。柱の掘形は径20～35cm・深さ30cmを測る円形である。



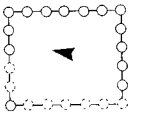
SB774（PL.16,17-1）　寺熊調査区

北西部にある東西棟の掘立柱建物である。桁行２間(4.46ｍ)、梁行１間(2.37～2.72ｍ)で、柱間寸法は桁行2.06～2.40ｍ、梁行2.37～2.72ｍと不揃いである。柱の掘形は径35～50cm・深さ20～50cmを測る円形である。



SB775（PL.16,17-2）　寺熊調査区

中央部南にある南北棟の掘立柱建物である。桁行６間(5.17ｍ)、梁行３間(3.24～3.93ｍ)である。柱間寸法は桁行0.72～1.10ｍ、梁行0.70～0.95ｍと不揃いである。柱の掘形は径30cm・深さ30～40cmを測る円形である。



溝・堀・流路（SD）

調査区では217条の溝・堀・流路を検出した。

SD01（Fig.6･7，PL.15-2,36-1･2）　生水調査区

調査区の東部に位置し、直線的に南に流れる南北溝である。巾1.3～2m、深さ40cmを測る。溝内からは白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿・土鍋、瓦器碗・すり鉢、陶器壺、平瓦、砥石、土錘などが出土している。

SD02（Fig.6，PL.15-2,36-3）　生水調査区

調査区の東部に位置し、SD01の途中から直角に西へ流れる東西溝で、巾1.1m、深さ15cmを測る。溝内からは白磁碗、青磁碗・皿、土師器坏・皿、陶器鉢、土錘などが出土している。

SD03（Fig.6，PL.15-2,36-4）　生水調査区

調査区の東部に位置し、SD01の途中から直角に西へ流れる東西溝である。北に位置するSD02とは平行し、巾1.0m、深さ20cmを測る。白磁皿、青磁碗・皿、土師器坏・皿・鍋などが出土している。

SD04（Fig.6，PL.15-2,36-4）　生水調査区

調査区の東部に位置し、SD01の途中から直角に西へ流れる東西溝である。巾0.5～1m、深さ10cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、椀などが出土している。

SD05（Fig.6･7，PL.15-2,36-5･6）　生水調査区

調査区の東部に位置し、SD01の途中から直角に西へ流れる東西溝で、巾1.1m、深さ30cmを測る。溝内からは白磁碗、土師器坏・皿、羽口などが出土している。

SD06（Fig.6，PL.15-2,37-1）　生水調査区

調査区南辺部、塀SA68･69の南に沿って位置する東西溝で、巾0.7m、深さ50cmを測る。断面形は逆台形である。溝内からは白磁碗・皿・合子、青磁壺、土師器坏・皿などが出土している。

SD07（Fig.6，PL.15-2,37-2･3）　生水調査区

調査区南辺部、塀SA68･69の南に沿って位置する東西溝で、巾0.7m、深さ35cmを測る。断面形は逆台形である。溝内からは白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、羽口などが出土している。

SD08（Fig.6，PL.15-2,37-4･5･6）　生水調査区

調査区の北西部、SD01の東に位置する南北溝で、巾1.5m、深さ50cmを測る。溝内からは白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿・鉢、瓦器椀、陶器鉢などが出土している。

SD09（Fig.6，PL.15-2,37-4･7）　生水調査区

調査区の北西部、SD01の東に位置する南北溝である。位置関係からSD08と一連の遺構である。巾1.4m、深さ40cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、青磁碗、白磁碗、陶器鉢などが出土している。

SD10（Fig.6･7，PL.15-2,36-7･8）　生水調査区

調査区の中央部、SD08･09の東に位置する直線的な南北溝で、南へ流れる。西に位置するSD01より北で東へ偏し、南ではSD01との間隔が狭まる。重複するSB85より古い。巾1.7m、深さ40～60cmを測る。溝内からは土師器坏・皿・鍋、陶器鉢、白磁碗、青磁碗が出土している。

SD28（Fig.6，PL.15-2）　生水調査区

調査区の南辺部に位置する南北溝である。巾1.0～1.5m、深さ15cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、陶器鉢、白磁碗、青磁碗、瓦器椀・火舎が出土している。

SD30（Fig.6，PL.15-2）　生水調査区

調査区東半部中央に位置する南北溝で、南へ流れる。巾0.5～1m、深さ10cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、白磁皿・壺、青磁碗が出土している。

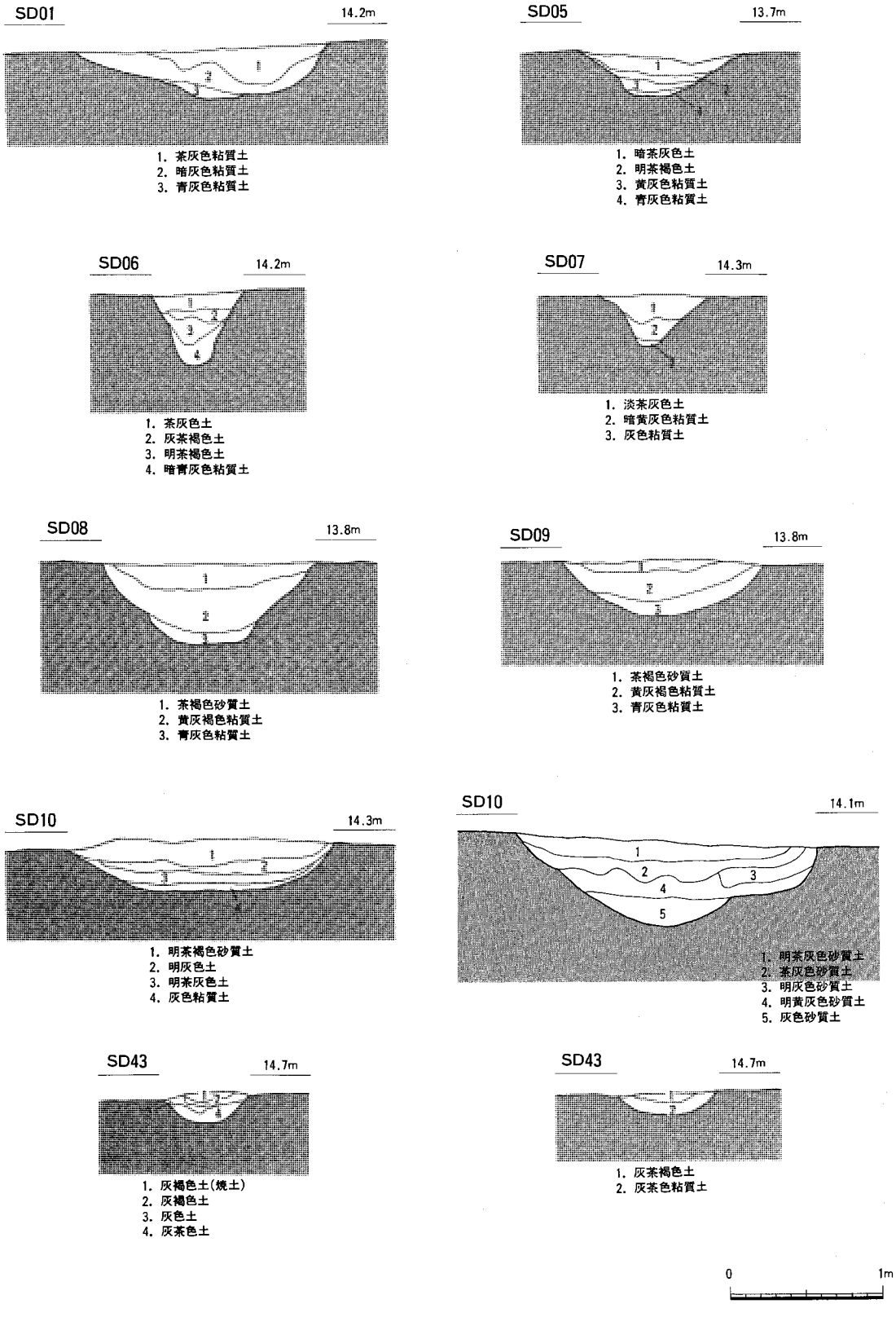
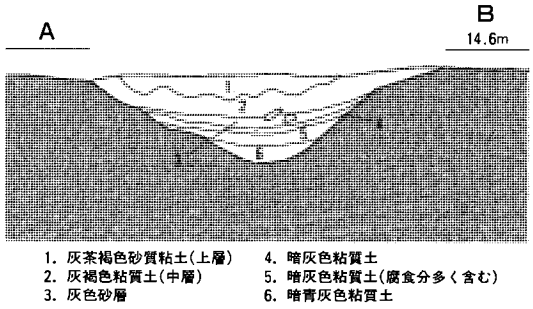
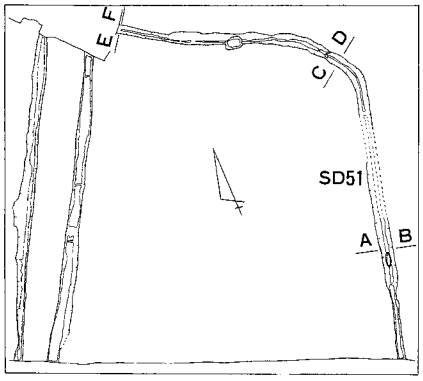
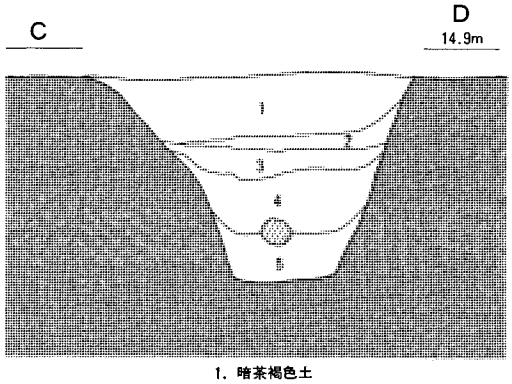


Fig. 7　溝SD01・05～10・43土層実測図(1/40)





SD51土層実測位置図



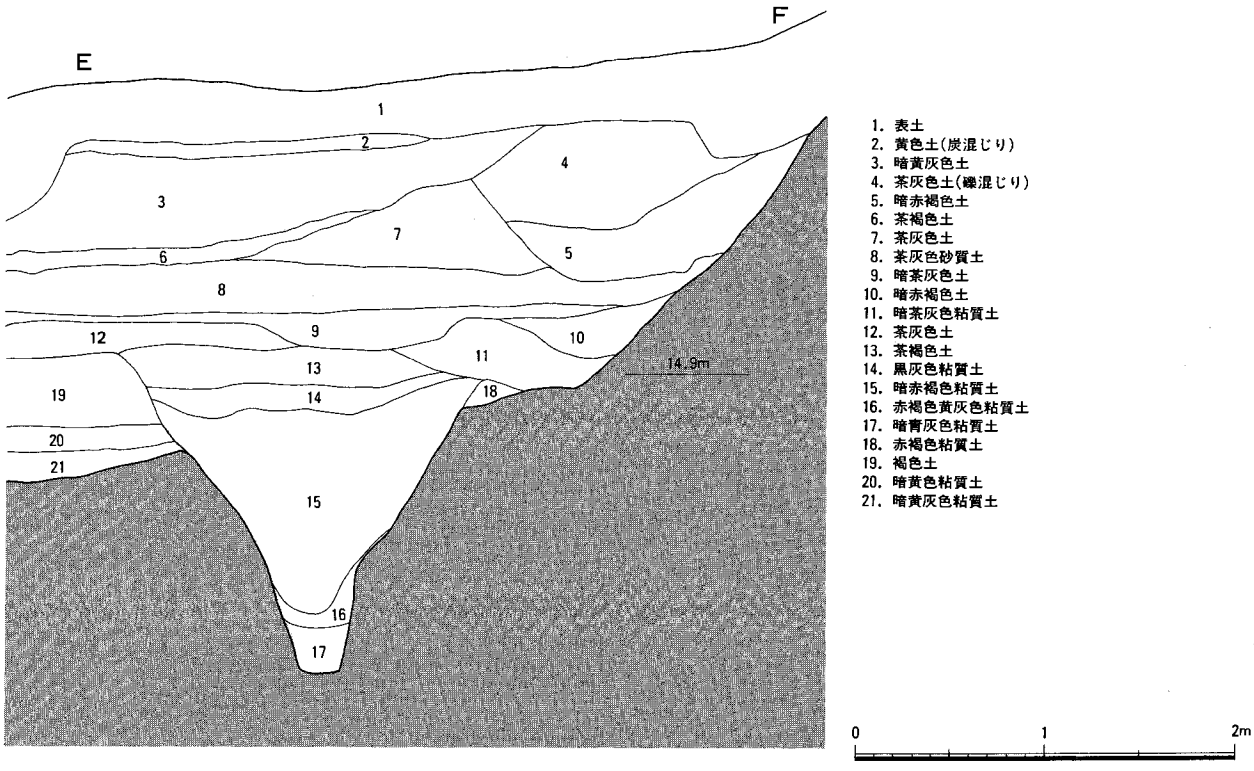
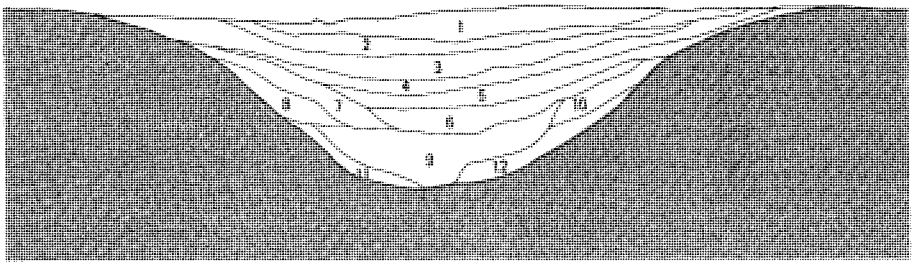


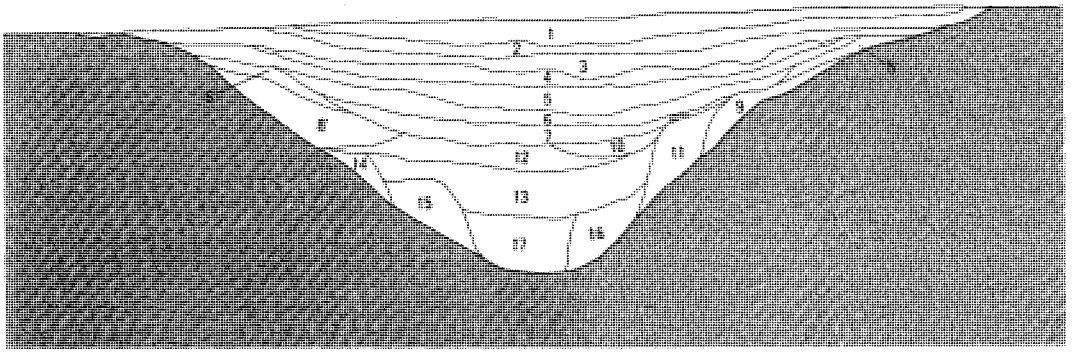
Fig. 8　溝SD51土層実測図(1/40)

SD100



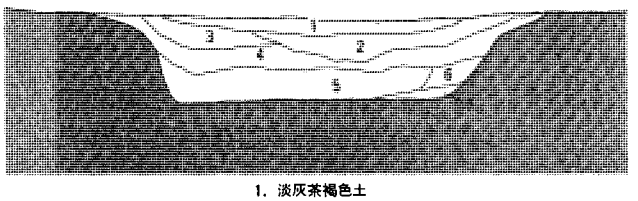
1. 淡灰茶褐色土
2. 灰黄褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰褐色土(5より粘土質)
5. 灰褐色土(4よりも灰色が強い)
6. 灰褐色砂礫土
7. 灰茶褐色砂礫土
8. 灰褐色砂礫土
9. 灰茶褐色砂質土
10. 灰色粘質土
11. 灰褐色砂礫土
12. 灰茶褐色砂礫土

SD100



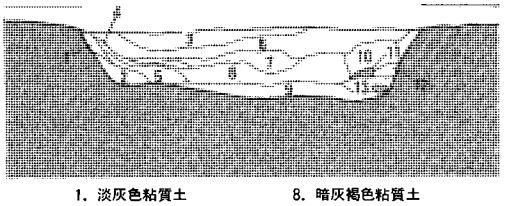
1. 淡灰茶褐色土
2. 淡黄灰褐色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰褐色土
5. 灰茶褐色土
6. 灰褐色粘質土
7. 灰黄褐色砂質土
8. 灰色粘質土
9. 暗灰色砂質土
10. 灰色粘質土
11. 褐色砂礫土
12. 灰色砂礫土
13. 灰褐色砂礫土
14. 暗灰色粘質土(やや礫を含む)
15. 暗灰色粘質土(純粋な粘土)
16. 灰褐色砂礫土
17. 灰茶褐色砂礫土
18. 暗灰色砂質土
19. 暗灰色粘質土

SD101



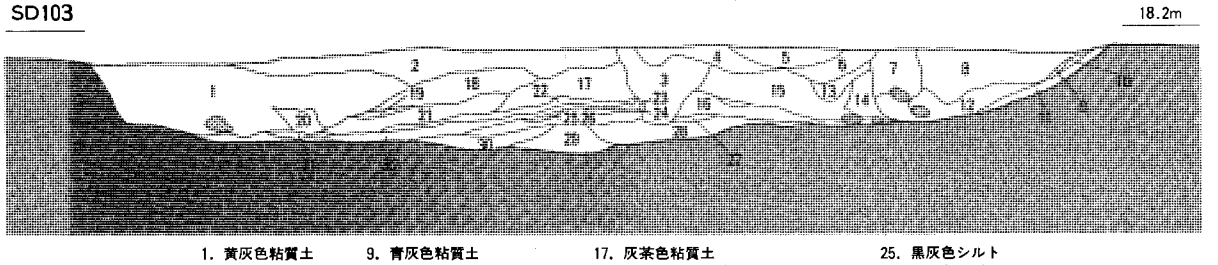
1. 淡灰茶褐色土
2. 黒灰色土
3. 灰茶褐色土
4. 灰褐色粘質土
5. 灰色粘質土
6. 淡灰茶褐色粘質土
7. 明灰色粘質土

SD103



1. 淡灰色粘質土
2. 青灰色粘砂質土
3. 茶褐色土
4. 暗灰色粘質土
5. 青灰褐色粘質土
6. 灰褐色土と黒まじり土
7. 黒灰色粘質土
8. 暗灰褐色粘質土
9. 青色粘砂質土
10. 暗灰色粘質土
11. 灰色粘質土
12. 灰色粘質土
13. 青灰色粘質土

SD103



1. 黄灰色粘質土
2. 灰茶褐色粘質土
3. 茶灰色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 茶褐色砂質土
6. 黄灰色粘質土
7. 汚濁灰色粘質土
8. 黄灰色粘質土
9. 青灰色粘質土
10. 灰色砂細砂
11. 暗青灰色粘質土
12. 明青灰色粘質土
13. 灰色粘質土(腐食土を含む)
14. 灰色粘質土
15. 黄茶灰色粘質土
16. 暗灰色粘質土
17. 灰茶色粘質土
18. やや黄色味を帯びた淡灰色粘質土
19. 淡灰色粘質土
20. 明茶褐色砂質土
21. 淡茶褐色粘質土
22. 青灰色細砂
23. 青灰色砂質土
24. 黒灰色シルト
25. 黒灰色シルト
26. 暗灰色粘質土
27. 腐食土
28. 青灰色砂質土粗砂
29. 淡灰色粘質土
30. 淡灰色砂質土
31. 腐食土
32. 腐食土

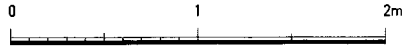


Fig. 9　溝SD100・101・103土層実測図(1/40)

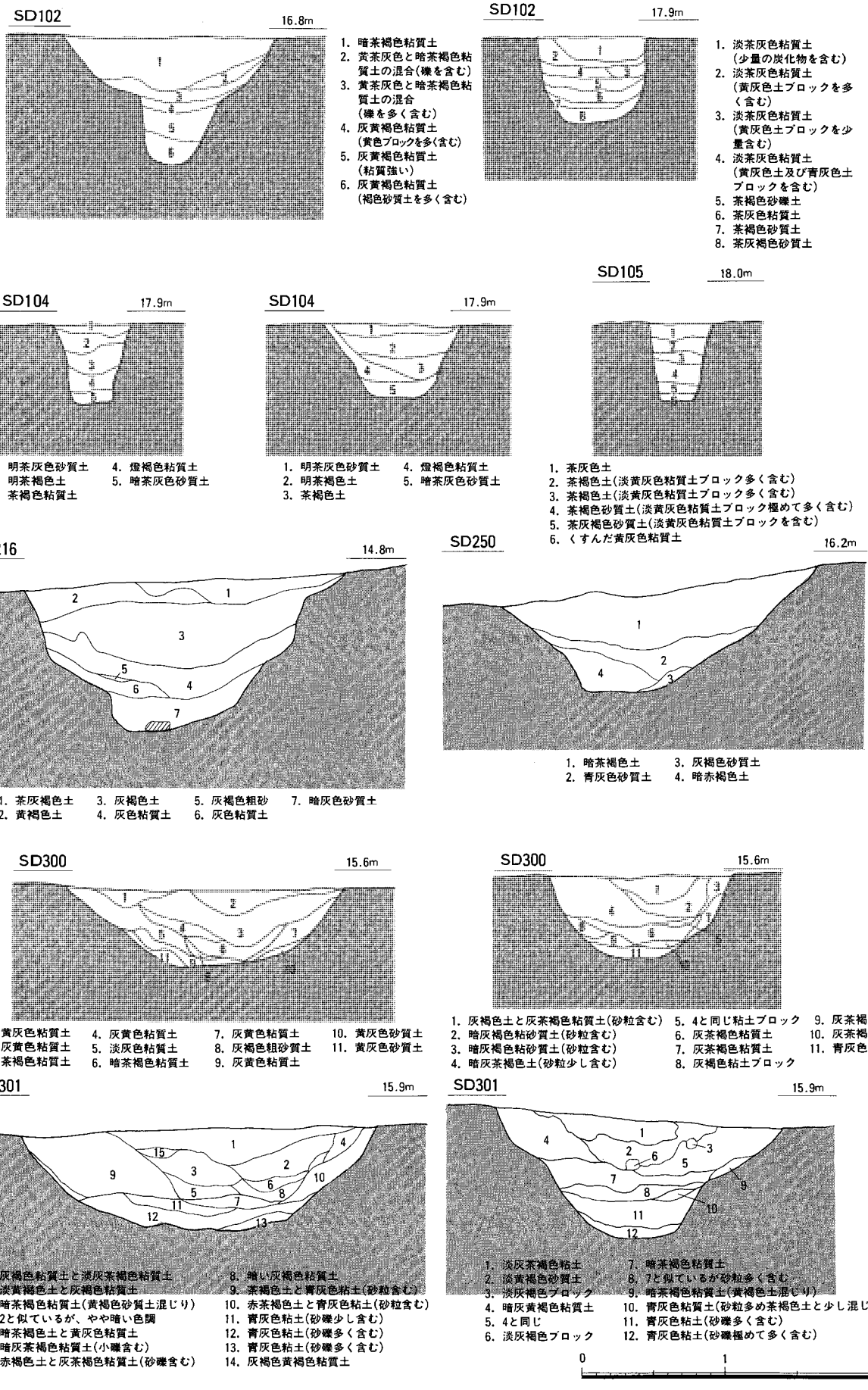


Fig.10　溝SD102・104・105・216・250・300・301土層実測図(1/40)

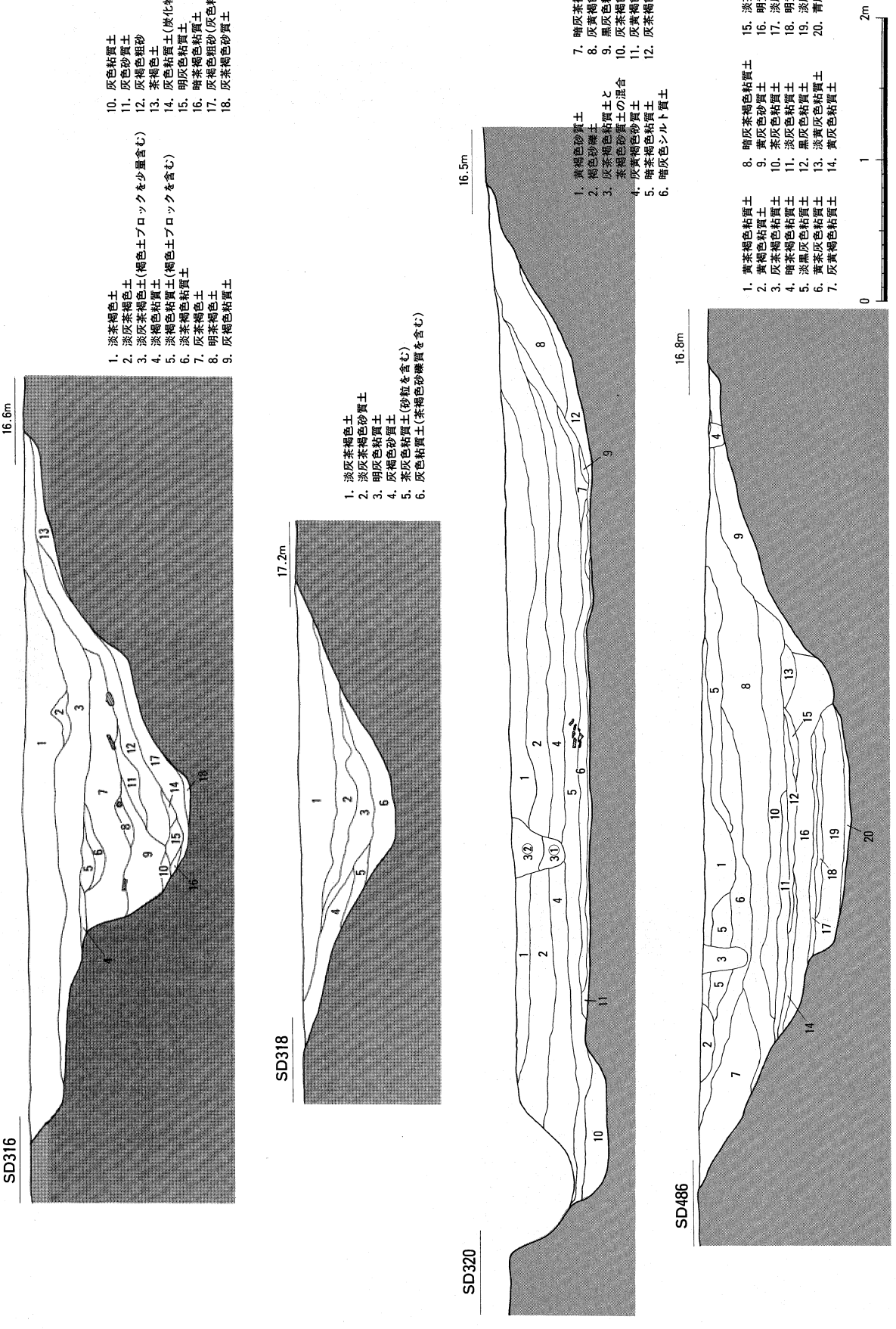


Fig.11　溝SD316・318・320・486土層実測図(1/40)

SD43 (Fig.6・7, PL.15-2)　　生水調査区

調査区中央部、SB89・90の北側から建物に沿って南へ直角に折れ曲がる。掘立柱建物SB89・90の雨落ち溝で、巾0.6m、深さ20cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、青磁碗、壁土が出土している。

SD44 (Fig.6, PL.15-2)　　生水調査区

調査区中央部、SB92の南側に沿うように位置する東西溝で西へ流れる。掘立柱建物SB92の雨落ち溝である。巾0.4～0.8m、深さ10cmを測る。溝内からは土師器坏・皿・鉢、壁土が出土している。

SD45 (Fig.6, PL.15-2)　　生水調査区

調査区中央部、SB92の北側に沿うように位置する東西溝で西へ流れる。建物SB92の雨落ち溝である。巾0.3～0.8m、深さ10cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、瓦器椀が出土している。

SD51 (Fig.6・8, PL.15-2,37-8,38-1～3)　　生水調査区

調査区の東南隅から北へ直線的に延び、北東隅で弧を描くように西へ流れる溝である。敷地を区画する溝である。溝は、南東隅では断面形が半円形で巾1.7m、深さ50cmと浅いが、北では断面形が逆台形で巾2.0m、深さ1.7mと規模が大きくなる。溝内からは土師器坏・皿・鍋、瓦器椀・皿・火舎・鉢、陶器鉢・壺、高麗青磁、瓦質製燭台、白磁碗・皿・合子、青磁碗・壺、杵、鉄滓などが出土している。出土品はSD221出土品と接合することから同時期である。

SD52 (Fig.6, PL.15-2)　　生水調査区

調査区の東辺部に位置する南北溝である。東に位置するSD51と向きを同じくする。巾1.3m、深さ30cmを測る。溝内からは土師器坏・皿・鍋、陶器鉢、白磁碗・壺、青磁碗、土錘が出土している。

SD59 (Fig.6, PL.15-2)　　生水調査区

調査区の中央部に位置する南北溝である。SD45、ＳＥ98より古い。巾0.5m、深さ10cmを測る。土師器坏・皿、白磁皿などが出土している。

SD100 (Fig.6・9, PL.16,18-2,39-1～6)　　寺熊調査区

調査区東辺部に位置する南北溝である。北側は丘陵裾まで続いた後に西に向きを変えてSD161となり、南端部では規模が極端に小さくなりSD111として南に続く。西に98m離れてほぼ平行するSD316、および直行するSD102とで区画を構成する可能性が高い。巾3.8～4.5m、深さ1.1～1.3mを測る。溝内からは箸、杓子、下駄、舟形、逆卍文・巴文軒丸瓦、茶臼、鉄鎌、白磁碗・皿・小壺、褐釉壺、青磁碗、染付碗、土師器坏・小皿・土鍋、備前焼すり鉢、瓦器火舎、硯などが出土している。

SD101 (Fig.6・9, PL.16,18-1・2,40-1～6)　　寺熊調査区

東北隅に位置する溝で、SD103とで30m×18.5mの長方形を区画する。巾２m、深さ50cmを測る。白磁碗、青磁碗、黄釉盤、土師器椀・坏・台付坏・小皿・鍋・壺、備前焼すり鉢、瓦器椀・火舎、新羅焼壺、軒丸瓦などが出土している。

SD102 (Fig.6・10, PL.16,17-1,18-1・2,42-1～3)　　寺熊調査区

調査区南辺に位置する東西溝で、SD101とSD316のそれぞれ南端と交わり、東西95mの南辺を画する。巾0.8～1.4m、深さ65～90cmを測る。白磁碗・皿、青白磁合子、青磁碗・皿、瓦器椀・火舎・すり鉢、土師器坏・小皿(イトキリ)・土鍋、備前焼すり鉢、瓦器火舎、滑石製石鍋、羽口、軒平瓦・軒丸瓦などが出土している。

SD103 (Fig.6・9, PL.16,18-1・2,40-7・8,41-1～8)　　寺熊調査区

東北隅に位置する溝で、SD101とで30m×18.5mの長方形を区画する。巾1.8m、深さ50cmを測る。箸、木札、杓子、下駄、木槌、折敷、曲物底板、糸巻、刀形、小型卒塔婆、鞘、櫛、斎串、「寛治７年」

銘木簡などの木製品や、白磁碗・皿、青磁碗・皿・合子、褐釉壺・盤、土師器坏・皿・椀、常滑焼甕、砥石、石錘、滑石製石鍋、軒丸瓦などが多量に出土している。

SD104 (Fig.6・10, PL.16,18-2,42-4・5)　寺熊調査区

調査区南東部、苑池SG122から南へ続く南北溝である。巾0.6～1m、深さ50～60cmを測る。SD102・105より新しい。溝内からは土師器坏・皿、青磁碗・皿、瓦器椀・火舎、陶器すり鉢、丸瓦などが出土している。

SD105 (Fig.6・10, PL.16,18-1・2,42-6・7)　寺熊調査区

調査区南東部、SD102の南に位置する東西溝である。SD102より東で北に偏している。巾0.5m、深さ45cmを測る。溝内からは土師器坏、褐釉壺、青磁碗などが出土している。

SD110 (Fig.6, PL.16,18-2)　寺熊調査区

調査区南東隅、SD100南端から派生して規模が異なる南北溝である。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、青磁碗、陶器鉢などが出土している。

SD111 (Fig.6, PL.16,18-2)　寺熊調査区

調査区南東隅、SD100南端から派生して規模が異なる南北溝である。溝内からは火舎が出土する。

SD161 (Fig.6, PL.39-7・8)　寺熊調査区

調査区東北隅、SD100が山裾に沿って西に向きを変えた溝である。

SD216 (Fig.6・10, PL.16,17-1,43-1・2)　寺熊調査区

調査区南東部に位置する南北溝である。北端部は途中で立上る。巾2.2m、深さ1.1mを測る。溝内からは土師器皿・鍋、白磁碗・皿、瓦器椀、陶器鉢、漆椀などが出土している。

SD221 (Fig.6, PL.16,17-1,43-3・4)　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する東西溝で、南北溝SD301と一連の溝をなす。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、青磁碗・壺、陶器鉢・壺・すり鉢、瓦器火舎、滑石製石鍋などが出土している。SD51出土品と接合することから同時期である。

SD222 (Fig.6, PL.16,17-1,43-5)　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する南北溝で、SD221より古い。溝内からは土師器坏・皿・鍋、白磁碗・皿、青磁碗、瓦器椀・鉢などが出土している。

SD250 (Fig.6・10, PL.38-1・4)　寺熊調査区

調査区西北隅に位置する東西溝である。巾2.2m、深さ80cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、青磁碗・壺、陶器鉢、瓦器椀・火舎、平瓦、下駄などが出土している。

SD256 (Fig.6, PL.38-1)　寺熊調査区

調査区西北隅に位置する南北溝で、SD250の東端から直角に南へ折れ曲がる。

SD257 (Fig.6, PL.38-1)　寺熊調査区

調査区西北隅に位置する南北溝で、SD250の東端近くから直角に北へ折れ曲がる。溝内からは土師器坏・皿、青磁碗、白磁碗、須恵器坏・蓋などが出土している。

SD300 (Fig.6・10, PL.16,17-1,43-6)　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する溝で、南北溝から西に折れ曲がり東西溝となる。SD301・349より新しい。巾1.3～2.0m、深さ50～60cmを測る。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗、青磁碗、肥前染付碗、滑石製石鍋、鬼瓦などが出土している。農業用水路の初期的な姿である可能性が高い。

SD301 (Fig.6・10, PL.16,17-1,43-7)　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する南北溝で、東西溝SD221と一体の溝をなす。巾2.0～2.5m、深さ70～85cm

を測る。SD300より古い。溝内からは土師器椀・坏・皿、白磁碗・皿、青磁碗、陶器すり鉢、瓦器椀・火舎・壺、染付椀、滑石製石鍋、軒丸瓦などが出土している。

SD316 (Fig.6・11, PL.16,17-2,43-8,44-1)　寺熊調査区

調査区中央に位置する南北溝である。北端は山裾で東に直角に折れ曲がりSD750となり、南端は東西溝のSD102と合流するとともにやや向きを西へ偏しながら規模を小さくして続く。巾2.0～4.5m、深さ1.2mを測る。溝内からは逆卍文軒丸瓦・軒平瓦、白磁碗・合子、青磁碗・皿、陶器鉢・壺、土師器坏・小皿、瓦器椀、釘、板状木製品などが出土している。

SD318 (Fig.6・11, PL.16,17-2,18-1,44-2～4)　寺熊調査区

調査区の中央部に位置する。SK423から南下し、調査区中央部直角に東に折れ曲がる。調査では途中までしか検出しておらず、東端は不明。巾2.3～3.8m、深さ70cmを測る。溝内からは、五輪塔（地輪）、白磁碗、青磁碗・壺、天目椀、陶器鉢、土師器坏・皿・鍋、瓦器椀・火舎、滑石製石鍋、曲物底板などの他に軒平瓦、軒丸瓦や多数の鬼瓦が出土している。

SD320 (Fig.6・11, PL.16,17-2)　寺熊調査区

調査区南辺、SD102・316の合流部の下層に位置する。全容は明らかではないが、SD103などと一体の遺構になると考えられる。巾7.5m、深さ55cmを測る。溝内からは白磁碗・皿・壺、青磁碗・皿、陶器すり鉢、黄釉盤、褐釉壺、土師器坏・皿、瓦器玩具、土錘、竈、須恵器甕、滑石製小型石鍋などが出土している。

SD321 (Fig.6・11, PL.16,17-2)　寺熊調査区

調査区中央部、苑池SG122の西端部から南へ流れる南北溝である。溝内からは青磁碗、白磁碗・壺、土師器坏・皿・鍋、瓦器椀・鉢、滑石製石鍋などが出土している。

SD338 (Fig.6, PL.16,18-2,44-5)　寺熊調査区

調査区北辺中央に位置する溝である。溝内からは白磁碗、青磁碗、染付碗、天目椀、土師器椀・坏・皿、瓦器椀・火舎、銅製箸、滑石製石鍋などが出土している。

SD349 (Fig.6, PL.16,17-1)　寺熊調査区

調査区中央、SD316の西に位置する南北溝である。SD316より北で西に偏する。SD300より古い。土師器坏・皿・椀・台付皿・台付坏、白磁碗、青磁碗・壺・皿、染付碗、季朝の碗・壺、陶器鉢、備前焼甕、瓦器椀・火舎、滑石製石鍋・石鍋転用品、軒平瓦・軒丸瓦などが出土している。

SD482 (Fig.6, PL.16,17-1)　寺熊調査区

調査区西部中央、SE481から西へ続く東西溝である。溝内からは土師器皿、白磁碗、青磁皿などが出土している。

SD486 (Fig.6・11, PL.16,17-2)　寺熊調査区

調査区南辺中央部に位置し、2条の溝が合流する。SD102より古い。巾5.7m、深さ100cmを測る。溝内からは土師器坏・椀・皿・鍋、瓦器椀・皿、陶器鉢・すり鉢、白磁碗・皿、青磁碗・水注、滑石製石鍋、平瓦などが出土している。

SD710 (Fig.6, PL.16,18-2)　寺熊調査区

調査区東北部に位置する南北溝で、SD101と合流し区画する。溝内からは土師器坏・皿、白磁碗・皿、瓦器椀・鉢、箸、糸巻具、折敷などが出土している。

SD750 (Fig.6)　寺熊調査区

調査区北辺中央部に位置し、SD316の北端部から山裾に沿って東へ折れ曲がる南北溝である。溝内からは青磁碗、白磁碗、瓦器椀、土師器坏・皿などが出土している。

井　戸（SE）

生水・寺熊調査区では16基の井戸を検出した。井筒の形態別では、円形瓦・石積み井戸３基、方形隅柱板囲い井戸３基、方形横板囲い井戸２基、桶転用井戸４基、丸太刳り貫き井戸１基、素掘り井戸３基である。素掘り井戸３基は、明瞭な痕跡が残っていなかったが、掘形の形状などから大半は曲物や桶を転用した井筒を使用していた可能性が高い。

SE11（Fig.6･12，PL.15-2,45-1）　生水調査区

調査区南西部に位置する石積み井戸である。上部径1.5ｍ、底部径0.9ｍを測る円形の掘形の中央に、人頭程の大きさの割石を円形に積み上げて井筒とする。井筒の内径は0.7ｍを測り、深さ0.9ｍが残る。土師器坏・皿が出土している。

SE12（Fig.6･13，PL.15-2,45-2）　生水調査区

調査区南西部に位置する井戸である。井筒・井戸枠などは残存していないが、桶のタガが出土していることから、井筒は桶を重ねた可能性が高い。平面形が円形の掘形は上部径2.9ｍ、底部径1.6ｍを測り、底部中央が径0.7ｍと一段深い。掘立柱建物SB80より新しい。

SE50（Fig.6･14，PL.15-2,45-3～6）　生水調査区

調査区北西隅に位置し、桶を井筒とする井戸である。上部径2.7～3.2ｍ、底部径1.4ｍを測る円形の掘形の中央に、口径78cm、底径75cm、高さ99cmを測る底板を取り除いた桶を重ねて倒置させて井筒としている。白磁碗・皿、土師器坏が出土している。

SE98（Fig.6･15，PL.15-2,45-7･8）　生水調査区

調査区中央部に位置する井戸で、井筒・井戸枠などは残存していない。平面形が円形の掘形は上部径3.2ｍ、底部径2.0ｍを測り、底部中央が径0.9ｍと一段深い。土師器坏・小皿、鞍が出土している。

SE120（Fig.6･16，PL.16,18-2,46-1･2）　寺熊調査区

調査区東北隅に位置し、刳り貫いた丸太を井筒とした井戸である。垂直に掘られた直径1.6ｍを測る円形の掘形の中央に、直径１ｍの丸太を刳り貫いた井筒を据えている。井筒の裏込めに割石を多く使用している。SD103・SX132より新しい。土師器坏・皿・椀、青磁碗・壺、白磁皿、陶器鉢・盤・壺、瓦器椀・火舎、羽口、下駄、舟型、曲物底板、編錘が出土している。

SE123（Fig.6･17，PL.16,18-2,46-3･4）　寺熊調査区

調査区東部中央に位置し、桶を井筒とする井戸である。上部径１ｍ、底部径0.8ｍを測る円形の掘形の中央に、正置させた口径63cm、底径57cm、高さ60cmを測る底板を取り除いた桶を重ねて井筒としている。丸瓦・軒平瓦、土師器坏、陶器甕、瓦器椀、曲物底板、糸巻が出土している。

SE127（Fig.6･18，PL.16,18-2,46-5～7）　寺熊調査区

調査区東北部に位置し、方形隅柱横桟縦板を井筒とする井戸である。上部径1.5ｍ、底部径1.1ｍを測る円形の掘形の底に四本の隅柱を配し、隅柱間を横桟で連結し、周りを縦板で囲む。白磁碗、青磁碗・皿、土師器坏・皿、瓦器椀・鉢、軒丸瓦などが出土している。

SE157（Fig.6･19，PL.16,18-2）　寺熊調査区

調査区東北隅、SE120の東に接するように位置する井戸で、井筒･井戸枠などは残存していない。平面形が円形の掘形は径0.8ｍを測る。残存する深さは約１ｍを測る。土師器坏、瓦器鉢が出土している。

SE237（Fig.6，PL.16,17-1,46-8）　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する井戸で、井筒・井戸枠などは残存していない。平面形が隅丸方形の掘形

は方1.3ｍを測る。残存する深さは約1.8ｍを測る。掘形の底には円形に敷石が残る。土師器坏、陶器鉢が出土している。

SE302（Fig.6･20，PL.16,17-1,47-1）　寺熊調査区

調査区西部中央、溝SD300の南に位置する石積み井戸である。上部径1.6ｍ、底部径1.1ｍを測る円形の掘形の中央に、人頭程の大きさの割石を円形に積み上げて井筒とする。井筒の内径は0.6ｍを測り、深さ1.0ｍが残る。白磁碗、青磁碗、土師器鍋、石斧が出土している。

SE481（Fig.6･21，PL.16,17-1,47-2）　寺熊調査区

調査区西部中央、溝SD301の北に位置する円形瓦･石積み井戸である。上部径1.7～1.9ｍ、底部径0.8ｍを測る円形の掘形の中央に、底から50cmまでの下部は主に平瓦を円形に積み上げ、上部は人頭程の大きさの割石を円形に積み上げて井筒とする。使用している瓦には、軒丸瓦、丸瓦もある。井筒の内径は0.6ｍを測り、深さ1.4ｍが残る。土師器高台付坏・坏・皿、箸、曲物底板、軒平瓦・軒丸瓦が出土している。

SE711（Fig.6･22，PL.16,17-1,47-3）　寺熊調査区

調査区西部中央に位置する井戸である。変則的な方形隅柱横桟縦板を井筒とする井戸である。上部径1.0ｍ、底部径0.5ｍを測る円形の掘形の底に四本の丸太隅柱を配し、南面は石積み、他の三面は横板を重ねた後にその外側に縦板を配している。土師器坏・鍋・鉢、白磁碗、青磁碗、陶器鉢が出土している。

SE718（Fig.6･23，PL.16,18-1,47-4）　寺熊調査区

調査区中央部、SD433の西に位置し、桶を井筒とした井戸である。上部径1.8ｍ、底部径1.2ｍを測る円形の掘形の中央に、口径78cm、底径75cm、高さ108cmを測る底板を取り除いた桶を重ねて倒置させて井筒としている。土師器坏・皿、白磁碗・皿、青磁碗、陶器甕、瓦器鉢、下駄、箸、曲物が出土している。

SE724（Fig.6･24，PL.16,18-1,48-1･2）　寺熊調査区

調査区北辺中央部、SE752･753の東に位置する方形隅柱横桟縦板を井筒とする井戸である。上部径0.9ｍ、底部径0.6ｍを測る円形の掘形の底に四本の隅柱を配し、隅柱間を横桟で連結し、周りを縦板で囲む。土師器坏・皿、白磁碗・合子、青磁碗、陶器鉢・甕・壺、瓦器椀・火舎、軒平瓦・軒丸瓦が出土している。

SE752（Fig.6･25，PL.48-3･4）　寺熊調査区

調査区北辺中央部、丘陵裾部に位置する方形隅柱横板を井筒とする井戸である。平面形が隅丸方形の掘形は方2.6ｍを測る。SE753より新しい。土師器坏・皿、青磁碗・皿、白磁碗、陶器鉢が出土している。

SE753（Fig.6･25，PL.48-3･5）　寺熊調査区

調査区北辺中央部、丘陵裾部に位置する方形隅柱横板を井筒とする井戸であるが、大半はSE752により壊されている。平面形が方形の掘形は方1.5ｍを測る。

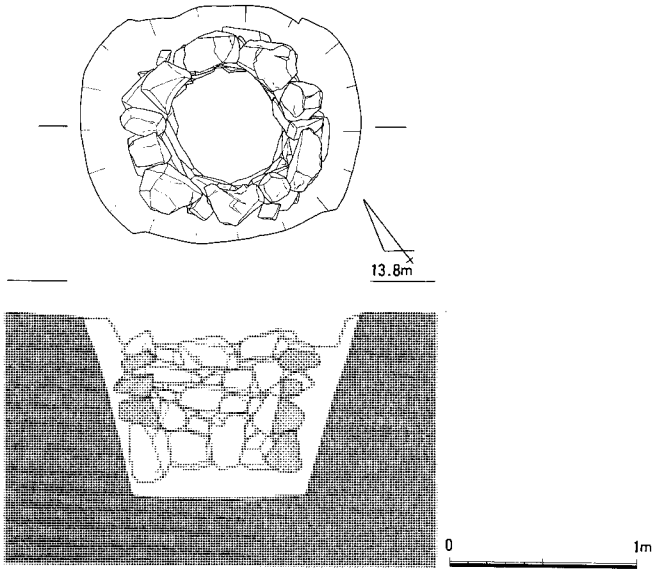


Fig.12　井戸SE11実測図(1/40)

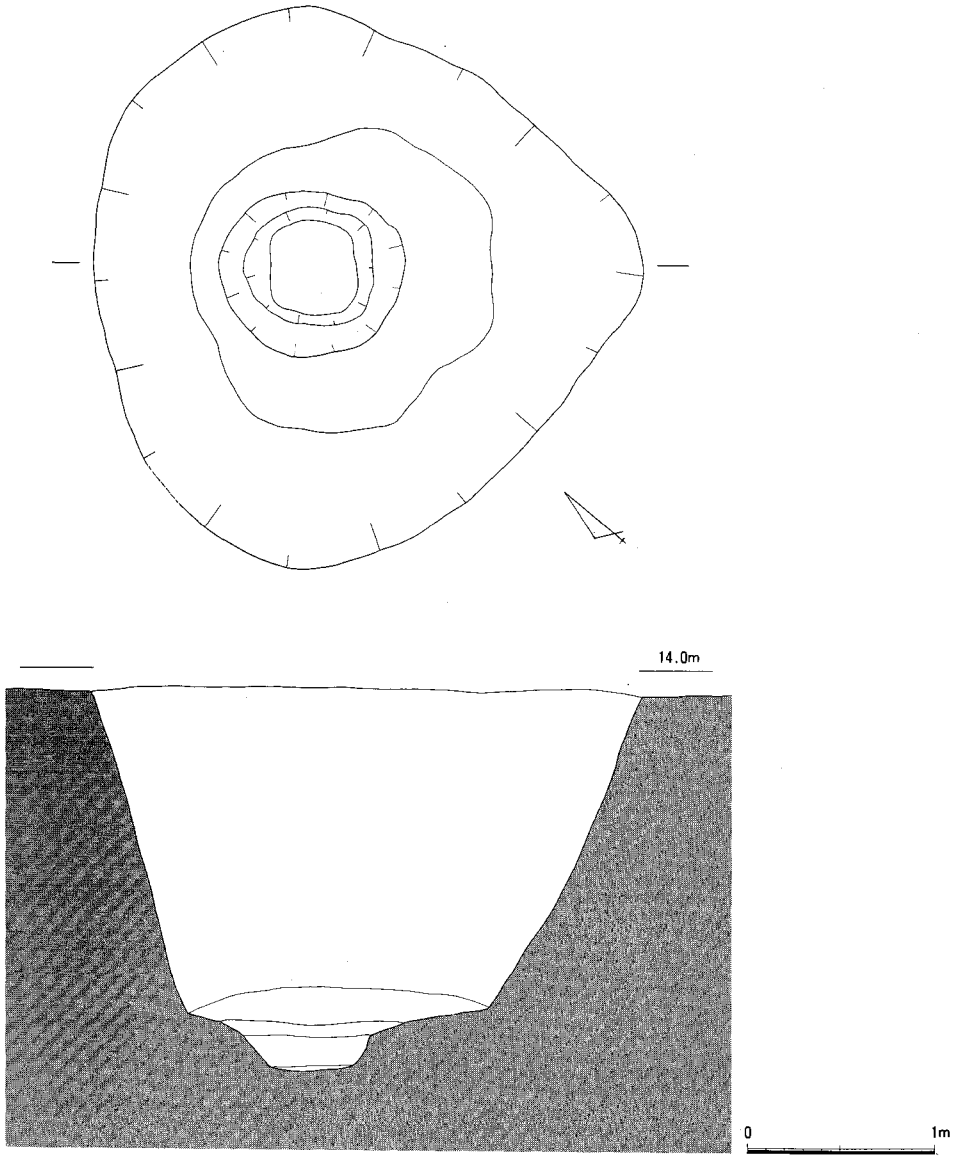


Fig.13　井戸SE12実測図(1/40)

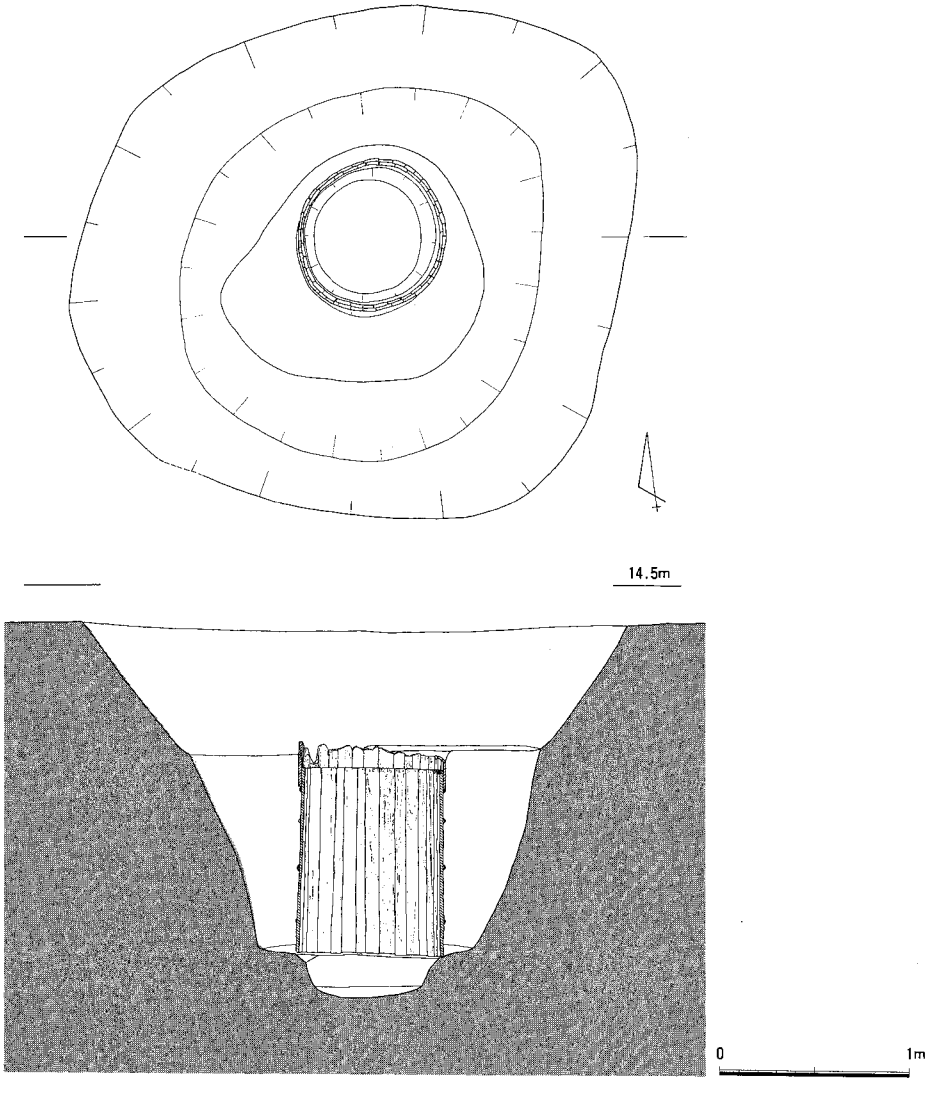


Fig.14　井戸SE50実測図(1/40)

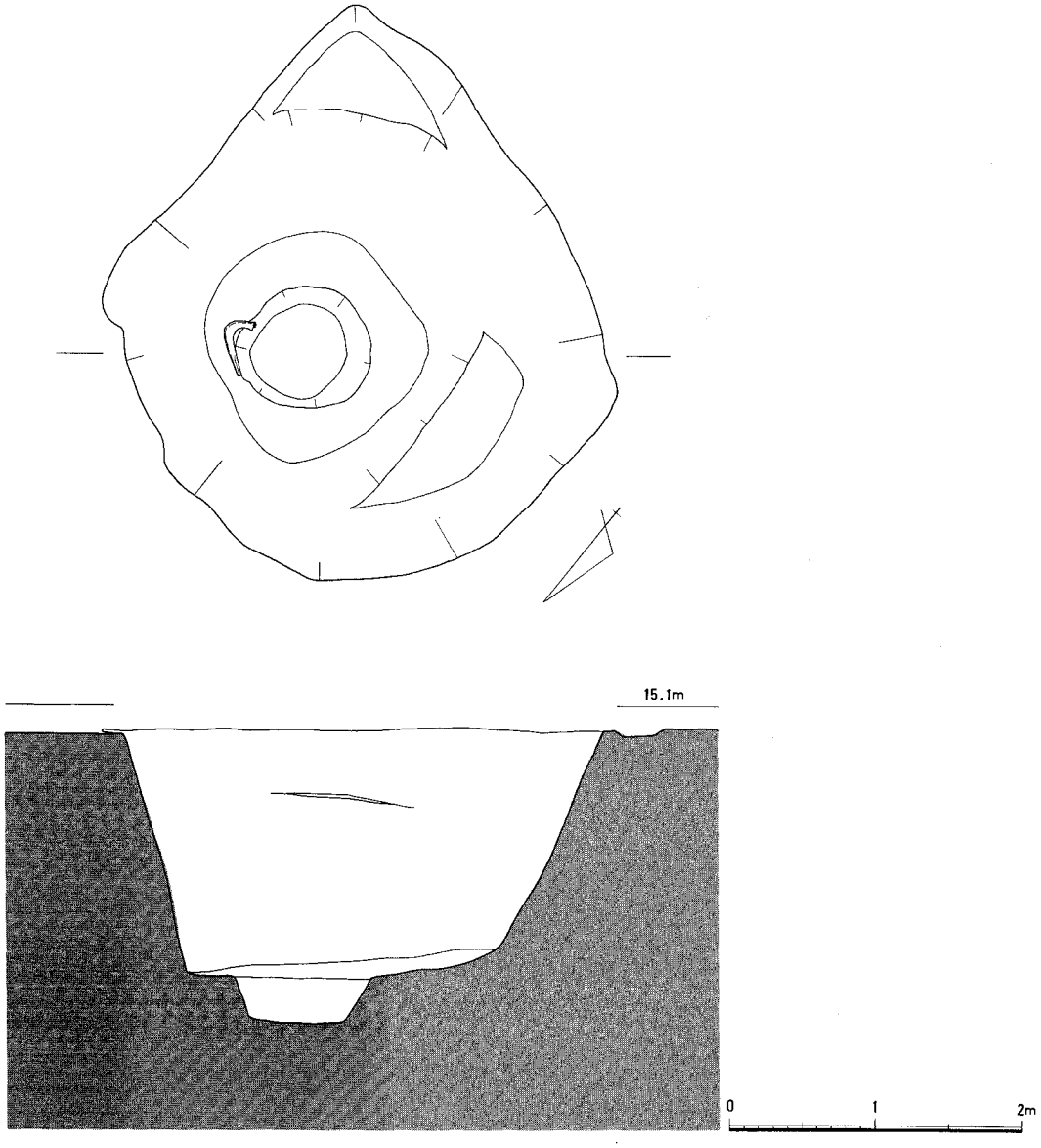


Fig.15　井戸SE98実測図(1/50)

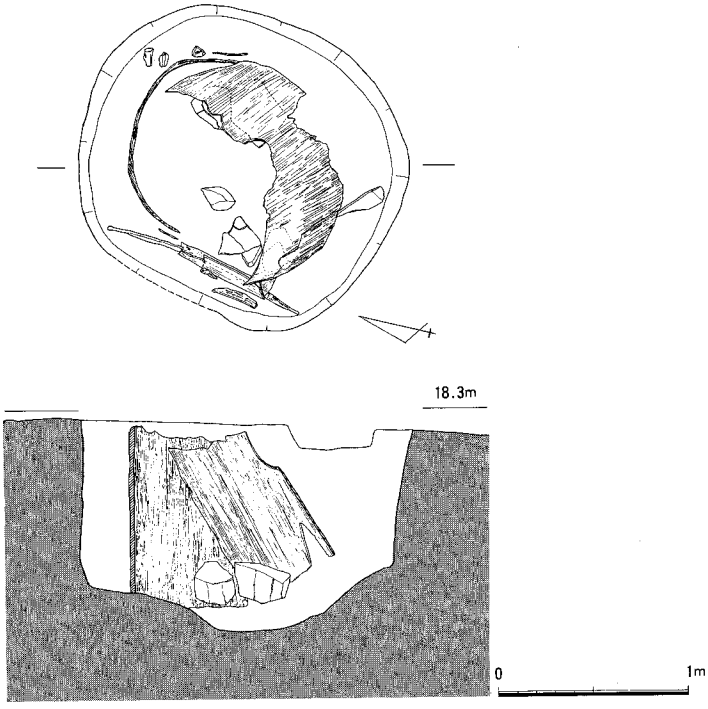


Fig.16　井戸SE120実測図(1/40)

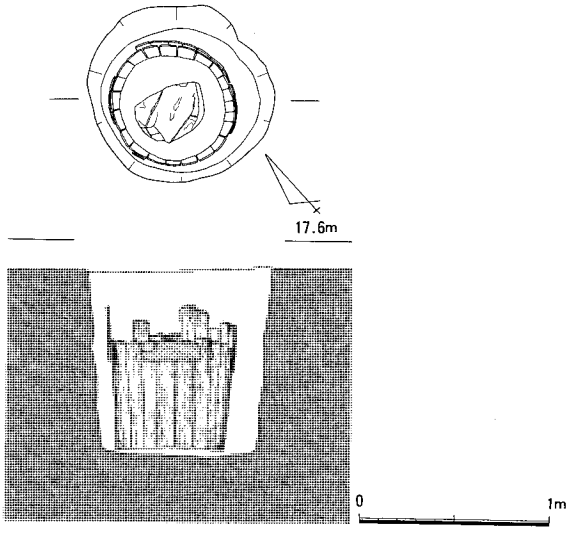


Fig.17　井戸SE123実測図(1/40)

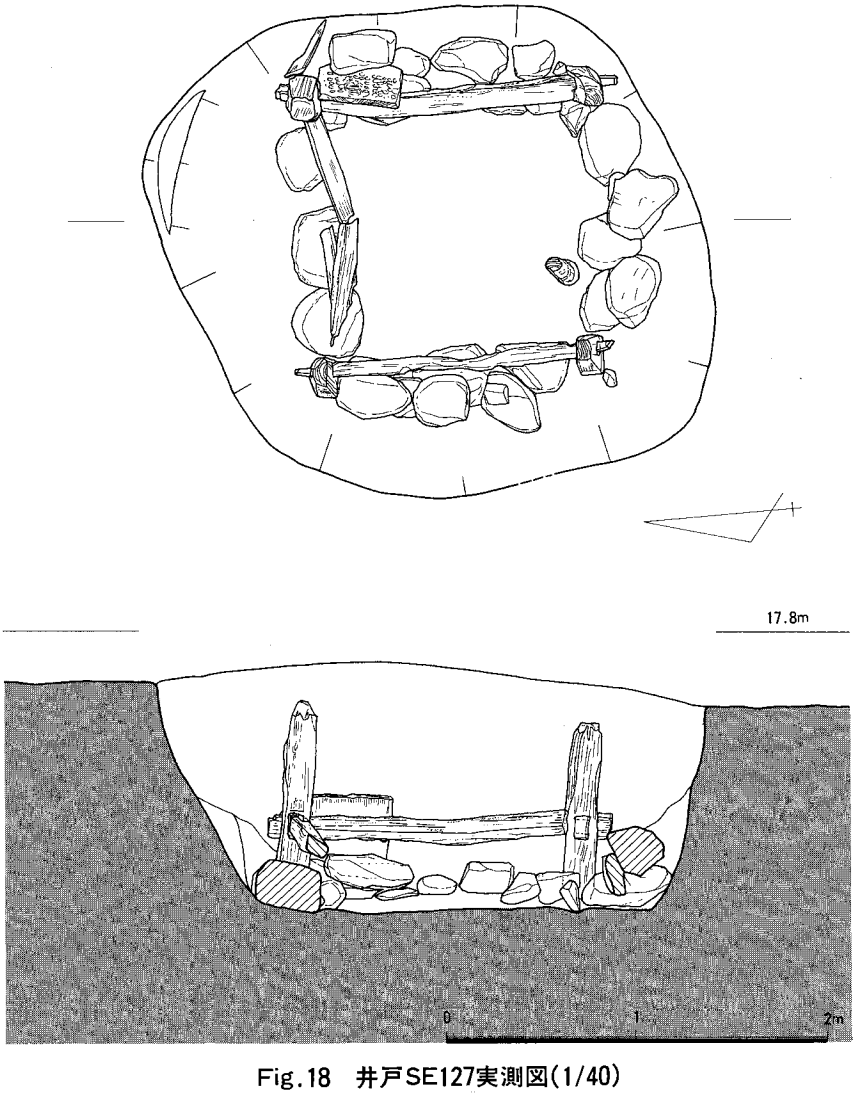


Fig.18　井戸SE127実測図(1/40)

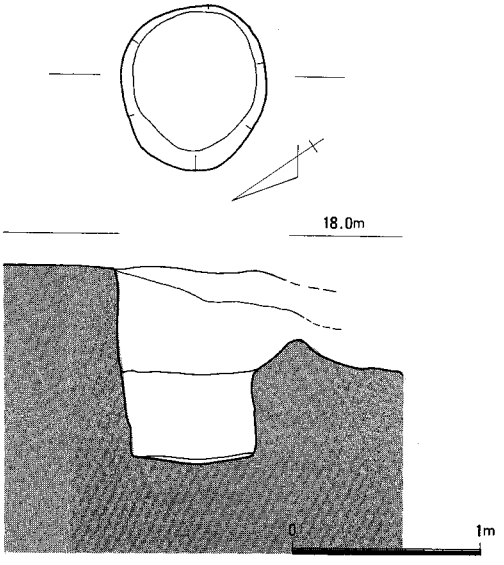


Fig.19　井戸SE157実測図(1/40)

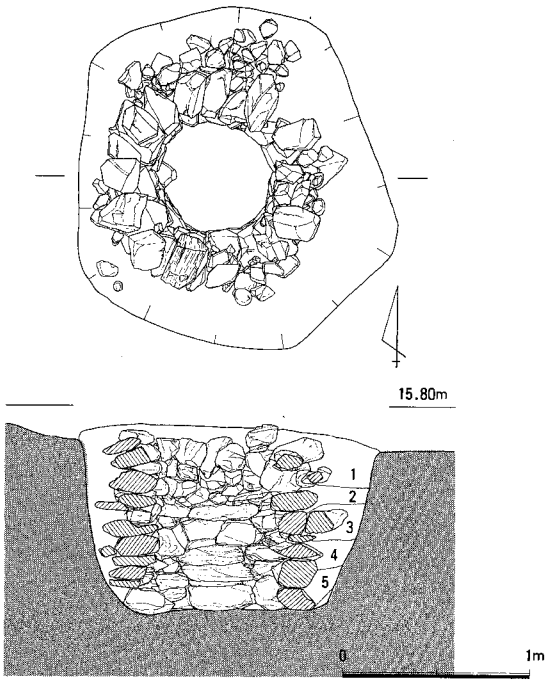


Fig.20　井戸SE302実測図(1/40)

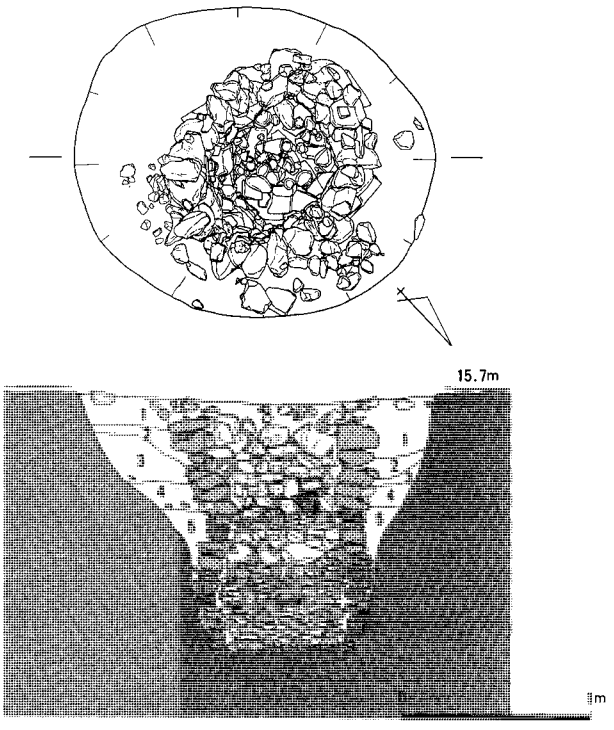


Fig.21　井戸SE481実測図(1/40)

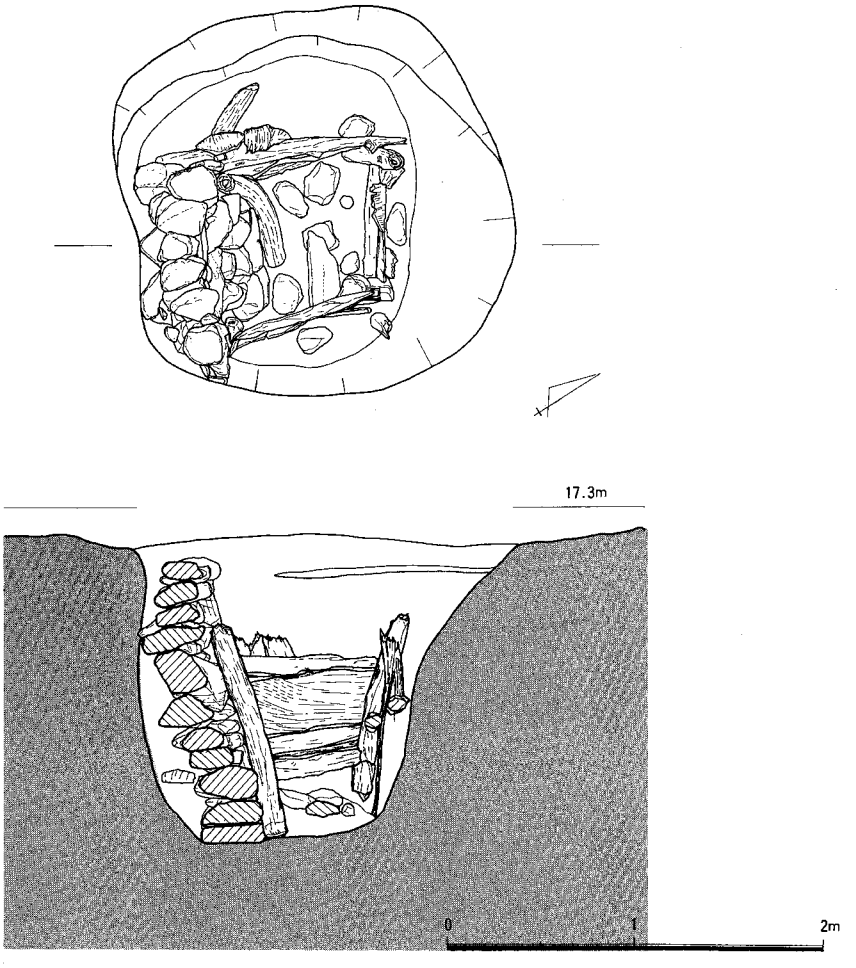


Fig.22　井戸SE711実測図(1/40)

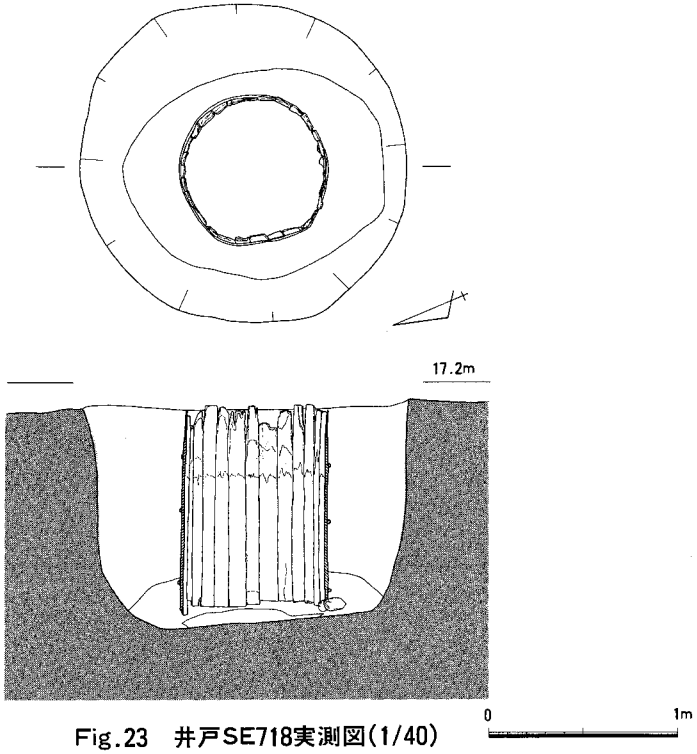


Fig.23　井戸SE718実測図(1/40)

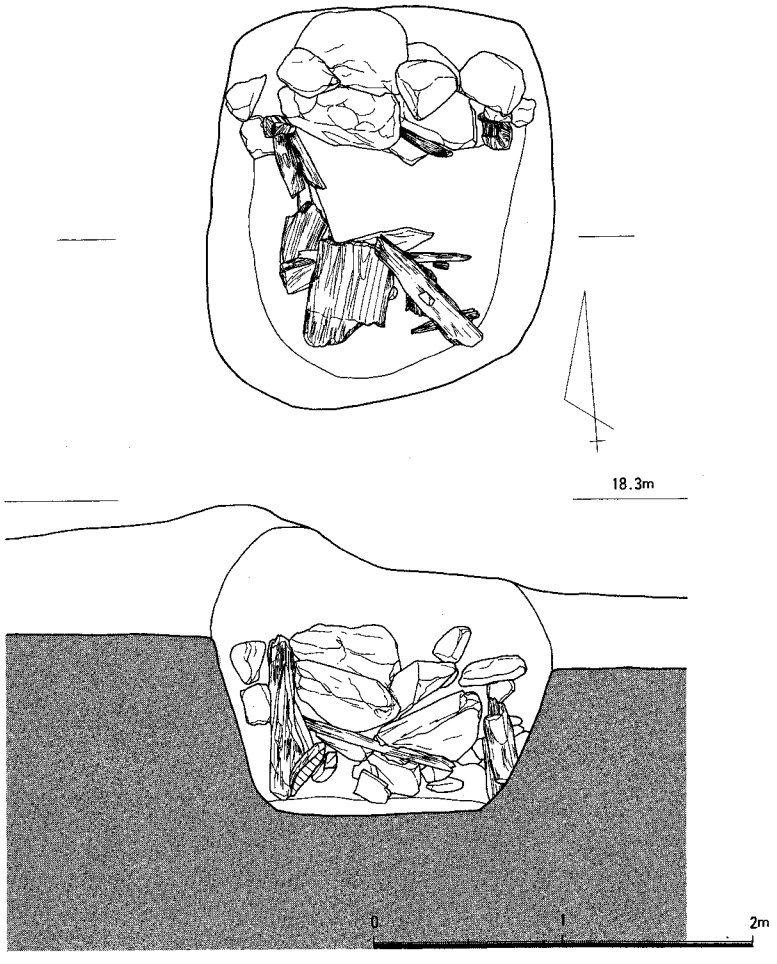


Fig.24　井戸SE724実測図(1/40)

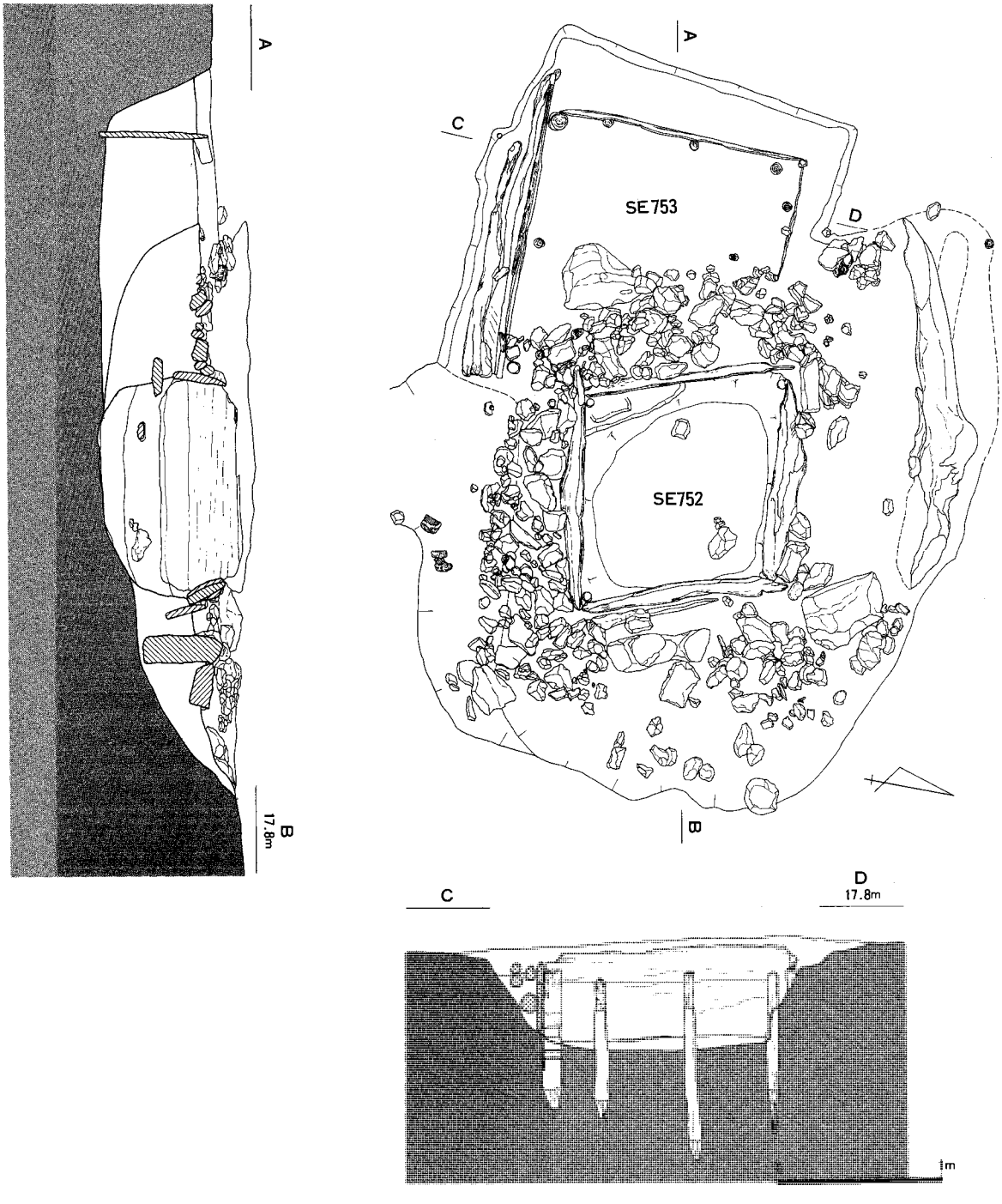


Fig.25　井戸SE752・753実測図(1/40)

苑　池（SG）

苑池は二地点で確認された。ひとつは箱堀状の方形の池であり、他方は舞台を囲むように設けられた池である。

SG122（Fig.6，PL.16,18-1･2,55-1～4）　寺熊調査区

調査区東半部中央、SD101の南に位置する。北側に開口する「コ」字状の平面形を呈し、東西方向の池はさらに西へ伸びる。東西池の両端にはSD104･321の南北溝が合流する。池の規模は、「コ」字状部分では巾3.5～5.5m、深さ0.4～0.7mを測る。池の西側部分では巾2.5～3.0m、深さ0.4mを測る。池の斜面、特に東部分においては握り拳大から人頭大の石が残っており、本来は斜面全面に石が配されていたことを示している。池で「コ」字状に囲まれた地点には掘立柱建物ＳＢ490があり、北側には大型の掘立柱建物ＳＢ491などがある。これらの配置状況から、建物と池は一連の施設である可能性が高い。

遺物は、土師器坏・皿・鉢、白磁碗、青磁碗、染付碗、瓦器椀・火舎、陶器すり鉢、瀬戸焼碗、常滑焼甕、軒平瓦、軒丸瓦、平瓦・塼、土錘、茶臼、應永28年(1421)銘が刻まれた砂岩切石の板碑などが出土している。

SG488（Fig.6･26，PL.56-3～5）　寺熊調査区

調査区中央、SD316の東に位置する苑池である。長軸は東西方向で、ほぼ方形の平面形を呈し、東西7.02m、南北6.18m、深さ0.48mを測る。底面は緩やかに弧を描き壁が立ち上がり、壁の斜面には人頭大ほどの板石が縦に貼付たようにある。大半は残存せず、南西隅を中心として北へ2.2mまでと東へ5.5mまでの範囲、および北東隅の一部に残る。また、池の中心より東部よりの地点において一抱えほどの石があることから、周囲に板石を配するだけではなく、池の中にも石を立てたりなどの工夫がこらされた可能性が高い。

遺物は土師器坏・皿・台付皿・台付坏、瓦器椀・火舎、白磁碗・皿・合子、青磁碗・皿・壺、陶器甕・鉢、軒平瓦、平瓦、滑石製の石鍋・大石鍋・有孔板状品、玉石などの多種多様な遺物が出土している。特に、土師器の坏は多くが完形の状態で池の底面より上位から出土していることから、この池が単に廃棄地であったとは考えられない。

土壙・土壙墓　（SK）

調査では81基の土壙・土壙墓を検出した。多くが土壙墓で、形状的には隅丸長方形の土壙墓が大半を占め、桶棺を用いた例は少ない。また、調査段階で礎石建物の根固石の残る礎石据付穴を土壙としたものもある。

SK99（Fig.6･27，PL.15-1･2,49-1･2）　生水調査区

調査区西北隅に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺132cm、短辺89cm、深さ28cm、墓壙底で長辺104cm、短辺60cmを測る。形状から土壙墓の可能性が高い。

SK109（Fig.6，PL.16,18-2,50-1･2）　寺熊調査区

調査区南東隅、土壙墓SK125・126の北に位置し、SK125・126と長軸方向が直交する土壙墓である。墓壙は、隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺141cm、短辺80cm、深さ47cm、墓壙底で長辺72cm、短辺53cmを測る。土師器坏が出土している。

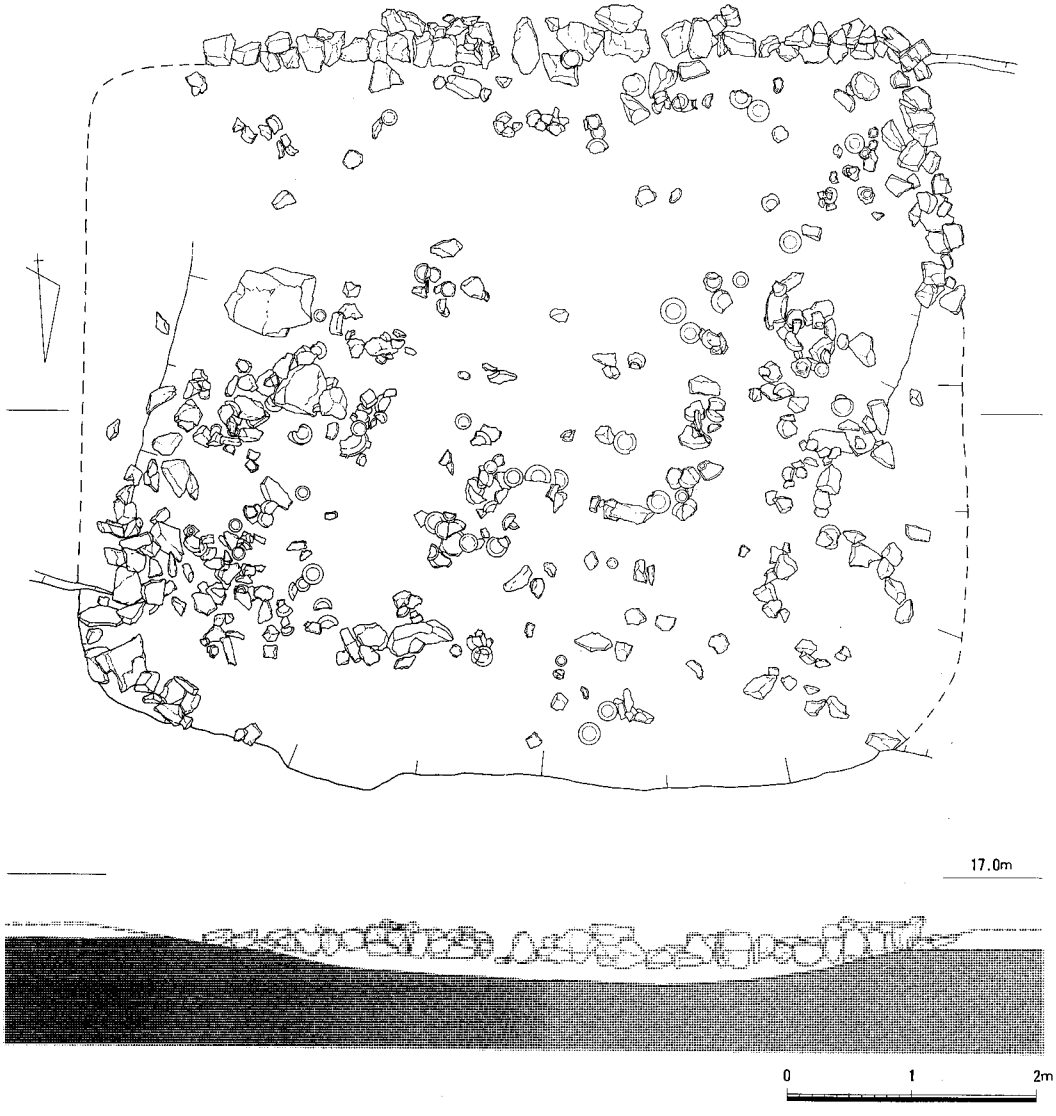


Fig.26　苑池SG488実測図(1/60)

SK125（Fig.6・27, PL.16,18-2,50-1・3）　寺熊調査区

調査区南東隅、土壙墓SK126の東に位置し、SK126の長軸方向と同じくする。埋葬棺は認められないが土壙墓である。墓壙は、隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺172cm、短辺80cm、深さ36cm、墓壙底で長辺146cm、短辺58cmを測る。土師器坏が出土している。

SK126（Fig.6・28, PL.16,18-2,50-1,51-1～4）　寺熊調査区

調査区南東隅に位置し、土壙墓SK109・125と接する土壙墓である。墓壙は、隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺247cm、短辺118cm、深さ64cm、墓壙底で長辺220cm、短辺101cmを測る。長軸方向は北西である。埋葬棺は箱型の木棺で、厚さ２～３cmの板を、底板の側面に側板、小口面に小口板がくるように板を組み合わせて釘留めしている。棺の内法は長辺188cm、短辺63cmを測り、残存する高さは35cmである。棺底板全面は黒色化し、厚さ１～２cmの木灰の堆積状況が認められる。その範囲は棺内に限られていることから、木棺内に木灰を敷くか充填して埋葬者を安置したものと考えられる。棺内の北西側の小口近くには短刀、刀子を小口に平行に揃えて副葬している。他の副葬品の土師器坏３枚・皿９枚、龍泉窯系青磁小碗、磁灶窯緑釉水注は北西側の小口近くの棺外から出土している。

SK219（Fig.6, PL.16,17-1,49-3・4）　寺熊調査区

調査区西南部隅、溝SD216の東に位置する土壙墓である。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺201cm、短辺122cm、深さ53cm、墓壙底で長辺146cm、短辺81cmを測る。墓壙底の西半部においては薦の織筋目を短軸と同じくして敷いている。薦の下から土師器坏・皿が出土している。

SK223（Fig.6, PL.16,17-1,49-5）　寺熊調査区

調査区西南部隅、溝SD216の北に位置する。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺150cm、短辺112cm、深さ96cm、墓壙底で長辺106cm、短辺82cmを測る。

SK228（Fig.6, PL.16,17-1,49-6）　寺熊調査区

調査区西北部、溝SD51の東に位置する。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺241cm、短辺171cm、深さ109cm、墓壙底で長辺165cm、短辺98cmを測る。

SK254（Fig.6, PL.15-1・2,49-7）　生水調査区

調査区北辺部中央に位置し、溝SD51の廃絶後に設けられている。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺275cm、短辺160cm、深さ55cm、壙底で長辺215cm、短辺118cmを測る。形状から便所の可能性が考えられたが、分析結果に否定された。陶器すり鉢、青磁碗が出土している。

SK303（Fig.6, PL.16,17-1,53-1）　寺熊調査区

調査区南西部、SK304の東に位置する。長軸は東西方向である。楕円形の平面形を呈し、上面で長径147cm、短径80cm、深さ30cm、壙底で長径83cm、短径58cmを測る。土師器坏・鍋が出土している。SK459より新しい。

SK304（Fig.6, PL.16,17-1,53-2）　寺熊調査区

調査区南西部、溝SD300の西に位置する。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺130cm、短辺88cm、深さ25cm、壙底で長辺81cm、短辺68cmを測る。土師器坏・鍋が出土している。

SK306（Fig.6, PL.16,17-1,53-3）　寺熊調査区

調査区南西部、SD301の西に位置する。未調査区外に広がり全容は不明。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺170cm、短辺130cm以上、深さ81cm、壙底で長辺122cm、短辺85cm以上を測る。上層から土師器坏・皿・鍋、青磁碗が、下層から土師器坏・皿、白磁碗が出土している。

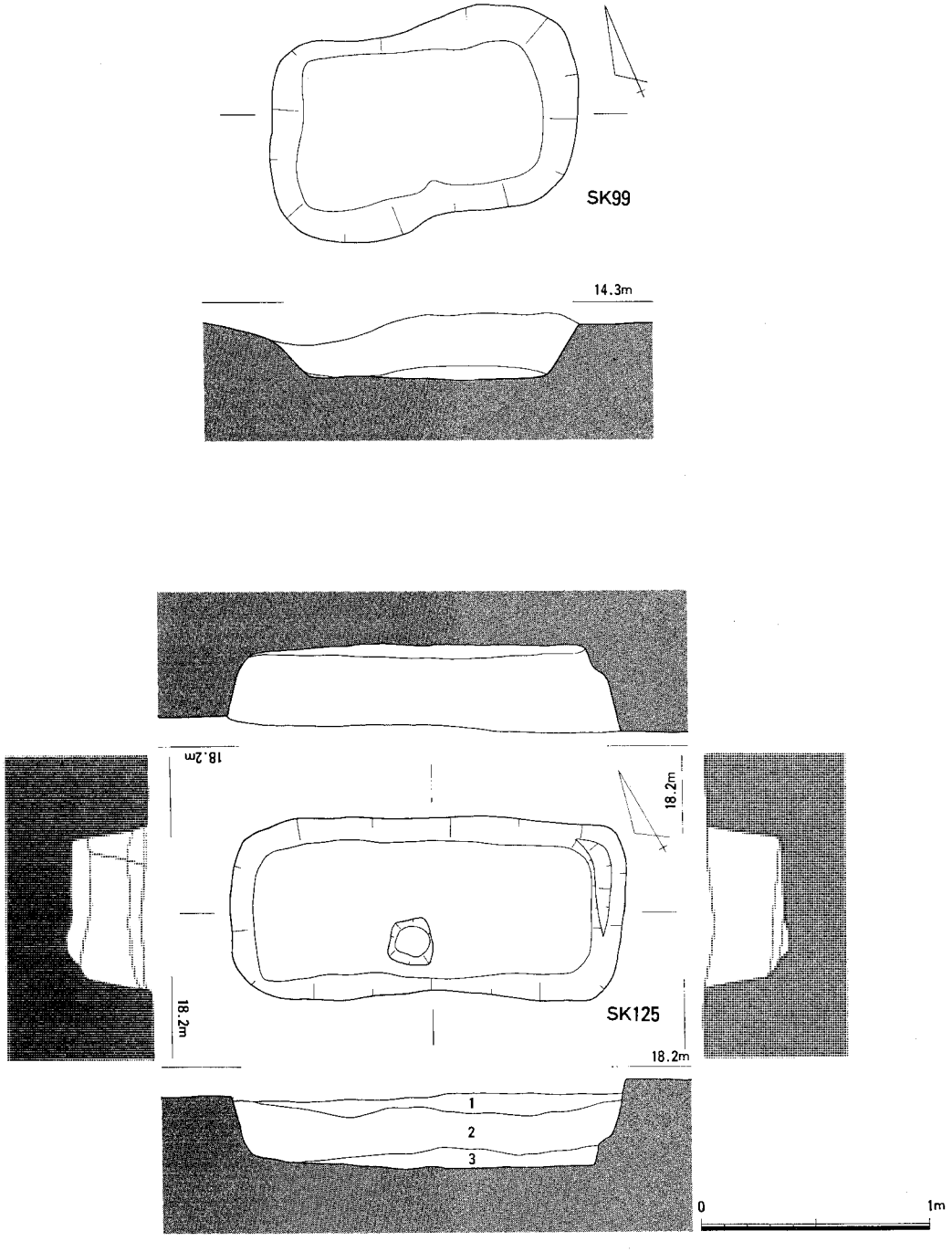
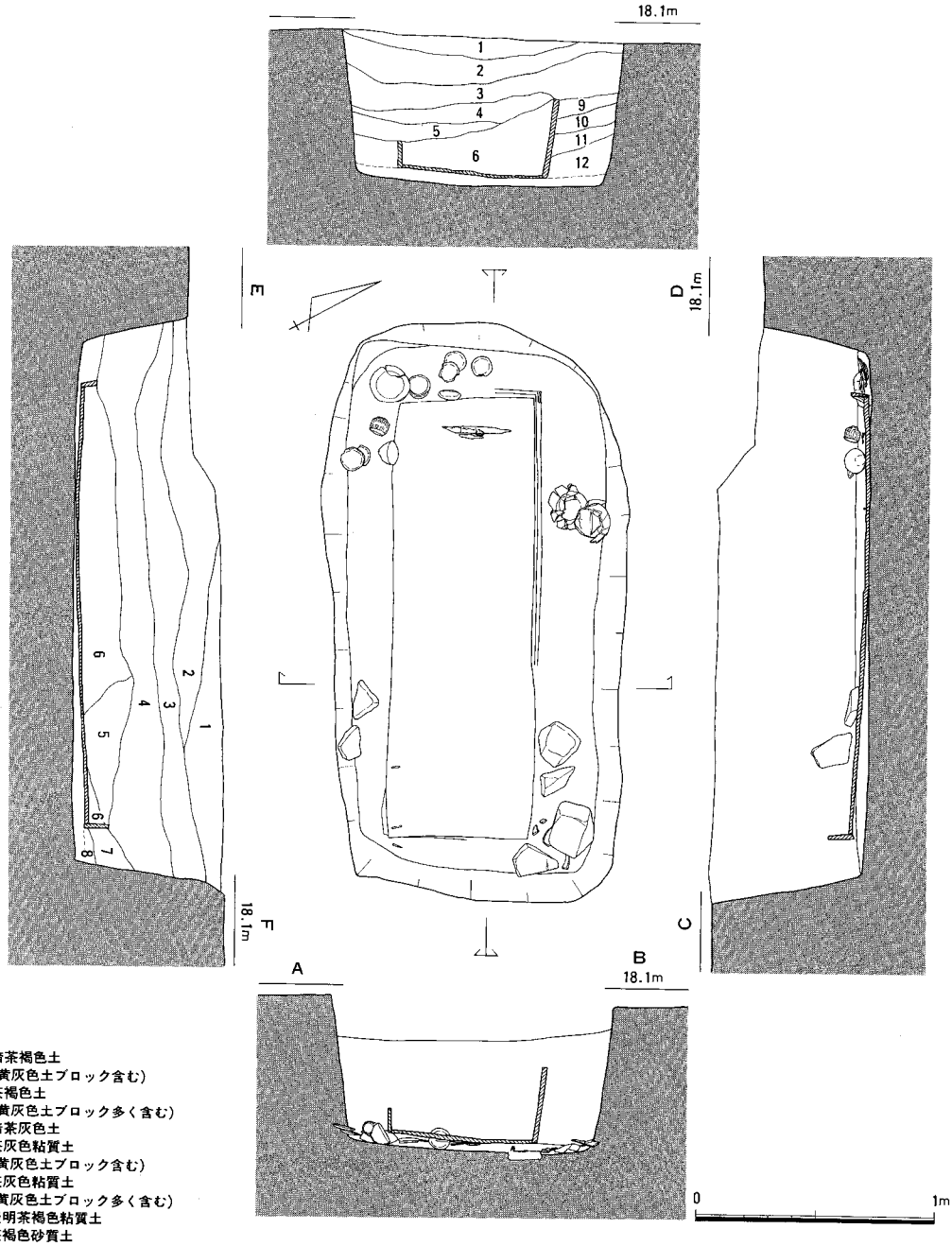


Fig.27　土壙SK99・125実測図(1/30)



1. 暗茶褐色土
   (黄灰色土ブロック含む)
2. 茶褐色土
   (黄灰色土ブロック多く含む)
3. 暗茶灰色土
4. 茶灰色粘質土
   (黄灰色土ブロック含む)
5. 茶灰色粘質土
   (黄灰色土ブロック多く含む)
6. 淡明茶褐色粘質土
7. 茶褐色砂質土
8. 淡黄灰色土
9. 明茶灰色粘質土
10. 明茶灰色粘質土
    (黄灰色土ブロック含む)
11. No.10と同じ
12. 暗茶灰褐色粘質土

Fig.28　土壙墓SK126実測図(1/30)

SK335（Fig.6, PL.16,17-2,52-1）　寺熊調査区

調査区南西部、SD316の東に位置する。円形の平面形を呈し、上面で長径68cm、短径62cm、深さ26cm、壙底で径40cmを測る。完形の土師器坏・皿59枚が集積した状態で出土している。

SK336（Fig.6, PL.16,17-2,52-2）　寺熊調査区

調査区南西部、SD316の東に位置する。楕円形の平面形を呈し、上面で長径78cm、短径68cm、深さ25cm、壙底で径35cmを測る。完形の土師器坏・皿が集積した状態で出土している。

SK398（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央部、SD321の東に位置する。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺135cm、短辺103cm、深さ13cm、壙底で長辺109cm、短辺82cmを測る。土師器坏・皿・鍋、染付碗、白磁碗が出土している。

SK401（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央部、SG122の南に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺116cm、短辺55cm、深さ20cm、壙底で長辺98cm、短辺37cmを測る。

SK403（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央部、SG122の南に位置する。長軸は南北方向である。長方形の平面形を呈し、上面で長辺218cm、短辺101cm、深さ20cm、壙底で長辺193cm、短辺89cmを測る。土師器坏が出土している。

SK418（Fig.6, PL.16,17-2,53-4）　寺熊調査区

調査区中央部、溝SD318の東に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺128cm、短辺82cm、深さ80cm、墓壙底で長辺98cm、短辺70cmを測る。土師器坏・皿・椀、陶器鉢、瓦器椀、青磁皿、白磁碗・皿、丸・平瓦が出土している。SK419より新しい。

SK419（Fig.6, PL.16,17-2,53-5）　寺熊調査区

調査区中央部、溝SD318の東に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺119cm、短辺81cm、深さ25cm、墓壙底で長辺108cm、短辺62cmを測る。土師器坏・皿、白磁碗、丸瓦が出土している。

SK420（Fig.6, PL.16,17-2,53-6）　寺熊調査区

調査区中央部、SK419の北に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径85cm、深さ79cm、墓壙底で径65cmを測る。土師器坏・皿、瓦器椀、青磁皿、白磁碗が出土している。

SK421（Fig.6, PL.16,17-2,53-7）　寺熊調査区

調査区中央部、溝SD318の東に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺102cm、短辺58cm、深さ16cm、壙底で長辺98cm、短辺50cmを測る。壁面は焼け締まり、底面中央には炭化物が認められる。土師器坏・皿、陶器甕、瓦器火舎、白磁碗、焼壁土が出土している。

SK422（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央北辺部、溝SD318北端部の西に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺208cm、短辺121cm、深さ47cm、壙底で長辺191cm、短辺106cmを測る。土師器坏・皿、青磁壺、白磁碗、丸瓦が出土している。

SK426（Fig.6, PL.16,18-1）　寺熊調査区

調査区中央北辺部、溝SD318の東に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺181cm、短辺145cm、深さ20cm、壙底で長辺153cm、短辺118cmを測る。土師器坏・皿、白磁碗が出土している。

SK432（Fig.6, PL.16,18-1）　寺熊調査区

調査区中央北辺部、溝SD433の西に位置する。長軸は南北方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺165cm、短辺138cm、深さ20cm、壙底で長辺128cm、短辺113cmを測る。土師器坏・皿、青磁碗、瓦器椀・鉢が出土している。

SK434（Fig.6, PL.16,18-1）　寺熊調査区

調査区中央北辺部、溝SD710の西に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径162cm、深さ25cm、壙底で径138cmを測る。土師器坏・皿・椀、陶器甕、青磁碗が出土している。

SK449（Fig.6, PL.16,17-1,53-8）　寺熊調査区

調査区南西部、溝SD300の西に位置する。長軸は東西方向である。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺181cm、短辺138cm、深さ12cm、壙底で長辺165cm、短辺124cmを測る。土師器坏・皿、青磁碗が出土している。

SK459（Fig.6, PL.16,17-1,53-1）　寺熊調査区

調査区南西部、SK304の東に位置する。長軸は東西方向である。楕円形の平面形を呈し、上面で長径142cm、短径100cm、深さ19cm、壙底で長径130cm、短径82cmを測る。SK303より古い。

SK489（Fig.6, PL.16,17-2,52-3）　寺熊調査区

調査区南西部、SD316の東に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径60cm、壙底で径46cmを測る。完形の土師器坏・皿が集積した状態で出土している。

SK712（Fig.6, PL.16,17-2,54-1）　寺熊調査区

調査区中央部に位置し、壙内には握り拳大の石が充填している。形状からも壙内の握り拳大の石は礎石建物の礎石根固石の可能性が極めて高いことから、調査では土壙としているが、礎石据付け穴の可能性が高い。SK713・714も同様な性格の遺構である。このため、北側に位置する石列は礎石建物の雨落ち溝もしくは基壇と考えられる。

SK713（Fig.6, PL.16,17-2,54-2）　寺熊調査区

調査区中央部に位置し、壙内には握り拳大の石が充填している。形状からも壙内の握り拳大の石は礎石建物の礎石根固石の可能性が極めて高いことから、調査では土壙としているが、礎石据付け穴の可能性が高い。

SK714（Fig.6, PL.16,17-2,54-3）　寺熊調査区

調査区中央部に位置し、壙内には握り拳大の石が充填している。形状からも壙内の握り拳大の石は礎石建物の礎石根固石の可能性が極めて高いことから、調査では土壙としているが、礎石据付け穴の可能性が高い。

SK725（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央部に位置し、壙内には握り拳大の石が充填している。形状からも壙内の握り拳大の石は礎石建物の礎石根固石の可能性が極めて高いことから、調査では土壙としているが、礎石据付け穴の可能性が高い。鬼瓦が出土している。

SK738（Fig.6, PL.16,17-2）　寺熊調査区

調査区中央部に位置する土壙墓である。楕円形の平面形を呈し、長軸は南北方向である。上面で長径105cm、短径75cm、深さ25cm、墓壙底で径62cmを測る。墓壙底には棺桶の底板と思われる板が残る。長方形に石を配した石列を壊して設けている。土師器坏・皿、瓦器椀、白磁碗、宋銭が出土している。

溜（SX）

溜、すなわち凹み状遺構をSXとした。調査では土壙状遺構も一部含まれる。

SX124（Fig.6, PL.16,18-1･2,56-2）　寺熊調査区

調査区東半部中央、SG122の北に位置する。不整形な三角形の平面形を呈し、東西5.7m×南北5.1mを測る。土師器坏･皿･鍋、白磁碗･皿、青磁碗、陶器甕、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦が出土している。

SX129（Fig.6, PL.16,18-1,55-5）　寺熊調査区

調査区東北隅部、SD101の北に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈する。土師器坏･椀･皿･台付皿、瓦器椀・火舎、白磁碗・小碗、陶器鉢、軒平瓦、軒丸瓦、玉石が出土している。

SX132（Fig.6, PL.16,18-2,41-8）　寺熊調査区

調査区東北隅に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈する。土師器坏・皿、瓦器椀、白磁碗、青磁碗が出土している。

SX134（Fig.6, PL.16,18-2,55-6）　寺熊調査区

調査区東北隅部、SD101の北に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、東西2.3m×南北4.1m、深さ17cmを測る。土師器坏・皿・椀、瓦器椀、陶器すり鉢・甕、丸瓦、平瓦が出土している。

SX135（Fig.6, PL.16,18-2,55-7）　寺熊調査区

調査区東北隅部、SD101の北に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、東西2.1m×南北4.7m、深さ10cmを測る。土師器坏・皿・椀、白磁皿、瓦器椀が出土している。

SX136（Fig.6, PL.16,18-2,55-7）　寺熊調査区

調査区東北隅部、SD101の北に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈する。土師器坏･椀･皿、瓦器椀、白磁碗、青磁碗・皿、陶器鉢・黄釉盤が出土している。

SX140（Fig.6, PL.16,18-2）　寺熊調査区

調査区東辺部中央、SD101と重なるように位置する。不整形な楕円形の平面形を呈し、東西1.7m×南北4.4m、深さ24cmを測る。土師器皿、瓦器椀、白磁碗、青磁碗が出土している。

SX313（Fig.6, PL.16,17-1）　寺熊調査区

調査区西半部中央、SD349の西に位置する。楕円形の平面形を呈し、東西1.4m×南北1.2mを測る。

SX314（Fig.6, PL.16,17-1）　寺熊調査区

調査区西半部北辺、SD349の西に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、東西2.0m×南北1.0m、深さ26cmを測る。

SX392（Fig.6, PL.16,18-1,56-1）　寺熊調査区

調査区南辺中央、SD102の北に位置する。不整形な方形の平面形を呈する。土師器坏･皿･鍋、瓦器椀・鉢、陶器甕、青磁碗・壺、白磁碗が出土している。

SX717（Fig.6, PL.16,18-1）　寺熊調査区

調査区東半部中央、SD433の下位に位置する凹地である。不整形な楕円形の平面形を呈し、東西4.5m×南北6.5mを測る。木簡が出土している。

3）遺　物

寺熊調査区では、縄文時代から江戸時代に至る遺物がコンテナで1523箱出土している。内容は縄文時代早期の石器、古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器、瓦、平安時代の土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、木簡、木製品、中世の土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、磚、木簡、木製品、滑石製品、石製品などである。これらの多くは黒色土をはじめとする包含層からの出土によるが、溝・堀、土壙、苑池、溜りなどからも良好な状態で多くの遺物が出土している。

A．土師器・須恵器・陶器・磁器

土器・陶磁器類の出土は膨大なもので、すべてを紹介することができない。また、それぞれの特徴について詳しく説明するスペースもないので、輸入陶磁器については以下の文献の分類を示したにとどまる。

森本朝子　1984「博多出土貿易陶磁器分類表」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅳ－博多－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊　福岡市教育委員会

森田　勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

小野正敏　1982「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

SB81（Fig.29，PL.134）　　生水調査区

24は柱穴SP602より出土した青磁の器台の受部もしくは香炉である。底部と口縁の屈曲部より外側にスカート状の張り出しを巡らせ、如意頭文のスタンプを施す。下端は如意頭文にあわせて連続三角に刻む。類例を知らないが、如意頭文のモチーフより高麗青磁かと思われる。

SD07（Fig.30，PL.121）　　生水調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、鞴の羽口などが出土している。1は白磁碗の底部で、全面に施釉されている。内面にスタンプで月・梅・海をあらわす。周囲を打ち欠いて形を整えている。3は底部糸切りの土師器坏である。口径13.0cm、器高2.7cm。

SD08（Fig.30，PL.121）　　生水調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿・鉢、瓦器椀、陶器鉢などが出土している。5は森田D群の白磁高台付皿。7は土師器の坏。底部は磨滅でよくわからないが糸切りであろう。口径12.0cm、器高2.5cm。4は白磁碗Ⅳ－2類。6は備前焼擂鉢。Ⅳ期の製品。

SD09（Fig.30）　　生水調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、陶器鉢などが出土している。9は土師器の皿で、底部糸切り。口径7.7cm、器高1.2cm。8は備前焼擂鉢。

SD10（Fig.30）　　生水調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿・鍋、陶器鉢が出土している。上～中層出土遺物は19が底部糸切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.6cm。17は底部糸切りの土師器坏。口径12.1cm、器高2.9cm。12は陶器の甕。内面はタタキののちナデ。11は備前焼擂鉢。10は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類。下層出土遺物は20・18が底部糸切りの土師器皿。口径は7.4、8.4cm、器高は1.7、1.4cm。14～16は底部糸切りの土師器坏。口径12.6～13.1cm、器高2.6～3.3cm。平均口径12.8cm、平均器高2.8cm。13は土鍋。

SD18（Fig.31）　　生水調査区

22は備前の甕である。口縁を外側に折り曲げて玉縁にする。Ⅳ期の製品。

SD51（Fig.31，PL.121）　　生水調査区

白磁碗・皿、青磁碗・壺、青白磁合子、李朝青磁碗、土師器坏・皿・鍋、瓦器椀・皿、瓦質土器火

舎・鉢・燭台、陶器鉢・壺などが出土している。10309は底部糸切りの土師器皿。口径8.2cm、器高1.7cm。10034は青白磁合子身。25は白磁高台付皿。外底に墨書がある。23は李朝の象眼青磁碗。26は瓦質の燭台の脚部である。

SD100 (Fig.32, PL.121)　　寺熊調査区

白磁碗・皿・小壺、青磁碗、染付碗、土師器坏・皿・鍋、褐釉壺、備前焼擂鉢、瓦質土器火舎などが出土している。Fig.32上段は上～中層出土。74は底部糸切りの土師器皿。口径8.3cm、器高1.4cm。69は底部糸切りの土師器坏。口径10.4cm、器高2.1cm。44は白磁平底皿III類。52は擂鉢。46は白磁碗IV類。中段は下層出土。66は土師器坏で底部糸切り。口径11.4cm、器高2.5cm。40は龍泉窯系青磁碗V類、上田E類。38は龍泉窯系青磁碗IV類、上田D類。41は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類。45・43は白磁碗。43は内面磨滅しており、擂鉢として利用されている。55・56・58は土鍋。59は土師質の擂鉢。下段は最下層出土。63は土師器椀。65・67・64は土師器坏で、底部糸切り。口径12.9～14.1cm、器高2.7～3.3cm。平均口径13.5cm、平均器高3.0cm。60は土師器坏で、丸底をなす。50は中国陶器C群の鉢。75～77・72は土師器皿。77は磨滅で不明だがそのほかは底部糸切り。口径8.7～8.8cm、器高1.1～1.7cm。平均口径8.8cm、平均器高1.3cm。62は土師器椀。

SD101 (Fig.33～36, PL.122)　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、中国陶器盤、土師器椀・坏・高台付皿・皿・鍋・壺、備前焼擂鉢、瓦器椀、瓦質土器火舎、新羅焼壺などが出土している。Fig.33は中層出土土器。土師器皿は155・157が底部ヘラ切りでそれ以外は糸切りである。糸切りの土師器皿の口径は8.6～9.0cm、器高は1.2～1.4cm。平均口径8.8cm、平均器高1.2cm。ヘラ切りの土師器皿155・157の口径は9.2、8.8cm。器高は1.2、1.3cm。151は磨滅のため底部切り離し痕不明。口径9.2cm、器高1.6cm。土師器坏は左列が糸切り、右列がヘラ切りである。糸切りの土師器坏の口径は14.6～16.5cm、器高は2.6～3.4cm。平均口径15.6cm、平均器高3.2cm。ヘラ切りの土師器坏の口径は15.0～16.9cm、器高は2.7～3.6cm。平均口径15.6cm、平均器高3.4cm。120は土師器高台付皿。113～115・111・166は土師器椀。Fig.34は上～中層出土。100～104・108・217は瓦器椀。1271は土師器小壺である。燈白色を呈する。98は新羅焼の異形壺か。突帯を貼り付け、竹管文を施す。胎土は灰色で、長石を含む。87は白磁碗である。81は白磁碗V－1類。86は白磁碗IV－2類。112は土鍋である。93は中国陶器A群Ⅰ類盤－1で底部に墨書がみられる。Fig.35・36は下層出土。土師器皿は153・152・165・148が糸切りでそのほかはヘラ切り。糸切りの土師器皿の口径は9.0～10.8cm、器高は1.2～1.8cm。平均口径9.7cm、平均器高1.6cm。ヘラ切りの土師器皿の口径は8.6～10.0cm、器高は1.0～1.6cm。平均口径9.2cm、平均器高1.3cm。土師器坏は左列が糸切りで右列はヘラ切りである。糸切りの土師器坏の口径は13.7～15.0cm、器高は3.0～3.8cm。平均口径14.5cm、平均器高3.4cm。ヘラ切りの土師器坏の口径は14.2～16.0cm、器高は2.9～4.0cm。平均口径15.4cm、平均器高3.4cm。117～119・109は土師器椀である。105～107は瓦器椀。79は高麗青磁碗で、全面施釉の後、畳付部分の釉を掻き取る。内面と畳付に砂目が残る。82は白磁碗III－1類。92・89は白磁碗の底部。80は白磁碗II類。90・91は白磁碗IV類。83は白磁碗IV－1類。88・85・84は白磁碗IV－2類。84は外面体部を工具で削る。

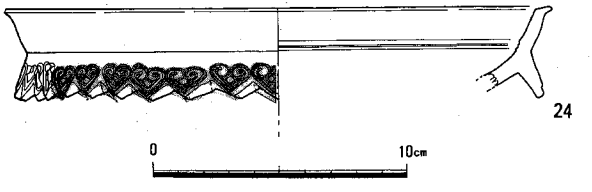


Fig.29　掘立柱建物SB81出土遺物実測図(1/3)

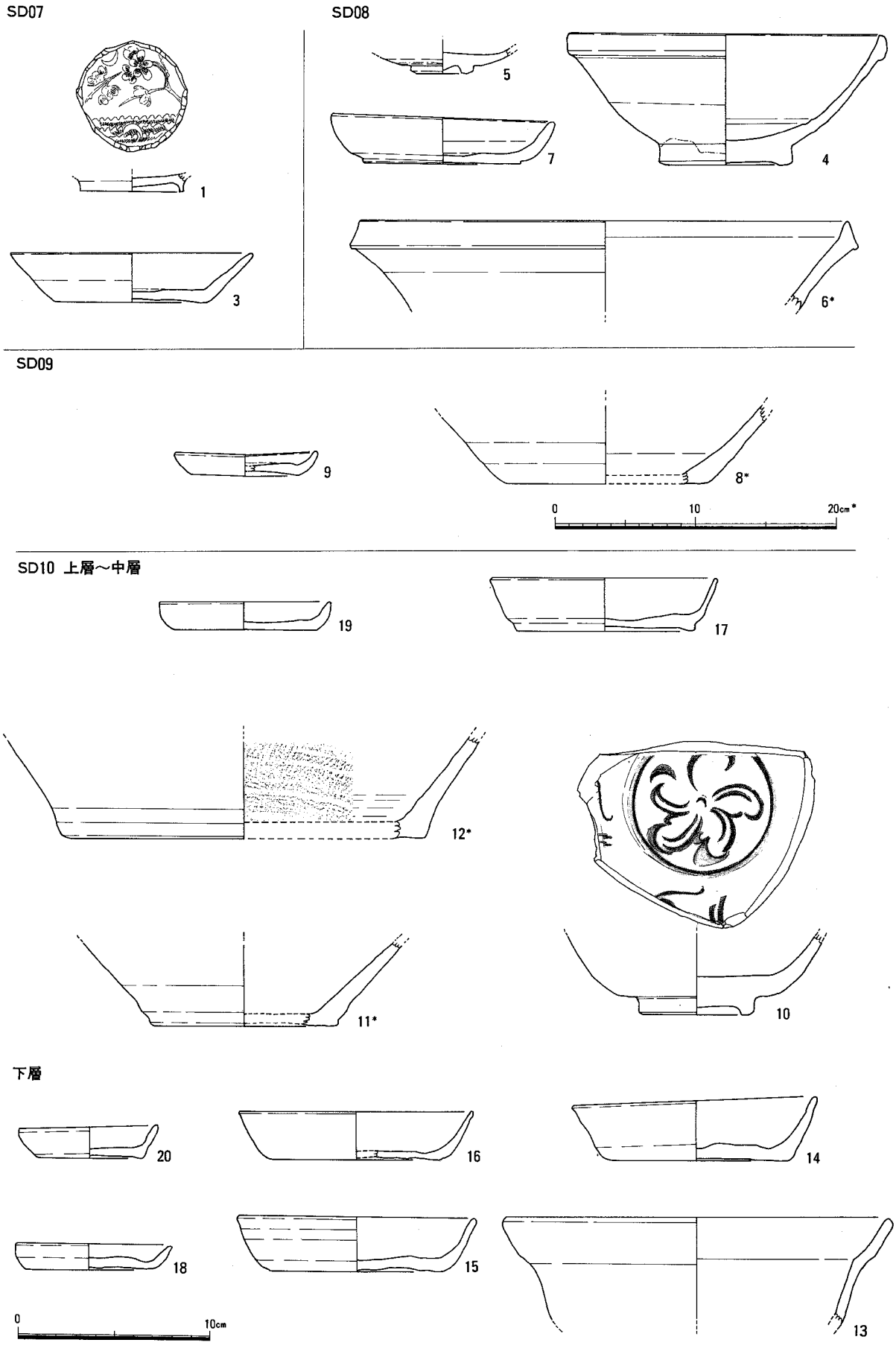


Fig.30　溝SD07・08・09・10出土遺物実測図(1/3・1/4*)

SD103（Fig.37～41，PL.123～125）　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗・皿、中国陶器壺・盤、土師器坏・皿・椀、常滑焼甕などが出土している。Fig.37は上層出土遺物である。土師器皿は**332・330・326**が底部糸切りで、そのほかはヘラ切り。糸切りの土師器皿の口径は9.2～9.6cm、器高は1.0～1.4cm。平均口径9.4cm、平均器高1.1cm。ヘラ切りの土師器皿の口径は8.8～9.8cm、器高は1.2～1.5cm。平均口径9.2cm、平均器高1.3cm。土師器坏は**236・255**がヘラ切りで、そのほかは糸切り。糸切りの土師器坏の口径は14.6～15.8cm、器高は2.6～3.6cm。平均口径15.3cm、平均器高3.0cm。ヘラ切り土師器坏**263・255**は口径どちらも15.2cm、器高3.2、3.8cm。**225・234**は土師器椀。**210・215**は瓦器椀。**200**は白磁の皿。**199・195**は白磁平底皿III類。Fig.38は中層出土の底部糸切りの土師器皿・丸底坏・坏である。土師器皿の口径は8.5～9.7cm、器高は0.9～1.6cm。平均口径9.0cm、平均器高1.2cm。土師器坏の口径は、13.0～17.0cm、器高は2.4～3.9cm。平均口径15.5cm、平均器高3.1cm。Fig.39は中層出土のヘラ切りの土師器皿・丸底坏・坏である。土師器皿の口径は8.2～13.0cm、器高は1.0～1.9cm。平均口径9.5cm、平均器高1.4cm。土師器坏の口径は、14.0～17.1cm、器高は2.9～4.9cm。平均口径15.3cm、平均器高3.5cm。Fig.40も中層出土遺物。**221**は瓦器皿。**231・230・232・224・226・214・233・223・235**は土師器の椀。**211・218・1272・222・216**は瓦器椀。**198・193・194**は白磁平底皿III類。**198・194**は外底に墨書がある。**202**は青白磁合子蓋。**186**は白磁碗II－1類。**184**は白磁碗IV－2類。Fig.41は下層出土遺物。**333**は底部糸切りの土師器皿。口径9.1cm、器高1.4cm。**317・308・310**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径8.6～9.3cm、器高1.2～1.5cm。平均口径8.8cm、平均器高1.4cm。**286・284・249・244・260**は土師器坏。**289・244**はこてあての痕跡がみられる。**289**が糸切りで、口径15.4cm、器高2.6cm。ほかはヘラ切りで、口径14.9～16.4cm、器高2.6～3.9cm。平均口径15.4cm、平均器高3.5cm。**227～229**は土師器椀。**220・219・213・209・212**は瓦器椀。**207**は東播系須恵器の捏鉢。**201**は白磁平底皿III類。**196・197**は白磁平底皿II－1類。**185**は白磁碗II－1類。**189**は白磁碗II－2類。**190**は白磁碗IV－1類。**183**は白磁碗IV－2類。

SD216（Fig.42）　寺熊調査区

白磁碗・皿、土師器皿・鍋、瓦器椀、陶器鉢などが出土している。**28**は陶器の擂鉢である。口縁部は直に立ち上がり、口唇部は水平で平坦である。ベージュ色の釉がかかる。胎土は燈白色で砂っぽい。

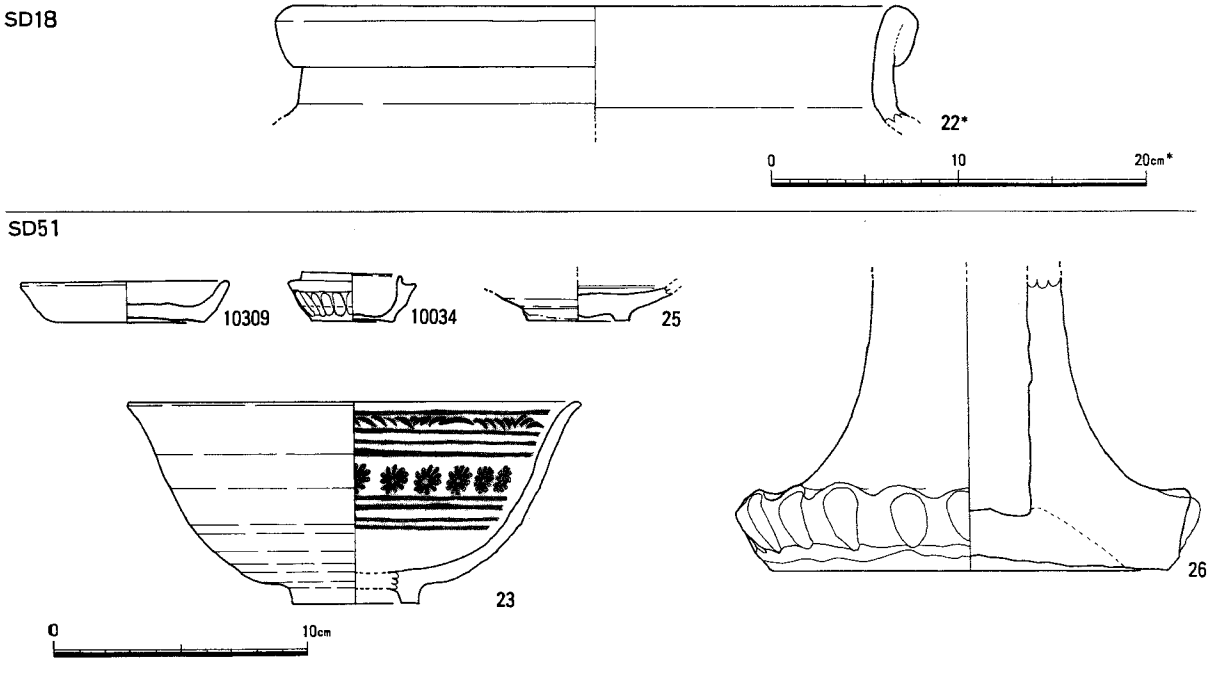


Fig.31　溝SD18・51出土遺物実測図(1/3・1/4*)

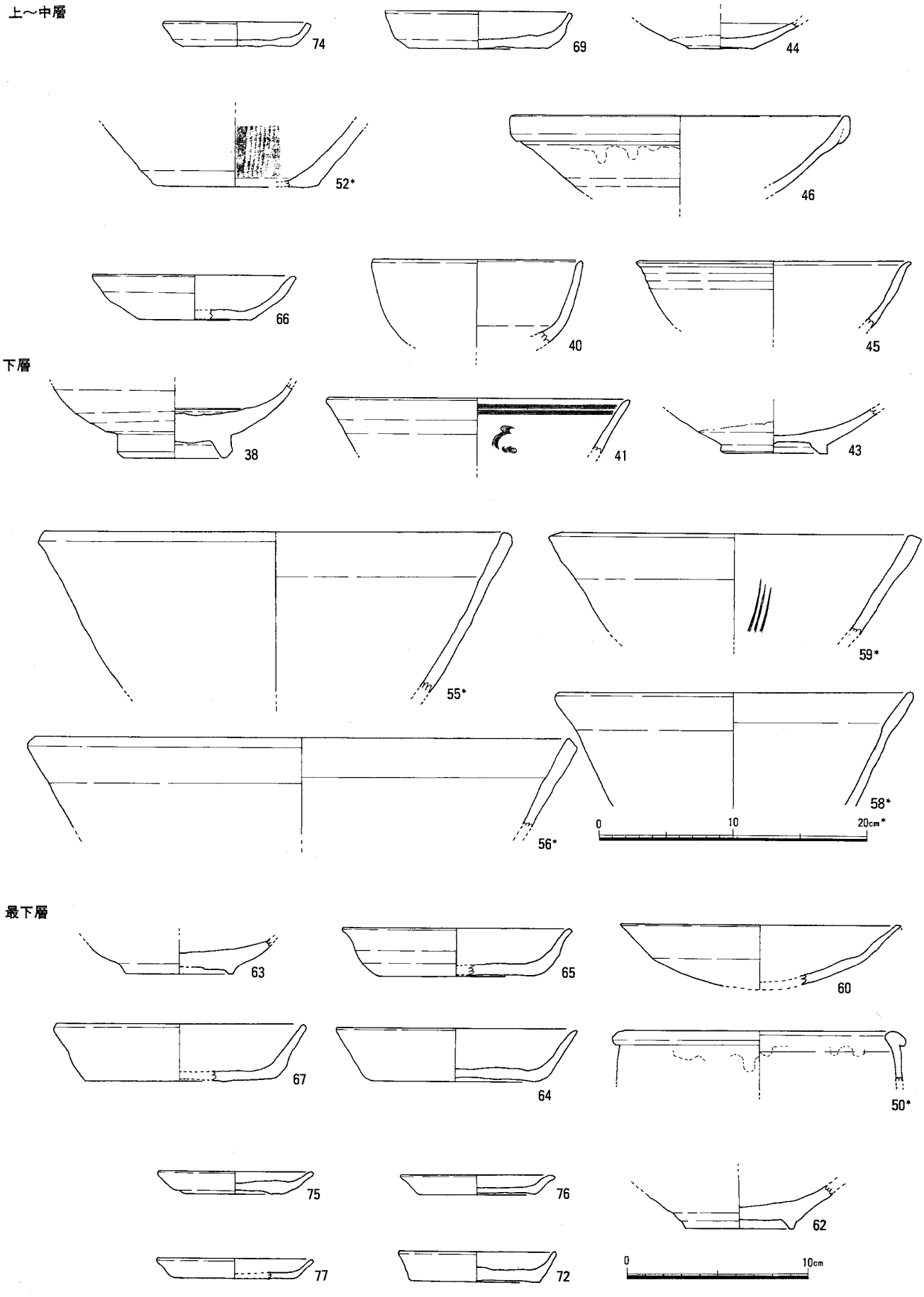


Fig.32　溝SD100出土遺物実測図(1/3・1/4*)

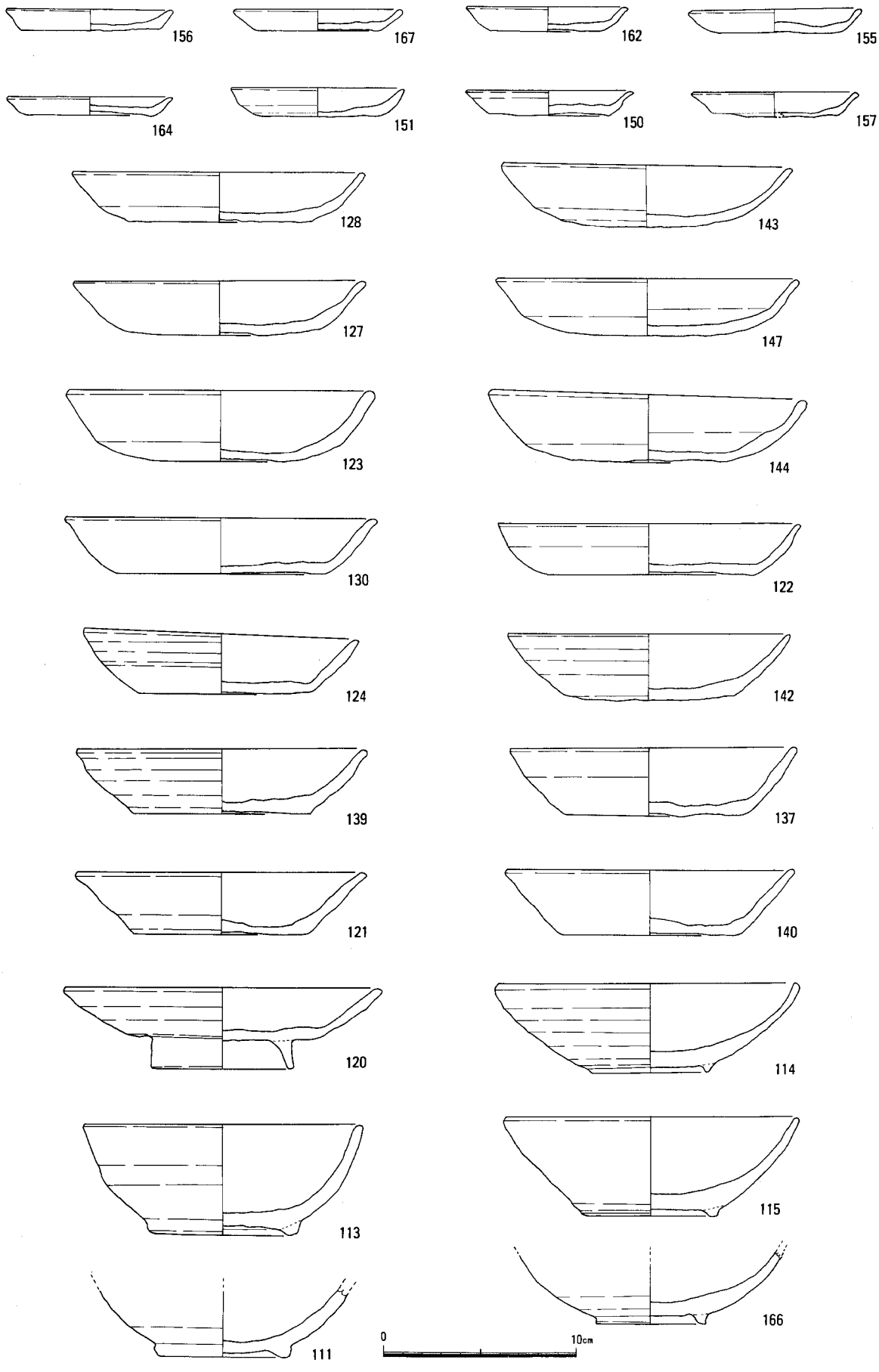


Fig.33　溝SD101中層出土遺物実測図(1/3)

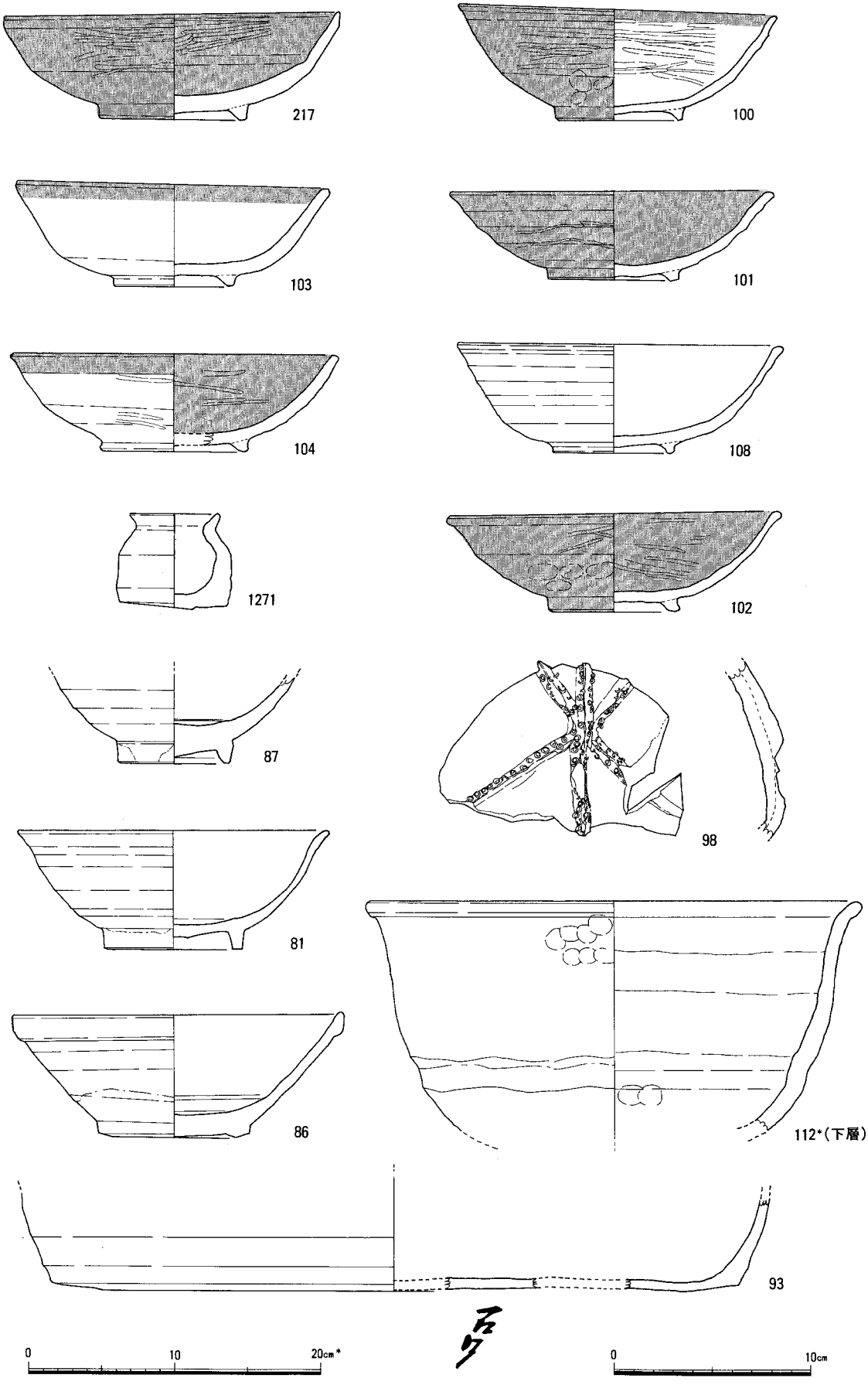


Fig.34　溝SD101上～中層出土遺物実測図(1/3・1/4*)

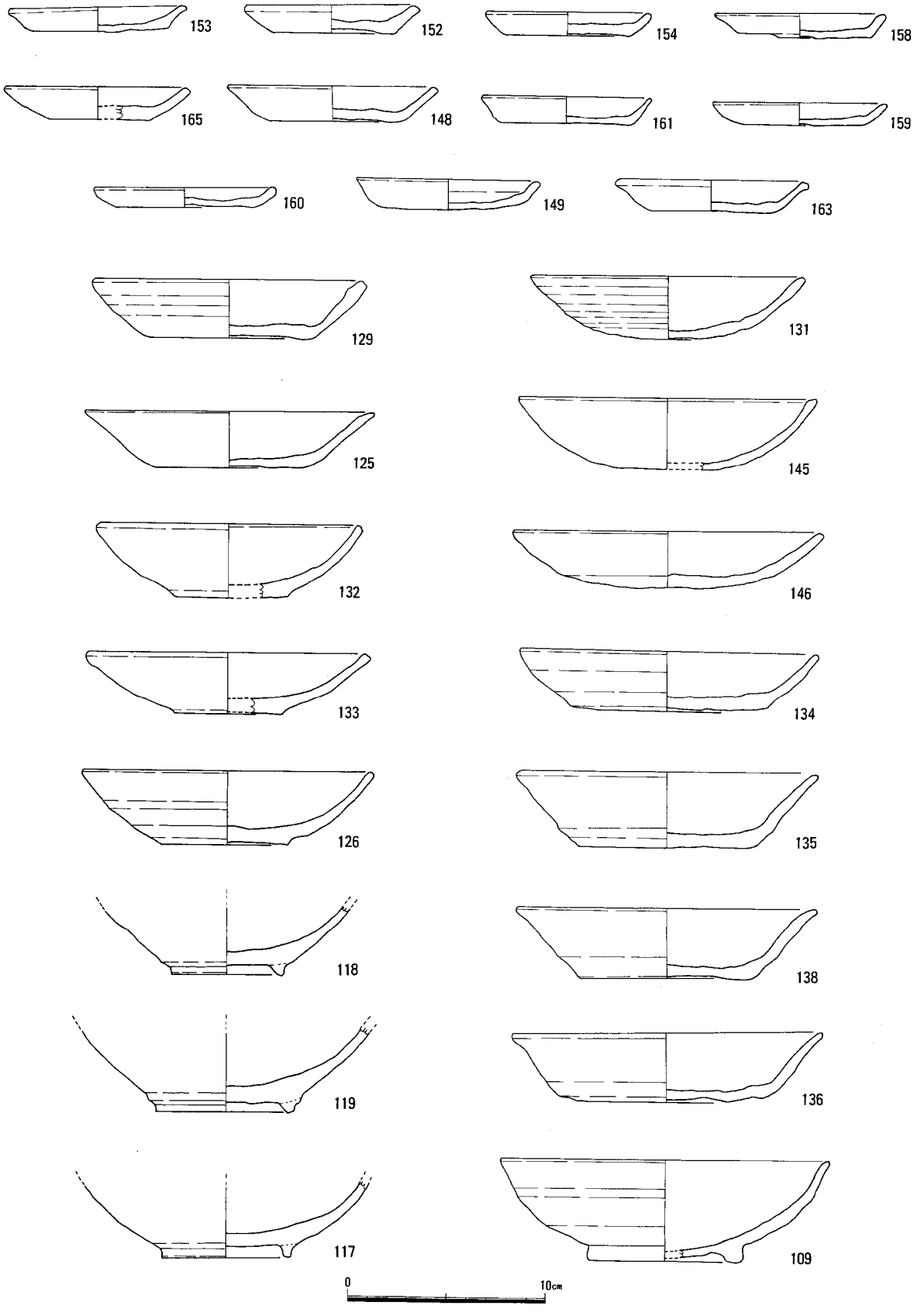


Fig.35　溝SD101下層出土遺物実測図1 (1/3)

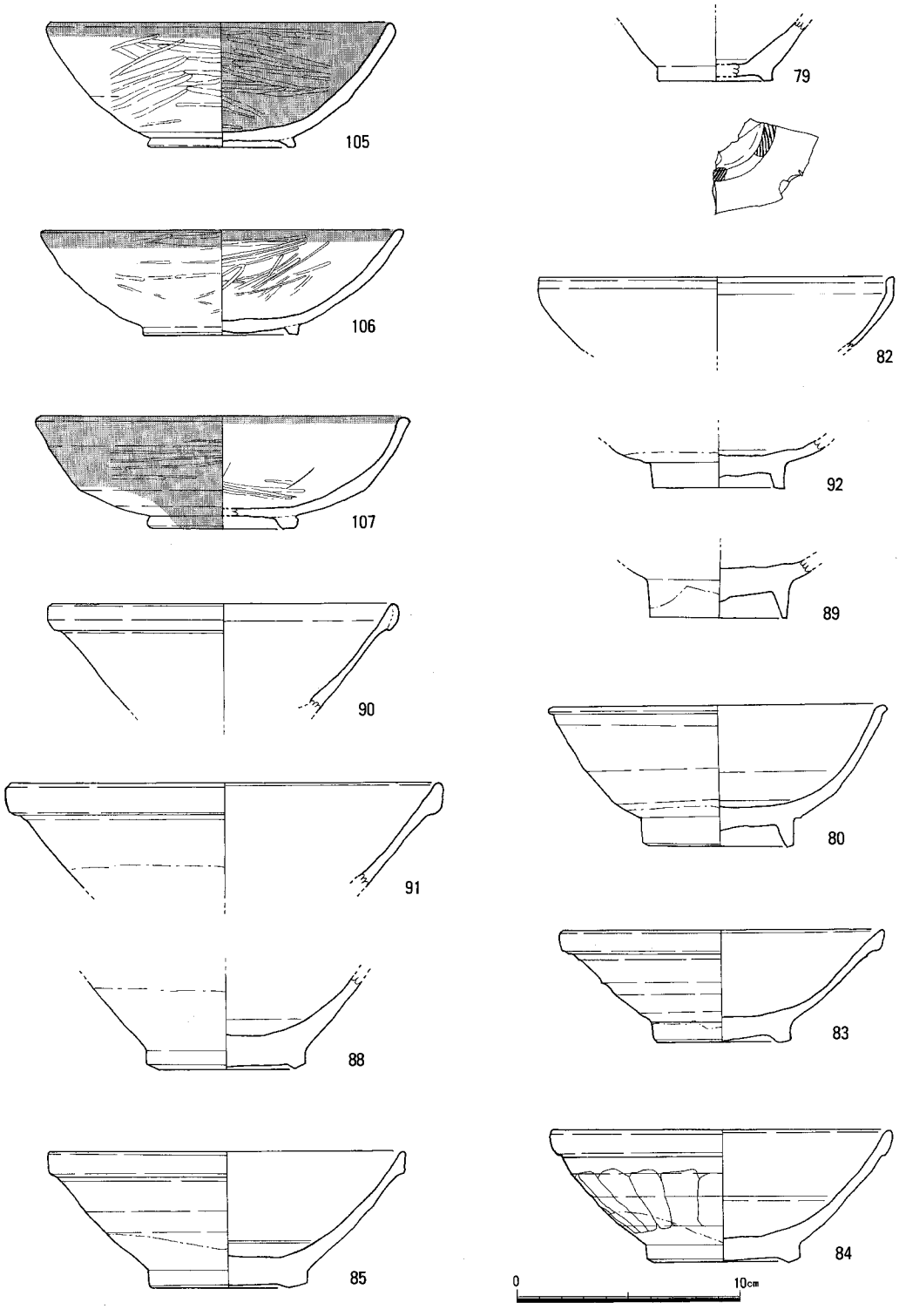


Fig.36　溝SD101下層出土遺物実測図２(1/3)

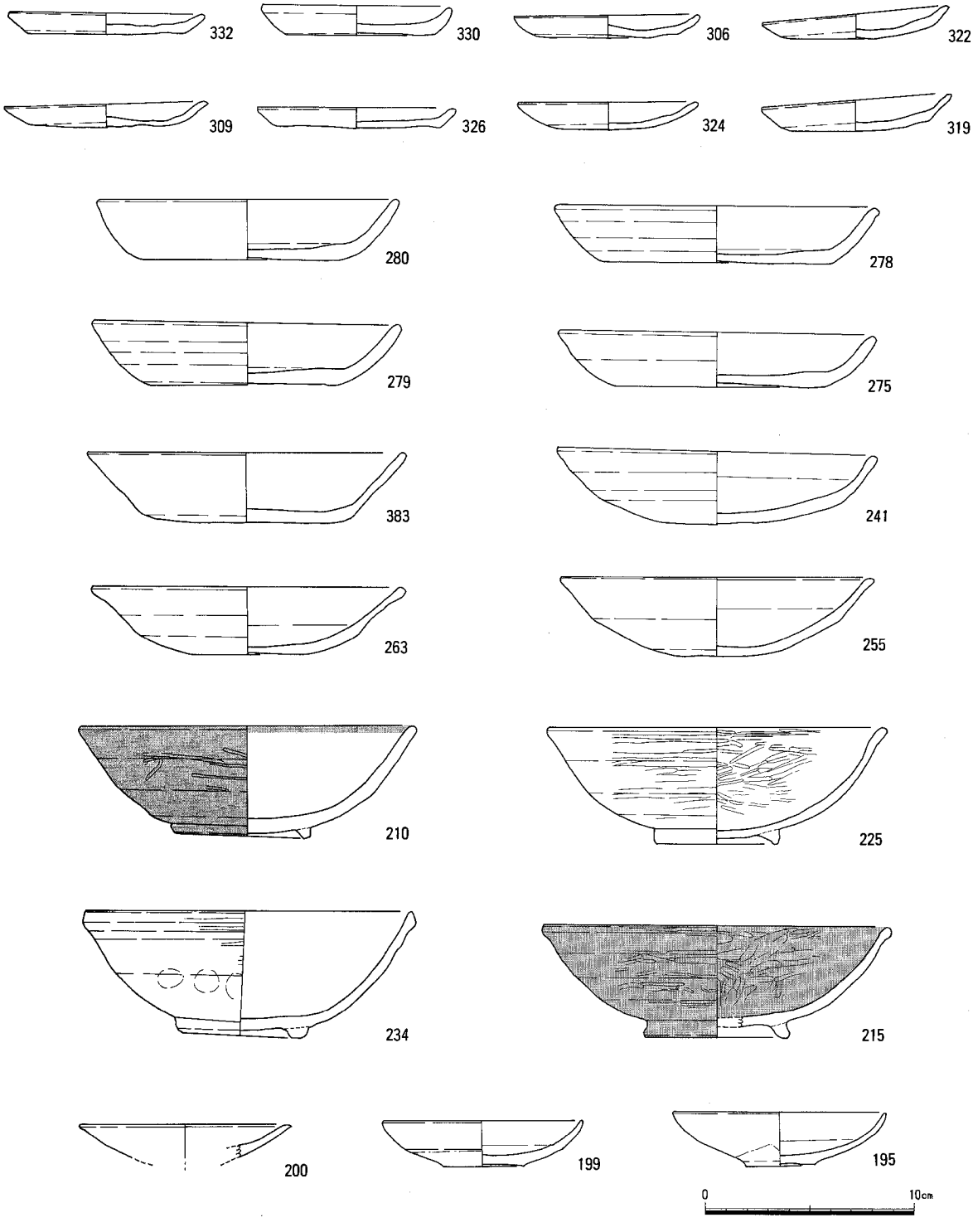


Fig.37　溝SD103上層出土遺物実測図(1/3)

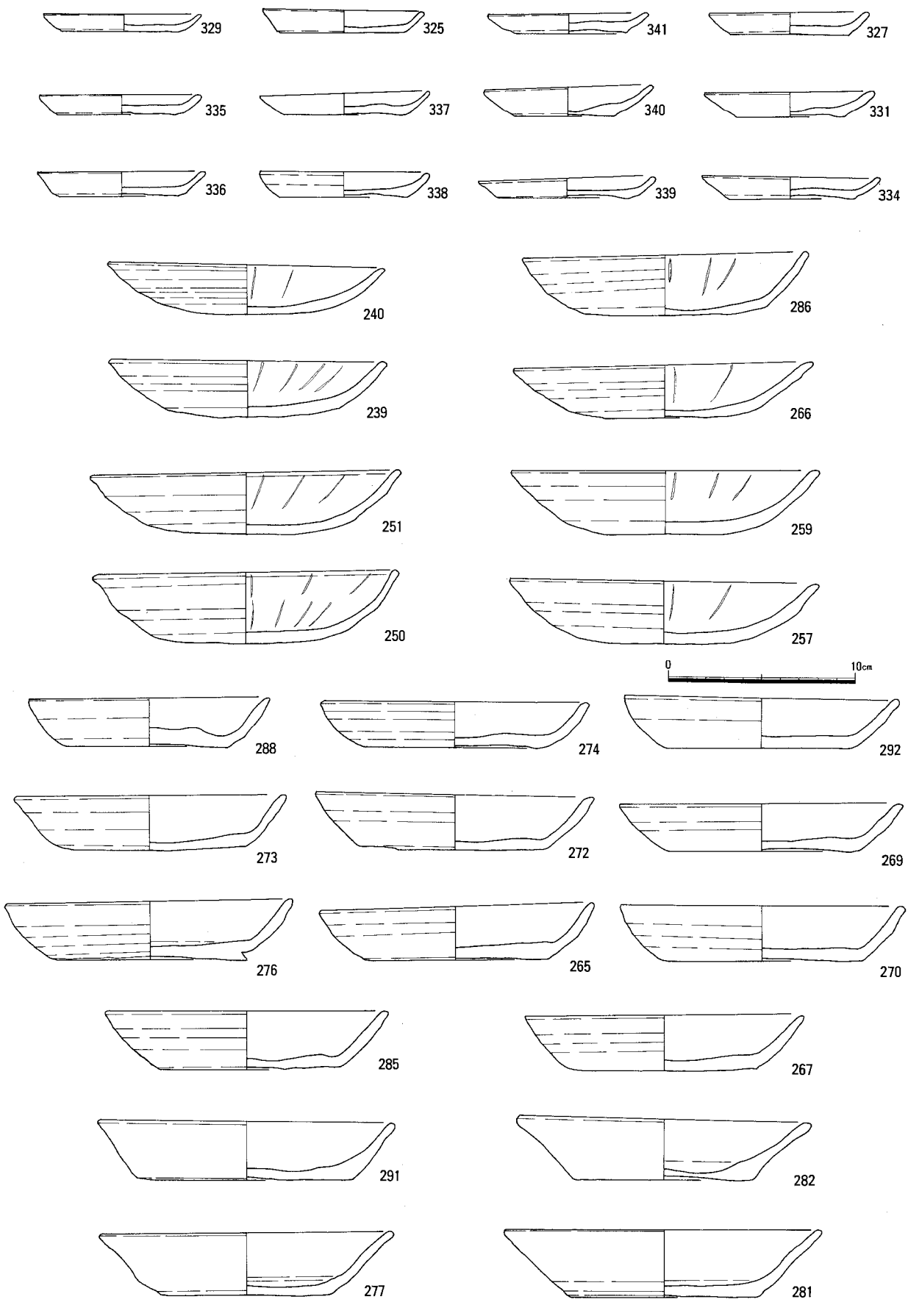


Fig.38　溝SD103中層出土遺物実測図１(1/3)

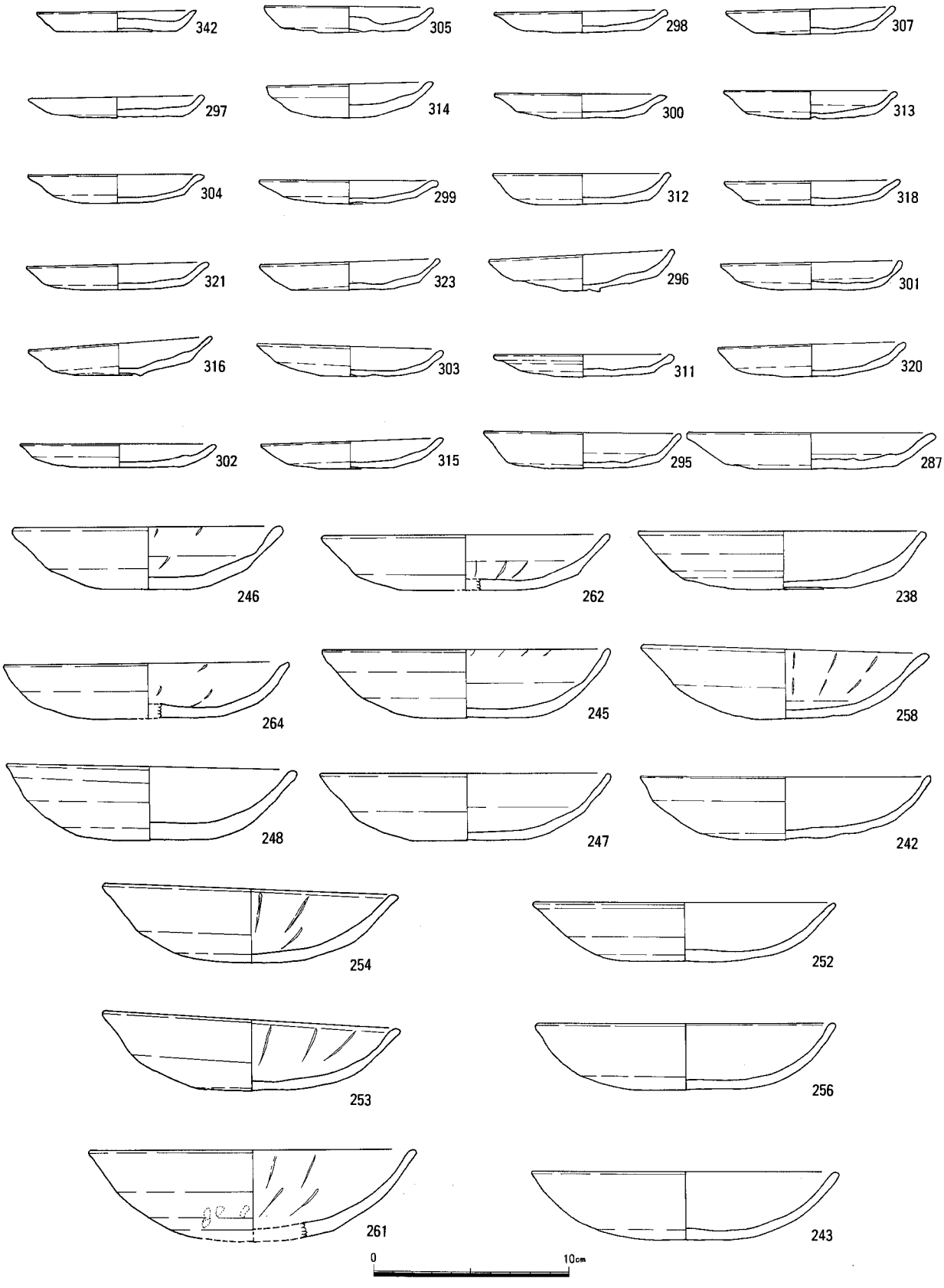


Fig.39　溝SD103中層出土遺物実測図2(1/3)

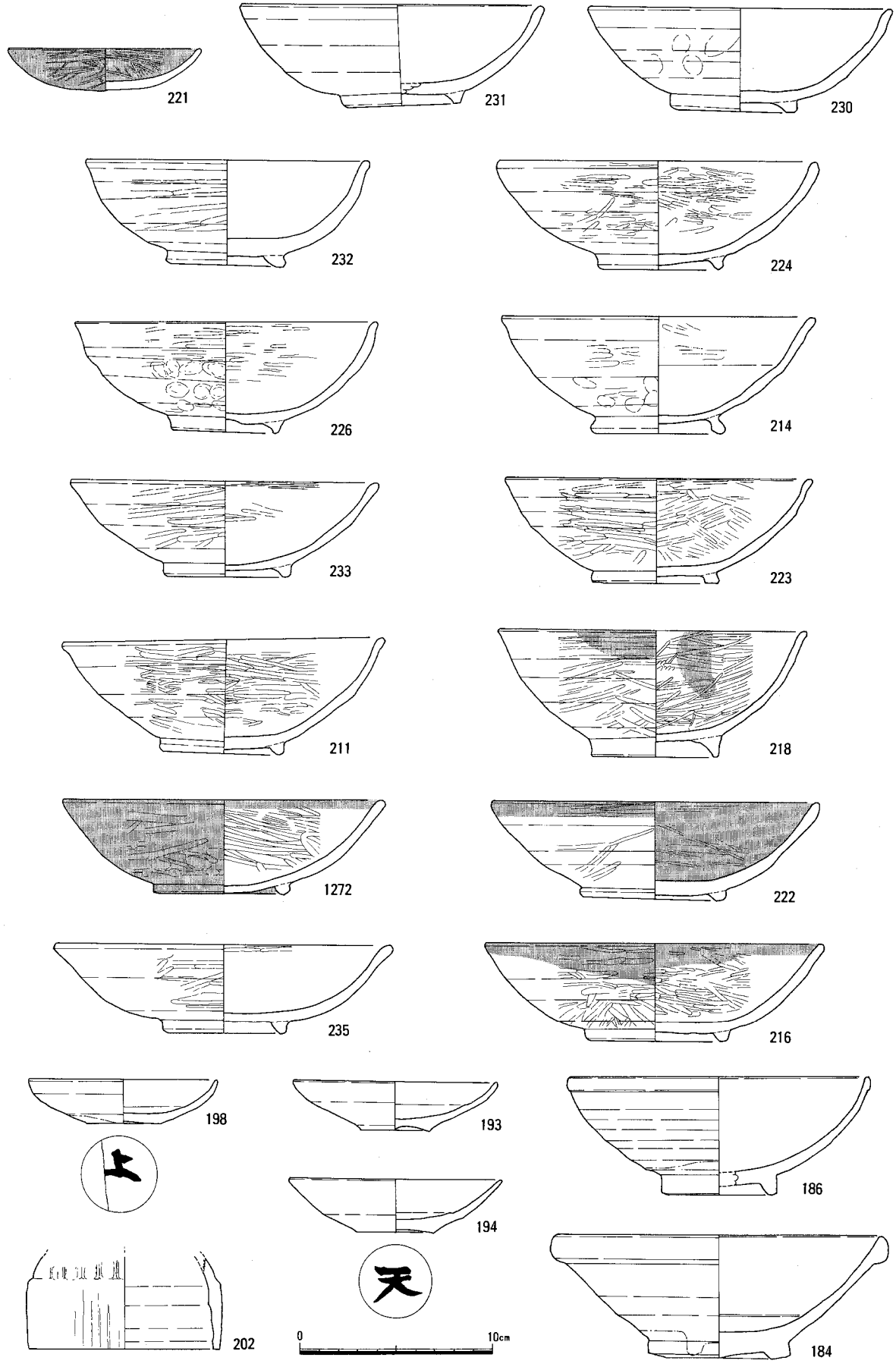


Fig.40　溝SD103中層出土遺物実測図３(1/3)

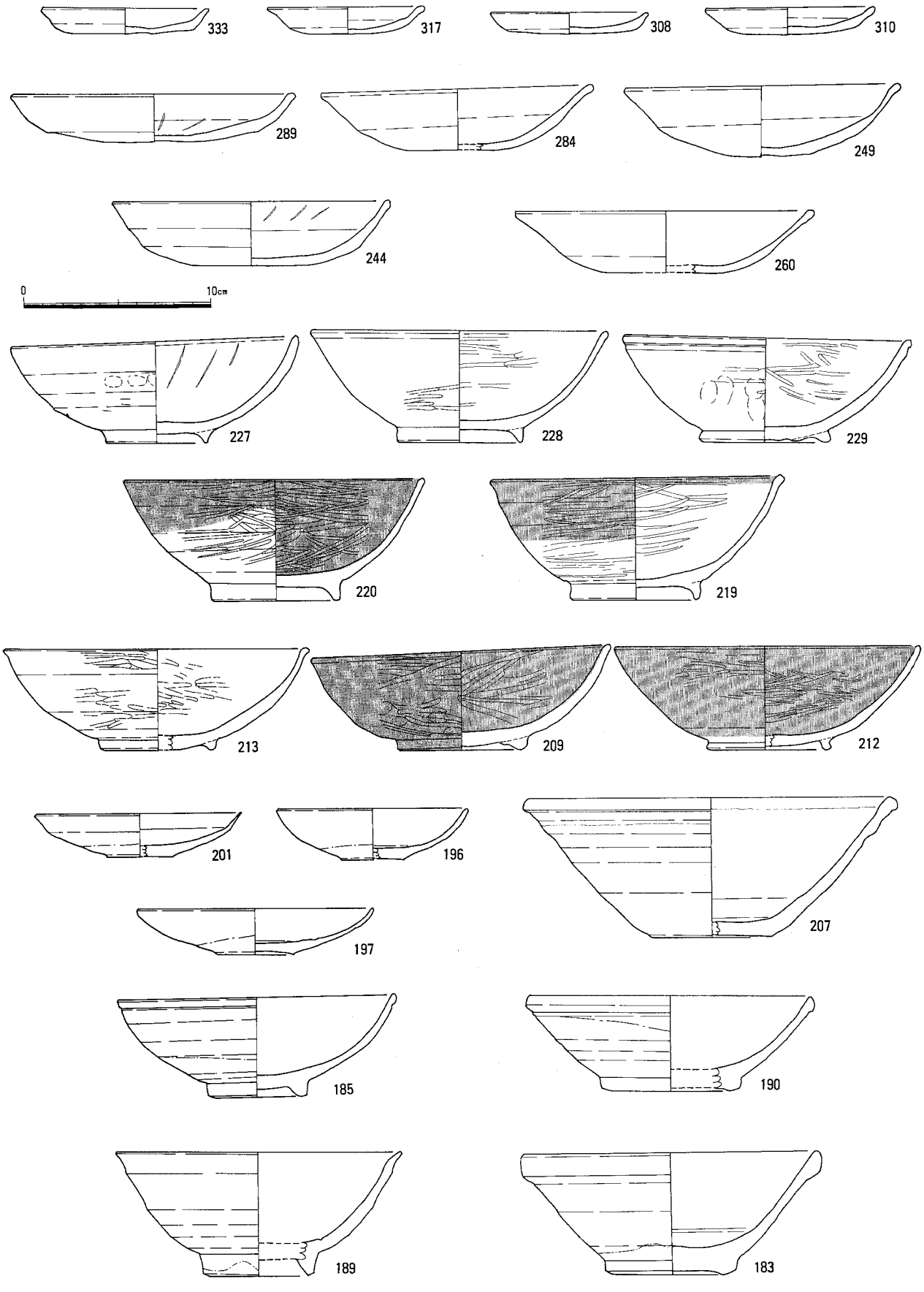


Fig.41　溝SD103下層出土遺物実測図(1/3)

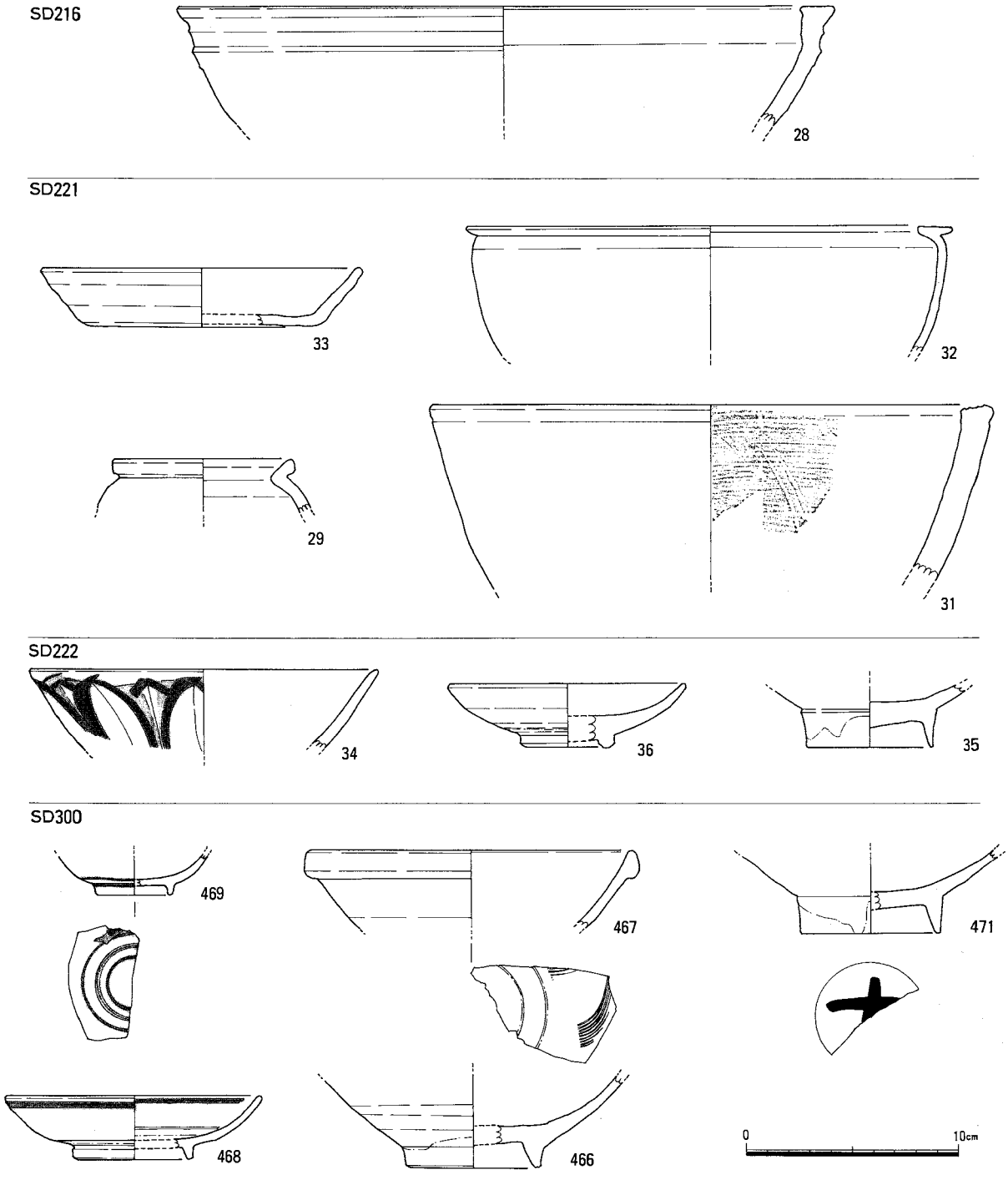


Fig.42　溝SD216・221・222・300出土遺物実測図(1/3)

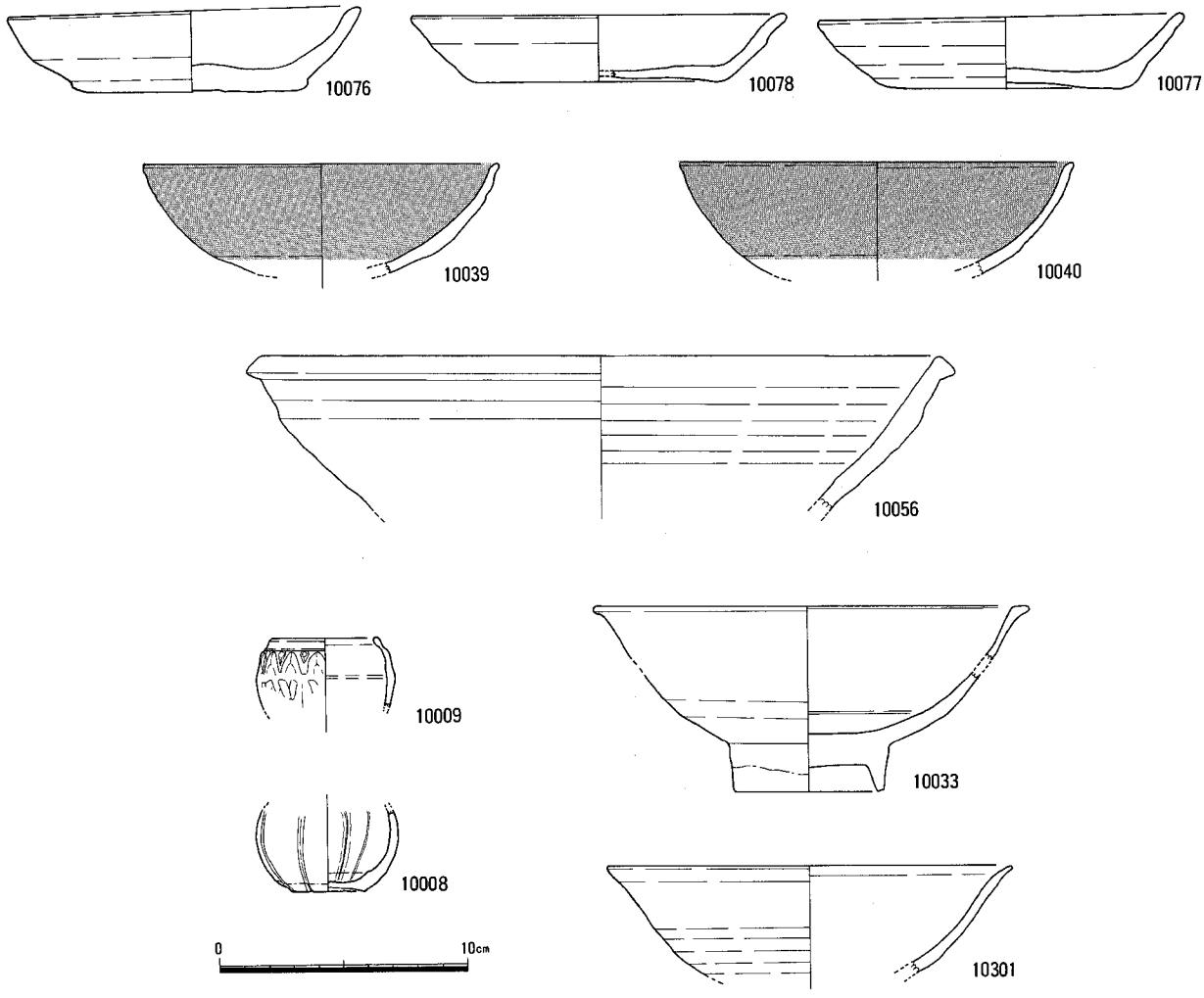


Fig.43　溝SD251出土遺物実測図(1/3)

SD221 (Fig.42)　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗・壺、土師器坏・皿、陶器鉢・壺・擂鉢、瓦質土器火舎などが出土している。**33**は土師器坏。底部の切り離しは磨滅で不明。口径15.2cm、器高2.8cm。**29**は陶器の小壺。**32**は土師質の鉢。**31**は陶器の擂鉢。

SD222 (Fig.42)　　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗、土師器坏・皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器鉢などが出土している。**34**は龍泉窯系青磁碗II－1類。**36**は白磁高台付皿。森田D群。**35**は白磁碗V類もしくはVI類。

SD251 (Fig.43, PL.126)　　寺熊調査区

10076～10078は土師器坏。**10076**は磨滅で不明だがそのほかは底部糸切り。口径14.2～15.2cm、器高2.8～3.3cm。平均口径14.8cm、平均器高3.0cm。**10039・10040**は瓦器椀。**10039**は糸切り痕が体部下半にまで及ぶ。**10056**は東播系須恵器の捏鉢である。**10009**は青白磁の小壺である。外面は型押しで成形する。口唇部のみ露胎。**10008**は青磁の小壺。内面と体部下端、底部は露胎。**10033**は白磁碗VI－1類。**10301**は白磁碗V－1類。

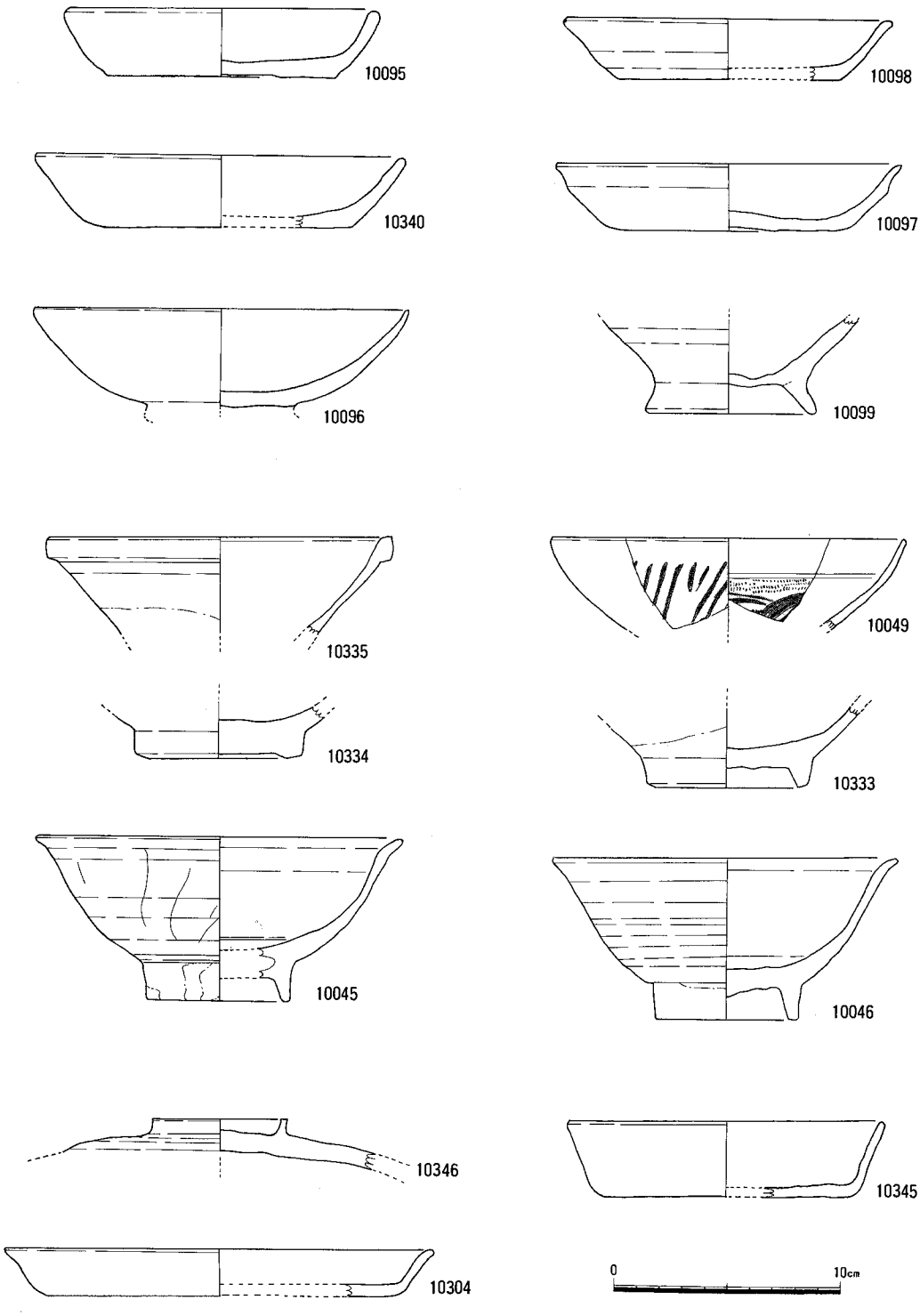


Fig.44　溝SD257出土遺物実測図(1/3)

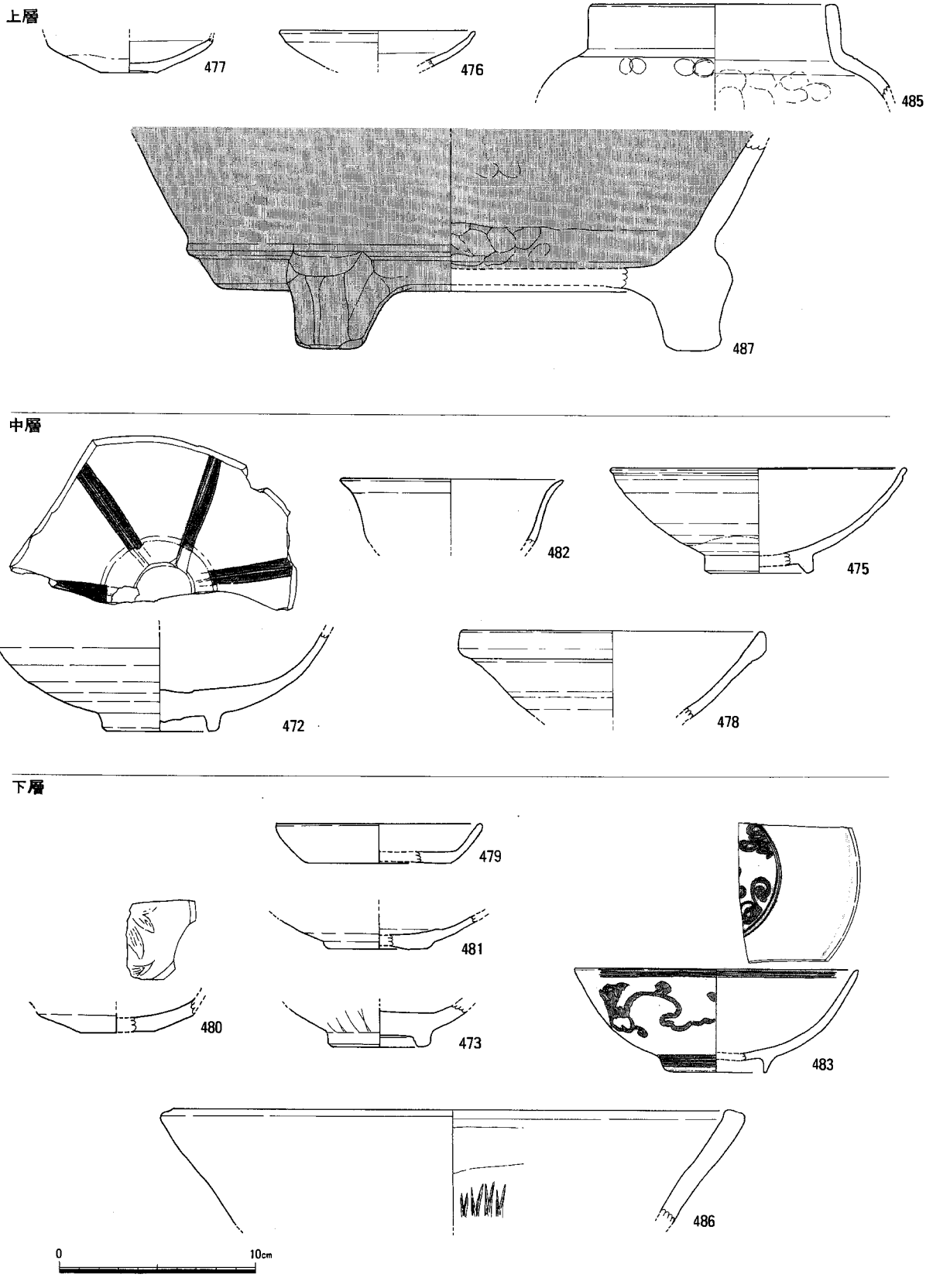


Fig.45　溝SD301出土遺物実測図(1/3)

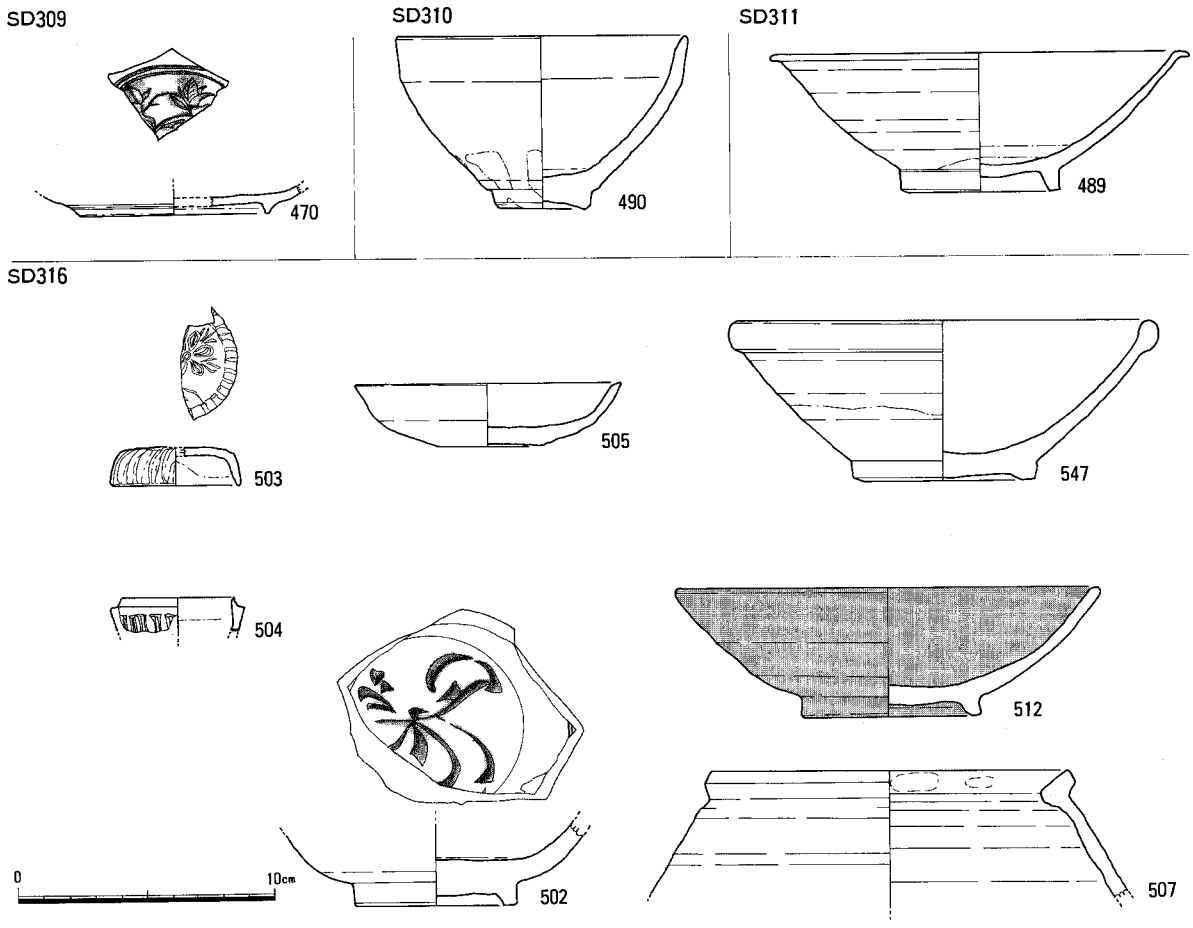


Fig.46　溝SD309・310・311・316出土遺物実測図(1/3)

SD254（PL.126）　　寺熊調査区

10031は須恵器の皿。口径19.0cm、底径15.8cm、器高2.1cm。

SD257（Fig.44，PL.126）　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、須恵器坏・皿・蓋などが出土している。**10095・10340・10098・10097**は土師器の坏である。**10095・10340**は底部糸切り。それ以外は磨滅により不明である。口径は14.1～16.5cm、器高は2.8～3.2cm。平均口径15.2cm、平均器高3.1cm。**10096・10099**は土師器椀。**10049**は同安窯系青磁碗である。**10333**は白磁碗の底部。**10335・10334**は白磁碗IV類。**10045**は白磁碗Ｖ－２類。**10046**はＶ－１類。**10346**は須恵器の蓋。**10304**は須恵器の皿。**10345**は須恵器の坏。

SD300（Fig.42）　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、肥前染付碗・皿、土師器坏・皿などが出土している。農業用水路の初期的な姿である可能性が高い。**469**は肥前染付碗。畳付のみ露胎。**468**は肥前染付皿。外面は高台脇まで釉がかかる。内面は見込みの釉を輪状に掻き取る。**467**は白磁碗IV類。**466**は白磁碗VI類。見込みの釉を輪状に掻き取る。**471**は白磁碗Ｖ類もしくはVI類。高台内に墨書がある。

SD301（Fig.45，PL.126）　　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗、染付碗、土師器椀・坏・皿、陶器擂鉢、瓦器椀、瓦質土器火舎・壺などが出土している。Fig.45上段は上層の出土遺物。**477・476**は白磁平底皿III類。**485**は瓦質土器の釜。**487**は瓦質土器の火舎。中段は中層出土。**472**は龍泉窯系青磁碗。緑白色の釉が高台外面までかかる。内面は見込み部分が無釉である。無釉部分は茶褐色を呈する。放射状に２条ずつの片切彫を入れる。**482**は森田Ｅ群の白磁碗。**475**は白磁碗II類。**478**は白磁碗IV類。下段は下層出土遺物。**479**は口ハゲの白磁平皿。**480**は白磁平底皿VI－１類。**481**は白磁高台付皿。**473**は龍泉窯系青磁碗II－１類で、見込みに花文をスタンプする。**483**は明代の染付碗。畳付のみ露胎。**486**は土師質の擂鉢。

SD309（Fig.46）　寺熊調査区

470は明代の染付皿。

SD310（Fig.46，PL.126）　寺熊調査区

490は瀬戸の天目椀である。

SD311（Fig.46，PL.126）　寺熊調査区

489は白磁碗VI－1類。

SD316（Fig.46，PL.126）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗・皿、青白磁合子、土師器坏・皿、陶器鉢・壺、瓦器椀が出土している。503・504は青白磁合子の蓋と身である。505は内面に劃花文を施す白磁平底皿VI－1類。547は白磁碗IV－1類。502は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類。512は瓦器椀。507は中国陶器準A群の壺。口縁に目跡が残る。

SD318（Fig.47，PL.126）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗・壺、土師器坏・皿・鍋、陶器鉢、天目椀、瓦器椀、瓦質土器火舎などが出土している。Fig.47上段は上層出土遺物。514は龍泉窯系青磁碗V－4類で上田B類である。見込みに印花がある。516は同安窯系青磁碗II類である。521は白磁平底皿III類。523は白磁碗VII－2類。口縁を輪花にし、刻んだ部分に白堆線を入れる。見込みは釉を輪状に掻き取る。538は瓦器椀。535は土鍋。536は備前焼擂鉢。IV期の製品。540～542は瓦質土器の火舎。中段は中層出土。513は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類。517は龍泉窯系青磁III類の鉢。内面に片切りで花文を描く。畳付の釉を掻き取る。530・529は白磁碗IV－2類。539は瓦器椀。下段は下層出土。545は土師器坏で、底部糸切り。口径11.6cm、器高2.6cm。515は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類だがやや小ぶりのタイプ。528は白磁碗。見込みに砂目が残る。544は土師器椀。537は瓦器椀。524・526は白磁碗IV類。

SD320（Fig.48～50，PL.127）　寺熊調査区

白磁碗・皿・壺、青磁碗・皿、中国陶器の壺・盤、土師器坏・皿、陶器擂鉢、須恵器甕、瓦器椀、竈などが出土している。Fig.48の上段は上～中層の出土遺物。590は土師器坏。底部は糸切り。口径15.5cm、器高3.5cm。559は白磁碗IV類。565・569は白磁平底皿II類。565の外底には墨書がある。553はVI－1類。中段以下は下層出土遺物である。土師器皿は上3列が糸切り、下2列がヘラ切りである。糸切り土師器皿の口径は8.5～9.6cm、器高は1.0～1.6cm。平均口径8.9cm、平均器高1.3cm。ヘラ切り土師器皿の口径は9.0～10.0cm、器高は1.2～1.6cm。595は底部糸切りの土師器丸底坏。口径15.2cm、器高3.1cm。593・594は底部ヘラ切りの土師器丸底坏。口径15.2、16.1cm、器高3.5、3.4cm。585・587～589・591は土師器坏。588が摩滅で不明の他は底部ヘラ切り。口径14.2～15.2cm、器高2.5～3.8cm。平均口径14.8cm、平均器高3.2cm。592は土師器の椀。581～583は瓦器椀で、528の外底にはヘラ記号がみられる。578～580は東播系須恵器の捏鉢。578・590は下層、579は上層出土。576は陶器の擂鉢。上層出土。575は朝鮮無釉陶器の壺。下層出土。577は須恵器の甕。584は土師器の竈。下層出土。Fig.50下層出土。570・566・562・564は白磁平底皿II－1類。568・563・567・571は白磁平底皿III類。572は同安窯系青磁皿である。549・548・560は白磁碗II－1類。560の外底には「中」の墨書。555・554・546・556は白磁碗IV－2類。574は褐釉陶器の壺。573は中国陶器A類Ⅰ群盤－1。

SD321（Fig.51，PL.128）　寺熊調査区

白磁碗・壺、青磁碗、土師器坏・皿・鍋、瓦器椀、瓦質土器鉢などが出土している。620は底部ヘラ切りの土師器坏。口径15.8cm、器高2.9cm。615・617・618は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類だが、615と618は雲文がない。617・618は口縁を輪花とする。616は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、見込みにスタンプで魚文を施す。

SD322（Fig.51，PL.128）　寺熊調査区

621は龍泉窯系青磁の鉢で、碁笥底を呈し、高台内の釉を掻き取る。**623**は李朝の白磁碗で、内面に目跡が残る。高台内に墨書がある。**624～626**は土鍋。

SD323（Fig.51，PL.128）　寺熊調査区

639は糸切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.0cm。**633～637**は土師器の坏ですべて糸切り。口径は13.7～15.4cm。器高は2.4～3.2cm。**627**は龍泉窯系青磁皿のⅠ－1類。片切彫で草文を描くが、一般にみられるものより密に描いていない。**628**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類。**629**は青白磁の合子身。**630**は白磁高台付皿Ⅱ類。**631**は白磁碗で高台内に墨書がある。

SD327（Fig.52・53，PL.129）　寺熊調査区

Fig.52は上層出土。土師器皿は**678・669**が底部糸切りの他はヘラ切り。**678・699**は口径9.8、9.0cm、器高1.5、1.4cm。ヘラ切りの土師器皿の口径は9.3～10.0cm、器高は1.0～1.6cm。平均口径9.7cm、平均器高1.3cm。土師器坏は**669・665**が糸切り、口径15.7、14.9cm、器高3.1、3.4cm。**666・669**がヘラ切り、口径15.0、15.5cm、器高どちらも3.0cm。**674・676**は摩耗で不明、口径15.5、15.6cm、器高3.4、3.7cm。**664**は土師器椀。**654**は青白磁の合子身。**646**は白磁高台付皿Ⅱ類。**645**は白磁高台付皿Ⅰ－2類。**648**は白磁平底皿Ⅱ－1類。**649・650・652**は白磁平底皿Ⅲ類。**656**は白磁碗Ⅳ－2類。**640・641**は白磁碗Ⅱ－1類。Fig.53は下層出土。土師器皿はすべてヘラ切り。口径9.0～9.8cm。器高1.0～1.6cm。平均口径9.4cm、平均器高1.4cm。土師器坏は**671**がヘラ切りで、そのほかは糸切り。**671**は口径15.0cm、器高3.2cm。糸切りの土師器坏は口径14.8～16.2cm、器高3.0～3.4cm。平均口径15.6cm、平均器高3.3cm。**663**は瓦器椀。**657・658**は白磁碗Ⅳ－2類。**642**は白磁碗Ⅱ－1類。**653**は白磁の蓋。**651**は白磁平底皿Ⅲ類。**647**は白磁平底皿Ⅱ－1類。**643**は白磁碗Ⅸ類。**644**はⅢ－1類。**655**はⅤ－2類。**660**は朝鮮無釉陶器の壺である。

SD332（Fig.54）　寺熊調査区

693は糸切りの土師器皿。口径10.0cm、器高1.3cm。**691・692**はヘラ切りの土師器皿。口径9.0、8.8cm、器高はどちらも1.0cm。**690**は明代の染付皿。畳付のみ露胎。

SD333（Fig.54，PL.130）　寺熊調査区

710・714はヘラ切りの土師器皿。口径どちらも9.1cm、器高1.4、1.2cm。**712・711・709・713**は糸切りの土師器皿。口径9.0～9.1cm。器高0.9～1.2cm。平均口径9.0cm、平均器高1.1cm。**708**は土師器坏で底部糸切り。口径15.6cm、器高3.1cm。**706・707**は土師器椀。**705**は瓦器椀。**700**は龍泉窯系青磁皿で、内面に片切彫の蓮花を描くⅠ－4類。**694**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類。**704**は白磁高台付皿。見込みの釉を輪状に掻き取る。**699**は白磁碗Ⅳ類。**703**は白磁碗Ⅸ類。**698**は白磁碗Ⅱ－2類。**697**は白磁碗Ⅴ－1類。

SD334（Fig.54）　寺熊調査区

721・722は土師器坏で、底部は糸切り。口径15.3、16.4cm、器高3.5、2.9cm。**720**は瓦器椀。**718・719**は白磁碗。

SD337（Fig.55，PL.130）　寺熊調査区

772は土師器の坏。口径16.4cm、器高3.2cm。**764**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－1類。**768**は白磁高台付皿Ⅰ－2類。

SD338（Fig.55）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、染付碗、天目椀、土師器椀・坏・皿、瓦器椀、瓦質土器火舎などが出土している。**782**は土師器の小坏。薄手の作りで、一般の土師器と系統が異なる。口径8.3cm、器高1.9cm。**781**は土

師器坏で底部はヘラ切り。口径12.4cm、器高3.0cm。775は森田C群の白磁碗。778は中国産の天目椀。780は瓦質土器の火舎。口縁部に菊花文をスタンプする。

SD343（Fig.55，PL.130）　寺熊調査区

806は糸切りの土師器皿。口径9.0cm、器高1.2cm。807・808はヘラ切りの土師器皿。口径9.1、9.6cm、器高1.2、0.9cm。土師器坏は802が糸切りのほかはヘラ切りである。802は口径16.5cm、器高3.2cm。ヘラ切りの土師器坏は口径14.9～16.5cm、器高2.8～3.4cm。平均口径15.6cm、平均器高3.0cm。805は土師器の高台付皿。794は瓦器椀。785は同安窯系青磁碗。791・788は白磁平底皿III類。786は白磁碗V－1類。789・790・787は白磁碗IV類。792は東播系須恵器の捏鉢。

SD349（Fig.56，PL.130）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗・皿・壺、染付碗、李朝の碗・壺、土師器椀・坏・皿・台付坏・台付皿、陶器鉢、備前焼甕、瓦器椀、瓦質土器火舎などが出土している。826は土師器の台付皿である。817は明代の染付碗で小野C群碗I類。外面に芭蕉葉文を描く。816も明代の染付碗だが、焼きが悪く釉が黄褐色を呈する。811は龍泉窯系青磁碗I－5類。809・810は龍泉窯系青磁碗V－2類、上田D類もしくはE類である。810は見込みに花文をスタンプする。815は森田B群の白磁高台付皿。814は白磁碗V－1類。813は白磁碗III類。

SD364（Fig.56）　寺熊調査区

833は土師器皿で底部はヘラ切り。口径9.2cm、器高1.5cm。831は白磁平底皿III類。832は中国陶器C群の捏鉢。

SD365（Fig.56）　寺熊調査区

843・841は土師器皿で、底部糸切り。口径9.1、9.0cm、器高1.1、1.2cm。839は白磁平底皿III類。837は白磁碗IV類。835・838は白磁碗V－1類。836は白磁碗IX類。

SD371（Fig.56）　寺熊調査区

855は土師器皿で、底部切り離しは磨滅により不明。口径10.0cm、器高1.3cm。851～854は土師器坏。853・852は糸切りで、残りは磨滅のために不明。口径14.0～16.1cm。器高3.2～3.3cm。平均口径15.4cm、平均器高3.3cm。848は白磁平底皿III類。847は白磁平底皿VI－1類。内面に劃花文を施す。849・850は瓦器椀。

SD397（Fig.57）　寺熊調査区

868～871は土師器坏で底部は糸切り。口径13.5cm～17.2cm、器高2.6～3.2cm。867は土師器の台付皿もしくは鉢。865は陶器の皿。赤茶色の胎土に褐色の釉がかかる。862は白磁平底皿III類。863は同安窯系青磁碗II類。864は白磁碗V－1類。

SD433（Fig.57）　寺熊調査区

904は備前焼擂鉢。IV期の製品。

SD486（Fig.58，PL.130）　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗・水注、土師器椀・坏・皿・鍋、瓦器椀・皿、陶器鉢、擂鉢などが出土している。Fig.58上段は中層出土遺物。923は白磁碗VI－2類。930は瓦器椀。中段は下層の遺物。951・946は底部ヘラ切りの土師器皿。口径8.7、9.0cm、器高1.0、1.4cm。948・952は底部糸切りの土師器皿。口径9.3、8.6cm、器高1.2、1.3cm。940は土師器坏。底部ヘラ切り。口径15.7cm、器高3.4cm。944は土師器丸底坏。内面にこてあて痕がみられる。口径15.8cm、器高3.3cm。941は土師器椀。921は高麗青磁碗。内面にヘラで文様を入れる。畳付を釉剝ぎする。924は白磁平底皿II－1類。918は白磁碗V－2類。922は白磁碗VI－1類。915は白磁碗II－1類。916は白磁碗IV－2類。927は中国陶器C群捏鉢。

下段は最下層出土。**950**は土師器皿で底部糸切り。口径8.7cm、器高1.8cm。**945・947**は土師器皿で底部ヘラ切り。口径9.8、10.0cm、器高1.4、1.0cm。**935・936・943**は土師器坏で底部ヘラ切り。口径14.5～16.1cm。器高3.2～3.5cm。平均口径15.1cm、平均器高3.4cm。**932**は土師器椀。**934**は瓦器椀。**931・933**は瓦器椀。**920**は白磁平底皿II－2類。**917**は白磁碗II－1類。**914**は白磁碗IV－2類。

SD707（Fig.57）　寺熊調査区

1119は土師器坏で底部ヘラ切り。口径15.3cm、器高3.1cm。**118**は白磁碗IV－2類。

SD709（Fig.57，PL.132）　寺熊調査区

1126は同安窯系青磁碗I類である。

SD710（Fig.59，PL.131）　寺熊調査区

白磁碗・皿、瓦器椀、土師器坏・皿などが出土している。Fig.59上段は上層出土土器。**1149・1143・1144**は土師器坏で底部糸切り。口径15.0～15.5cm、器高2.9～3.0cm。平均口径15.2cm、平均器高3.0cm。**1136～1139**は土師器丸底坏。**1138**がヘラ切りで、口径16.5cm、器高2.9cm。ほかは糸切りで、口径15.0～15.8cm、器高3.4～3.5cm。平均口径15.5cm、平均器高3.4cm。**1139**はスス付着。**1132**は瓦器椀。中段以下は下層の遺物。**1154～1156**は糸切りの土師器皿。口径8.5～9.8cm、器高1.1～1.3cm。平均口径9.1cm、平均器高1.2cm。**1157・1152・1153**はヘラ切りの土師器皿。口径9.0～9.3cm、器高1.1～1.6cm。平均口径9.1cm、平均器高1.4cm。土師器坏はすべて底部糸切り。口径15.0～15.5cm、器高2.7～3.4cm。平均口径15.3cm、平均器高3.0cm。**1134・1135・1150**は土師器丸底坏。**1150**はスス付着。**1135・1150**は糸切りで口径16.3、17.3cm、器高3.4、3.6cm。**1134**は磨滅してよくわからないがヘラ切りか。口径16.0cm、器高4.0cm。**1129～1131**は瓦器椀。**1128**は白磁碗II類。**1127**は白磁碗IV－2類。

SD727（Fig.60）　寺熊調査区

土師器皿は**1223～1228**が底部糸切り、そのほかは磨滅により不明である。口径8.7～9.6cm、器高1.0～1.6cm。平均口径9.2cm、平均器高1.3cm。土師器坏は**1219・1222**がヘラ切り。口径14.8、14.6cm、器高2.9、3.1cm。**1217**が糸切り。口径15.6cm、器高2.5cm。そのほかは磨滅で不明。**1212**は同安窯系青磁碗で、博多分類でその他の青磁III類とされるもの。見込みの釉を輪状に掻き取る。高台内に「上」の墨書。**1215**は白磁皿III類。**1213**は白磁碗IX類。**1214**は白磁碗IV－2類。

SD730（Fig.57・60，PL.132）　寺熊調査区

1258は土師器坏。口径17.2cm、器高3.0cm。**1245**は中国陶器C群捏鉢。**1240**は白磁碗IX類。**1243・1238**は白磁碗IV類。土師器皿は磨滅が著しく、底部の切り離しが不明なものがあるが、わかるものは**1256・1261・1255・1258・1257**が糸切り、**1259**がヘラ切り。糸切りは口径8.9～9.2cm、器高1.0～1.6cm。平均口径9.1cm、平均器高1.2cm。土師器坏も同様に磨滅が著しい。**1251・1249**は糸切りで、口径15.3、17.3cm、器高3.0、3.5cm。**1247・1248**はヘラ切りで、口径16.7、16.1cm、器高3.2、3.0cm。**1246**は瓦器椀。**1242**は白磁碗VI－1類。**1235**は白磁碗IX類。**1236**は白磁碗IV－2類。**1244**は中国陶器B群四耳壺。

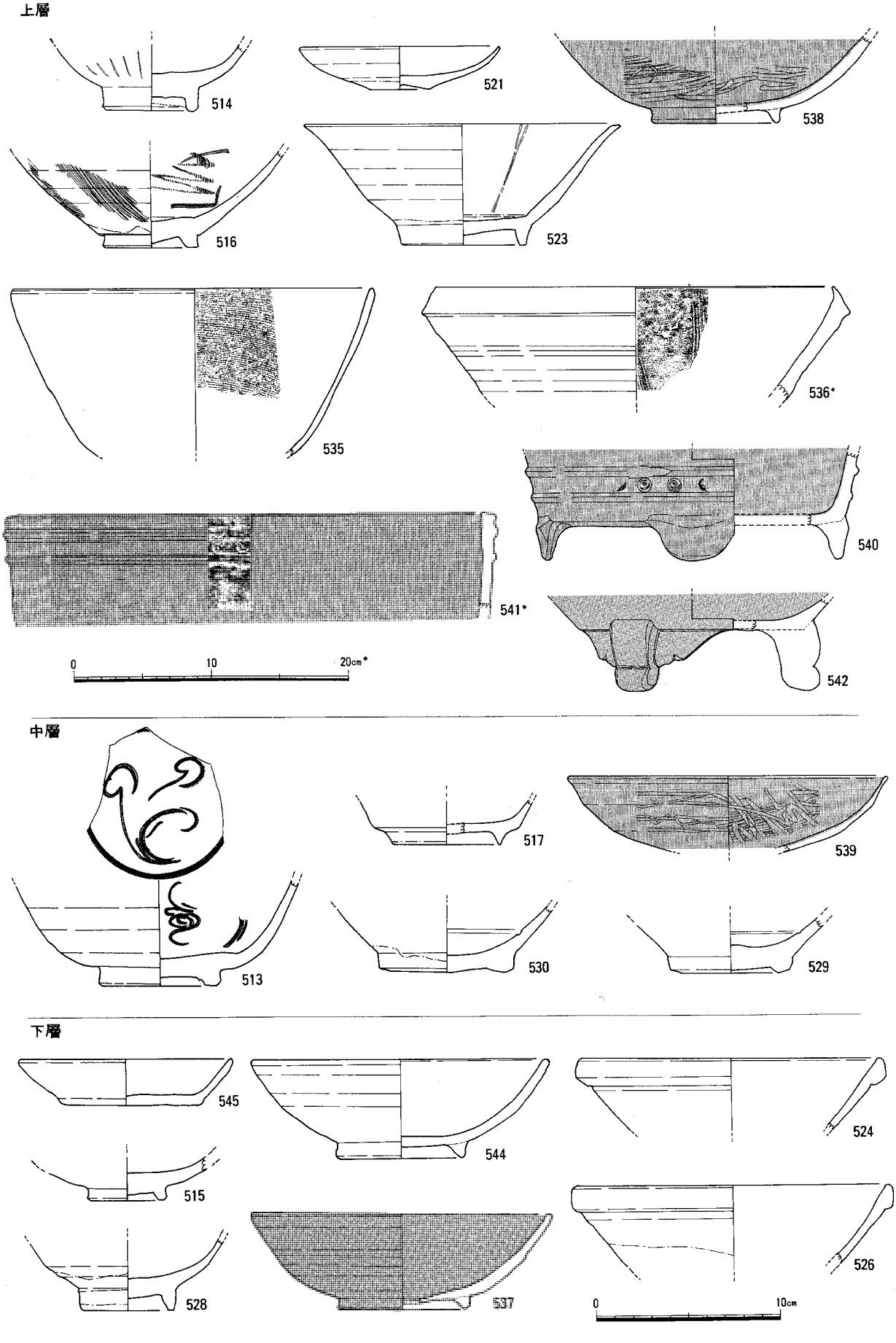


Fig.47　溝SD318出土遺物実測図(1/3・1/4*)

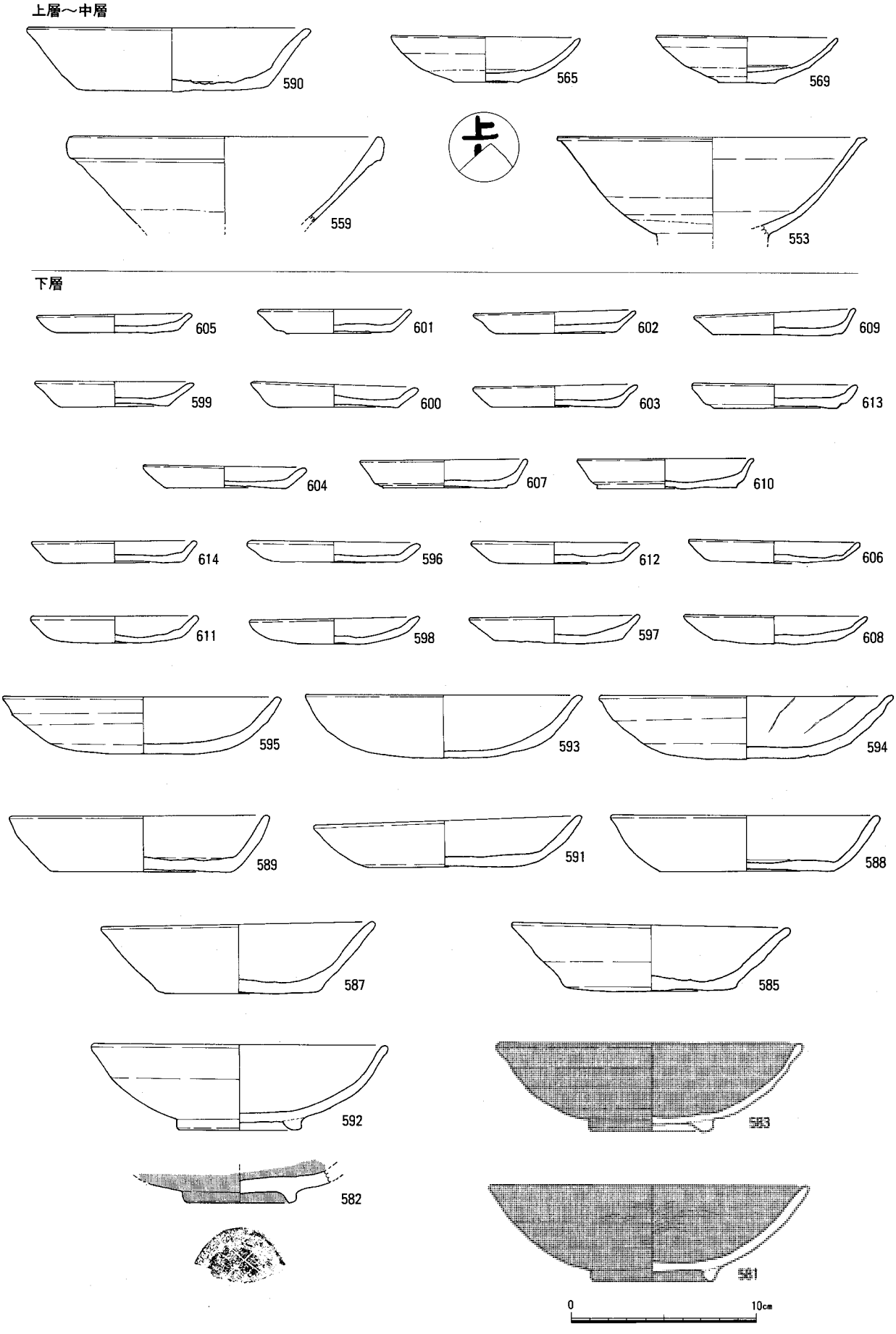


Fig.48　溝SD320出土遺物実測図１(1/3)

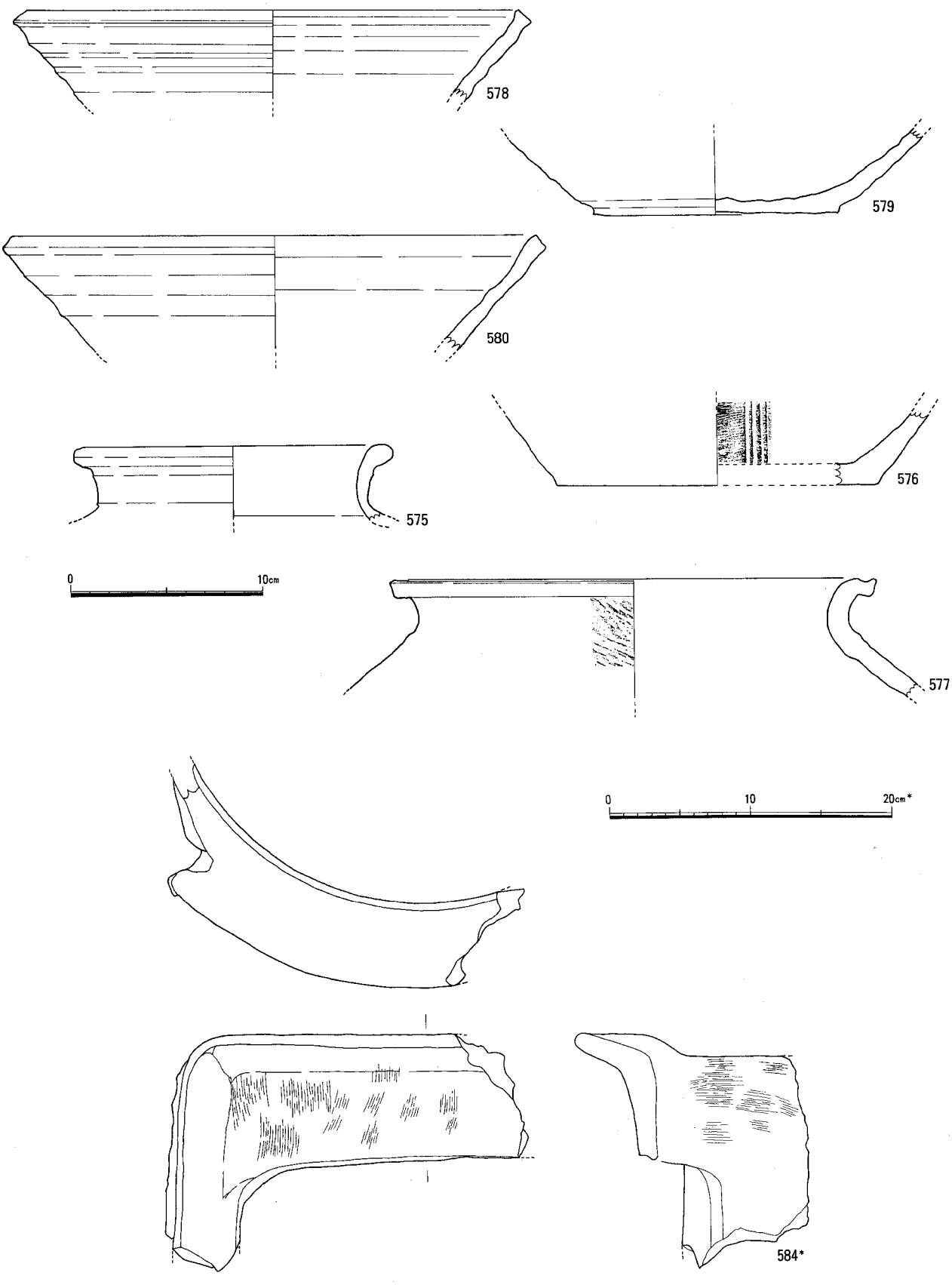


Fig.49　溝SD320出土遺物実測図2(1/3・1/4*)

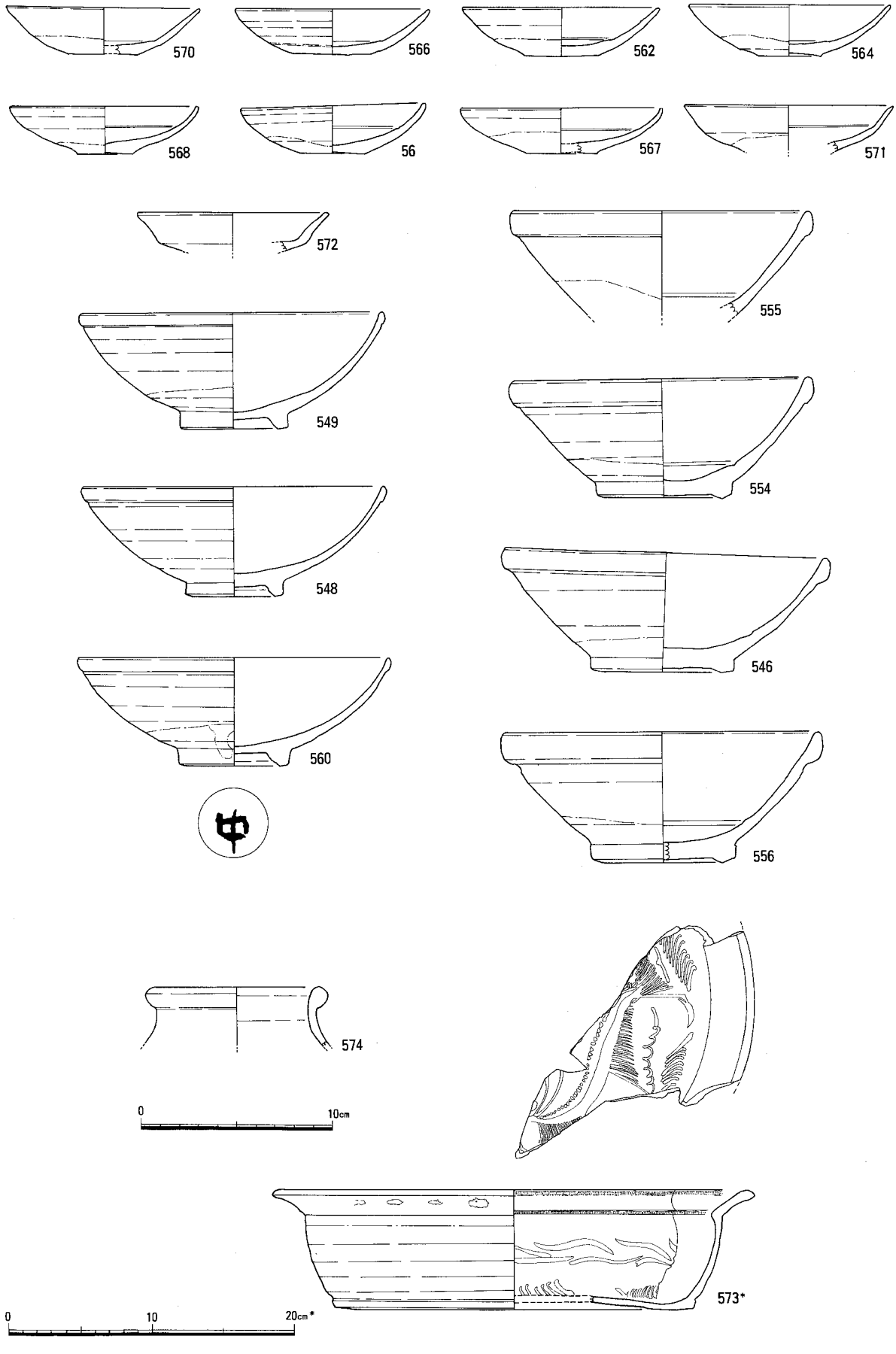


Fig.50　溝SD320下層出土遺物実測図(1/3・1/4*)

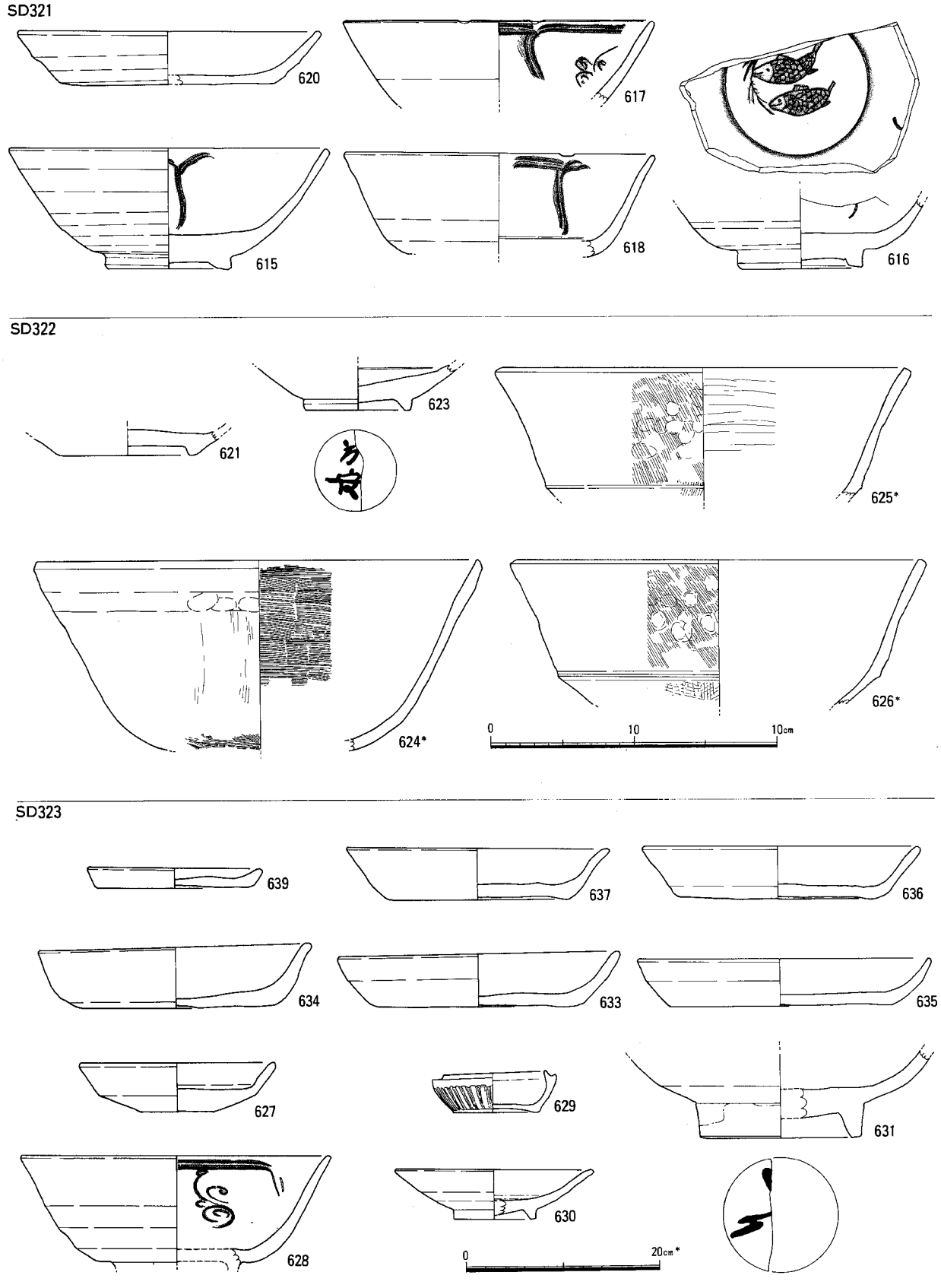


Fig.51　溝SD321・322・323出土遺物実測図(1/3・1/4*)

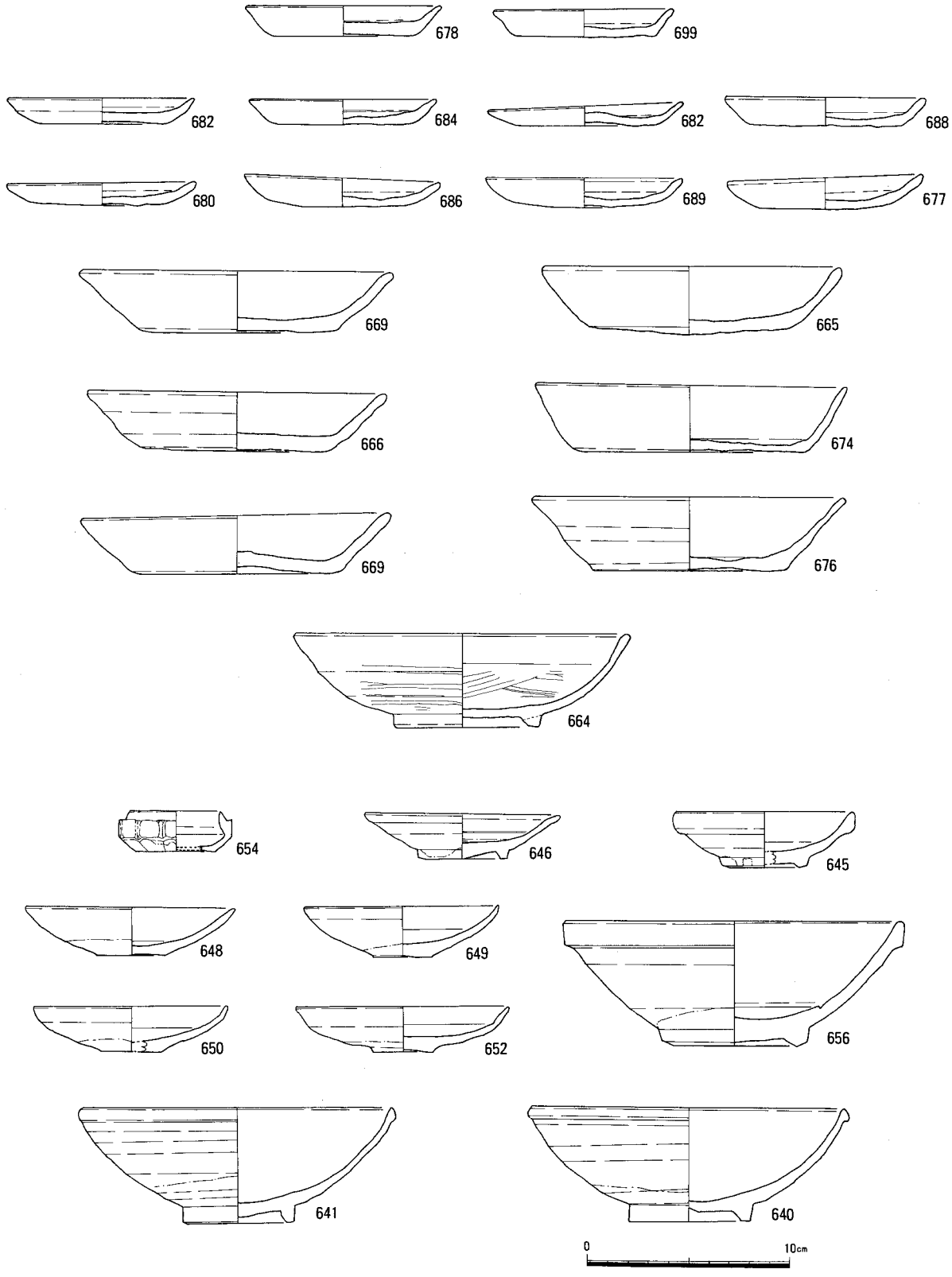


Fig.52　溝SD327上層出土遺物実測図(1/3)

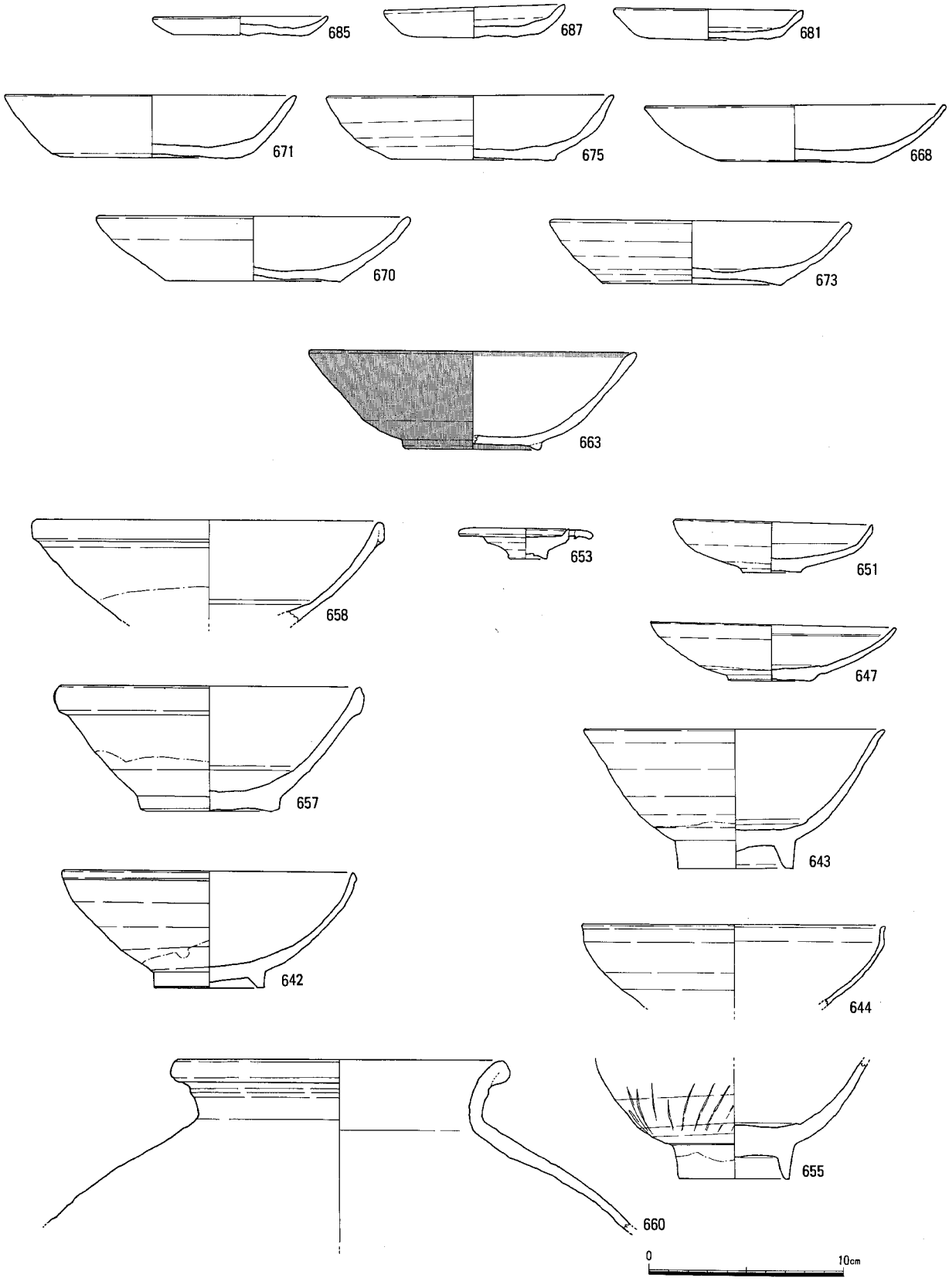
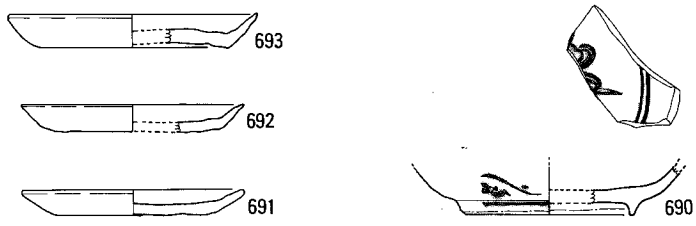
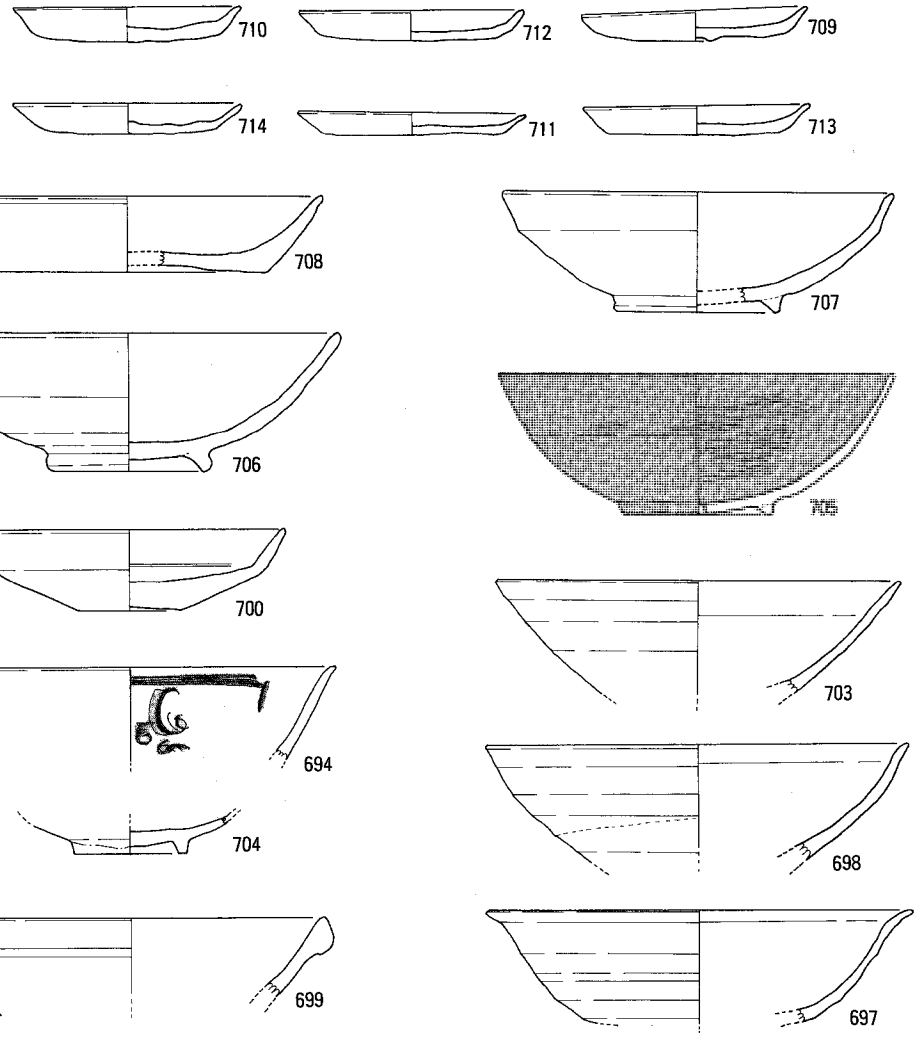


Fig.53　溝SD327下層出土遺物実測図(1/3)

SD332



SD333



SD334

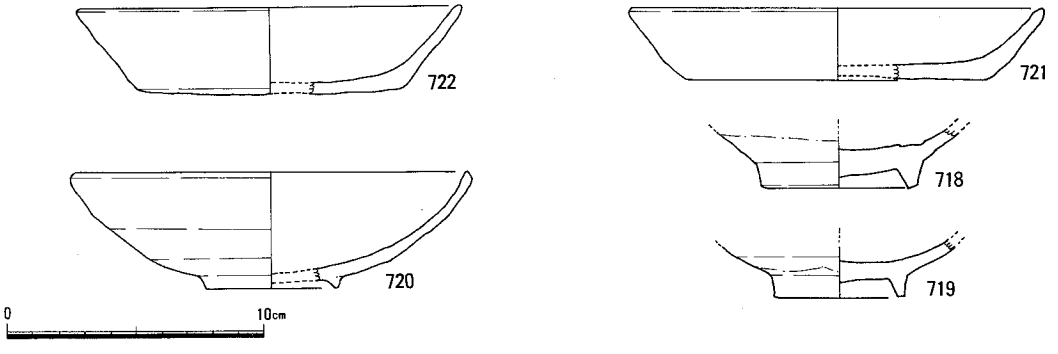


Fig.54　溝SD332・333・334出土遺物実測図(1/3)

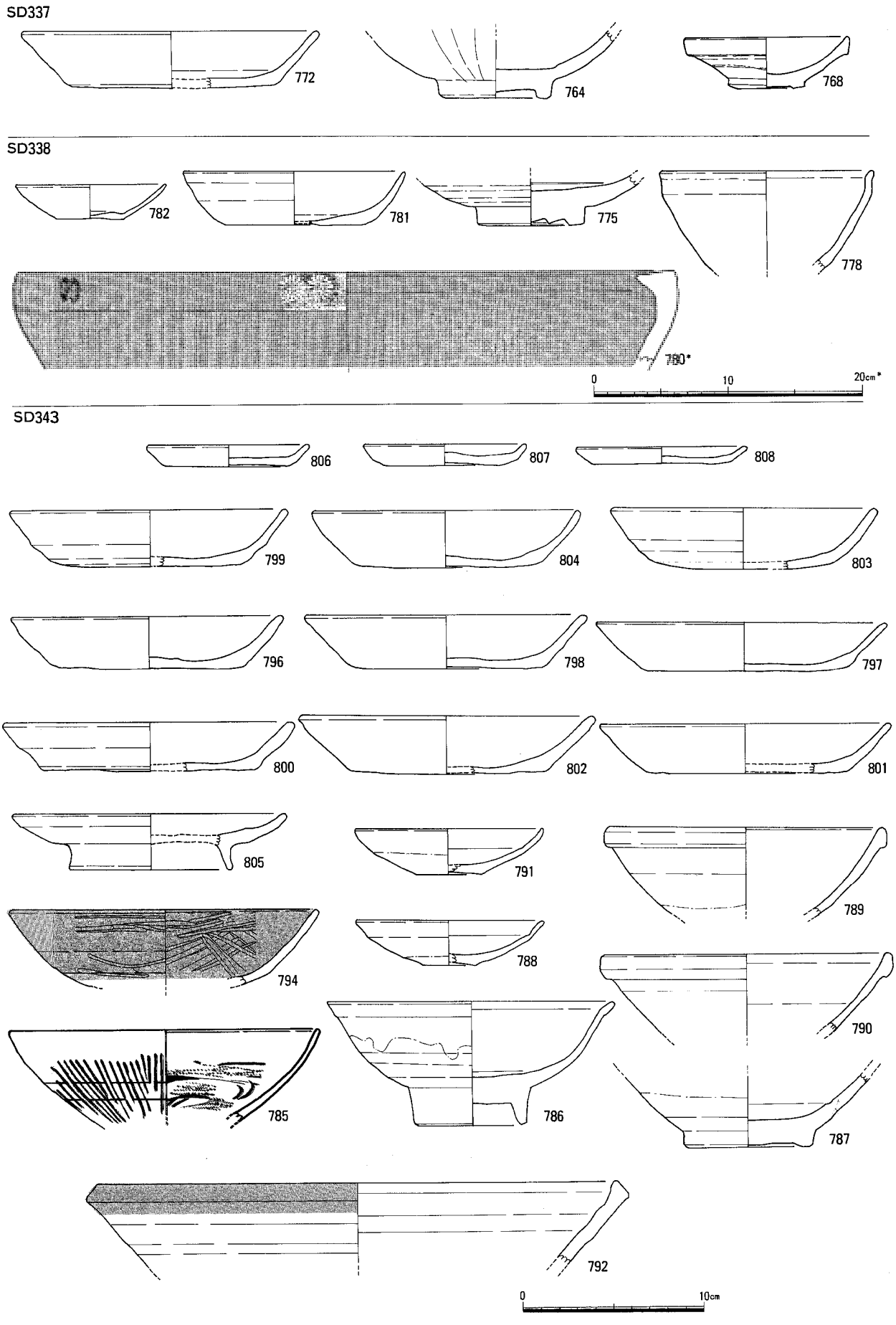


Fig.55　溝SD337・338・343出土遺物実測図(1/3・1/4*)

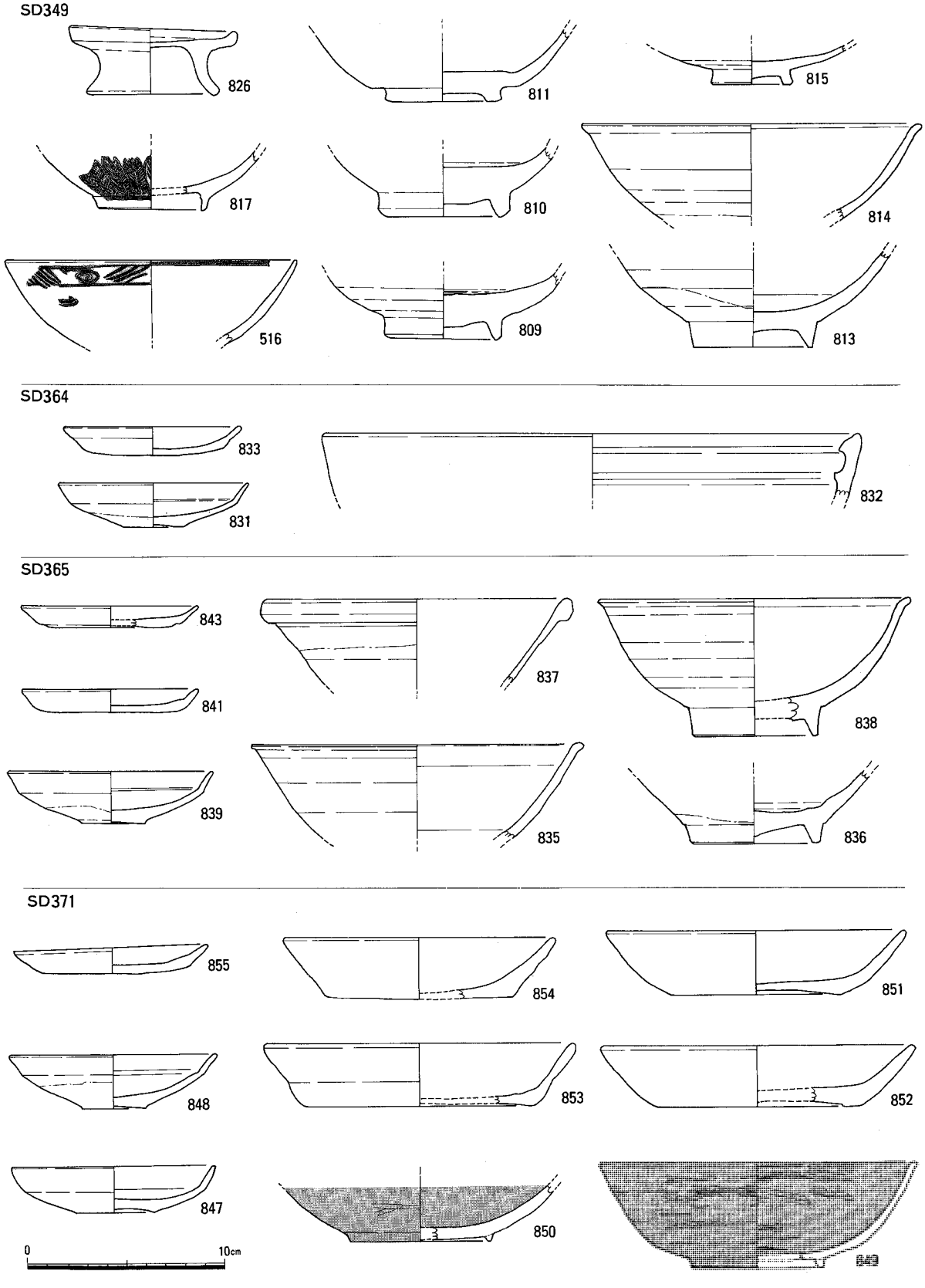


Fig.56　溝SD349・364・365・371出土遺物実測図(1/3)

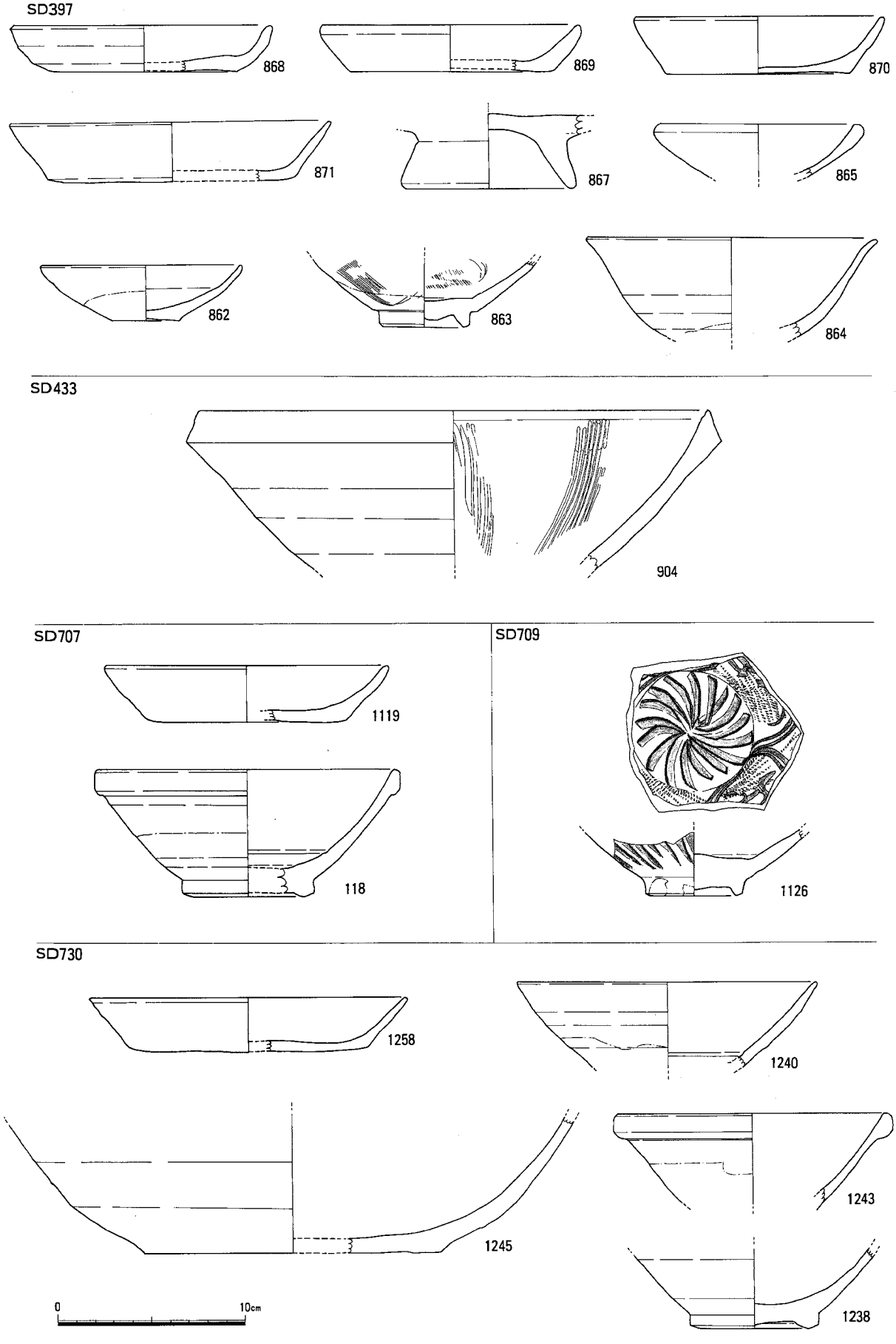


Fig.57　溝SD397・433・707・709・730出土遺物実測図(1/3)

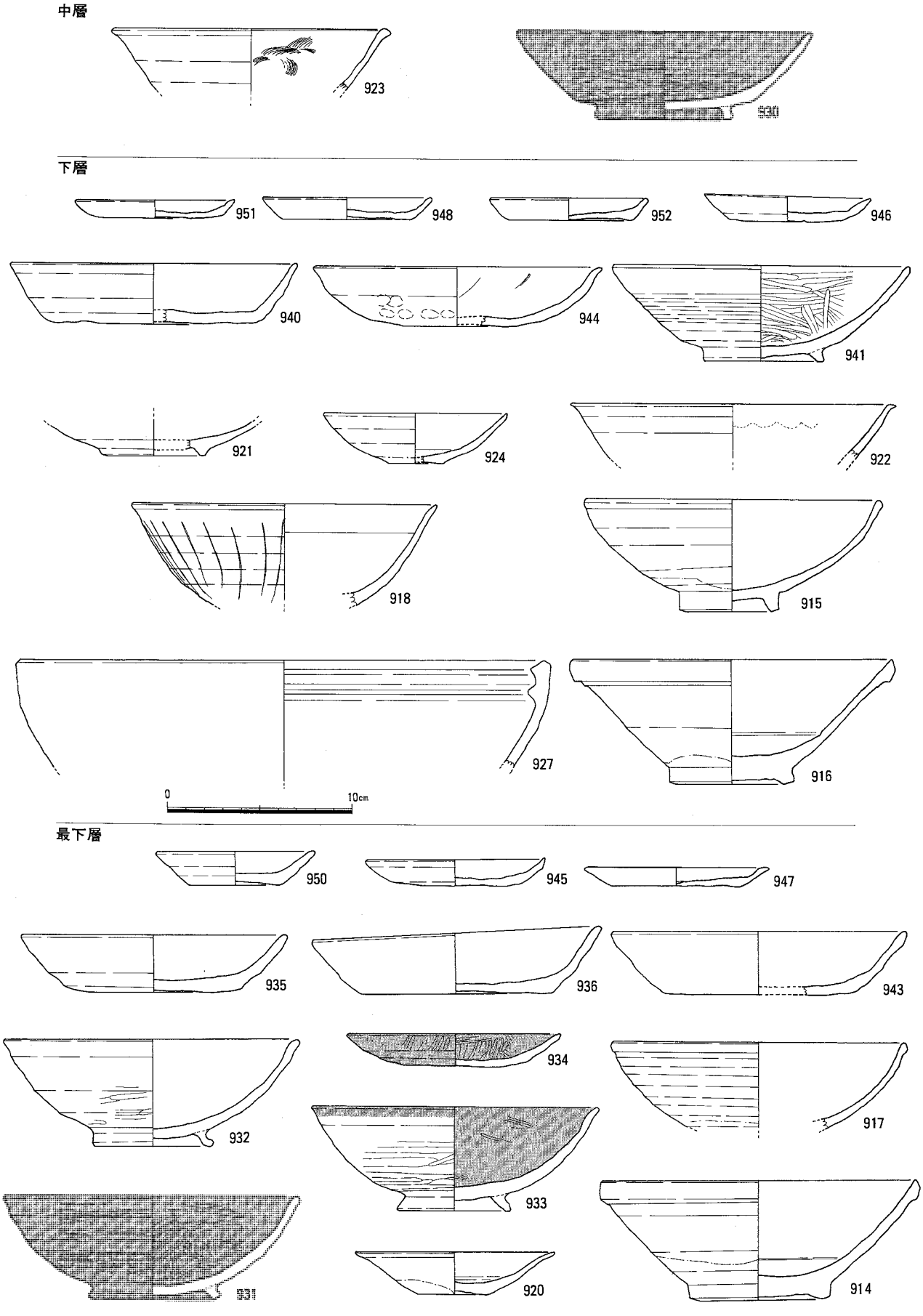


Fig.58　溝SD486出土遺物実測図(1/3)

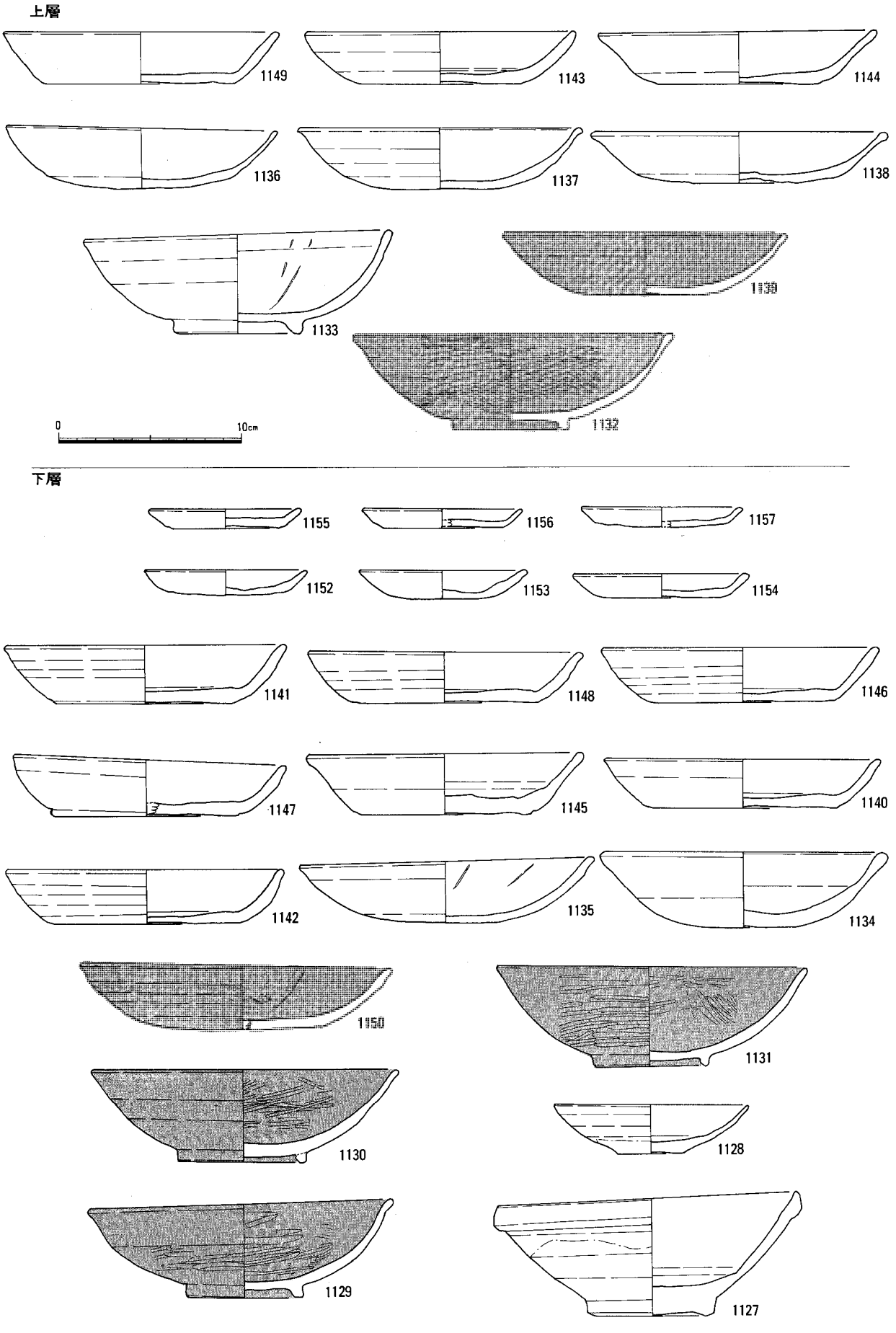


Fig.59　溝SD710出土遺物実測図(1/3)

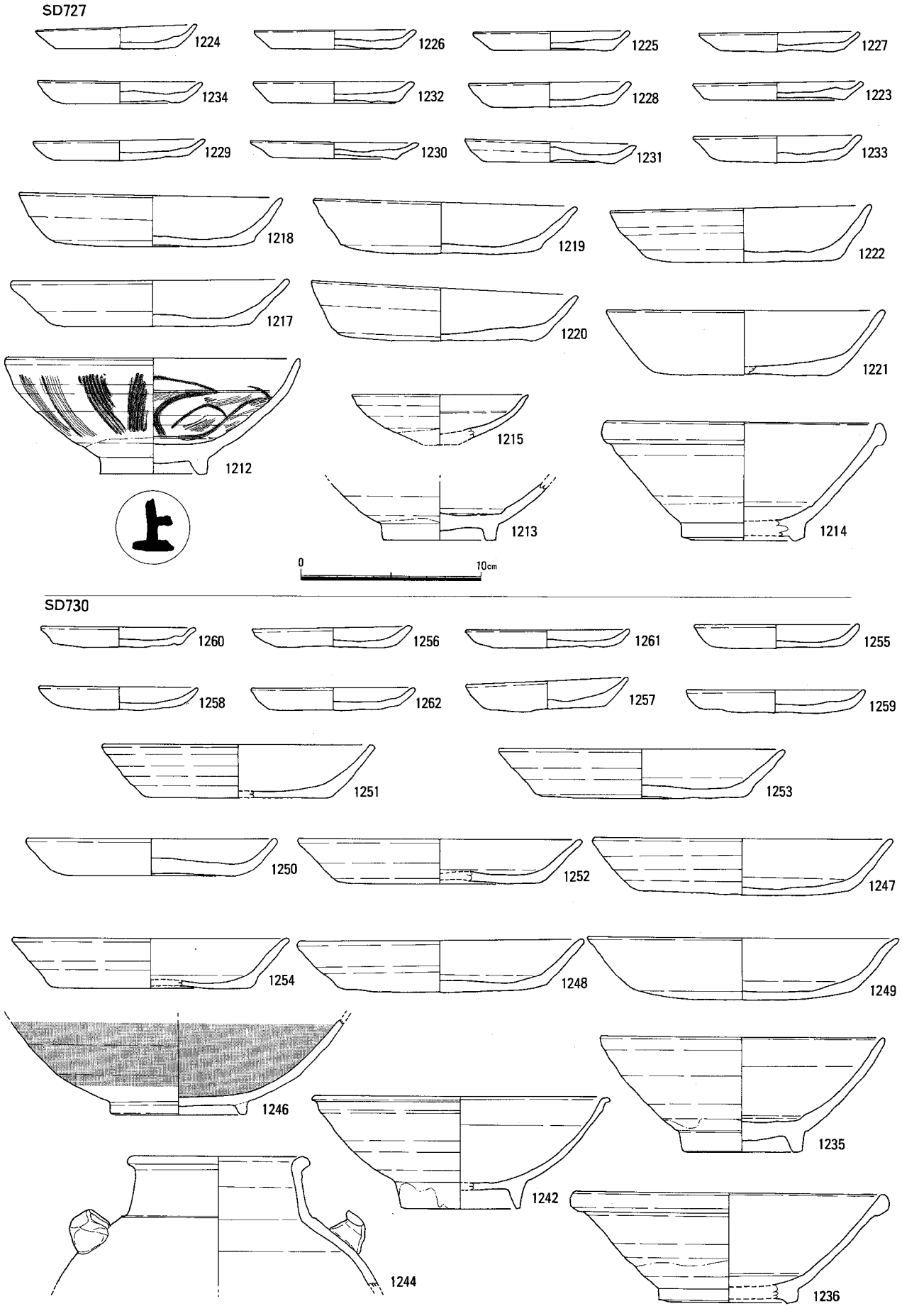


Fig.60　溝SD727・730出土遺物実測図(1/3)

SD740（Fig.61，PL.132）　寺熊調査区

1269・1270は土師器皿で、底部は糸切り。口径9.6、9.9cm、器高1.1、1.3cm。**1266～1268**は土師器坏。底部切り離し痕は摩滅で不明。口径15.3～15.5cm、器高2.5～3.3cm。平均口径15.4cm、平均器高2.9cm。**1264・1265**は瓦器皿。底部はヘラ切り。**1263**は白磁碗IV類。

SD750（Fig.61）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、瓦器椀などが出土している。**10275**は中国陶器B群の短頸壺である。**10272・10273**は白磁碗。**10272**の高台内には墨書がある。**10274**は青磁碗。**10115**は中国陶器A群I類盤－1である。

SD751（Fig.61）　寺熊調査区

10298は龍泉窯系青磁碗II－1類。

SD756（Fig.61，PL.132）　寺熊調査区

10112は土師器丸底坏で底部はヘラ切り。口径14.6cm、器高3.6cm。

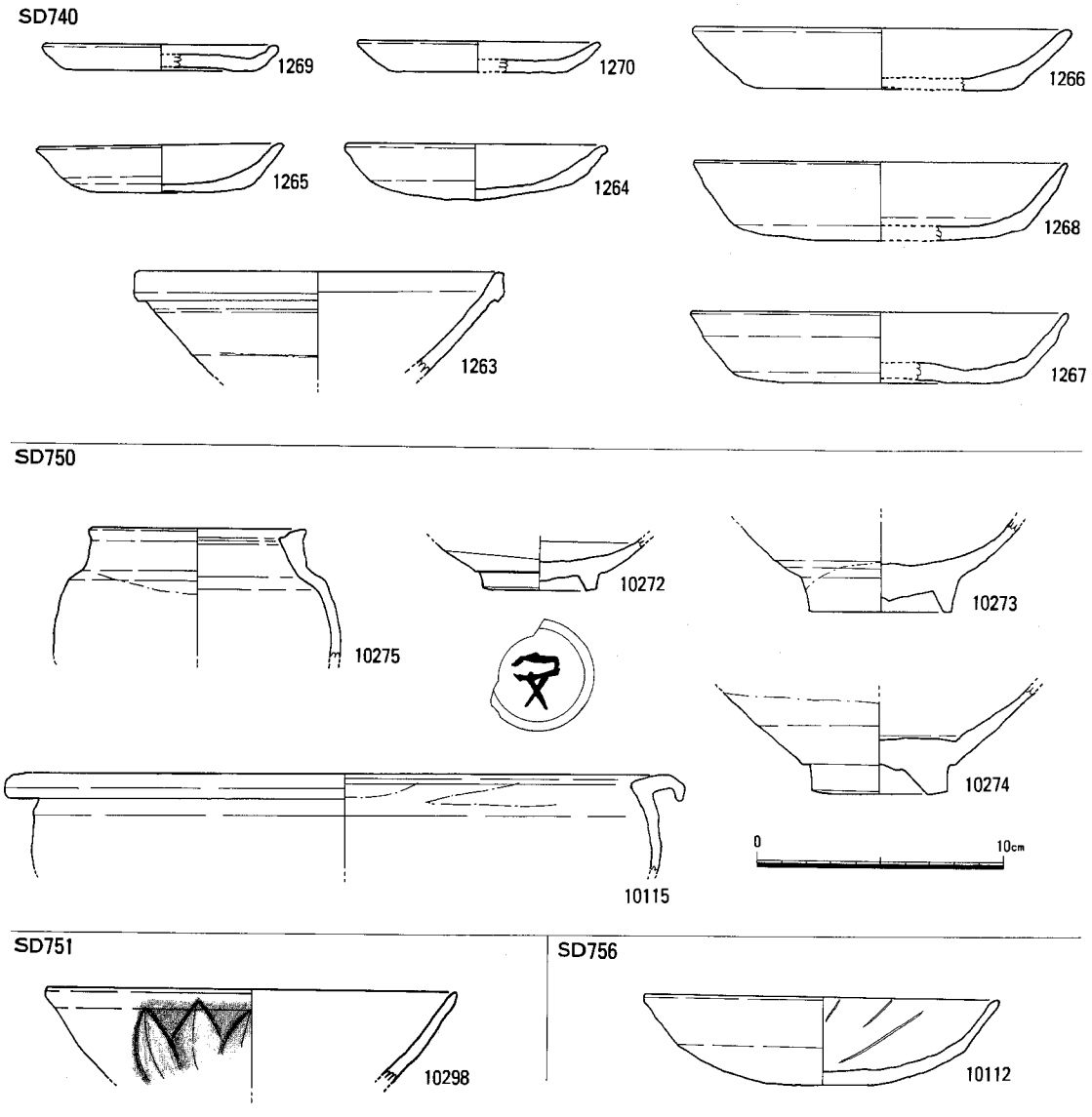


Fig.61　溝SD740・750・751・756出土遺物実測図(1/3)

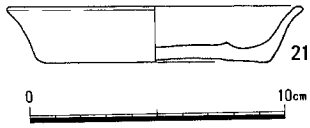


Fig.62　井戸SE11出土遺物実測図(1/3)

SE11（Fig.62）　　生水調査区

土師器坏・皿が出土している。**21**は土師器坏で、底部は糸切り。口径11.8cm、器高2.2cm。

SE120（Fig.63，PL.133）　　寺熊調査区

白磁皿、青磁碗・壺、土師器椀・坏・皿、陶器壺・鉢・盤、瓦器椀、瓦質土器火舎などが出土している。Fig.63上段は堀方出土。**365**は土師器皿。底部糸切り。口径8.7cm、器高1.0cm。**363・362・383**は土師器坏。底部糸切り。口径15.0～15.7cm、器高2.7～3.1cm。平均口径15.2cm、平均器高2.9cm。**360**は瓦器椀。**349**は白磁平底皿III類。**351**は白磁碗IV類。**352**は白磁碗II－1類。**347**は白磁碗IX類。**366**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－3類。中段は井筒内中層出土。**364**は土師器皿。底部糸切り。口径9.1cm、器高1.5cm。**384～386・361**は土師器坏。底部糸切り。口径14.4～16.3cm、器高3.0～3.5cm。平均口径15.3cm、平均器高3.3cm。**358**は黒色土器B類。**345**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－8類。**350**は白磁碗IV類。**356・357**は陶器の壺。**355**は中国陶器A群Ⅰ類盤－1。下段は井筒内下層出土。**387**は土師器の坏。底部糸切り。口径15.0cm、器高2.8cm。**353**は白磁高台付皿II類。**346**は同安窯系青磁碗II類。**354**は陶器の壺。

SE481（Fig.64，PL.133）　　寺熊調査区

土師器坏・皿・高台付坏などが出土している。**496・497**は土師器皿。底部糸切り。口径は8.5、8.8cm、器高は1.7、1.5cm。**495**は土師器坏。底部糸切り。口径13.0cm、器高3.2cm。**494**は土師器の高坏。**491・492**は瓦質の盤。厚手で、外面体部はミガキだが、そのほかは粗いつくり。

SE711（Fig.64）　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、土師器坏・鍋・鉢、陶器鉢などが出土している。**500**は白磁碗IV－2類。

SE718（Fig.64）　　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗、陶器甕、土師器坏・皿、瓦質土器鉢などが出土している。**1200～1202**は土師器坏。底部は糸切り。口径10.4～11.8cm、器高2.2～2.6cm。平均口径11.0cm、平均器高2.4cm。

SE724（Fig.64，PL.133）　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、青白磁合子、土師器坏・皿、陶器壺・甕・鉢、瓦器椀、瓦質土器火舎などが出土している。**10297**は土師器皿。口径8.0cm、器高1.6cm。**1206**は龍泉窯系青磁碗II類。見込みに花文のスタンプを施す。**1207**は白磁碗IV類。**1208**は瓦質土器の釜。**1209**は瓦質土器の火舎。

SE752（Fig.64）　　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗・皿、土師器坏・皿、陶器鉢などが出土している。**10117**は同安窯系青磁碗。**10116**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－4類。

SE753（Fig.64）　　寺熊調査区

10113は底部糸切りの土師器坏。口径15.0cm、器高3.2cm。**10114**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径16.8cm、器高3.0cm。

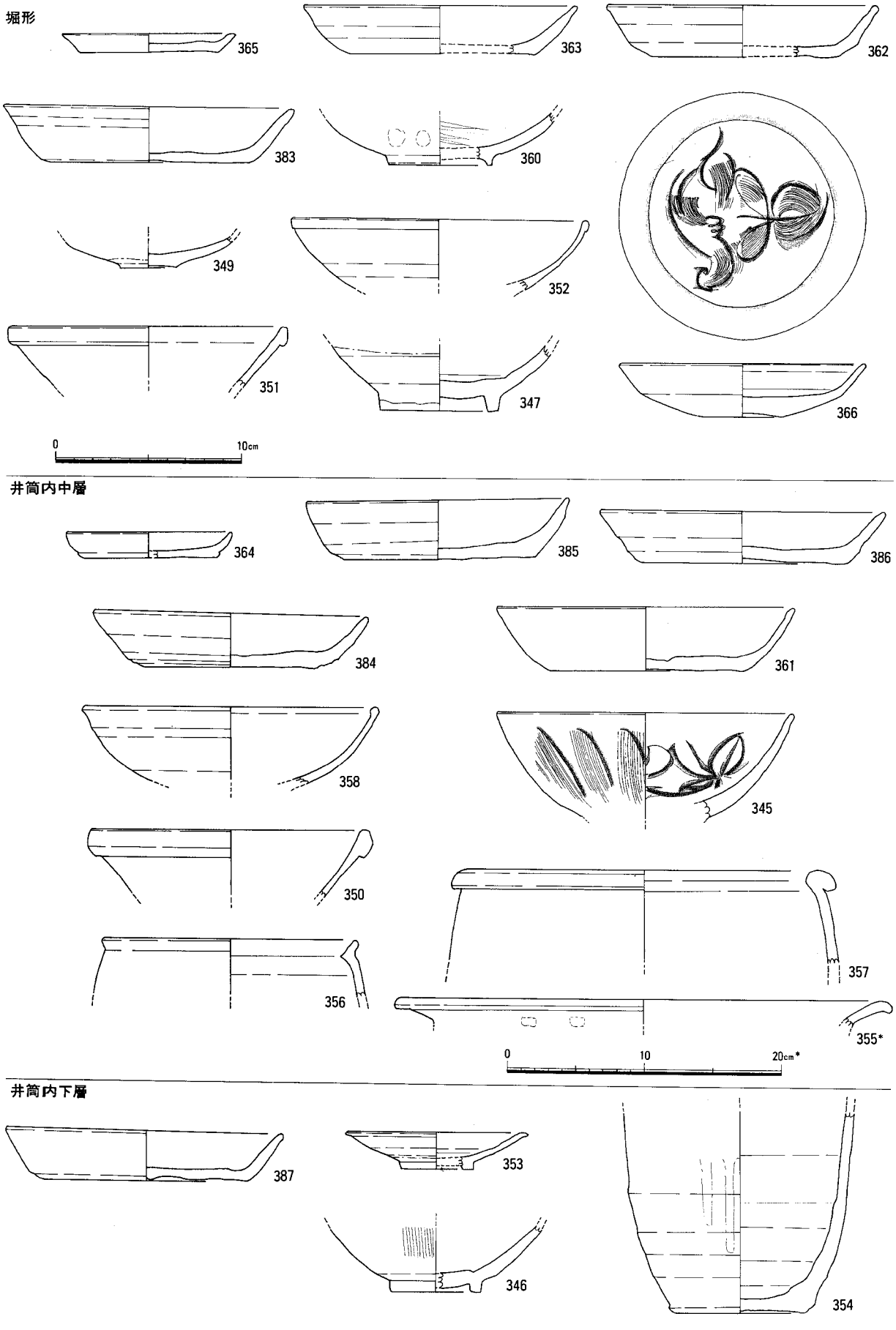


Fig.63　井戸SE120出土遺物実測図(1/3・1/4*)

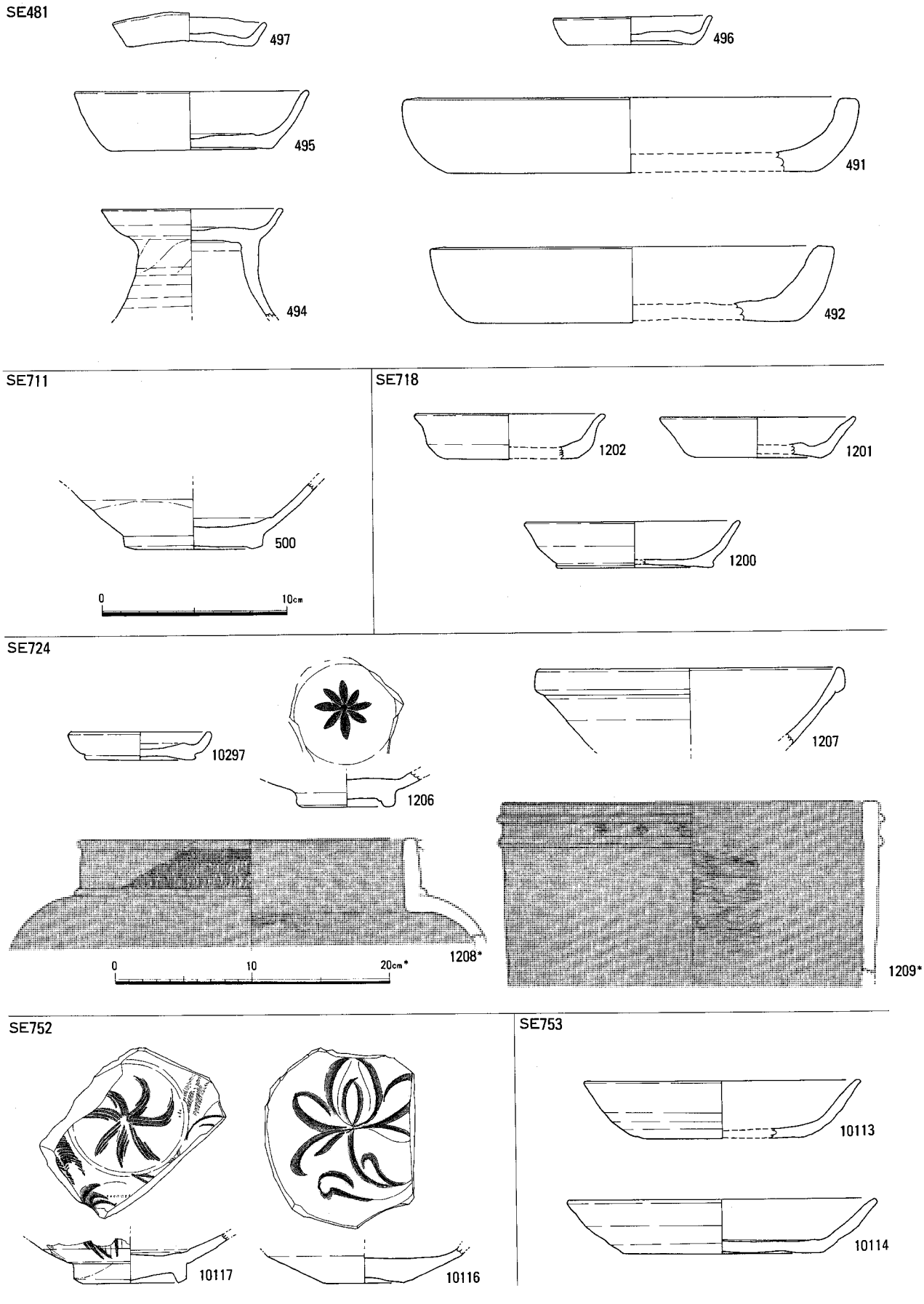


Fig.64　井戸SE481・711・718・724・752・753出土遺物実測図(1/3・1/4*)

SG122（Fig.65，PL.136）　寺熊調査区

白磁碗、青磁碗、染付碗、土師器坏・皿・鉢、瓦器椀、瓦質土器火舎、陶器擂鉢、瀬戸焼碗、常滑焼甕などが出土している。**388**は底部糸切りの土師器皿。口径8.1cm。器高0.8cm。**374・375**は天目椀。**367・368**は龍泉窯系青磁碗Ⅴ類。**367**は上田Ｅ類、**368**は上田Ｄ類である。**369**は森田Ｄ類の白磁高台付皿である。高台内に「一」の墨書。**373**は白磁碗Ⅳ類。**371**は白磁碗Ⅵ－２類。**343**は陶器の甕。**380**は瓦質土器の釜。**381**は瓦質土器の風炉。

SG488（Fig.66～68，PL.137・138）　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁碗・皿・壺、青白磁合子、土師器坏・皿・台付坏・台付皿、瓦器椀、瓦質土器火舎、陶器甕・鉢などが出土している。土師器皿は**1063・1042**がヘラ切り。口径9.0、9.2cm、器高1.5、1.3cm。そのほかは糸切り。口径8.8～9.7cm、器高0.8～1.6cm。平均口径9.3cm、平均器高1.3cm。**990**は高台付皿。土師器坏はすべて糸切り。口径14.4～16.4cm、器高2.5～3.8cm。平均口径15.5cm、平均器高3.1cm。**984～988**は高台付坏。**928・983**は瓦器椀。**965**は白磁碗Ⅸ類。**972・967・969・963・964・968**は白磁碗Ⅵ－１類。**974**は白磁碗Ⅳ－２類。**973**は白磁碗Ⅳ類。**977**は内面無文の白磁平底皿Ⅵ－１類。**1273**は青白磁合子身。**956**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－１類。**957・958**は同安窯系青磁皿Ⅰ－１類。**955**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類。**953**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－３類。**961**は同安窯系青磁碗Ⅱ類。

SK126（Fig.69，PL.134）　寺熊調査区

短刀、刀子を小口に平行に揃えて副葬している。他の副葬品の土師器坏３枚・皿９枚、龍泉窯系青磁小碗、磁竈窯緑釉水注は北西側の小口近くの棺外から出土している。土師器坏・皿ともすべて底部糸切りである。土師器皿は口径9.2～9.7cm、器高1.1～1.5cm。平均口径9.4cm、平均器高1.3cm。土師器坏は口径15.2～15.7cm、器高3.1～3.3cm、平均口径15.4cm、平均器高3.2cm。**359**は龍泉窯系青磁Ⅰ類小碗１である。**390**は磁灶窯緑釉水注である。把手と注口を欠損する。外面は型押成形。外底に６本の陽印刻文が放射状にある。胎土は淡灰褐色で、きめは細かいが、中に細かな黒色斑含む。緑色透明釉が高台脇近くまでかかるが、一部は外底にまで達する。釉のかかりは不均等である。釉下の化粧土は厚い。口径3.3cm、受部径2.4cm、器高6.6cm、底径5.9cm。

SK129（Fig.70）　寺熊調査区

410は龍泉窯系青磁皿。高台内に墨書がある。

SK335（Fig.70，PL.134）　寺熊調査区

土師器坏・皿59枚が集積した状態で出土している。土師器皿は**759・756・762・743・758・763**が底部糸切りでそのほかはヘラ切り。糸切りは口径8.6～9.4cm、器高0.7～1.5cm。平均口径9.0cm、平均器高1.0cm。ヘラ切りは口径8.7～9.0cm、器高1.0～1.4cm。平均口径8.9cm、平均器高1.1cm。土師器坏はすべてヘラ切り。口径16.0～18.0cm、器高2.7cm～3.2cm。平均口径16.6cm、平均器高3.0cm。

SK392（Fig.71，PL.135）　寺熊調査区

857は糸切りの土師器坏。口径15.0cm、器高2.2cm。**856**はヘラ切りの土師器坏。口径14.2cm、器高2.6cm。

SK418（Fig.71，PL.135）　寺熊調査区

白磁碗・皿、青磁皿、土師器椀・坏・皿、瓦器椀、陶器鉢などが出土している。**887～890**は土師器皿。底部は糸切り。口径9.2～9.6cm、器高1.0～2.2cm。平均口径9.3cm、平均器高1.0cm。**885・886**は土師器坏。**886**は底部欠損で切り離し痕不明。口径16.2cm、器高3.0cm。**885**は底部糸切り。口径17.2cm、器高3.4cm。**878**は白磁平底皿Ⅲ類。**880**は白磁碗Ⅳ類。**879**は白磁碗Ⅵ－１類。**881**は白磁碗Ⅸ類。**883**は東播系須恵器の捏鉢。

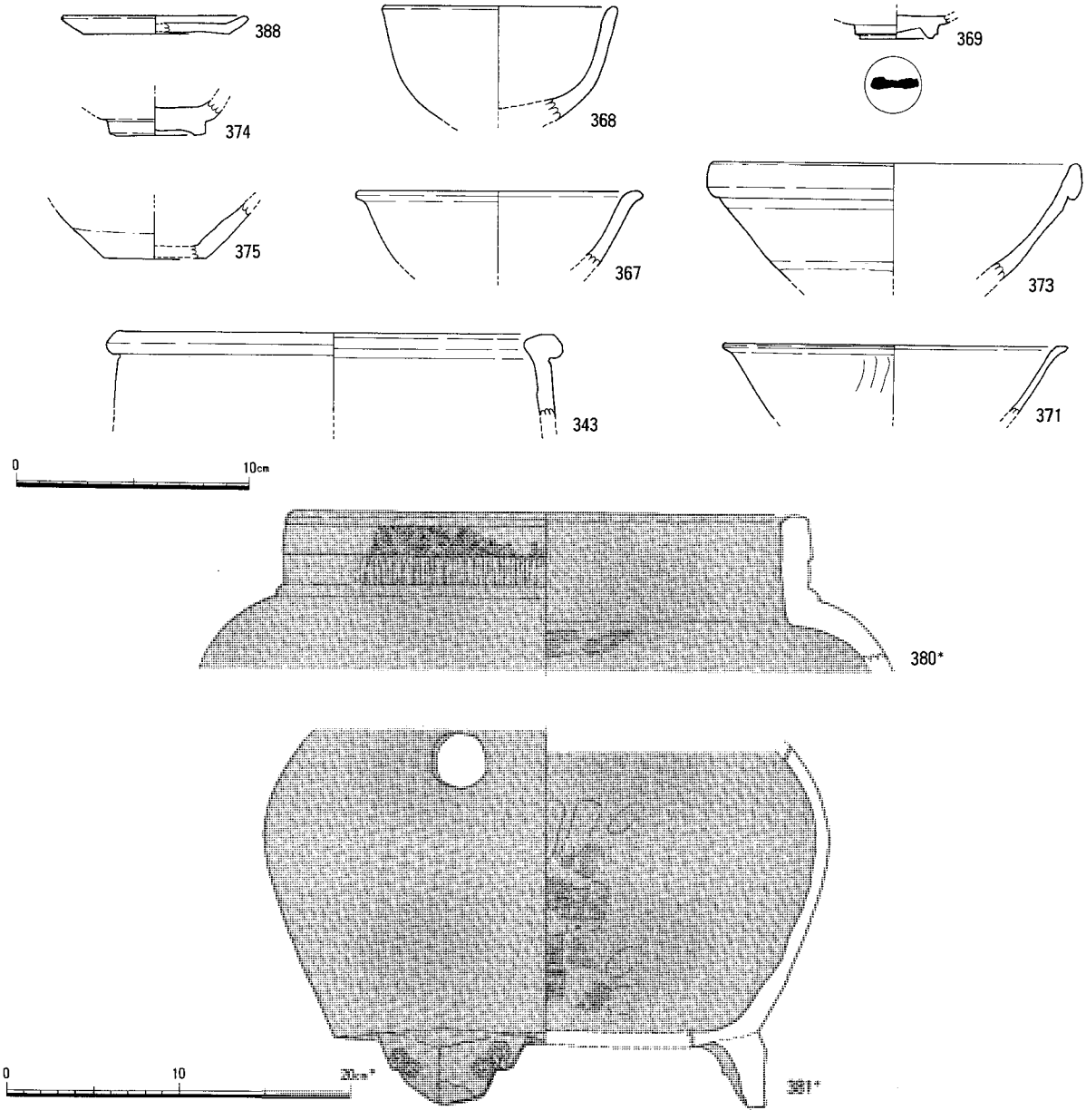


Fig.65　苑池SG122出土遺物実測図(1/3・1/4*)

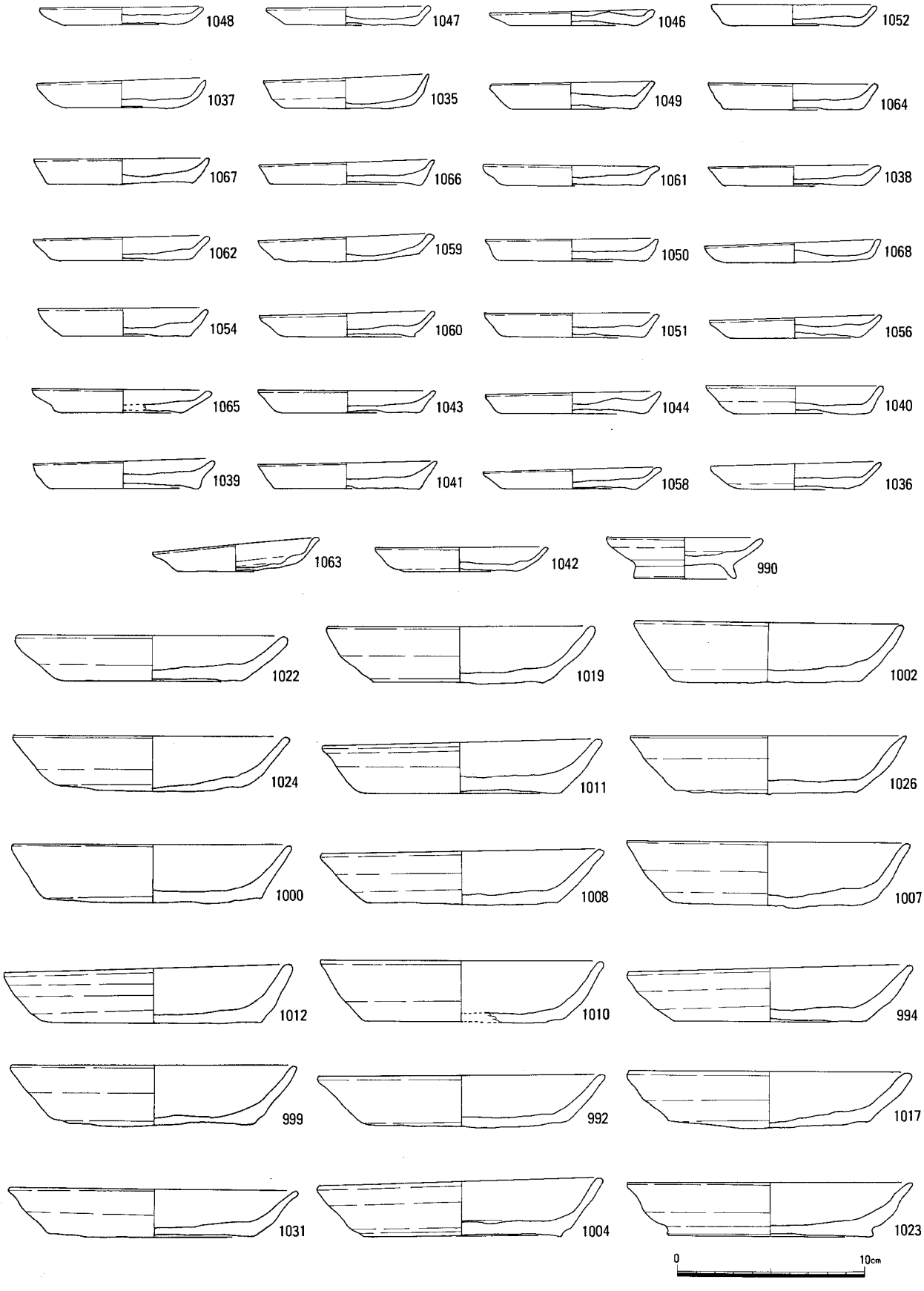


Fig.66　苑池SG488出土遺物実測図1 (1/3)

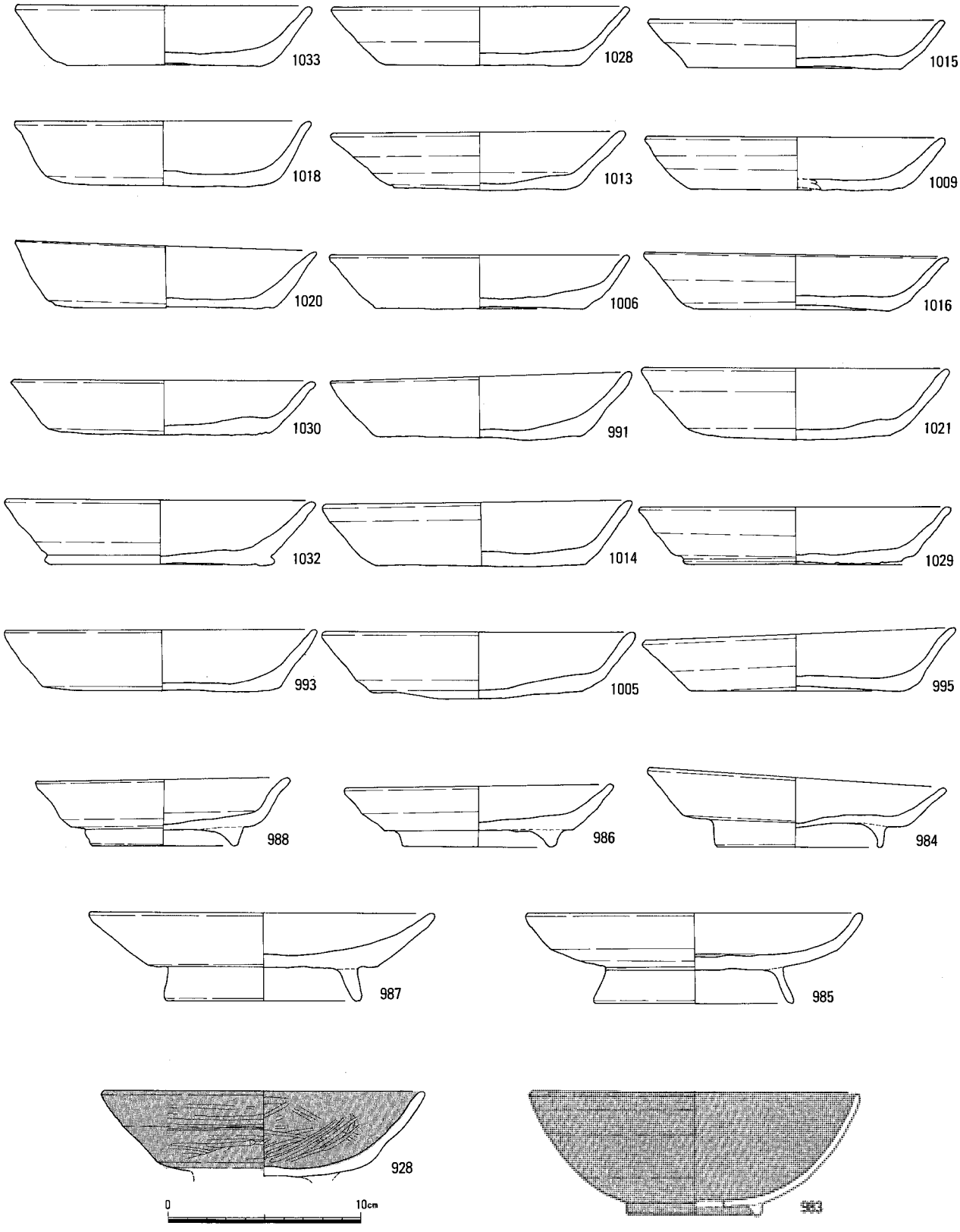


Fig.67　苑池SG488出土遺物実測図２(1/3)

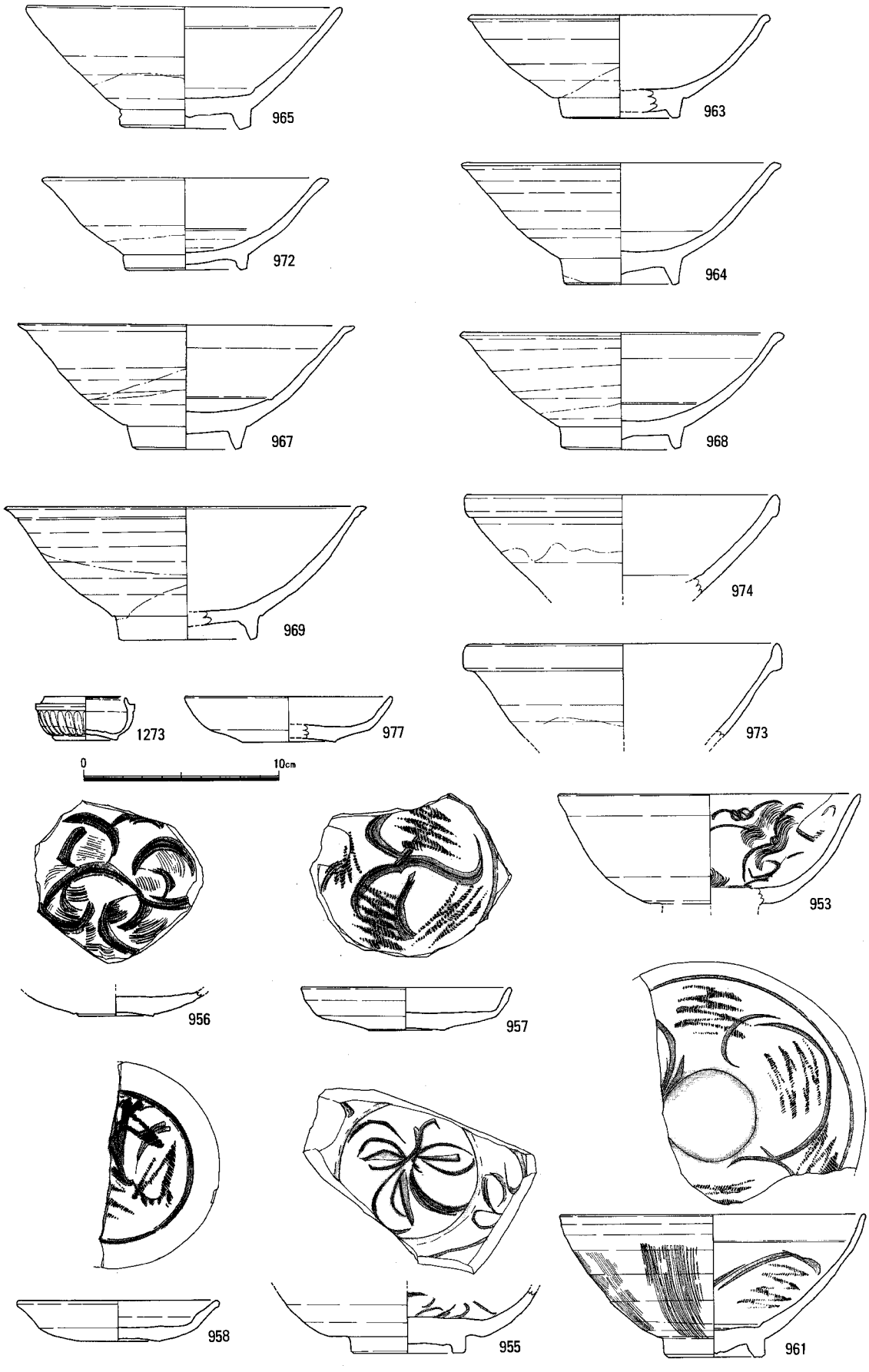


Fig.68　苑池SG488出土遺物実測図３(1/3)

SK420（Fig.71）　寺熊調査区

白磁碗、青磁皿、土師器坏・皿、瓦器椀が出土している。**896**は底部糸切りの土師器皿。口径9.0cm、器高0.9cm。**895**は小型の土師器坏。底部は糸切り。口径9.9cm、器高2.5cm。**893・894**は土師器の坏。口径は15.1、16.2cm、器高は2.8、3.1cm。底部切り離し痕不明。**892**は白磁碗IV類。

SK456（Fig.71）　寺熊調査区

909～911は土師器皿。底部は糸切り。口径8.8～10.2cm、器高1.0～1.3cm。平均口径9.3cm、平均器高1.2cm。**912**は土師器小坏。底部糸切り。口径7.4cm、器高2.1cm。**908**は土師器坏。底部ヘラ切り。口径13.6cm、器高2.9cm。**906**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1類。内面に片切彫の草文と櫛描による短い曲線文が描かれる。**907**は白磁碗IV－2類。

SK476（Fig.71，PL.135）　寺熊調査区

913は白磁碗VI－2類。

SK489（Fig.72，PL.135）　寺熊調査区

完形の土師器坏・皿が集積した状態で出土している。土師器皿はFig.72の上段3列が底部糸切り、下段2列がヘラ切りである。糸切りは口径9.0～9.4cm、器高0.8～1.2cm。平均口径9.2cm、平均器高1.1cm。ヘラ切りは口径9.0～9.4cm、器高1.0～1.3cm。平均口径9.2cm、平均器高1.2cm。土師器坏は底部切り離し痕が磨滅のためにわからないものが多いが、確認できた**1076・1083・1072・1082**はヘラ切りであった。口径は15.8cm～17.1cm、器高は2.8～3.2cm。平均口径16.4cm、平均器高3.0cm。

SK499（Fig.72）　寺熊調査区

116・117はヘラ切りの土師器皿。口径8.6、8.4cm、器高1.4、1.2cm。**1115**はヘラ切りの土師器坏。口径16.1cm、器高2.7cm。**1113**は龍泉窯系青磁碗Ⅴ－3類、上田C類。混入か。

SK708（Fig.73）　寺熊調査区

土師器皿は**1125**が底部糸切りのほかは磨滅のために不明。口径8.3～9.0cm、器高1.1～1.6cm。平均口径8.7cm、平均器高1.3cm。**1120**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－6類。**1121**は中国陶器C群捏鉢。

SK719（Fig.73）　寺熊調査区

1204は李朝の陶器皿。ツヤのある灰色の釉が全面施釉される。見込みと高台に4ヶ所の目跡が残る。**1205**は白磁碗VI－2類。**1203**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類。

SX127（Fig.74）　寺熊調査区

406・405は底部糸切りの土師器皿。口径9.6、8.8cm、器高1.2、1.4cm。**404**は土師器椀。

SX128（Fig.74）　寺熊調査区

409は底部ヘラ切りの土師器皿。口径8.3cm、器高0.9cm。**407**は明代の染付碗。見込みの釉を輪状に掻き取る。

SX129（Fig.75，PL.136）　寺熊調査区

425～428は土師器皿。底部はヘラ切り。口径9.6～9.9cm、器高1.2～1.4cm。平均口径9.6cm、平均器高1.3cm。**424**は土師器高台付皿。**420**は土師器坏。口径14.8cm、器高3.4cm。底部糸切り。**421～423**は土師器丸底坏。底部ヘラ切り。口径15.0～15.9cm、器高3.4～3.8cm。平均口径15.4cm、平均器高3.6cm。**419・417**は土師器椀。**415・416**は東播系須恵器の捏鉢。**412**は青磁小碗。**413**は白磁碗。

SX136（Fig.76，PL.136）　寺熊調査区

土師器皿はすべて底部ヘラ切り。口径8.2～10.3cm、器高1.2～2.0cm。平均口径9.2cm、平均器高1.5cm。土師器丸底坏は**451・444**は不明だが、そのほかはヘラ切り。口径15.0～15.4cm、器高3.2～4.1cm。平均口径15.2cm、平均器高3.6cm。**441**は土師器椀。

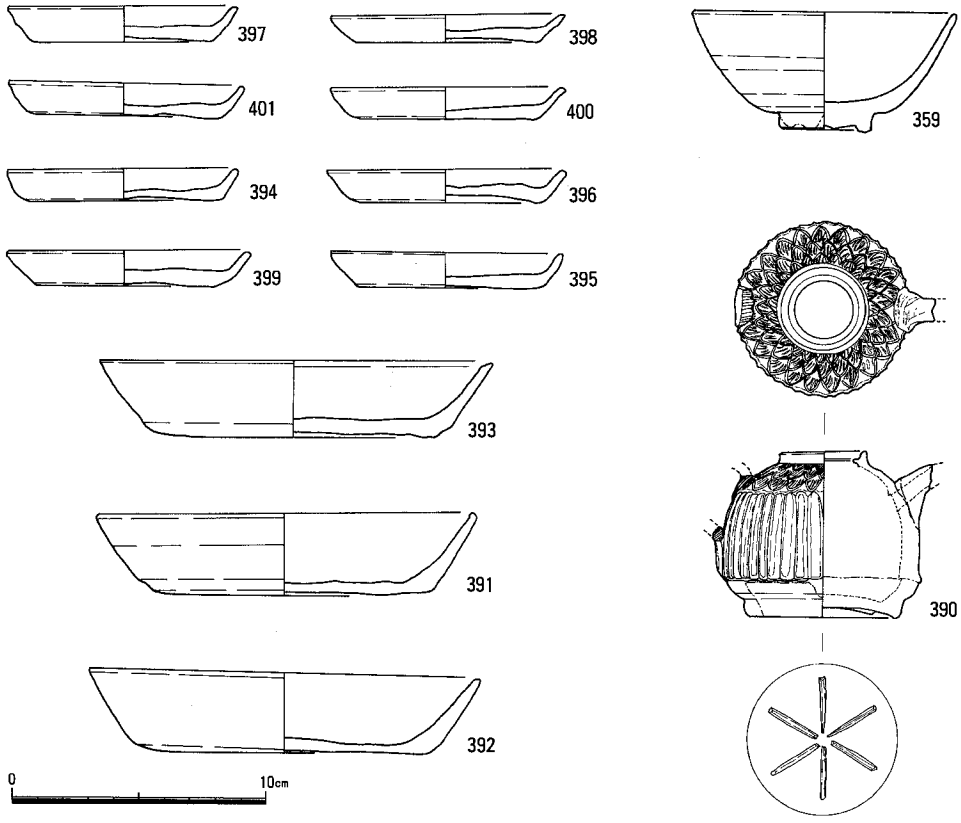


Fig.69　土壙墓SK126出土遺物実測図(1/3)

SX407（Fig.76, PL.136）　寺熊調査区

877は底部糸切りの土師器皿。口縁7.5cm、器高1.8cm。874は中国産の青磁碗。見込みにスタンプで同心円文と如意頭文4つを描く。

SX423（Fig.76）　寺熊調査区

898は常滑焼8型式の甕。

SX493（Fig.76）　寺熊調査区

1110～1112は糸切りの土師器皿。口径8.7～10.0cm、器高1.2～1.5cm。平均口径9.2cm、平均器高1.4cm。1109はヘラ切りの土師器皿。口径10.6cm、器高1.8cm。1106は底部切り離し痕不明の土師器坏。口径16.2cm、器高3.6cm。1108はヘラ切りの土師器坏。口径15.0cm、器高3.1cm。1107は糸切りの土師器坏。口径17.0cm、器高3.5cm。1105は白磁碗IV－2類。

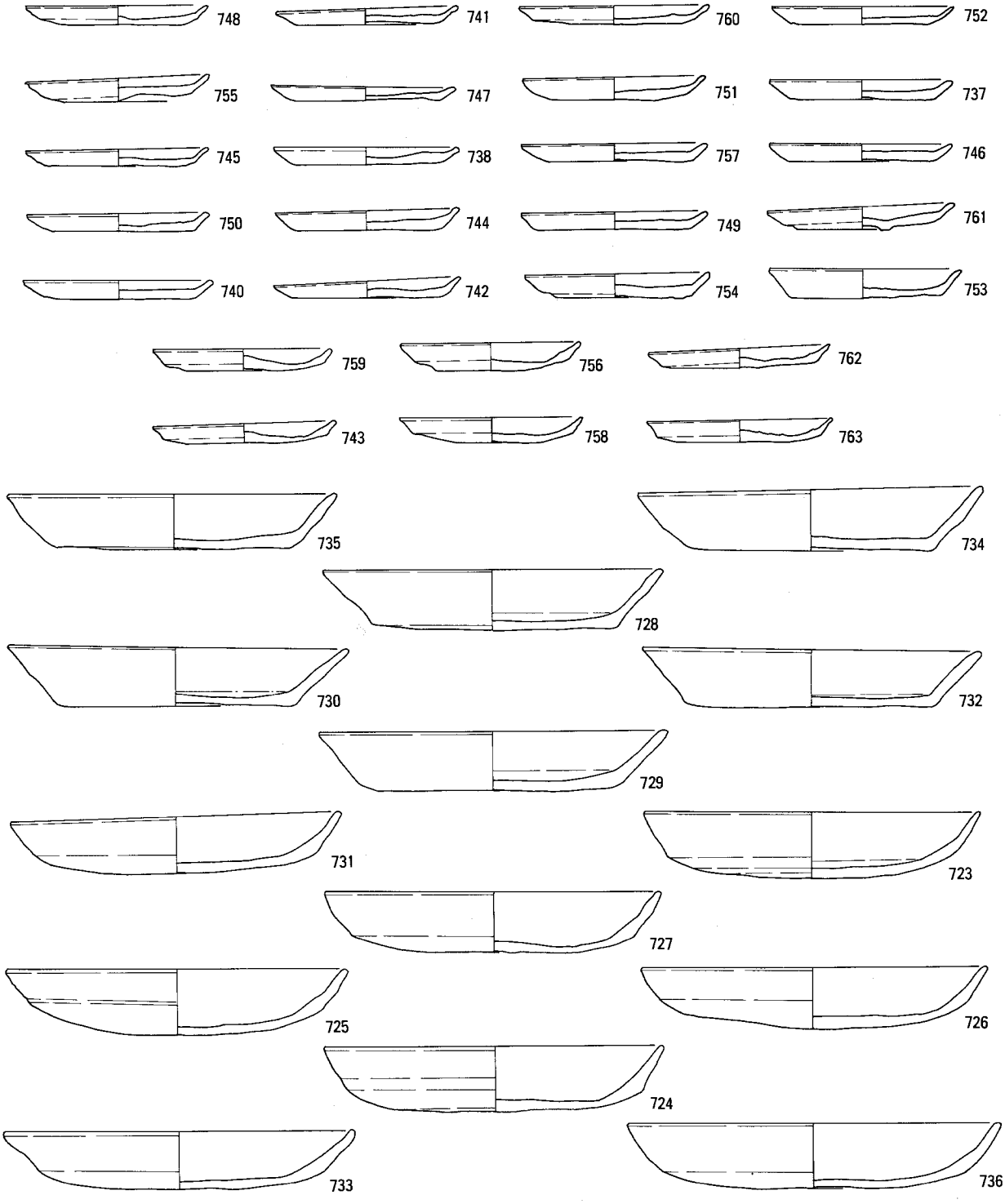


Fig.70　土壙SK335出土遺物実測図(1/3)

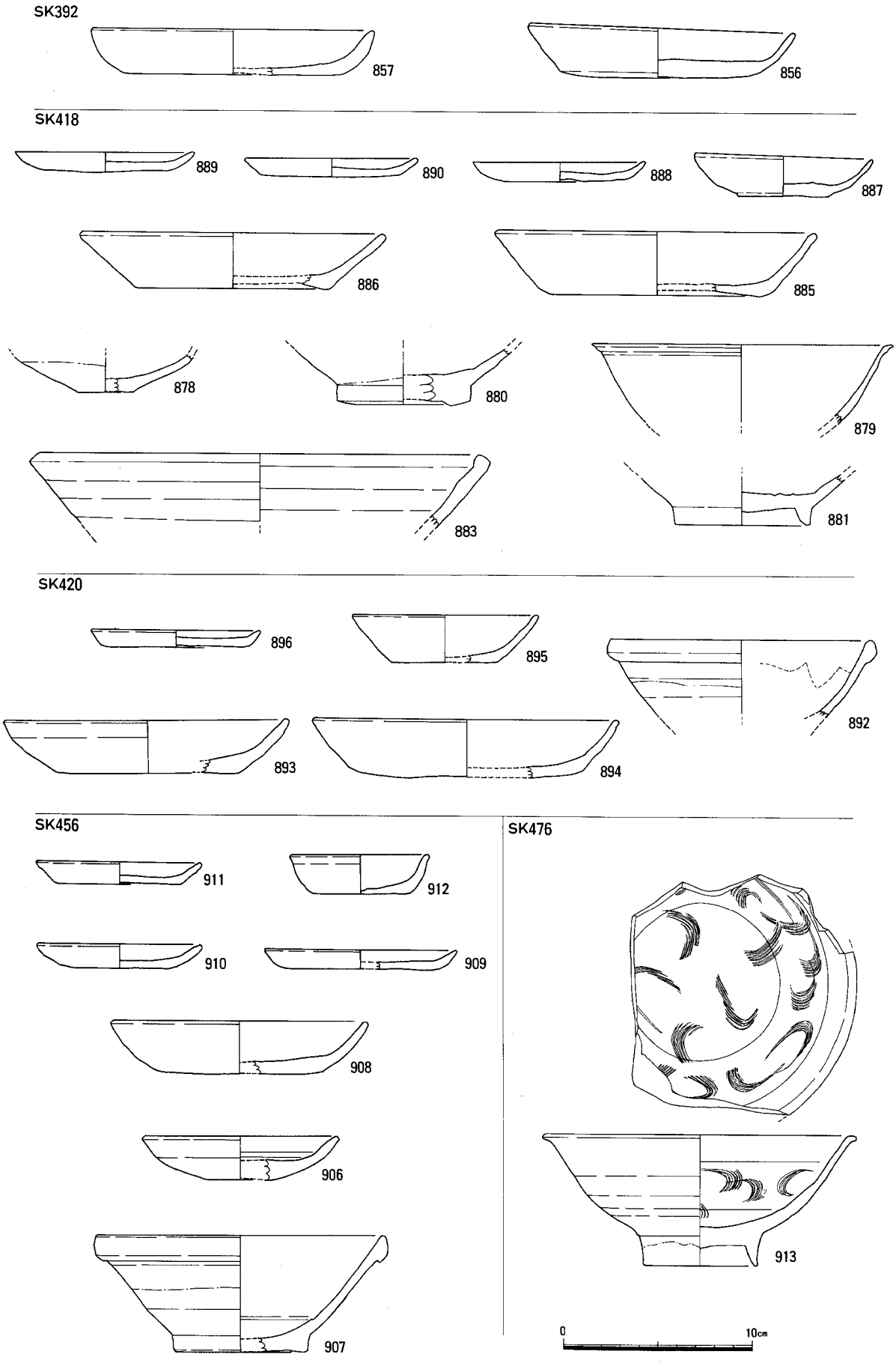


Fig.71　土壙SK392・418・420・456・476出土遺物実測図(1/3)

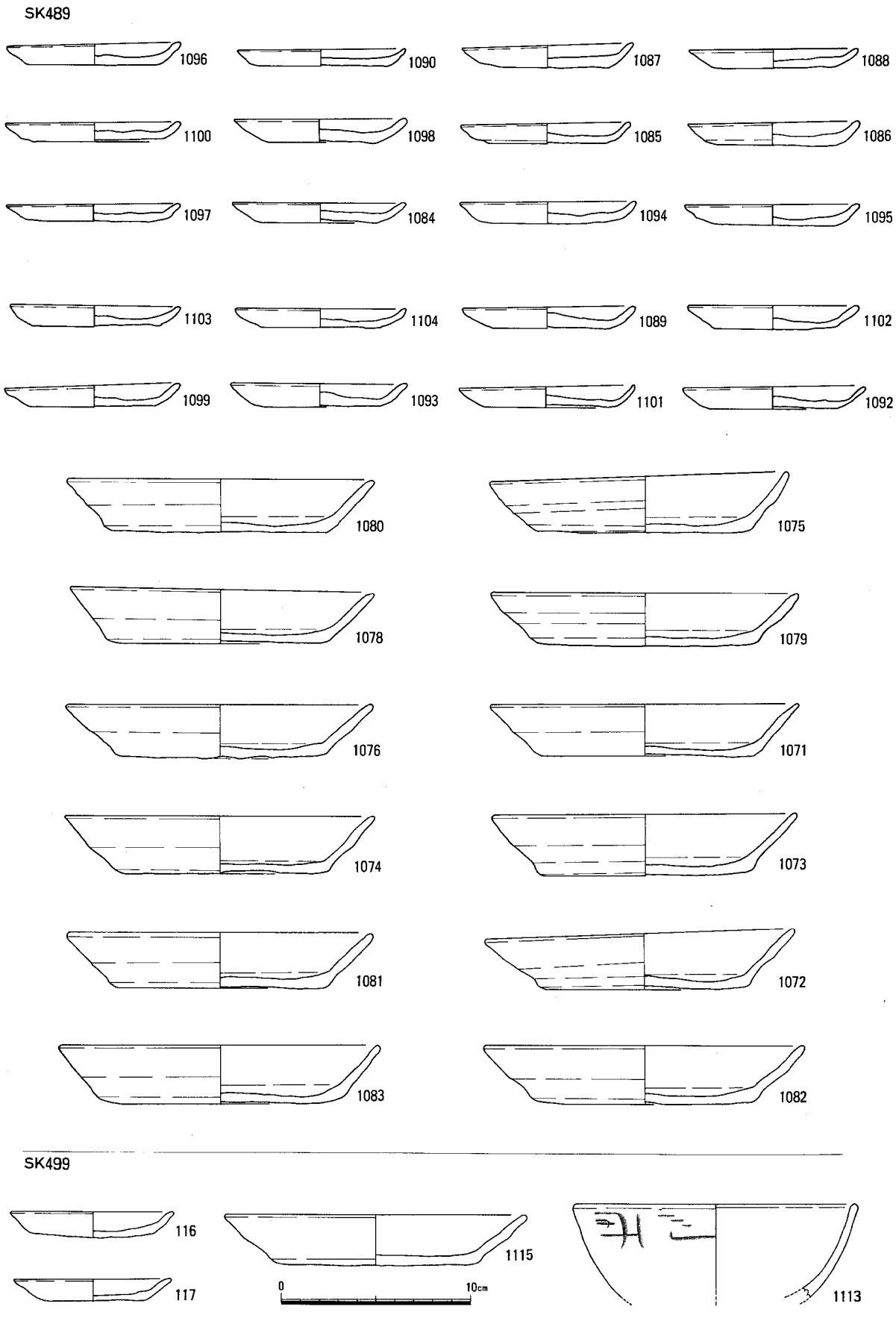
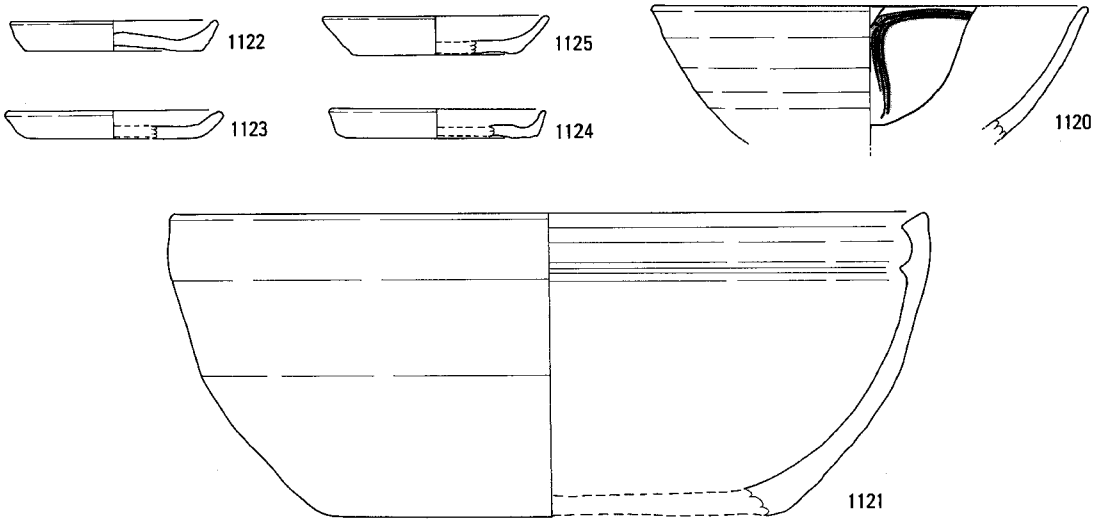


Fig.72　土壙SK489・499出土遺物実測図(1/3)

SK708



SK719

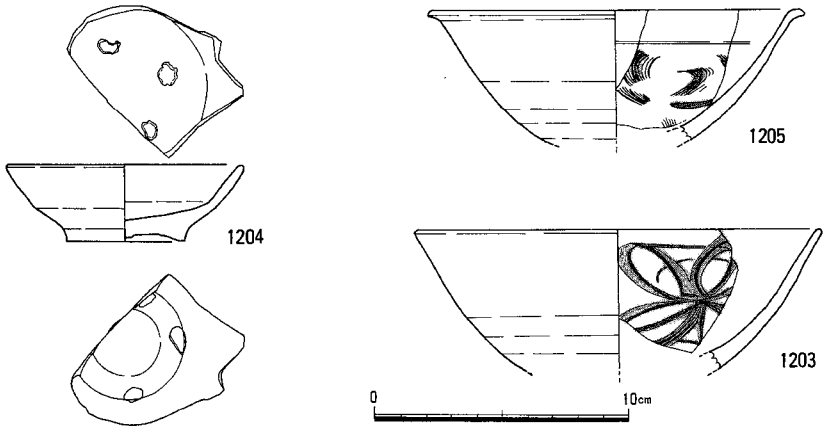
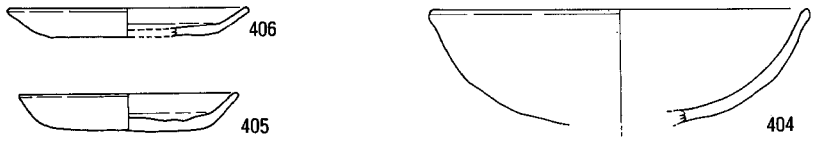


Fig.73　土壙SK708・719出土遺物実測図(1/3)

SX127



SX128

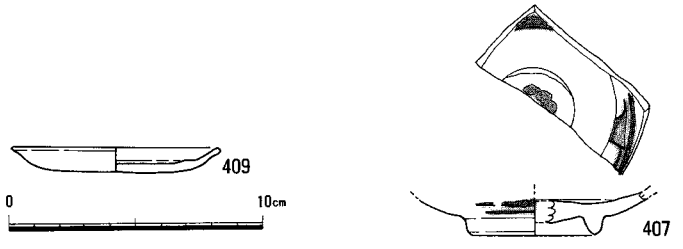


Fig.74　溜SX127・128出土遺物実測図(1/3)

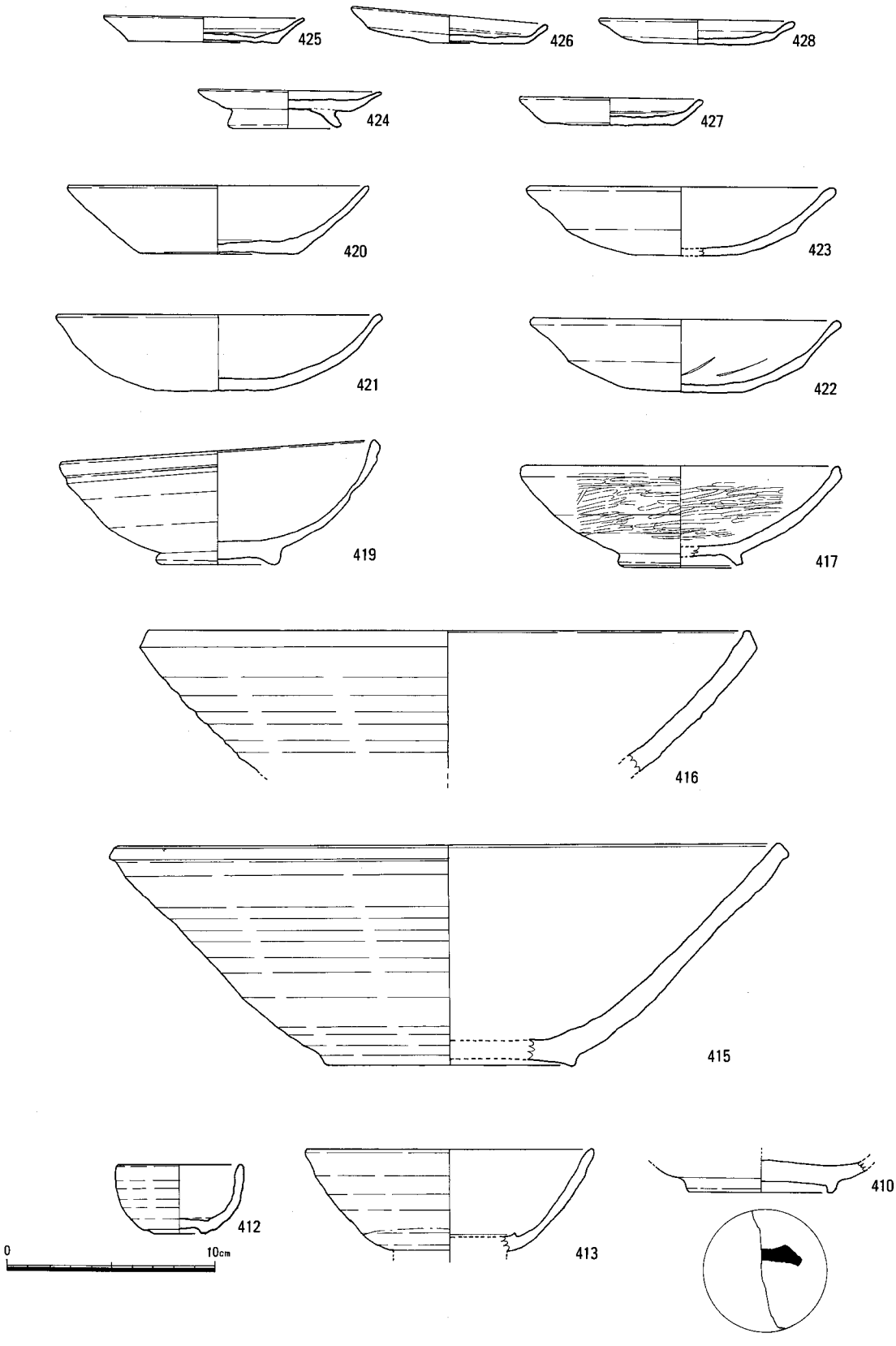


Fig.75　溜SX129出土遺物実測図(1/3)

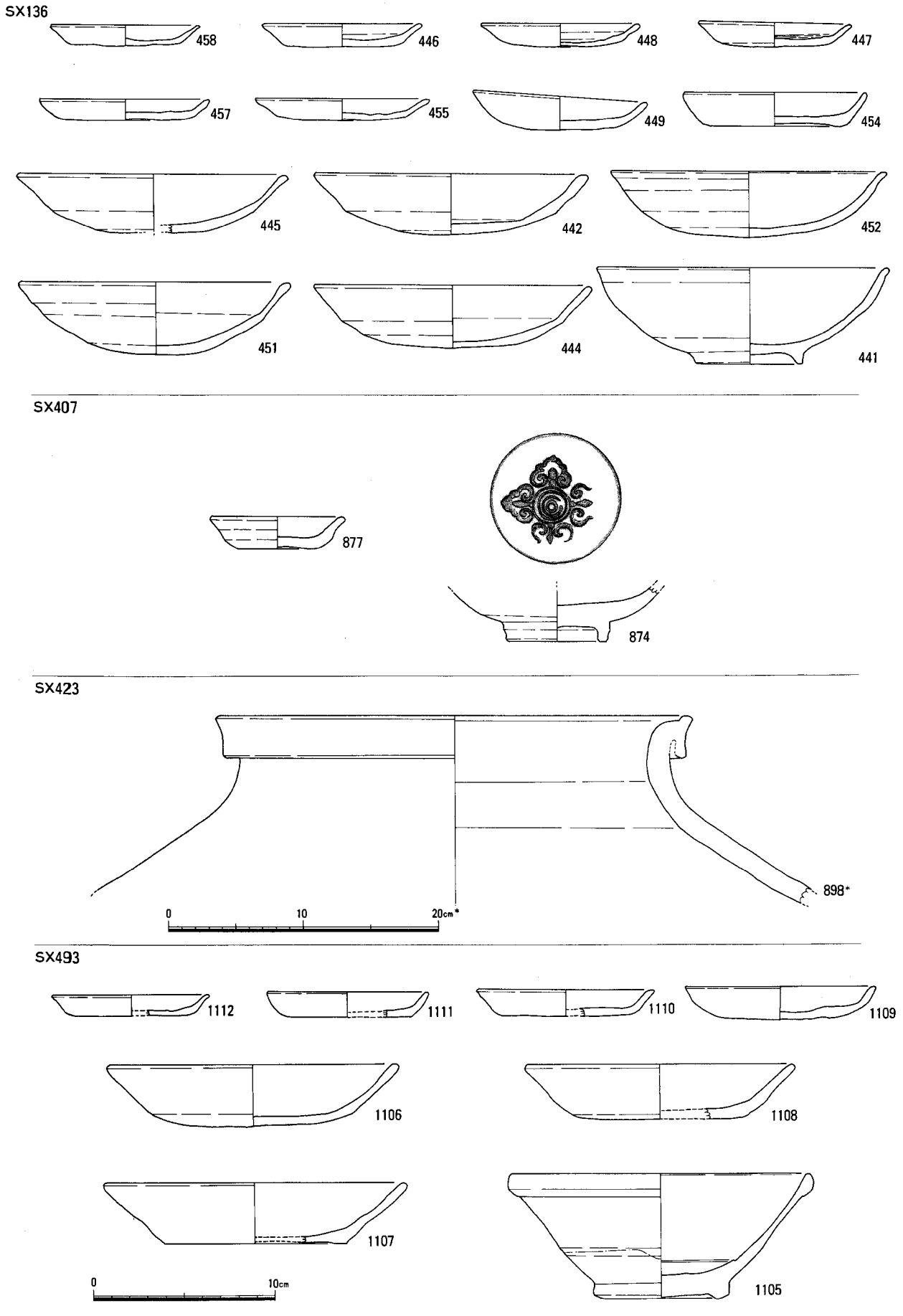


Fig.76　溜SX136・407・423・493出土遺物実測図(1/3・1/4*)

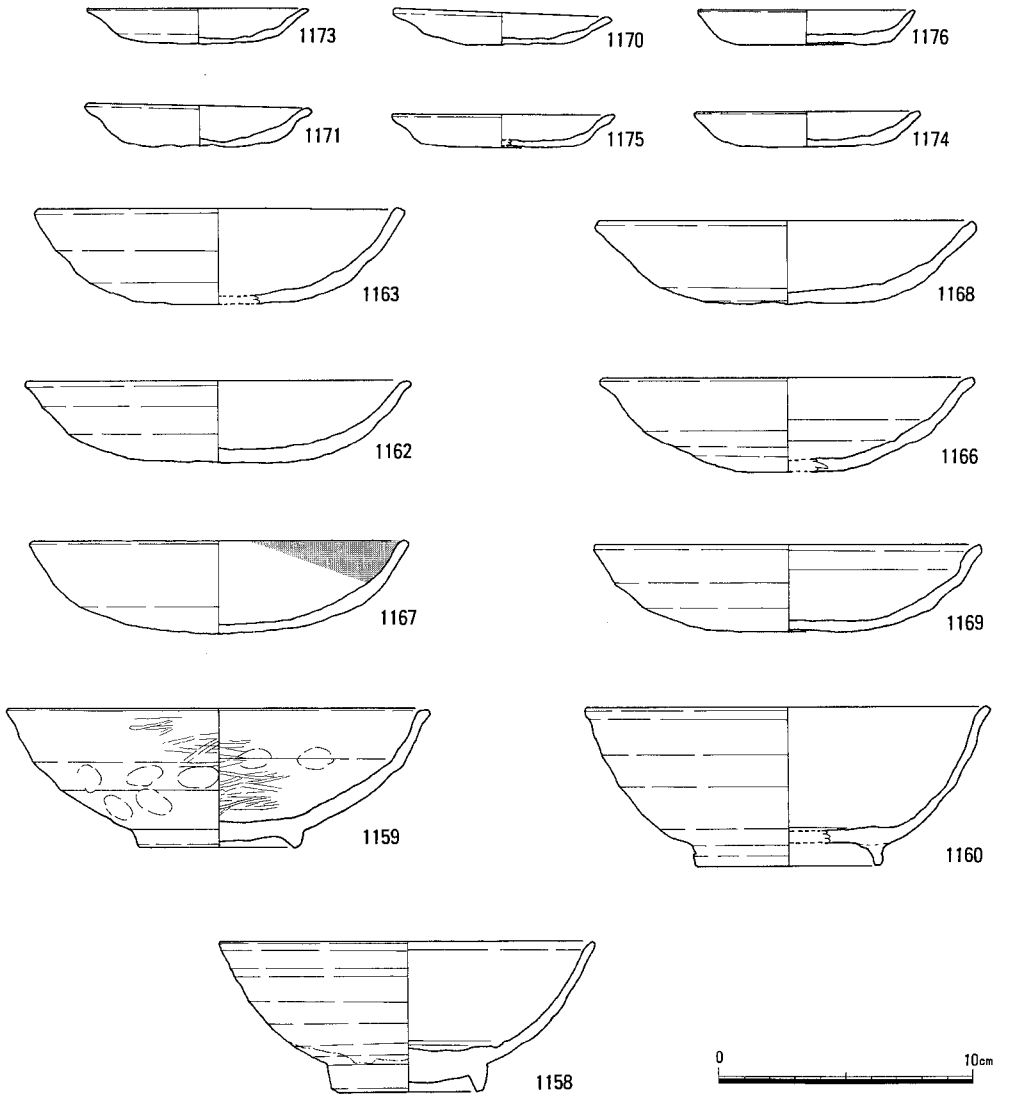


Fig.77　溜SX716出土遺物実測図(1/3)

SX716 (Fig.77, PL.136)　　寺熊調査区

土師器皿はすべて底部ヘラ切り。口径8.6～9.0cm、器高1.4～1.6cm。平均口径8.9cm、平均器高1.4cm。**1163・1162・1167**はミガキ調整が施されている土師器坏。**1163**が底部糸切り。口径14.8cm、器高3.8cm。**1162**が底部ヘラ切り。口径15.0cm、器高3.2cm。**1167**は底部切り離し不明。口径15.0cm、器高3.8cm。**1168・1166・1169**は土師器坏。**1169**は磨滅のため、底部切り離し痕不明。そのほかはヘラ切り。口径15.0～15.4cm、器高3.3～3.8cm。平均口径15.2cm、平均器高3.5cm。**1159・1160**は土師器椀。**1158**は白磁碗IX類。

SX717 (Fig.78, PL.136)　　寺熊調査区

土師器坏・皿はすべてヘラ切り。皿は口径8.5～10.2cm、器高1.0～1.5cm。平均口径9.3cm、平均器高1.2cm。坏は口径15.0～16.6cm、器高2.2～3.8cm。平均口径15.6cm、平均器高3.0cm。**1181**は土師器高台付坏。**1182・1189**は土師器椀。**1177**は高麗青磁碗。暗緑色の釉が畳付以外にかかる。焼成不良で、白い斑点が入る。見込みに目跡が4ヶ所残る。**1180**は白磁平底皿0－Ⅰ類。**1179**は白磁碗Ⅴ－1類で、器高が低い浅いタイプ。**1178**は白磁碗Ⅱ－1類。

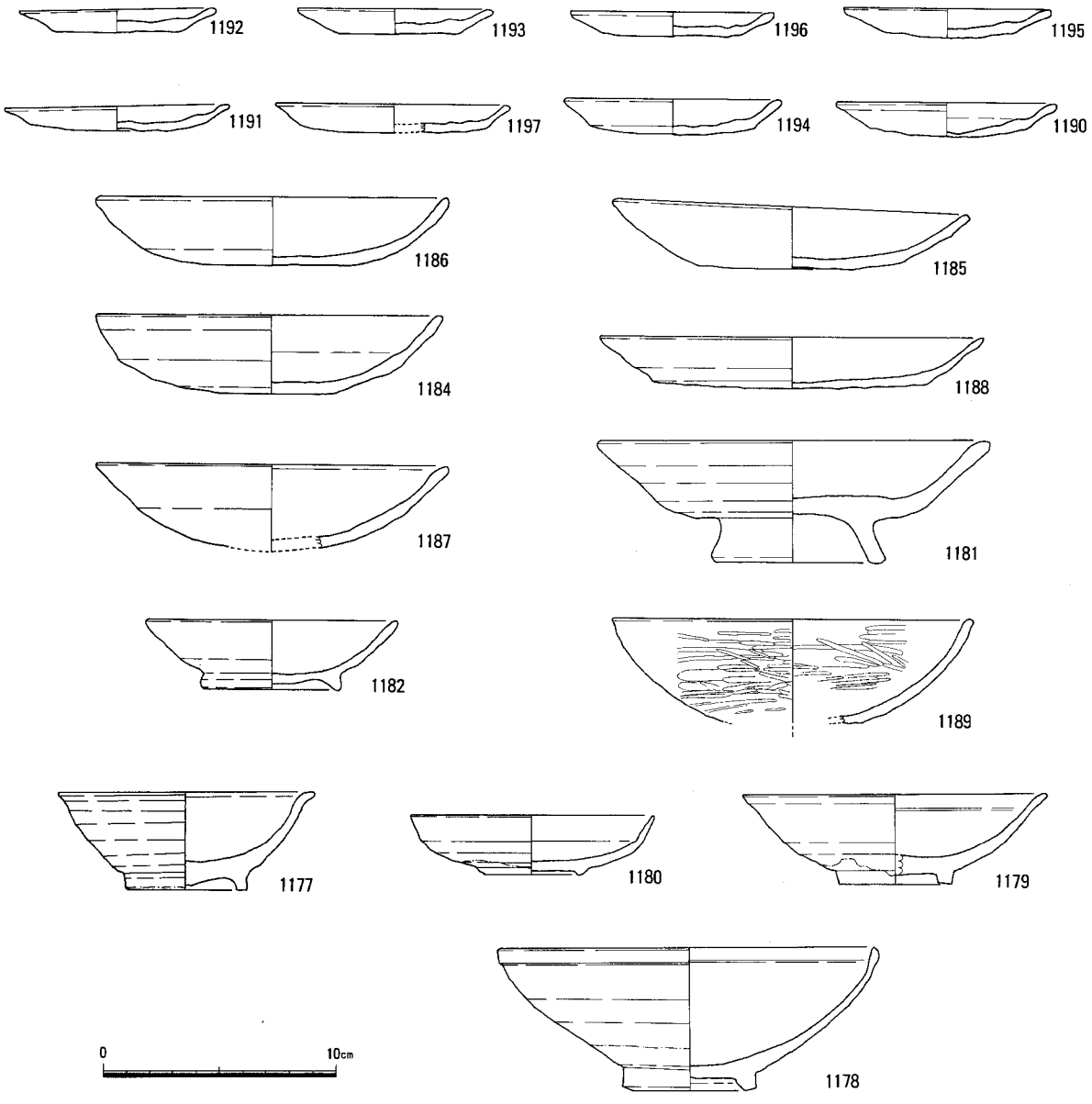


Fig.78　溜SX717出土遺物実測図(1/3)

黒色土層（Fig.79～82）

土師器皿は糸切りとヘラ切りがある。Fig.79上段**2350**までが糸切り。口径8.6～9.8cm、器高0.8～1.6cm。平均口径9.3cm、平均器高2.2cm。**2331・2337**は器高が高いタイプの土師器皿。口径は9.2、8.4cm、器高はどちらも2.2cm。下段はヘラ切りの土師器皿。口径8.8～10.0cm、器高0.8～1.6cm。平均口径9.2cm、平均器高1.3cm。Fig.80上段の土師器坏はすべて糸切り。口径13.7～16.8cm、器高2.3～3.5cm。平均口径15.5cm、平均器高2.9cm。Fig.80下段は高台付皿と坏。Fig.81はヘラ切りの土師器坏。口径14.1～17.4cm、器高2.8～3.6cm。平均口径15.4cm、平均器高3.1cm。**2185・2183・1985・1713・1963**は土師器椀。**1813**は東播系須恵器の捏鉢。

上層黒色土層（Fig.83～95，PL.139～142）　　寺熊調査区

1688は瓦器の小坏。**2239・2033・1756**は瓦器皿。Fig.83の残りとFig.84は瓦器椀。**1826**は中国の天目椀。**1839**は中国陶器B群四耳壺。**981・1825・1838・1834・1816・1836**は中国陶器C群の捏鉢。**1832**は中国陶器C群のY字口縁甕。**1445**は白磁平底皿II－1類。**1592**は白磁平底皿II－2類。体部内面を白堆線で区画する。**1296・1449**は白磁平底皿IV－2類。そのほかのFig.86の土器は白磁平底皿III類。**1804・1803・1786**の外底には墨書がある。Fig.87は白磁碗IV－2類。**1801**には「中」の墨書。**1785**は同安窯系青磁皿II－1類。外底に墨書がある。**1583・1575・1443・1587**は龍泉窯系青磁皿I－4類。**1307**は片切彫りで魚文を描く龍泉窯系青磁皿I－2類。**1864**は内面に劃花文を施す白磁平底皿VI－1類。**1595・1573**は片切彫りで草文を描く龍泉窯系青磁皿I－1類で、**1595**には櫛描の短い曲線文も加えられる。**1589・1582・959**は下半露胎の同安窯系青磁皿II－1類。**1275・1586・1585・1578・1442**は底部釉掻き取りの同安窯系青磁皿I－1類。**1446**は無文・下半露胎の同安窯系青磁皿II－2類。**1584**は白磁皿VI－2類。内面に劃花文が施される。Fig.89は**1600**が白磁碗VII－2類でそのほかは白磁碗IX類。**1792・1781**には墨書がある。Fig.90の上段は白磁平底皿III類。**1398**の外底には墨書がある。**1511・1328**は白磁平底皿VI－1類。**1508**は白磁平底皿IV－2類。体部内面に白堆線があるタイプ。**1496・1304**は白磁高台付皿I－2類。**1463・1493・1619・1464・1630・1516・1285・1301・1300**は高台付白磁皿II類。**1487・1303**は高台付白磁皿で口縁を外反させている。**1342・1340**は白磁碗V－1類。**1298・1322・1319**は白磁碗V－2類。**1321・1320・1597・1558・966・1603**は白磁碗VI－1類。**1560・1339**は白磁碗VI－2類。**1790**は高台内に墨書がある白磁碗。**1346**は白磁碗II－2類。**1284**は龍泉窯系青磁碗I－9類。**1295**は白磁碗IX類だが、内底の釉の掻き取りはない。**1550・1574・1545・1450**は龍泉窯系青磁碗I－5類。**1441**は龍泉窯系青磁碗I－6類。**1577・1576**は龍泉窯系青磁碗II－1類。**1559**は暗黄緑色の釉がかかる青磁碗。貫入がある。口縁部を外に折り曲げ、丸くおさめる。外面に櫛描がある。同安窯系か。**1604**は高麗青磁碗。全面に施釉される。Fig.93上半は白磁高台付皿II類。**1665**には内面に白堆線がある。**1793・1802・1797・1795**には高台内に墨書がある。**1293**は白磁高台付皿。青白磁に似た高台のつくり。**1568・1566・1563**は白磁碗0－II類。内面に櫛描が施される。**1579・1431・1591・1335・1590**は青白磁合子蓋。**978**は青白磁合子身。**1325**は白磁平底皿IV－2類。**1302**は高麗青磁皿。全面施釉される。見込みに目跡が残る。畳付には砂付着。**1422**も高麗青磁皿。畳付のみ露胎。見込みと高台脇に3ヶ所ずつ目跡が残る。**1548**は青磁の蓋。**1541**は龍泉窯系青磁碗I－8類。**1486・1788**は同安窯系青磁碗II類。**1486**には高台内に墨書がある。**1425・1525**は区画線と雲文のモチーフの龍泉窯系青磁碗I－6類。**1425**は輪花とする。**1324**は大ぶりの白磁碗。黄色味がかった釉がかかる。**1430**は内外面無文の龍泉窯系青磁碗I－9類。焼きが悪い。**1276・1555**は同安窯系青磁碗。博多分類でその他の青磁III類とされるもの。見込みの釉を輪状に掻き取る。焼きが悪い。**1276**の外面は無文。残りのFig.95は同安窯系青磁碗II類。**1800**は高台内に墨書。

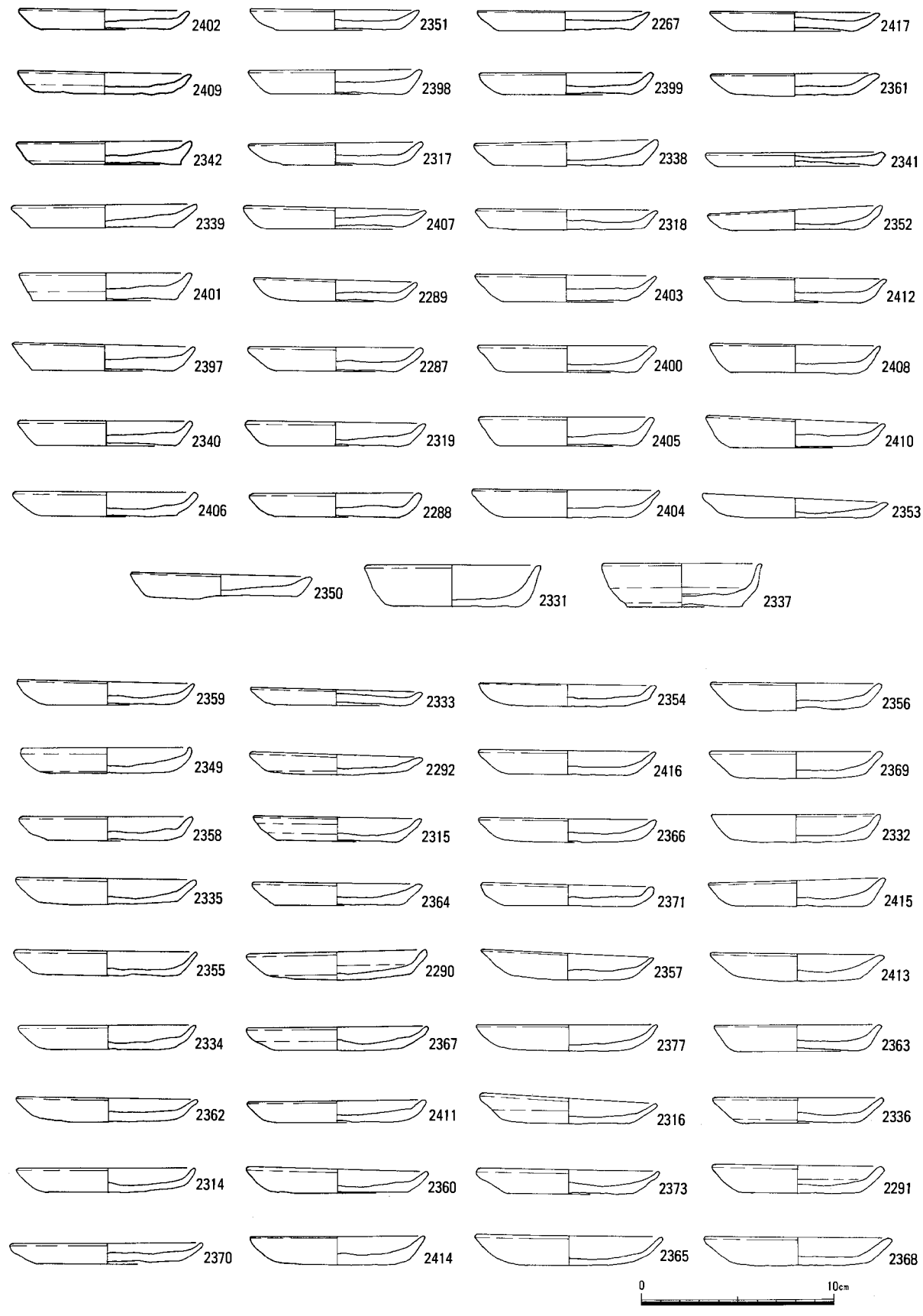


Fig.79　黒色土層出土遺物実測図１(1/3)

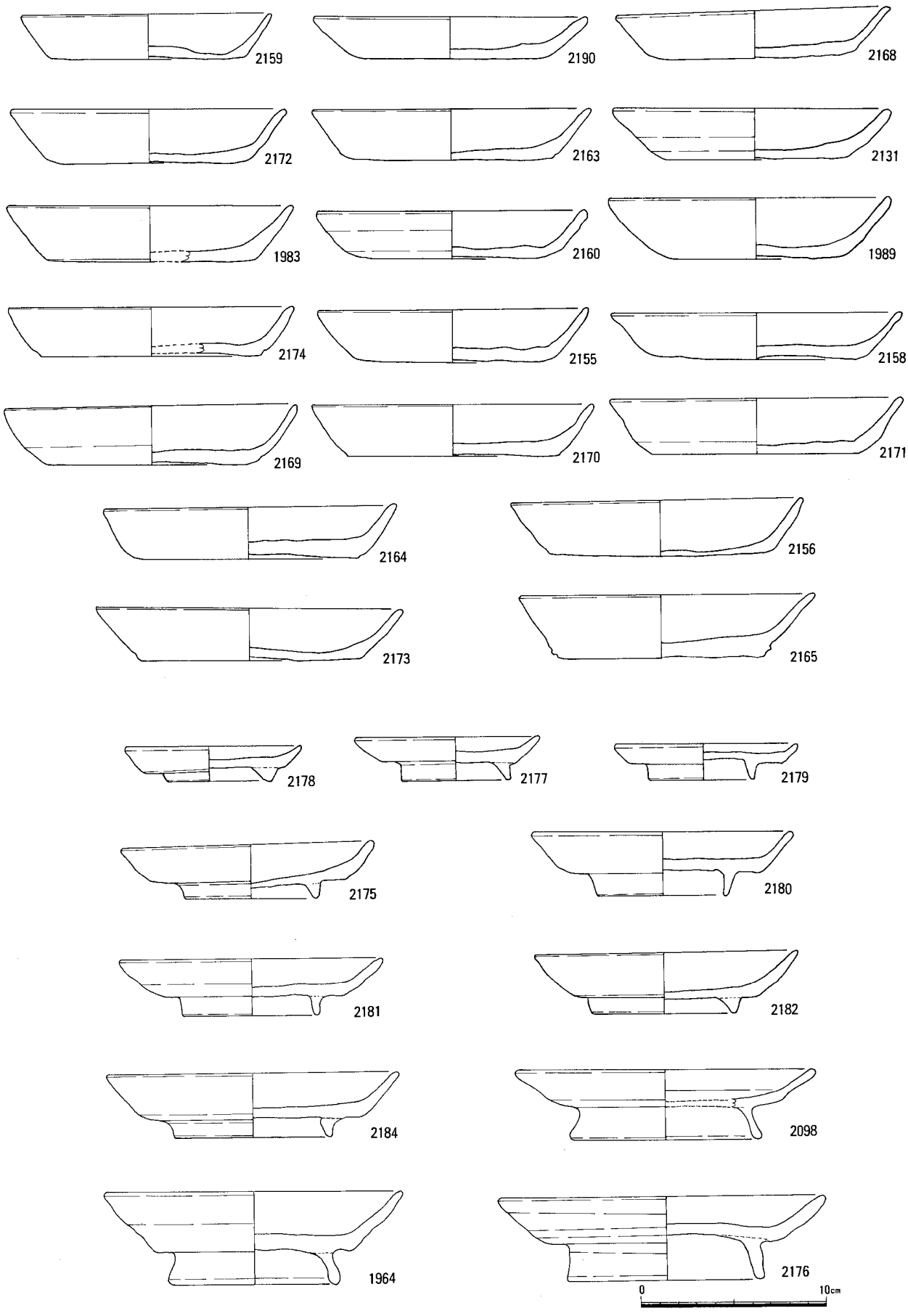


Fig.80　黒色土層出土遺物実測図２(1/3)

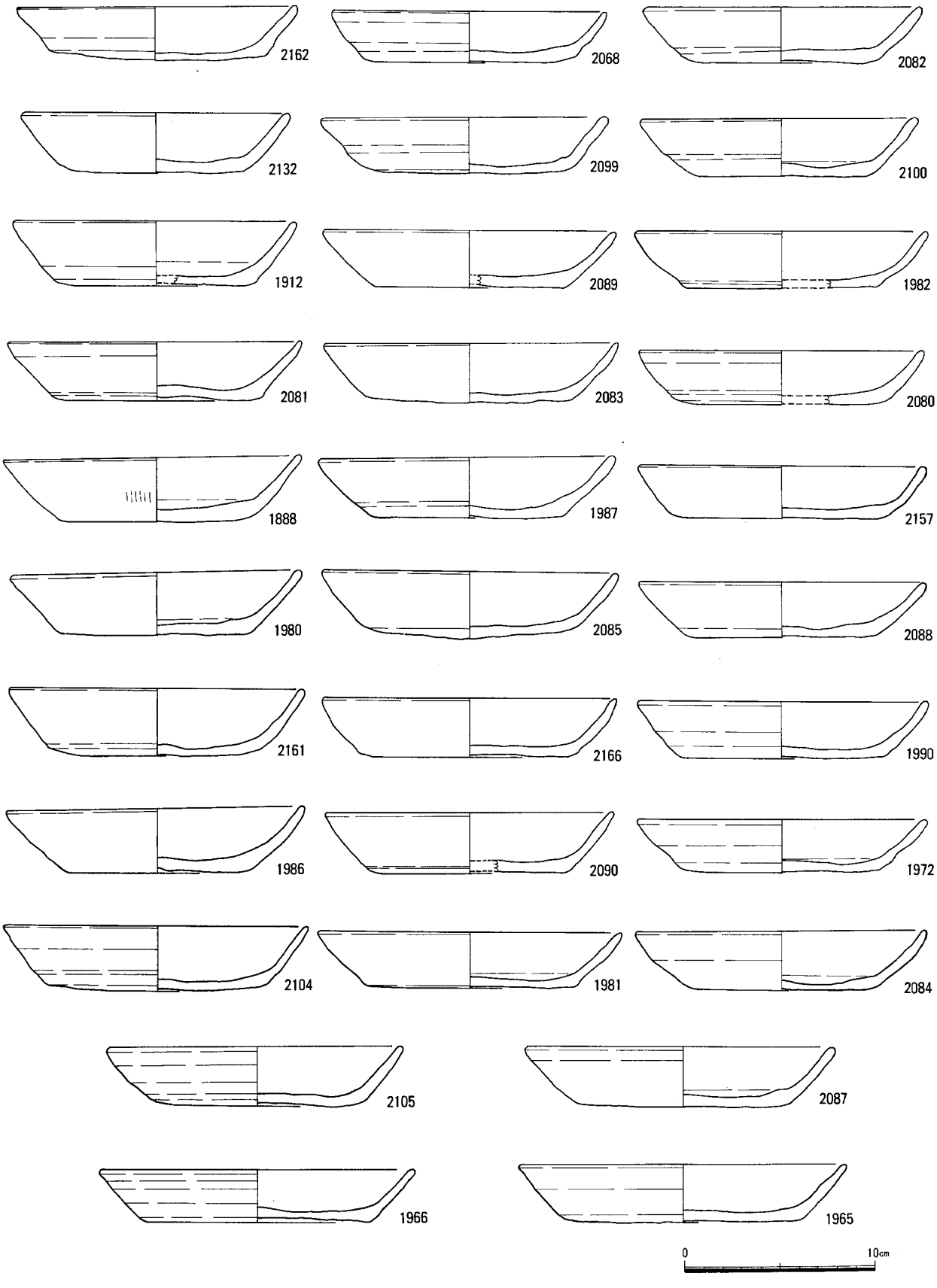


Fig.81　黒色土層出土遺物実測図３(1/3)

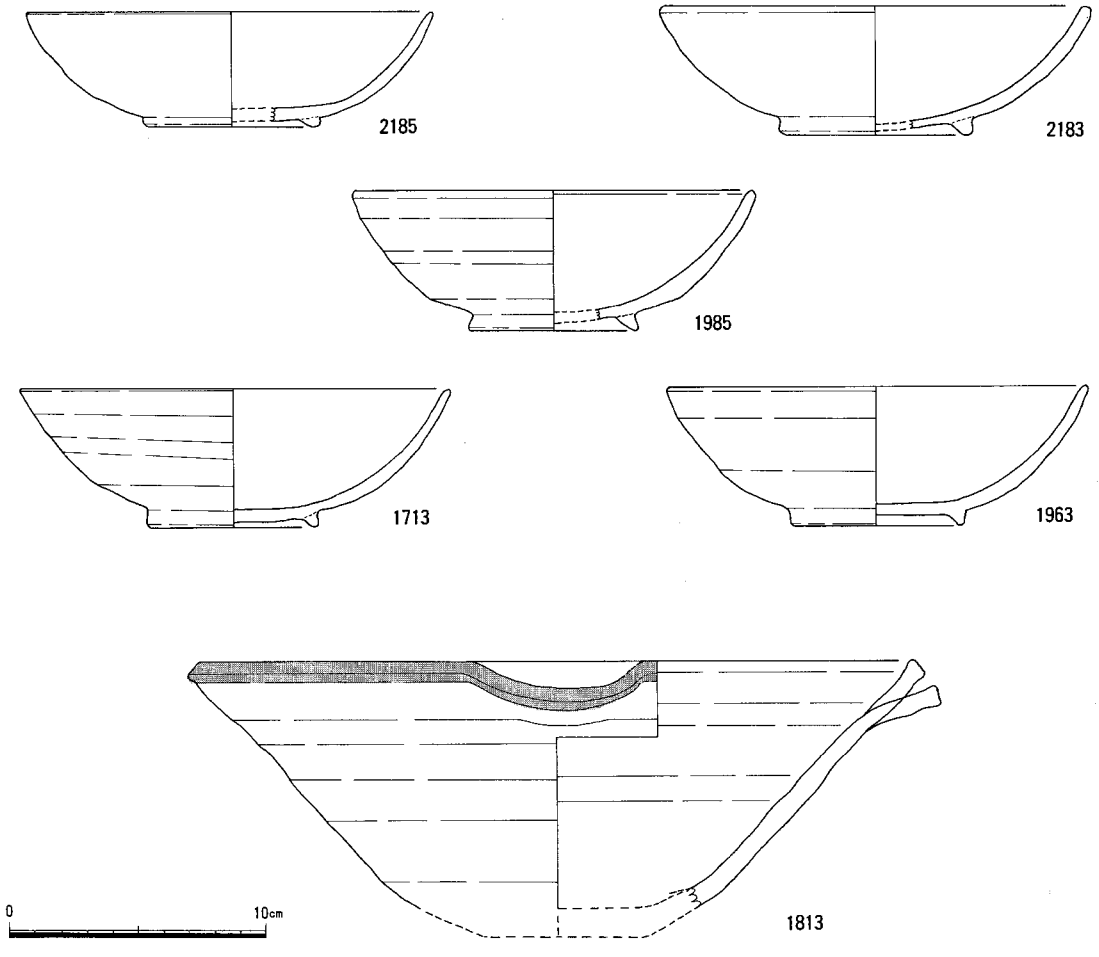


Fig.82　黒色土層出土遺物実測図４(1/3)

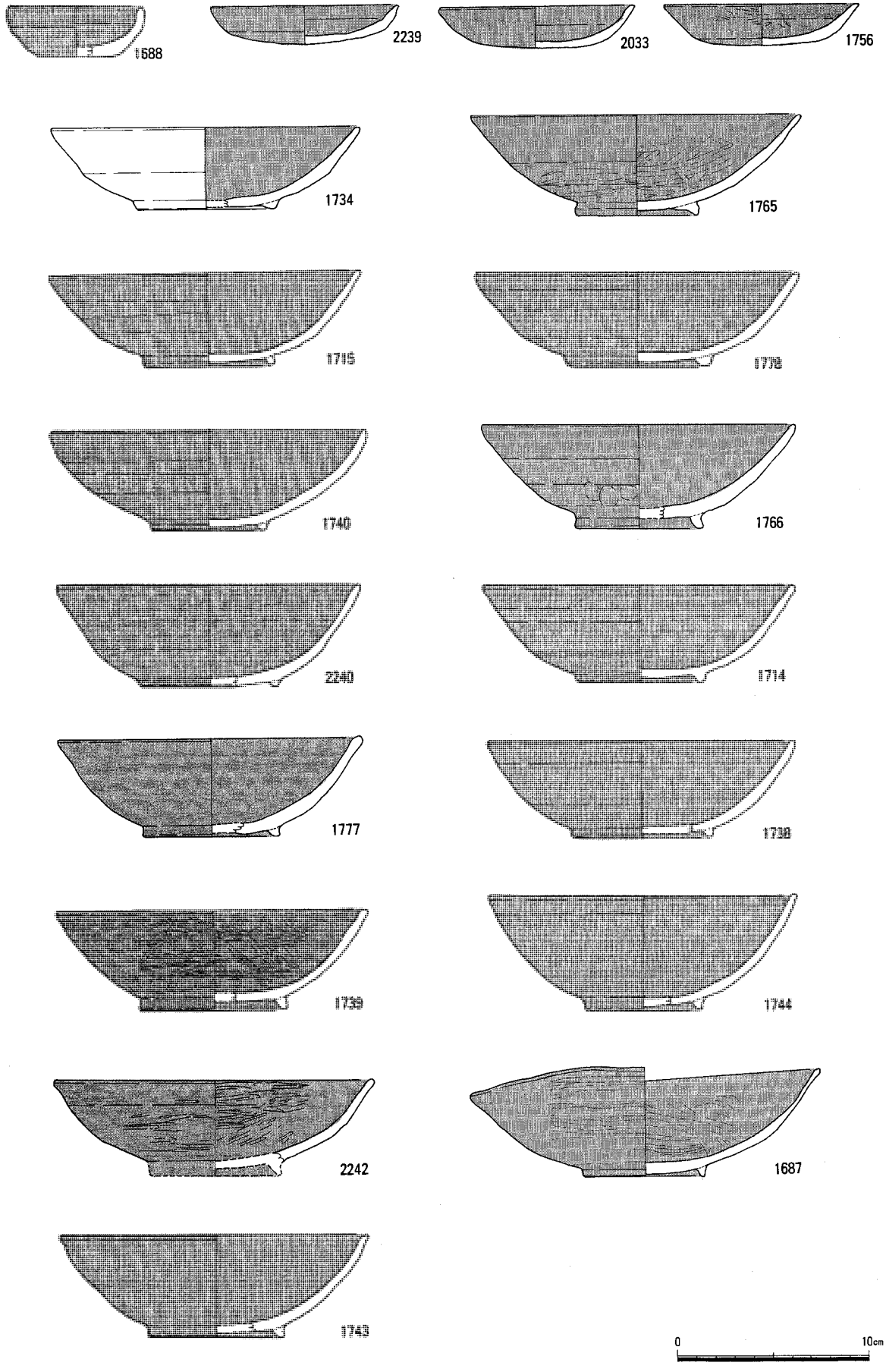


Fig.83　上層黒色土層出土遺物実測図１(1/3)

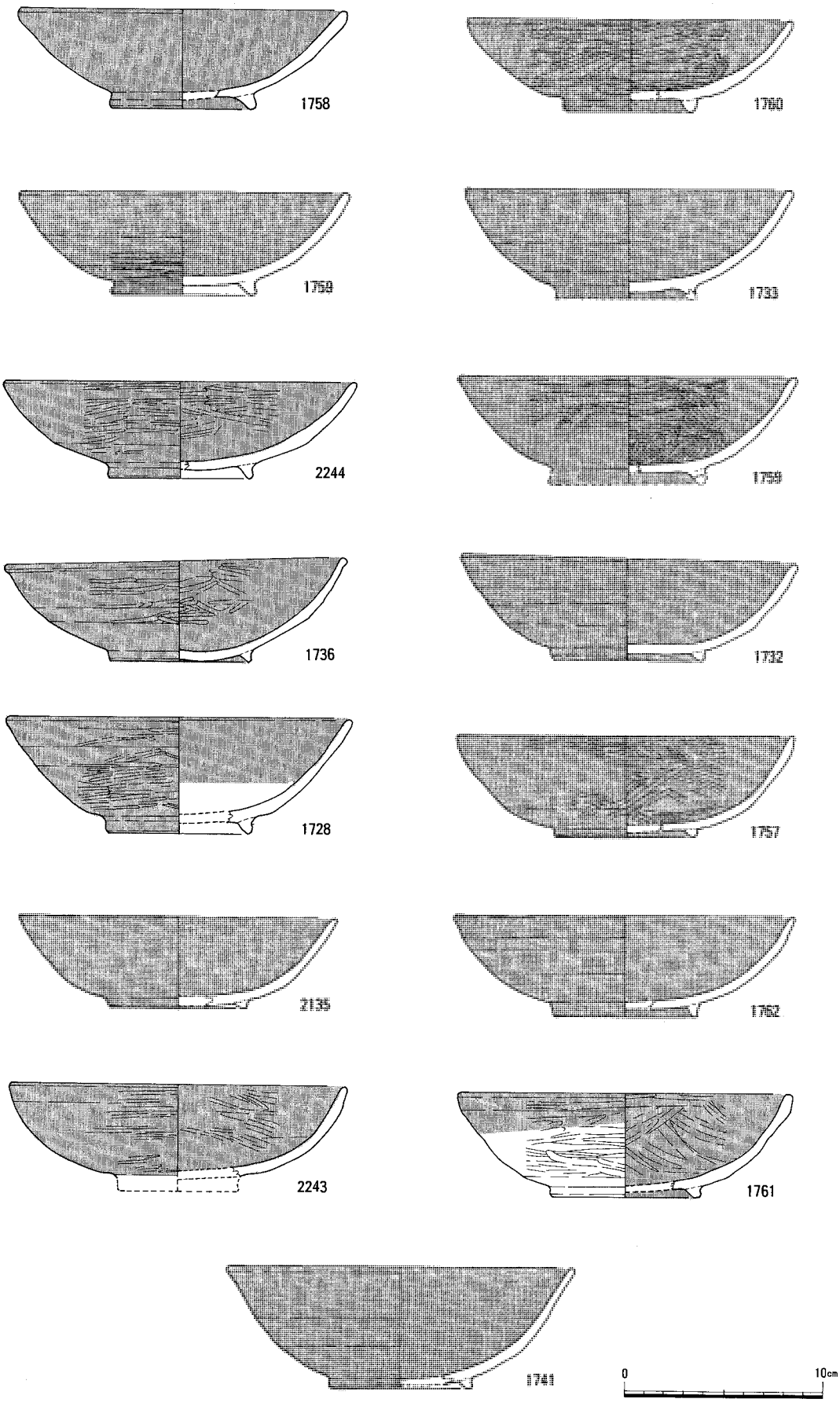


Fig.84　上層黒色土層出土遺物実測図２(1/3)

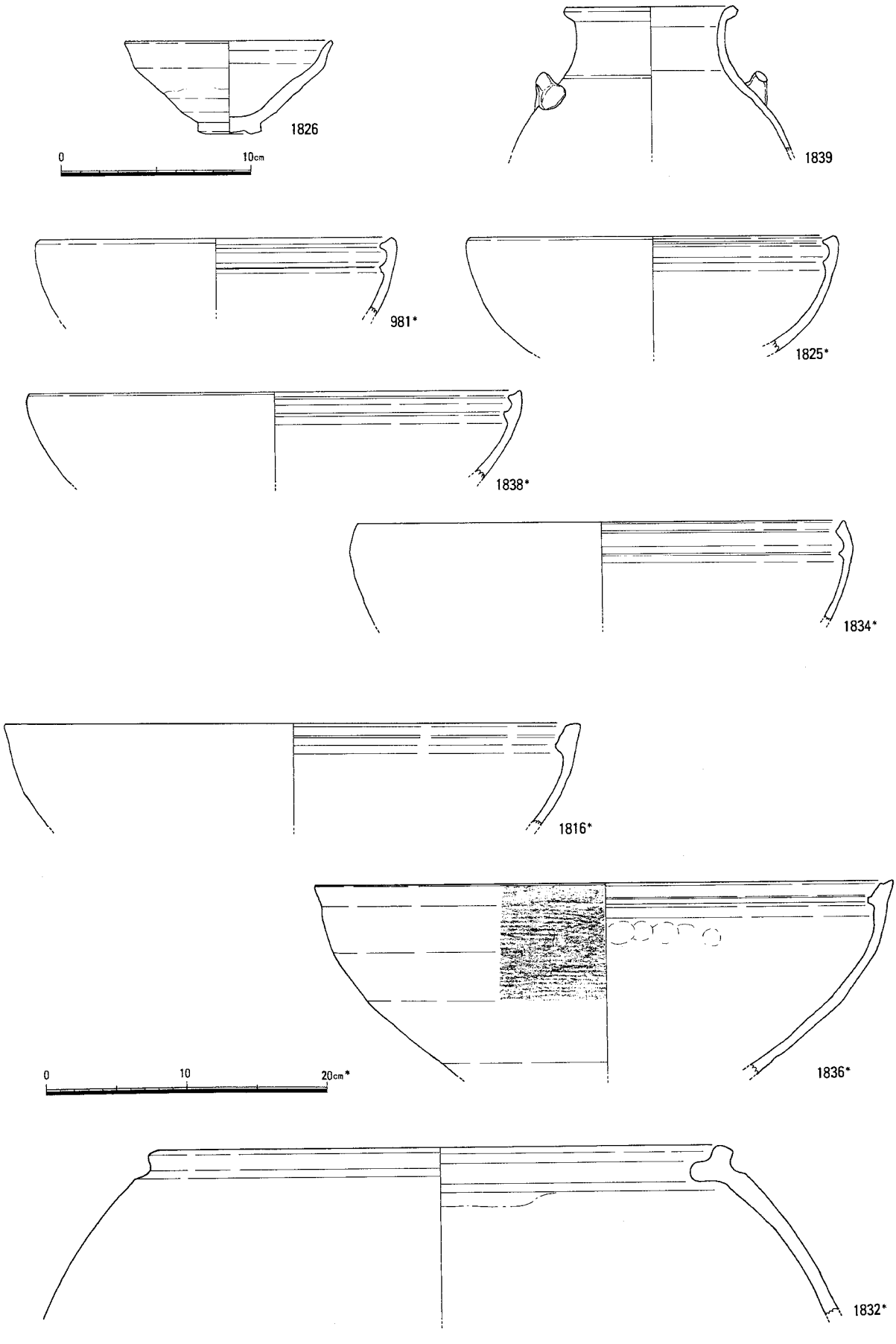


Fig.85　上層黒色土層出土遺物実測図３(1/3･1/4*)

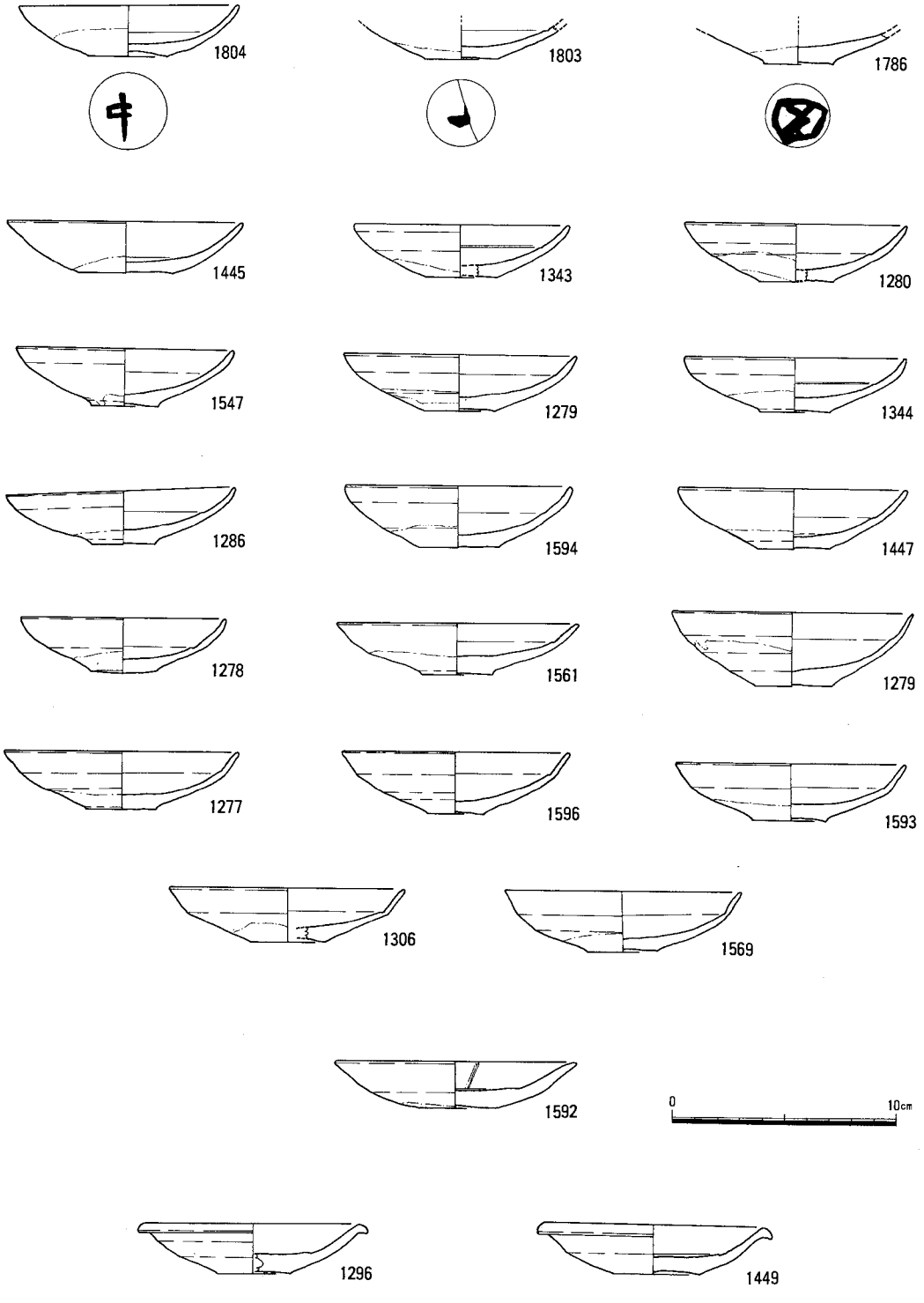


Fig.86　上層黒色土層出土遺物実測図４(1/3)

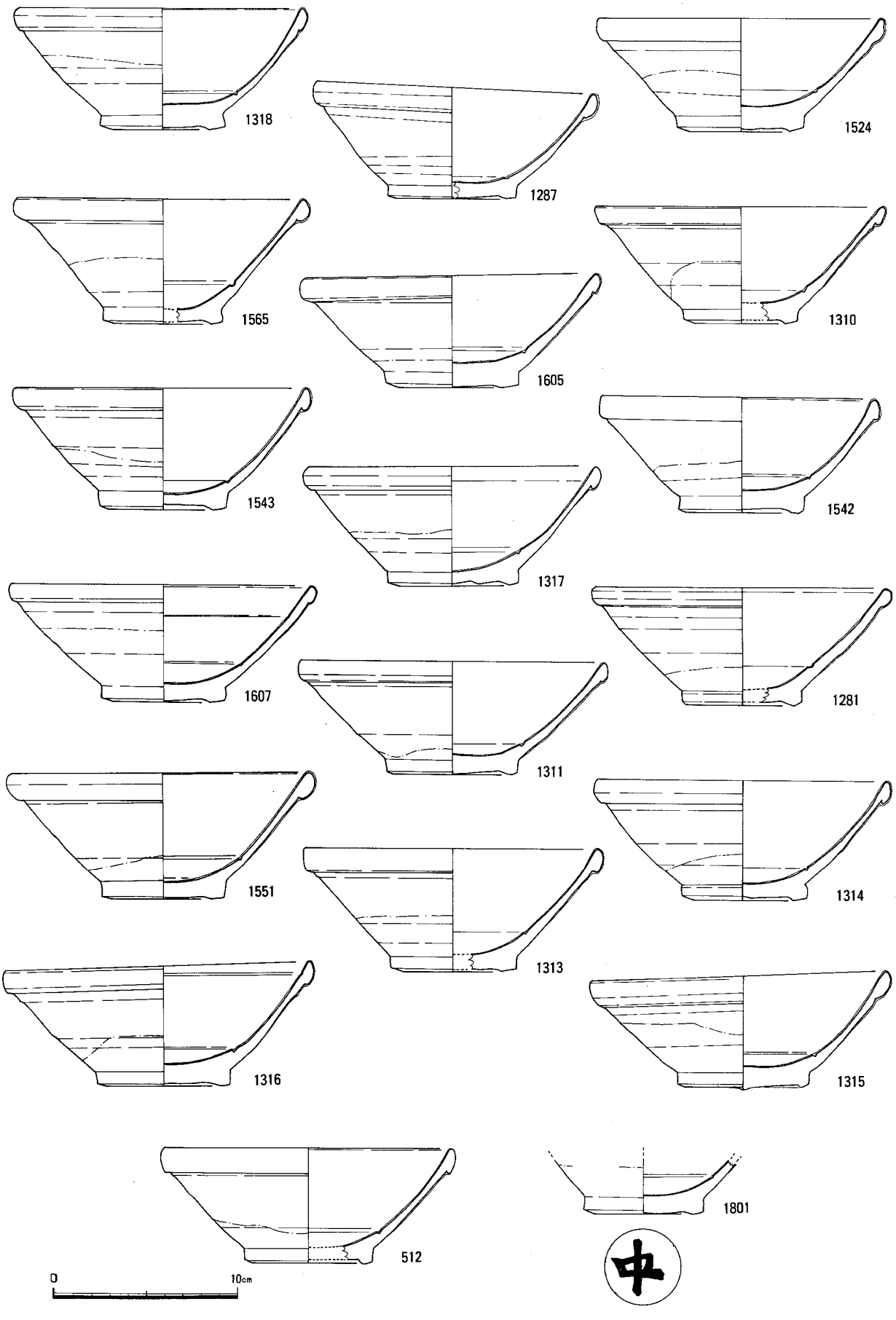


Fig.87　上層黒色土層出土遺物実測図５(1/3)

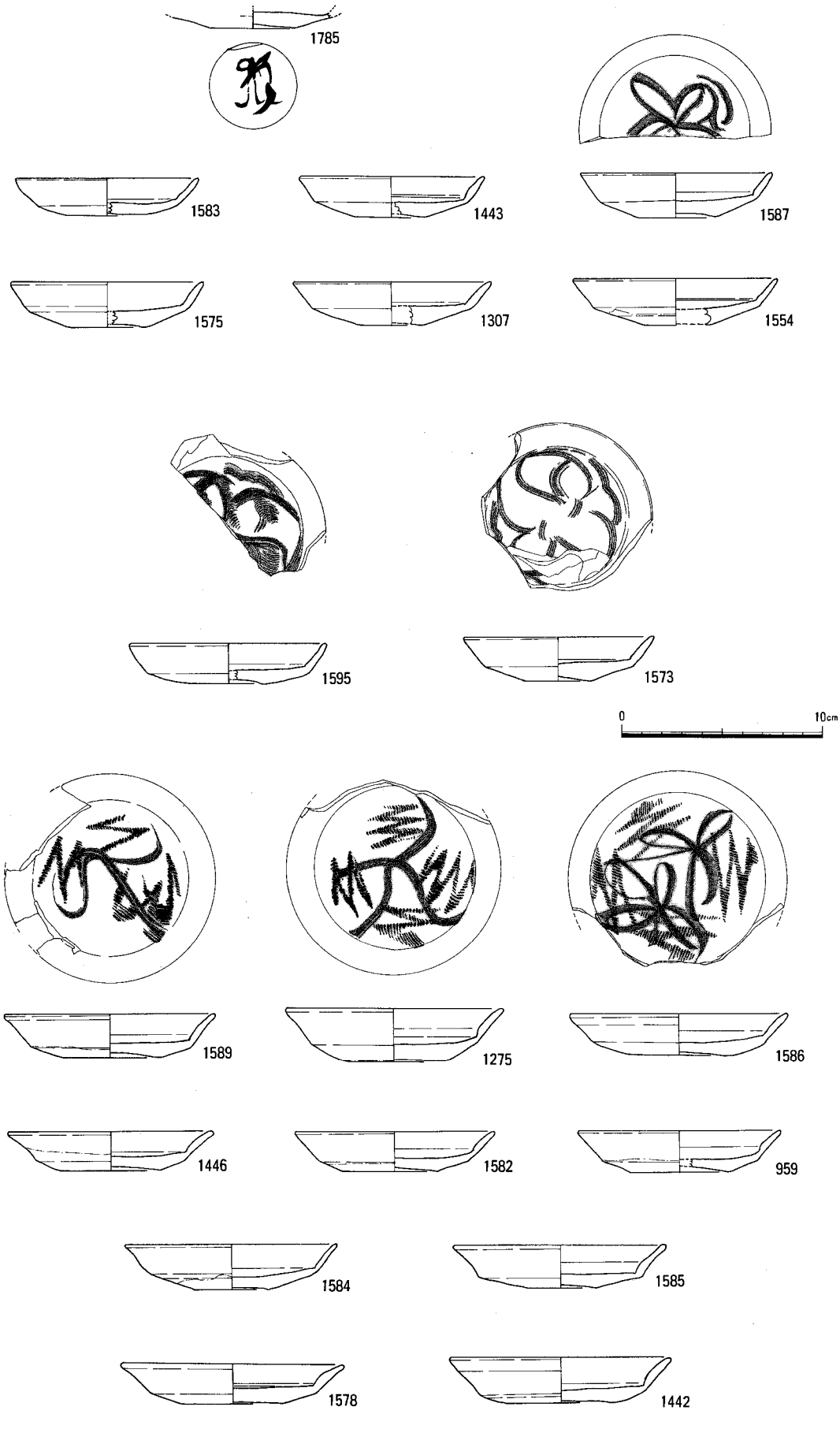


Fig.88　上層黒色土層出土遺物実測図６(1/3)

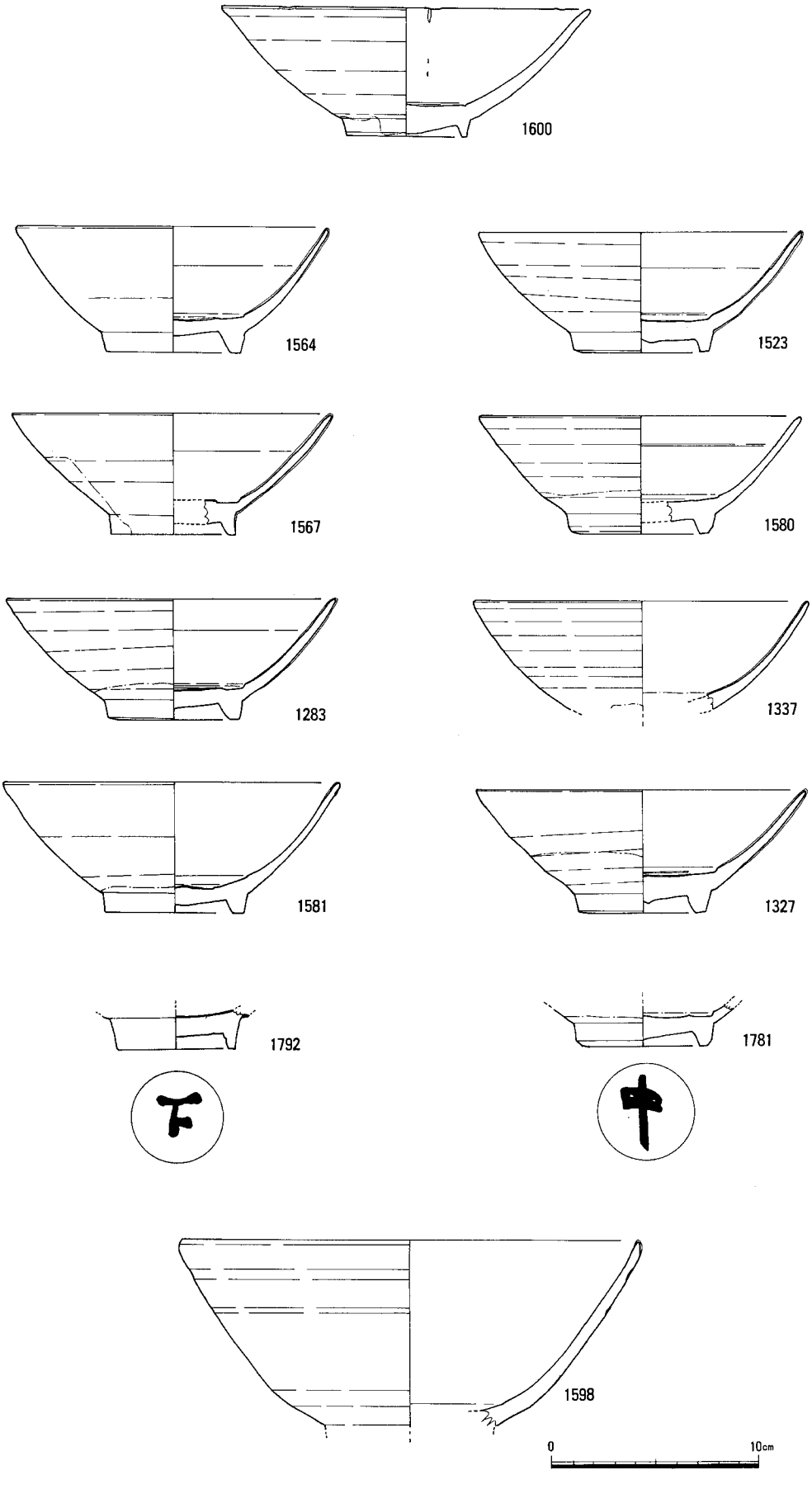


Fig.89　上層黒色土層出土遺物実測図７(1/3)

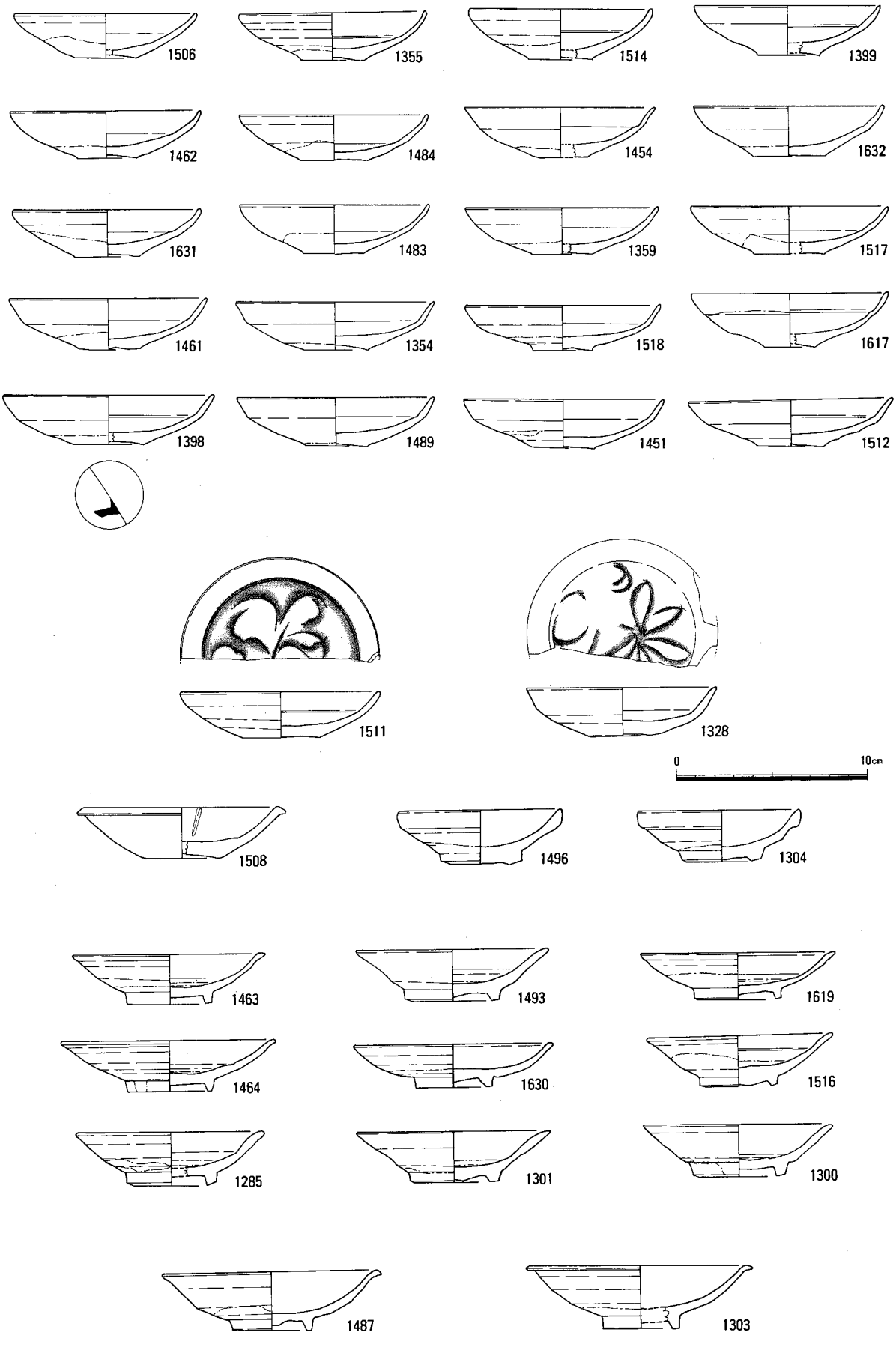


Fig.90　上層黒色土層出土遺物実測図8(1/3)

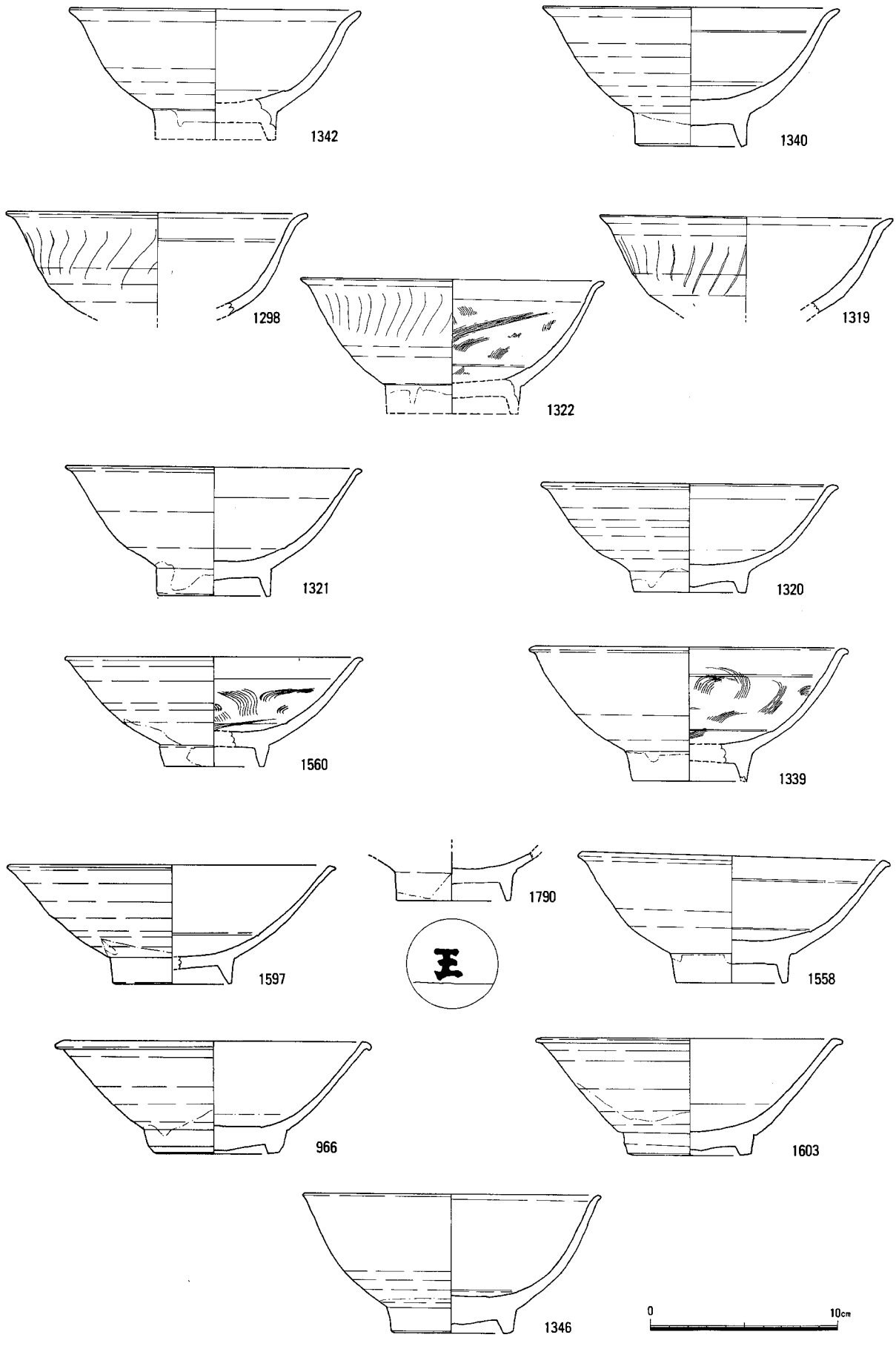


Fig.91　上層黒色土層出土遺物実測図９(1/3)

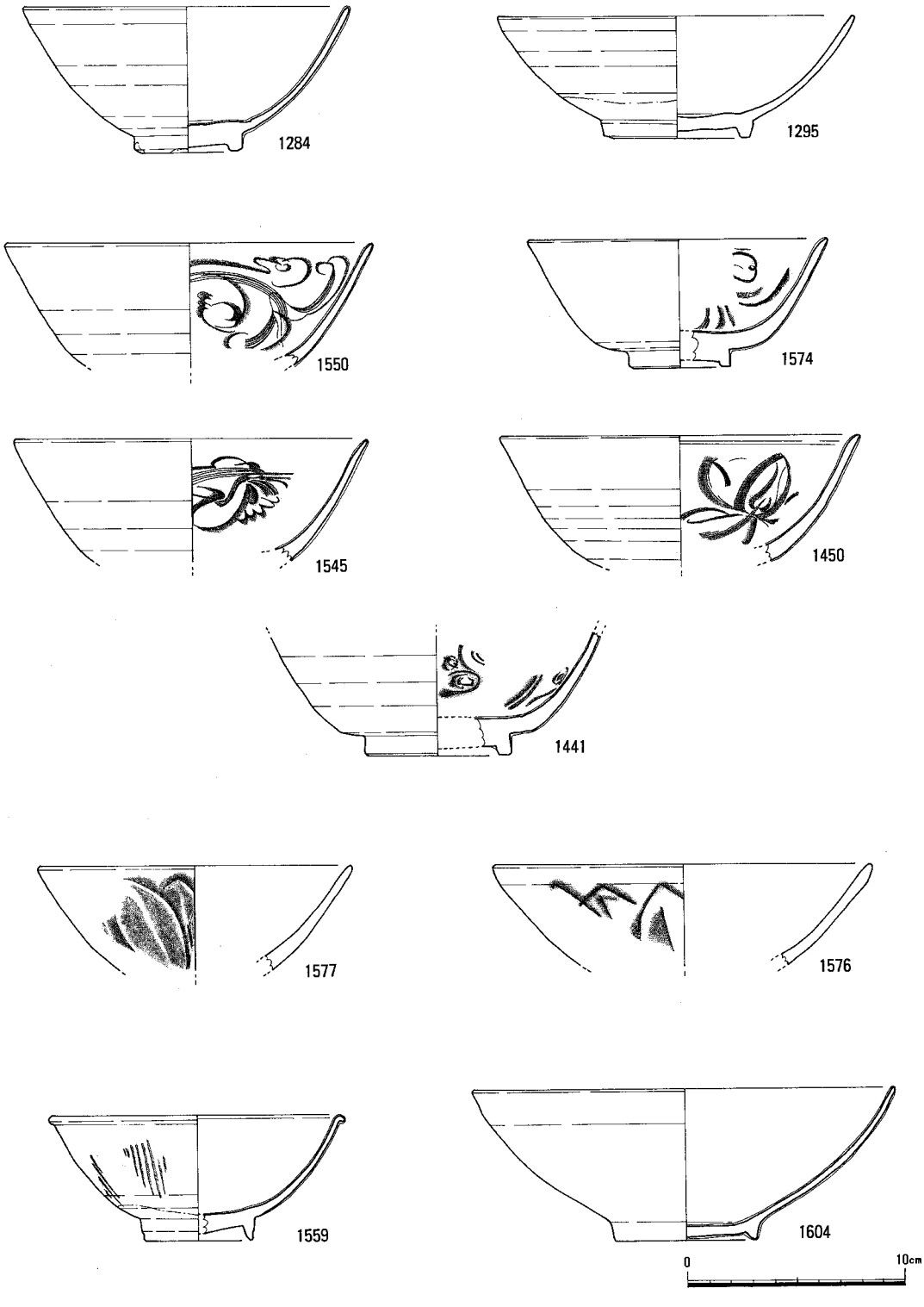


Fig.92　上層黒色土層出土遺物実測図10(1/3)

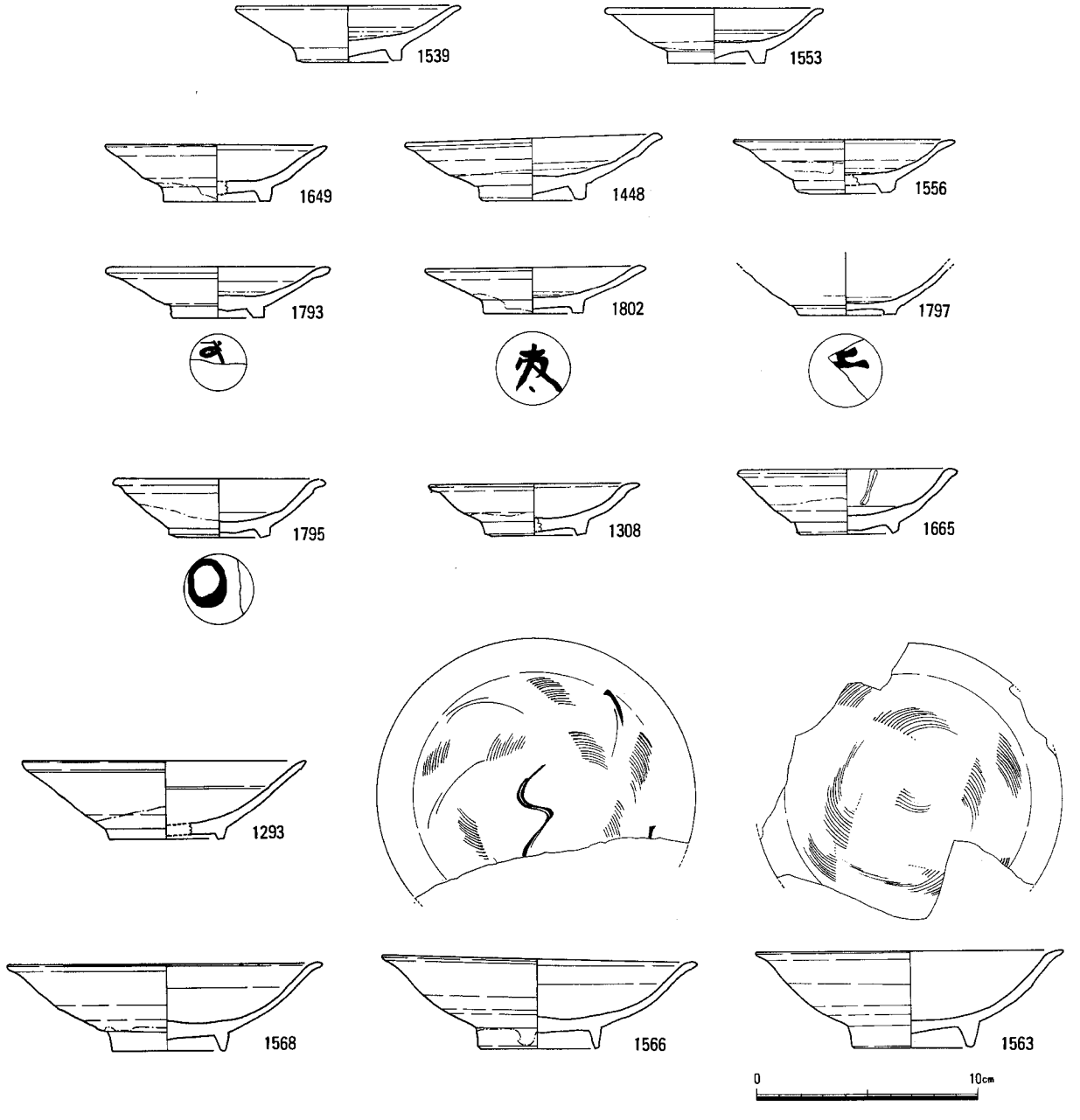


Fig.93　上層黒色土層出土遺物実測図11(1/3)

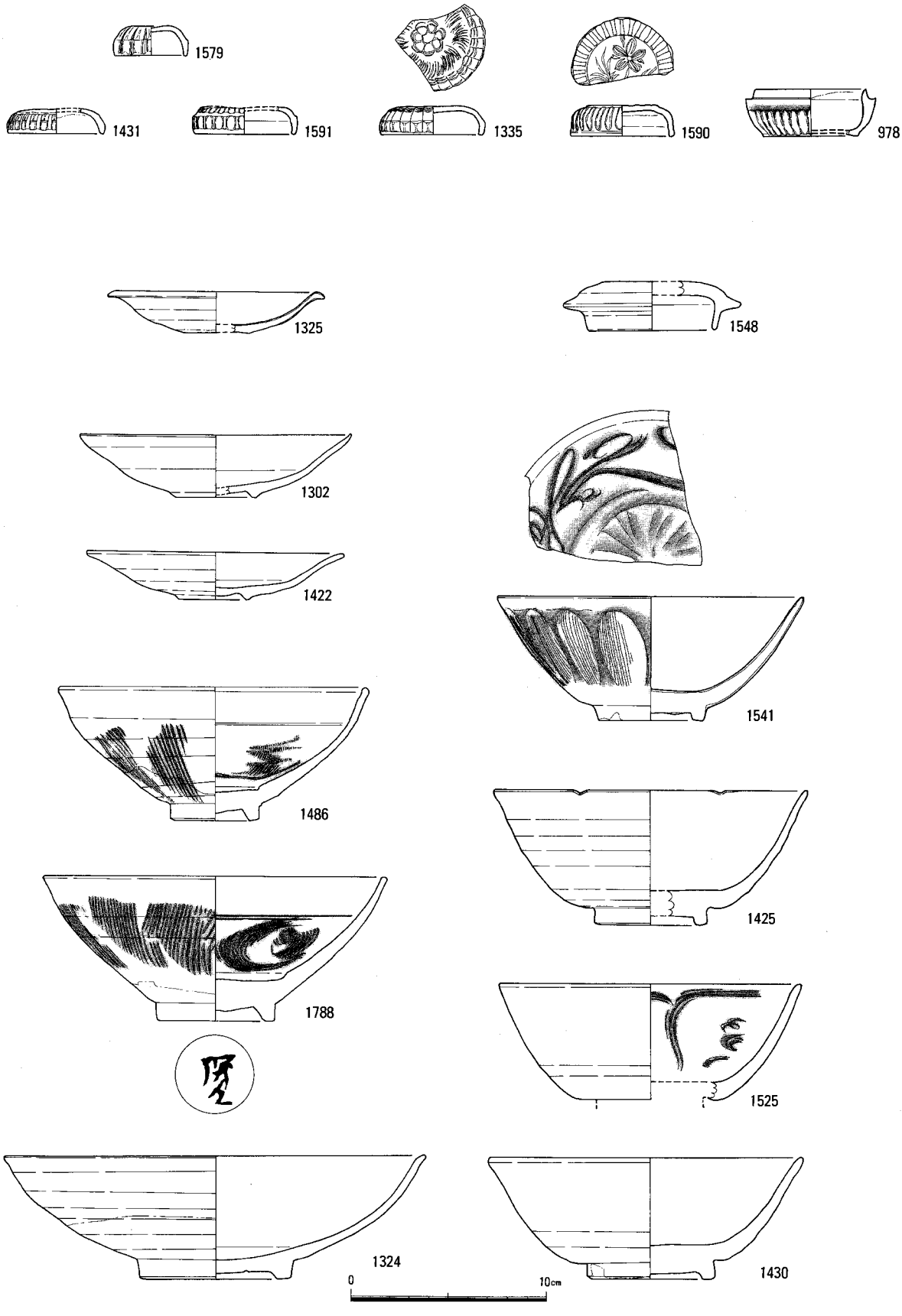


Fig.94　上層黒色土層出土遺物実測図12(1/3)

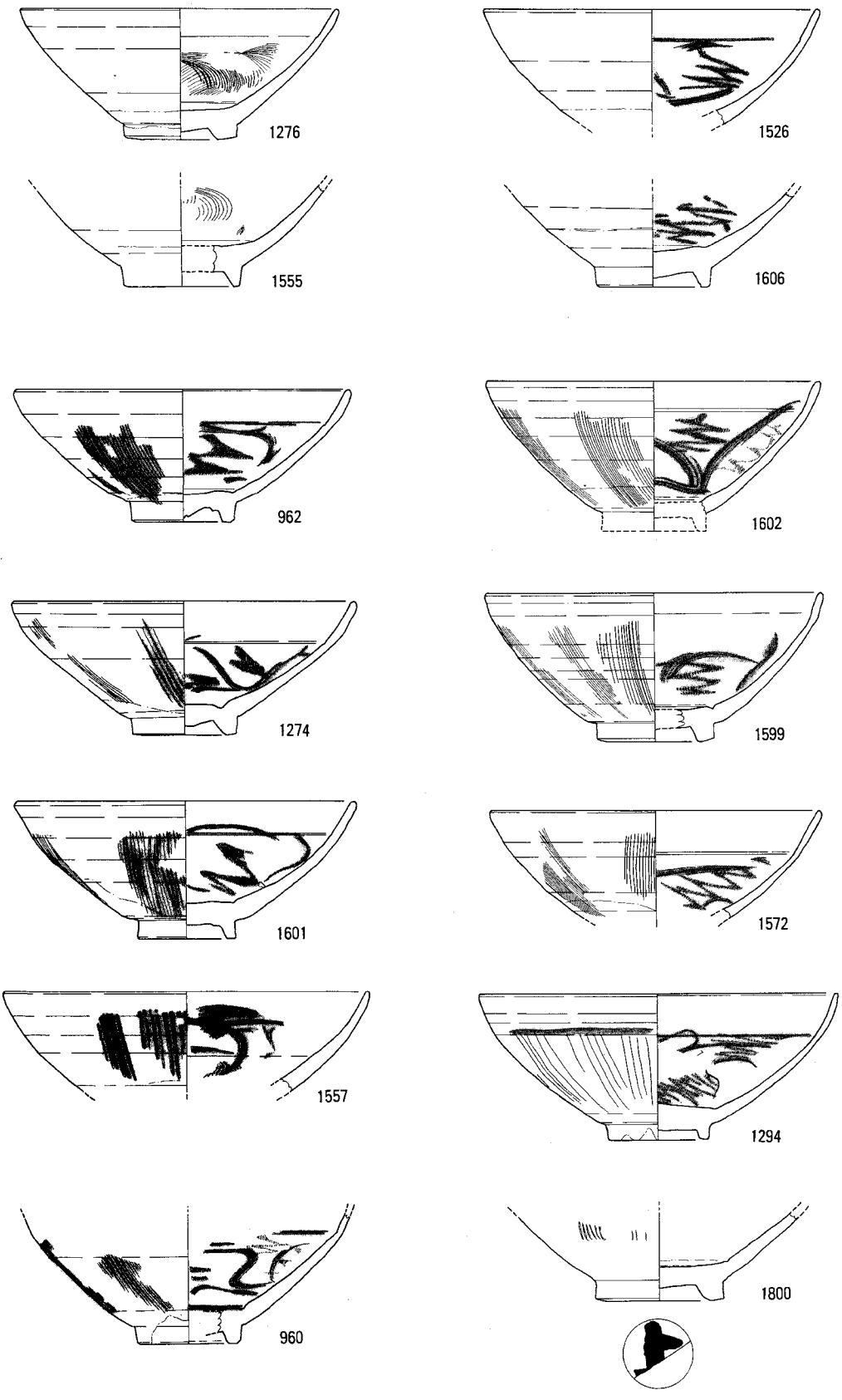


Fig.95　上層黒色土層出土遺物実測図13(1/3)

褐色～灰褐色土層（Fig.96）

2263・2264は底部ヘラ切りの土師器皿。口径は9.2、9.4cm、器高は1.5、1.4cm。**1977・1975**は高台付土師器皿。**2235・2231**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径は15.0、15.2cm、器高は3.7、3.2cm。**1978・2229**は土師器丸底坏。口径は16.1、16.0cm、器高はどちらも3.2cm。**2229**はヘラ切り、**1978**は不明。**2227・1952・2226**は土師器椀。**1807・1290・1627**は白磁平底皿III類。**1807**の外底には墨書がある。**1646**は白磁平底皿II－1類。**1626・1629**は白磁平底皿0－I類。**1625**は白磁碗II－1類。**1621**は白磁碗IV－2類。**1635**は白磁碗VI－1類。**1796**は高台内に墨書「大」が書かれた白磁碗。

灰褐色土層（Fig.97・98，PL.143）

1946・1943は土師器の小坏。底部の切り離し痕跡不明。口径は8.4、8.2cm。器高は2.0、2.4cm。**1938・1945・1939**は糸切りの土師器坏。口径14.1～14.6cm、器高2.7～3.2cm。平均口径14.3cm、平均器高3.0cm。**1949**は底部切り離し痕不明の土師器坏。**1941・1936**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径は15.2、15.0cm、器高は3.2、3.1cm。**1941**の底部には穿孔がある。**1951・1937**は土師器椀。**1731**は瓦器の小坏。**1691・1764・2238・1694**は瓦器椀。**1690**は瓦質土器の香炉。**1639**は青白磁合子蓋。**1643**は白磁平底皿VI－2類。内面無文。**1638・1289**は白磁平底皿III類。**1644**は白磁碗II－1類。**1640**は同安窯系青磁皿II－1類。**1288**は龍泉窯系青磁碗I－6類。口縁を刻んで輪花とする。**1437**は龍泉窯系青磁碗II－1類。**2373・2261**は底部糸切りの土師器皿。口径は8.6、9.2cm器高は1.2、1.4cm。**2374・2262**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径は9.2、9.4cm、器高は1.2、1.5cm。**1953～1955**は土師器坏。**1954**が不明のほかは、底部ヘラ切り。口径15.0～15.8cm、器高3.2～3.4cm。平均口径15.3cm、平均器高3.3cm。**1637**は龍泉窯系青磁碗I－5類。やや小ぶりのタイプである。**39**は同安窯系青磁碗II類。**1636**は龍泉窯系青磁碗I－5類。**1645**は白磁平底皿III類。**1615**は白磁高台付皿。白磁平底皿IV－2類に高台が付いているかたち。**1783・1806**は高台内に墨書がある白磁碗。**1642**は白磁碗V－2類。小ぶりである。**1612**は白磁碗0－II類。無文である。**1608**は白磁碗VI－1類。**37**は白磁碗V－1類。**1831**は黒釉陶器の茶入。**1610**は白磁壺もしくは水注。**49**は陶器の甕。**1815**は須恵器の甕。外面調整はタタキ。**1840**は備前焼擂鉢。IV期の製品。

灰色～暗灰色粘質土層（Fig.99）

2281・2259・2107・1697は底部糸切りの土師器皿。口径9.0～9.4cm、器高1.1～2.2cm。平均口径9.2cm、平均器高1.5cm。**1696・2280・2260**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.0～9.6cm、器高1.1～1.5cm。平均口径9.3cm、平均器高1.3cm。**2109・1979・2110**は底部糸切りの土師器坏。口径15.4～17.2cm、器高3.0～3.4cm。平均口径16.0cm、平均器高3.3cm。**2116**は底部切り離し痕不明の土師器坏。口径14.4cm、器高3.2cm。そのほかの土師器坏は底部ヘラ切り。口径14.4～16.4cm、器高3.0～3.5cm。平均口径15.5cm、平均器高3.2cm。**1693**は瓦器皿。**1730**は瓦器椀。**1647・1648**は白磁平底皿III類。**1351**は白磁碗IX類。**1623**は同安窯系青磁碗。**1434**は龍泉窯系青磁碗I－6類。**1794・1791**は高台内に墨書がある白磁碗。

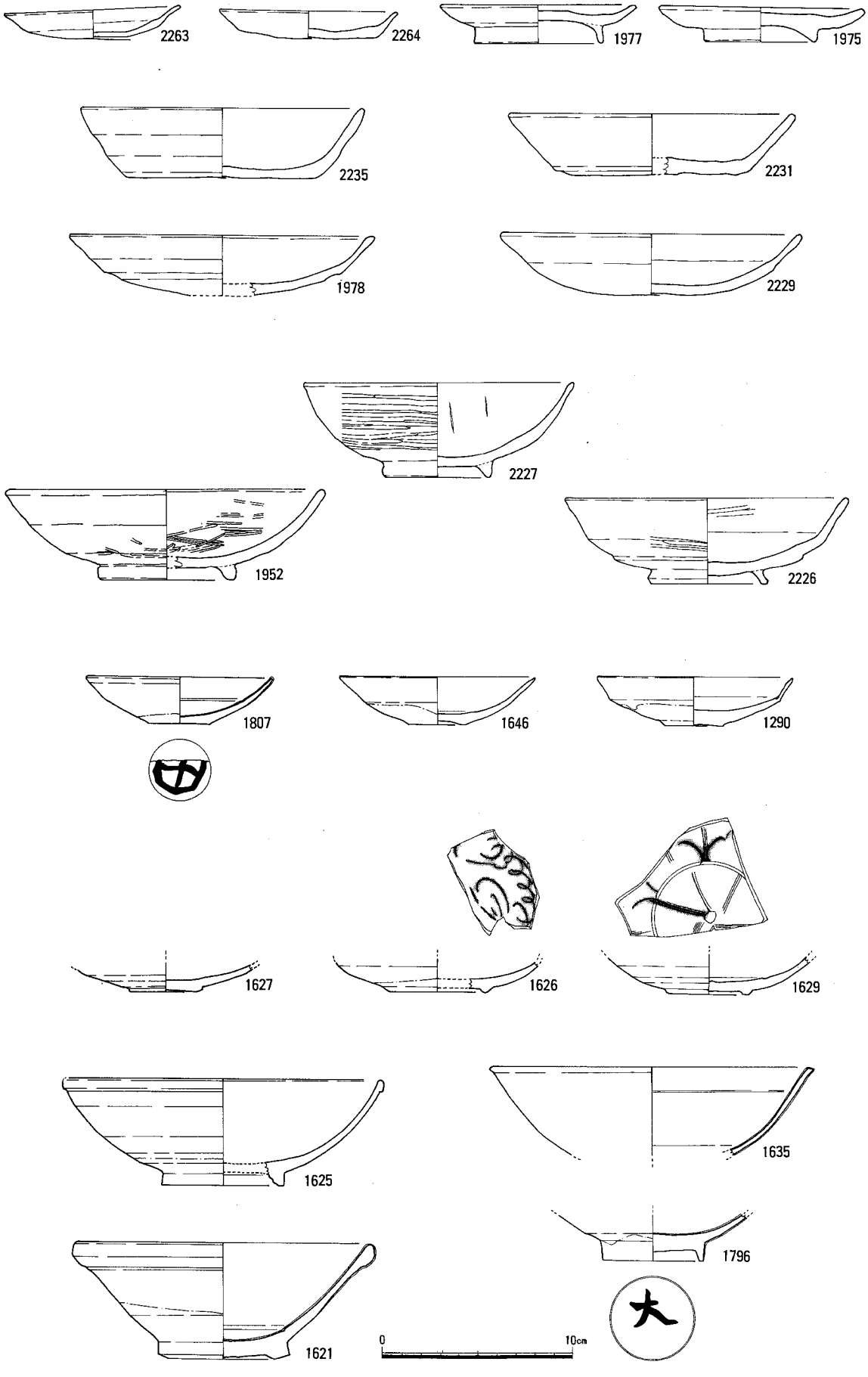


Fig.96　褐色～灰褐色土層出土遺物実測図(1/3)

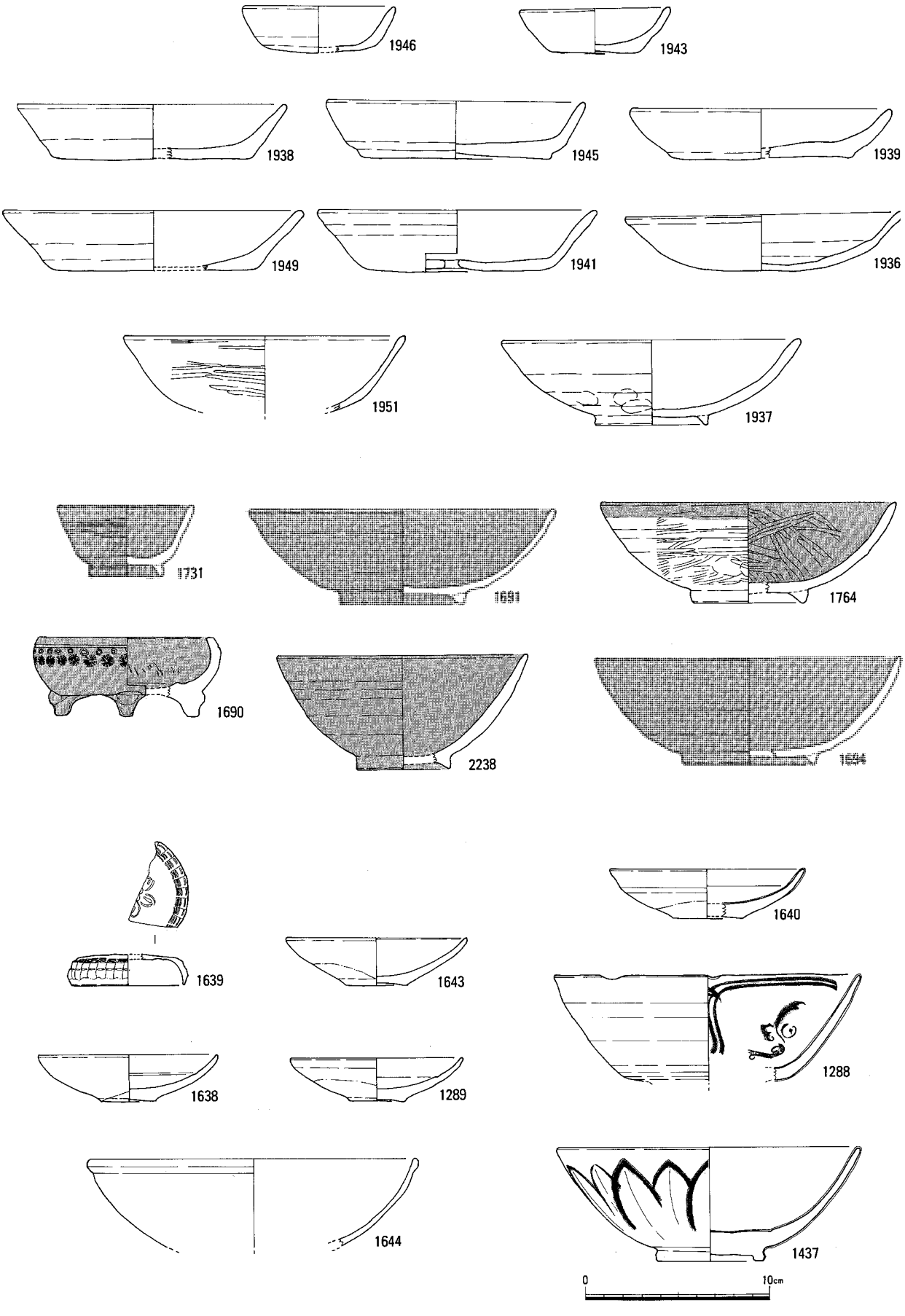


Fig.97　灰褐色土層出土遺物実測図１(1/3)

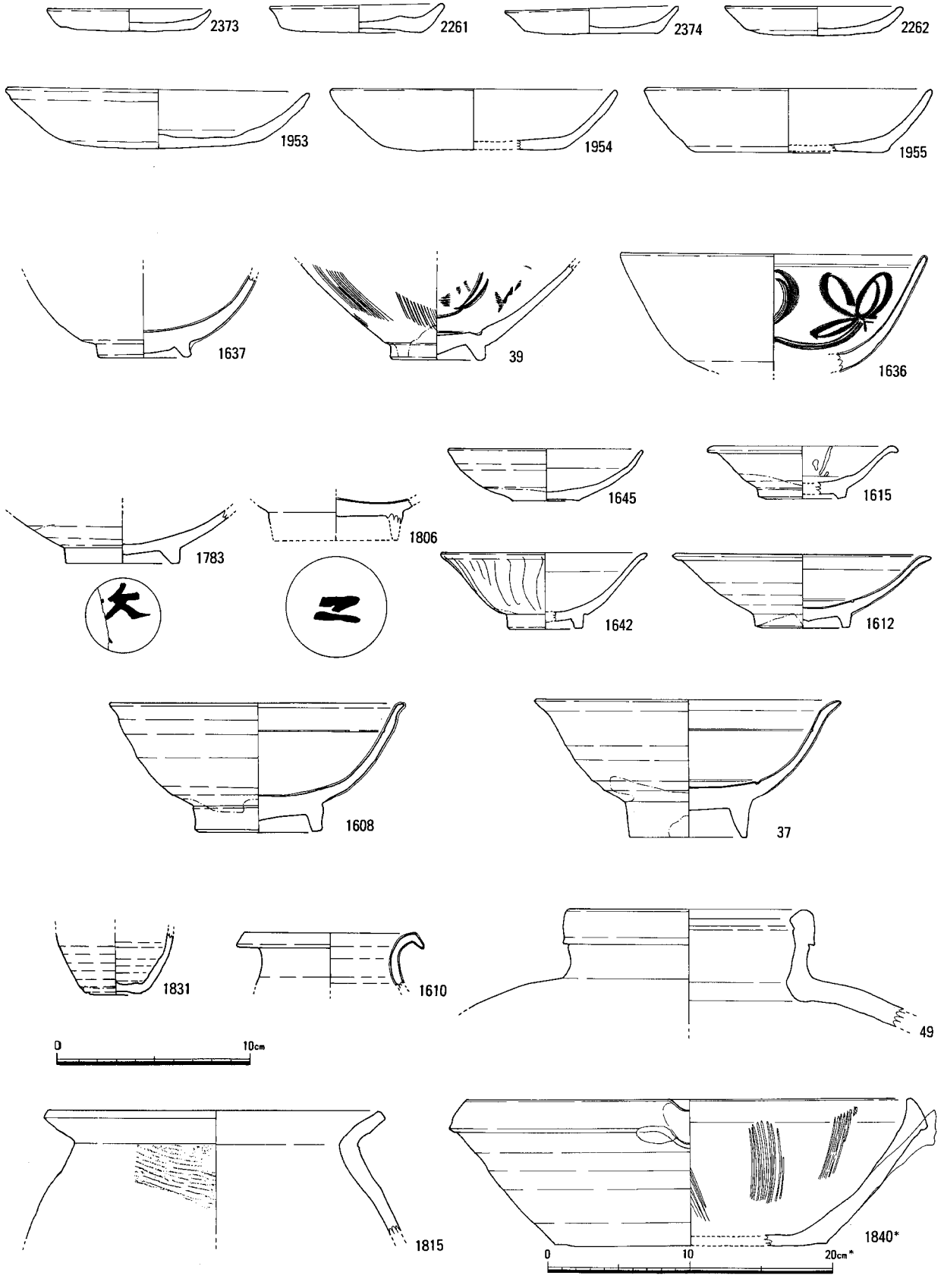


Fig.98　灰褐色土層出土遺物実測図２(1/3・1/4*)

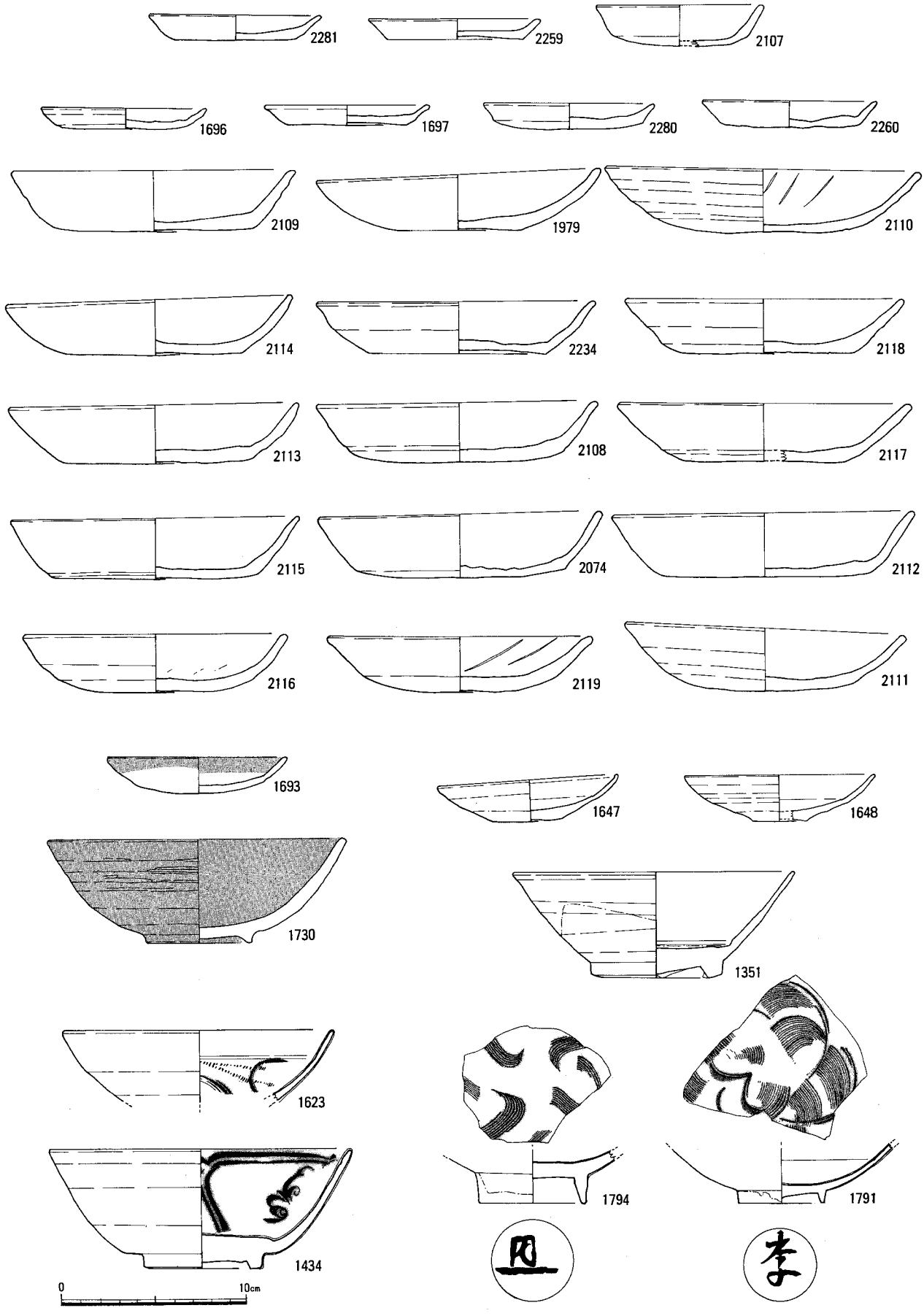


Fig.99　灰色～暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1/3)

黒色泥炭土層（Fig.100，PL.150）

1658は底部糸切りの土師器皿。口径9.4cm、器高1.4cm。**2251・1659**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径は8.8、9.4cm、器高はどちらも1.4cm。**2121**は高台付土師器皿。**2127・2236・2128**は土師器坏。**2127**は底部ヘラ切りで、そのほかは不明。口径14.0～16.2cm、器高3.4～3.5cm。平均口径15.1cm、平均器高3.4cm。**1653**は白磁の蓋。**1654**は白磁碗Ⅳ－１類。**1652**は白磁碗Ⅱ類。**1656**は白磁平底皿０－Ⅰ類。

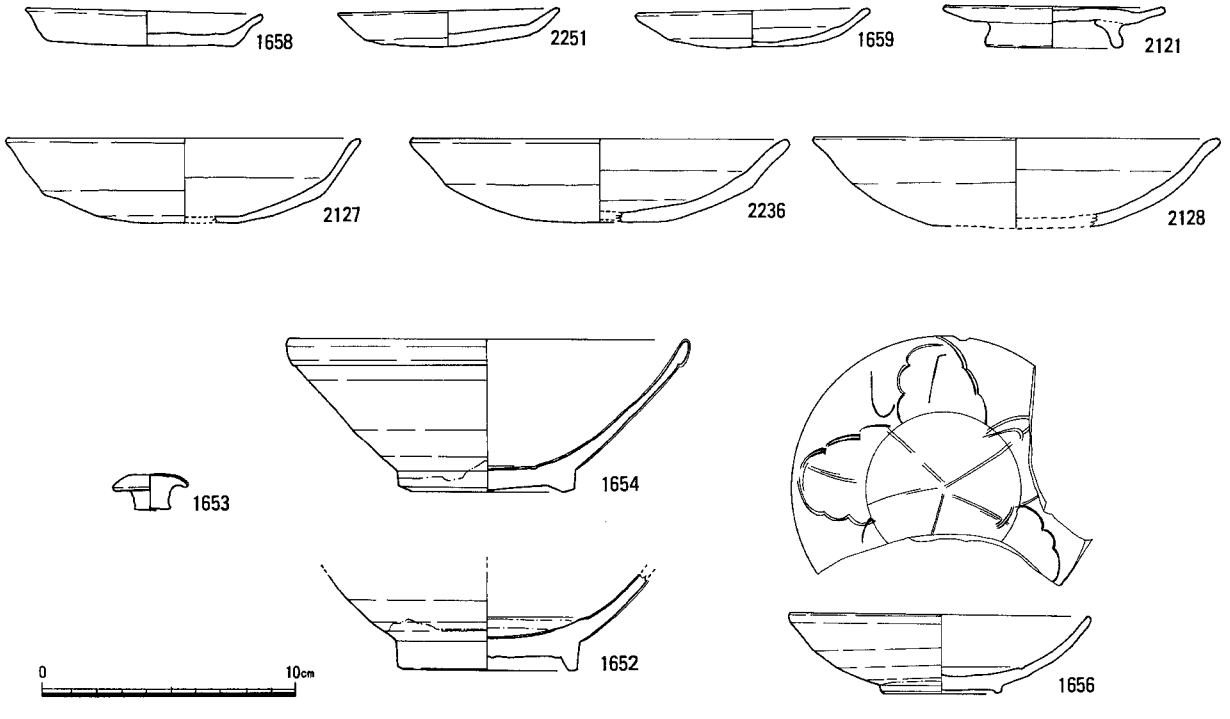


Fig.100　黒色泥炭土層出土遺物実測図(1/3)

下層黒色土層（Fig.101～119，PL.144～149）　寺熊調査区

下層黒色土にはいくつかの遺物集中部がみられたので、A群、B群、……として遺物をまとめて取り上げた部分もある。

Fig.101は土師器皿。**1057・2257・1045・2329**が糸切りで、そのほかはヘラ切り。糸切りは口径9.0～9.2cm、器高1.2～1.7cm。平均口径9.1cm、平均器高1.5cm。ヘラ切りは口径8.7～10.1cm、器高1.0～1.7cm。平均口径9.3cm、平均器高1.4cm。**989・2205・2220**は土師器高台付坏。Fig.102の残りと、Fig.103～105は土師器坏。Fig.102の**2299**と**2300**とFig.103～105はヘラ切りで、そのほかが糸切り。糸切りは口径15.8～17.6cm、器高2.8～3.7cm。平均口径16.8cm、平均器高3.2cm。ヘラ切りは口径13.8～16.3cm、器高2.5～3.7cm。平均口径16.1cm、平均器高3.2cm。Fig.106は土師器椀。**1673**は瓦器の小碗。**1711・1681・1707・1708・1717・1755・1682**は瓦器皿。Fig.107の残りとFig.108は瓦器椀。Fig.109は東播系須恵器の捏鉢。**1400・1824・1837**は中国陶器A群の盤。**1841**は中国陶器B群の鉢。**1460**は白磁碗IV－1類。Fig.111の残りは白磁碗IV－2類。**1485・1458・1457**は白磁碗II－1類。**1497**は白磁碗V－1類。**1498・970・1515**は白磁碗VI－1類。**1787・1456**は白磁碗VI－2類で、**1787**には高台内に墨書がある。**1456**は外面無文。**1513**は見込みの釉を輪状に掻き取る白磁碗VI－3類。**1438・1782・1356・1501**は白磁碗IX類。**1782**の高台内には墨書。

A 群（Fig.113，PL.144）

2277は糸切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.1cm。**2279・2278**はヘラ切りの土師器皿。口径は9.0、9.1cm、器高はどちらも1.6cm。土師器坏はすべてヘラ切り。口径15.3～15.6cm、器高3.1～3.3cm。平均口径15.4cm、平均器高3.2cm。**2069**は土師器椀。**1407**は土師器平底皿III類。

B 群（Fig.113，PL.144）

2272は糸切りの土師器皿。口径9.6cm、器高1.2cm。**2047・2067・2066**はヘラ切りの土師器坏。口径15.1～15.4cm、器高3.0～3.1cm。平均口径15.3cm、平均器高3.1cm。**1780**は瓦器皿。**1778**は瓦器椀。**1409**は白磁平底皿III類。**1410**は白磁碗IV－2類。**1411・1408**は白磁碗V－1類。

C 群（Fig.113）

2312・2376・2375は糸切りの土師器皿。口径9.0～9.5cm、器高はすべて1.2cm。平均口径は9.2cm。**2046**はヘラ切りの土師器坏。口径15.0cm。器高2.6cm。**1413**は白磁高台付皿II類。

D 群（Fig.114・115，PL.144）

2286・2285は糸切りの土師器皿。口径9.7、9.8cm、器高1.4、1.2cm。**2282～2284**はヘラ切りの土師器皿。口径9.2～9.6cm、器高1.2～1.4cm。平均口径9.3cm、平均器高1.3cm。**2048**は土師器の高台付皿。土師器坏は**2042**が口径16.0cm、器高3.3cmの底部糸切りで、そのほかはヘラ切り。口径14.9～16.0cm、器高2.6～3.6cm。平均口径15.4cm、平均器高3.1cm。**2061**は高台付坏。**1776**は瓦器椀。**2062**は土師器椀。**1822・1823**は東播系須恵器の捏鉢。**2037**は土師器の火舎。**1403・1361・1402・1365・1412・1401**は白磁平底皿III類。**1369**は同安窯系青磁碗II類。**1370・1374**は白磁碗VI－2類。**1371・1363**は白磁碗IX類。**1367**は白磁碗V－1類。**1368**は白磁碗0－I類。**1366**は白磁碗II－1類。**1373**は白磁碗IV類。**1364・1404～1406**は白磁碗IV－2類。

E 群（Fig.116，PL.144）

2276は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.4cm。**2058～2060**は土師器坏。**2058**の底部切り離し痕は不明だが、残りはヘラ切り。口径15.4～16.0cm、器高3.1～3.8cm。平均口径15.6cm、平均器高3.4cm。**1420**は青白磁の合子蓋。**1416**は白磁平底皿III類。**1418**は白磁碗II－1類。**1419**は白磁碗IV－2類。

F 群 (Fig.116)

2057は土師器坏。底部切り離し痕不明。口径16.3cm、器高2.9cm。

G 群 (Fig.116, PL.145)

2054～**2056**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径15.2～16.2cm、器高2.7～3.4cm。平均口径15.7cm、平均器高3.1cm。

H 群 (Fig.116, PL.145)

2269・**2271**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径は9.2、9.8cm、器高は1.5、1.4cm。**2049**・**2050**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径は15.3、15.1cm、器高はどちらも3.2cm。**1414**は白磁高台付皿II類。**1774**は瓦器椀。

I 群 (Fig.116, PL.145)

2051・**2052**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径16.2、16.0cm、器高3.2、2.8cm。

J 群 (Fig.116, PL.145)

2275は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.0cm、器高1.2cm。**2274**・**2273**は底部糸切りの土師器皿。口径はどちらも9.2cm。器高は1.1、1.0cm。**2053**は底部糸切りの土師器坏。口径15.6cm、器高2.8cm。

L 群 (Fig.117, PL.145)

2026・**2025**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径はどちらも15.4cm、器高は3.0、3.5cm。

N 群 (Fig.117, PL.145)

2253は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.4cm、器高1.6cm。**2258**は底部糸切りの土師器皿。口径9.7cm、器高1.7cm。**2021**～**2013**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径15.3～15.8cm、器高3.0～3.2cm。平均口径15.5cm、平均器高3.1cm。**1768**は瓦器皿。**1767**・**1770**は瓦器椀。

O 群 (Fig.117, PL.145)

2256は底部糸切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.6cm。**2017**～**2020**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径14.8～16.0cm、器高3.0～3.2cm。平均口径15.3cm、平均器高3.1cm。**2016**は土師器椀。**1375**・**1377**～**1379**は白磁平底皿III類。**1769**・**2248**は瓦器椀。**1380**は白磁碗II－1類。**1376**は白磁平底皿IV－2類で内面に白堆線が入るタイプ。**1821**は東播系須恵器の鉢。

P 群 (Fig.118, PL.146)

土師器坏は**2015**・**2008**が底部切り離し痕不明の他はヘラ切り。口径14.8～16.0cm、器高2.6～3.4cm。平均口径15.4cm、平均器高3.2cm。**2247**・**1771**は瓦器皿。**2005**は土師器の火舎。**1387**・**1436**・**1384**・**1388**・**1383**は白磁平底皿III類。**1385**は白磁碗IX類。**1386**は白磁碗II類。**1435**・**1389**は白磁碗IV－2類。**1381**は龍泉窯系青磁碗V－2類。見込みに印花文がある。混入か。**1382**は白磁碗II類。

S 群 (Fig.119, PL.146)

2003・**2001**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径はどちらも15.2cm、器高は3.0、3.2cm。**1773**は瓦器皿。**1772**は瓦器椀。**1392**・**1391**は白磁平底皿III類。**1393**は無文の白磁碗0－II類。

下層暗灰色粘質土層 (Fig.120, PL.150)

1843は中国陶器B群の長瓶。**1808**は中国陶器A群I類盤－3。

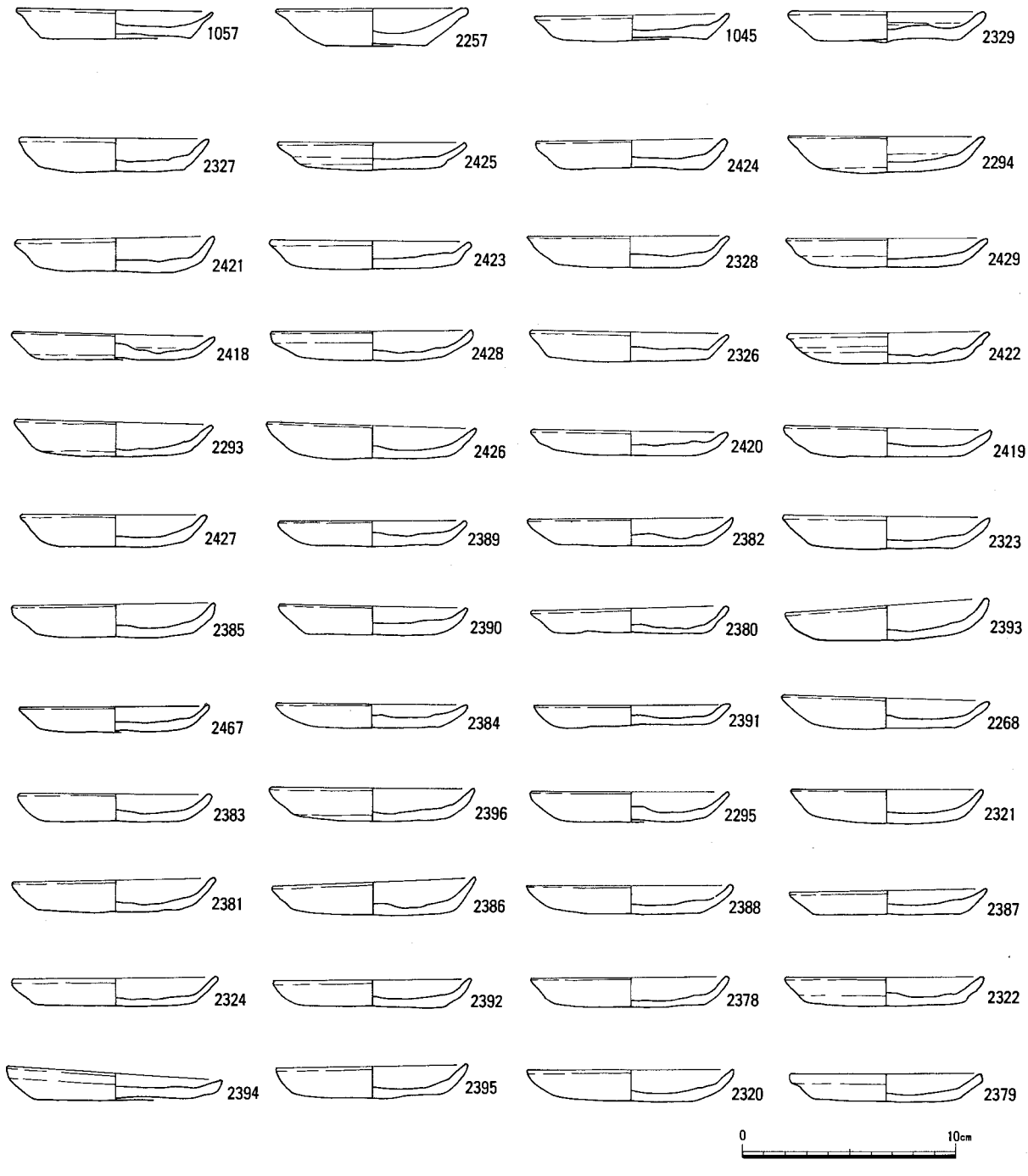


Fig.101　下層黒色土層出土遺物実測図１(1/3)

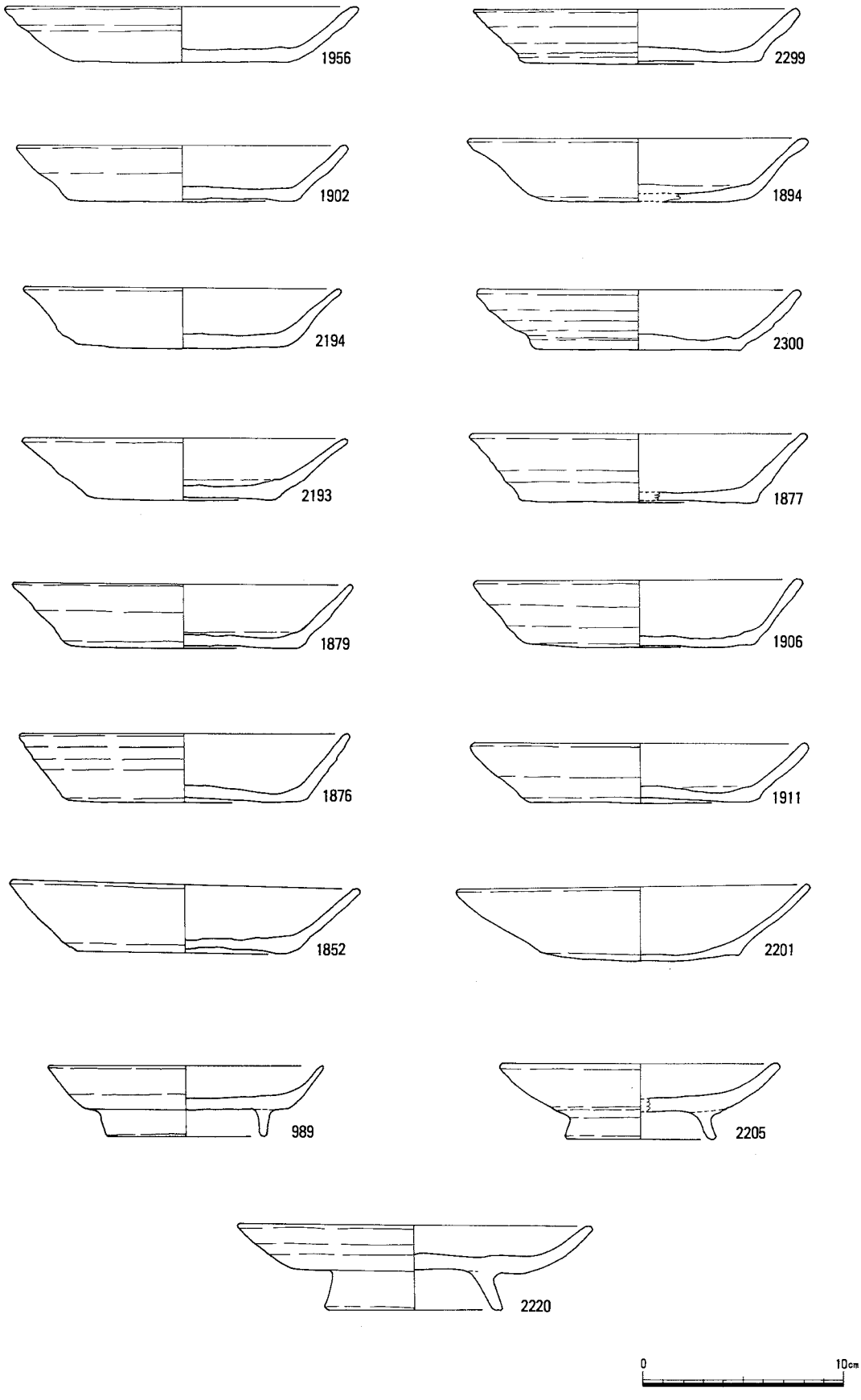


Fig.102　下層黒色土層出土遺物実測図２(1/3)

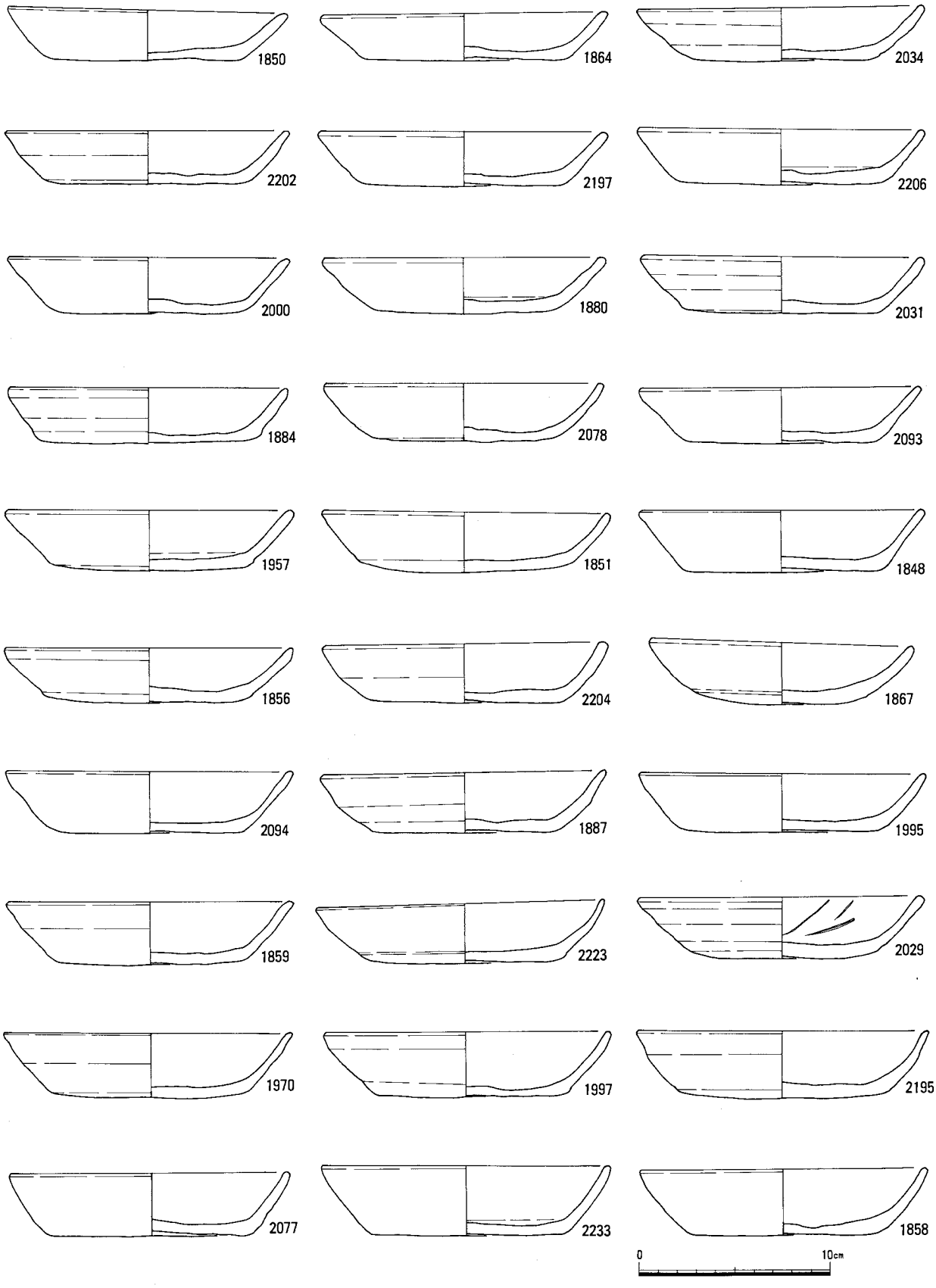


Fig.103　下層黒色土層出土遺物実測図３(1/3)

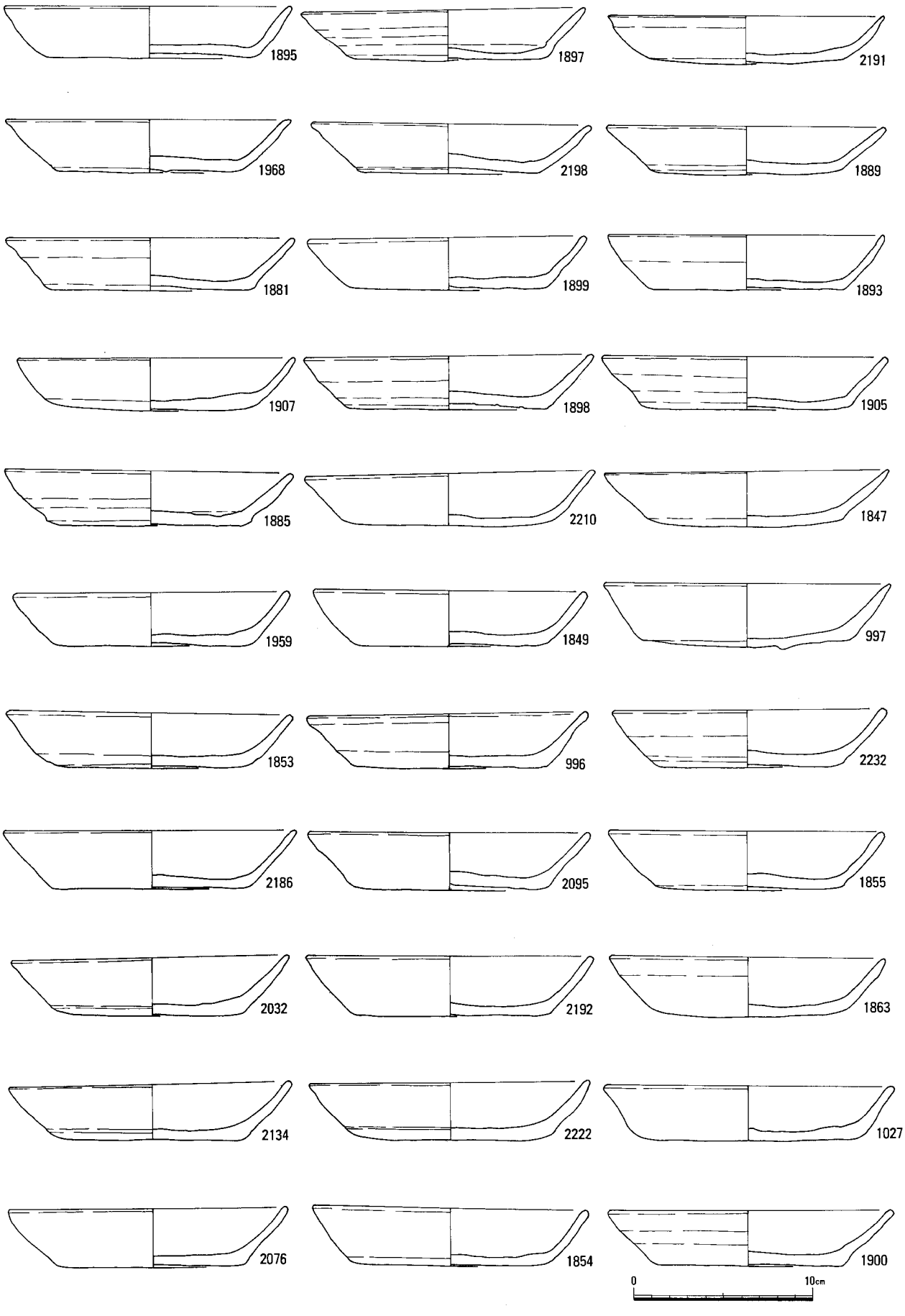


Fig.104　下層黒色土層出土遺物実測図４(1/3)

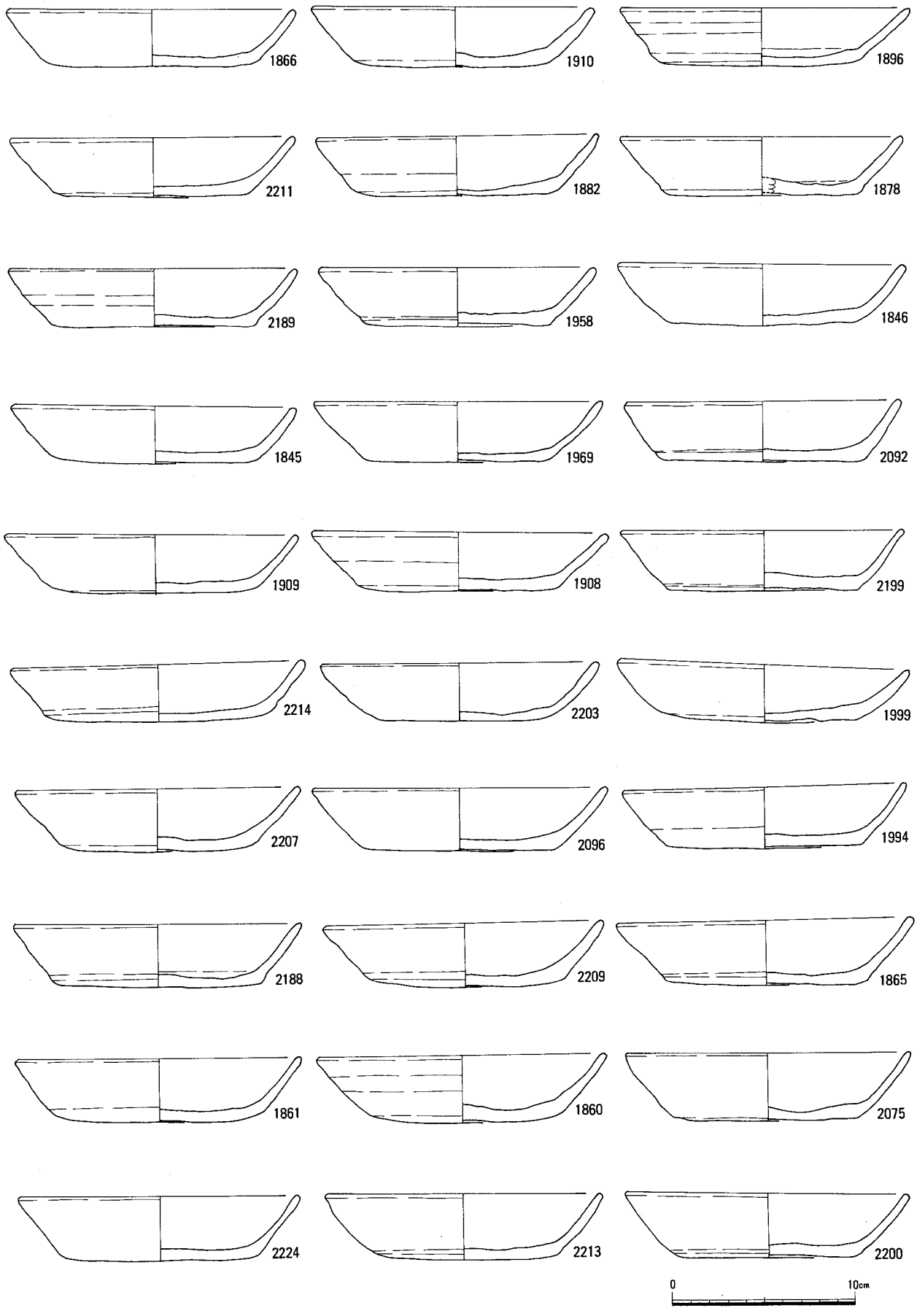


Fig.105　下層黒色土層出土遺物実測図5(1/3)

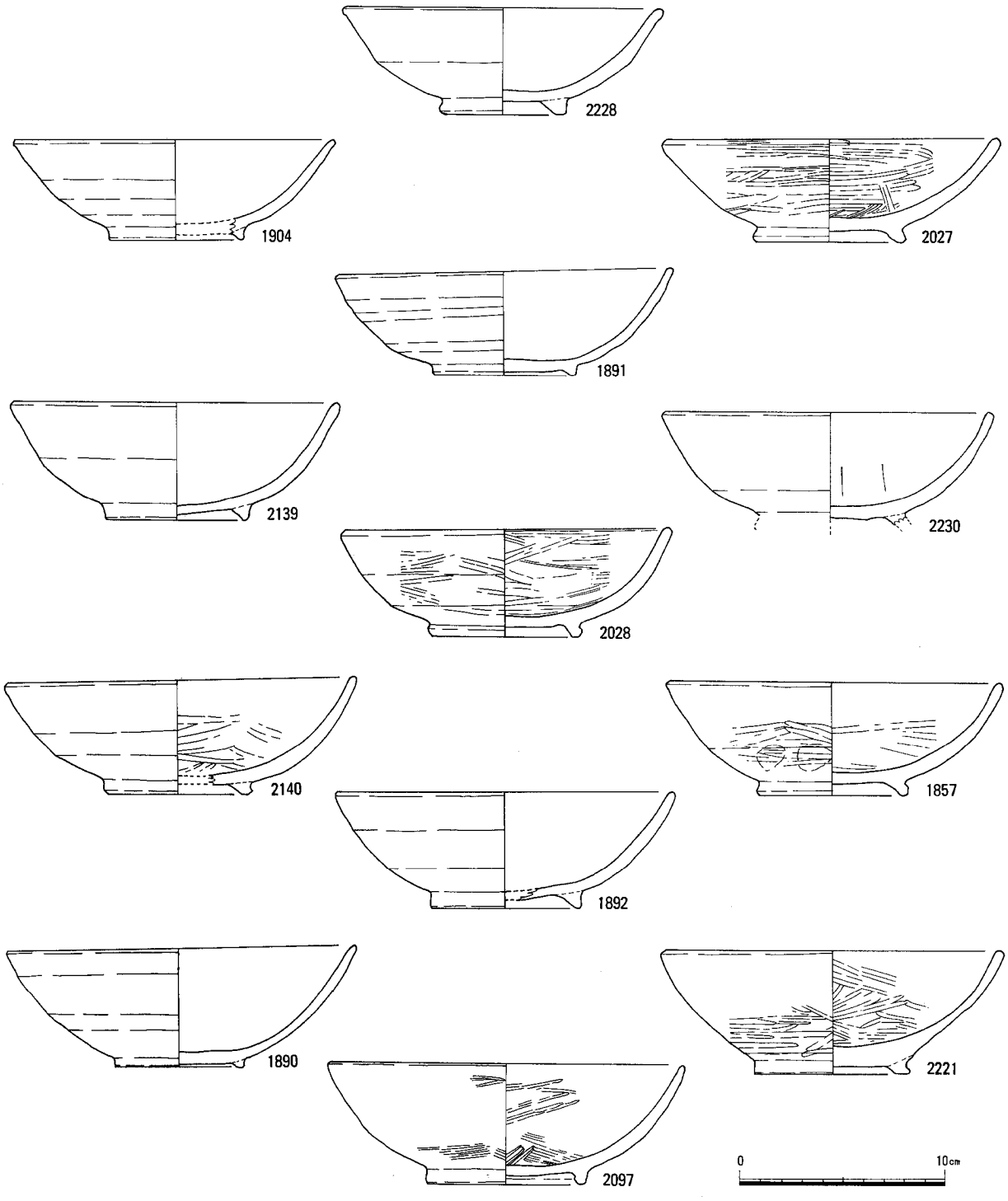


Fig.106　下層黒色土層出土遺物実測図6(1/3)

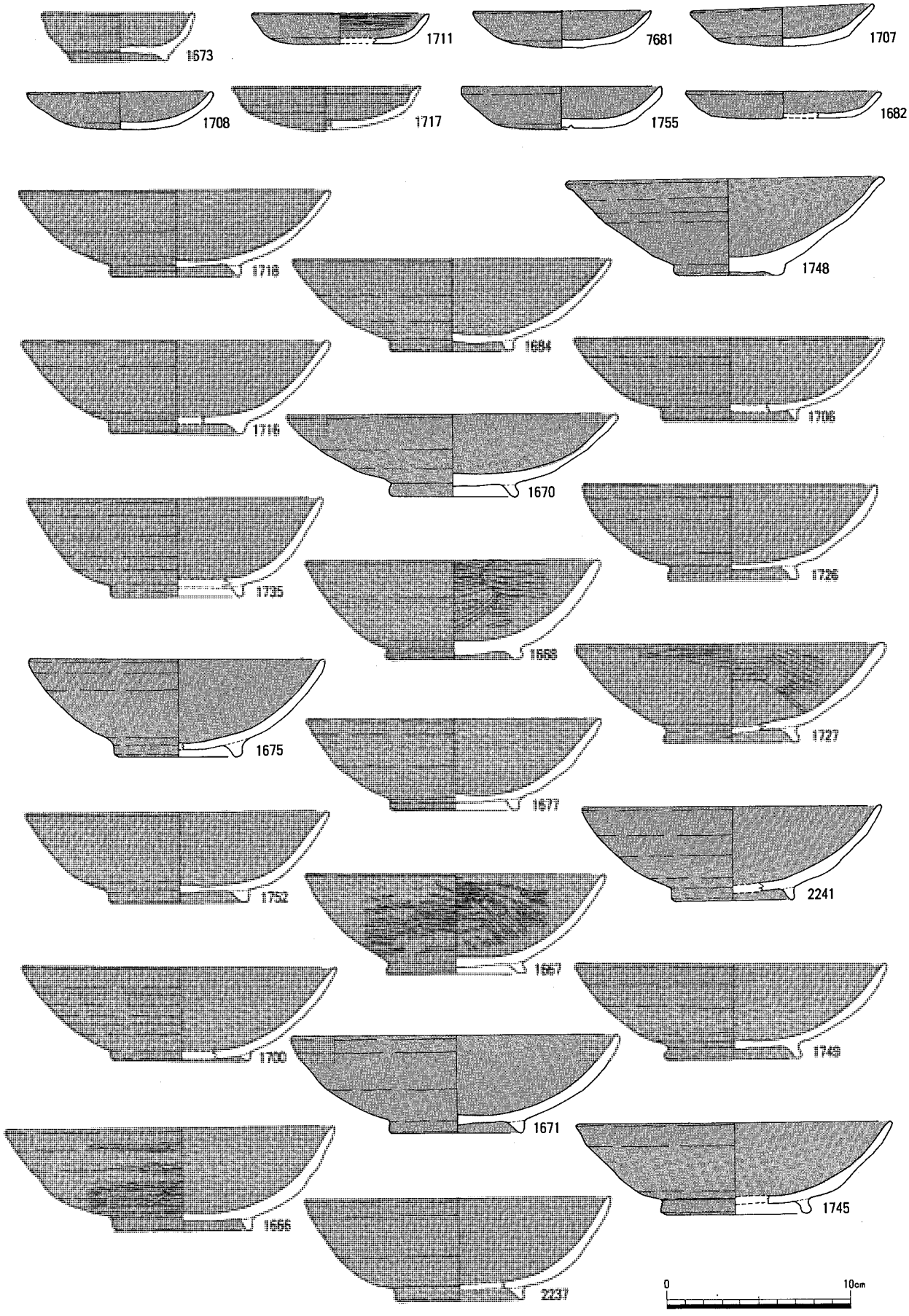


Fig.107　下層黒色土層出土遺物実測図７(1/3)

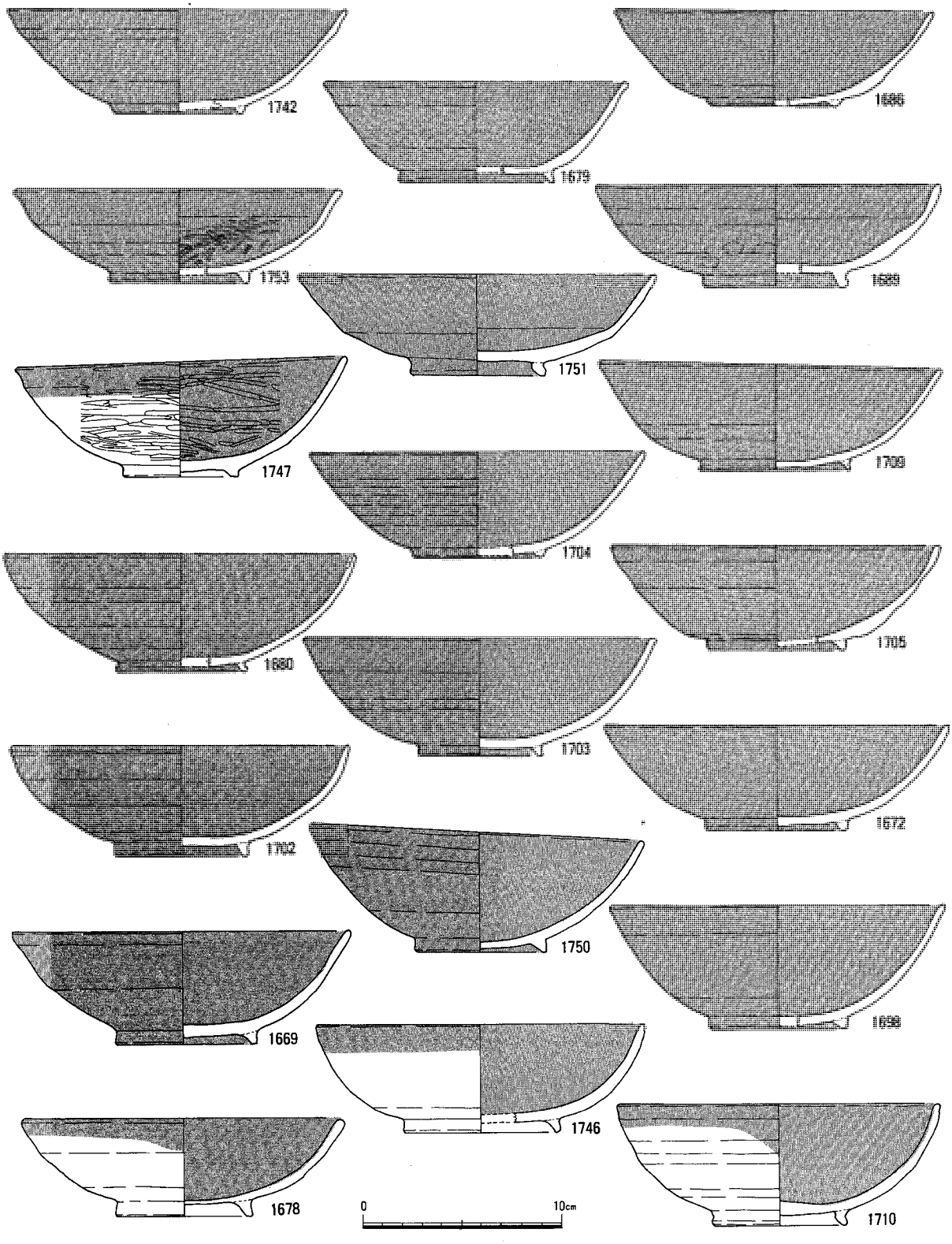


Fig.108　下層黒色土層出土遺物実測図８(1/3)

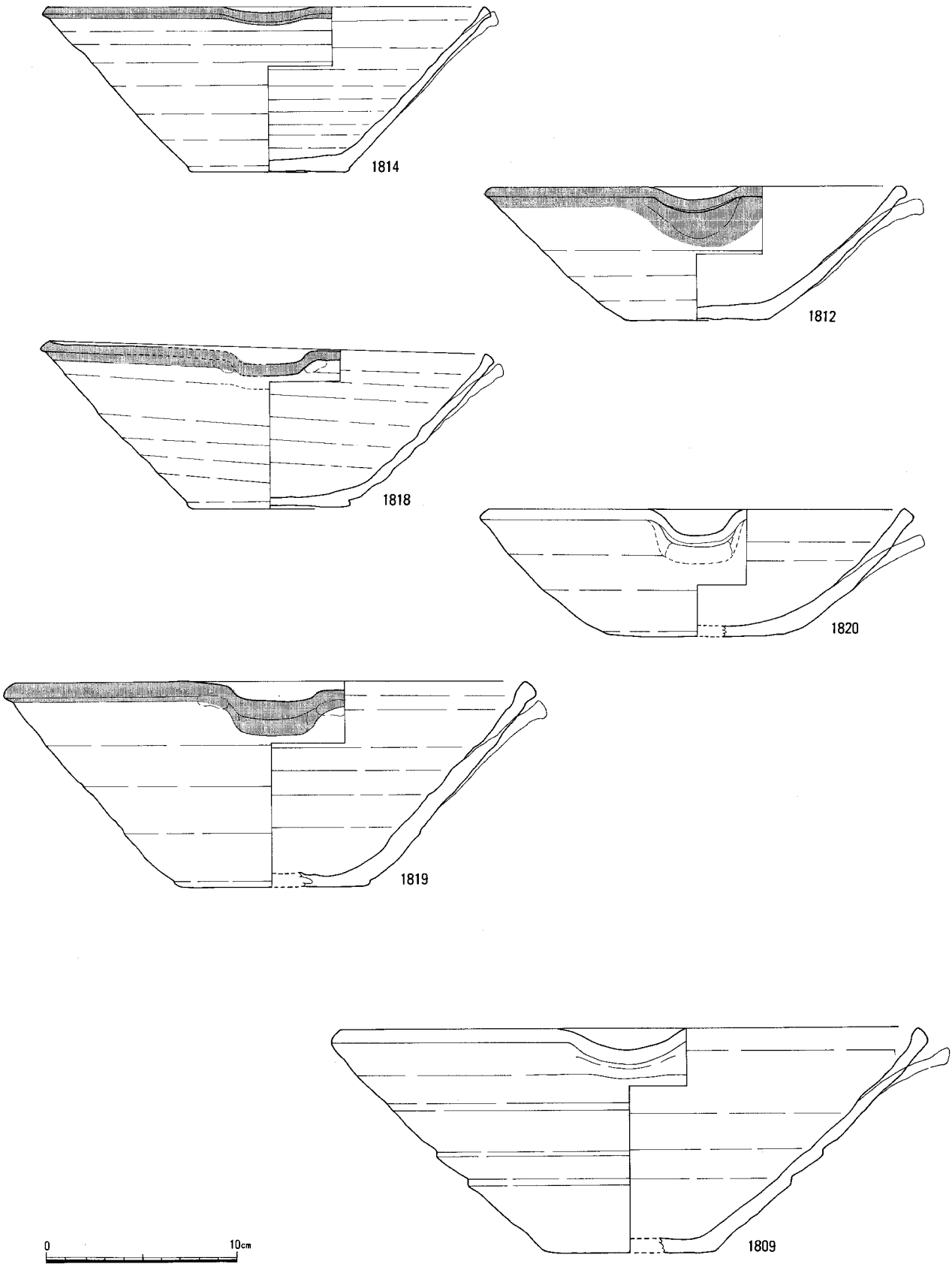


Fig.109　下層黒色土層出土遺物実測図９(1/3)

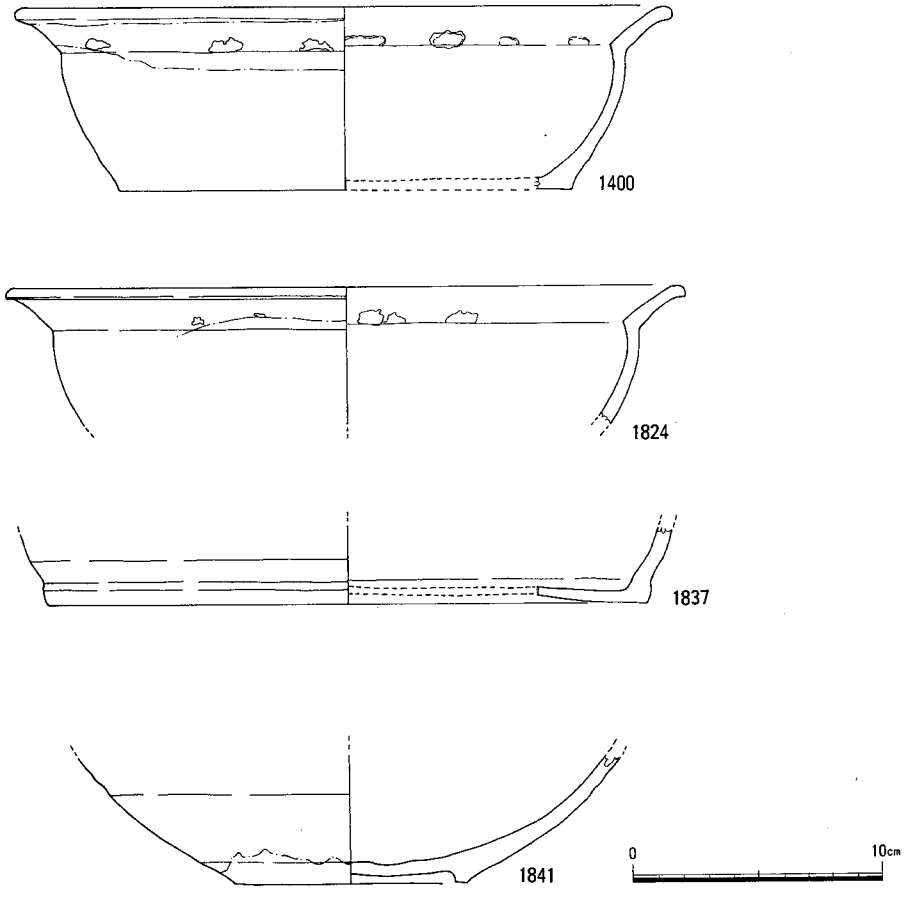


Fig.110　下層黒色土層出土遺物実測図10(1/3)

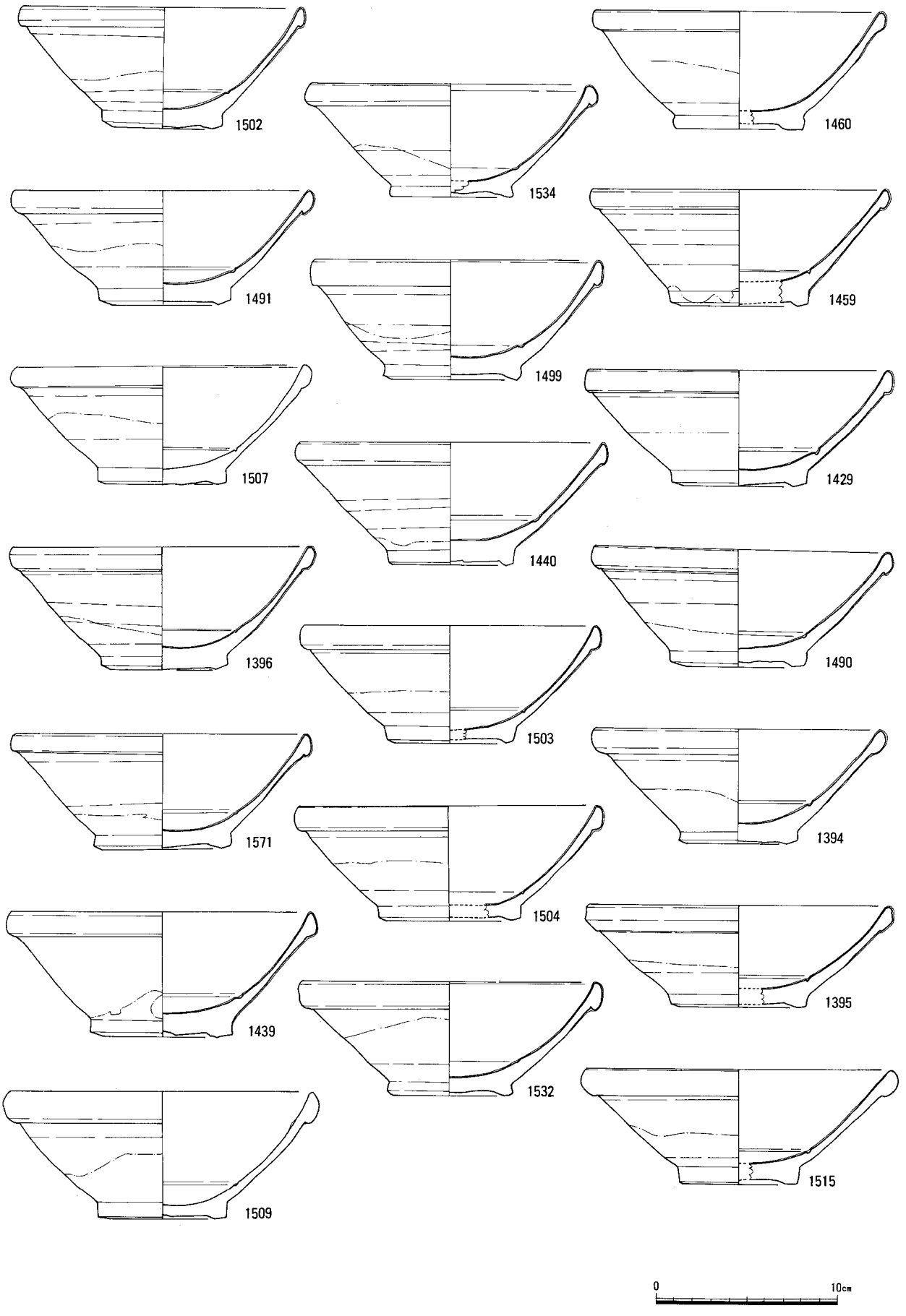


Fig.111　下層黒色土層出土遺物実測図11(1/3)

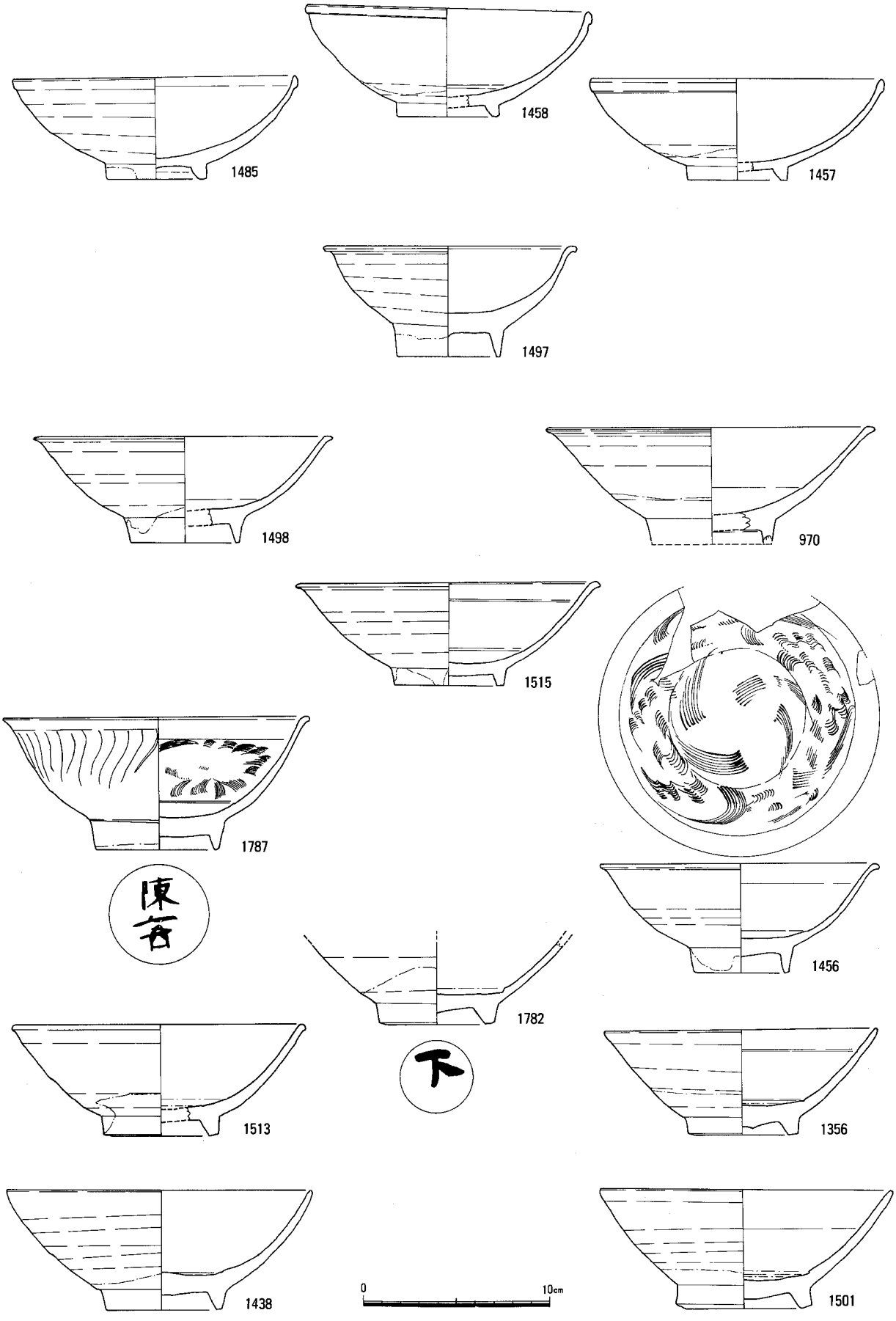


Fig.112　下層黒色土層出土遺物実測図12(1/3)

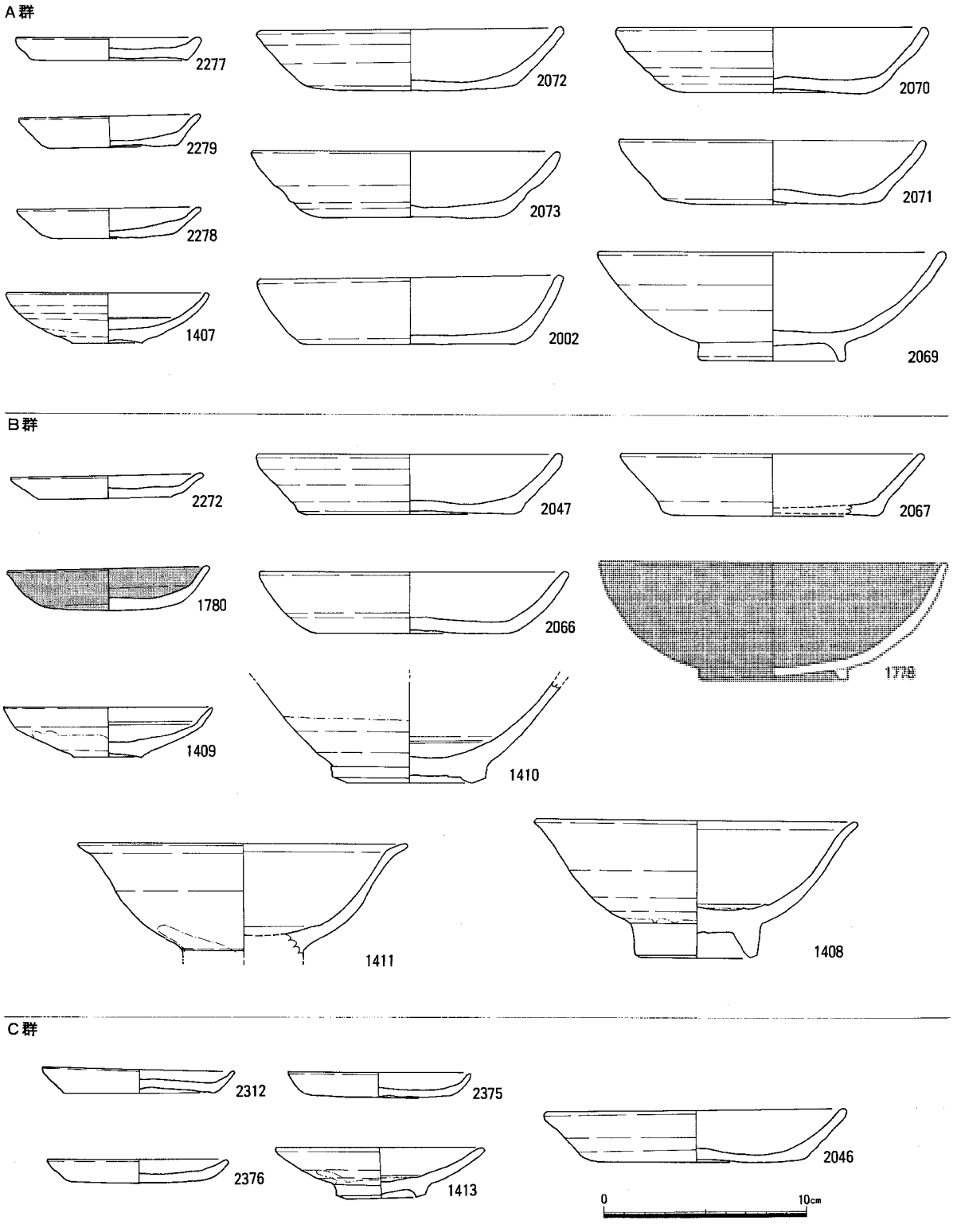


Fig.113　下層黒色土層A・B・C群出土遺物実測図13(1/3)

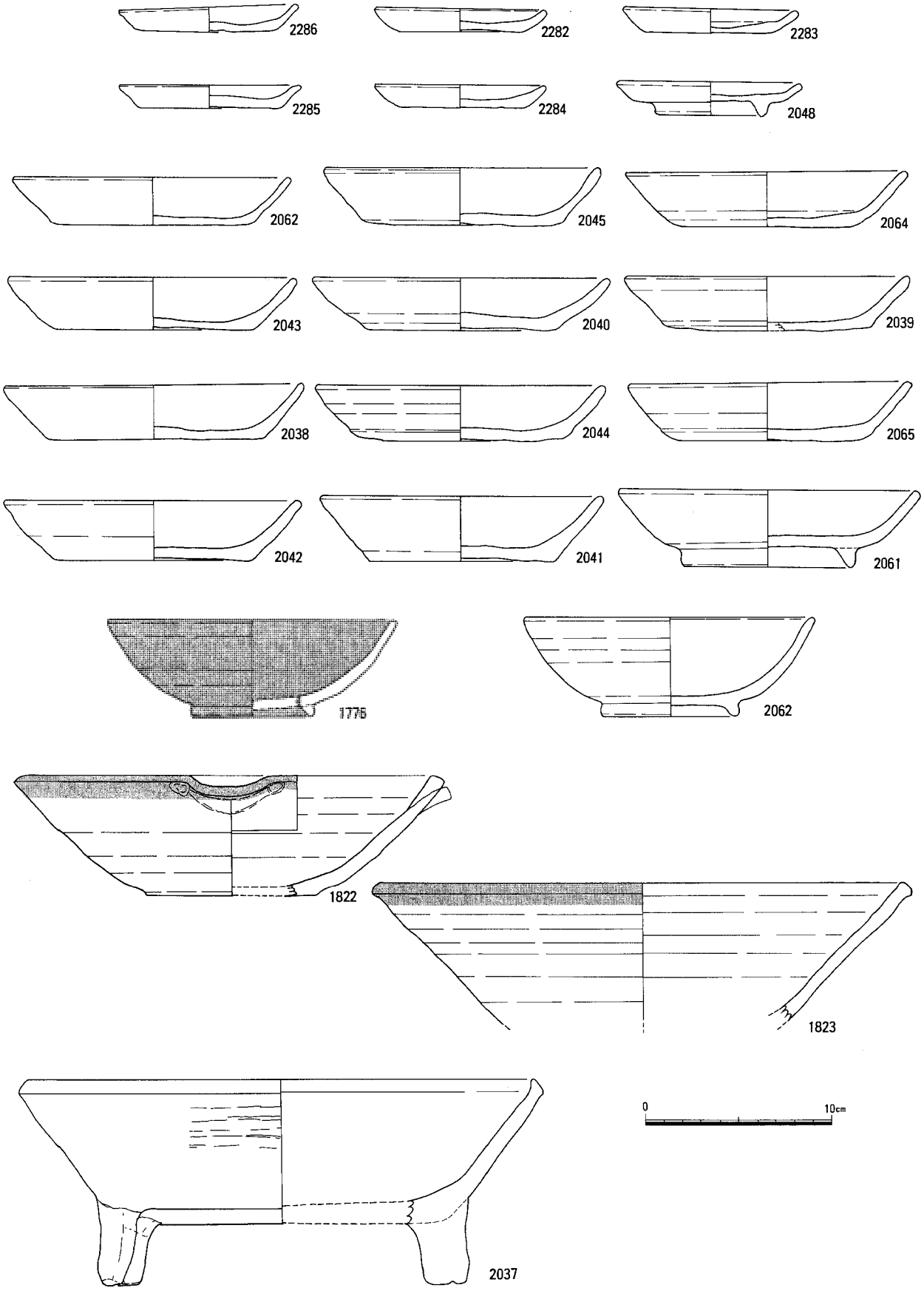


Fig.114　下層黒色土層D群出土遺物実測図14(1/3)

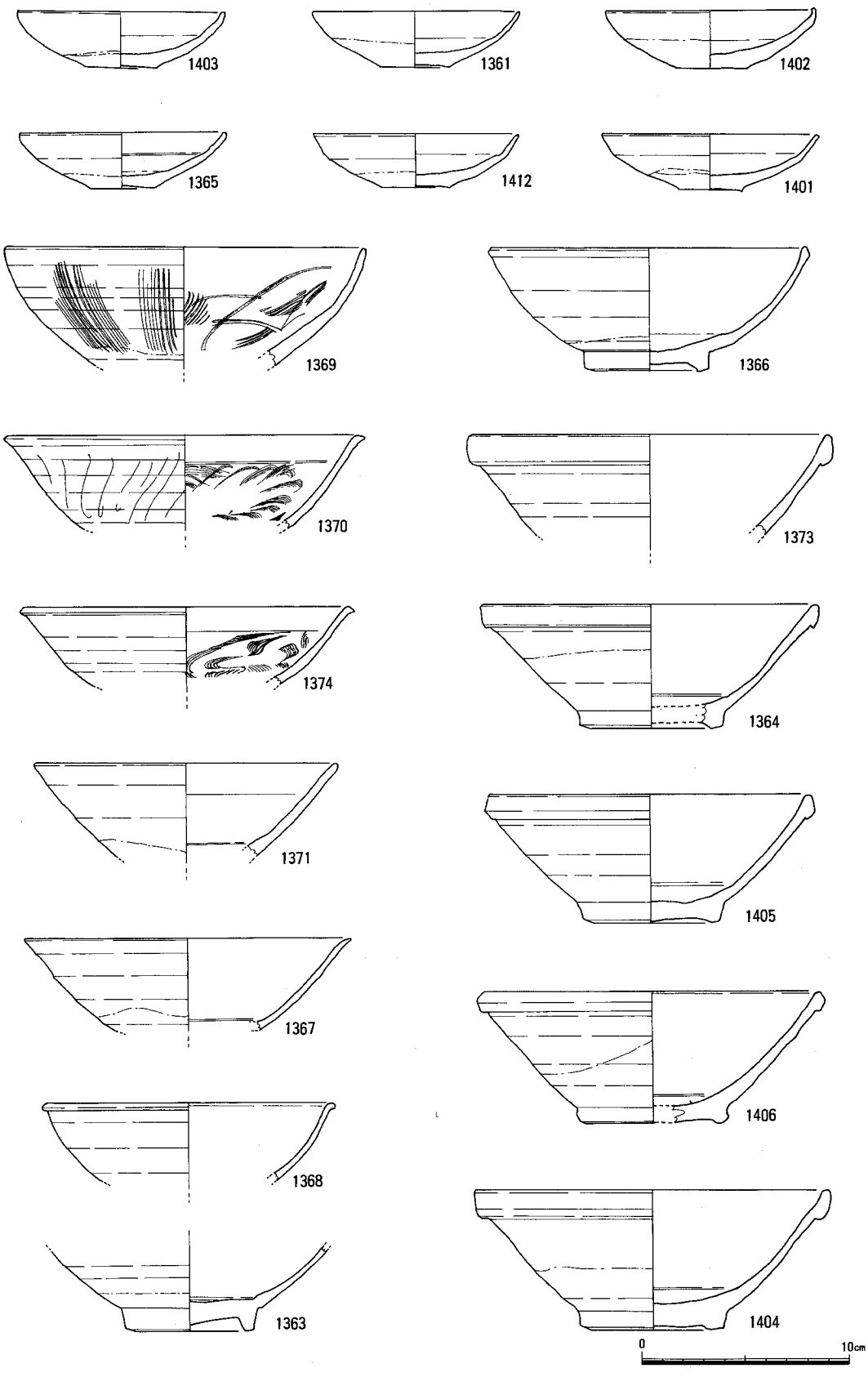


Fig.115　下層黒色土層D群出土遺物実測図15(1/3)

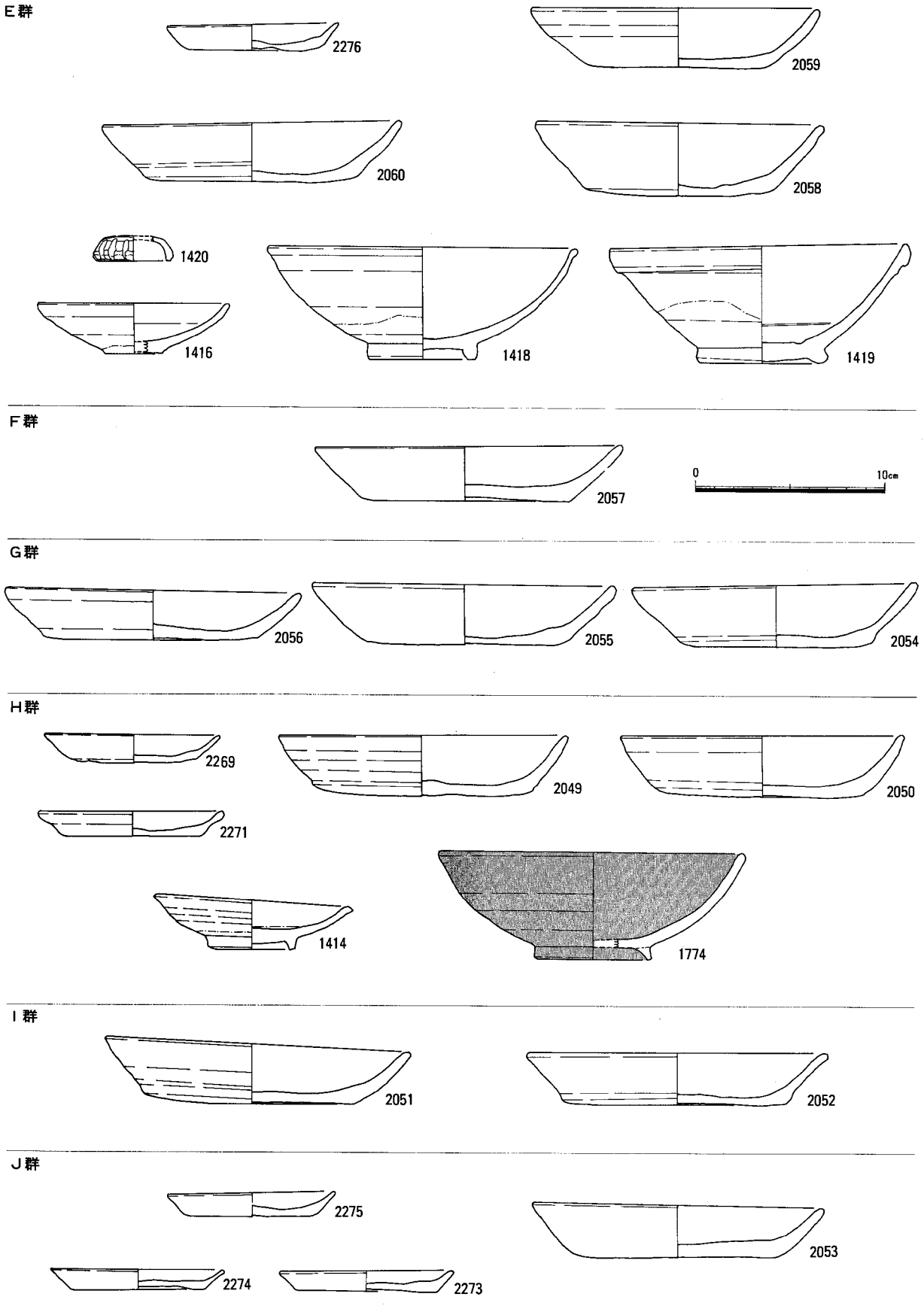


Fig.116　下層黒色土層E・F・G・H・I・J群出土遺物実測図16(1/3)

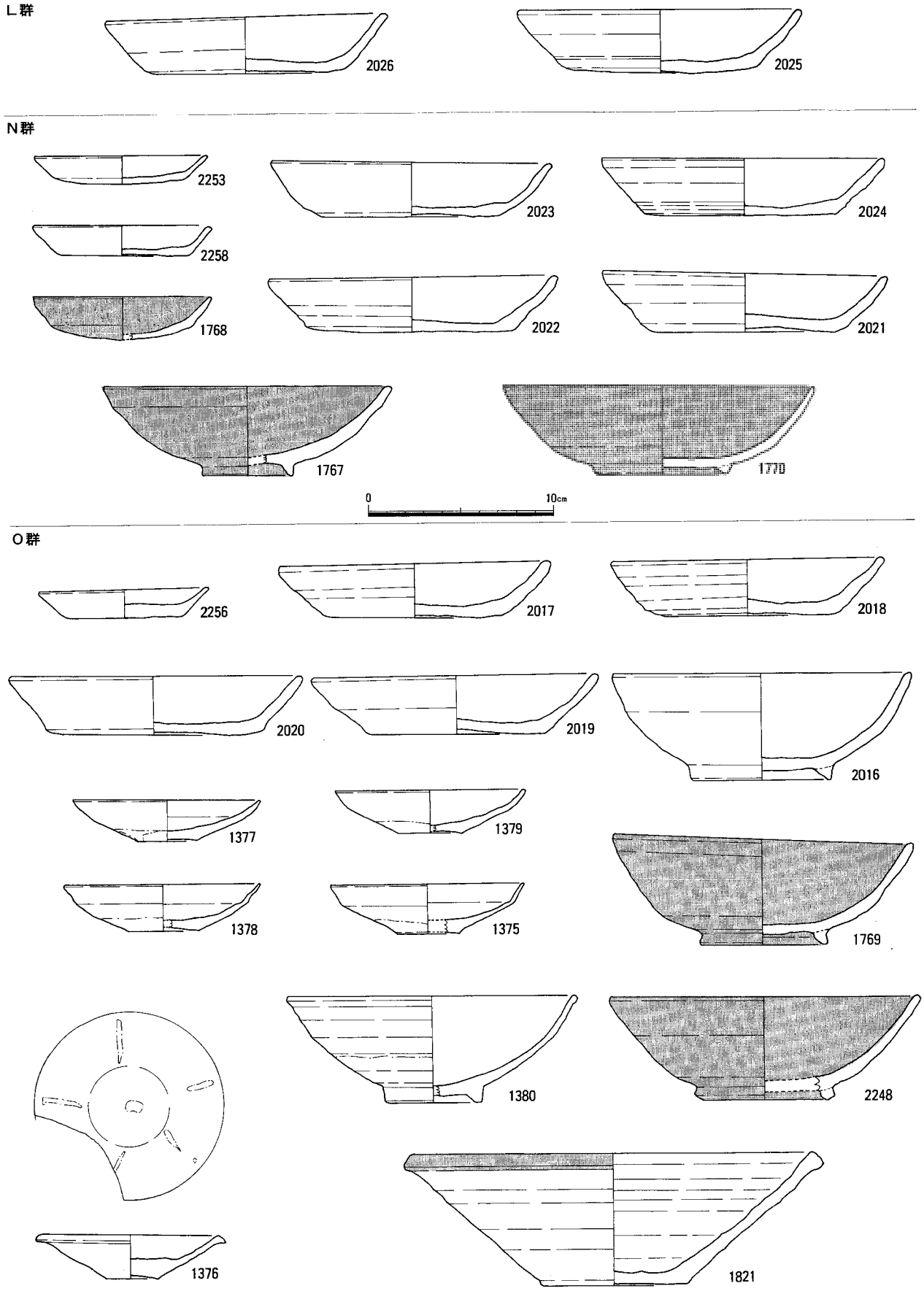


Fig.117　下層黒色土層L・N・O群出土遺物実測図17(1/3)

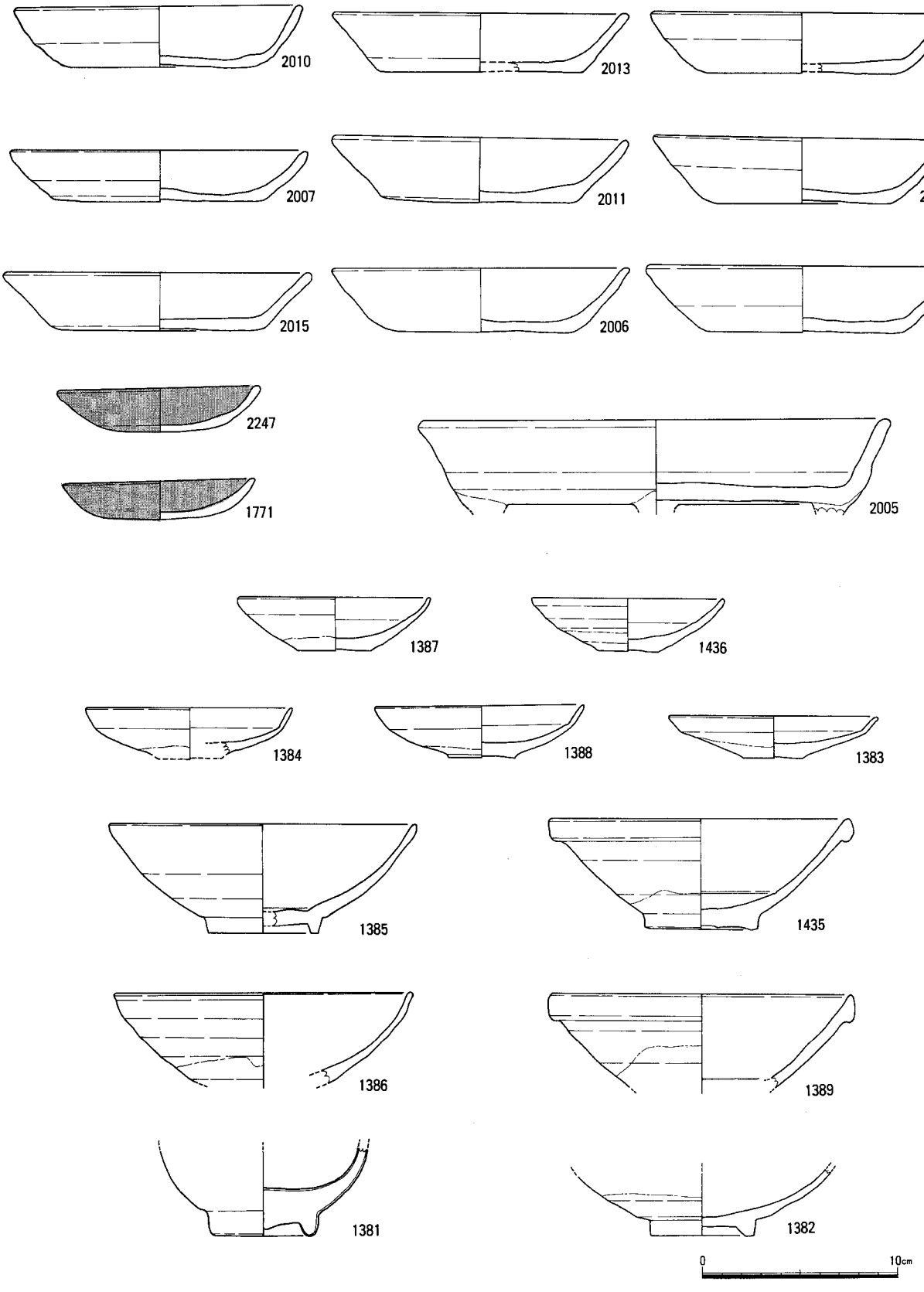


Fig.118　下層黒色土層Ｐ群出土遺物実測図18(1/3)

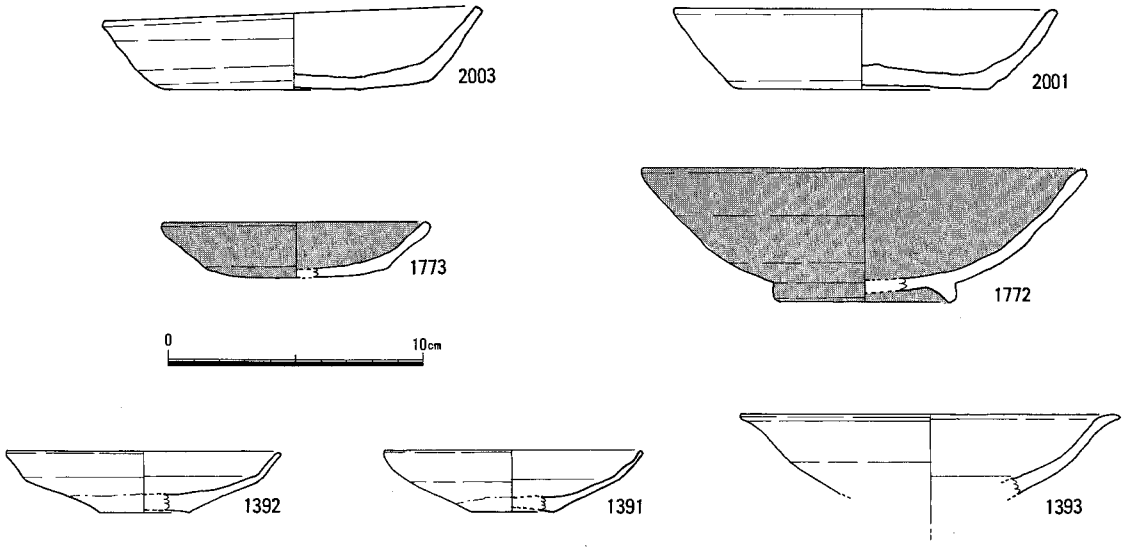


Fig.119　下層黒色土層S群出土遺物実測図19(1/3)

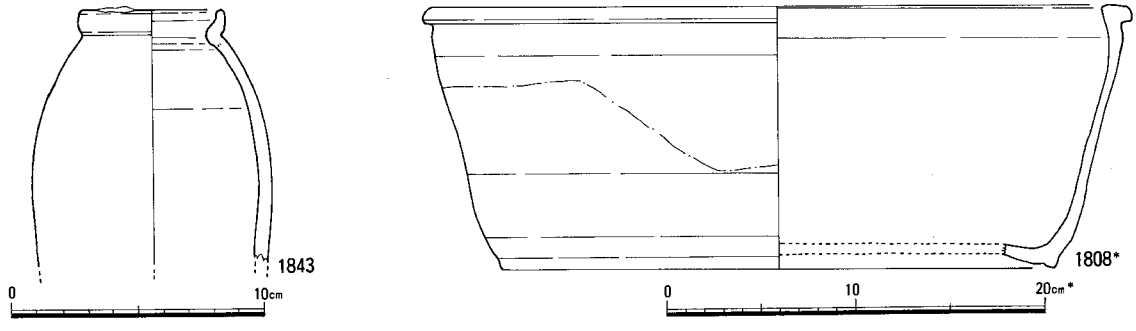


Fig.120　下層暗灰色粘質土層出土遺物実測図(1/3・1/4*)

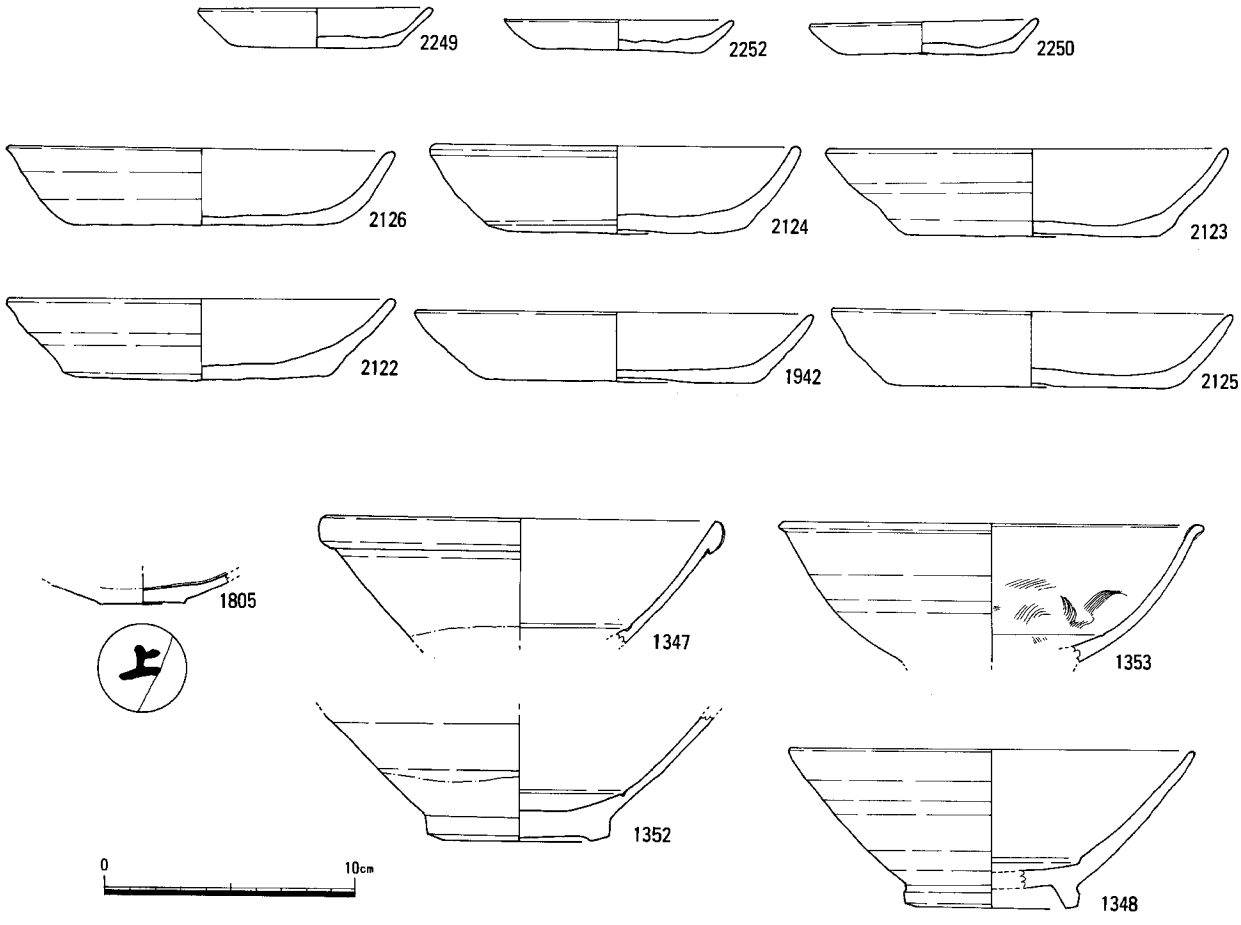


Fig.121　暗灰色泥炭土層出土遺物実測図(1/3)

暗灰色泥炭土層 (Fig.121, PL.150)

2249は底部糸切りの土師器皿。口径9.4cm、器高1.6cm。**2252・2250**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.1、9.2cm。器高1.2、1.3cm。**2126・2124・2123**は底部糸切りの土師器坏。口径14.8～16.2cm、器高3.0～3.5cm。平均口径15.5cm、平均器高3.3cm。**2122・1942・2125**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径15.4～16.1cm、器高2.8～3.2cm。平均口径15.8cm、平均器高3.0cm。**1805**は外底に「上」の墨書がある白磁平底皿。**1347・1352**は白磁碗IV－2類。**1353**は白磁碗VI－2類。**1348**は白磁碗IX類。

B. 木 製 品

調査では431点の木製品が溝、井戸などから出土している。点数的に多いのは細形棒状木製品、いわゆる箸と考えられるもので189点であった。これは全出土木製品の44%を占める。

SD51(Fig.122, PL.174)　生水調査区

下駄・杵・編錘・曲物が出土している。**30083**は全長22.8cm、幅10cmを測る下駄である。歯は釘留めによる附け歯で、二個所で留めている。本来の歯が使用により磨滅したために装着したのではなく、当初からの状態である。また、台の側面と上面には釘穴があり、補修が行われている。

SD100(Fig.123, PL.175)　寺熊調査区

箸・杓子・ヘラ状木製品・下駄・舟形・木簡が出土している。**30001**は歯と本体が一木である、いわゆる削り出し歯の下駄で、芯持ちである。小判型の平面形であるが、僅かに中心部を残すのみで大きさなどは不明。**30002・30126**は両端を細く削っている箸で、**30126**の全長は23.9cm、中央部の径は0.8cm。**30003**は棒状の片方の端部を薄くして穿孔する。全長は12.3cm、中央部の径は1.6cm。**30004**はヘラ状木製品で、片方を欠く。厚さ1.8cmの板の周縁を薄く刃のようにする。残存長32.9cm、幅6.5cm。機織の緯打具の可能性が高い。**30005**は杓子状木製品で柄の部分に長方形の孔がある。一部には赤漆の痕跡が残る。全長は23.3cm。**30066**は丸木を削った舟形である。舟底中央には径3mmほどの孔があり、船尾には僅かに切れ込みがある。これらは帆柱および舵を取り付けるためのものであろう。全長15.6cm、幅2.6cm、高さ1.5cmを測る。

SD103(Fig.124～131, PL.176～180)　寺熊調査区

糸枠・桛・紡錘・編錘・折敷・曲物・箸・木槌・櫛・下駄・鞘・刀形・小型卒塔婆・木簡が出土している。**30010**は組合せ式の糸巻である。いわゆる糸枠の腕木と支え木で、糸枠の径は13cm、高さは23.2cmである。支え木の中央には回転軸を通す径1.4cmの軸孔が貫通する。さらに、端部には腕木にさしこむための出枘があり、出枘の中央と腕木の側面には腕木がはずれないように栓で留める小孔がある。**30011**も組合せ式の糸巻である。大型の糸枠の支え木で、復原される糸枠の径は24cmほどである。支え木の中央には回転軸を通す径2.5cmの軸孔が貫通する。**30021・30081**は桛の支え木である。端部には腕木にさしこむための出枘がある。**30021**の出枘の中央には腕木がはずれないように栓で留める小孔が貫通する。支え木の復原長は**30021**が29cmである。**30092**は全長25.8cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmを測る板状加工品で、両端部には出枘がある。桛の支え木の可能性が高い。**30009**と**30077**は中心部に円形の孔を持つ円盤形木製品である。**30009**は径9.4cm、孔径0.9cm、**30077**は径5.6cm、孔径0.4cmを測る。いずれも紡錘である。**30029**は刀子の鞘で、全長15.6cm、鯉口幅2.7cm・厚さ1.7cmである。**30012**は櫛で残存長4cm。**30007**は五輪塔形板状木製品である。下部を欠き、残存長9.7cm、幅1.2cmを測る。**30013**は刀形で、柄と刃部の一部を残す。刃幅は2.6cm。**30082**は小型の刀形で、柄を欠く。刃幅は0.9cm。**30079**は全長15cm、幅5.5cm、厚さ0.5cmを測る長方形の板で、裏表両面に径3～5mmの焼印が整然と並ぶ。焼印は棒状の物を当てている。**30075**は板の先端を尖らせ、中央に小孔がある。**30019**は径3.5cm、高さ2.7cmを測る円柱状木製品で、片方の縁は面取りしている。毬杖と考えられるが、磨滅は認められない。**30074**は木槌の柄で残存長11.4cm、径2.4cmである。**30076**は木槌の頭部で俵形である。中央に長方形の柄孔が貫通する。頭部径は4.8cm、全長7.8cmである。**30019**は杓子で、柄の部分を欠く。残存長は30.8cm、幅は11.8cmを測る。**30072・30073・30141**は三方の底板で方14.5～15.5cmを測る。各縁の中央部には台と側板を留める桜革が残る。**30089**は曲物桶の底板である。径30cmを測り、三枚の板を組み合わせている。側面には側板を留めた木釘跡が残る。**30008・30020・30022・30078**はいずれも歯を削り出

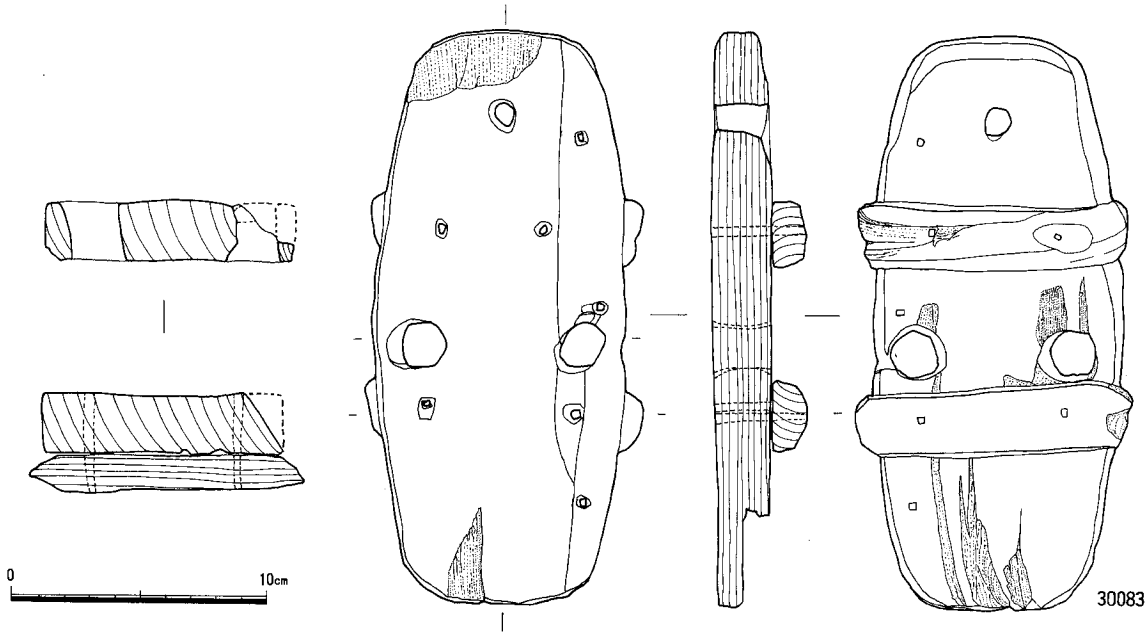


Fig.122　溝SD51出土木製品実測図(1/3)

す、いわゆる一木造りの下駄で、30078は未完成品である。30008は隅丸長方形の平面形で、全長20.8cm、幅11.6cmを測る。後の歯の磨滅が著しい。30020は小判型の平面形で、全長22.0cm、幅10.8cmを測る。歯は台形状の裾広がりで、やや前傾する。30022は小判型の平面形で、全長22.4cm、幅11.5cmを測る。歯は前後とも均等に磨滅している。30078は製作段階で歯の造り出しに失敗したものである。長方形の平面形を呈し、全長20.0cm、幅12.7cmを測る。30109～30114・30128～30140は箸である。30134～30136と30140は断面形が方形もしくは長方形で、片方の端部を尖らしてる。その他の箸は断面形が円形で、両端部を尖らしてる。長さは21cm・24cm・28cmの群に分かれる。30015は編錘で、頭部径は4.2cmを測るが半部を欠く。

SD216(Fig.132, PL.174)　寺熊調査区

椀が出土している。30068は漆塗りの椀で、口径8.1cm、器高3.1cmを測る。内面には赤漆、外面には黒漆を施し、体部外面には橘の紋が描かれている。

SD250(Fig.133, PL.174)　寺熊調査区

下駄が出土している。30085はさしこみ歯式の下駄で、小判型の平面形である。台に方形の枘孔を貫通させ、二個所の出枘がある歯をさしこんでいる。

SD316(Fig.134, PL.174)　寺熊調査区

板状木製品が出土している。30040は頭部に切り込みがある。

SD318　寺熊調査区

曲物底板（長方形）が出土している。

SD710(Fig.135, PL.174)　寺熊調査区

箸・折敷・糸巻・木簡が出土している。箸は両端を尖らす。30041は組合せ式の糸巻である。いわゆる大型糸枠の支え木で、復原される糸枠の径は24cmほどである。端部は腕木にさしこむために尖らし、はずれないように片方には栓で留める小孔を貫通させる。中央には回転軸を通す径2.5cmの軸孔が貫通する。30062は折敷の底板で、方27.4cmを測る。

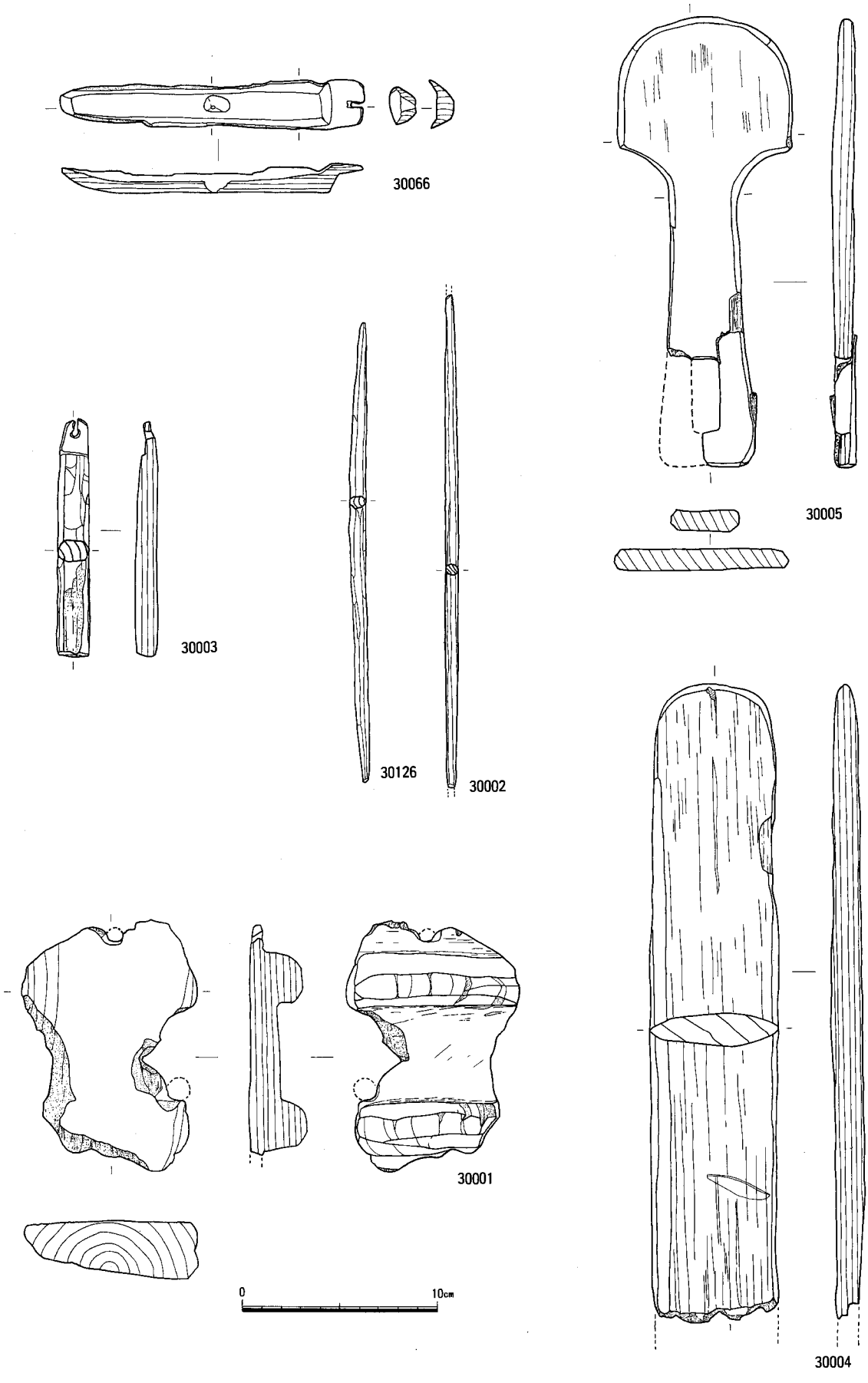


Fig.123　溝SD100出土木製品実測図(1/3)

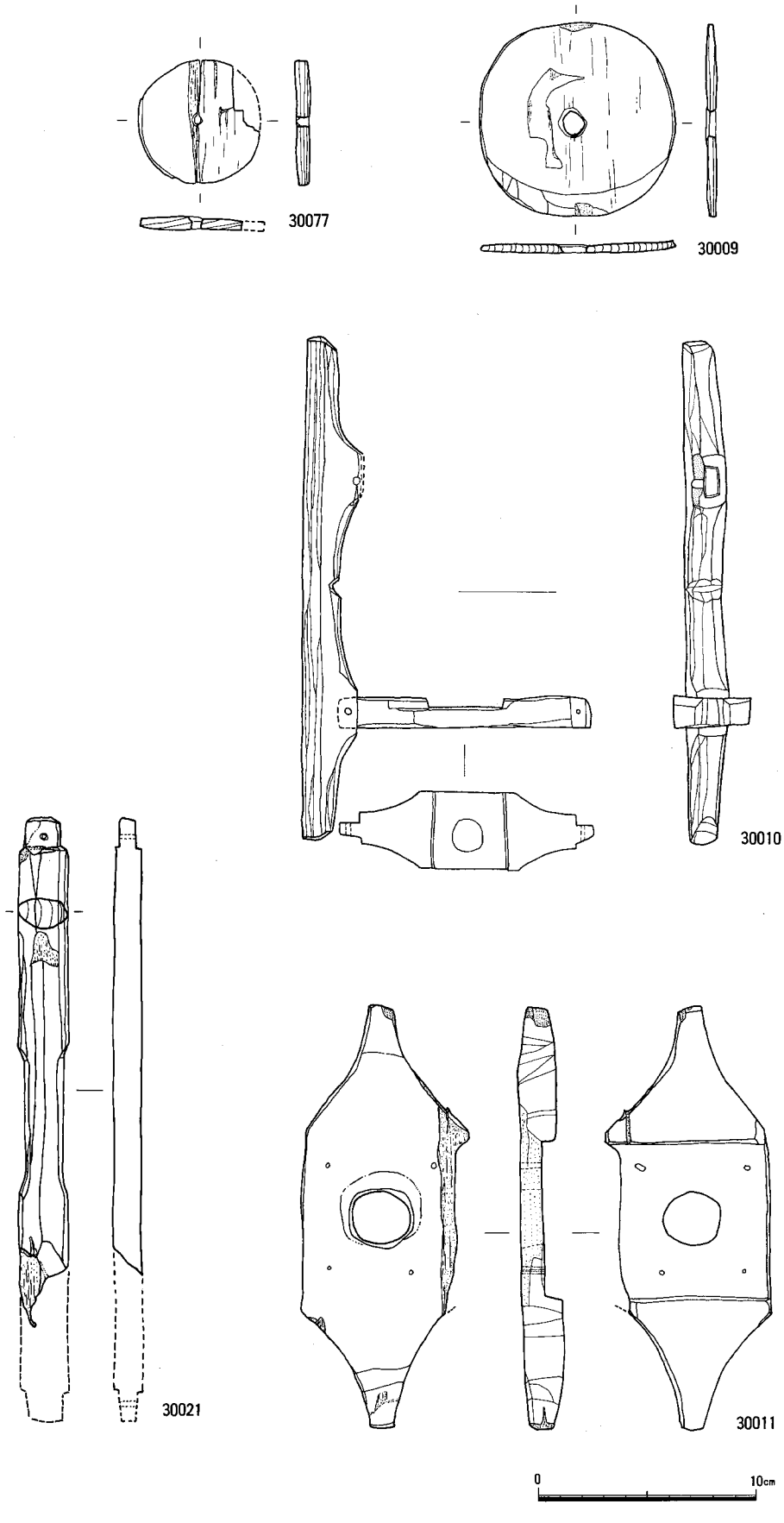


Fig.124　溝SD103出土木製品実測図1(1/3)

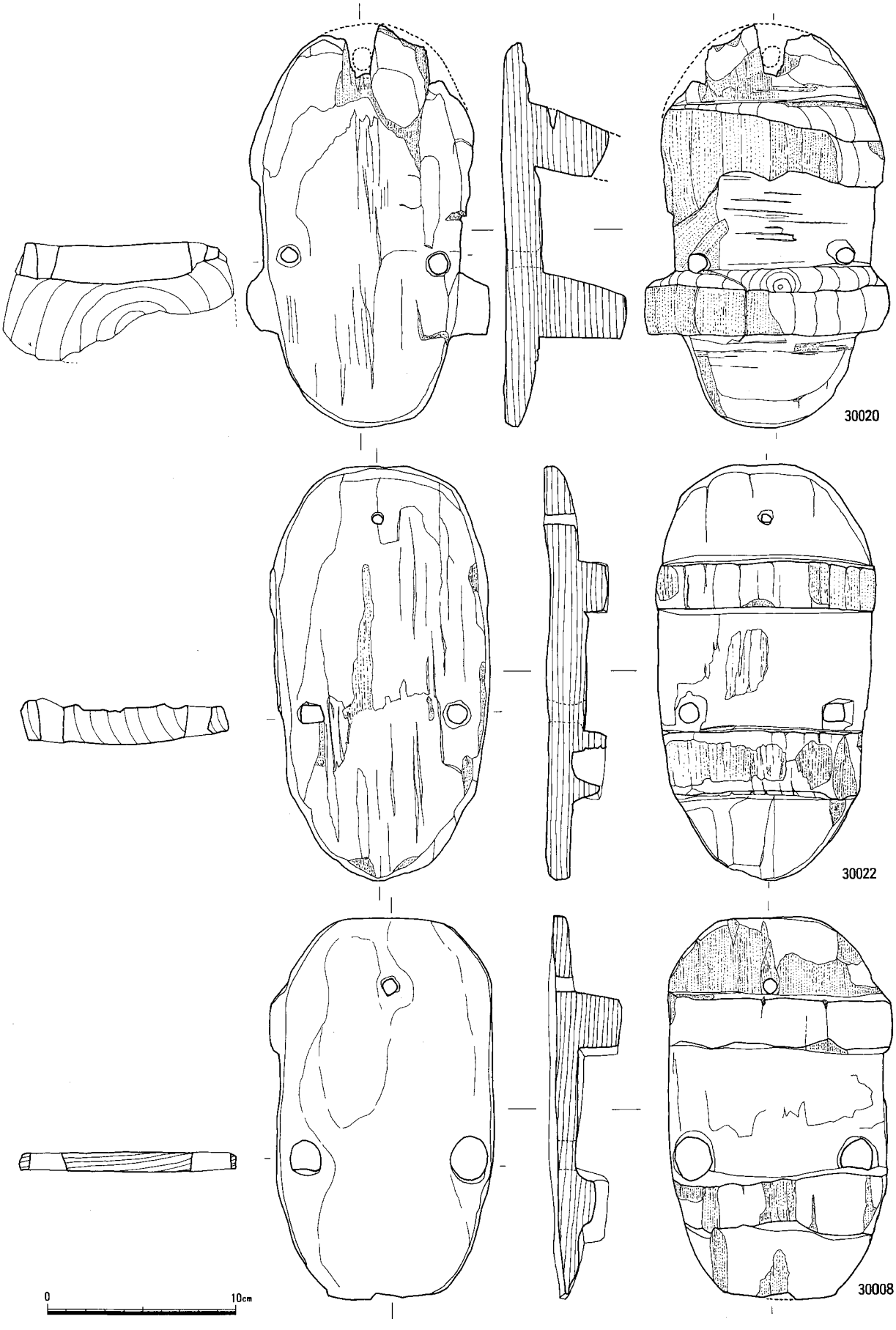


Fig.125　溝SD103出土木製品実測図２(1/3)

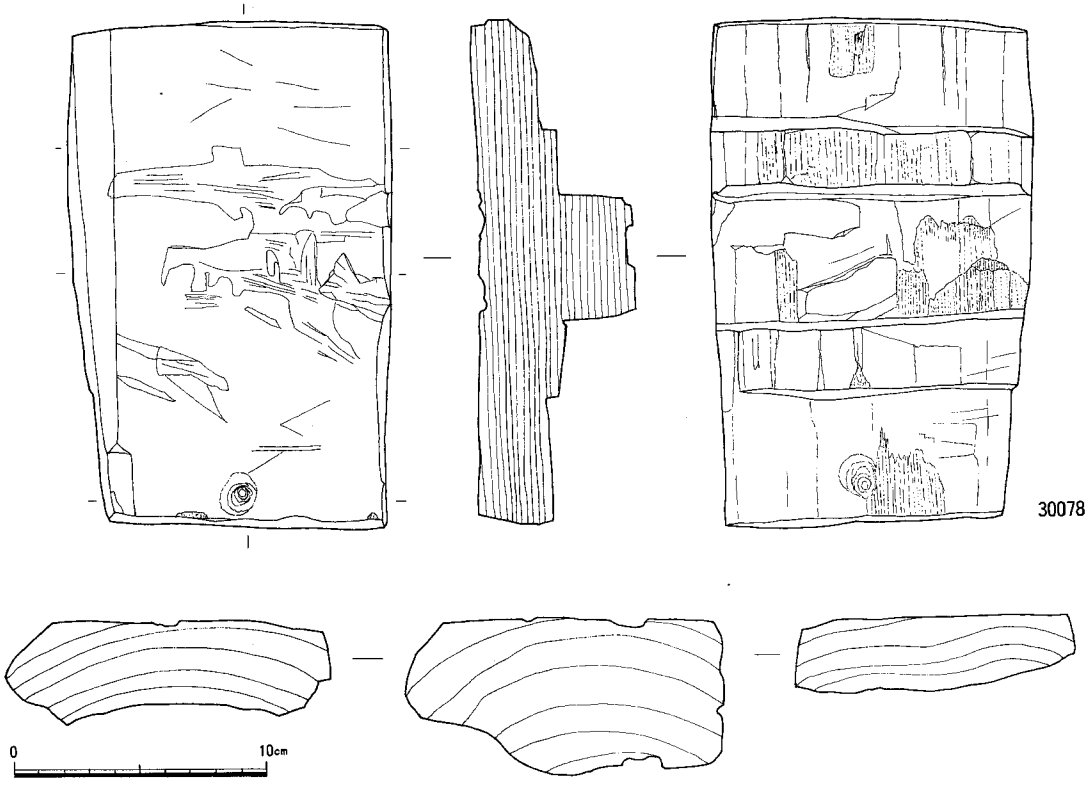


Fig.126　溝SD103出土木製品実測図３(1/3)

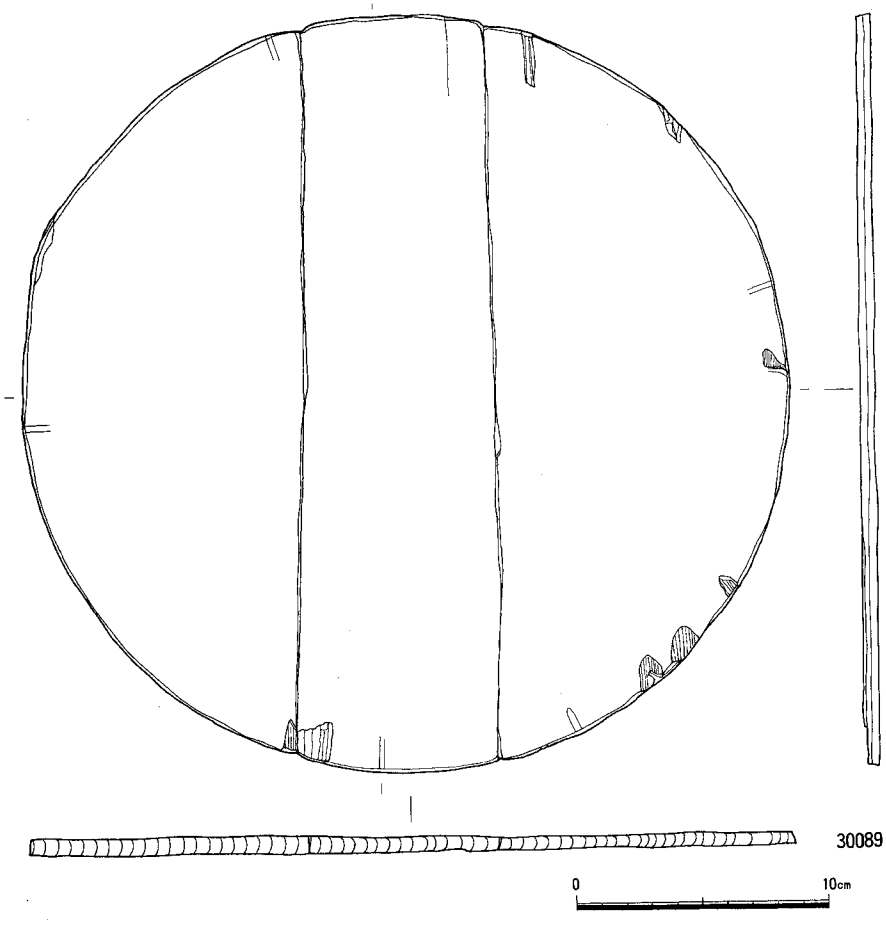


Fig.127　溝SD103出土木製品実測図４(1/3)

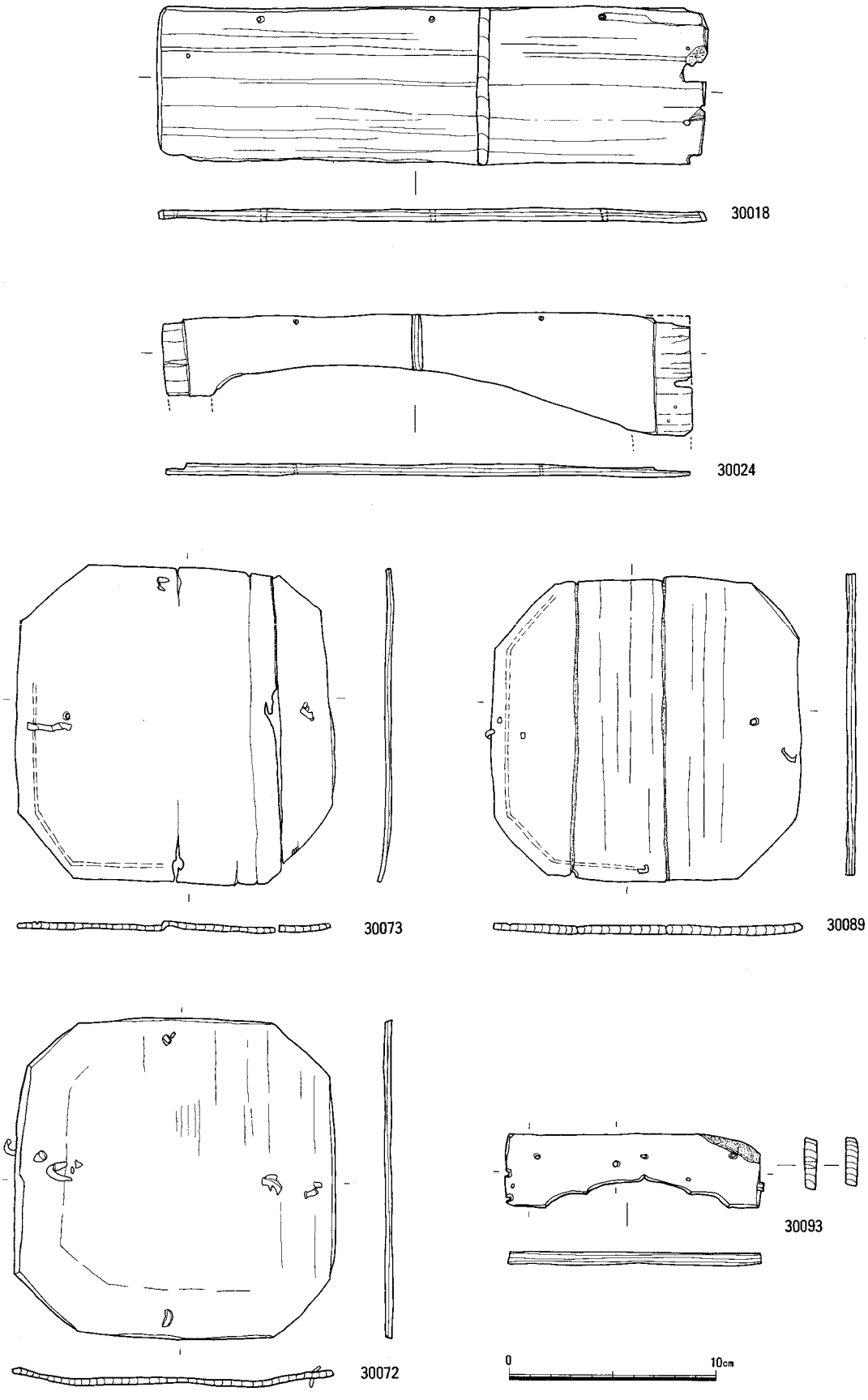


Fig.128　溝SD103出土木製品実測図５(1/3)

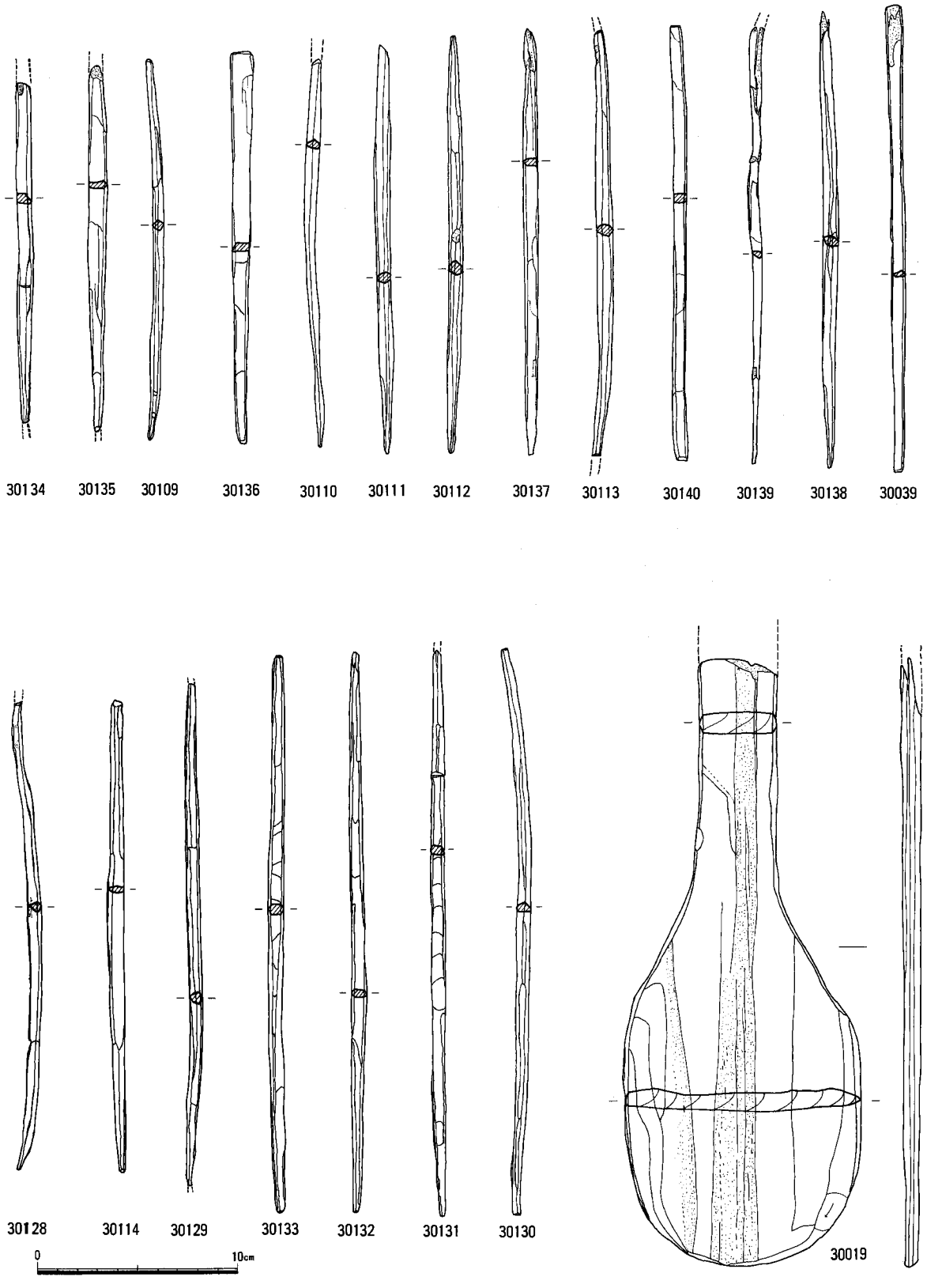


Fig.129　溝SD103出土木製品実測図6(1/3)

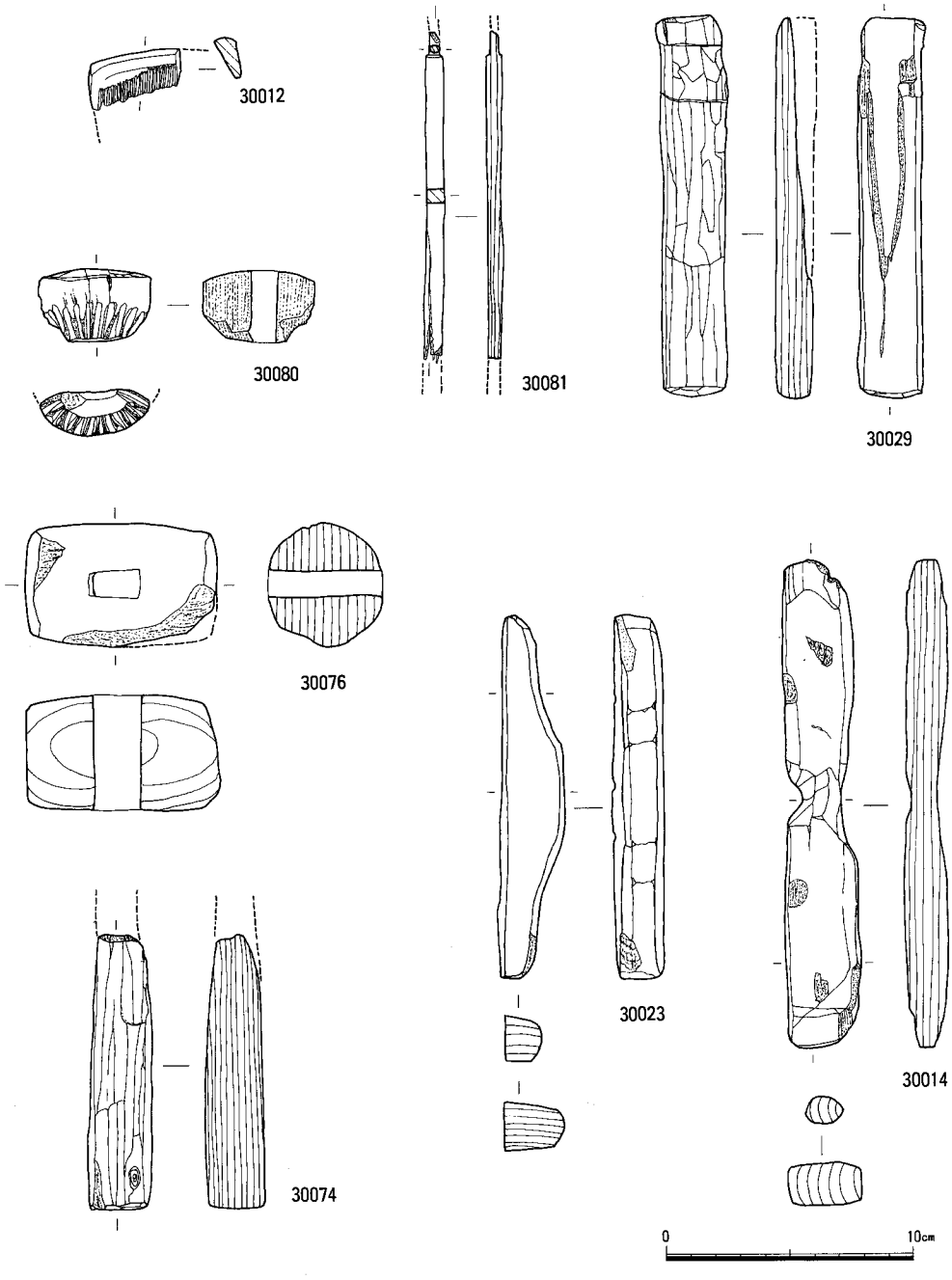


Fig.130　溝SD103出土木製品実測図7(1/3)

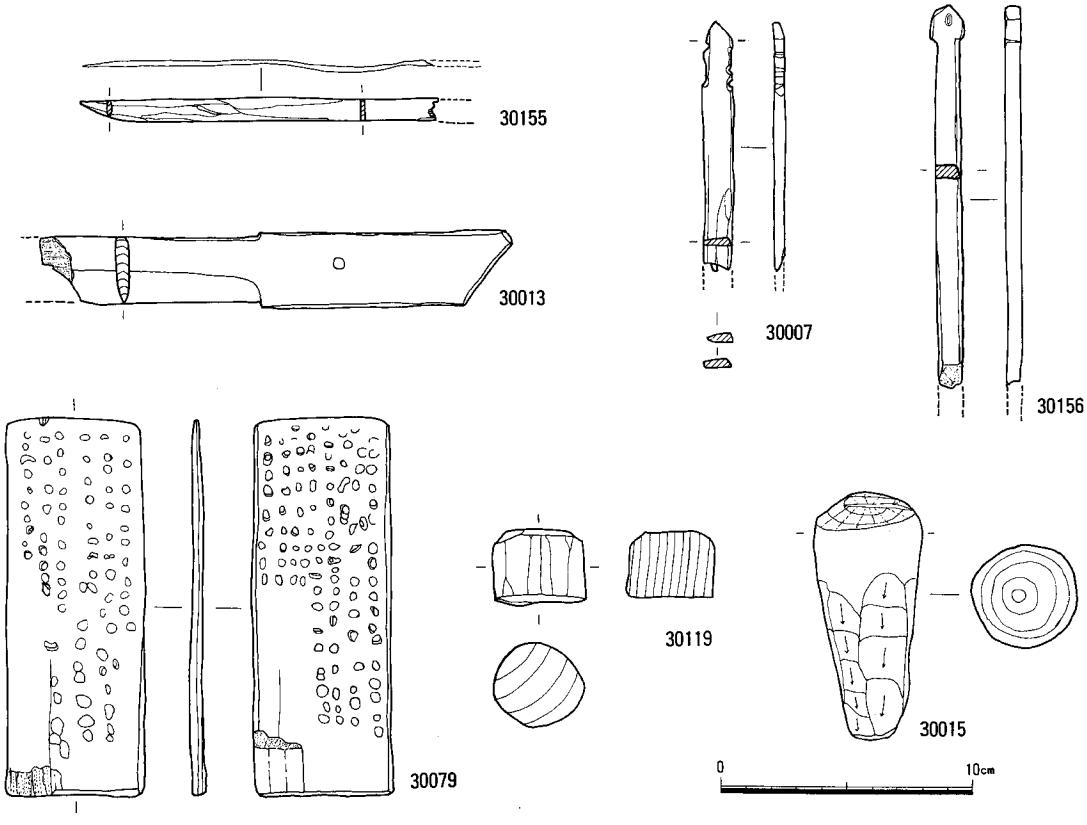


Fig.131　溝SD103出土木製品実測図8(1/3)

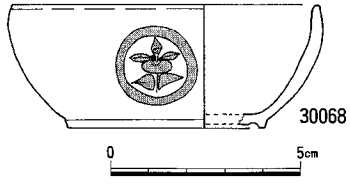


Fig.132　溝SD216出土木製品実測図(1/1)

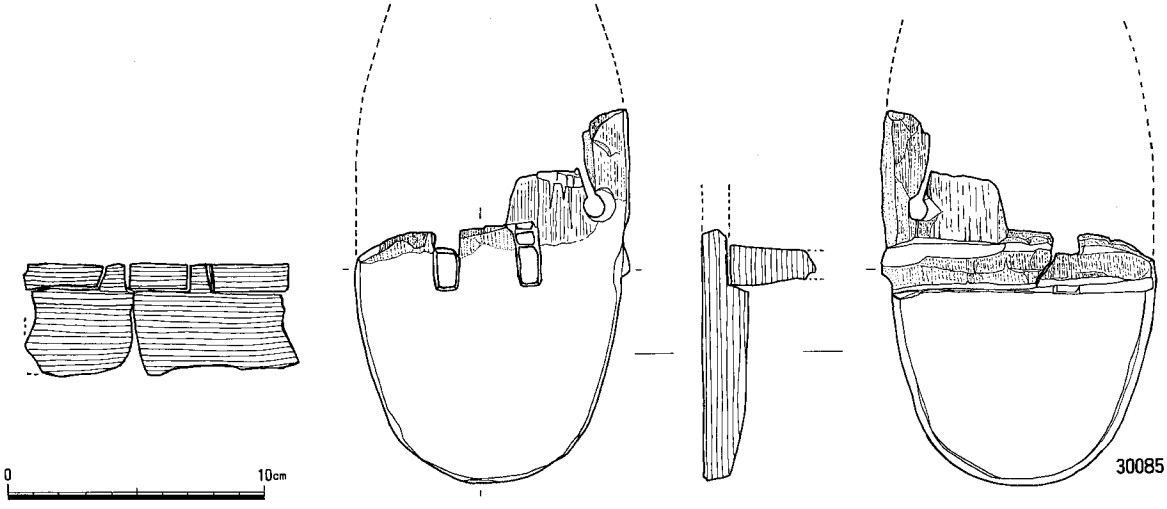


Fig.133　溝SD250出土木製品実測図(1/3)

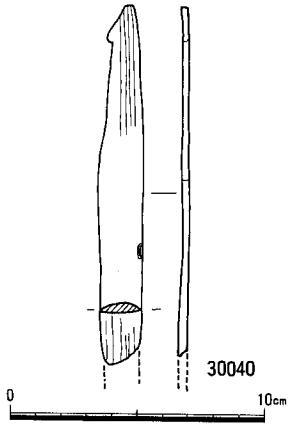


Fig.134　溝SD316出土木製品
実測図(1/3)

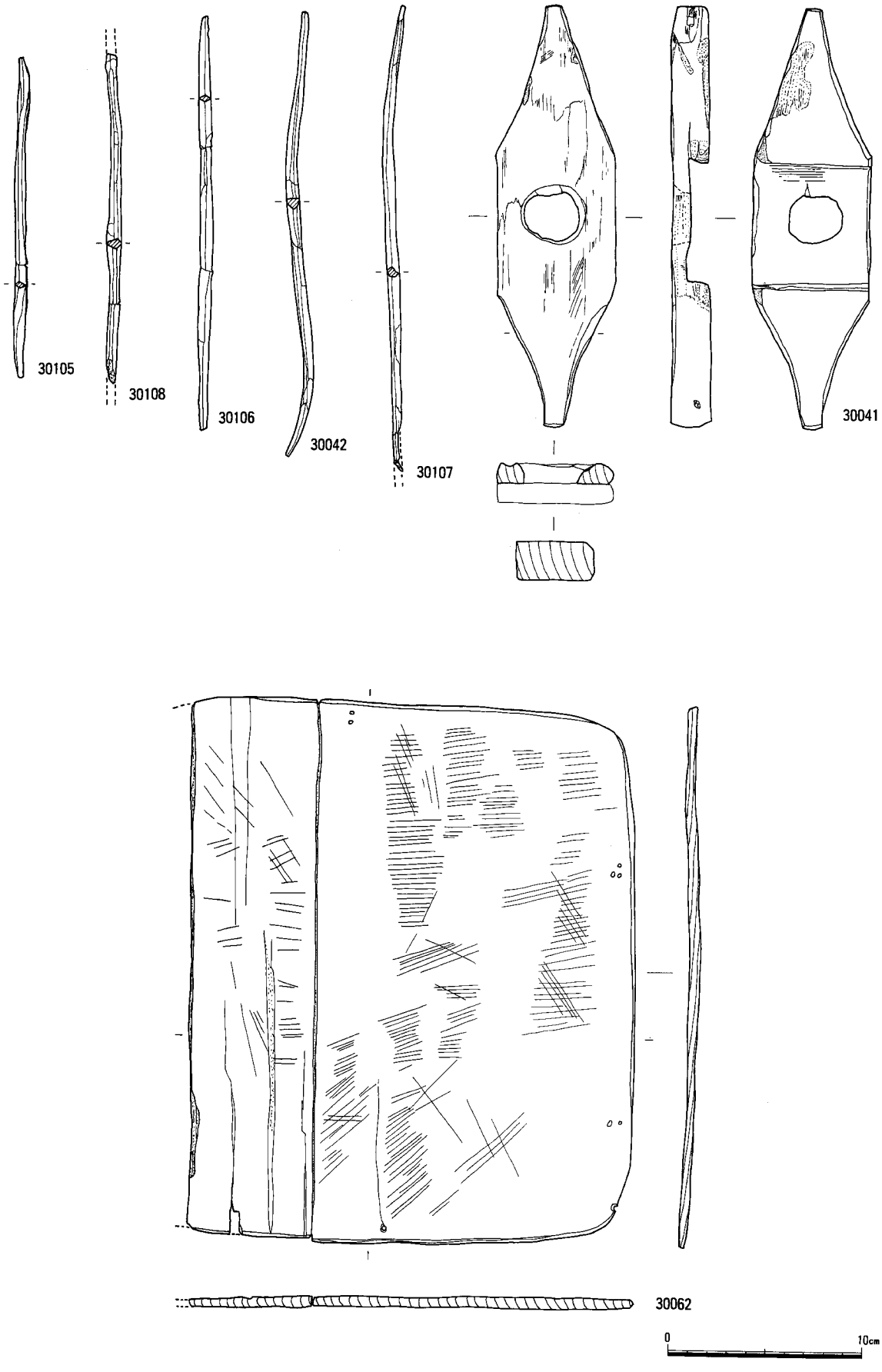


Fig.135　溝SD710出土木製品実測図(1/3)

SE98(Fig.136, PL.181)　生水調査区

鞍が出土している。**30069**は鞍橋で、一般的にいう鞍の前輪である。馬挟に沿って貫通する方孔と方形の切り込みを左右に一個所づつもうけている。これは、居木をさしこむためのものである。

SE120(Fig.137, PL.181)　寺熊調査区

舟形・下駄・編錘が出土している。**30027・30028**は最大径4.2～4.8cmを測る編錘で、半部を欠く。**30025**は歯が削り出し、いわゆる一木造りの下駄である。小判型の平面形で、全長22.5cm、幅12.0cmを測る。前後の歯はともに均等に磨滅している。**30026**は舟形で、削りは粗く、舟先と舟尾を尖らしている。舟底に孔は認められない。全長12.5cm、幅2.8cmを測る。

SE123(Fig.138, PL.182)　寺熊調査区

糸巻が出土している。**30030**は曲物の底板を糸巻に転用したものである。一般的には、かせかけと呼ばれる糸巻に転用したものである。径17.2cm、厚さ0.7cmを測る円形の板は、二枚の板を枘孔と木釘で留めている。板の中央に一個所、周縁近くには菱形に四個所の径2mmの小孔が貫通している。中央の孔は軸孔、他は腕木をさしこむためのものである。孔径から腕木が極めて細い棒であることを知る。腕木が形成する菱形の辺長は7.8cm。**30031**は組合せ式の糸巻、いわゆるかせかけの支え木である。長さ17.3cm、幅1.7cm、厚さ1.1cmの板材を十字形に組み合わせた支え木の中央には径3mmの軸孔が貫通する。軸孔から端部へ5.7～6.3cm離れたところには、腕木をさしこむための径3mmの枘孔がそれぞれに一個所づつある。四個所の腕木が形成する四角形の辺長は8.1～8.5cmを測る。

SE157(Fig.139, PL.182)　寺熊調査区

木製品が出土している。**30033**は一方の端を尖らし、他方には出枘がある。

SE481(Fig.140, PL.183)　寺熊調査区

毬杖・箸・棒状木製品（織機）が出土している。**30071**は径4.2cm、高さ3.9cmを測る円柱状木製品で、周縁は両方とも面取りしている。毬杖と考えられる。**30117・30118**は両端を尖らしている箸である。**30118**の全長は24.6cmである。**30070**は全長40.5cm・径3cmを測る棒状木製品で両端部は丸く仕上げている。全体的に弓なりに弱くしなっている。端部からそれぞれ5.5cmほど中央に寄った所は削りによりくびれている。紐かけであろう。形状から経（布）巻具と考えられる。

SE718(Fig.141, PL.183)　寺熊調査区

曲物・下駄・箸が出土している。**30043**は曲物の底板で、三枚の板を接合している。接合方法は合わせ面に各二個所の枘孔をあけ、径0.4cm、長さ8cmの木釘を互にさしこんでいる。

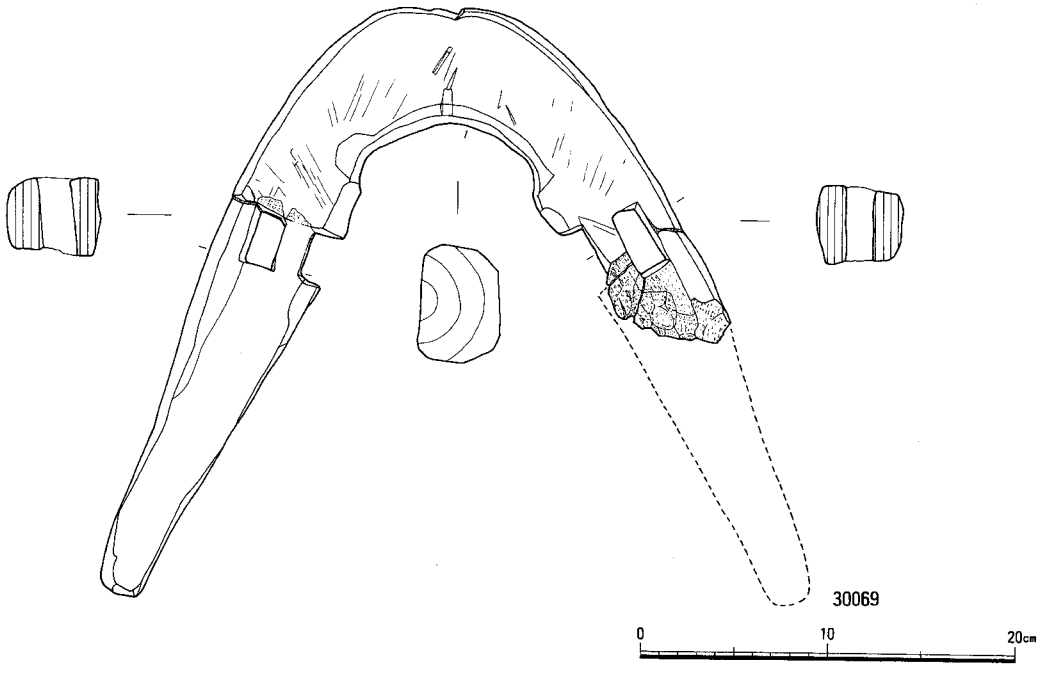
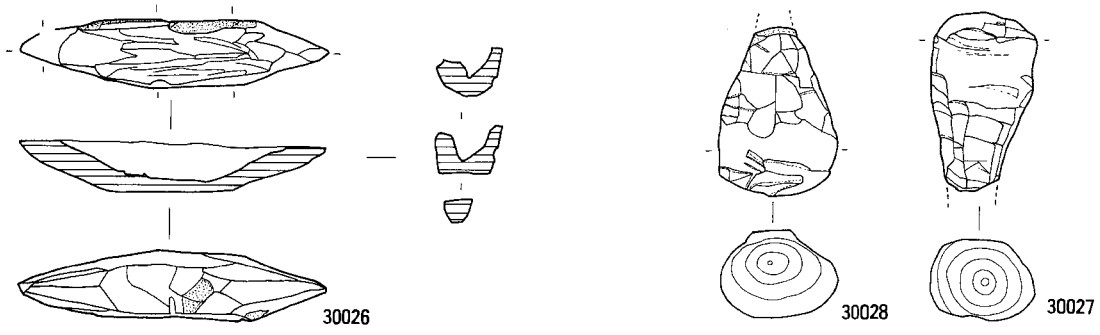


Fig.136　井戸SE98出土木製品実測図(1/4)



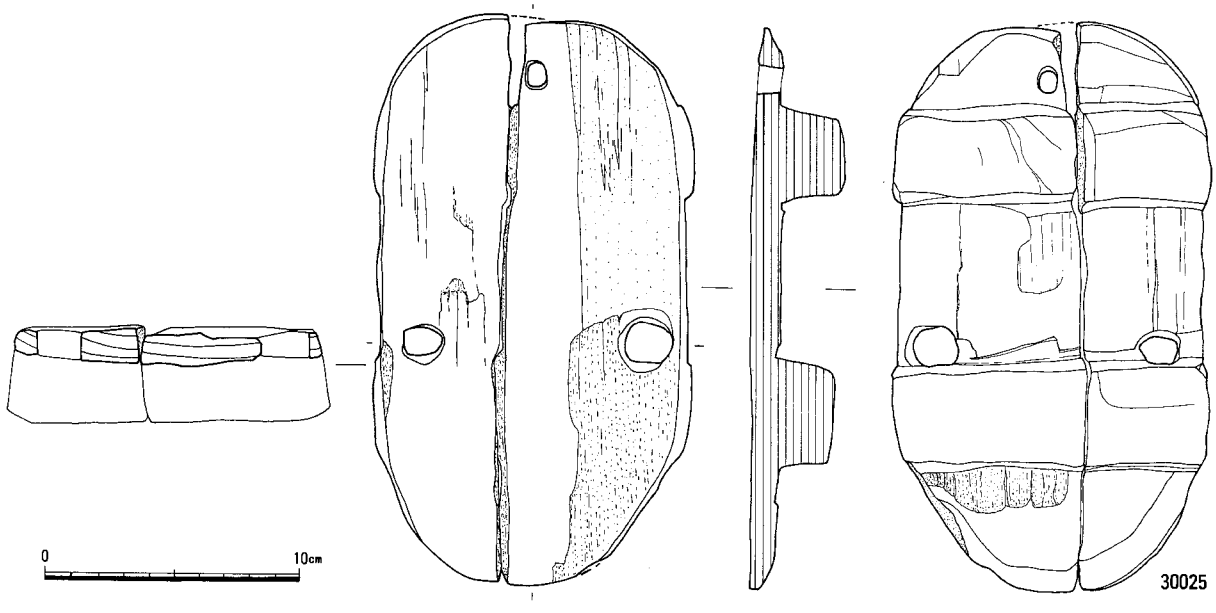


Fig.137　井戸SE120出土木製品実測図(1/3)

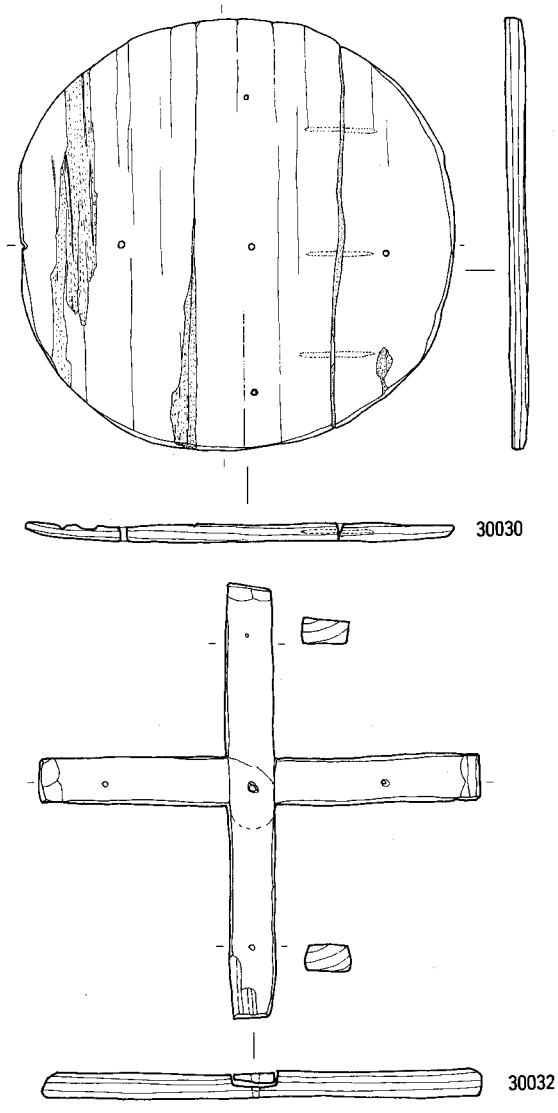


Fig.138　井戸SE123出土木製品実測図(1/3)

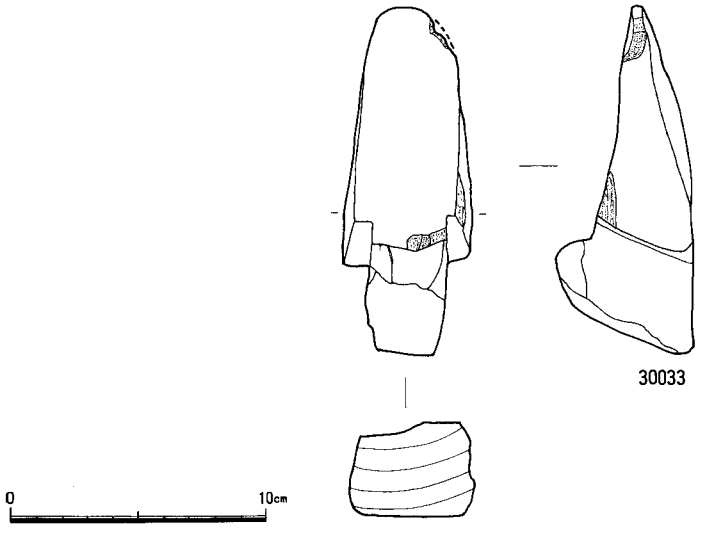


Fig.139　井戸SE157出土木製品実測図(1/3)

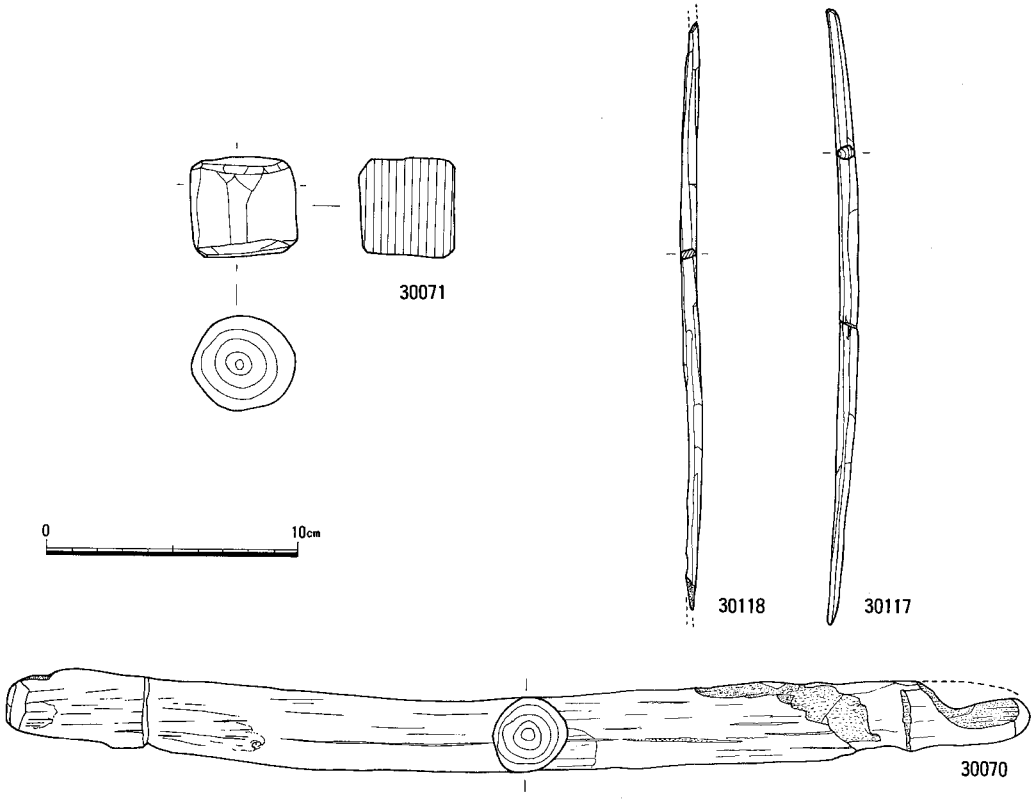


Fig.140　井戸SE481出土木製品実測図(1/3)

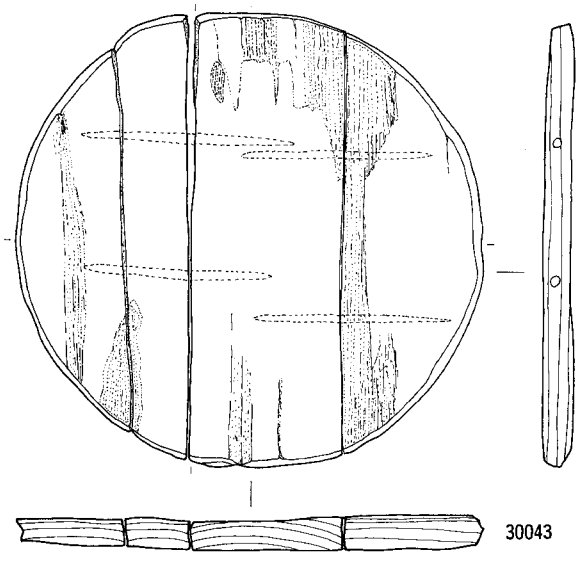


Fig.141　井戸SE718出土木製品実測図(1/3)

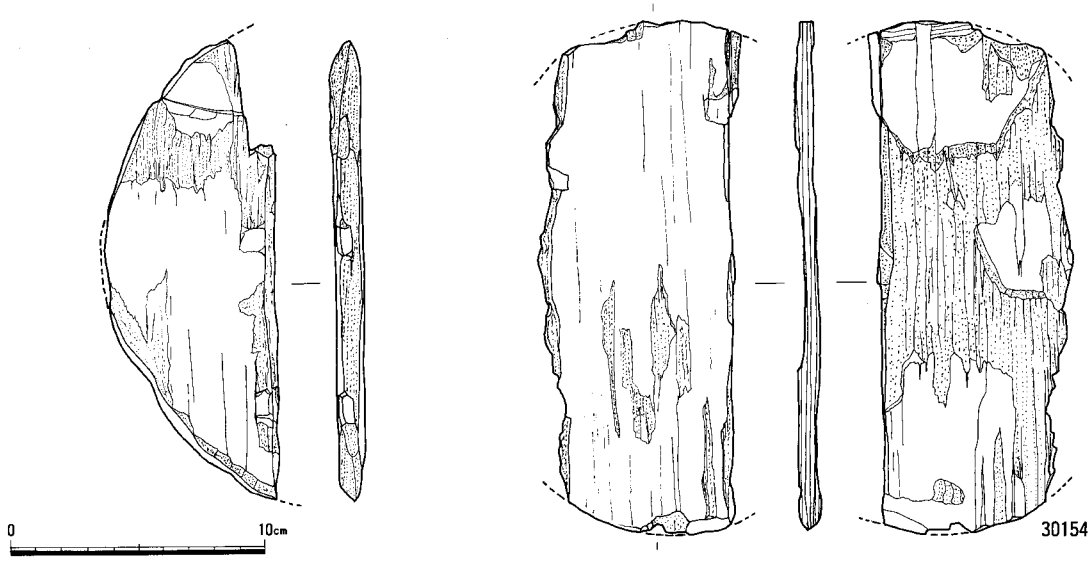


Fig.142　土壙SK738出土木製品実測図(1/3)

SG122(Fig.143, PL.184)　寺熊調査区

球状木製品が出土している。**30034**は削って不整形な球状にしている。径4.8～5.6cmを測る。球面は磨滅が極めて激しく、削り痕跡は残っていない。毬杖と考えられる。

SK738(Fig.142)　寺熊調査区

桶が出土している。**30154**は桶の底板で、径54.5cm、厚さ2.3cmを測る。

SK434　寺熊調査区

箸が出土している。

SX127(Fig.143)　寺熊調査区

椀が出土している。**30035**は漆塗りの椀である。

SX129(Fig.143, PL.184)　寺熊調査区

鞘・箸・椀・板状木製品が出土している。**30036**は刀子の鞘で、表面には粗い削り痕が残る。全長12.3cm、幅3.0cmを測る。鯉口はやや丸みを持つ。**30104**の箸は全長23.4cmである。

SX137(Fig.143, PL.184)　寺熊調査区

棒状木製品が出土している。両端を欠く。断面形が多角形をなすが、一部で径が大きくなる。

SX716(Fig.143, PL.185)　寺熊調査区

箸・下駄・糸巻・曲物側板が出土している。**30045・30063**は組合せ式の糸巻である。いわゆる糸枠と呼ばれる糸巻の腕木と支え木で、糸枠の径は15cm、高さは20.3cmである。支え木の中央には回転軸を通す径1.7cmの軸孔がある。さらに、端部には腕木にさしこむための出枘があり、腕木の側面には腕木がはずれないように栓で留める小孔がある。**30137**は全長41.3cm、幅2.7cm、厚さ1cmを測る棒状木製品で、両端部近くは削りこんでくびれている。紐かけであろう。形状から経（布）巻具と考えられる。**30044**は歯を削り出した、いわゆる一木造りの下駄である。復原長19.5cm、幅10.5cmを測る。歯は後の歯が著しく擦り減っている。

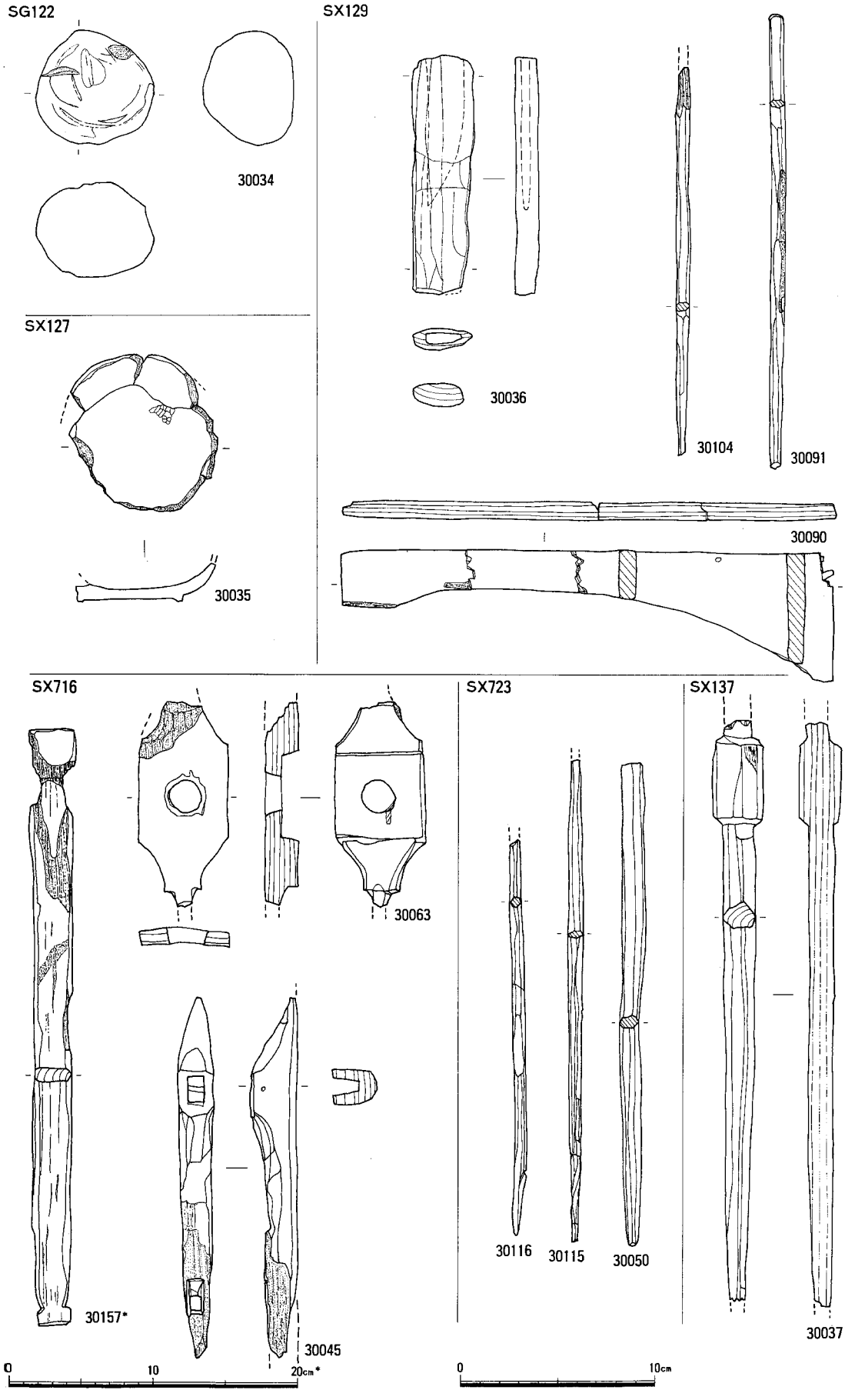


Fig.143　苑池SG122,溜SX127・129・137・716・723出土木製品実測図(1/3,1/4*)

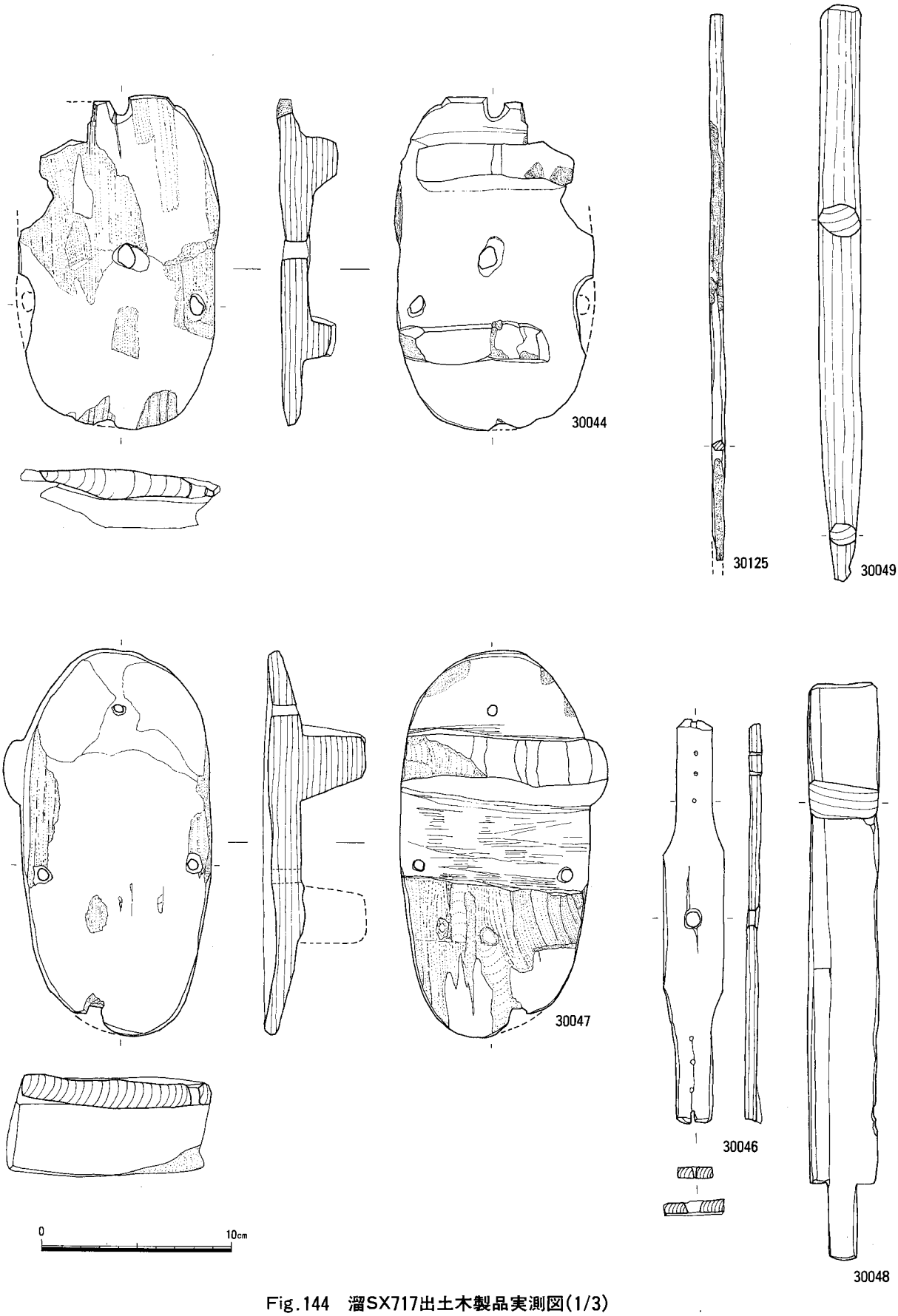


Fig.144　溜SX717出土木製品実測図(1/3)

SX717(Fig.144, PL.185)　寺熊調査区

箸・木簡・下駄・棒状木製品・板状木製品・糸巻・斎串・曲物が出土している。**30046**は組合せ式の糸巻で、いわゆるかせかけの支え木である。長さ21.8cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmの板材を十字形に組み合わせる支え木の中央には径7㎜の軸孔が貫通する。両端部近くには腕木をさしこむ4個所の小孔が貫通する。各孔間の距離は内側から12.7cm、15.3cm、18cm、21cmで、腕木が形成する四角形の復原辺長は18cm、21cm、24cm、30cmである。これらの長さは寸単位であることから、腕木の位置は意識的と考えるのが妥当であろう。**30047**は歯を削り出した、いわゆる一木造りの下駄である。全長20.9cm、幅10.1cmを測る。**30049**は片方の端部を尖らした棒状木製品で、全長31.2cm、径2.2cmを測る。**30048**は板状木製品で片方の端部に出柄がある。

SX723(Fig.143, PL.185)　寺熊調査区

箸・曲物底板・折敷底板・棒状木製品が出土している。

上層黒色土層(Fig.148, PL.187)　寺熊調査区

鍬が出土している。**30051**は鍬の柄を差し込む頭部分である。

下層黒色土層(PL.187)　寺熊調査区

箸・折敷底板が出土している。**30120**は両端を尖した箸である。

暗灰色粘質土層(Fig.145, PL.186)　寺熊調査区

箸・舟形・球状木製品・曲物底板が出土している。**30121**～**30123**・**30141**は両端を中央部より細く尖らす箸である。**30053**は削って不整形な木球である。径6.5～7.3cmを測る。球面は磨滅しているが一部に痕跡が残る。毬杖と考えられる。**30055**は平面形が長方形の舟形である。全長15.6cm、幅3.8cm、厚さ1.8cmを測る板の片面を削り、刳舟としている。片方の端部は削って船尾を示している。全体的には箱船の形状である。船尾や、舟底において、さらなる加工は認められない。

青灰色粘質土層(Fig.148, PL.186)　寺熊調査区

杓子が出土している。**30060**は杓子で半部を欠く。全長21.2cm、復原幅8.2cmである。

黒色泥炭層(Fig.146･147, PL.187)　寺熊調査区

下駄・板状木製品が出土している。**30056**は残存長14.9cm、幅5.3cm、厚さ0.6cmの板状木製品である。板の両面中央には径0.7cmの円形の押圧痕が一列に並ぶ。**30057**～**30059**はいずれも歯を削り出した、いわゆる一木造りの下駄である。**30057**は小判型の平面形で、全長21.1cm、幅12.2cmを測る。歯はあまり磨滅していない。**30058**は小判型の平面形で、全長21.7cm、幅11.9cmを測る。歯は著しく磨滅している。**30059**は小判型の平面形で、全長23.2cm、幅12.3cmを測る。歯は著しく磨滅している。

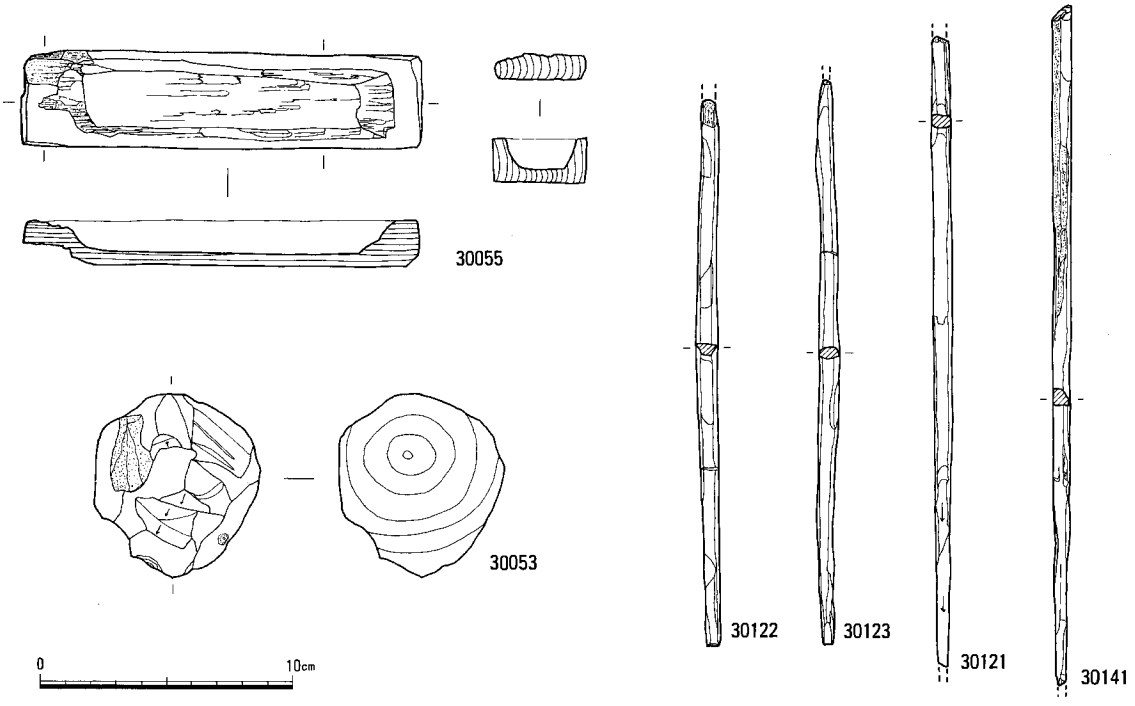


Fig.145　暗灰色粘質土出土木製品実測図(1/3)

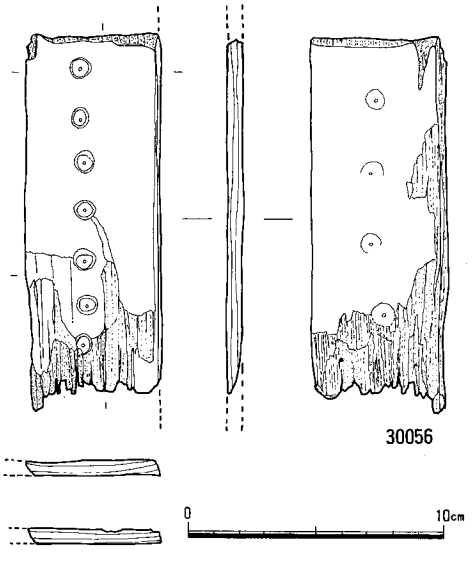


Fig.146　黒色泥炭層出土木製品実測図1(1/3)

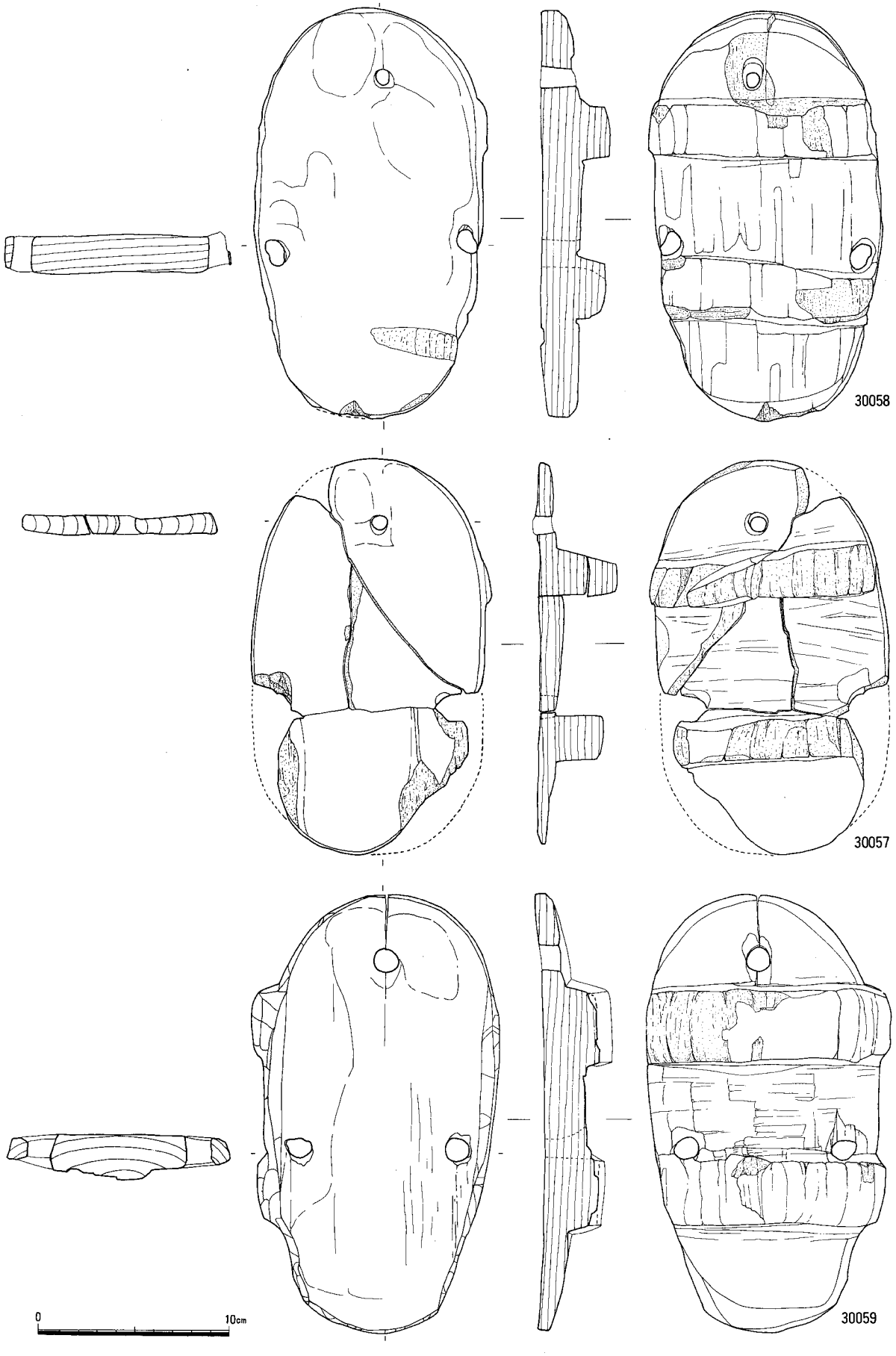


Fig.147　黒色泥炭層出土木製品実測図２(1/3)

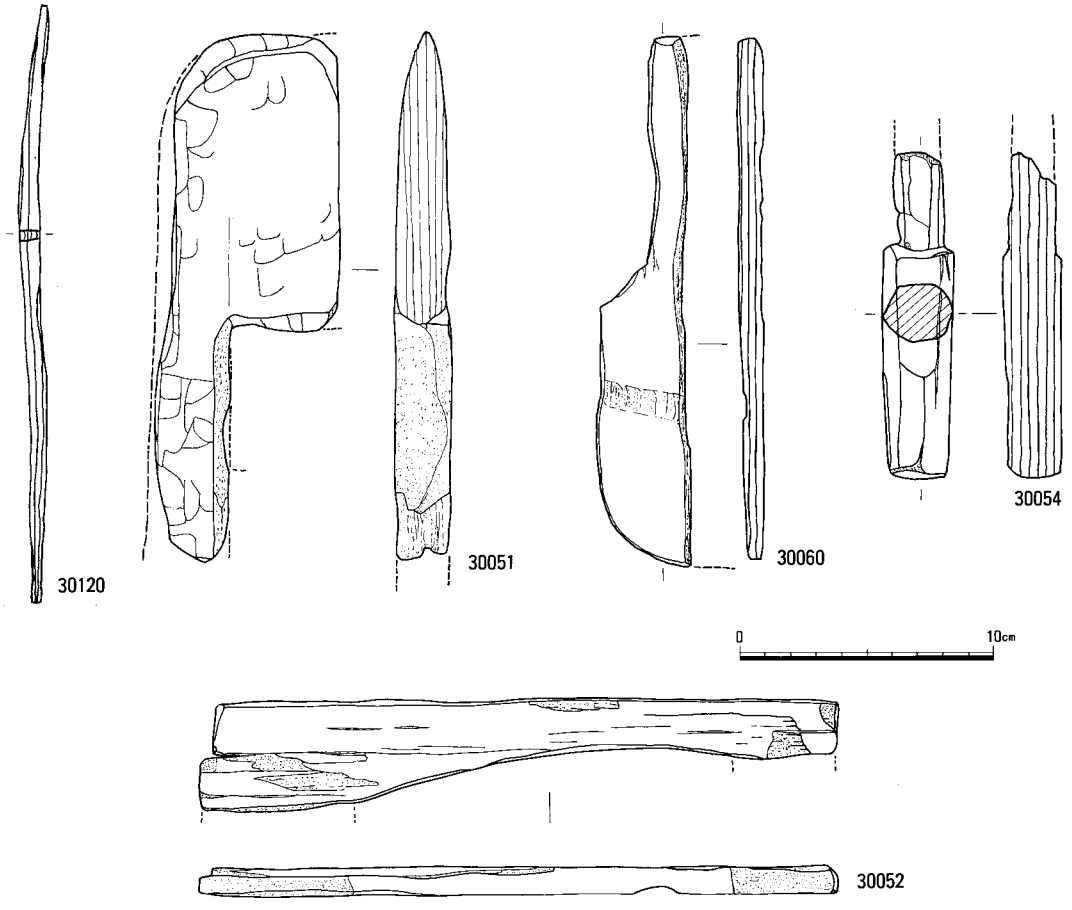


Fig.148　包含層出土木製品実測図(1/3)

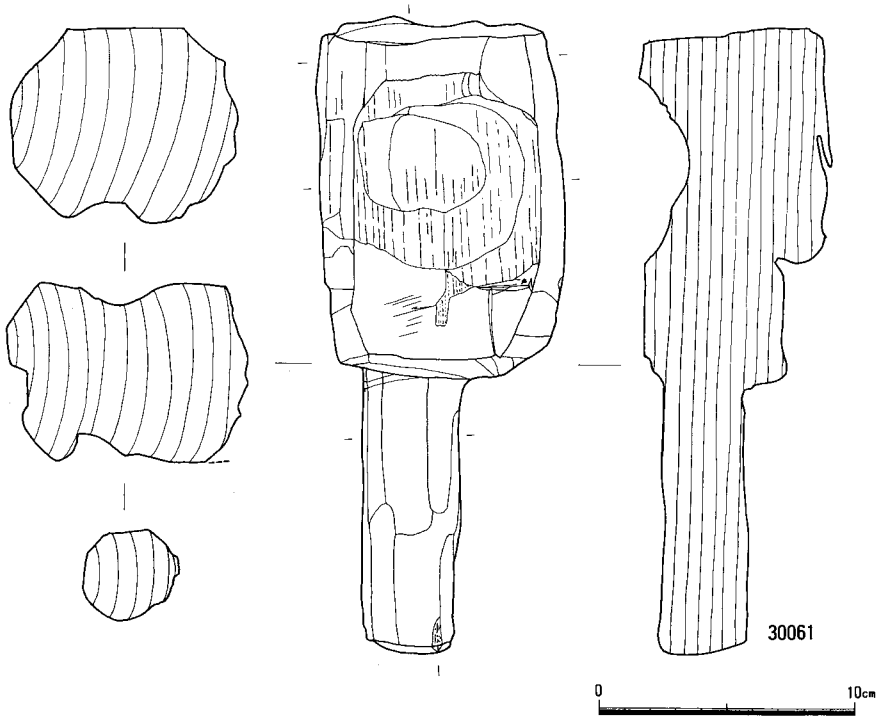


Fig.149　Tr.2出土木製品実測図(1/3)

C． 木簡・墨書木札

木簡・墨書木札は12点が出土している。出土地はすべて寺熊調査区で、SD100から2点、SD103から6点、SD710から1点、SX132から3点、SX717から1点である。しかしながら、これらの遺構は調査区北辺部で互いに重複する位置関係にある。このため、遺物取上げ時に紛れ込みが絶対に無いとは言えない。

（1）SD100出土品

30162は片面に「三斗七升□米 ＿＿」の墨書がある。頭部は平坦、側縁と下端部を欠く。残存長108㎜、残存幅22㎜、厚さ3㎜を測る。**30163**は表面に「 ＿＿ 井□寺前」、裏面に「 ＿＿ 四斗一升□□」の墨書がある。下端部を尖らすが、頭部は不明。残存長133㎜、幅19㎜、厚さ5㎜を測る。

（2）SD103出土品

30159は題籤で軸部を破損する。表面に「寛治七年」、裏面に「□文□米」の墨書がある。頭部は圭頭。残存長74㎜、幅20㎜、厚さ6㎜を測る。**30164**は短冊形の薄い板の両面に同字が幾重にも重なる墨書で、習書の可能性が高い。判読できた墨書は「 ＿＿ 異異異 ＿＿ 」だけである。下端部は焼けている。残存長220㎜、幅49㎜、厚さ2㎜を測る。**30165**は片面に［講莚一枚　衆一房　みな一夕　□□□□□」の墨書がある。残存長194㎜、残存幅34㎜、厚さ6㎜を測る。**30166**は長方形の板材の下端部を削って鋭く尖らしてる斎串。片面の上半部に人もしくは仏を筆で描いている。頭部は鮮明であるが、その他は線で表している。全長223㎜、幅26㎜、厚さ3㎜を測る。**30167**も片面の上半部に人もしくは仏を筆で描いているが不鮮明である。長方形の材で頭部を圭頭、下端部を削って鋭く尖らしてる斎串。全長236㎜、幅23㎜、厚さ3㎜を測る。中央部には径2㎜を測り、貫通する4個の孔が集中している。

（3）SD710出土品

30169は短冊形の薄い板の片面にひらがなで「 ＿＿ □　　うのの□」の墨書がある。全長220㎜、幅46㎜、厚3㎜を測る。

（4）SX132出土品

30161は下端部を欠く長方形の板の表面に「雲収光□□ ＿＿ 」、裏面に「訓人恵□□ ＿＿ 」などの墨書がある。同字が多いことから習書の可能性が高い。残存長98㎜、幅41㎜、厚さ4㎜を測る。**30168**は下端部を欠く長方形の板の片面に「世五龍如□ ＿＿ 」の墨書がある。残存長97㎜、幅38㎜、厚さ7㎜を測る。**30170**は頭部は不明で下端部を尖らした板の表面に「 ＿＿ □五郎二郎」、裏面に「(花押ヵ)」の墨書がある。残存長132㎜、幅20㎜、厚さ3㎜を測る。

（5）SX717出土品

30160は頭部、片側面を欠く板の片面に「 ＿＿ 岐嶋雑掌直成安」の墨書がある。不明の嶋名は壱岐嶋と考えるのが妥当であろう。残存長145㎜、残存幅36㎜、厚さ4㎜を測る。

30159の寛治七年は1093年である。このことから寺熊調査区北東部で長方形に画す一連の堀が、12世紀初頭のものであることが判る。また、注目すべき点は、頭部を破損して嶋名が不明であるが壱岐嶋が妥当である**30160**木簡である。香椎宮と壱岐島との直接的関係は不明であるが、同嶋には香椎宮が存在し、文献にも香椎宮との関連を伺わせる記事を散見することができる。また、出土層が11世紀後半～12世紀であることから香椎宮と大宰府との関係は強力な時期でもある。このことから、香椎B遺跡最下層面における遺構の性格を大宰府との関係で理解すべきなのかもしれない。**30163**は墨書される「寺前」から、鎌倉期における寺院の存在を遺物の面から示唆する資料と言える。

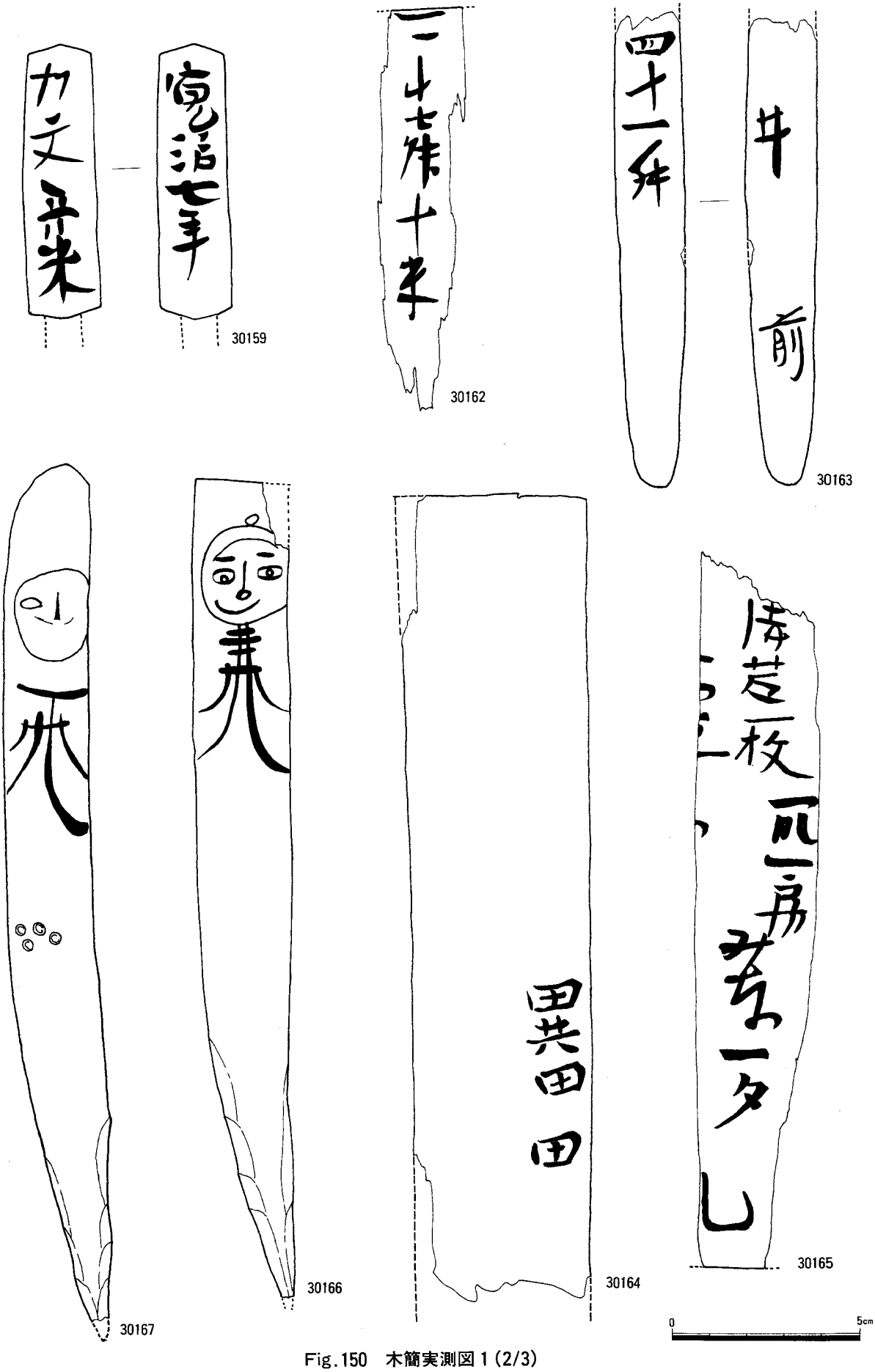


Fig.150　木簡実測図1(2/3)

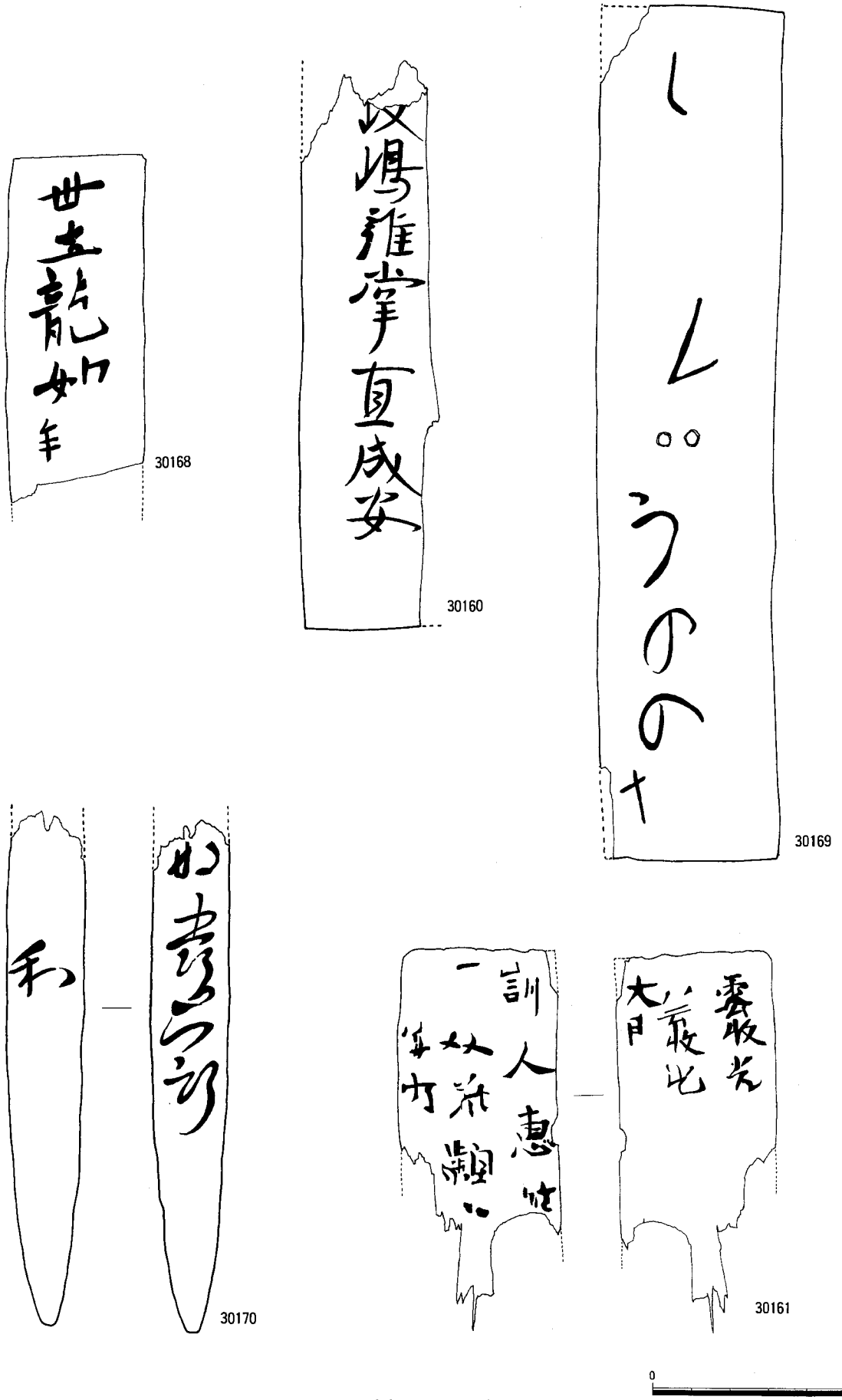


Fig.151　木簡実測図2(2/3)

D. 石　製　品

石製品は516点出土している。その大半は滑石製品の石鍋および石鍋片を転用したものである。石鍋は鍔が口縁近くの外縁をめぐるもの（環鍔付）と外縁の4か所に直方体のつまみがあるもの（耳鍔付）の二形態に分かれる。さらに、大きさの違いも顕著で、小石鍋は口径6cm、大石鍋は復原値で口径40cmに近い。石鍋片の転用品としては、温石といわれている有孔板状製品、蓋、つまみ付円盤が多い。その他の滑石製品としては、権、小型容器がある。滑石以外の製品としては、硯、砥石、玉石、凹石、臼があり、臼はすべて茶臼である。

SD01　生水調査区

砥石が出土している。

SD51（PL.159）　生水調査区

滑石製石鍋が出土している。

SD100（PL.159）　寺熊調査区

茶臼、硯などが出土している。**70405**は海部を欠く硯である。茶褐色粘板岩を幅7.6cm、高さ2cmの直方体に加工する。陸部の磨滅が激しい。**70337**の茶臼は擦部だけが残る。径は19cmを測る。

SD101　寺熊調査区

滑石製石鍋が出土している。

SD102　寺熊調査区

滑石製石鍋・板状製品・石鍋を転用した有孔板状製品が出土している。

SD103（PL.159）　寺熊調査区

滑石製石鍋、砥石、石錘が出土している。

SD221・250・257・300・301・311・3132　寺熊調査区

滑石製石鍋が出土している。

SD318（PL.159）　寺熊調査区

滑石製環鍔付石鍋が出土している。**70093**の環鍔付石鍋は口径21cmを測る。

SD320（PL.159）　寺熊調査区

滑石製蓋・耳鍔付小型石鍋、玉石などが出土している。**70303**の耳鍔付石鍋は小型で口径6.1cm、器高3.5cmを測り、口縁周縁に4か所の耳鍔が付く。底部外面には火を受けた痕跡が残る。

SD321　寺熊調査区

滑石製石鍋などが出土している。

SD323（PL.160）　寺熊調査区

滑石製石鍋や石鍋を転用した有孔板状加工品（温石）が出土している。70119は環鍔付石鍋で口径23を測る。

SD327（PL.160）　寺熊調査区

滑石製双筒形品・石鍋などが出土している。

SD327（PL.160）　寺熊調査区

石鍋を転用した滑石製板状加工品（温石）が出土している。

SD333　寺熊調査区

滑石製石鍋、玉石が出土している。

SD337　寺熊調査区

滑石製石鍋が出土している。

SD343　寺熊調査区

滑石製つまみ付円盤・石鍋などが出土している。

SD349　寺熊調査区

滑石製石鍋・石鍋を転用した有孔板状製品が出土している。

SD486・493　寺熊調査区

滑石製石鍋が出土している。

SD740（PL.160）　寺熊調査区

滑石製の権が出土している。釣鐘形の頂部に紐が付く。底部の一部を欠くが重量は110g。

SG122

茶臼が出土している。

SG488（PL.160）

滑石製の環鍔付石鍋・耳鍔付石鍋・蓋・有孔板状製品、玉石などが出土している。**70148・70302**は滑石製環鍔付石鍋である。**70148**は口径21cm、器高12.8cmを測る。**70302**は口径36cm、器高14.5cmを測る。**70006**は滑石製耳鍔付石鍋で口径24cm、器高18cmを測る。

SK499

滑石製石鍋を転用した有孔板状製品が出土している。

SK708

滑石製のつまみ付円盤が出土している。

SX493

滑石製の耳鍔付石鍋が出土している。**70155**は滑石製耳鍔付石鍋で口径25cm、器高9.1cmを測る。

SX852

石鍋を転用した滑石製有孔板状製品が出土している。

瓦塚

茶臼が集中的に出土している。**70338**は上部擦石で口径21cmを測る。

上層黒色土層（PL.161）

硯、凹石、滑石製有孔板状製品（温石）・筒形製品・環鍔付石鍋・耳鍔付石鍋、砥石が出土している。**70014・70018**は滑石製有孔板状製品である。**70014**は縦13cm、横9.3cm、厚さ1.8cm。**70018**は縦13.5cm、横9.5cm、厚さ2.3cmを測る。**70067**は小型の直方体を呈する容器である。耳鍔付石鍋の鍔を転用し、中をくりぬく。縦3.1cm、横5.4cm、器高3.5cmを測る。

灰褐色土層（PL.163）

滑石製蓋・有孔板状製品（温石）・石鍋・大型石鍋が出土している。**70024**は滑石製有孔板状製品（温石）で、縦15cm、横6.1cm、厚さ2.5cmを測る。小口近くの広面には2個の径8cmの孔が貫通する。

下層黒色土層（PL.162）

滑石製つまみ付円盤・滑石製有孔板状製品（温石）・環鍔付石鍋、砥石が出土している。**70058**は滑石製つまみ付円盤で円盤部の径は3.8～4.6cm。**70029**は滑石製有孔板状製品（温石）で、縦9.6cm、横8.7cm、厚さ1.3cmを測る。小口近くの広面には径7cmの孔が貫通する。**70165・70197**は滑石製環鍔付石鍋で、**70165**は口径27cm。**70197**は口径7.2cm、器高3.8cmを測る。

E. 金属製品・銅銭

(1) 金属製品 (PL.169～170)

釘、刀子、小刀、鉄族、鎌、銅鈴、キセル、青銅製箸などの製品や鉄滓が出土している。羽口も数点出土していることから、鍛冶施設の存在を示している。また、豆粒状の青銅品や溶けかかった物が瓦塚から集中的に出土している。これは、現地に生産工房の存在を示すよりも、青銅製品のある建物の燃焼（火事）により発生したものと考えられる。ただし、調査区に接する御倉谷・里城調査区からは円盤状・角棒状・板状を呈する鉛材が出土していることから、鉛を用いた加工が現地で行なわれていたのは確実である。

50023はSD52出土の銅製鈴である。**50025**はSD101出土の円錐状銅製品である。**50063・50064**はSD316出土の大型鉄釘である。**50063**は全長15.6cm、重量29g、**50064**は全長11.9cm、重量22gである。**50028**はSD318出土の青銅製金具である。全長2.8cm、重量５gを測る。**50065**はSD321出土の鉄釘で、全長5.5cm、重量７gである。**50027**はSD338出土の青銅製棒状品で、頭部を欠く。中央部は円柱状で先端部は四角柱状である。全長19.3cm、径0.35cm、重量20gを測る。**50043**はSD431出土の青銅製合子型蓋である。口径3.6cm、器高0.8cmを測る。**50048**はSE123出土の鉄釘で、ねじ曲っている。**50024・50047・50059**はSK126出土である。**50024**は小刀で全長32cm、刃巾3.3cm、重量162gを測る。**50047・50059**は棺留めの鉄釘で、棺材の木質が付着する。**50047**は全長5.1cm、４g、**50059**は全長3.8cm、３gである。**50060**はSG122出土の鉄釘である。**50068**はSG488出土の鉄釘である。**50032**は遺構確認面出土のキセルである。**50050**は瓦塚出土のキセルである。**50040**はSD727出土の宝珠形の青銅製品である。**50055**は下層黒色土出土の刀子である。切先部と柄頭部を欠く。刃巾は2.1cm。**50033・50034・50035**は瓦塚出土の溶解した銅片である。**50053・50054**は瓦溜り出土の鉄釘である。

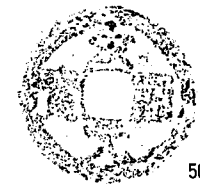
(2) 銅銭 (Fig.152, PL.171)

調査では22点の銅銭が出土し、18点が判読可能である。宋銭12点、明銭１点、越南銭１点である。最も古いのは**50007**の宋通元寶で、初鋳造年は960年。最も新しいのは**50010**の大和通寶で、初鋳造年は1443年である。22点の内の11点が土壙墓SK738からの出土で、副葬品である。

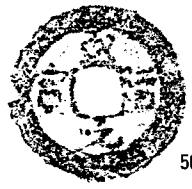
遺物番号	貸銭名	出土遺構	初鋳造年	遺物番号	貸銭名	出土遺構	初鋳造年
50001	政和通寶	SB91	１１１１年	50012	皇宋通寶	SK738	１０３８年
50002	熙寧元寶	SK738	１０６８年	50013	元豊通寶	SX716	１０７８年
50003	天聖元寶	SK738	１０２３年	50014	判読不明	下層黒色土	―――
50004	至道元寶	SK738	９９５年	50015	判読不明	柱穴	―――
50005	太平通寶	SK738	９７６年	50016	判読不明	上層黒色土	―――
50006	元祐通寶	SK738	１０８６年	50017	判読不明	柱穴黒色土	―――
50007	宋通元寶	SK738	９６０年	50018	元豊通寶	上層黒色土	１０７８年
50008	祥符元寶	SK738	１００９年	50019	永樂通寶	柱穴	１４０８年
50009	天聖元寶	SK738	１０２３年	50020	皇宋通寶	柱穴	１０３８年
50010	大和通寶	SK738	１４４３年	50021	皇宋通寶	柱穴	１０３８年
50011	天禧通寶	SK738	１０１７年	50022	景祐元寶	柱穴	１０３４年

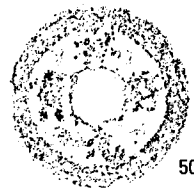
生水・寺熊調査区出土銅銭一覧表

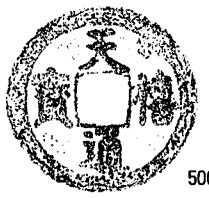
SK738

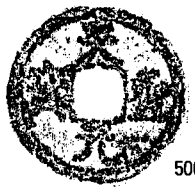

50007

50005

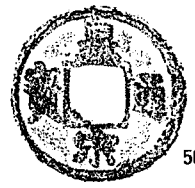

50004

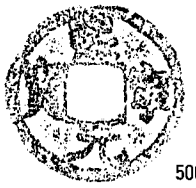

50008


50011


50003

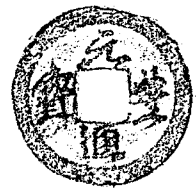
50009


50012

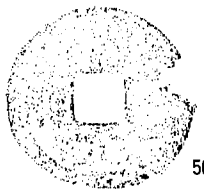

50002

50006

50010


50013

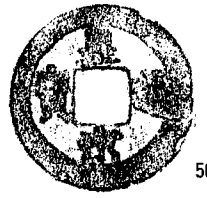
ピット


50015

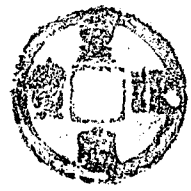
SP3079

50022

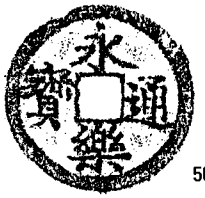
SP3079


50020

SP3079


50021

SP3079


50019

上層黒色土

50018

生水SB91

50001

Fig.152　寺熊・生水出土銅銭拓影(1/1)

F. 瓦・塼

瓦、塼類は、奈良時代末・平安時代初～近世の軒先丸・平瓦、丸・平瓦、塼などが寺熊地区を中心とした地から出土した。量的に多かったのは、中世後半期の丸・平瓦である。

1. 軒 丸 瓦

1）蓮華文軒丸瓦（Fig.153, PL.190）

81226は複弁10弁蓮華文軒丸瓦である。中房は太い隆起線によって画し、中には大粒な蓮子を１＋４に配する。内区には複弁10弁を配するが、各花弁の大きさは均一ではない。外区には17個の大粒珠文を配する。外縁は幅の狭い素縁で一段高くなる。瓦当文様は、その配置が割付けに基づいているものの、蓮弁に代表されるように彫りが粗雑であるために、締まりの無い感じを与える。丸瓦部との接合方法は印籠つぎ法である。瓦当笵に粘土を充塡した後に丸瓦を接着させ、接合した周縁に粘土を盛り上がるように張付ける。丸瓦の接合位置は内区と外区との界線あたりである。丸瓦凸面は、格子叩き目を僅かに残すが、大半はナデ調整を施す。SD327から出土している。同笵出土例としては、筑前国分寺、大宰府政庁、来木２号窯から出土している。

81002は単弁10弁蓮華文軒丸瓦である。中房は幅７㎜の太い隆起線によって区画され、中に１＋４の蓮子を配する。中央の蓮子は菱形を呈し、他の蓮子は杏仁形（算盤玉形）である。中房を画す隆起線には４か所に内向する稜を有し、稜の先端と蓮子中央の菱形の角とは対面する。内区には10弁の蓮弁を配しているが、不正形な楕円形を呈し、形、大きさともに整っていない。内区と外区との間は、幅が8.5㎜を測る太い隆起線で画す。外区には杏仁形と楕円形の蓮子を交互に配し、総数は14個を数える。外縁は素縁。丸瓦部との接合方法は印籠つぎ法である。接合面における手法は不明。丸瓦内側の支持土は、全体に盛るものの厚くない。丸瓦の接合位置は、瓦当の上縁よりも丸瓦の厚み分だけ一段下げた位置、すなわち内区と外区との界線あたりである。瓦当の構成から、笵型が緻密な割付けの下に作成されているとは言い難い。この瓦の特徴は中房および外区に見られる杏仁形珠文の使用にあり、外区における珠文の意識的配置は、その特徴を良く示している。寺熊東地区の12世紀前半に比定され、SD103、大日地区から出土している。同笵例に観世音寺跡、鴻臚館跡がある。

2）草花文軒丸瓦（Fig.153, PL.190）

81223・81224は中央部に花文を配し、周縁に細い隆起線をめぐらす。外縁は素縁で、わずかに直に立上り平坦面をなす。同系の軒丸瓦は博多遺跡群から多く出土している。

3）巴剣頭文軒丸瓦（Fig.153, PL.190）

81001は中央部に右回りの三巴文を配し、外区との境は隆起線で画す。界線の周縁には外向の剣頭文をめぐらす。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

4）巴文軒丸瓦（Fig.153, PL.190）

81172は中央部に巴の頭部が中央で接合する左回りの三ツ巴を配する。外区との境は細い隆起線で画す。外区には径６㎜前後を測る18個の珠文が配している。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。瓦当径は、平均して13.5㎝を測る。丸瓦凸面は叩き目痕を残さない。丸瓦の接合は、瓦当の上縁よりも丸瓦の厚み分だけ一段下げた位置、すなわち内区と外区との界線あたりに鋭角的に接合させる。さらに、支持土を内外面に張り付ける際、丸瓦の接合してない周縁に粘土を巡らして立ち上げる特徴を持つ。この瓦を軒丸瓦としたが、その特徴などから、棟等で鬼瓦と組み合う物と考えられる。寺熊地区瓦溜り遺構から出土している。

81164は中央部に左回りの三ツ巴を配し、外区との境は巴の尾が伸びて界線を形成する隆起線で画す。外区には32個の珠文が配される。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

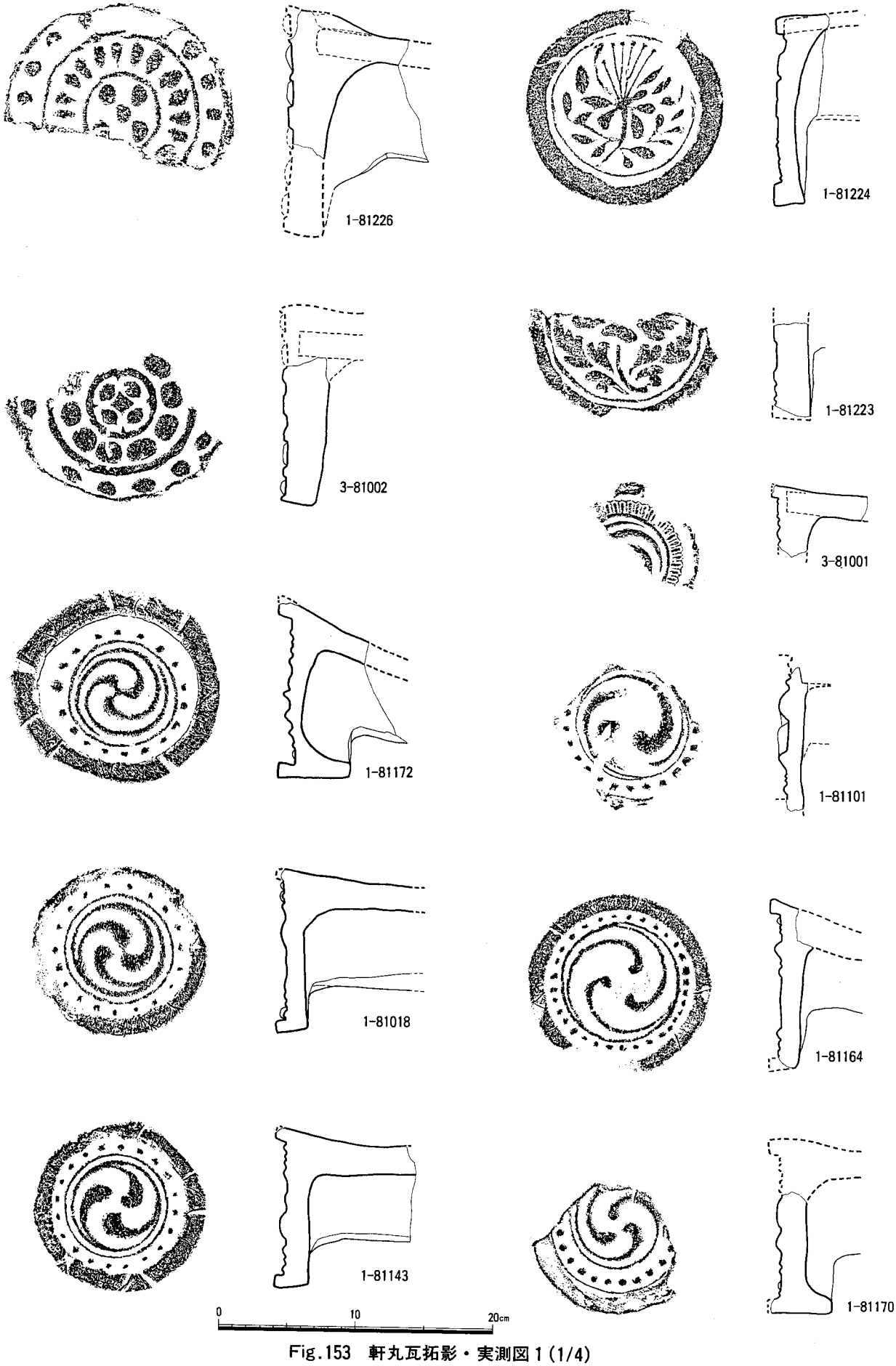


Fig.153 軒丸瓦拓影・実測図1(1/4)

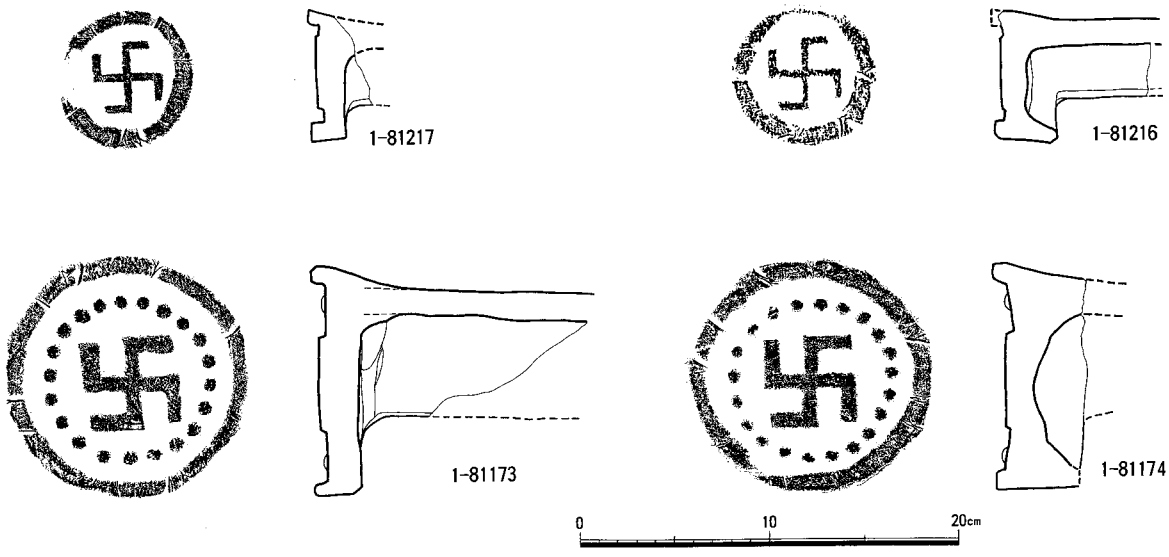


Fig.154　軒丸瓦拓影・実測図２(1/4)

81101は中央部に左回りの三ツ巴を配し、外区との境は巴の尾が伸びて界線を形成する隆起線で画す。外区には26個の珠文が配される。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

81018は中央部に左回りの三ツ巴を配し、巴の尾が伸びて界線を形成する。さらに、その外側の外区珠文帯との間に隆起線の界線を配する。外区には19個の珠文が配される。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

81143は中央部に左回りの三ツ巴を配する。巴文の頭は大きい。尾は伸びて界線を形成する。さらに、その外側の外区珠文帯との間に隆起線の界線を配する。外区には径6㎜前後を測る20個の珠文を配する。外縁は素縁で、直に立上り平坦。瓦当径は、平均して11.7cmを測る。丸瓦の接合は、瓦当の上縁よりも丸瓦の厚み分だけ一段下げた位置、すなわち内区と外区との界線あたりに鋭角的に接合させる。さらに、支持土を内外面に張り付ける際、丸瓦の接合してない周縁に粘土を巡らして立ち上げる特徴を持つ。この軒丸瓦は、瓦当裏面の状況により、二種類に大別される。

81106は中央部に左回りの三ツ巴を配し、外区との境は巴の尾が伸びて界線を形成する隆起線で画す。外区には12個の珠文が配される。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

81170は中央部に右回りの三ツ巴を配し、外区との境は巴の尾が伸びて界線を形成する隆起線で画す。外区には25個の珠文が配される。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。

５）逆卍字文軒丸瓦（Fig.154，PL.190）

81173は中央部に隆起する逆卍字を配し、周縁に21個の珠文を配する。界線は無い。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。81174は81173と同笵である。81173と異なる点は、支持土を内外面に張り付ける際、丸瓦の接合してない周縁に粘土を巡らして立ち上げる特徴である。SD316・318などから42点が出土している。

６）逆卍字文小型軒丸瓦（Fig.154，PL.190）

81217は中央部に隆起する逆卍型を配し、外径6.5cm前後を測る小型瓦である。外縁は一段高く、平坦な素文である。81216は81217と同笵である。81173と異なる点は、支持土を内外面に張り付ける際、丸瓦の接合してない周縁に粘土を巡らして立ち上げる特徴である。

2．軒　平　瓦

1）偏行唐草文軒平瓦（Fig.155，PL.191）

80120・80121はSE481から出土している。内区に左偏行唐草文、上・下外区には珠文を配する。平瓦との接合方法は包み込みによる。鴻臚館跡から同笵資料が出土している。

80118は黒色包含層から出土している。内区に左偏行唐草文、上外区には珠文を配する。

80119はSD102から出土している。上下外区に珠文を配し、内区には唐草文を配する。香椎宮境内から同笵瓦が出土している。

80126はSD337から出土している。右偏行唐草の途中を分断し、支葉を向かい合わせて均整唐草文もどきとしている。顎は無顎。安楽寺、香椎宮境内から同笵瓦が出土している。

2）重弧文軒平瓦（Fig.155，PL.191）

80123はSG488・上層黒色包含層から出土している。型引きによる三重の太い隆起線の中央線にヘラを押し当てた波状文と波状に折り曲げた顎端部からなる。桶巻つくりの粘土円筒の縁に粘土紐を巻きつけ、瓦当形成を行なった後に分割している。同系の軒平瓦は、香椎宮境内、博多遺跡群、油山からも出土している。

3）均整唐草文軒平瓦（Fig.155，PL.191）

80001・80032・80070・80113は中心飾りに宝珠形を配し、子葉を左右ともに2～3反転させている。平瓦は小型で、凹・凸両面ともヘラ磨を施す。SD316・318・334・337・349、SE123・481・724、SG122、SX124・129から出土している。

3．鬼　　瓦　（PL.192・193）

81019はSD318の出土である。鬼瓦の製作は、笵造りではなく、一枚ずつ手作りである。厚さ4.0cmほどの粘土板の上へ新たに粘土を盛り上げて目・鼻・口などの顔を造作する。裏面は平坦である。灰色～黒色を呈し、2～5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。鎌倉時代のものと考えられる。

81024はSD318の出土である。**81019**より大型で、顔の造作が立体的である。鬼瓦の製作は、笵造りではなく、一枚ずつ手作りである。厚さ4.0cmほどの粘土板の上へ新たに粘土を盛り上げて目・鼻・口などを作りだす。裏面は棟に取り付けるため取手が設けられている。灰色～黒色を呈し、2～5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。鎌倉時代のものと考えられる。

81018は上層灰褐色層の出土である。鬼瓦の製作は、笵造りではなく、一枚ずつ手作りである。粘土板の上へ新たに粘土を盛り上げて目・鼻・口などの顔を造作する。橙灰色を呈し、2～5㎜程の長石・石英砂粒の他に1㎜ほどの赤褐色砂粒を多く含む。口の裏にあたる裏面には取手が設けられている。

81022はSD318の出土である。鬼瓦の製作は、笵造りではなく、一枚ずつ手作りである。

81020・81021は瓦塚の出土である。鬼瓦の製作は、笵造りではなく、一枚ずつ手作りである。

4．平　瓦　（PL.194）

凸面に格子叩き目が残る**81029～81031・81036**は粘土板桶巻作りである。

5．道　具　瓦

1）熨斗瓦　（PL.194）

瓦塚・瓦溜りなどから出土している。乾燥前に平瓦を分割し、側面調整を行なっている。

6．塼（PL.133）

方23.3cm、厚さ3cmを測り、淡灰白色を呈する。SD427、SE127・481や里城調査区などからも出土している。

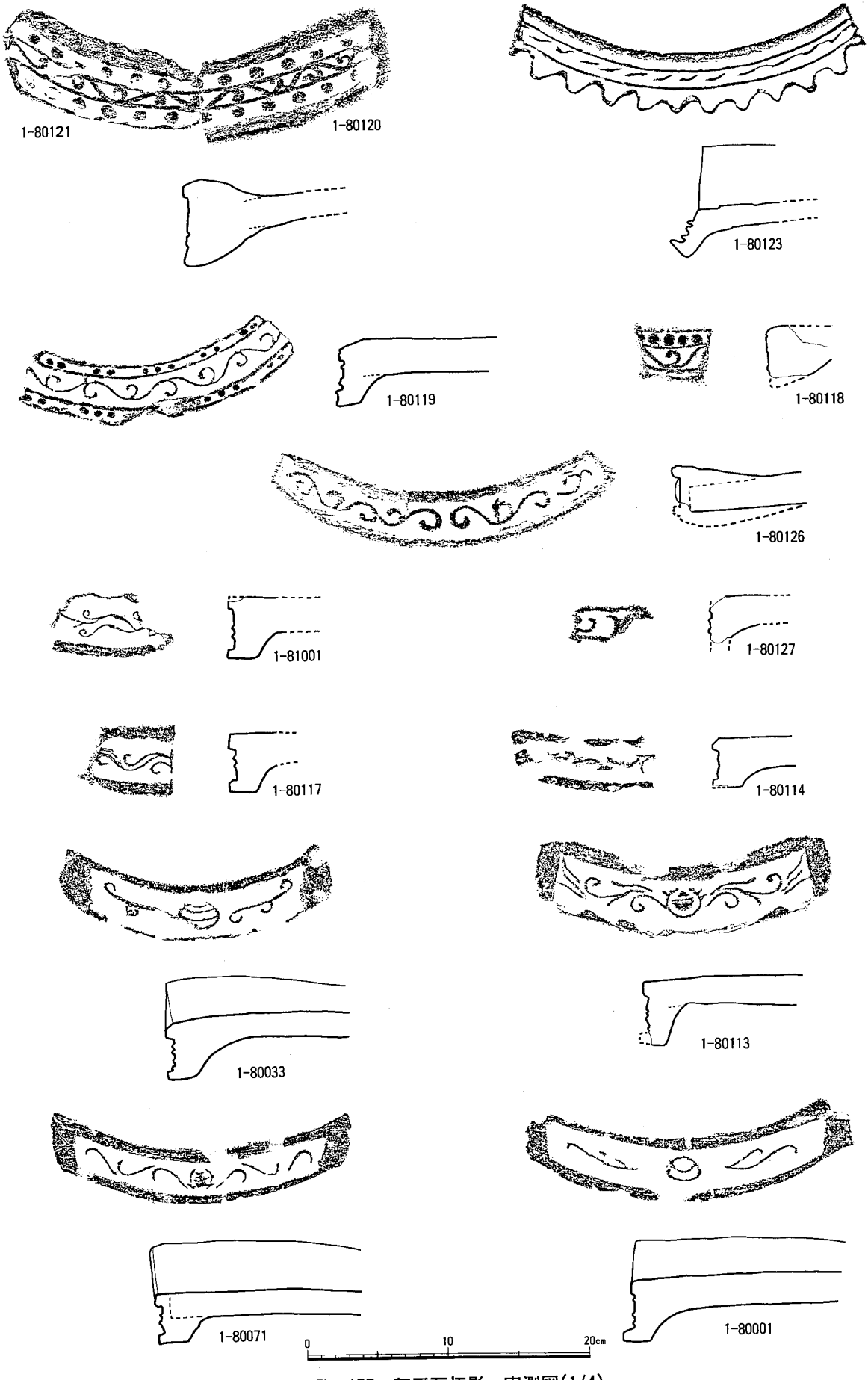


Fig.155　軒平瓦拓影・実測図(1/4)

G. 板碑・石塔

1） 板　碑　(Fig.156, PL.168)

板碑は、自然石板碑、切石板状板碑、切石柱状板碑の3形態4点の板碑が出土している。

71045は里城南辺部から出土した自然石板碑で、縦60.2cm、巾38cm、厚み14.6cmを測る角閃石の転石をそのまま使用している。石の広口面を碑面とし、碑面上半部中央には輪の中に大日の種子である𑖨（バン）を刻み、下半部には三行に分けて、「應永六己卯」、「禅尼妙知」、「拾月拾四日」の銘文を陰刻している。應永六年は西暦の1399年になる。**71029**はSG488から出土した切石板状板碑で、頭部を欠く。残存長39.8cm、巾17.5cm、厚みは中央部で4.9cm、脚部（地伏分）で7cmを測る。暗茶褐色を呈する砂岩を削り、碑面部は磨いて丁寧に仕上げているが、脚部には削り痕が残る。碑面は、上端部を欠いて全容は不明であるが、下半部には梵字（地蔵の種子である𑖪の可能性が高い）、「應永二十八」、「派公首座」、「二月十二日」の銘文を陰刻している。應永六年は西暦の1421年になる。板碑は火を受けて黒色を呈する部分がある。この他に、同形態の板碑が山城竪堀12から出土している（投石No.101, PL.167）が、割られていて碑文・大きさは不明である。**71032**は山城竪堀12から出土した切石柱状板碑で、下半部を欠く。残存長32.3cm、巾28.2cm、厚みは19.8cmを測る。白色を呈する花崗岩を用い、頭部を山形に削り、その下に2条の横線と梵字で地蔵の種子である「𑖪（カ）」を正面だけに刻んでいる。

2） 五輪塔　(Fig.156, PL.168)

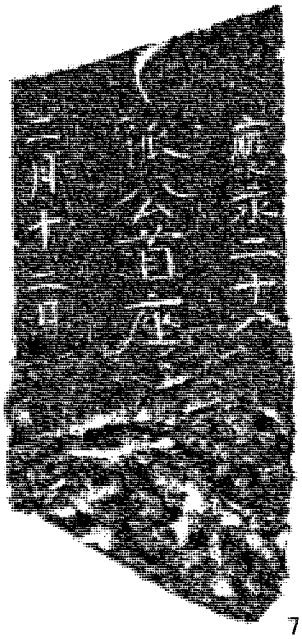
造営時の状態での出土は無く、五輪は分かれて瓦塚、里城、御倉谷、山城などから出土している。中には、転用されたりもしている。転用としては、投石に用いられている。

71022は瓦塚から出土したもので、花崗岩を請花形に上を向いた半球形とその上に宝珠形を乗せたように削っている。五輪塔の空・風輪部で、残存高は24.5cm、空輪部の径は17.2cm、風輪部の径は15.5cmを測る。この他の空・風輪としては2点が瓦塚から出土している。その中の1点の空輪である宝珠形の径は19.1cmを測る大型である。**71033**は山城から出土した五輪塔の塔身で、辺部を欠く。砂岩を球状に削り、正面に梵字を刻んでいる。**71016・71046・71047**は花崗岩製の五輪塔火輪の笠である。三基とも方錘形に削り、**71016**は方25～30cm、高さ15～20cm、**71046・71047**は方24cm、高さ15cmを測る。頂部には請花形に上を向いた半球形の風輪部を差し込む孔がある。

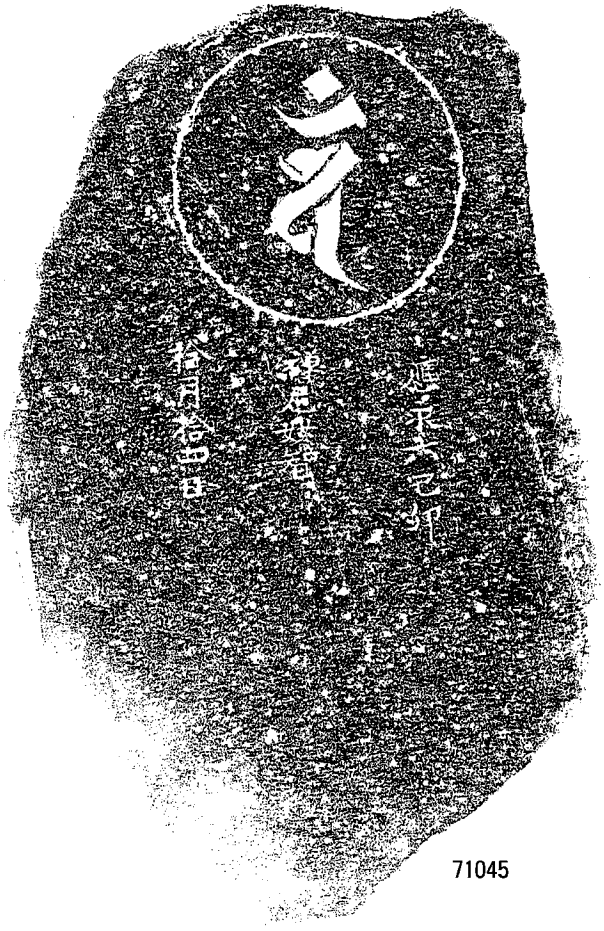
3） 多宝塔　(Fig.156, PL.168)

五輪塔と同じく建立時のままでの出土は無い。また、ここでは出土品を多宝塔と分類したが、積極的根拠を示している訳ではなく、五輪塔の各輪部である可能性は否定できない。

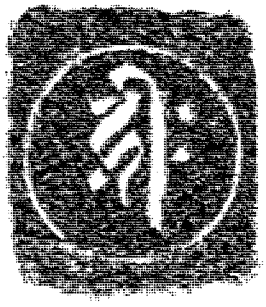
71020は瓦塚から出土した花崗岩製の相輪部で、基部を欠く。残存長は23cmを測る。**71021**は瓦塚から出土した花崗岩製の相輪部で、基部を欠く。残存長は12.4cmを測る。**71023**はSD318から出土している砂岩の立方体で、多宝塔の基台である。白色を呈し、方15.8cm、高さ18.3cmを測る。正面には輪とその中央に弥陀の種子である𑖮（キリーク）を陰刻している。五輪塔の地輪である基台の可能性もある。**71035**は山城竪堀12から出土した砂岩の直方体で辺部を欠く。砥石として用いられており、頂部面が弧を描いて擦り減っているが、多宝塔の基台と考えられる。暗茶褐色を呈し、方15.5cm、高さ12.1cmを測る。正面と片側面には種子を陰刻している。他の2面にも種子を刻んでいた可能性が極めて高いが、割れて不明である。五輪塔の基台の可能性もある。火を受けて黒色を呈する部分がある。**71024**は方形の花崗岩製に蓮華花を削り出した、反花座である。



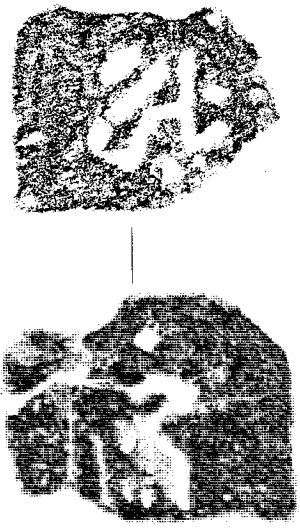
71029



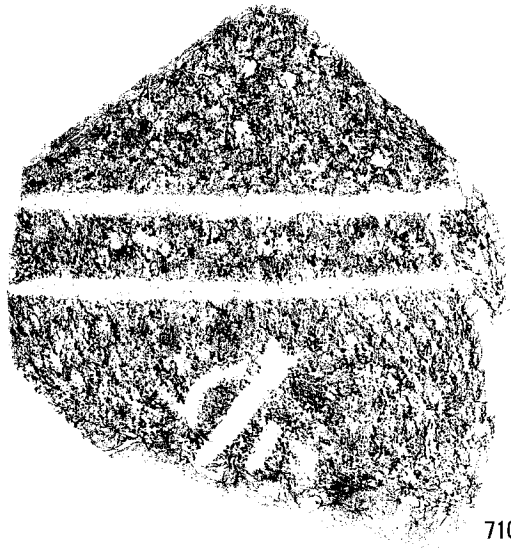
71045



71023



71035



71032

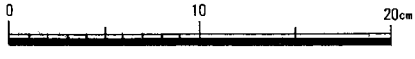


Fig.156　板碑・五輪塔拓影(1/4)

（2）稲戸前調査区

1） 位置と概要

稲戸前調査区は、香椎宮あたりから東へのびる谷の中央部、寺熊調査区の東に位置する。東西115m、南北35m、標高は19～21mを測る調査区は、谷部や周辺丘陵部において大規模に開発が行なわれる1960年以前の地形では、南からのびる別の谷との合流部近くに位置する。現況は水田であった。

遺構は、調査区の西に連続するように位置する寺熊調査区とは様相が多いに異なる。寺熊調査区では複数の整地層が存在し、そこには堀・溝で区画した敷地内に掘立柱建物、苑地、井戸、土壙墓などで構成する屋敷が重層的に存在している。これに対して、本調査区では地表下35～50cmの地山面上において縄文時代から中世の遺構が散在する。また、香椎B遺跡の中核をなす中世遺構の密度が希薄であることや試掘調査において調査区の北側で遺構が検出しなかった事実は、あきらかに寺熊調査区と本調査区との間において意図的な土地使用が行なわれていたことを示すものと思われる。さらに、本調査区においては、寺熊調査区のように厚い遺物包含層が存在しないことから、後世の削平を受けた可能性も考えられる。検出した遺構は、掘立柱建物、柵列、井戸、土壙、集石遺構、柱穴などである。

遺物は、各遺構などから旧石器時代の石器、縄文土器、須恵器、土師器、白磁・青磁の磁器、施釉陶器、瓦器などが出土している。出土遺物でも寺熊調査区と比べてると極めて少ない。しかし、これまで寺熊調査区や生水調査区で見られなかった旧石器時代や縄文時代の遺物が本調査区から集中して出土している点は、稲戸前調査区の立地する位置が谷部における地形の特性を示しているのかもしれない。

本調査区の本来の字名は寺熊であるが、調査では寺熊地区を分割して行なった。このため、調査区を混同しないために字名とは異なる調査区名を付与した。このため、整理でも調査時の名をそのままに用いた。

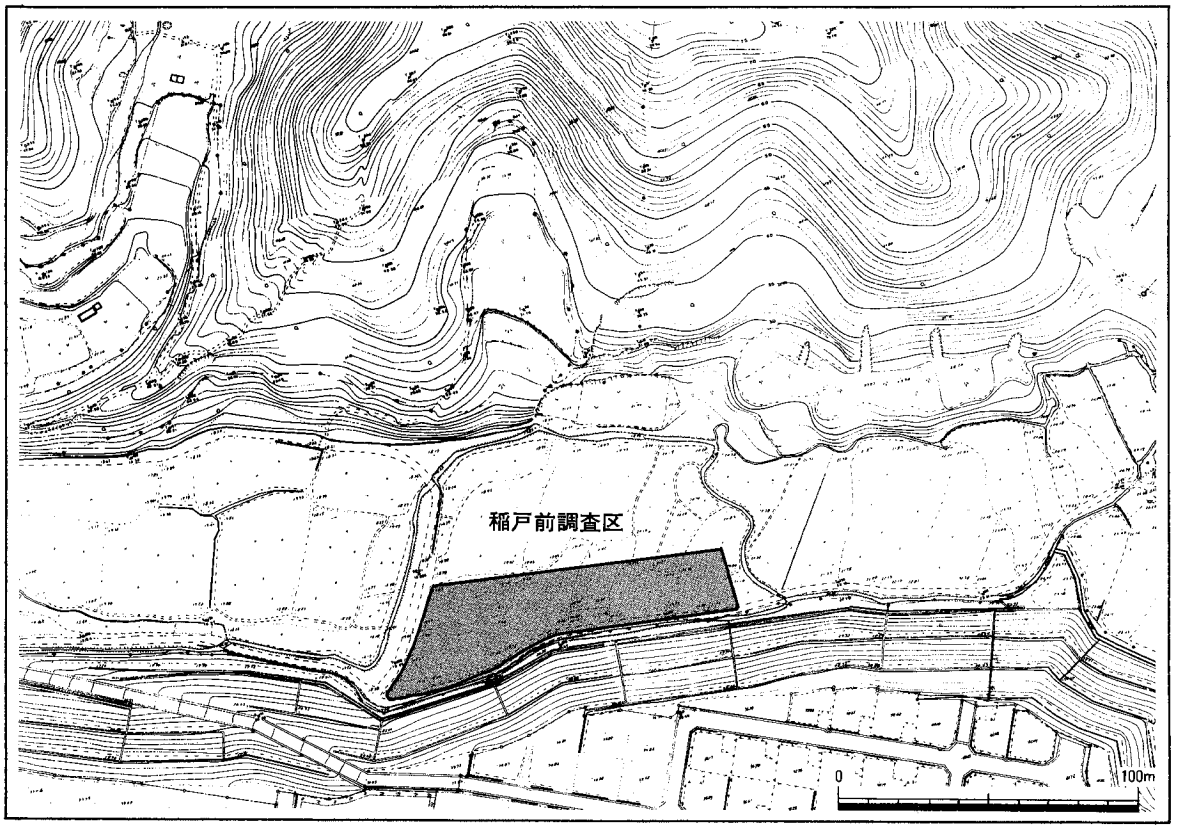


Fig.157 稲戸前調査区位置図(1/2,500)

2） 遺　構

検出した遺構は、縄文時代の集石遺構、古代の掘立柱建物、柵列、中世の井戸などである。

塀・柵（ＳＡ）

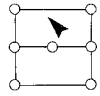
SA624（Fig.6, PL.58）

調査区東半部南辺に位置する掘立柱の南北塀で、３間分を検出した。柱掘形は円形の平面形を呈し、径35～45cm、深さ40～50cmを測る。

掘立柱建物（ＳＢ）

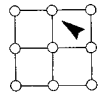
掘立柱建物は２棟を検出した。二棟の建物は、棟通り方向を同じくし、建物も一定の基準で建てられていることなどから、同時期に建立されていると考えるのが妥当であろう。また、建物の性格としては、規模などから高床倉庫と思われる。

SB610（Fig.158, PL.58,59-1～4,61-1）



調査区西半部中央、SB611の東に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行１間(3.6m)、梁行２間(3.0m)で、桁行き中央の棟通りに柱が建つ。柱間寸法は、桁行の棟通りが1.8m、梁行1.50mで、整然としている。SB611と棟通り方向を同じくする。柱掘形は、円形の平面形を呈し、径45～55cm・深さ33～40cmを測る。

SB611（Fig.158, PL.58,59-5～8,61-1）



調査区西半部中央にある総柱の掘立柱建物である。桁行２間(3.6m)、梁行２間(3.6m)で、柱間寸法は桁行、梁行ともに1.8mである。柱掘形は、円形の平面形を呈し、径60～70cm・深さ40～50cmを測る。柱抜取り穴と思われる掘形がある。柱穴底には礫があり、礎板の代わりに用いた可能性がある。SB610とは棟通り方向を同じくし、2.4m離れている。

井　戸（ＳＥ）

SE600（Fig.158･159, PL.58,60-1,61-1）

調査区西部南辺、SB610の南に位置する井戸で、井筒･井戸枠などは残存していない。掘形はすり鉢形を呈し、東西方向に長軸をもつ楕円形の平面形で、長径19.5m、短径1.64mを測る。残存する深さは約0.9mを測る。掘形の底には拳大の礫が残る。底面は径40cmの円形を呈し、他調査区で検出された井戸との比較からも、桶などの井戸筒が存在していた可能性が高い。井戸内からは土師器皿・坏・椀、須恵器甕、瓦器椀、白磁碗が出土している。

土　壙（ＳＫ）

SK601（Fig.158, PL.58）

調査区東半部中央に位置する。南北方向に長軸をもつ楕円形の平面形を呈し、上面で長径140cm、短径121cmm、深さ20cm、壙底で長辺110cm、短辺80cmを測る。土壙内からは土師器甕、縄文土器鉢が出土している。縄文土器は後世の紛れ込みである。

SK602（Fig.158,160, PL.58,60-2,61-1）

調査区西北隅に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺125cm、短辺56cm、深さ19cm、壙底で長辺110cm、短辺46cmを測る。壁面が赤褐色を呈し、火を受けていることを知る。土壙内からは土師器坏、瓦器椀が出土している。

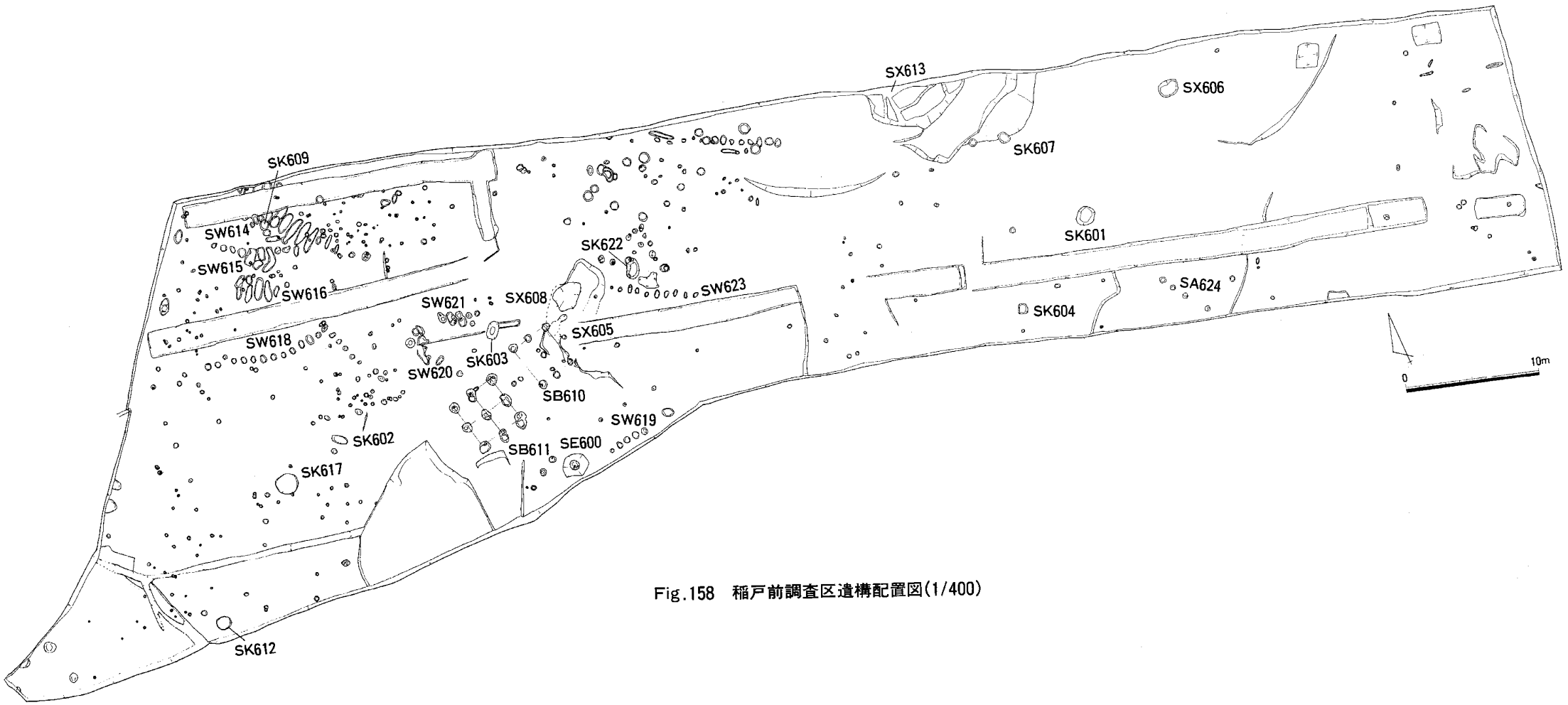


Fig.158　稲戸前調査区遺構配置図(1/400)

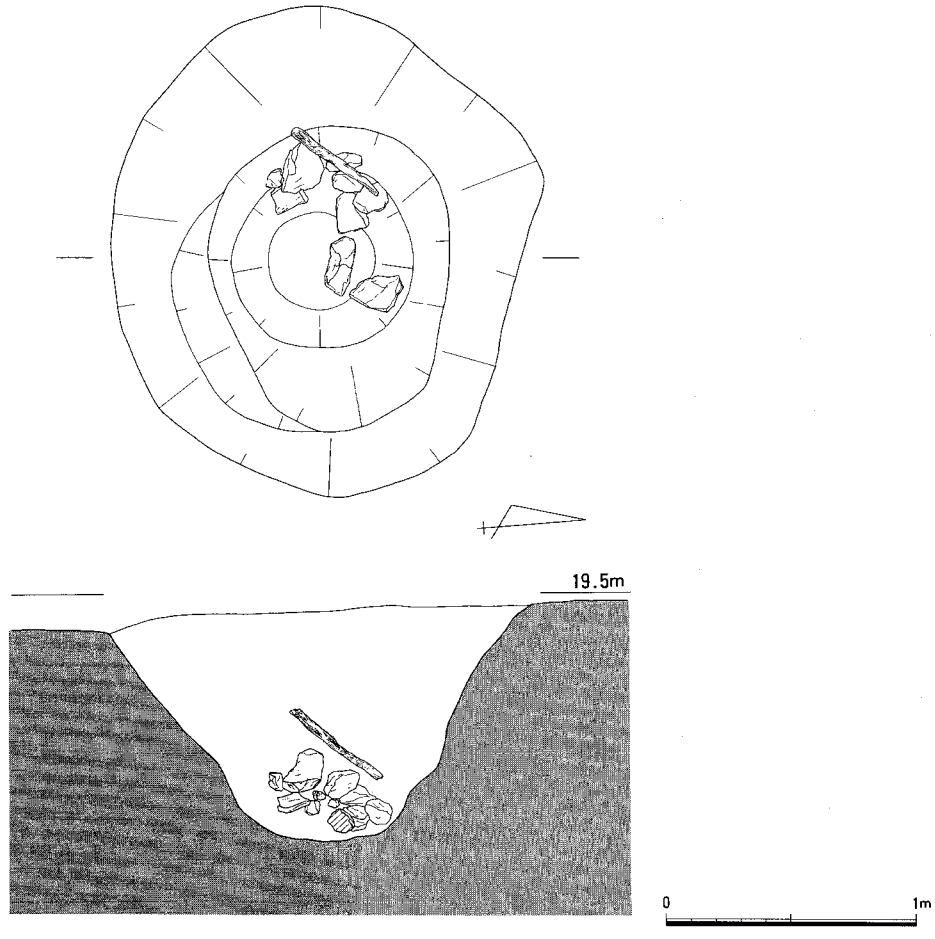


Fig.159　井戸SE600実測図(1/30)

SK603 (Fig.158,160, PL.58,60-3,61-1)

調査区西半部中央に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺136cm、短辺91cm、深さ53cm、壙底で長辺78cm、短辺48cmを測る。土壙内からは土師器皿・坏、青磁碗が出土している。

SK604 (Fig.158,160, PL.58)

調査区中央南辺部に位置する。楕円形の平面形を呈し、上面で長径110cm、短径100cm、深さ6cm、壙底で径98cmを測る。土壙内からは縄文土器鉢が出土している。

SK607 (Fig.158,160, PL.58)

調査区東半部中央に位置する。円形の平面形を呈し、上面で長径88cm、短径70cm、深さ18cm、壙底で長径45cm、短径32を測る。縄文土器鉢が出土している。

SK609 (Fig.158,160, PL.58,60-4,61-1)

調査区北西隅に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径71cm、深さ21cm、壙底で径45cmを測る。

SK612 (Fig.158, PL.58,60-5,61-1)

調査区南西隅に位置する。円形の平面形を呈し、上面で長径110cm、短径100cm、深さ6cm、壙底で径98cmを測る。土壙内からは土師器坏が出土している。

SK617 (Fig.158, PL.58,60-6,61-1)

調査区南西部に位置する。円形の平面形を呈し、上面で径158cm、深さ17cm、壙底で径148cmを測る。土壙内からは土師器坏、瓦器椀が出土している。

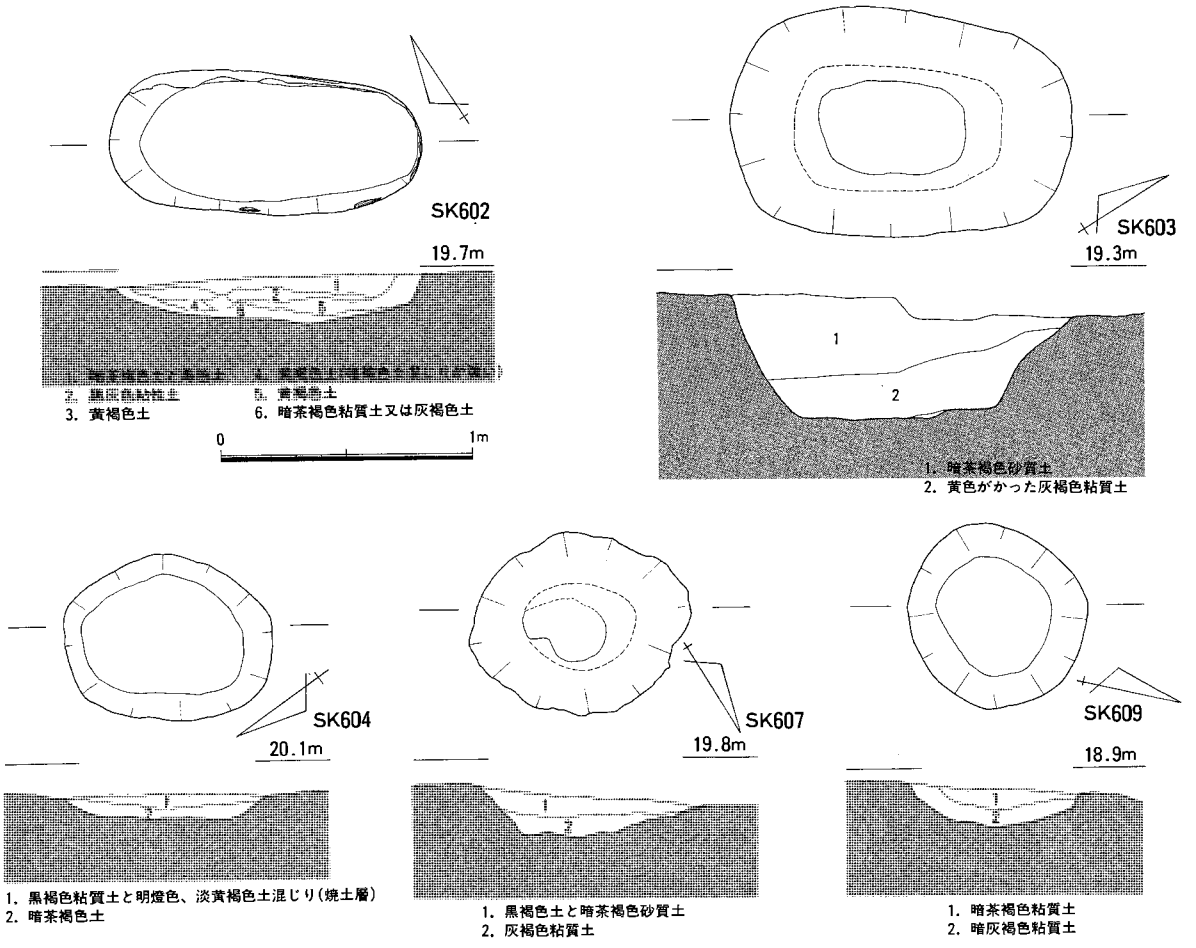


Fig.160　土壙SK602・603・604・607・609実測図(1/30)

SK622 (Fig.158,160, PL.58)

調査区西半部中央に位置する。隅丸長方形の平面形を呈し、上面で長辺146cm、短辺93cm、深さ53cm、壙底で長辺104cm、短辺52cmを測る。

落ち込み・集石遺構 (S X)

SX605 (Fig.158, PL.58,60-7,61-1)

調査区西半部中央、SX608の南に位置する。楕円形の平面形を呈する落ち込みである。上面で長径160cm、短径70cm、深さ70cmを測る。縄文土器鉢が出土している。

SX606 (Fig.158, PL.58,60-7,61-1)

調査区東半部北辺に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈する落ち込みである。上面で長径158cm、短径118cm、深さ35cm、壙底で長径126cm、短径83cmを測る。縄文土器鉢、石器が集中して出土している。

SX608 (Fig.158, PL.58,60-7,61-1)

調査区西半部中央に位置する。不整形な楕円形の平面形を呈する落ち込みである。上面で長径398cm、短径285cm、深さ20cm、壙底で長径345cm、短径190cmを測る。縄文土器鉢、石器が集中して出土している。SX605を含めた遺物の出土状況は、長辺600cm×短辺150cmを測る長方形の範囲に限定され、さらにいくつかの群にまとまる。遺物の出土状況から、SX605とは一体の遺構を構成していた可能性が高い。

SX613 (Fig.158, PL.58,60-7,61-1)

調査区中央北辺に位置する落ち込みである。調査区外に広がるために全形は不明であるが、長径7m程を呈する落ち込みで、現状では深さは40cmを測る。土師器坏、須恵器甕が出土している。

階段状通路遺構 (SW)

平面形が円形もしくは楕円形を呈する凹みが連続するものである。調査者は階段状もしくは道路状遺構としている。しかし、図面上で判断する限りでは、遺構の存在している地点では階段を必要とする地面の傾斜は認められない。ちなみに、7～13mの長さに対して高さ0.1mの勾配である。遺構の形状などから柵列などが想定される。

SW614 (Fig.158, PL.58,61-1・3)

調査区の西北隅部、SW615の北に位置する。平面形が円形および楕円形を呈し、径60～220cm、深さ8～14cmを測る小穴が直線的に連続してある。土師器坏・甕が出土している。

SW615 (Fig.158, PL.58,61-1・3)

調査区の西北隅部、SW616の北位置する。平面形が円形および楕円形を呈し、径30～130cm、深さ3～5cmを測る小穴が直線的に連続してある。

SW616 (Fig.158, PL.58,61-1・3)

調査区の西北隅部、SW618の北に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径120～170cm、短径30～50cm、深さ5～10cmを測る小穴が直線的に連続してある。

SW618 (Fig.158, PL.58,61-1・4)

調査区の西辺部中央に位置する。径30～50cm、深さ5～10cmを測る小穴が「く」の字状に連続してある。土師器高坏、須恵器片が出土している。

SW619 (Fig.158, PL.58,61-1・2)

調査区の西半部南辺に位置する。径28～50cm、深さ6～13cmを測る小穴が直線的に連続してある。格子叩き目の残る平瓦、土師器皿、坏が出土している。

SW620 (Fig.158, PL.58,61-1・5)

調査区の西半部中央に位置する。径20～50cm、深さ5～20cmを測る小穴が直線的に連続してある。

SW623 (Fig.158, PL.58,61-1)

調査区中央部、SX608の東に位置する。径20～80cm、深さ5～10cmを測る小穴が直線的に連続してある。

柱　穴 (SP)

調査区西半部において、円形の平面形を呈し、径20～80cm、深さ10～60cmを測る小穴を検出した。これらの大半は、柱穴と思われるが建物としてまとまらなかった。掘形内からは、縄文土器鉢、土師器皿・坏・鍋、平瓦が出土している。

3) 遺　物

出土した遺物は、旧石器時代、縄文時代、平安時代～中世に比定される石器類、縄文土器、土師器、陶磁器である。

旧石器時代と縄文時代の遺物、および古墳時代の石製品の一部については他の調査区出土品とまとめて本章-1-(8)・(9)で報告する。

（3） 小作調査区

1） 位置と概要

調査区は、寺熊調査区の西端から東へ550ｍを測る谷の奥に位置する。調査区は谷を挟む丘陵が迫り、谷幅が70ｍと狭くなった南側丘陵の裾部に立地する。現況は水田で、標高26.5～27.5ｍを測る。

検出した遺構は、中世の建物と中世末から近世の水田である。

2） 遺　構

遺構面は３面が存在し、上・中層面には水田がある。地表下１ｍに位置する最下層面には掘立柱建物・溝などがある。水田は弱い段状を呈する棚田で、建物などの集落が廃棄された後、谷の手前から奥へ向かって築造されている。

溝・溝状遺構（ＳＤ）

SD509～515（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区北東部に位置する。平面形が楕円形を呈する溝状遺構が、平行に等間隔で連続して並ぶ。全長4.2～5.7ｍ、幅0.4～0.7ｍ、深さ4～6cmを測る。近世以降の耕作時の痕跡であろう。

SD516（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区中央部に位置する東西溝である。幅45～65cm、深さ20～30cmを測り、直線的に西流する。掘立柱建物SB520の雨落ち溝であるSD521より古い。

SD517～519（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区西北部に位置し、SD509などと同方向を呈する溝で、幅30～80cm、深さ10～20cmを測る。

SD521（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区西北隅に位置する掘立柱建物SB520の雨落ち溝である。幅25～30cm、深さ10cmを測り、建物の北面と東面の雨落ち溝である。

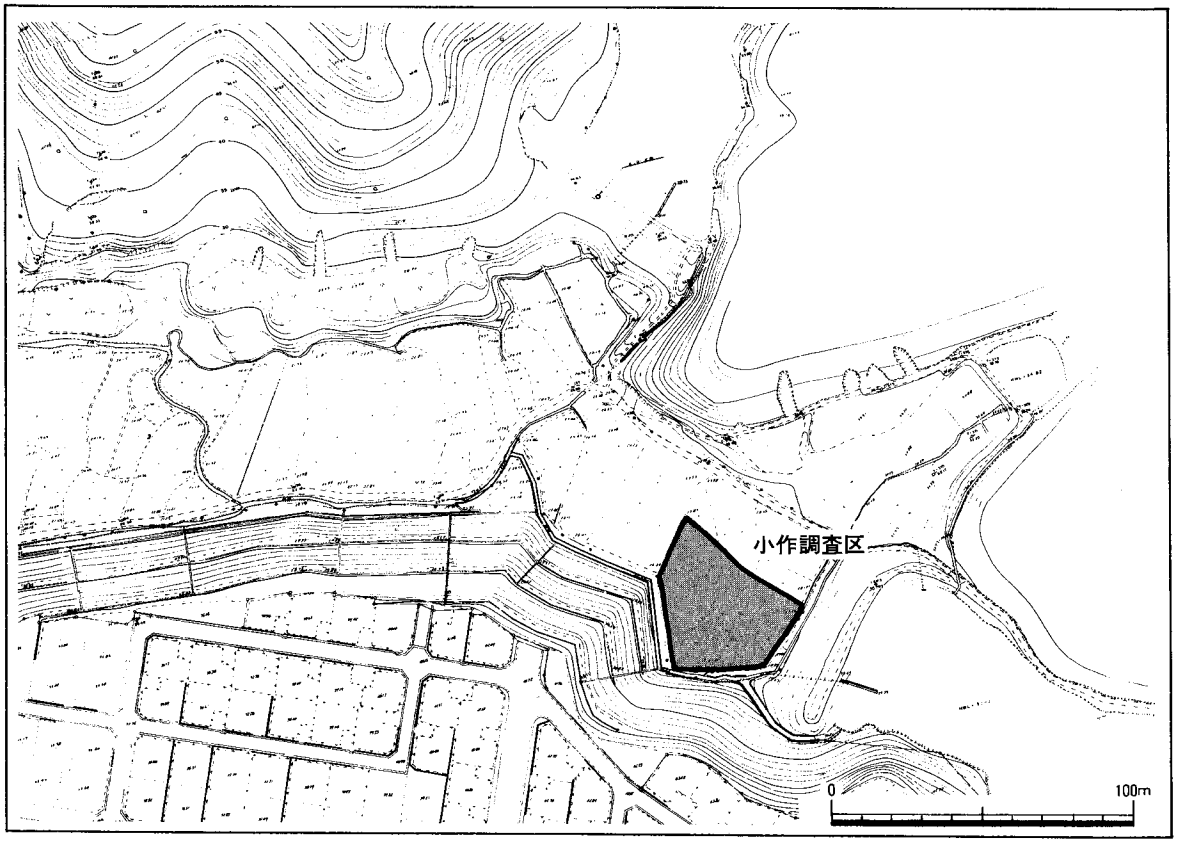


Fig.161　小作調査区位置図(1/2,500)

建　物（SB）

SB520（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区西北隅に位置する南北棟の掘立柱建物で、建物西辺部分は調査区外にある。桁行３間(5.15ｍ)、梁行２間(4.80ｍ)の母屋の東面には廂がつく。棟通りにも柱があり、総柱建物である。柱間寸法は不揃いで、桁行1.35～2.05ｍ、梁行2.25～2.52ｍ、廂の出は1.15ｍ。桁側柱の柱間が極端に異なる。柱掘形は、径30～40cm・深さ30cmを測る円形である。SD516より新しく、水田SS503より古い。

水　田（SS）

SS500（Fig.162，PL.62,63-1）

調査区東辺部、水田で最も東に位置する上層水田である。水田全面において水田の長辺方向に並行するように歩いた（作業）足跡が残る。

SS501～503（Fig.162，PL.62,63-1）

SS500より古い、下層水田で、南北に細長い。SS503は細い畦畔で分筆している。SS502とSS503と区分する畦畔には水口が残る。水田全面において水田の長辺方向に並行するように歩いた（作業）足跡が残る。

３）遺　物

遺物は、土師器皿・坏・鍋・鉢、須恵器坏、瓦器椀、染付碗、白磁碗・皿、青磁碗・蓋・水注、黒曜石片が出土している。

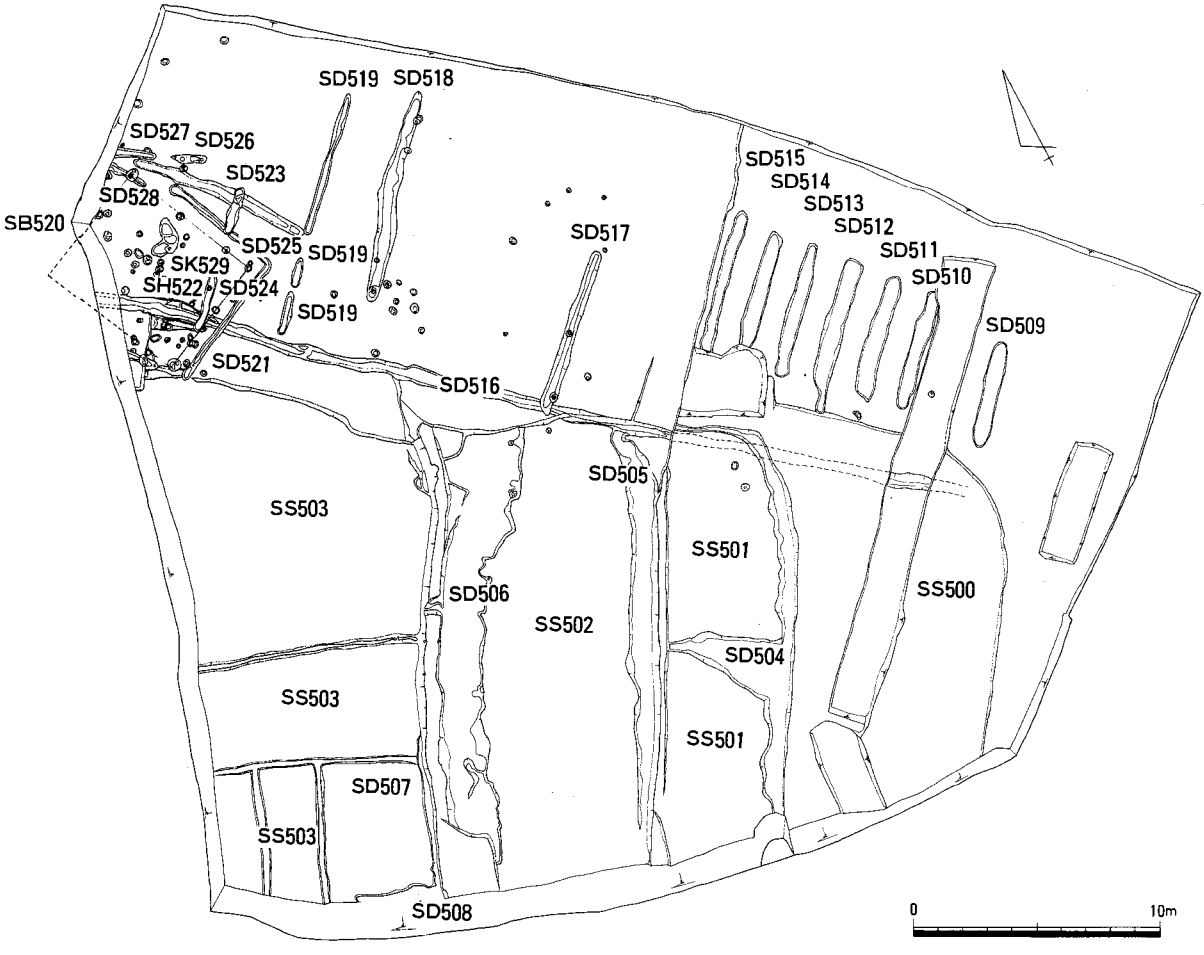


Fig.162　小作調査区遺構配置図(1/300)

（4）大日調査区

1） 位置と概要

調査区は、寺熊調査区の西端から東方の谷奥へ470ｍほど入り、谷が二つに分岐する地点にある。谷北側丘陵の裾部に立地する。現況は水田で、標高21～23ｍを測る。

検出した遺構は、土壙、溝、溜や不整形な落ち込みで、出土した遺物などから中世を中心とするものである。

2） 遺 構

溝（ＳＤ）

SD01（Fig.164，PL.64-1･2）

調査区中央に位置する東西溝で、蛇行しながら西流する。幅45～75cm、深さ15～25cmを測る。

SD04（Fig.164，PL.64-1）

調査区南半部に位置する東西溝で、蛇行しながら西流する。幅50～80cm、深さ10～20cmを測る。

SD11（Fig.164，PL.64-1･3）

調査区北半部に位置する東西溝で西流する。幅35～75cm、深さ10～15cmを測る。

土 壙 （ＳＫ）

SK07（Fig.164，PL.64-1･4）

調査区北東隅に位置する平面形が楕円形の土壙である。長径70cm、短径55cm、深さ33cmを測る。

SK08（Fig.164，PL.64-1･4）

土壙SK07の南に位置する平面形が楕円形の土壙である。長径170cm、短径75cm、深さ20cmを測る。

SK17～19（Fig.164，PL.64-1,65-1～3）

調査区南西部にある平面形が楕円形の土壙で、長径80～148cm、短径75～105cm、深さ20cmを測る。

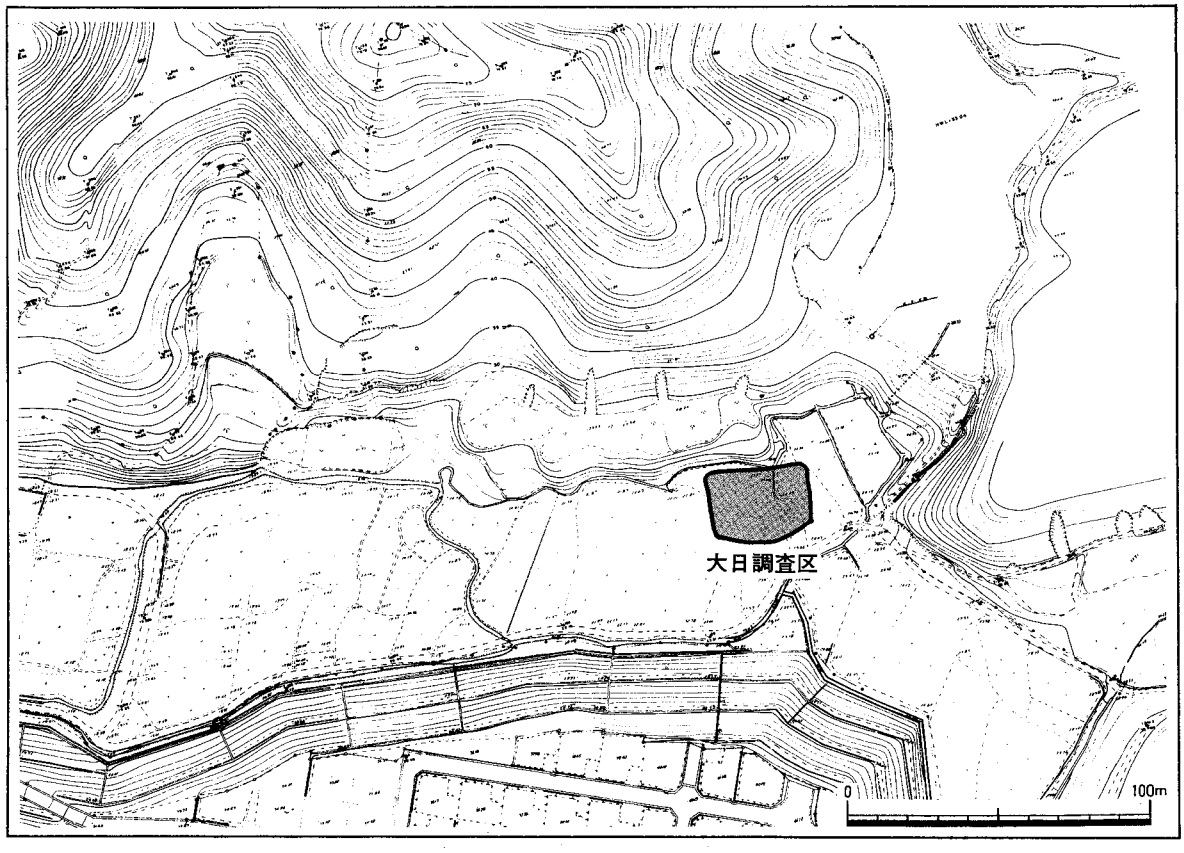


Fig.163 大日調査区位置図(1/2,500)

SK20（Fig.164，PL.64-1,65-5）

調査区西半部中央にある平面形が楕円形の土壙である。長径148cm、短径57cm、深さ30cmを測る。

SK24（Fig.164，PL.64-1,65-4）

調査区南西隅に位置する平面形が楕円形の土壙である。長径135cm、短径96cm、深さ38cmを測る。

Fig.165　土壙SK20出土遺物実測図(1/3)

溜・集石・落ち込み（ＳＸ）

SX02（Fig.164，PL.64-1,66-1）

人頭大石や拳大の礫が1.5ｍ×1.0ｍを測る落ち込みに集中する。礎石と根固石の可能性が高い。

SX12～15（Fig.164，PL.64-1,66-2～5）

調査区西辺部に位置する浅い落ち込み。

SX21（Fig.164，PL.64-1）

調査区南西部に位置し、拳大の礫が2.0ｍ×0.5ｍを測る落ち込みに集中する。

３）　遺　物

遺物は、石鏃、土師器皿・坏・鍋、瓦器椀、須恵器坏・蓋・甕、青磁碗・皿・壺、白磁碗、滑石製石鍋、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦が出土している。遺物は縄文時代早期や14～15世紀の物もあるが、大半は10～12世紀が中心である。

出土軒丸瓦は、10世紀前後の単弁10弁蓮華文軒丸瓦で、観世音寺や鴻臚館から同笵瓦が出土している。さらに同時期の丸・平瓦も多く出土していることや礎石据付穴と思われる遺構の存在からも、調査区もしくは近辺において礎石建物が存在していた可能性が極めて高い。

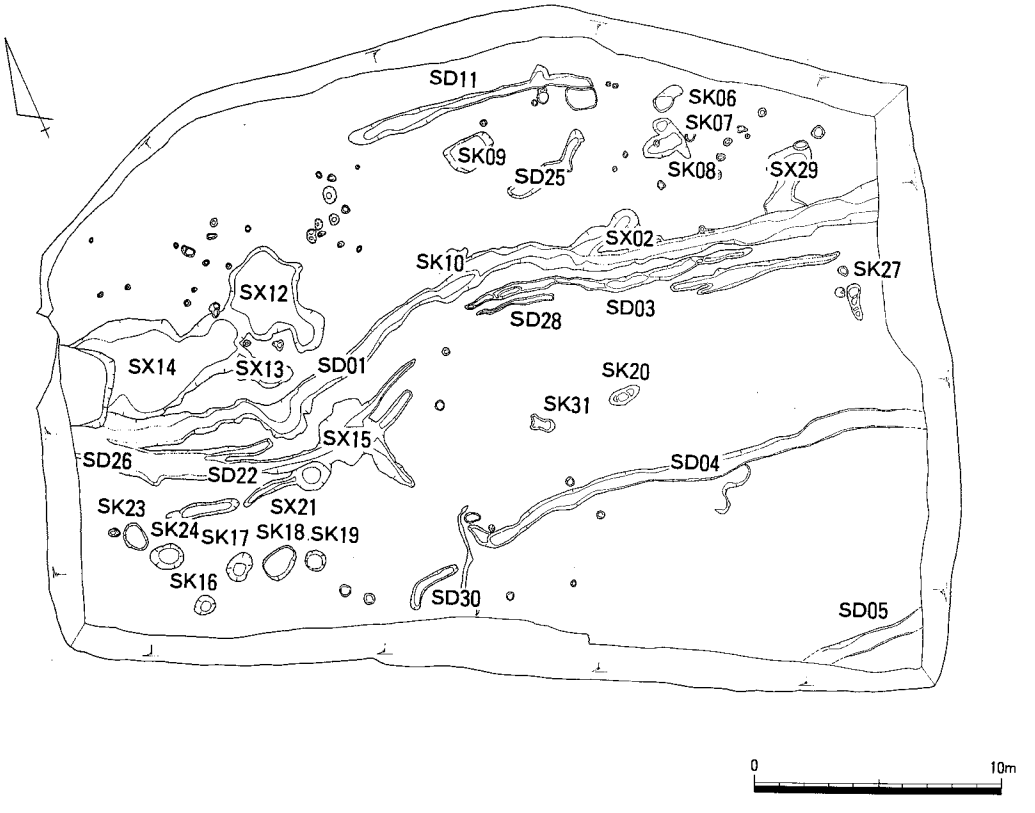


Fig.164　大日調査区遺構配置図(1/300)

（5） 大日西調査区

1） 位置と概要

調査区は、寺熊調査区の西端から東方の谷奥へ470ｍほど入り、谷に面する北側丘陵部の緩斜面地に位置する。本来は緩やかに南に下る斜面を３段の階段状に削る段造成している。そのため、段と段との間は平坦面をなす。現況は荒地で、標高22～31ｍを測る。

検出した遺構は溝、土壙、柱穴などで中世を中心とするものである。出土遺物には陶磁器や瓦があり、遺構的には判明しなかったが、建物などが存在した可能性を示す。

2） 遺　構

溝（ＳＤ）

SD855（Fig.167，PL.67-1）

調査区下段中央に位置する東西小溝である。幅20～60cm、深さ5～10を測る。

SD861（Fig.167，PL.67-1）

調査区上段北辺に位置する東西溝である。幅40～60cm、深さ5～12cmを測る。

土　壙　（ＳＫ）

SK851（Fig.167，PL.67-1）

調査区中段中央の斜面縁に位置する。平面形が方形を呈し、方2.5ｍ、深さ15cmを測る。ここでは土壙としたが、縦穴住居である可能性が高い。

SK853（Fig.167，PL.67-1）

調査区中段中央に位置し、楕円形の平面形を呈する土壙である。上面で長径75cm、短径40cm、深さ15cmを測る。

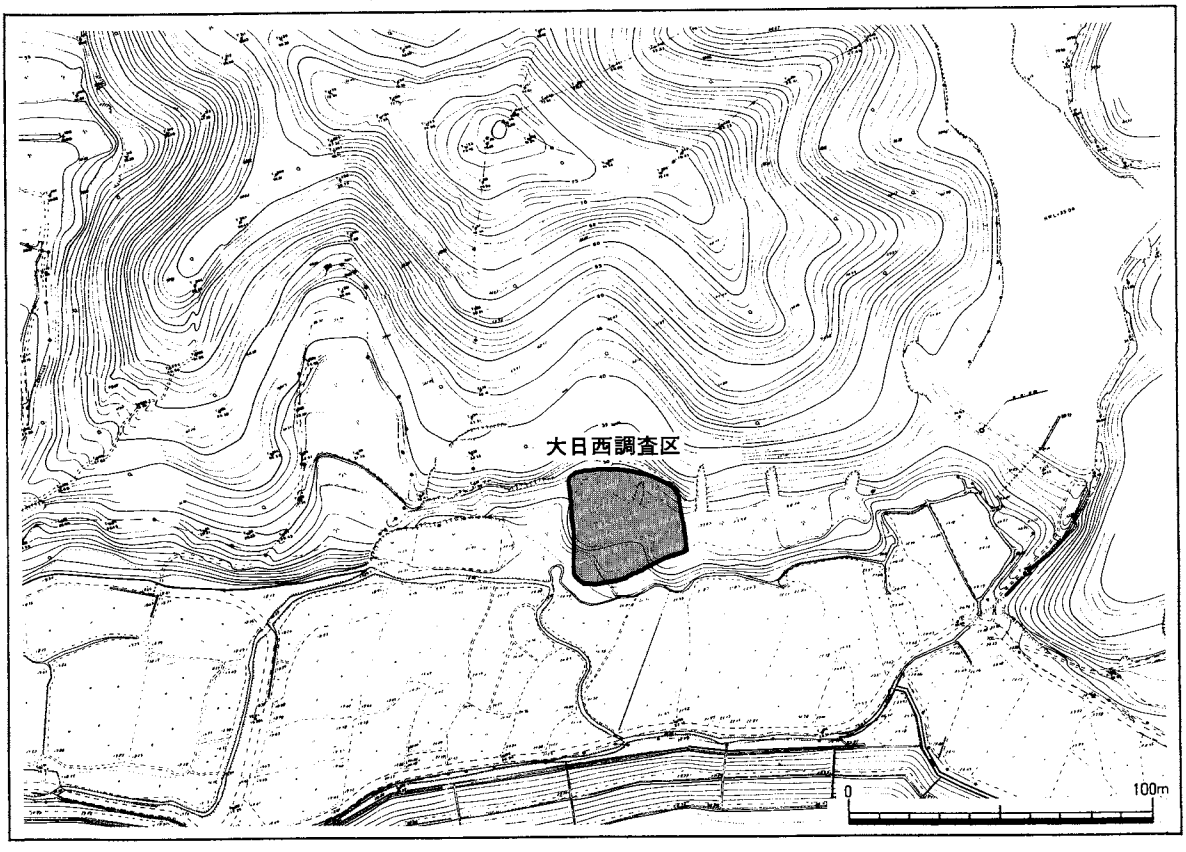


Fig.166　大日西調査区位置図(1/2,500)

SK854 (Fig.167, PL.67-1)

調査区中段東端部の斜面縁に位置し、円形の平面形を呈する土壙であるが、南半部は削平により残っていない。上面で径160cmが復原され、深さ85cmを測る。壙内からは須恵器甕・鉢、白磁碗・皿、青磁碗・皿、滑石製石鍋、平瓦が出土している。

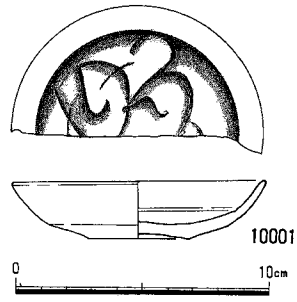


Fig.168　柱穴出土遺物実測図(1/3)

SK856 (Fig.167, PL.67-1)

調査区下段西半部中央に位置し、楕円形を呈する溝状の土壙である。長径150cm、幅30cm、深さ5cmを測る。壙内からは土師器坏・皿が出土している。

SK858 (Fig.167, PL.67-1)

調査区下段西半部中央に位置し、不整形な楕円形の平面形を呈する土壙である。上面で長径200cm、短径150cm、深さ27cmを測る。壙内からは土師器皿・坏・鍋、瓦器椀、白磁碗、青磁碗、滑石製石鍋、が出土している。

3)　遺　物

遺物は、土師器皿・坏・鍋、須恵器甕、瓦器椀・鉢、天目茶碗、白磁碗・皿、青磁碗・皿・壺・水注、滑石製石鍋、砥石、軒丸瓦、丸・平瓦が出土している。

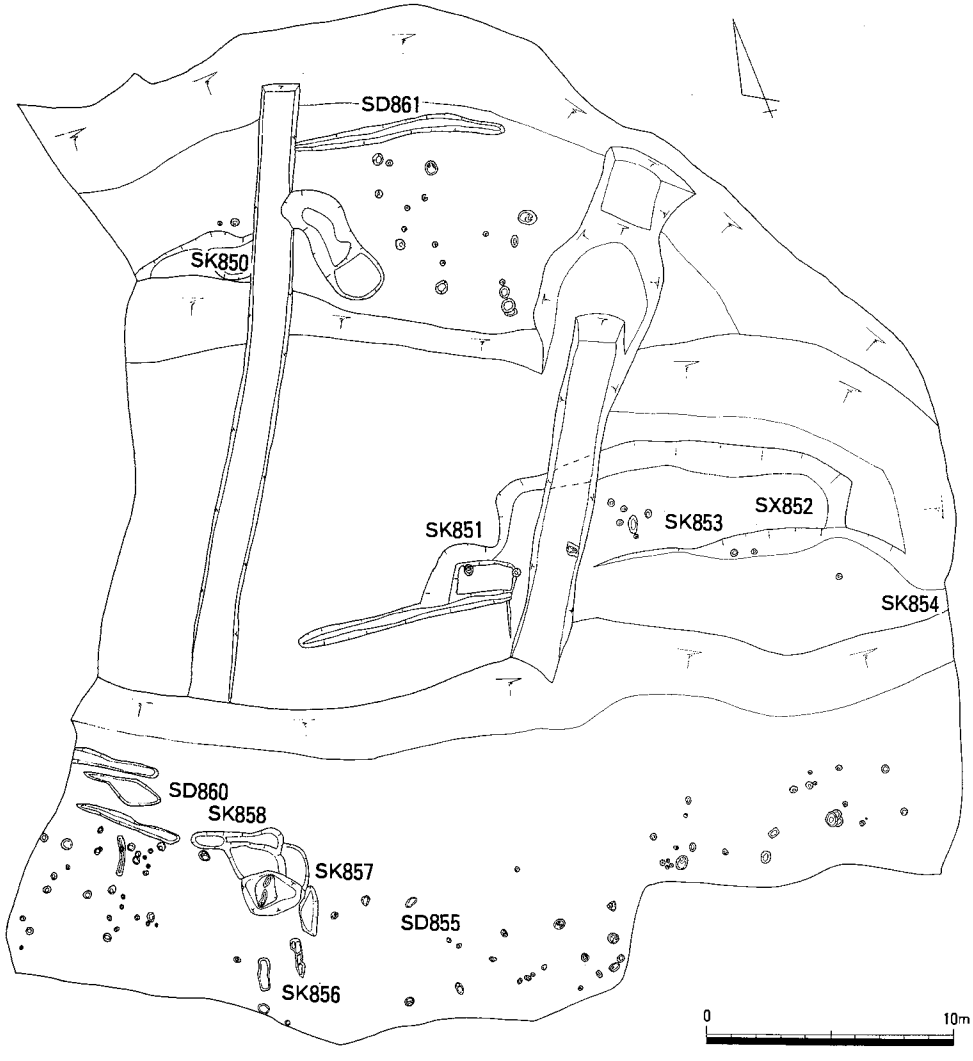


Fig.167　大日西調査区遺構配置図(1/300)

（6） 御倉谷調査区

1） 位置と概要

調査区は、谷が生水調査区東端部で分岐し、北へ入り込む狭い谷である。谷は御飯ノ山の東側山裾を形成し、行き止まる。谷の奥行は275m、最大幅は30m、谷の入口の標高は20m、奥部の標高は40mを測る。谷の南半部では、谷全体を堀としている。この堀からは奈良時代～中世の遺物が出土している。谷北半部では、谷部や斜面裾部のテラス状平坦地において中世の井戸や掘立柱建物があり、遺物も多く出土している。谷北半部、谷奥における堀の延長部については未検出である。

調査区中央部、谷に面した西斜面には平坦地があり、そこには中世の石積み墓群が築造されている。中世墓群については後の4項でまとめて報告する。

2） 遺 構

塀・柵列（SA）

SA963（Fig.170，PL.69-1･2･7）

西北部の檀上、SB964の西にある掘立柱の南北塀で、3間分を検出した。柱間は3.98～4.03m、柱掘形は径25～40cm・深さ30～40cmを測る円形である。

掘立柱建物（SB）

SB964（Fig.170，PL.69-1･2･7）

西北部の檀上、SA963の東にある東西棟の掘立柱建物である。桁行2間（3.78～4.05m）、梁行2間（3.62～3.80m）で、柱間寸法は桁行1.92～2.15m。柱の掘形は径30cm・深さ20～40cmを測る。

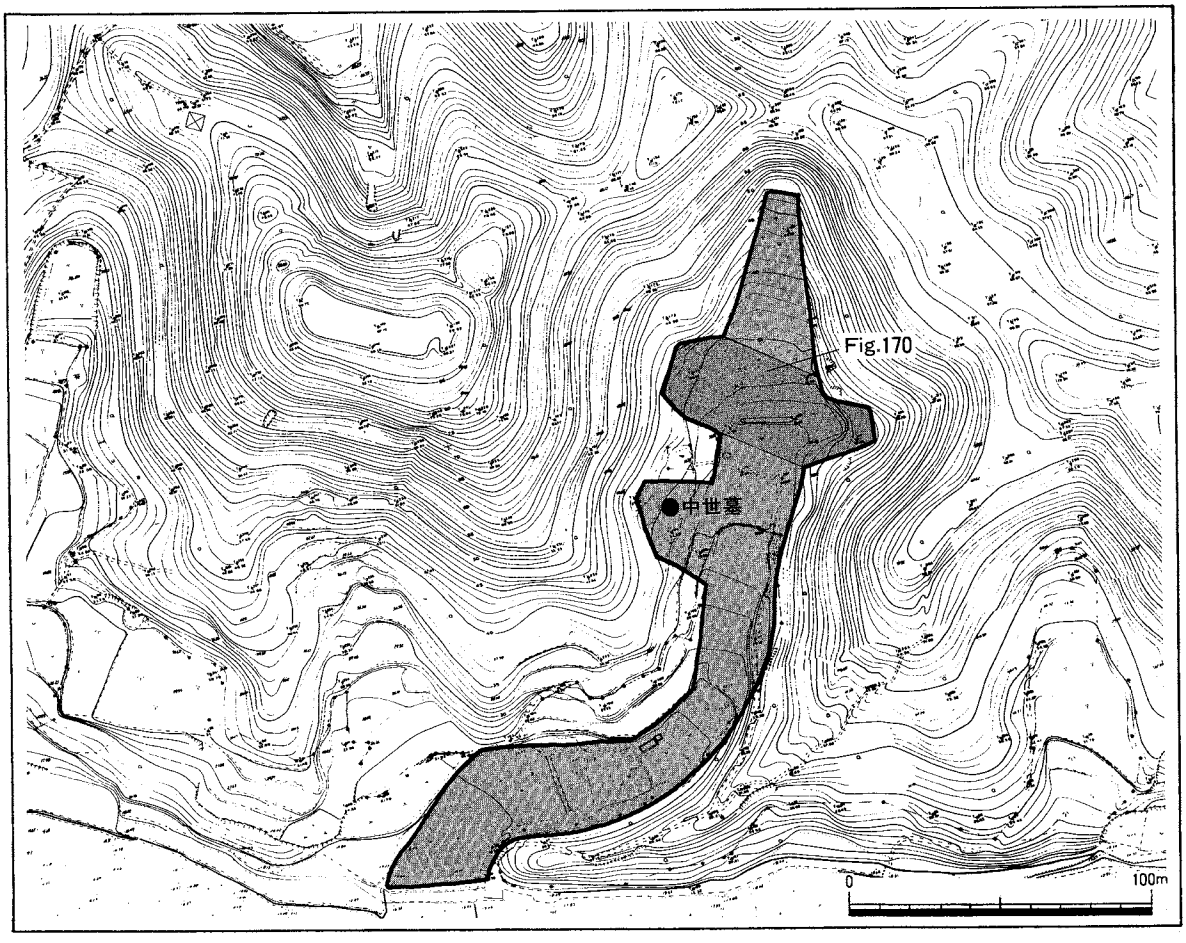


Fig.169 御倉谷調査区位置図(1/2,500)

Fig.170　御倉谷調査区遺構配置図(1/250)

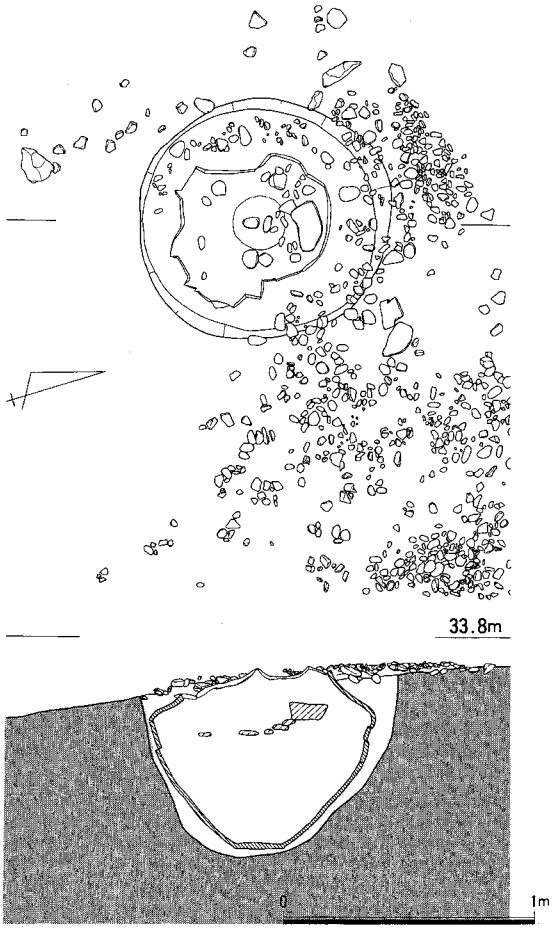


Fig.171　埋甕SK956実測図(1/30)

SB965（Fig.170，PL.69-1～4）

中央部にある総柱の掘立柱建物で、棟筋を谷筋と同じくする。桁行３間(5.72ｍ)、梁行２間(3.55ｍ)で、柱間寸法は桁行1.85ｍ、梁行1.75～2.03ｍである。柱の掘形は径40cm・深さ30cmを測る円形。

SB966（Fig.170，PL.69-1～4）

SB965の東に位置し、棟筋を谷筋と同じくする。桁行２間(3.81ｍ)、梁行１間(1.95ｍ)で、柱間寸法は桁行1.70～2.10ｍ、梁行1.95ｍである。柱の掘形は径30～40cm・深さ20cmを測る円形。

SB967（Fig.170，PL.69-1～4･6）

南東部の壇上、SB966の東に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行３間(4.75ｍ)、梁行２間(2.98ｍ)で、柱間寸法は桁行1.22～1.85ｍ、梁行1.45ｍである。柱の掘形は径30cm・深さ20cmを測る。

堀（ＳＤ）

SD257（PL.68-1～3）

生水調査区北東部から北へ分岐する谷に設けられている。谷全体を掘り下げて堀としている。

井　戸（ＳＥ）

SE957（Fig.170，PL.70-1）

西北部、SB964の南に位置する。井筒は残存していない。不整形な円形の平面形を呈し、上部径1.9ｍ、底部径0.8ｍ、深さ2.4ｍを測る。

SE958（Fig.170，PL.70-2）

調査区谷部中央南部、SK960の北に位置する方形縦板組の井戸である。掘形は径1.6ｍを測る円形の平面形を呈し、井筒径は0.8ｍである。

SE959（Fig.170，PL.70-3）

谷の奥部、SB965の北に位置する。掘形は径1.5ｍ、深さ1.6ｍを測る円形の平面形を呈する。底に径３cmの竹を一直線状に立てている。

土壙・埋甕　（ＳＫ）

SK956（Fig.170,171，PL.71-1～8）

調査区の西北隅、SA963の西に位置する。円形の平面形を呈し、径100cm・深さ75cmを測る半球状の掘形に常滑焼の甕を設置している。甕の上面には小丸石を２ｍ四方前後の範囲で敷きつめている。

SK960（Fig.170，PL.70-4）

調査区谷部中央南部、SE958の南に位置する。楕円形の平面形を呈し、長径230cm、短径195cm、深さ90cmを測り、壁は直に立ち上がる。

SK961（Fig.170，PL.70-5）

調査区谷部中央南部、SB965の南に位置する。楕円形の平面形を呈し、長径185cm、短径165cm、深さ15cmを測る。壙内には炭、焼土を多く含み、滑石製石鍋が出土している。

窯（SX）

SX962（PL.70-6）

中世墓の東、谷の法面に位置する。窖窯の焼成部である。床面の一部だけ残存する。窯床の状況は、窯から南へ100m離れる寺熊窯跡1号窯、西へ130m離れる里城調査区の窯SX918と同じ。

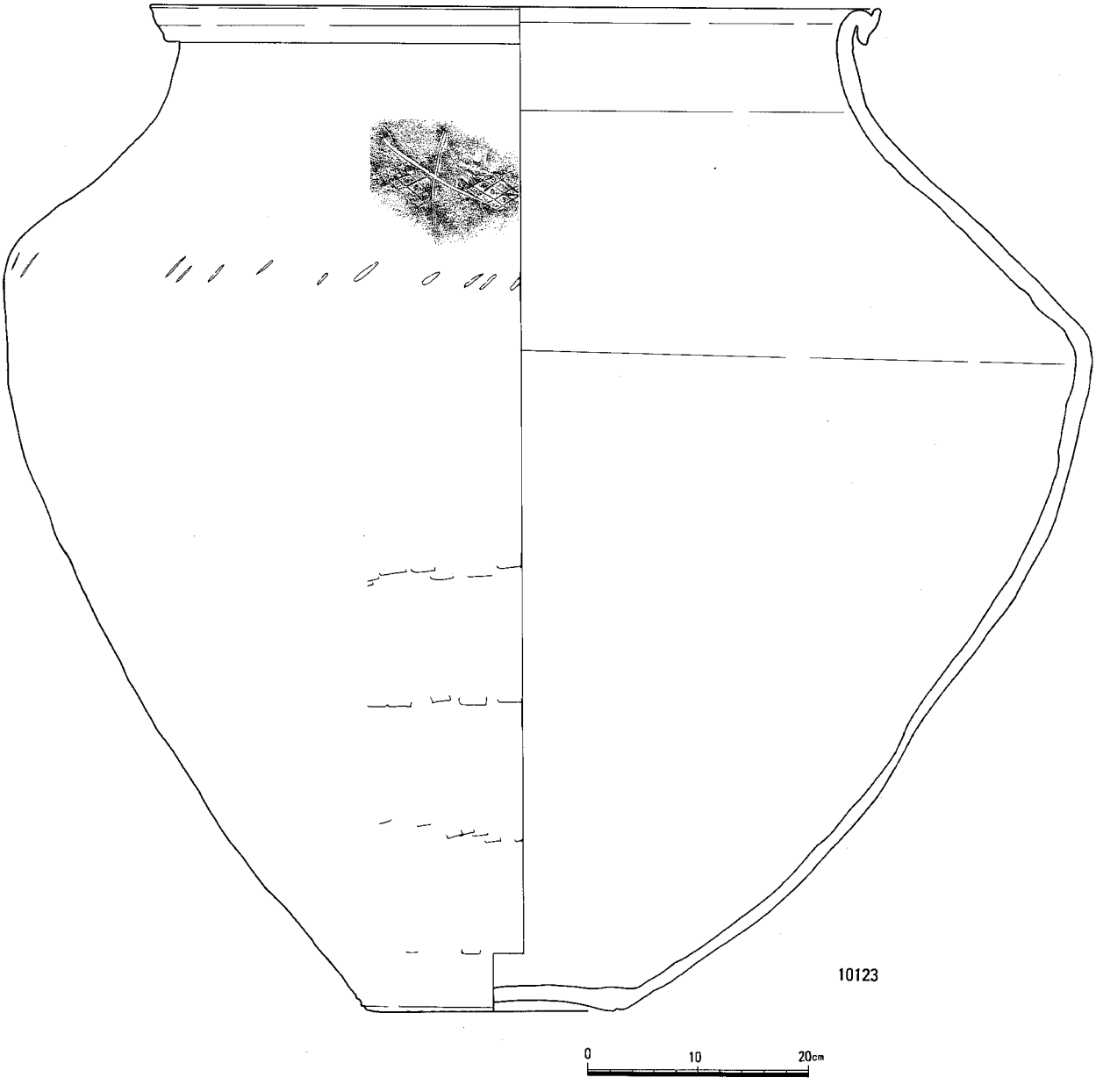


Fig.172　SK956甕実測図(1/6)

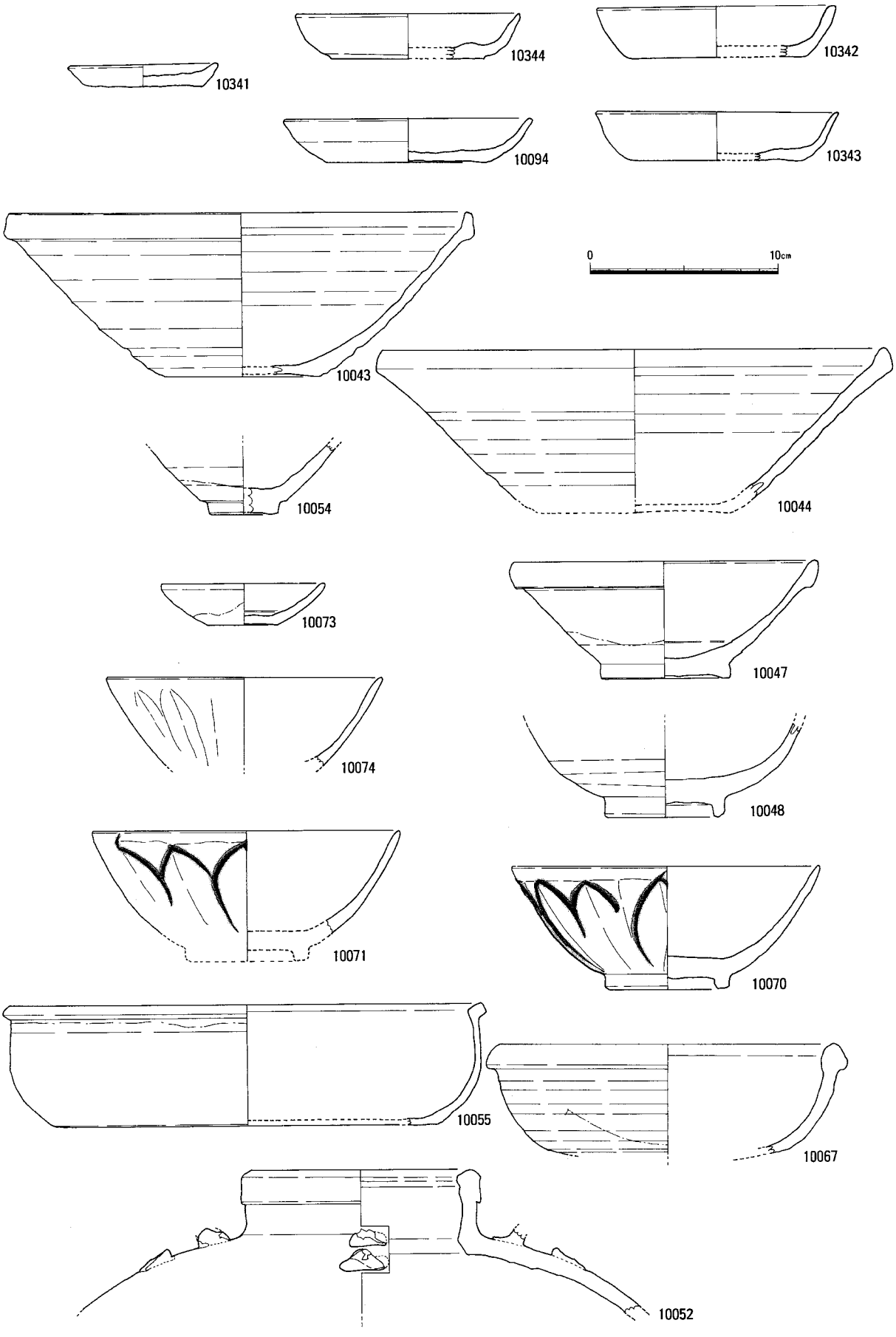


Fig.173　御倉谷調査区出土遺物実測図(1/3)

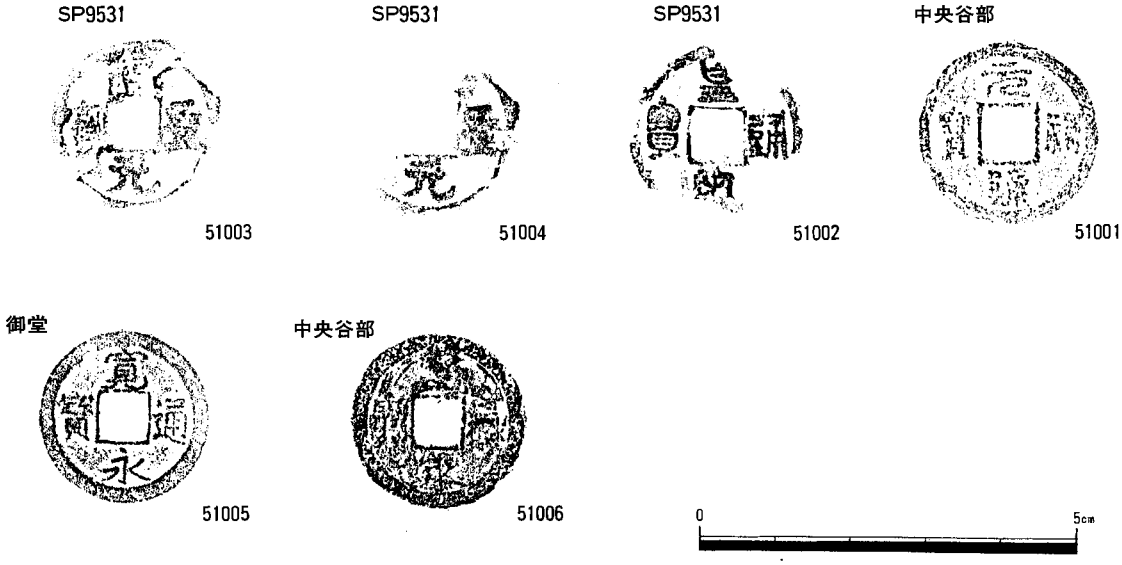


Fig.174　御倉谷調査区出土銅銭拓影(1/1)

3）遺　物

遺物は、奈良時代～近世の須恵器蓋・壺、土師器皿・坏・椀・鍋、天目茶碗、瓦器椀・火舎、陶器鉢・盤、常滑焼甕、白磁碗・皿、青磁碗・皿、染付碗、唐津焼椀、滑石製石鍋、鉄滓が出土している。

SD257（PL.151）

10095は底部糸切りの土師器坏。口径14.0cm、器高3.0cm。**10068**は須恵器の蓋。胎土は石英、長石を含み、赤褐色を呈する。外面回転ヘラ削り、内面ナデ調整。**10046**は白磁碗Ⅴ－２類。灰白色の釉が高台脇までかかる。口径15.3cm、器高7.0cm、高台径6.3cm。

遺構検出時出土遺物（Fig.171，PL.151）

10341は土師器皿。底部は糸切り。口径8.1cm、器高1.2cm。**10094**・**10342**～**10344**は底部糸切りの土師器坏。口径12.0～13.3cm、器高2.4～2.8cm。平均口径12.8cm、器高2.6cm。**10043**・**10044**は東播系須恵器の捏鉢。**10054**は天目椀である。**10073**は白磁平底皿Ⅱ－１類。灰白色釉が外面体部上半と内面にかかる。**10047**は白磁碗Ⅳ－２類。灰白色の不透明釉が外面体部上半までかかるが、かけ方が雑で、見込みに釉がかかっていない部分がある。**10074**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－１類。熱を受け、表面が荒れている。**10048**は龍泉窯系青磁碗　類、上田Ｄもしくは Ｅ類である。高台外面まであまりツヤのない緑白色の不透明釉がかかる。**10070**と**10071**は龍泉窯系青磁碗Ⅱ－１類。黄色味がかった暗緑色の釉が高台外面までかかる。接合しないが、同一個体の可能性が高い。**10055**は中国陶器Ａ群Ⅱ類盤である。**10067**は陶器の鉢である。口縁を外側に折り返す。暗黄褐色の釉が外面体部上半までかかる。口縁から部分的に灰黄色の釉が垂下する。近世の国産陶器である。**10052**は中国陶器Ａ群の茶釉四耳壺である。**10072**は肥前染付の皿。内面は蛇の目釉剝ぎ、畳付は露胎。見込みと内面体部に「＃」を描く。

SK956（Fig.172，PL151）

10123は常滑焼の甕である。肩部に押印文が巡る。また「×」のヘラ記号が認められる。6b型式期の製品。

4） 中 世 墓

A． 位置と概要

御飯ノ山の東側山裾、御倉谷に面した谷斜面に位置する。墓地は斜面途中の平坦部を利用し、さらに斜面を雛檀状に削り出している。さらに、排土を迫り出させることにより、削った平坦面積以上の墓地を造成している。谷に面する側、すなわち東縁は後世の削平を受けているために、墓地の本来の範囲は不明である。墓地は上下二段の雛檀状である。下段の墓地は、現況では東西30ｍ・南北10ｍを測るが、削平や未調査区を考慮すると本来は1.5倍ほどの規模が復原される。上段の墓地は下段の墓地の中央部奥に位置し、東西10ｍ・南北4.5ｍを測る。段差は0.8ｍである。確認できた墓数は49基であるが、本来の総数は60基を超えていたものと思われる。

中世墓は範囲確認を主眼とした調査のため、B群の北半部については遺構清掃程度にとどめた。このために、下層の墓の規模などは不明である。

B． 遺 構

火葬墓群は設置位置や形状から２群３形態に別れる49基で、A・B・Cの三群に大別した。

A 群 (Fig.175,176, PL.72-1･2,73-1～7)

奥の段に位置する。火葬骨を埋葬した上部形状には、①大振りの板石を蓋状に置く。②石で区画する。③河原石を集積させる。④何も置かないの４形態がある。骨の埋葬方法には、①小穴に火葬骨の一部を直接入れる。②蔵骨器を用いる。の２形態がある。ただし、後世の削平により標石や小石が無くなった場合もあるようである。

Fig.175 中世墓遺構配置図(1/250)

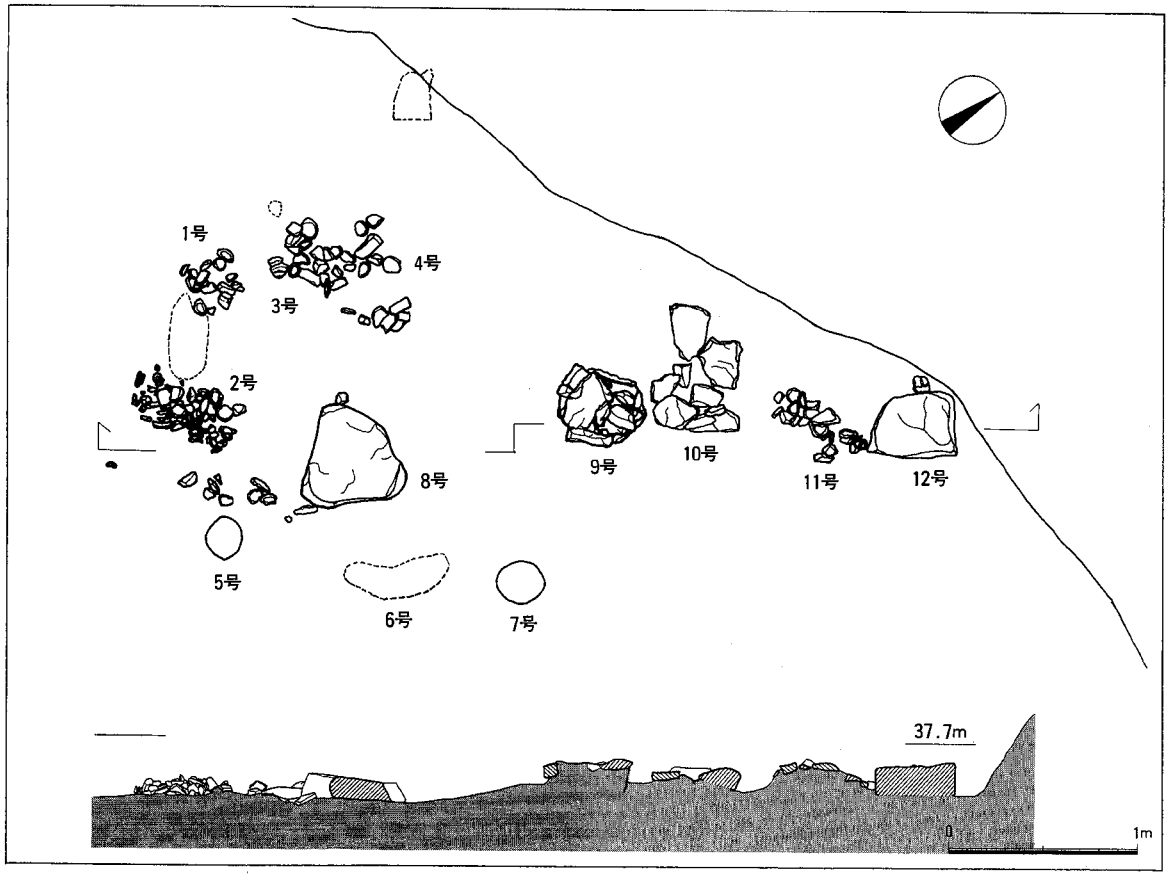


Fig.176　中世墓A群遺構配置図(1/40)

1号墓：手の平程度の河原石だけが集まっている。

2号墓：手の平程度の河原石だけが密集している。

3号墓：褐釉陶器壺を蔵骨器としている。壺は横たわった状態で出土している。

4号墓：手の平程度の河原石だけが集まっている。

5号墓：径20cmを測る円形の平面形の穴に骨を埋葬する。骨の大きさは数mm～1cmまでの細片で、量は一握り程度である。

6号墓：長径60cm、短径20cmを測る楕円形の平面形の穴に骨片を埋葬する。骨の大きさは数mm～1cmまでの細片で、量は一握り程度である。

7号墓：長径30cm、短径20cmを測る楕円形の平面形の穴に骨を埋葬する。骨の大きさは数mm～1cmまでの細片で、量は一握り程度である。

8号墓：55cm×55cmの隅丸三角形の板石広口面を上にする。厚さ15cmを測る。石は墓の位置する山の岩ではない。

9号墓：45cm×50cmを測る方形に板石を立てて縁を形成し区画する。内側には地場の山石で板状の物の広口面を上にして置く。

10号墓：45cm×60cmを測る長方形状に広口面を上にした数個の板状の山石を置く。石は墓の位置する山の形成岩である。

11号墓：小さめの河原石を平らに敷いている。

12号墓：35cm×45cmの隅丸長方形の板石の広口面を上にする。厚さ18cmを測る。石は墓の位置する山の岩ではない。

B　群　(Fig.175,177,178, PL.72-1,74～77)

南半部に位置する墓は大半が原形を留めておらず、墓を区画する縁石の一部が残る。中央部は良好な状態で残っており、当時の埋葬状況をよく示している。36基の墓を確認したが、築造された墓の数は50基を超えるものと思われる。墓は一基別に人頭大の石で長方形もしくは方形に並べて縁取って区画する。次に内側中央に一握りの火葬骨片を埋めた上に埋葬者の墓標を立てる。縁石と墓標との間は、下部には山石を敷詰めたり、土砂だけを入れる。上部には扁平な川原石を敷き詰めて化粧敷をしている。墓は正面の縁が若干の凹凸があるものの全体的には直線を示して列をなす。隣の墓と縁石を共有する墓もある。山裾の列の東側には幅70cmの墓道があり、墓道を挟んで別の墓列が築造されている。

1号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅92cm以上、奥行は90cm以上。隣墓とを区切る側縁石は共有する。

2号墓：墓内の敷石の一部が残る。

3号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅90cm以上、奥行は50cm以上。

4号墓：墓内の敷石の一部が残る。

5～7号墓：背面の縁石の一部だけが残る。

8号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。

9号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅120cm以上、奥行きは70cm以上。敷石は扁平な川原石だけである。

10号墓：四面の縁石と墓内の敷石の一部が残る。幅140cm、奥行は118cm。縁石と敷石は山石を使用。

11号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅65cm以上、奥行は62cm以上。

12号墓：背面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。骨は背面縁石から100cm手前で確認。

13号墓：背面と側面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅98cm以上、奥行は70cm以上。側面の縁石は板状の山石を立てて区画している。

14号墓：背面と側面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅120cm、奥行は60cm以上。側面の縁石は板状の山石を立てて区画し、隣墓と共有している。

15号墓：背面と側面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅110cm、奥行は85cm以上。側面の縁石は板状の山石を立てて区画し、隣墓と共有している。骨は右半部中央で確認。

16号墓：背面と側面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅98cm、奥行は80cm以上。側面の縁石は板状の山石を立てて区画し、隣墓と共有している。骨は中央部で確認。

17号墓：18号墓の左側縁の一部を壊して築造。細骨片を埋葬した土壙墓。上部構造は不明。

18号墓：幅92cm、奥行98cmを縁石で区画する。中央には幅34cm・厚さ5cmを測る極めて扁平な川原石の墓標が立つ。高さ48cm。

19号墓：正面の縁石と墓内の敷石の一部だけが残る。幅90cm、奥行は80cm以上。

20号墓：21号墓の背面縁石に重なる。幅20cm・厚さ18cm・高さ28cmを測る山石を墓標として、火葬骨を埋納した土壙の上に立てる。

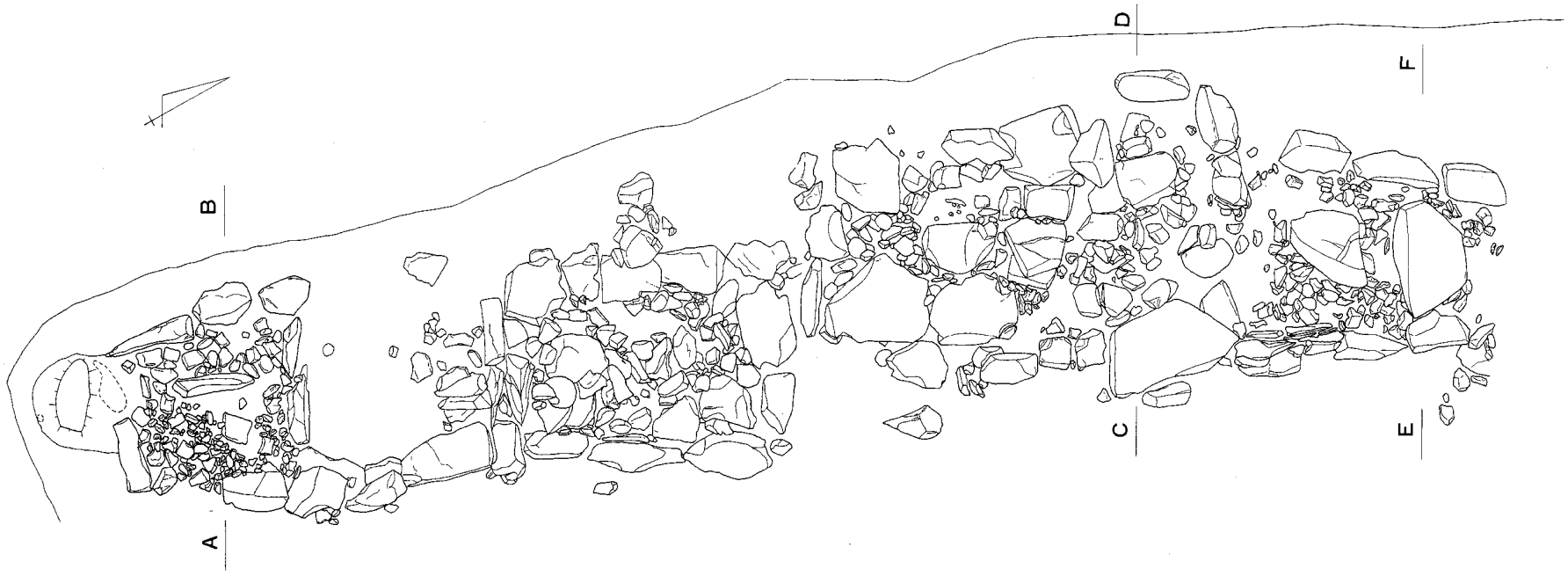
21号墓：山石を幅132cm、奥行101cmの長方形に配して縁石とする。縁石の内側は山石を詰める。

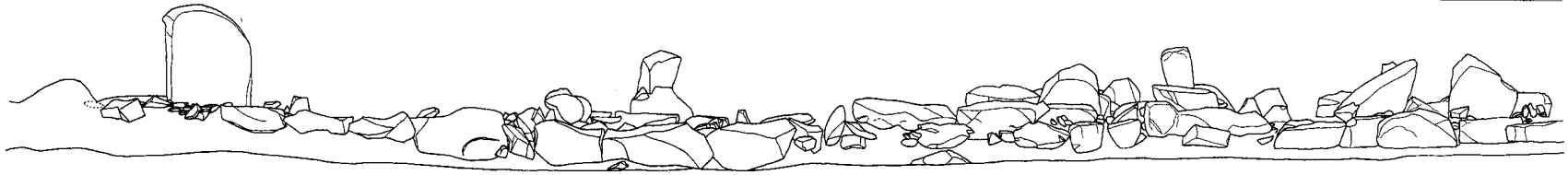
22号墓：幅123cm、奥行100cmを縁石で区画する。区画内に山石を詰める。五輪塔の空輪が残る。

23号墓：縁石で区画し、墓幅65cm、奥行65cmを測る。中央には幅14cm・厚さ8cmを測る扁平な川原石の墓標が立つ。墓標の高さは23cm。墓標の前に平坦な石を置く。

24号墓：正面の縁石と区画内の敷石の一部だけが残る。

Fig.177　中世墓B・C群遺構配置図(1/50)





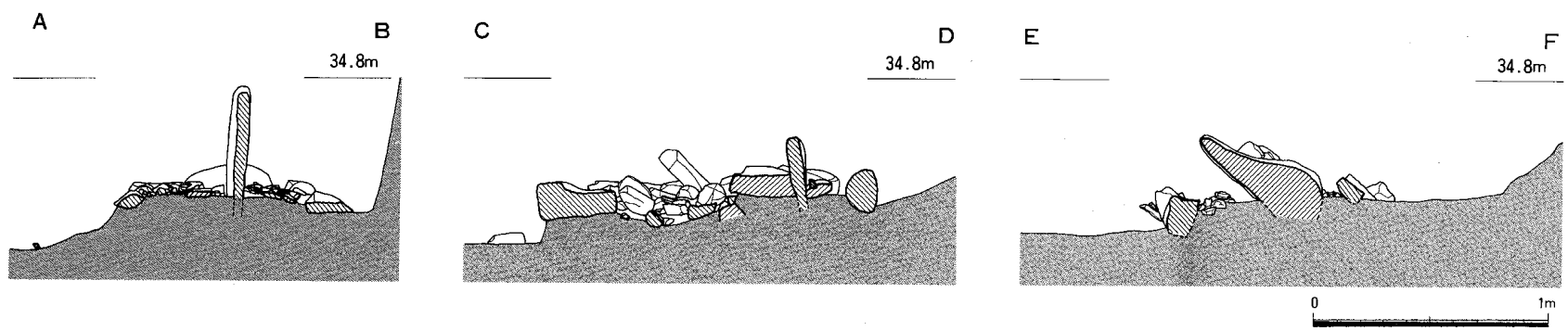


Fig.178　中世墓B群18～25実測図(1/30)

25号墓：幅132cm、奥行98cmを縁石で区画する。中央には2個の扁平な尖頭石を墓標として立てる。墓標は前に倒れている。本来の高さは47cmと58cm。

26～29号墓：縁石と墓内敷石の玉石の一部が残る。

30号墓：背面および側面の縁石と墓内の敷石の玉石だけが残る。幅147cm、奥行は65cm以上。

31～33号墓：縁石と墓内敷石の玉石の一部が残る。

34号墓：墓内の敷石の玉石だけが残る。

35号墓：背面および側面の縁石と墓内の敷石の玉石だけが残る。幅135cm、奥行は121cm以上。

C　群　(Fig.175,177, PL.72-1,74-1･2,77-7)

Bと同じステージの中央に位置する。東辺部は削平を受けており、全体の規模は不明である。縁石などの墓を区画石は認められず、玉石が方250cmの範囲に残る。玉石の間には火葬骨が散在する。

C．遺　物

A群からは、蔵骨器が出土している。**10050**は褐釉短頸壺の蔵骨器である。壺は胴部中央部を太くし、口縁はくの字に折り曲げて広い面をなす。器高19.5cm、口径6.8cm、底径5.9cm、胴部最大径12.6cmを測る。底部と胴部の下半部はヘラ削り調整している。胎土は淡青灰色、釉は暗茶色を呈する。口縁と底部には3個所の目跡が残る。

B群からは、花崗岩製の五輪塔の空輪が墓上から、土師器坏・皿が墓の周辺から出土している。坏は、底径9.4cmを測り、底部に糸切離し痕跡が残る。また、試掘調査時に甕の底部が出土している。底部径39cmを測る大型の甕で、器面は風化により剝離して不明である。出土状況から埋葬甕と考えられる。

D．まとめ

この墓群は、13世紀後半～15世紀に築造されたと考えられる火葬墓である。その根拠は乏しいが、数少ない遺物や周辺地における同型式の墓の出現期などからによる。B群墓は、細長い石で方形に縁を囲み、内側中央に一握りの火葬骨片を埋めた上に墓標を立て、縁石と墓標との間に玉石を敷きつめるのが一般的である。1区画に1人の埋葬が大半であるが、25号のように2人埋葬例もある。また、17･18号のように墓の一部を壊して新規の墓を築造している例が幾つか見られるのは、先の墓の存在が認識できないほど埋まっていたことを示すものであるならば、墓の造営期間が長期間であることを示している。また、墓の一部を壊して築造している新規の火葬墓は、いずれも共通して小規模で、墓標だけである。

これらの火葬墓に埋葬された人たちの生活空間は、墓の所在する御倉谷から出た寺熊調査区や生水調査区で見られる屋敷群に求めるべきであろう。

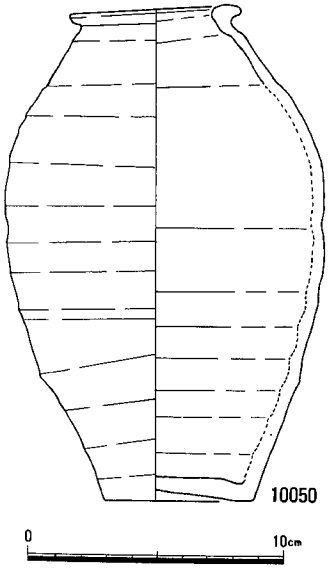


Fig.179　中世墓A群3号墓蔵骨器実測図(1/3)

（７） 里城調査区

１） 位置と概要

調査区は、御飯ノ山城の南側山裾で、山の両側から南方向へ派生する尾根によって馬蹄形に挟まれた緩斜面地である。南辺は生水調査区と、南東部は御倉谷調査区とそれぞれ接する。本来はＶ字形の谷地形が中世以降の度々の開削により最終的には棚田状の地形を呈する。調査区標高は18～30mを測る。調査区の谷部の開削は、８世紀～12世紀、12世紀～14世紀、15世紀～16世紀、17世紀～近代の各間で、大規模な造成地業が少なくともそれぞれ１回以上は行なわれている。

２） 遺　構

堀（ＳＤ）

SD258・竪堀12（Fig.181,182, PL.113-3～8）

同じ遺構であるが、調査の都合上、山斜面部を竪堀12、平坦地部をSD258と使い分けた。堀は、山城堀切３から南斜面を直下に下り、御飯ノ山から南西方向に派生する尾根先を囲むように尾根裾に掘られている。すなわち、尾根向こうの平坦地(地名:里城)にある舘と山城とを一つの堀で防御している。堀の規模は地点によって異なっている。特に後世の削平（畑地の開発）による影響は避けられない。この堀の特徴は、丘陵裾を削って斜面を急傾斜にして、Ｖ字形を呈する堀の尾根側の壁との一体化を図り、防御機能を高めている点にある。

土　壙（ＳＫ）

SK917（Fig.181,183, PL.78-2）

檀状を呈する調査区北半部の斜面に位置する半球状の土壙である。楕円形の平面形を呈し、上面で長径250cm、短径215cm、深さ238cmを測る。土壙の東西両側には径30cm・深さ30cmを測る小穴がある。

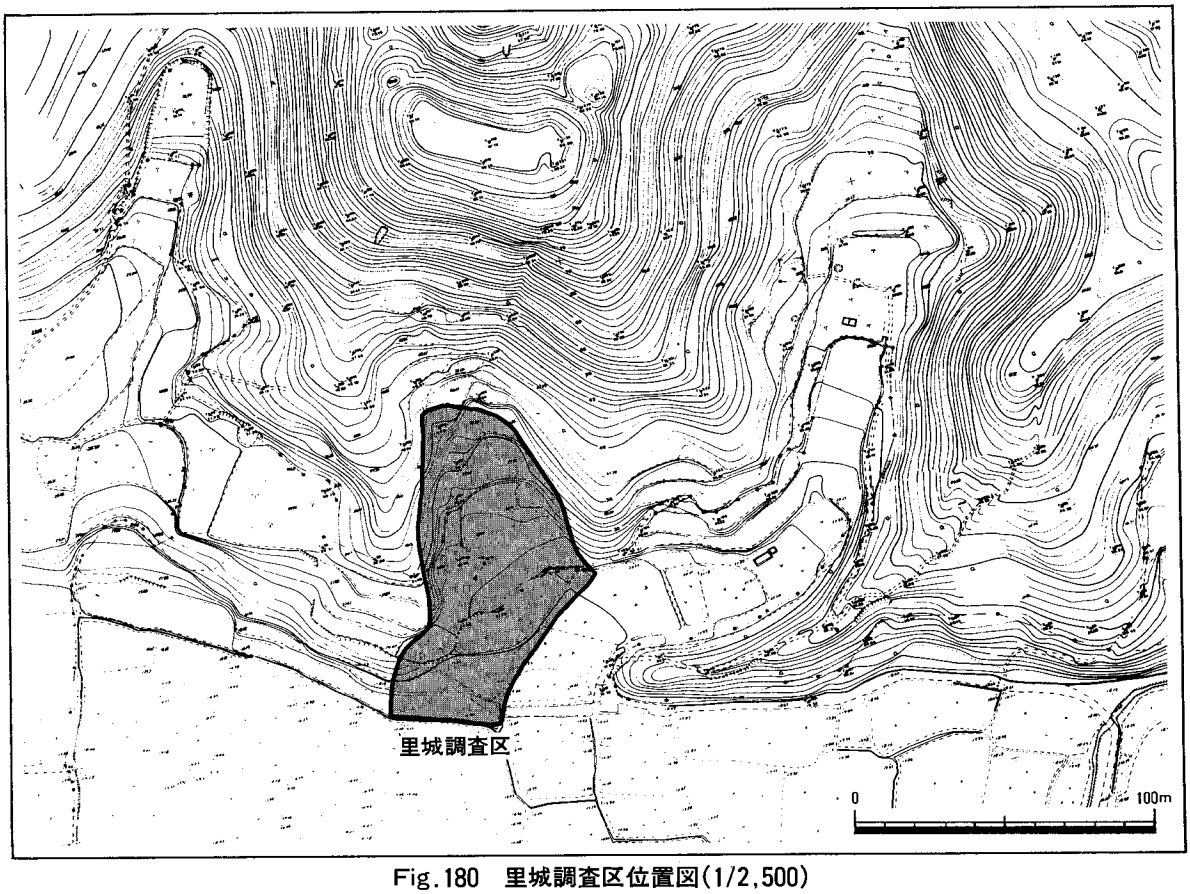


Fig.180　里城調査区位置図(1/2,500)

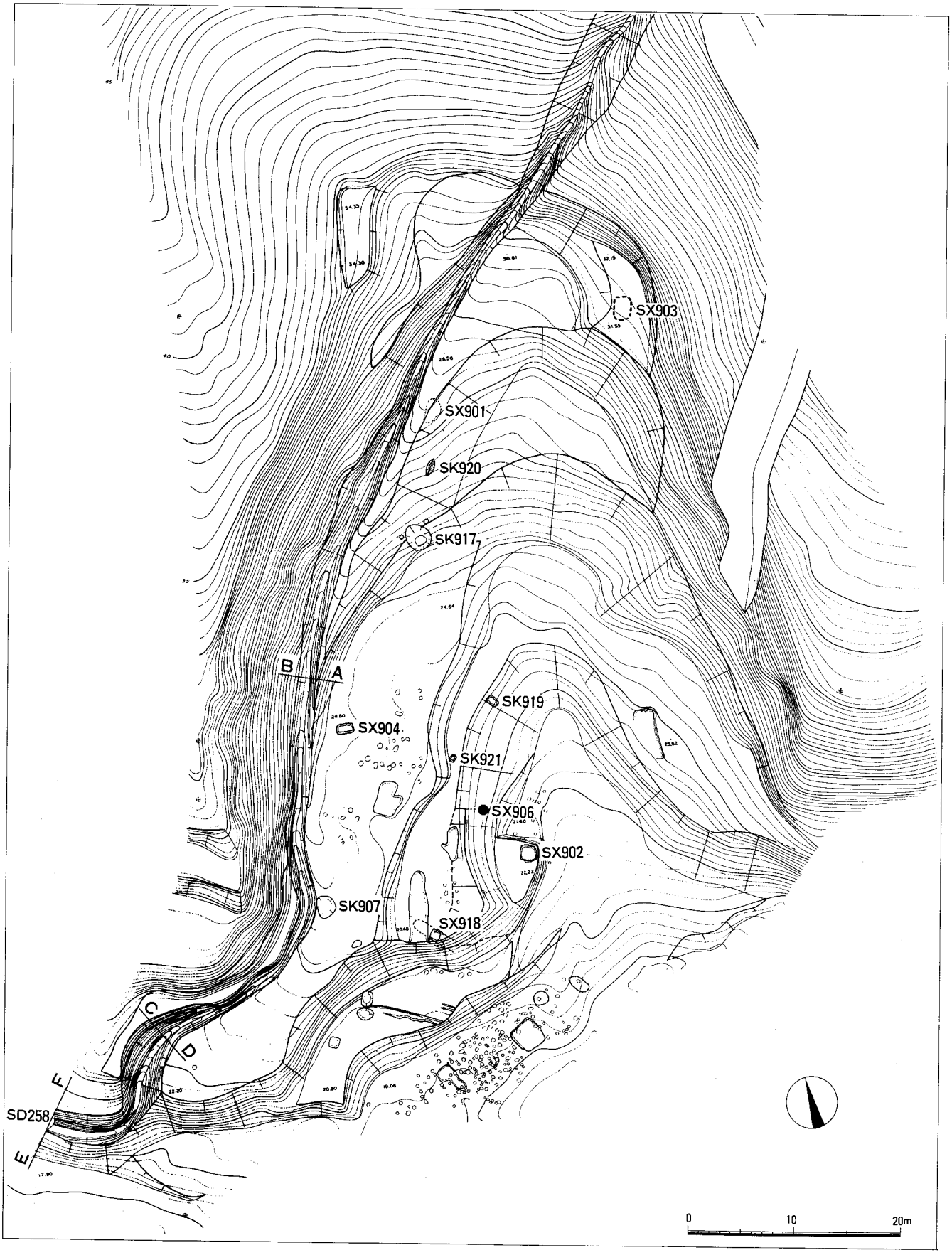
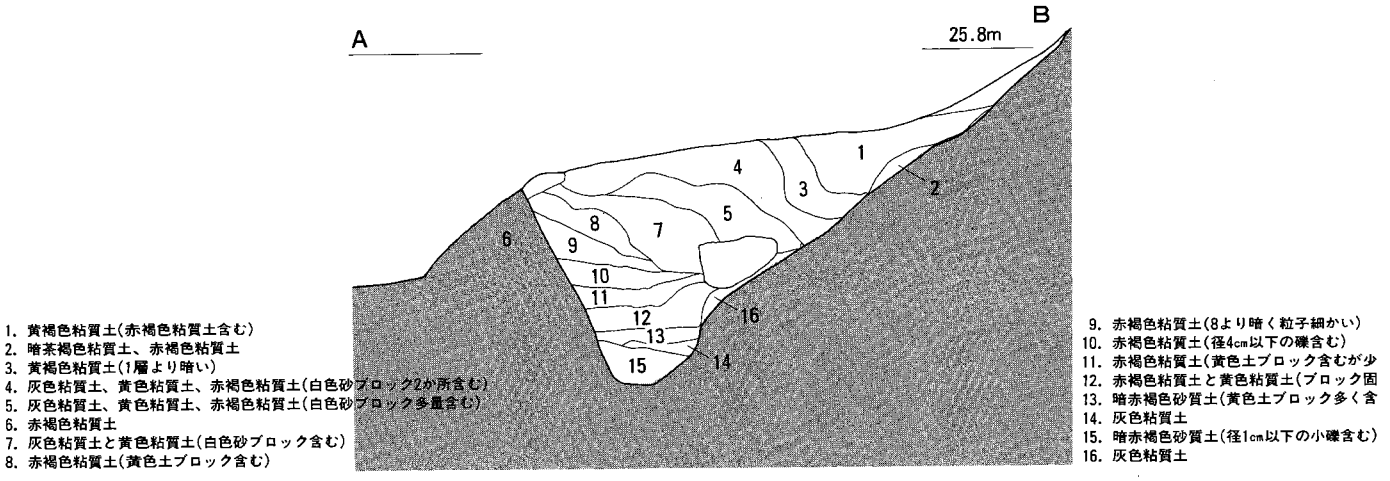
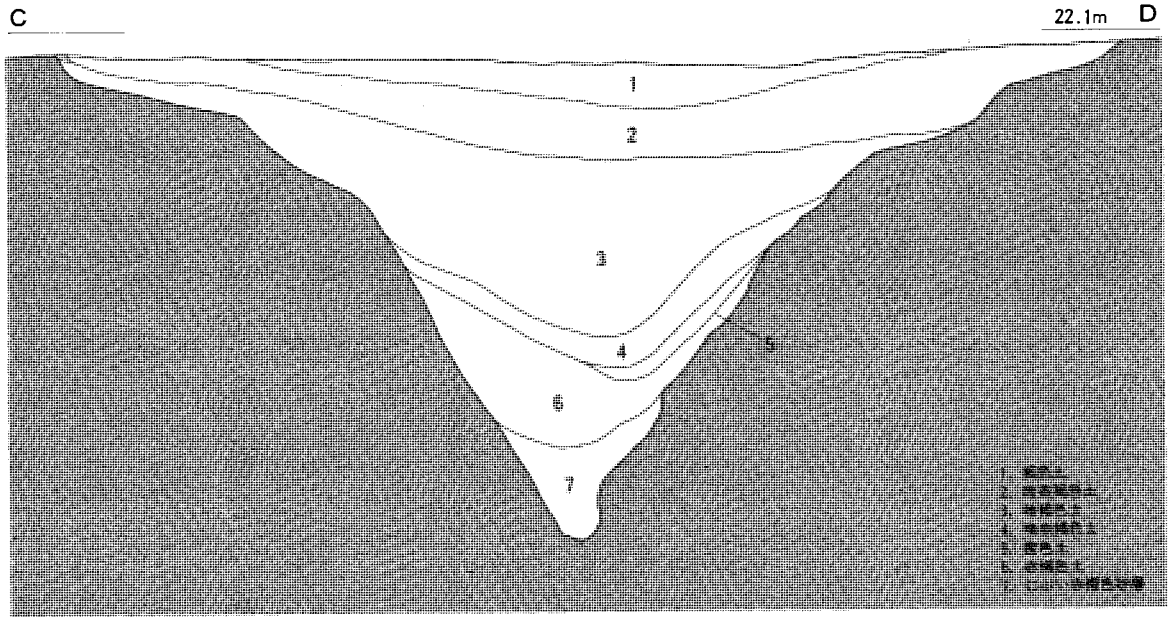


Fig.181　里城調査区遺構配置図(1/500)





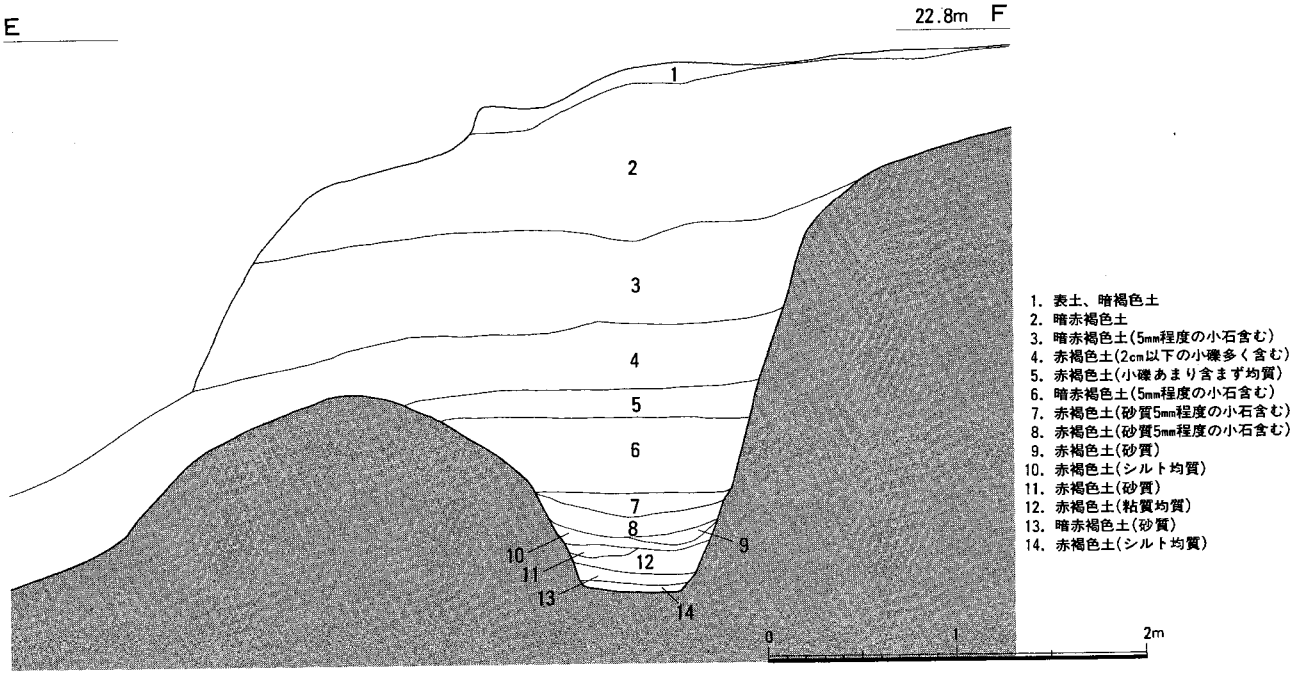


Fig.182　溝SD258土層実測図(1/40)

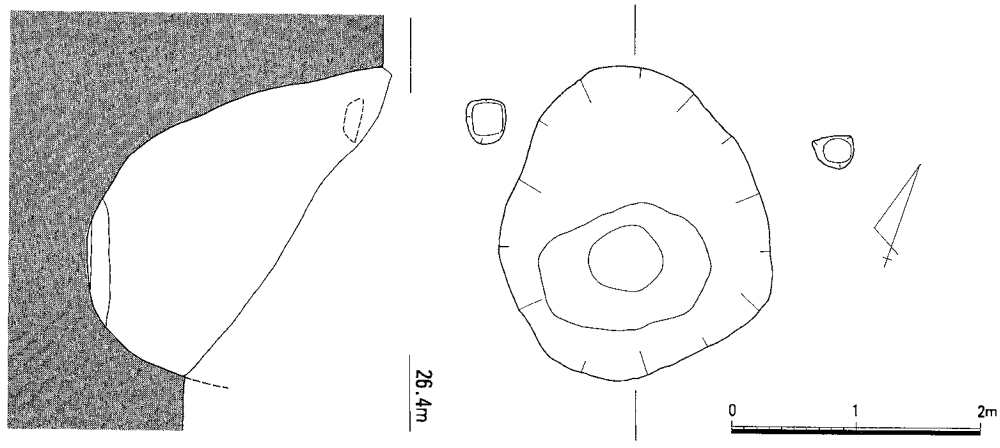


Fig.183　土壙SK917実測図(1/60)

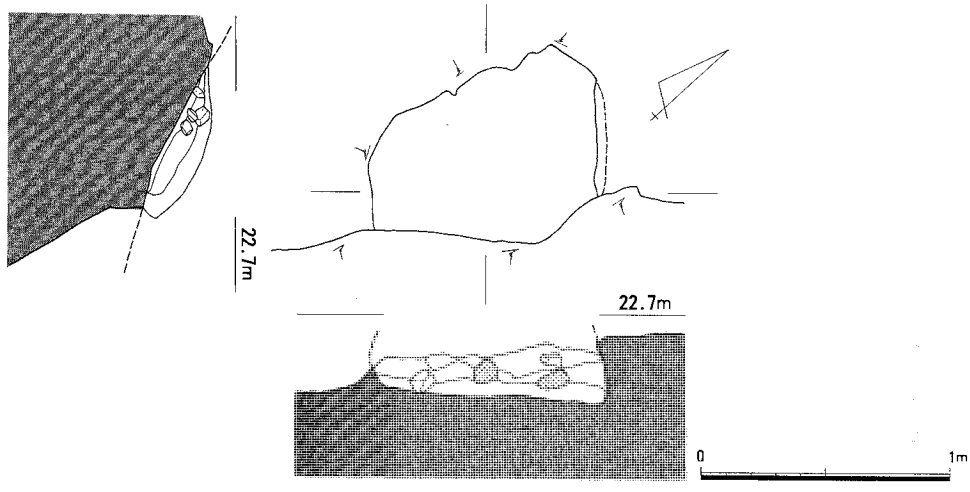


Fig.184　窯SX918実測図(1/30)

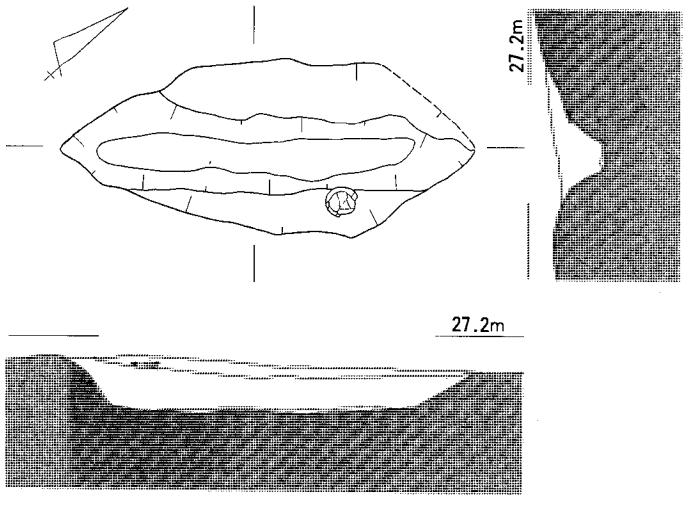


Fig.185　焼土壙SK920実測図(1/30)

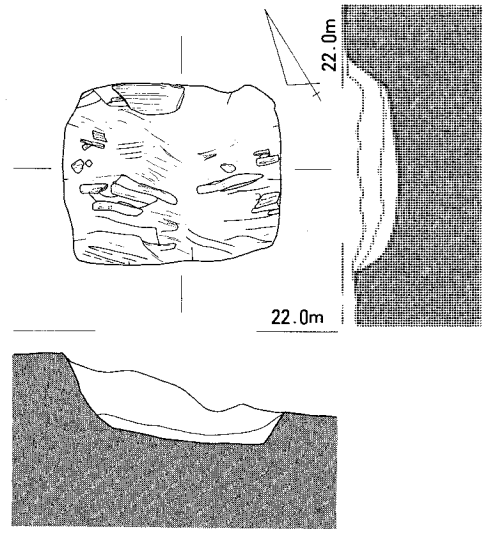


Fig.186　焼土壙SK919実測図(1/30)

SK919 (Fig.181,186, PL.80-5・6)

調査区北部の緩斜面に位置する。長方形の平面形を呈し、長辺95cm・短辺78cm・深さ25cmを測る土壙である。壙内には木炭だけが充填している。側壁は赤褐色～橙褐色を呈する。

SK920 (Fig.181,185, PL.80-7)

調査区北部、SK917の北側に位置する。船底状の形状を呈し、長径162cm、短径66cm、深さ23cmを測る。壁面は赤褐色～橙褐色を呈する。

SK921 (Fig.181, PL.80-8)

調査区中央の平坦面に位置する。長辺70cm・短辺55cmを測る隅丸長方形の平面形を呈し、中央部が少し凹む。橙灰～橙白色を呈して固く焼き締まっている。

窯（SX）

SX918 (Fig.181,184, PL.80-1～4)

調査地の中央に位置する窖窯で、焼成部床面と僅かに側壁の一部が残る。以外は後世の削平で欠失する。尾根の斜面に窯の主軸が谷筋と直交するように築造しているが、焚口部や煙道部をはじめ全体の規模は不明である。窯の断面形は側壁の状況から半円形のアーチ状を呈していたと思われる。床面は、幅90cmを測り、勾配は途中で傾斜角が変わり、手前が13°、奥が27°を測る。床・壁面ともに固く焼け固まっており、炭が厚く付着する。

中世墓（SX）

SX901 (Fig.181, PL.81-3)

調査区北部、SK920の北側に位置する。拳大ほどの山石が1.5m×2.0mの範囲に密集し、区画石は残っていない。集石の下では、2か所で火葬骨細片が20～30cmを測る楕円形の範囲に埋まっている。

SX902 (Fig.181, PL.81-1・2)

12世紀以降に谷部を埋め立てた平坦地に築造している墓である。人頭大の角石で方1.5mに区画し、区画内に小石を敷きつめている。火葬墓と思われる。墓碑などは残っていない。

SX903 (Fig.181, PL.81-5)

火葬した細骨を楕円形状に埋めている。ただし、掘形などは認められない。

SX904 (Fig.181, PL.81-4)

調査区中央、SK921の西に位置する。拳大～本大ほどの山石が密集する。火葬骨を埋納した墓と思われる。

柱穴

谷底や丘陵裾の平坦部では、径20～45cm・深さ10～40cmを測る柱穴がある。谷底の建物は古代末から中世初期のものと思われる。

3） 遺物

遺物は、須恵器坏、土師器皿・坏・椀・鍋、瓦器椀・火舎、陶器鉢・甕、白磁碗・皿、青磁碗・小壺・皿、染付碗が出土している。

遺構検出時出土遺物 (Fig.187)

10103・10104は底部糸切りの土師器坏。口径15.4cm、15.6cm、器高3.2cm、3.3cm。**10109・10110**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径16.0cm、16.3cm、器高3.1cm、2.8cm。**10105**は土師器坏。口径15.8cm、器高2.8cm。**10307・10106**は土師器椀。**10107**は瓦器椀である。**10004**は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の碗。畳付のみ露胎。**10010**は同安窯系青磁碗。内面体部上半に圏線が巡る以外は無文。黄色味がかった暗緑色の

釉が外面体部途中までかかる。見込みの釉は輪状に掻き取る。**10006**は白磁碗Ⅴ－１類。**10007**は青白磁の碗。高台外面までツヤのある青白色の釉がかかる。見込みに櫛描と片切彫りで劃花文を施す。**10005**は肥前の染付皿。**10037**は須恵器の蓋。天井部1/2程度回転ヘラ削り。**10041**は須恵器の蓋。天井部はヘラ切り。内面に２条の平行するヘラ書きがある。内部は赤みがかっており焼成はあまり良くない。**10111**は土師器の蓋。須恵器の形状を模している。**10042**は須恵器の碗。灰白色で焼成が良くない。**10035**は須恵器の甕の口縁部。外面にヘラ記号があるが、欠損により全容は不明。表面は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。

暗褐色土出土遺物（Fig.188，PL.153）

10327・10294は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.3cm、9.5cm、器高1.2cm、1.4cm。**10277・10328**は糸切りの土師器皿。口径9.9cm、9.0cm、器高1.2cm、0.9cm。**10109**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径15.6cm、器高3.1cm。**10105**は土師器丸底坏。口径15.6cm、器高2.6cm。**10122**は土師器高台付皿。**10107**は瓦器椀。口径17.6cm、器高5.5cm。**10106**は土師器椀。口径16.2cm、器高4.6cm。**10020**は同安窯系青磁皿Ⅰ－１類。内面に片切彫りと櫛描による文様を入れる。**10019**は龍泉窯系青磁Ⅲ類の小鉢である。**10018**は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類。**10017**は同安窯系青磁碗。内面体部上方に圏線を巡らすほかは無文である。外面体部下半露胎。**10124**は白磁高台付皿Ⅱ類。見込みの釉を輪状に掻き取る。**10022**は白磁平底皿Ⅱ類。外底に「山」の墨書があるが、半分欠損しており、もう１字あったかもしれない。**10027**は東播系須恵器の捏鉢。**10023**は須恵器の蓋。天井部2/3程度回転ヘラ削り。天井部のつまみは欠損しているが、接合痕が残る。**10024**は須恵器の小椀。**10025**は須恵器の椀。**10084**は土師器椀。**10026**は須恵器の鉢。**10083**は土師器の甕。外面体部はタタキ調整。**10085**は土師器の甑。欠損しているが底部に桟がある。

青灰色粘質土出土遺物（Fig.189，PL.152）

土師器皿は**10286・10280・10283・10318**が底部ヘラ切りのほかはすべて糸切り。糸切りの口径は9.0cm～9.6cm、器高は1.0cm～1.5cm。平均口径9.3cm、平均器高1.3cm。ヘラ切りの口径は、9.4cm～10.1cm器高は1.1cm～1.3cm。平均口径9.7cm、平均器高1.2cm。土師器坏は**10092**が糸切りのほかはすべてヘラ切り。**10092**は口径16.3cm、器高2.9cm。ヘラ切りの口径は15.5～16.5cm、器高は2.8～3.2cm。平均口径16.0cm、平均器高3.0cm。**10060・10058・10063・10061**は瓦器皿。**10012**は同安窯系青磁碗。見込みの釉を輪状に掻き取るもので、博多分類ではその他の青磁　類とされているもの。**10011**は白磁碗Ⅵ－２類。**10014**は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－４類。**10013**は同安窯系青磁皿Ⅰ－１類。**10059**は須恵器椀。

灰色土出土遺物（PL.153）

10290は底部糸切りの土師器皿。口径9.4cm、器高1.1cm。**10312**は底部糸切りの土師器皿。口径9.1cm、器高1.5cm。**10292**は底部糸切りの土師器皿。口径9.5cm、器高1.4cm。**10315**は底部糸切りの土師器皿。口径8.7cm、器高1.7cm。**10291**は底部糸切りの土師器皿。口径9.6cm、器高1.2cm。**10314**は底部糸切りの土師器皿。口径9.3cm、器高1.0cm。**10289**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.2cm。**10293**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.0cm、器高1.2cm。**10295**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.0cm、器高1.0cm。**10313**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.3cm、器高1.0cm。**10327**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.2cm、器高1.3cm。**10296**は底部ヘラ切りの土師器皿。口径9.8cm、器高0.9cm。糸切り皿の平均口径は9.3cm、平均器高は1.3cm。ヘラ切り皿の平均口径は9.3cm、平均器高は1.1cm。**10082・10081**は底部ヘラ切りの土師器坏。口径は15.7cm、14.9cm、器高は2.4cm、3.2cm。**10015**は白磁碗Ⅳ類。黄色味がかった灰白色釉を高台脇までかける。

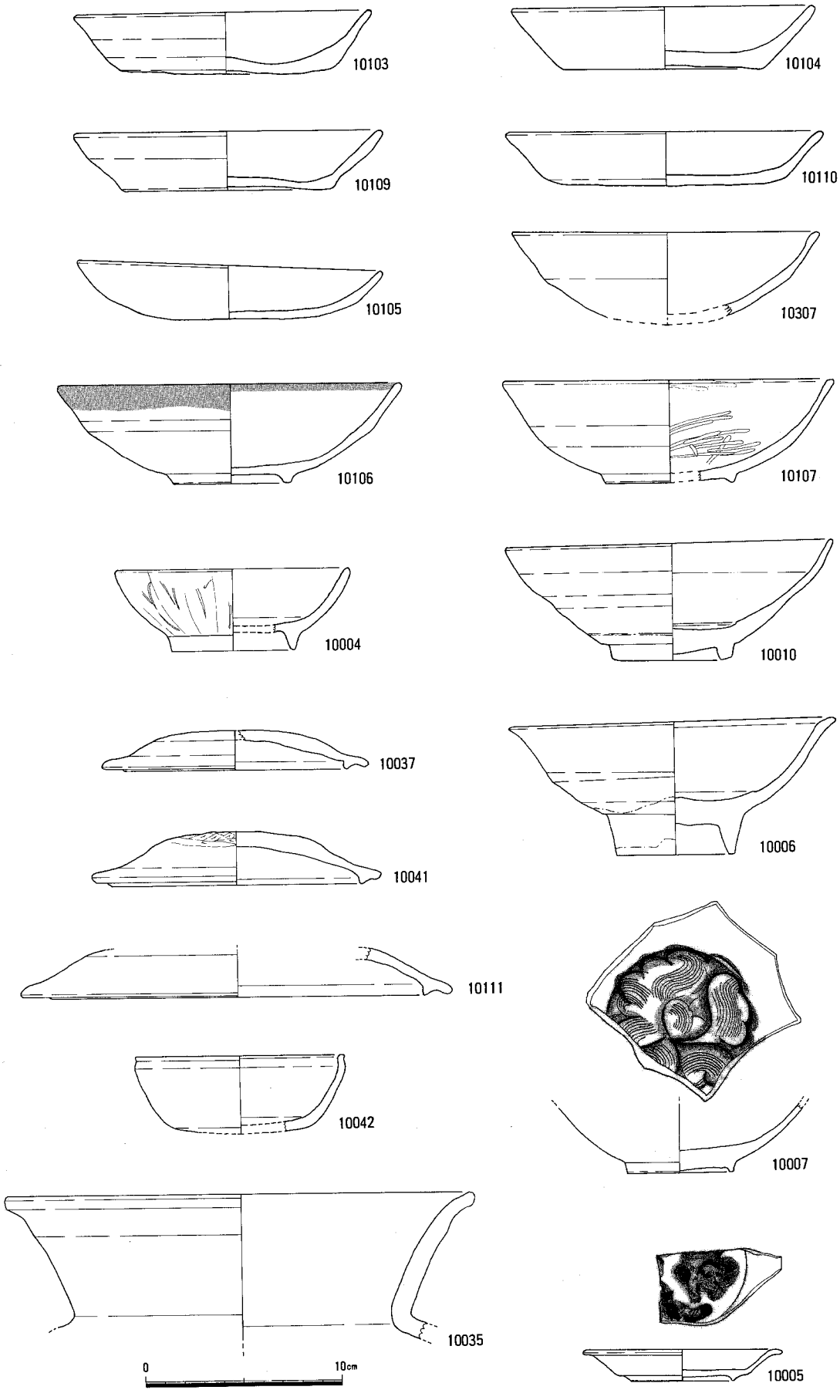


Fig.187　里城調査区出土遺物実測図(1/3)

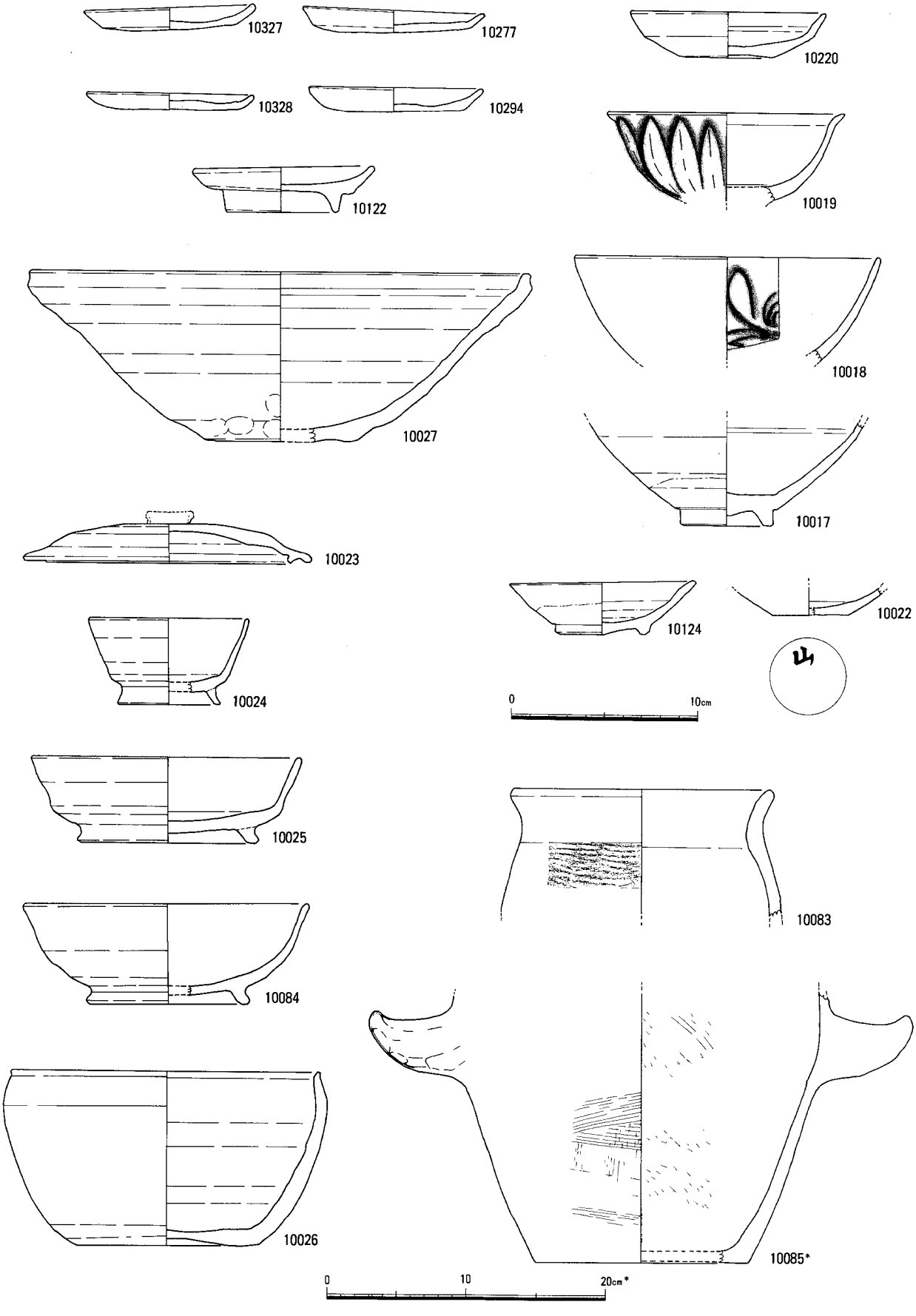


Fig.188　里城調査区暗褐色土出土遺物実測図(1/3・1/4*)

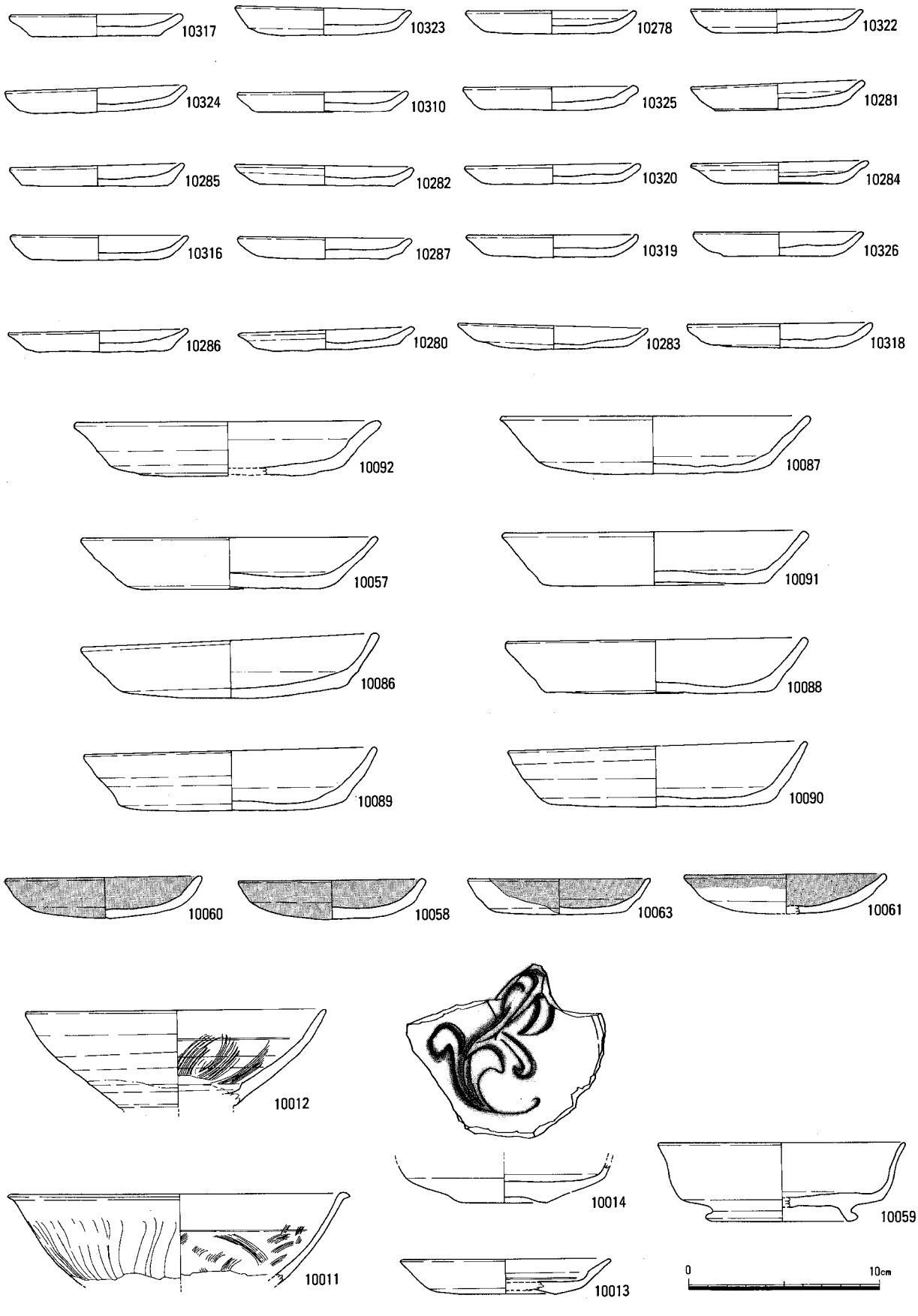


Fig.189　里城調査区青灰色粘質土出土遺物実測図(1/3)

（8）旧石器・縄文時代の遺物

香椎B遺跡では僅かではあるが、旧石器時代や縄文時代の資料も出土した。多くの遺物は遺構や同時期の包含層などからの出土ではなく、二次的に遊離していたものである。しかし、東区香椎地域では該期の資料が少なく、地域史を語る上で貴重と思われるのでここに紹介する。

出土遺物には土器類と石器類がある。以下では調査区ごとに説明する。

1．稲戸前調査区

稲戸前地区では土器類と石器類が出土した。不明遺構SX608から土器類と石器類3点が出土した。この遺構は本遺跡で唯一の縄文時代遺構である。遺構は大型で皿状の浅い落ち込みであり、竪穴式住居跡の可能性がある。

SX608出土遺物

縄文土器(Fig.190)

遺構から出土した土器類には、粗製の深鉢と精製の深鉢、深鉢の底部片などがある。

1は、粗製の深鉢口縁部破片である。口径の6分の1程度が遺存している。口径約25cmであり、垂直に近い胴部から口縁部が緩く外反する。口縁は緩く波打つが、図のように規則的な突出となるかは不明である。口唇部は面取り状にナデるが、やや外傾する。上部二段に内傾する粘土帯接合の痕跡がみられる。胎土には砂粒を多く含み、内外面ともに強いナデで仕上げられる。2は、粗製の深鉢口縁部破片である。小破片であり、口径や傾きは不明である。口縁部がゆるい外傾すると推定した。口唇部は丸みをもち、強くナデる。胎土には砂粒を多く含み、内面は横位の擦痕が残るナデ、外面は縦位のヘラナデで仕上げられる。3は、粗製の深鉢口縁部～胴部破片である。口縁部の6分の1程度が遺存している。口径約26cmであり、肩部でいったん窄まった後、口縁部が強く外反する。屈曲部は明瞭な変化がなく、断面が全体として緩い「S」字状を呈する。口唇部は面取り状に強くナデ仕上げを施し、外面に凹線状の条線が見られる部分がある。胎土には砂粒を多く含み、内面は横位の強いナデ、外面はヘラ状工具による荒いナデの後、ナデ仕上ている。4は、粗製の深鉢口縁部破片である。小破片であり、口径や傾きは不明である。口縁部がゆるい外傾すると推定した。口唇部は丸みをもち、強く横ナデで仕上げる。胎土には砂粒を多く含み、内面は横位のナデ、外面は斜位の条痕が見られる。砂粒の動きがあり、右上から左下方向に工具による粘土の掻き落としを行った後、横ナデで仕上げられる。5は、精製の深鉢口縁部破片である。小破片であり、口径は不明である。断面は胴部から緩い「S」字状を呈し、口縁部がゆるく外傾する。口唇部は上面を面取り状に平坦に仕上げている。口唇部内面に明瞭に一条の沈線が巡り、外面にも凹みが巡るが沈線としては不明瞭である。胎土には砂粒を含み、内面はナデ？、外面はナデ後、横位にミガキにより仕上げられている。6は、深鉢胴部破片である。小破片であり径や傾きは明瞭でないが、屈曲点付近で径31～32cm程度に復元される。胴部下半に明瞭な屈曲点があり、これを境に上部は緩く外反し、下部は窄まりつつ底部へ収束する。胎土は砂粒を含み、内面はナデで、屈曲部に強い横ナデ、外面は横位の貝殻条痕が残り、屈曲部を横ナデにより仕上げている。7は、粗製深鉢の胴部下半から底部の破片である。6分の1程度が遺存し、底径は約11cmである。底面は剝落している。底部からいったん垂直に立ち上がり、その後胴部に向かって拡がる。胎土には砂粒を多く含み、内面は胴部下半に横位の条痕、底部が指押さえ後ナデ、外面は胴部下半が縦位のヘラナデ、底部が横位のヘラナデである。8は、粗製深鉢の底部破片である。4分の1程度が遺存し、底径は約10.5cmである。成形は円盤上に粘土帯による壁体を積み上げ、再度底部内

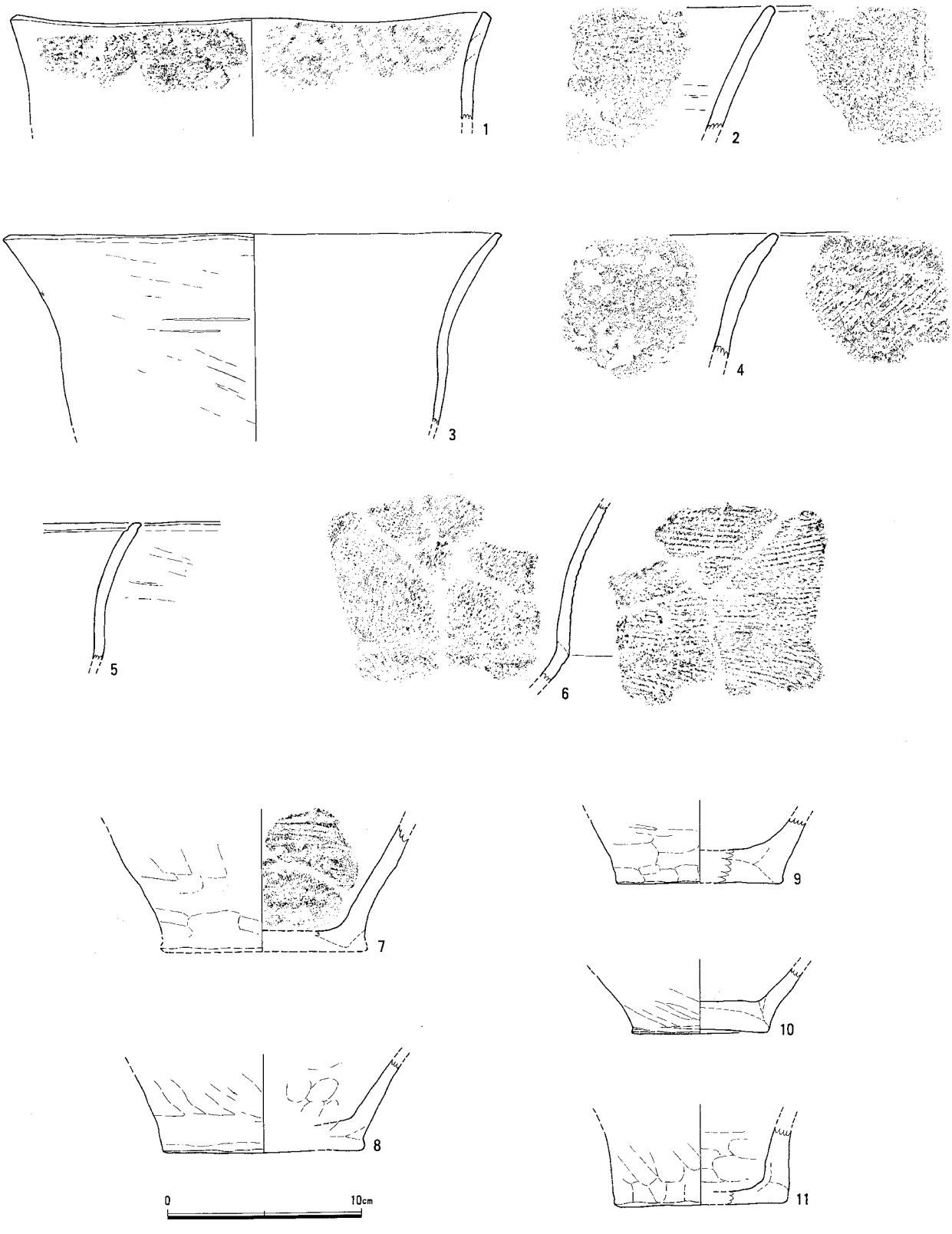


Fig.190　SX608出土縄文土器実測図(1/3)

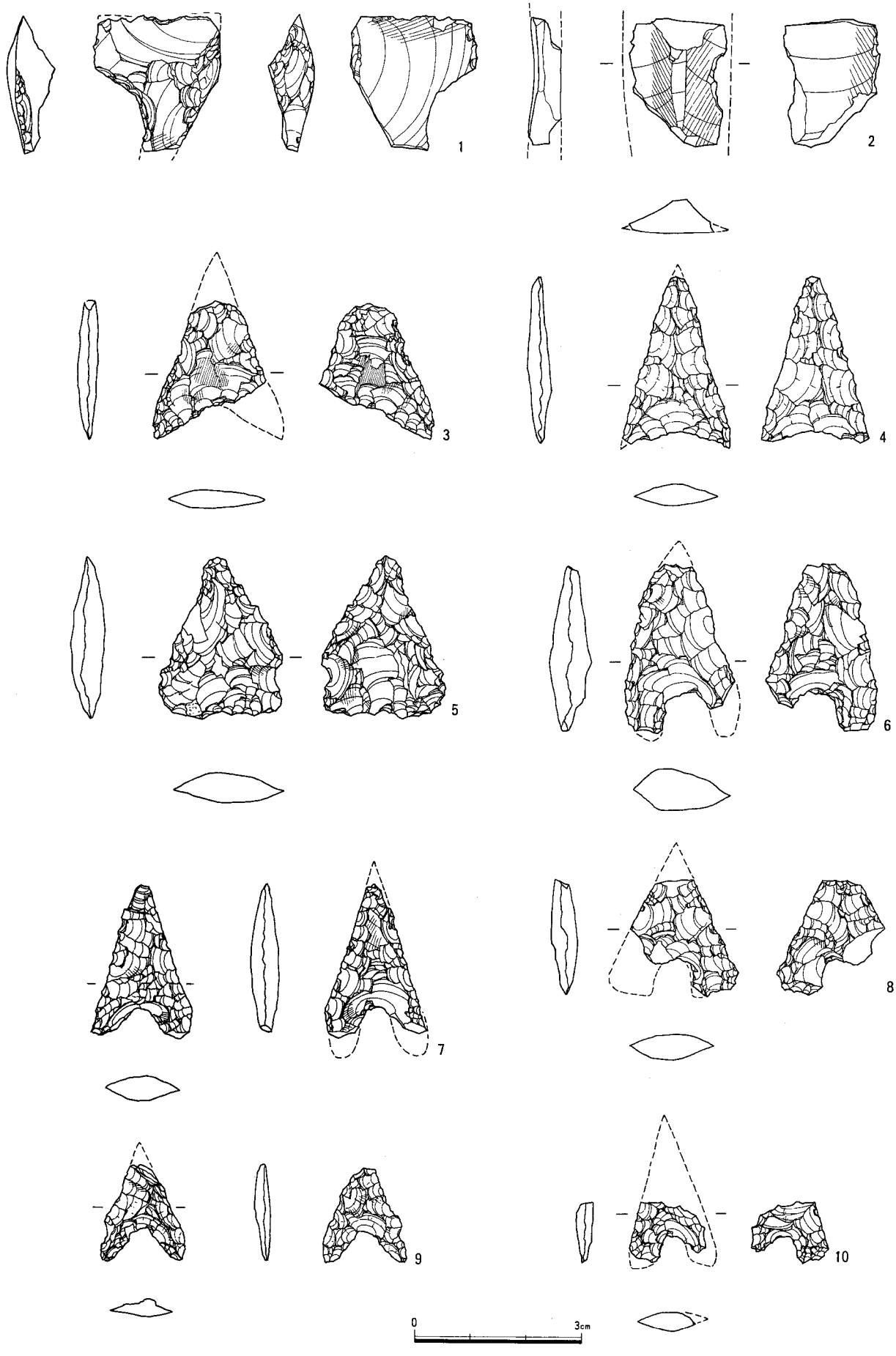


Fig.191　石器実測図1(1/1)

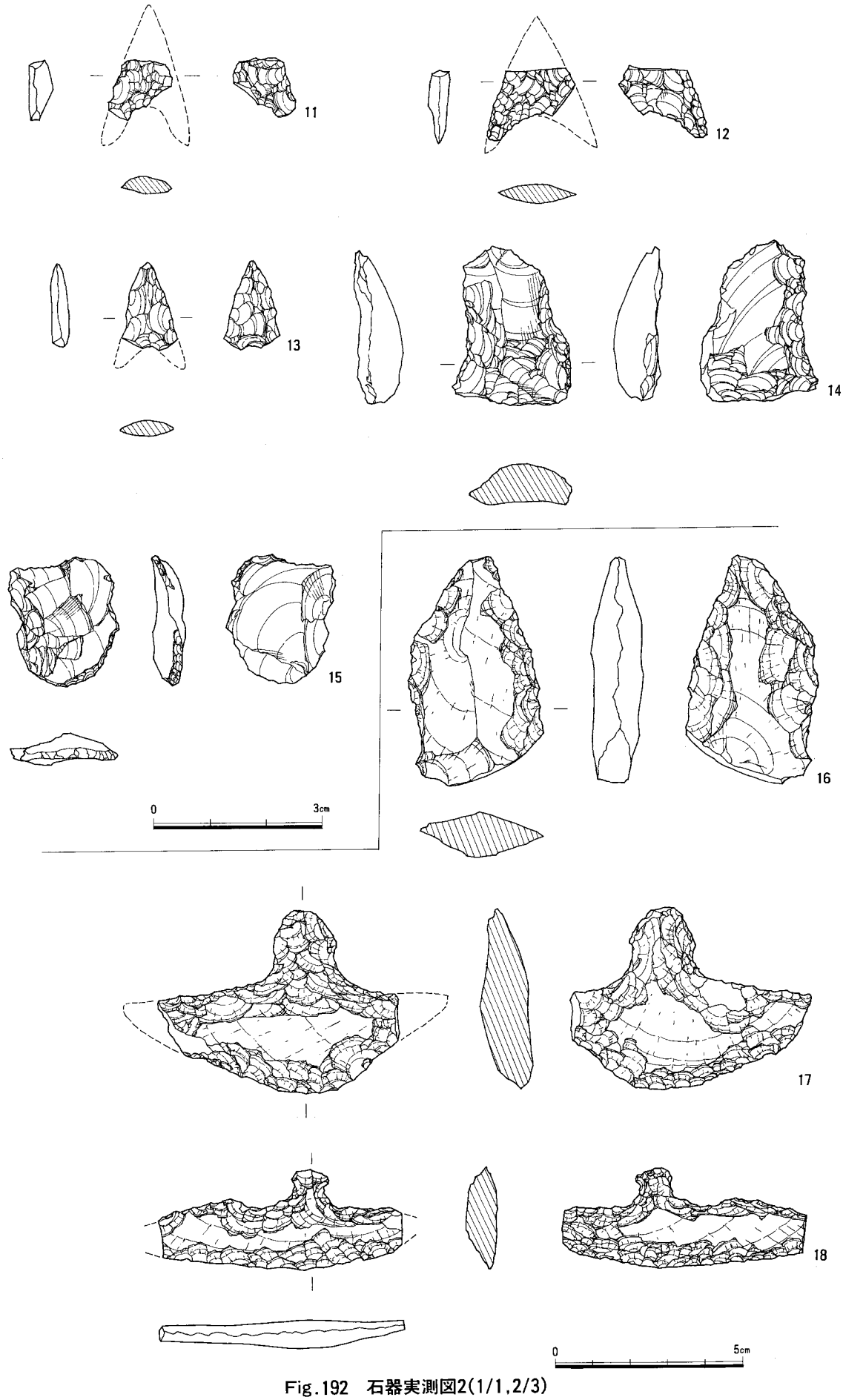


Fig.192　石器実測図2(1/1,2/3)

面に粘土板を充填している。底部から胴部に向かってしだいに拡がる器形を呈する。胎土には砂粒を多く含み、内面は指押さえ後ナデ、外面は斜位のナデ、底部付近が横位のヘラナデである。**9**は、粗製深鉢の底部破片である。4分の1程度が遺存し、底径は約8.5cmである。成形は円盤上に粘土帯による壁体を積み上げ、再度底部内面に粘土板を充填している。底部から胴部に向かってしだいに拡がる。胎土には砂粒を多く含み、内面は指押さえ後ナデ、外面は横位のヘラナデ、底面はナデである。**10**は、粗製深鉢の底部破片である。底部のみ完存する。底径は7cmである。成形は円盤上に粘土帯による壁体を積み上げ、再度底部内面に粘土板を充填している。底部から胴部に向かってしだいに拡がる。底面は僅かに上げ底となる。胎土には砂粒を多く含み、内面は指押さえ後ナデ、外面は斜位のナデ、底面はナデである。**11**は、粗製深鉢の底部破片である。3分の2程度が遺存し、底径は約9cmである。成形は円盤上に粘土帯による壁体を積み上げ、再度底部隅に粘土を充填している。底部から胴部に向かってしだいに拡がる。胎土は特殊であり、砂粒が少なく、かわりに多量の植物繊維を含む。内面は横位の強い指ナデ、外面～底面は斜位のヘラナデである。

本遺構からは3点の石器類が出土した。微細剥離をもつ剥片、剥片、砕片である。いずれも腰岳産に類似する良質の黒曜石製である。剥片は鈴桶技法による端正な縦長剥片である。

以上の土器類は土坑内の一括資料であり、保存状態など類似していることからも同時期の可能性が高い。粗製深鉢主体のために明確でないが、縄文時代後期末～晩期前半期の範疇に位置つけられよう。石器類の時期も矛盾しないものである。

その他の遺物(Fig.191～193)

稲戸前地区ではこの遺構以外からも旧石器時代と縄文時代の遺物が出土している。

稲戸前地区では21点の石器類が出土している。すべて黒曜石製であり台形石器1点、石核1点、剥片・砕片12点、微細剥離ある剥片2点がある。台形石器**1**は端部に新しい傷があるが、ほぼ完存している。石材は漆黒色黒耀石であり、左右非対称の形状である。不定形の剥片を素材とし、刃縁部はL型をなす。背面には三面の剥離面があり、左端の剥離面はポジティブ面の可能性がある。右側片は背面から、また左側片は腹面からそれぞれブランティングを施す。背面には稜部に沿って右側面側からの平坦剥離が見られる。いわゆる「原の辻型」台形石器である。長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。石鏃の未製品**14**は良質の黒曜石であり、厚手で縦長の剥片を素材とする。基部と両側辺に二次調整がある。長さ2.8cm、幅2.1cm、厚さ0.9cmを測る。磨製石斧**20**はほぼ完形品で刃部は傾斜する。結晶片岩製で基部付近が敲打調整が残る。長さ12.0cm、幅5.0cm、厚さ2.0cmを測る。これ以外の剥片に端正な縦長剥片があり、「鈴桶技法」の関連資料が含まれており、縄文時代後期後葉～晩期前葉に比定される。これはSX608と同時期の所産と見られる。

2．寺熊調査区(Fig.191～193)

隣接地区である寺熊調査区も併せて報告する。

寺熊調査区では剥片石器類14点と石斧1点が出土した。剥片石器類には石核1点、剥片、砕片6点の他に石鏃4点、石匙1点、微細剥離ある剥片2点がある。石材は石匙のみ安山岩で他は黒曜石である。石鏃には両面に研磨があるもの(**3**)や鍬形鏃(**6,7**)がある。石匙は両端を欠損するが、逆三角形となるもの(**17**)である。石斧(**19**)は推定長15cm程度で両端を欠損している。背面に二次使用と見られる敲打痕がある。石材は変成岩であるが、同定は出来ていない。これらの石器類は主な特徴から縄文時代早期中～後葉に比定される。

寺熊調査区東部地区では剥片石器類19点と石錘1点が出土した。剥片石器類には石核2点剥片、砕

片16点、石鏃1点がある。石材はすべて黒曜石である。石鏃は開脚の平面三角形を呈する。石錘(21)は砂岩製で、両側二ヶ所に敲打による凹みを設けている。剥片石器類は縄文時代早期後葉のものと推定される。

寺熊調査区西部地区では剥片石器類4点が出土した。剥片1点、石鏃2点、石匙1点がある。石材は石匙のみ安山岩で他は黒曜石である。剥片(2)は縦長剥片であるが、新しい傷が全周に入り、二次調整は不明である。形状と進んだ風化状況から旧石器時代のものとみられる。石鏃(11,13)は風化、欠損が著しい小型の開脚鏃である。石匙(18)は両端を欠損する横長の形態である。これらは縄文時代前期に比定される資料であるが、本地区では剥片類がなく、出土した石器類は何れも二次的な移動が考えられ、本地区に同時期の遺跡が存在したとは考え難い。

3．生水・里城調査区(Fig.191,192)

生水地区では剥片石器類21点が出土した。石核1点、剥片、砕片14点、石鏃4点、微細剥離ある剥片2点がある。生水地区の石材はすべて黒曜石である。石鏃には不整三角鏃(5)、幅広の鍬形鏃(8)、脚端の尖る開脚鏃(12)などがある。微細剥離ある剥片(15)は掻器状に弧を描く刃部をもつ。本地区の石器類には縄文時代早期と同時代後期以降の資料が混在しているとみられた。里城地区では剥片と石鏃がある。石鏃は安山岩製の三角鏃(4)である。

4．小作調査区

小作地区では剥片石器類2点が出土した。剥片と砕片であり、石材は何れも黒曜石である。時期は不明であった。

調査区	黒曜石					安山岩				其他	合計
	石核	剥片	砕片	石鏃	他石器	石核	剥片	石鏃	他石器		
稲戸前	2	5	7	1	3	1	1	0	0	斧1	21
寺熊(中央部)	1	5	1	4	2	0	0	0	1	斧1	15
寺熊(東部)	2	8	8	1	0	0	0	0	0	錘1	20
寺熊(西部)	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	4
生水	1	5	9	4	2	0	0	0	0	0	21
生水・里城	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
里城	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
小作	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
大日	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
大日西	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
御倉谷	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2
合計点数	7	26	26	13	7	1	1	2	3	3	89

Tab.1　香椎B遺跡における地区別石器類出土一覧

5．大日調査区(Fig.191)

大日調査区と大日西調査区では剥片石器類2点が出土した。石核1点、石鏃1点である。石材は何れも黒曜石である。石鏃(10)は基部剥片で、長身の鍬形鏃である。縄文時代早期後葉に比定される。

6．御倉谷調査区(Fig.191,192)

御倉谷調査区では剥片石器類4点が出土した。石鏃1点、削器1点がある。石材は何れも安山岩である。石鏃(9)は鍬形鏃である。削器(16)は自然面打面の縦長剥片を利用し、両側に二次調整を施している。縄文時代早期に比定されよう。

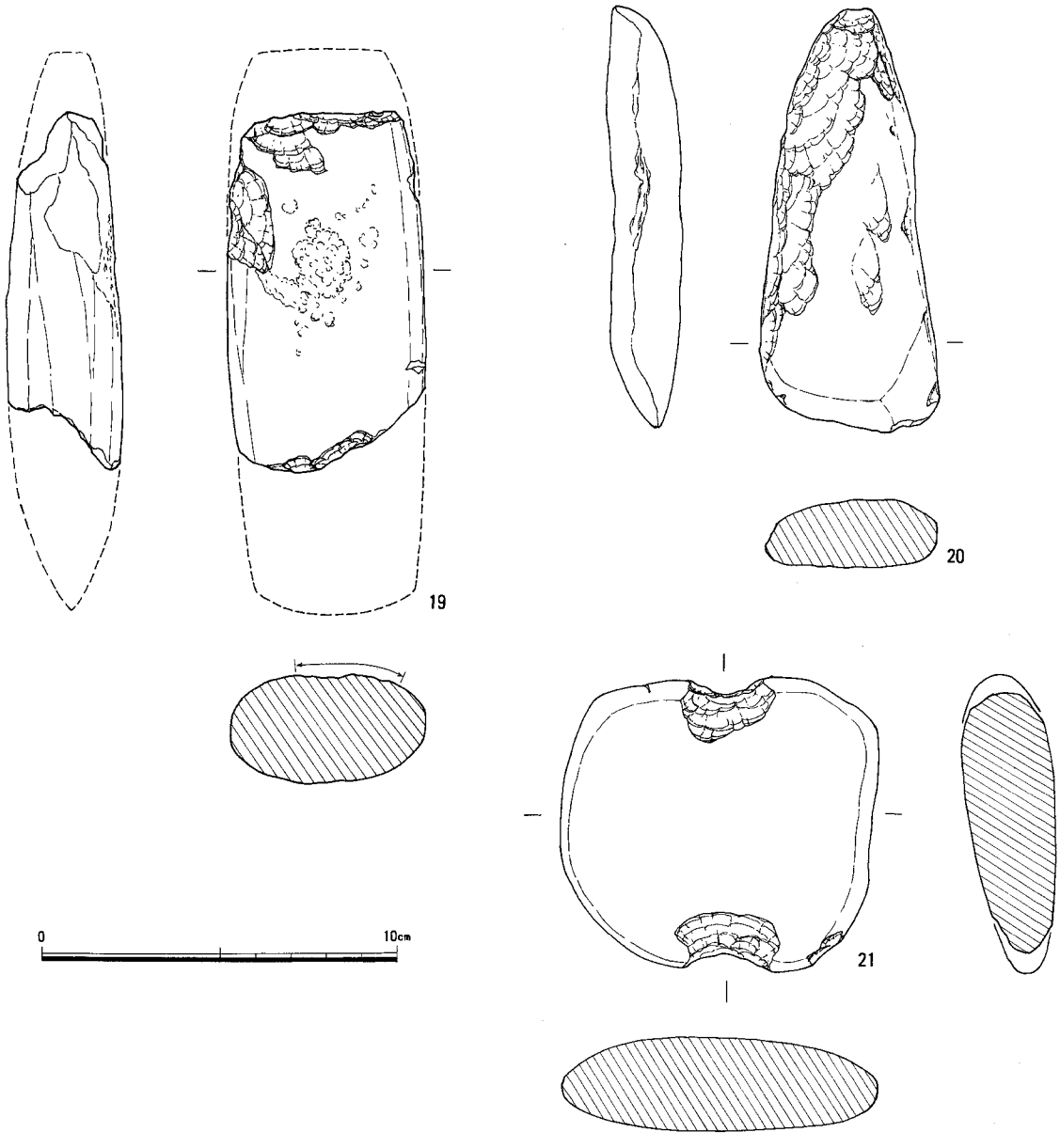


Fig.193　石器実測図3(1/2)

７．まとめ

1)旧石器時代資料について

旧石器時代の石器としては、僅かであるが稲戸前地区の台形石器と寺熊西地区の剥片がある。台形石器は原の辻型台形石器であり、福岡市内では井相田Ｃ遺跡１次、野多目遺跡、井尻Ｂ遺跡６・１２次に次ぐ４例目の発見である。この石器は萩原博文氏(1983)により型式設定された。西北九州を中心に展開する後期旧石器時代後半期の標識遺物である。本資料は九州玄界灘沿岸では東限となるものであり、今後の研究にとって重要な資料となる。剥片については残念ながら破損が著しく多くの情報を得ることができない。

2)縄文時代資料について

縄文時代の石器は各地区に出土しており、石鏃、石鏃未製品、掻器、削器、石匙、石斧、石錘などがある。稲戸前、寺熊、生水、大日、御倉谷地区において縄文時代早期の石器が、稲戸前、生水地区において縄文時代後～晩期の土器、石器などが出土した。このうち寺熊、生水地区の縄文早期と、稲戸前地区の縄文時代後～晩期は資料はそれぞれの地区に遺構や石器製作跡などの存在が予測できる。

萩原博文1983「原の辻型台形石器について」『人間・遺跡・遺物　わが考古学論集１』文献出版

（９）古墳時代

古墳時代の石製品としては里城地区出土の子持勾玉がある(**22**)。滑石製であり、頭部を欠損する。また、各所に新しい傷が認められる。表面には細かな削り痕が残り、一部に擦痕がある。形態は緩く屈曲する「Ｃ」字形をなし、断面は腹側に厚い凸レンズ状をなす。腹側に１つ、背側に４つ、両側に２つづつの「子」が削り出されている。腹部の「子」はやや大きいが、それ以外は同様の大きさである。現存長8.8cm、幅5.5cm、厚さ3.0cmを測る。復元推定では長さ約10cmと見られる。

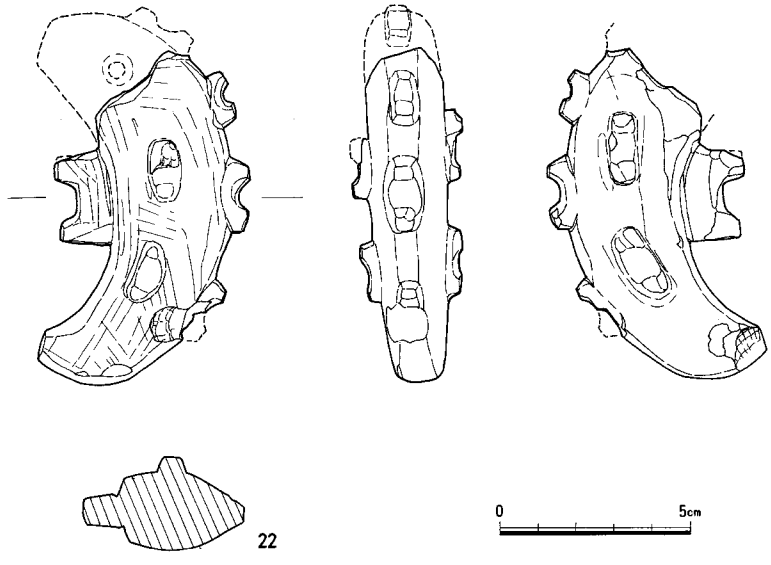


Fig.194　子持勾玉実測図(1/2)

2．寺熊窯跡

（1）1号窯跡

1）位置と概要（Fig.195，PL.90）

調査区は、香椎B遺跡の中心をなす東西に延びた谷部の寺熊地区の背後に広がる低丘陵から舌状にのびた尾根の南斜面に位置する。遺跡の発見は、丘陵部の造成に先行して工事用道路を丘陵斜面に設けていた重機で斜面を削った際に窯の焼成部がカマボコ形に現れたものである。窯は、同斜面においては1基しか認められず、焼成部の一部と煙道部が残っていただけである。焼成部からは僅かに須恵器の坏・蓋が出土しており、7世紀第2四半世紀に造営していた事を示している。周辺の群集墳からも同時期の須恵器が出土しており、供給の場を呈していた。窯跡の地点の標高は30mを測る。

窯跡の立地する地形は、尾根の北斜面が緩やかに下るのに対し、窯跡の位置する南斜面は崖のように急斜面を呈している。さらに、急斜面の状況は窯跡が位置する地点だけではなく、南斜面全体に共通して認められるとともに、工事着手前の地形図からも同様なことが読み取れることから、窯跡の削平が中世において谷部全体を造成地業した際に壊されたものと推察される。したがって、窯体の傾斜を考慮すると、窯跡周辺部における旧地形は、斜面裾部が現在よりも10m前後は南に位置し、北斜面と同様形状していたと復原できる。

窯跡の発見前、寺熊調査区中央部南辺に位置する溝SD327から須恵器の坏13枚が熔着した、窯で重ね焼した状態のままで出土している。このため、窯跡発見時には、熔着した須恵器の窯と想定していたが、焼成部から僅かに出土した須恵器の坏・蓋が示す年代とは大差があることから、1号窯の近辺に別の窯が存在していた可能性が高いことを知るにいたった。

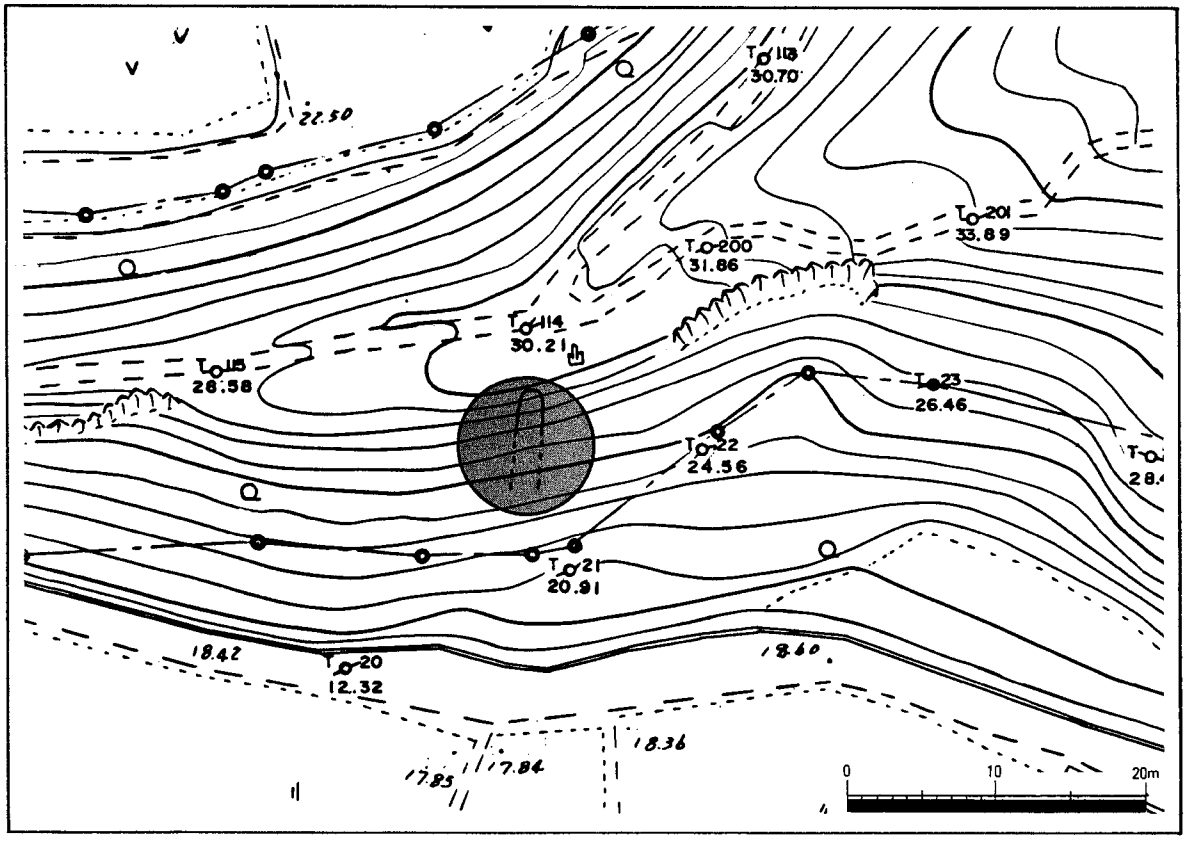


Fig.195　寺熊窯跡1号窯位置図(1/500)

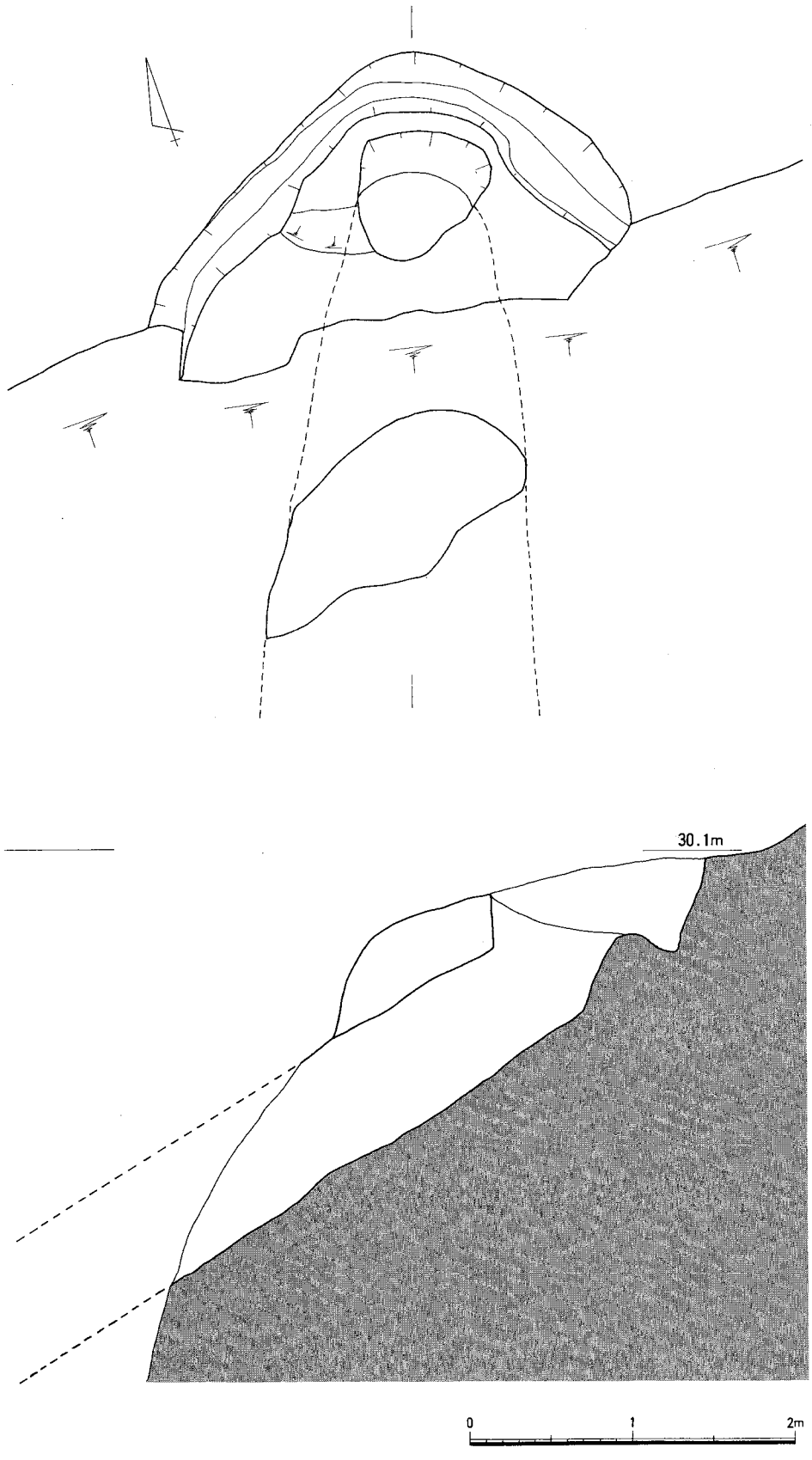


Fig.196　1号窯実測図(1/40)

2） 窯　体（Fig.196，PL.90,91）

検出した窯跡は窖窯の須恵器生産窯であるが、残存していたのは焼成部の一部と煙道部だけである。焼成部の大半と燃焼部などの焚口部などは、後世の削平、特に中世の谷部造成に伴う丘陵裾部の掘削のため欠失している。このため、窯の全長は不明である。窯は、頁岩の地山である丘陵斜面を隧道掘削して窖窯としている。

【焼成部】

焼成部は、内傾しながら立ち上がる側壁とアーチ状の天井部からなる。すなわち、窯の横断面がかまぼこ形を呈している。巾148cm、高さ86cm、残存長301cmを測る。床面は斜面で、段造成は認められない。平面的には奥壁に向かって床面巾が狭くなる。床面の傾斜角度は、煙道に近いところで31°を測る。壁面の表面は炭が付着し黒色化している。内面は赤褐色を呈し焼き締まっている。粘土等の貼り付けなどによる補修は床面、壁面、天井すべてにおいて認められない。

【煙道部】

煙道は、一部が陥没しているが円筒形を呈し、焼成部奥壁から僅かに傾斜を持つものの直に立ち上がる。煙道は径50cmが復元される。

【溝状施設】

煙道周辺部において馬蹄形状の巾の狭い溝状遺構が設けられている。溝の断面形はＶ字形を呈し、巾は上面で45～60cm、底で10～15cmを測る。特に窯の逆側の斜面は垂直に掘り下げている。溝底面は煙道の北側から窯の両側に沿って下るようにあるが、最下部は削平により不明。

この施設の性格としては、①排水施設と②煙道機能増強施設が考えられるが、排水施設と考えるのが妥当と思われる。

3） 遺　物（Fig.197，PL.155）

出土した遺物は須恵器の坏、蓋、甕である。すべて窯跡発見時に採取したもので、残存していた窯跡内部からの遺物の出土は認められない。遺物はすべて破片である。色調的には二分され、一方は赤褐色を呈し、他方は灰色を呈する。

蓋　4点出土している。**10348**は口径11.1cm、器高3.9cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。天井部の一部を欠く。器高は低く、天井部と口縁部との境は不明瞭である。天井部外面は、ヘラ削り調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。他の3点も同様である。

坏　6点出土している。**10242**は口径9.9cm、器高3.4cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。**10243**は口径9.9cm、器高3.6cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。底部は浅く、体部は直線的

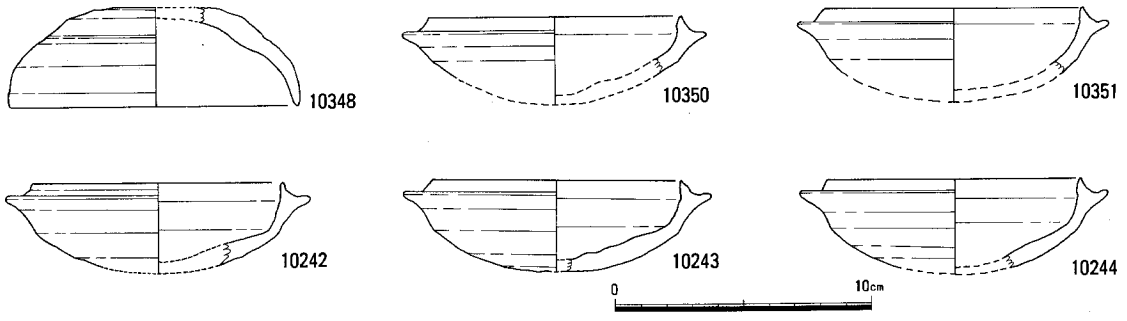


Fig.197　1号窯出土遺物実測図(1/3)

に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。**10244**は口径10.0cm、器高3.7cmを測る。胎土は僅かに0.5～１㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。**10350**は口径9.8cm、器高3.5cmを測る。胎土は僅かに0.5～１㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。**10351**は口径9.8cm、器高3.6cmを測る。胎土は僅かに0.5～１㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰色で焼締まっている。底部は浅く、体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面には回転ヘラ削りを施している。

甕　胴部の破片が２点出土している。外面には小型の格子叩き目が、内面には同じく小型の同心円紋が残る。胎土は、僅かに0.5～１㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は赤褐色と灰色を呈するがいずれも焼締まっている。

3．大日古墳群

（1）位置と概要

大日古墳群は、香椎B遺跡第2次調査の中で丘陵部の試掘調査を実施した際に発見に至ったものである。古墳群は4基の小円墳からなる群集墳で、谷奥部の大日地区に面する丘陵の標高30m前後を測る南斜面に築造されている。1～4号墳の4基の古墳がほぼ同標高に東西方向に一列に並ぶように位置する。最も谷奥の東に位置する1号墳は僅かに高まりを見せて古墳の残影を残していたが、他の古墳にいたっては何も認められなかった。これは、古墳群の位置する丘陵裾部に、第2次大戦時の防空壕の排土が大量に堆積していたためである。

4基の古墳とも天井石は残存せず、2～4号墳においては玄室奥部が残るのみで全容は不明である。古墳群の中で2・3号墳は1・4号墳に比べて極めて小規模の石室を呈する。

出土遺物は少量であったが、石室内や羨道部閉塞施設から7世紀第2四半世紀～第3四半世紀に古墳の造営年代を求めることができる。1号墳は13世紀に埋葬施設として再利用された可能性がある。

出土した遺物と同時期の須恵器生産窯が、古墳群から谷入り口方向である西へ300mほど離れた尾根の斜面に位置する。器面に刻されたヘラ記号などからも、この寺熊窯跡1号窯で生産された須恵器が副葬品として用いられた可能性は極めて高い。

今回の調査では4基の古墳しか確認できなかったが、古墳群の残存状況や古墳群の位置する斜面の形状などから、本来はもっと大規模な古墳群が造営されていたと思われる。さらに、古墳群を造営した集団は古代の香椎地域を生活基盤とし、後の香椎廟創建が偶発的なものではなく、強力な影響力を保持した集団に発展していったものと思われる。

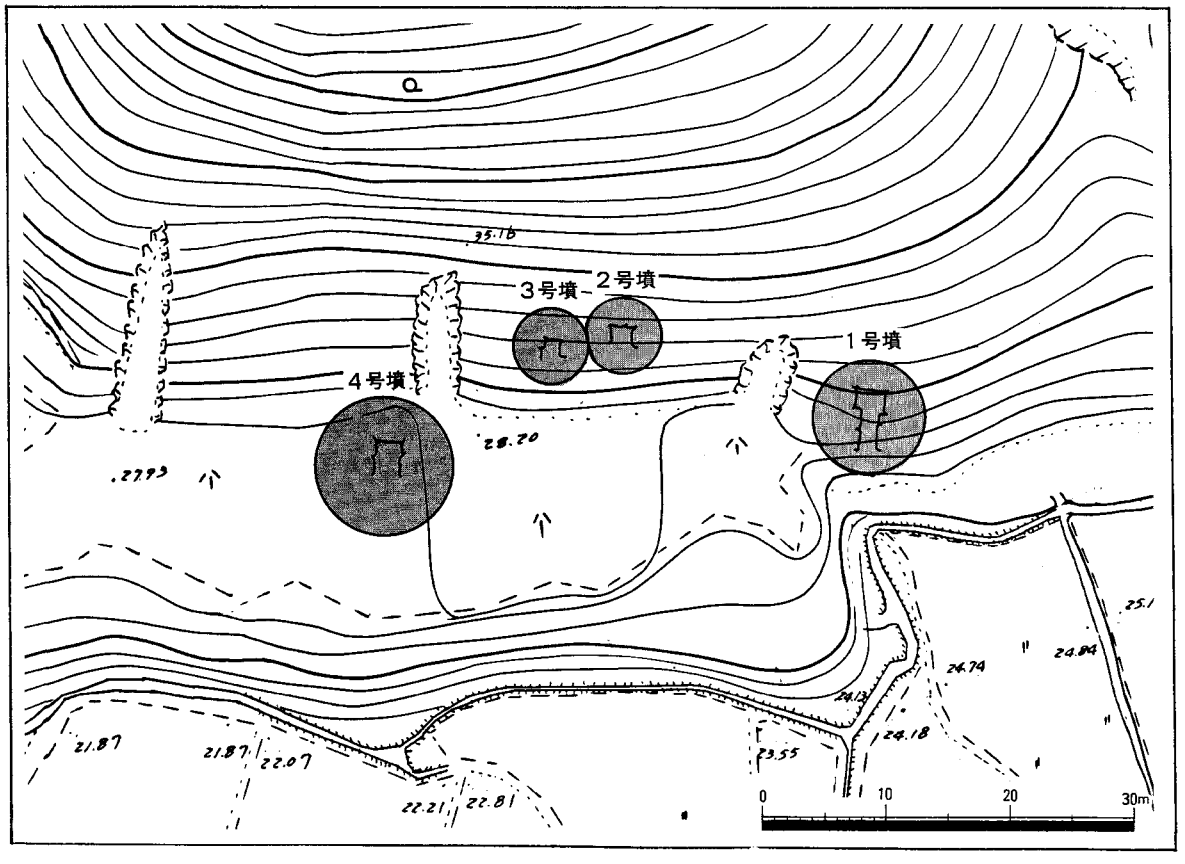


Fig.198　大日古墳群位置図(1/600)

（2） 1号墳 (Fig.198～202, PL.82･83･155)

1）位置と現状

古墳群で最も東に位置し、丘陵南斜面に開口部を南にして築造されている。西に隣接する2号墳とは18m離れている。僅かに墳丘の高まりを残し、石室の石材が露出していた。石室の天井部、羨道の一部や墓道は残っていない。

2）地山成形

古墳は、石室の中心軸が標高29m前後の等高線に直交するように築造されている。このため、地山整形は周溝と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地作業からなる。墳丘北側の斜面が急勾配であることから、斜面の掘削が大規模であることを知る。

3）墳　丘

僅かに墳丘を残し、巾1.3m、深さ0.6mを測る周溝が玄室を中心として径10mでめぐる。

4）横穴式石室

主体部は玄室主軸をN－22°－Eにとり、南西方向に開口する、単室の両袖型横穴式石室である。調査では、玄室、羨道、閉塞施設の一部を検出した。石室は、正方形のプランの玄室と主軸を玄室と同じくする羨道部との連接からなり、深い掘形内に構築されている。石室は腰石を含む下部3段ほどだけが残っている。玄室と羨道との境に梱石は残っていない。石室残存長は3.85mを測る。石室内は中世に攪乱を受けていることを出土遺物から知る。最終の閉塞施設は玄門から羨道にわたって設けている。

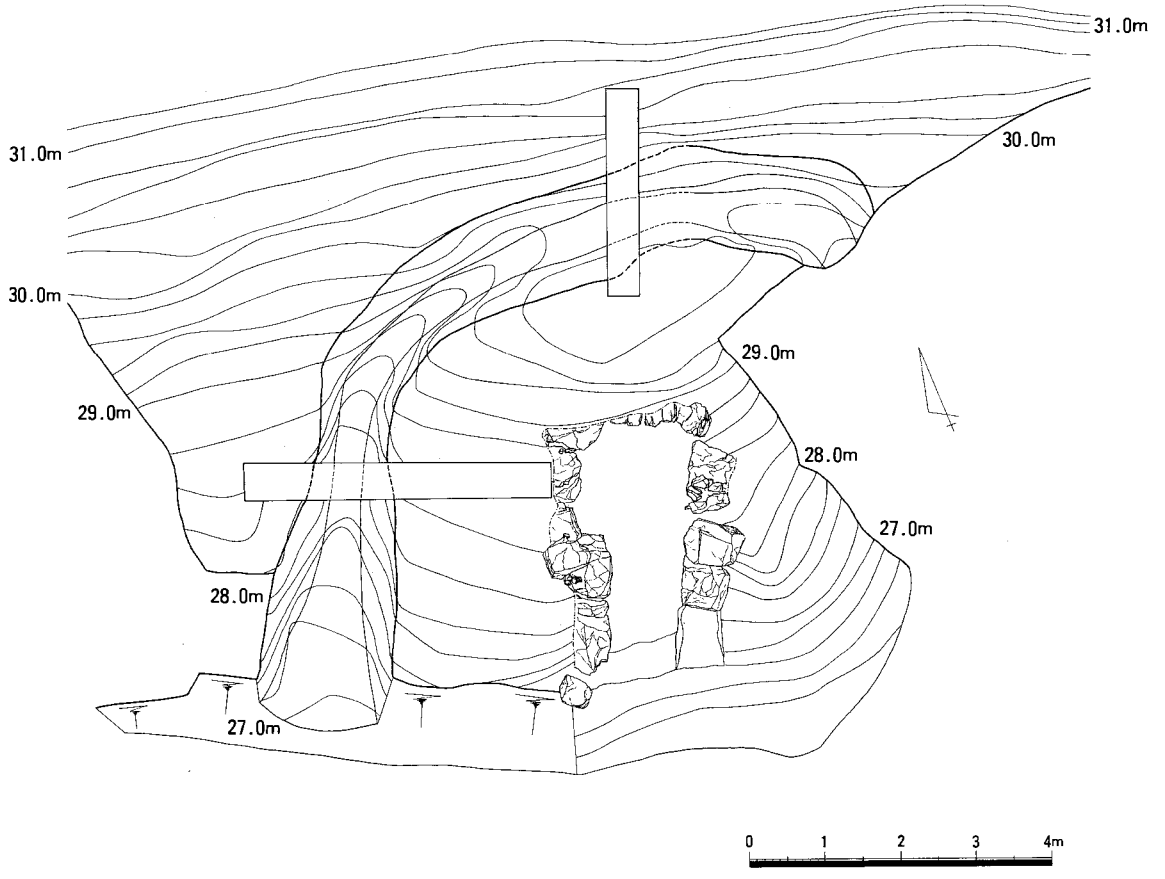


Fig.199　1号墳墳丘実測図(1/100)

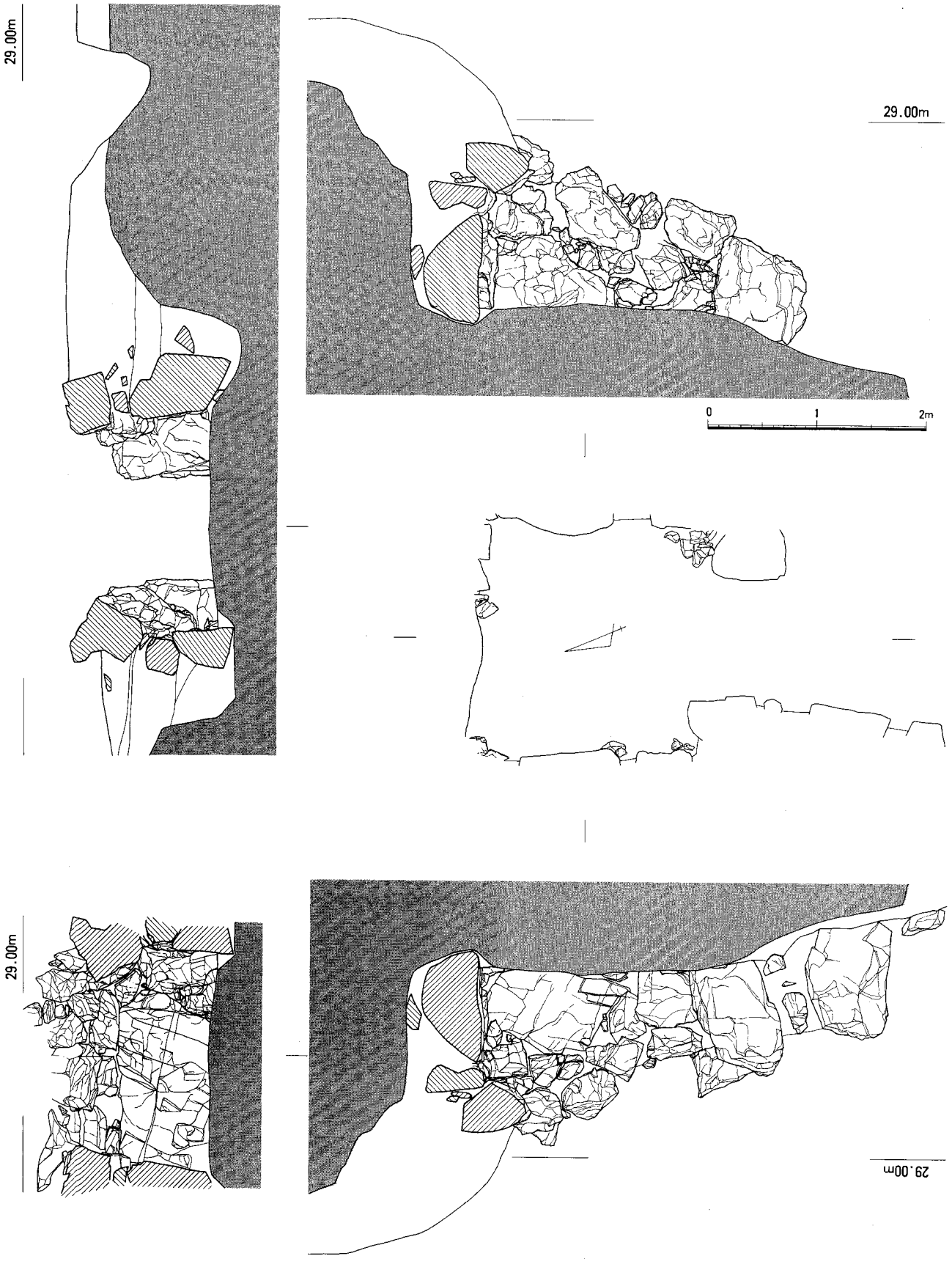


Fig.200　1号墳石室・墳丘土層実測図(1/50)

5）石室掘形

石室掘形は、ほぼ垂直に掘削され、深さ1.8mを測る。平面形は長方形を呈し、巾3.8m、奥行５m以上を測る。墓壙基底面の壁際には巾0.5～0.6mを測る溝状の凹みがある。これは石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

6）玄　室

玄室は、ほぼ正方形の平面形を呈し、床面は平坦である。奥壁幅2.1m、前幅2m、西側壁長2m、東側壁長2.1m、壁残存高1.5mを測る。玄門近くにおいて板石があることから、玄室床面全面に板石が敷かれていた可能性が高い。奥壁は1.4m×0.9m、側壁は1.2m×0.7mの山石を配して腰石としている。

7）羨　道

腰石の一部だけが残存し、その他の積み石の天井石などは欠失する。玄門から直線的に山裾側の南方向へのび、幅１m、残存壁長2.4mを測る。床面は玄門部から傾斜を呈する。

8）石室構築順序

残存する積み石と裏込めの墳丘土の堆積状況から古墳石室の構築順序を知ることができる。基本的には石室を一段積み上げるたびに裏込めの土を石の上端部まで突き固め、さらに石の倒壊を防ぐため石室内も土で充填する。この作業を天井石の設置まで繰り返し行い、天井石を据え付けた後に、石室内に充填させていた土を取り除く。

9）閉塞施設

羨道の全域にわたって小石の集積が認められたが、大半は中世の攪乱を含む後世の攪乱により当時の状況を保っておらず、玄門部においてのみ原位置であると考えられる。

10）墓　道

墓道については後世の削平により残存していない。

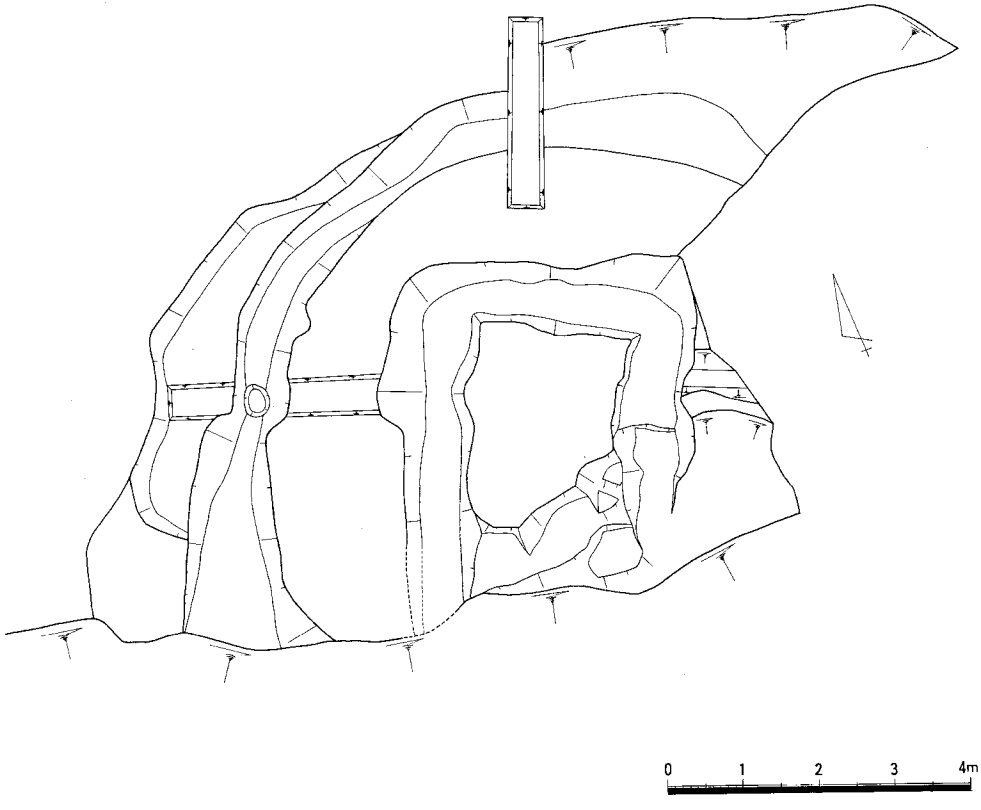


Fig.201　１号墳墓壙・地山整形実測図(1/100)

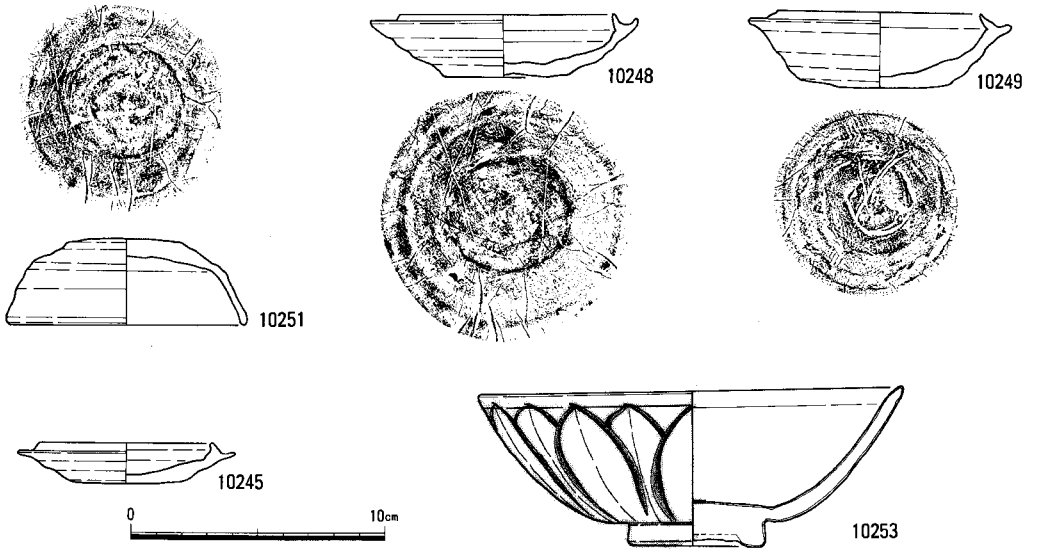


Fig.202　1号墳出土遺物実測図(1/3)

10）出土遺物

出土した遺物は須恵器の坏、蓋、青磁碗である。青磁碗は中世の石室第２次使用に伴うものである。青磁碗と坏の１点は玄室内で出土し、他は羨道から出土した。埋葬時における葬送儀礼に使用したものであろう。

蓋　１点出土している。**10251**は口径9.6cm、器高3.5cmを測る。胎土は僅かに0.5～１mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。器高は低く、天井部と口縁部との境は不明瞭である。天井部外面にはヘラ切り離し痕跡が残る。「××」のヘラ記号がある。口縁端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。

坏　３点出土している。**10248**は口径8.1cm、器高3.0cmを測る。**10249**は口径8.9cm、器高2.5cmを測る。胎土は僅かに0.5～１mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。底部は浅く、面を有する。体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、内傾する。受部を成形した後に粘土紐を巻付けて横ナデ調整している。底部外面はヘラ切り離し痕跡が残る。**10248**は「××」、**10249**「×」のヘラ記号がある。**10245**はやや小さく、口径7.0cm、器高1.6cmを測る。胎土は僅かに0.5～１mm程の赤色砂粒を含む特徴を持つ。精選した粘土である。色調は黒褐色で軟質である。底部は浅く、面を有する。体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、内傾する。

青磁碗　**10253**は外面に凌蓮弁のある青磁碗である。口径16.8cm、高台径5.5cm、器高6.5cmを測る。胎土は淡青灰色色を呈し、精製している。口縁は外反しながら直線的に立ち上り、口縁端部は丸く仕上げている。高台は削り出しによる。器面全面には厚く暗オリーブ色の釉が施されている。

（3） 2号墳（Fig.198・203～206，PL.84・85・155）

1）位置と現状

3号墳の東5ｍに接するようにある。大半は削平されて残っていない。天井石を欠いた玄室の奥半部だけが残っていた。

2）地山成形

古墳は、石室の中心軸が標高30ｍ前後の等高線に直交するように築造されている。このため、地山整形は周溝と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地作業からなる。墳丘北側の斜面が急勾配であることから、斜面の掘削が大規模であることを知る。

3）墳　丘

僅かに墳丘を残し、巾1.2ｍを測る周溝が玄室を中心として径6ｍでめぐる。墳丘の西部では3号墳の周溝と重複する。

4）横穴式石室

主体部は玄室主軸をＮ－25°－Ｅにとり、南西方向に開口する。削平により石室の規模、形態は不明である。調査では、玄室の一部を検出した。石室規模は、1・4号墳の腰石の規模などから比べても極めて小型で、3号墳と同規模であると推定される。

5）石室掘形

石室掘形は、ほぼ垂直に掘削され、深さ1.1ｍを測る。平面形は検出状況から長方形が推定され、巾2.6ｍを測る。墓壙基底面の壁際には巾0.3ｍを測る溝状の凹みがある。これは石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

6）玄　室

玄室は、前半部が残っていないが、正方形の平面形が推定される。床面は平坦である。奥壁幅1.6ｍ、西側残存壁長1.1ｍ、東側残存壁長1.2ｍ、壁残存高0.9ｍを測る。平坦に地山成形した床面全面には板石が敷かれている。板石は10cm×20cm～25cm×35cmを測る。奥壁は0.6ｍ×0.6ｍ、側壁は0.7ｍ×0.6ｍの山石を配して腰石としている。腰石上部の積み石も、腰石と同規模の山石である。

7）羨道・墓道

削平により残存せず不明である。

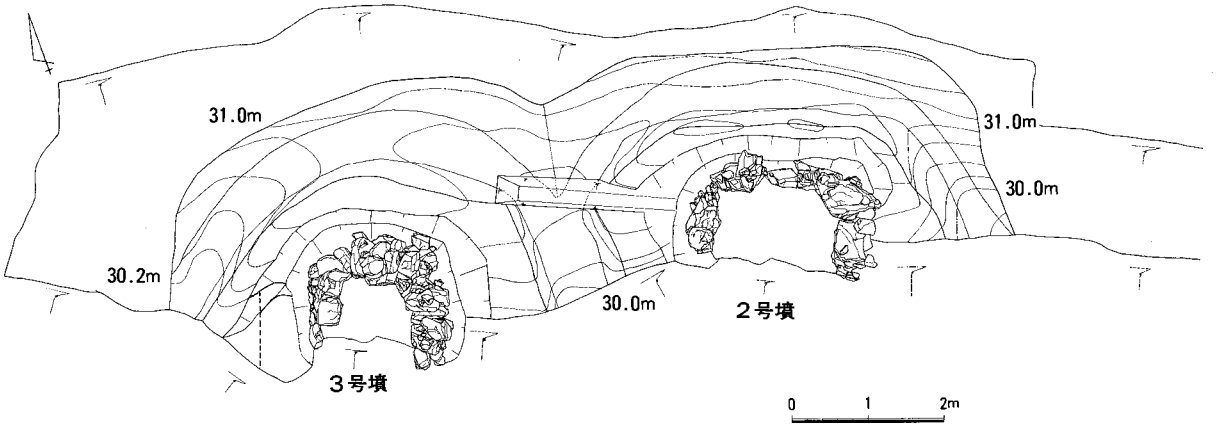


Fig.203　2号墳墳丘実測図(1/100)

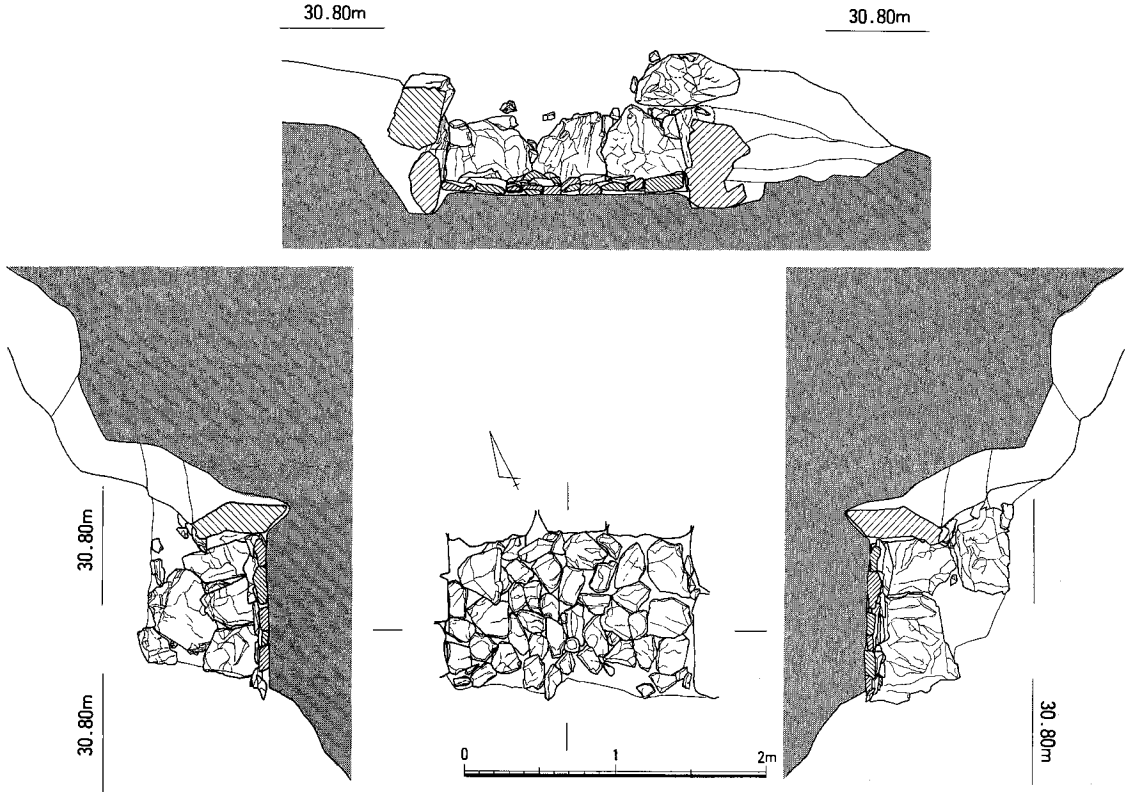


Fig.204　2号墳石室・墳丘土層実測図(1/50)

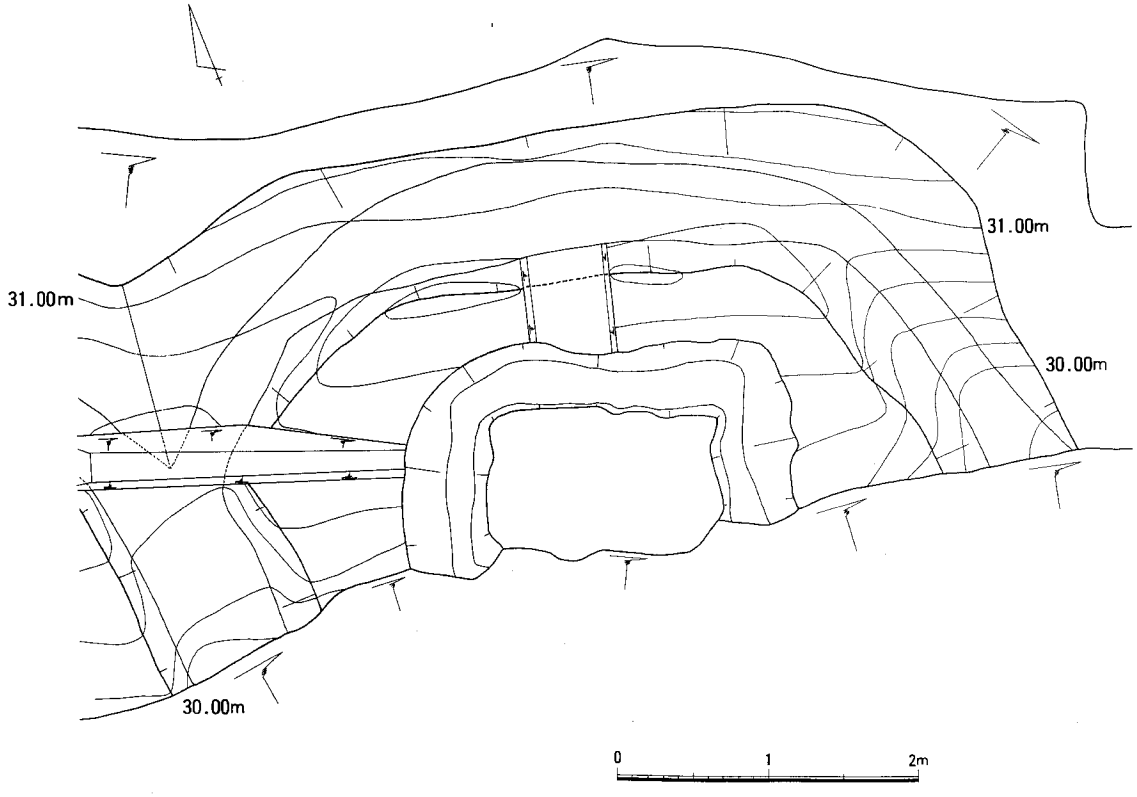


Fig.205　2号墳墓壙・地山整形実測図(1/50)

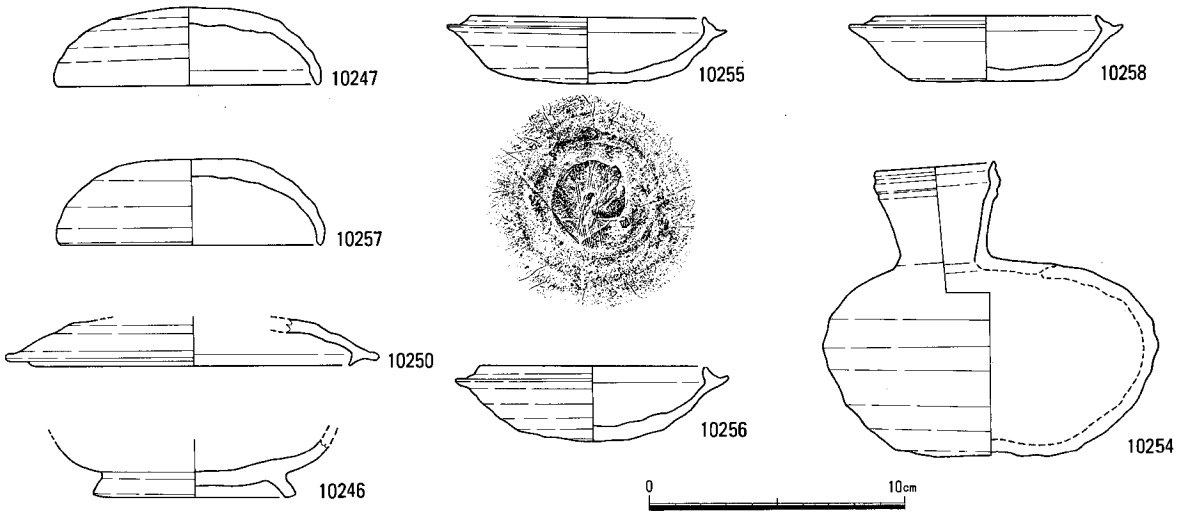


Fig.206　2号墳出土遺物実測図(1/3)

10)　出土遺物

出土した遺物は須恵器の坏、蓋、平瓶、台付の壺か坏である。いずれも玄室内から出土している。

蓋　3点出土している。**10247**は口径10.3cm、器高3.1cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。器高は低く、天井部と口縁部との境は不明瞭である。天井部外面にはヘラ切り離し痕跡が残る。口縁端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。**10257**は口径10.3cm、器高3.4cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は茶灰色を帯びた暗青灰色で焼締まっている。器高は低く、天井部と口縁部との境は不明瞭である。天井部外面にはヘラ切り離し痕跡が残る。口縁端部はヨコナデ調整で丸く仕上げている。**10250**は口縁部に返りを持つ蓋である。復元口径12.2cmを測る胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。

坏　4点出土している。**10255**は口径9.2cm、器高2.6cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。底部は浅く、丸味を有する。体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、内傾する。底部外面はヘラ切り離し痕跡が残る。「××」のヘラ記号がある。**10256**は、口径9.0cm、器高3.1cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色で焼締まっている。底部は浅く、丸味を有する。体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、内傾する。底部外面はヘラ切り離し痕跡が残る。**10258**は口径8.8cm、器高2.6cmを測る。胎土は僅かに0.5～1㎜程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は灰白色で軟質である。底部は浅く、面を有する。体部は直線的に外傾しながら立ち上る。受部は水平に外方へのび、端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。口縁部の立ち上がりは小さく、内傾する。底部外面はヘラ切り離し痕跡が残る。「×」のヘラ記号がある。

平瓶　1点出土している。**10254**は、底径6.8cm、胴部径13.1cm、口径4.7cm、器高11.7cmを測る。底部から胴部下半部までヘラ削り調整している。暗青灰色を呈し焼締まっている。

（4） 3号墳 (Fig.198･207～209, PL.86･87)

1）位置と現状

2号墳の西5mに接するようにある。大半は削平されて残っていない。天井石を欠いた玄室の奥半部だけが残っていた。遺物は出土していない。

2）地山成形

古墳は、石室の中心軸が標高30m前後の等高線に直交するように築造されている。このため、地山整形は周溝と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地作業からなる。墳丘北側の斜面が急勾配であることから、斜面の掘削が大規模であることを知る。

3）墳　丘

僅かに墳丘を残し、巾1.2mを測る周溝が玄室を中心として径6mでめぐる。墳丘の東部では2号墳の周溝と重複するが、2号墳より新しい。

4）横穴式石室

主体部は玄室主軸をN－23°－Eにとり、南西方向に開口する。削平により石室の規模、形態は不明である。調査では、玄室の一部を検出した。石室規模は、1・4号墳の腰石の規模などから比べても極めて小型で、2号墳と同規模であると推定される。

5）石室掘形

石室掘形は、ほぼ垂直に掘削され、深さ1.5mを測る。平面形は検出状況から長方形が推定され、巾2.4mを測る。墓壙基底面の壁際には巾0.4m、深さ0.2mを測る溝状の凹みがある。これは石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

6）玄　室

玄室は、前半部が残っていないが、長方形の平面形が推定される。床面は平坦である。奥壁幅1.0m、西側残存壁長1.1m、東側残存壁長1.2m、壁残存高1.2mを測る。平坦に地山成形した床面全面には板石が敷かれている。板石は5cm×10cm～15cm×25cmを測る。奥壁は0.7m×0.8m、側壁は0.4m×0.5mの山石を配して腰石としている。腰石上部の積み石も、腰石と同規模の山石である。

7）羨道・墓道

削平により残存せず不明である。

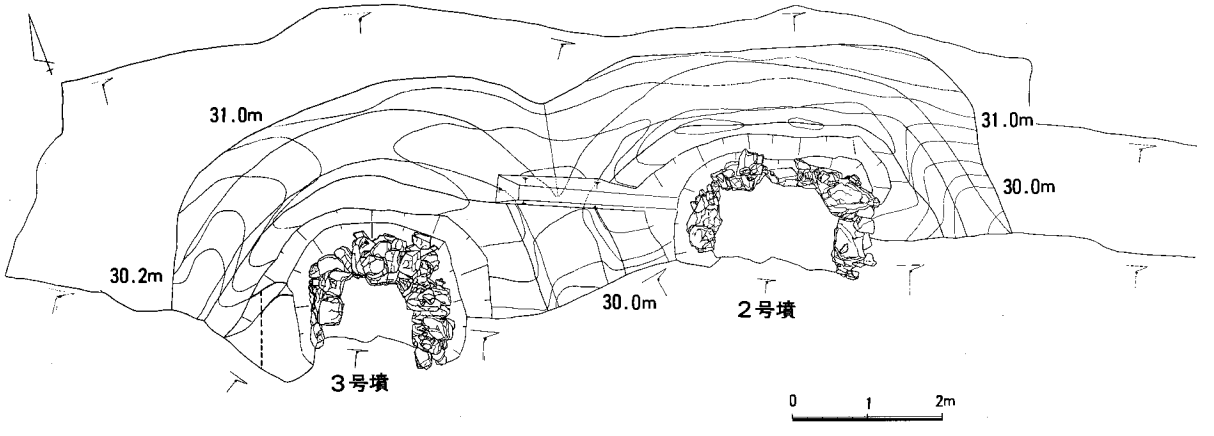


Fig.207　3号墳墳丘実測図(1/100)

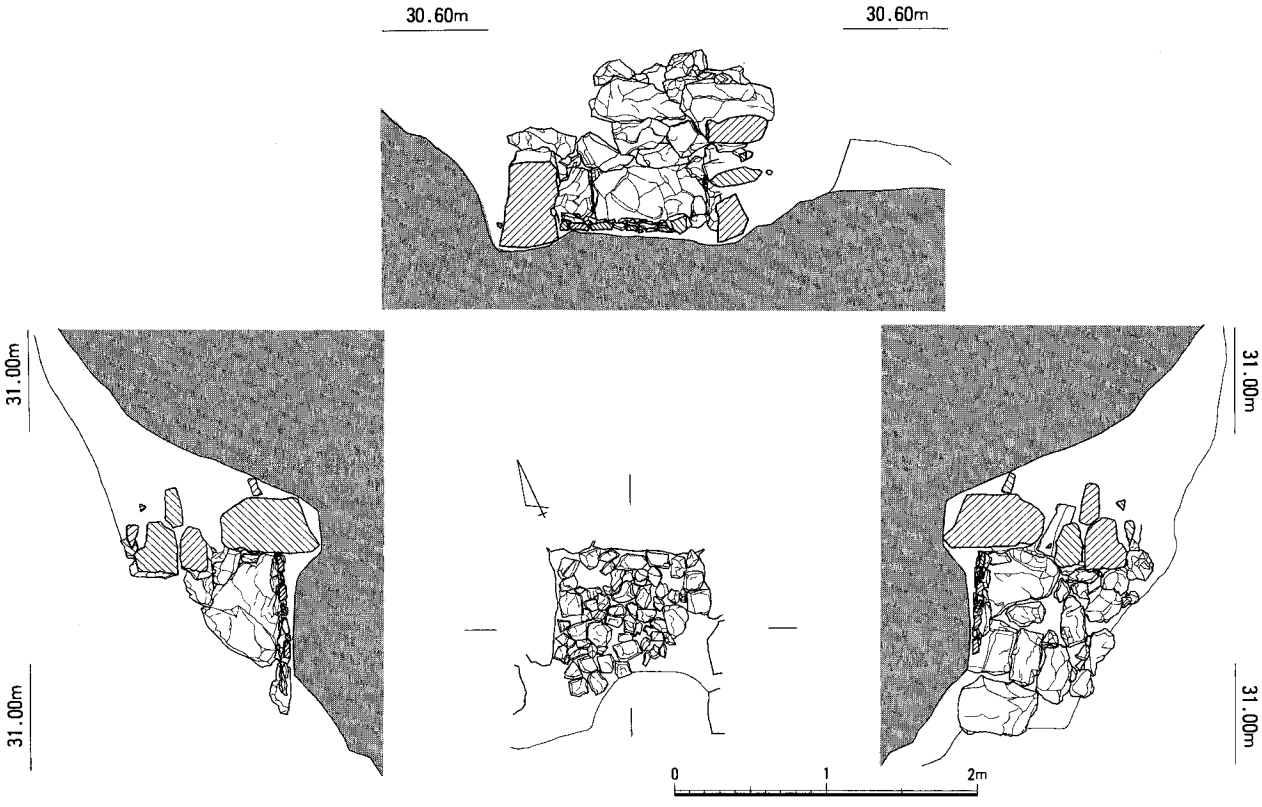


Fig.208　3号墳石室・墳丘土層実測図(1/50)

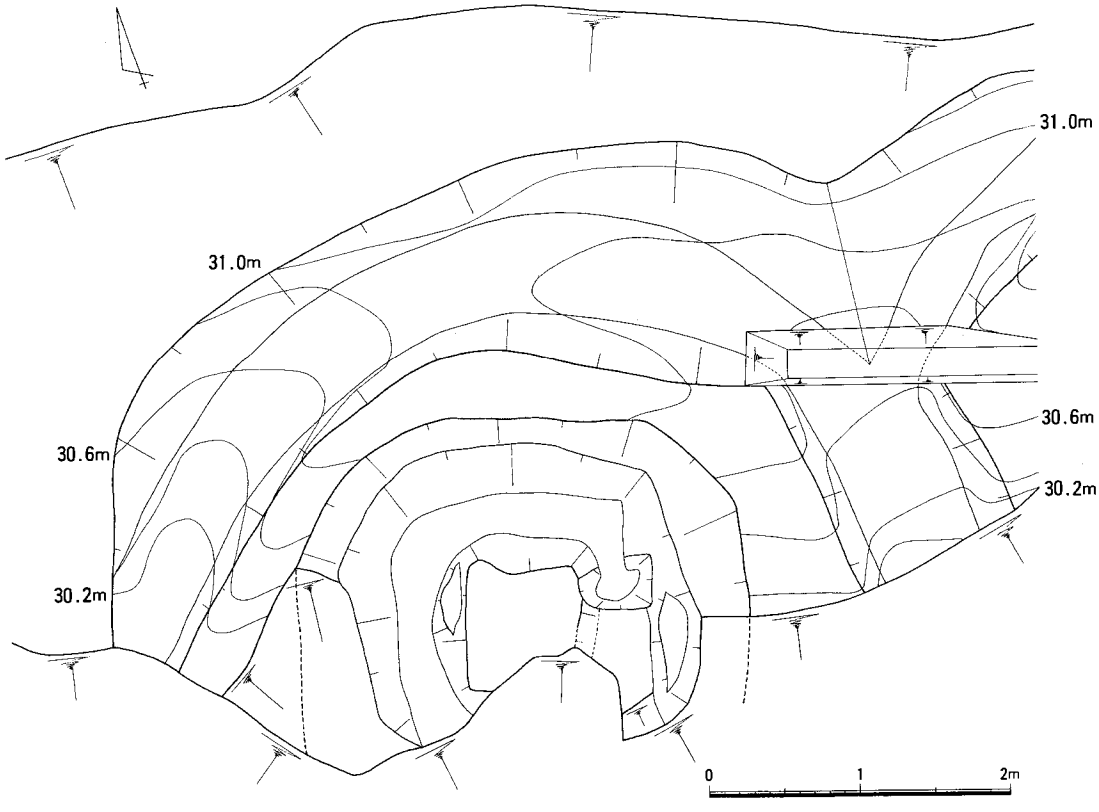


Fig.209　3号墳墓壙・地山整形実測図(1/50)

（５） ４号墳 (Fig.198･210～214, PL.88･89･155)

１）位置と現状

古墳群で最も西に位置し、丘陵南斜面に開口部を南にして築造されている。東に隣接する３号墳とは16ｍ離れている。墳丘は削平を受けて高まりの形跡を残していない。また、石室の前半部および天井部、羨道、墓道も残っていない。

２）地山成形

古墳は、石室の中心軸が標高27ｍ前後の等高線に直交するように築造されている。このため、地山整形は周溝と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地作業からなる。墳丘北側の斜面が急勾配であることから、斜面の掘削が大規模であることを知る。

３）墳　丘

僅かに残る周溝底から墳丘規模が復元できる。巾0.8ｍ、深さ0.6ｍを測る周溝が玄室を中心として径15ｍでめぐる。

４）横穴式石室

主体部は玄室主軸をＮ－22°－Ｅにとり、南西方向に開口する。削平により石室の形態および規模は不明である。調査では、玄室の一部を検出した。石室は腰石を含む下部３～４段ほどだけが残っている。石室残存長は1.85ｍを測る。

５）石室掘形

石室掘形は、ほぼ垂直に掘削され、深さ1.9ｍを測る。平面形は長方形を呈し、巾4.0ｍ、奥行2.5ｍ以上を測る。墓壙基底面の壁際には巾0.5～0.7ｍを測る溝状の凹みがある。これは石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

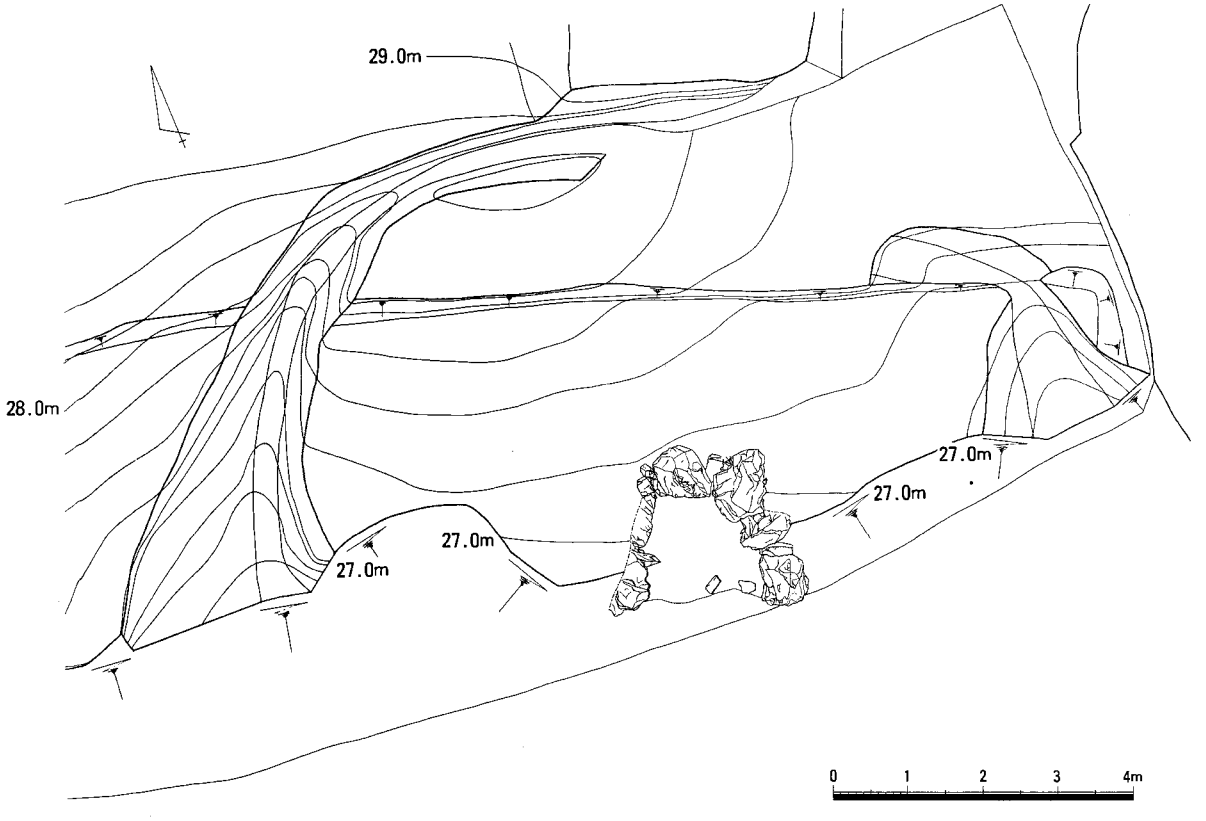


Fig.210　４号墳墳丘実測図(1/100)

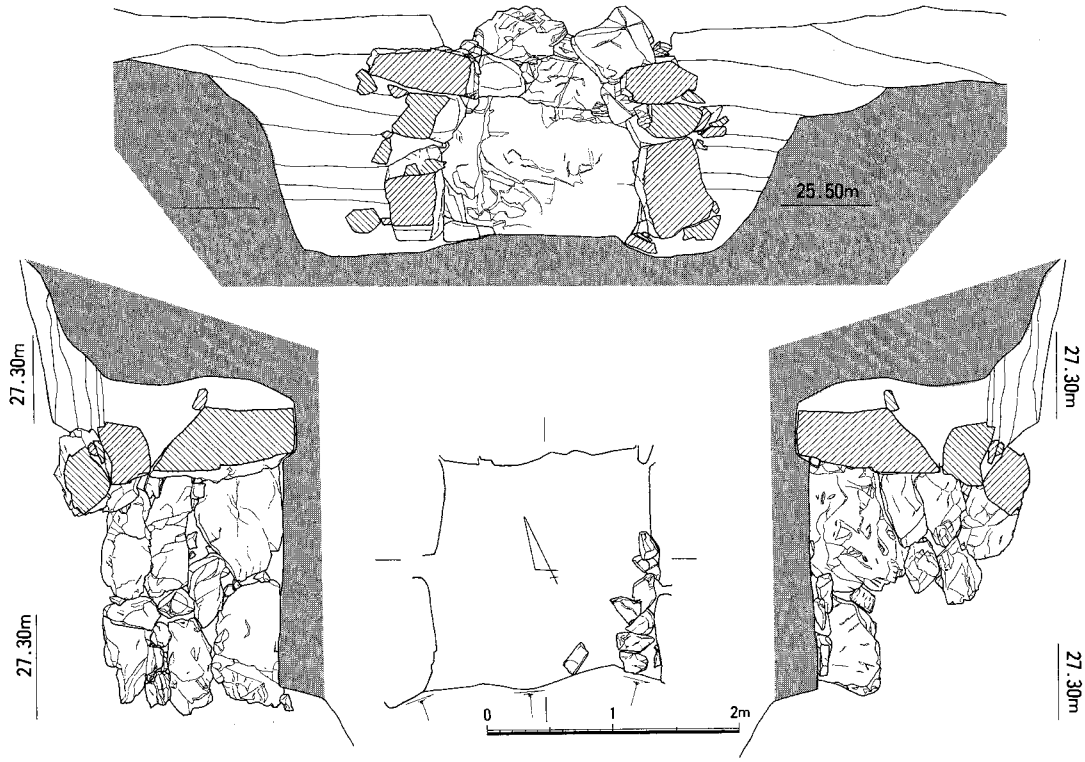


Fig.211　4号墳石室・墳丘土層実測図(1/60)

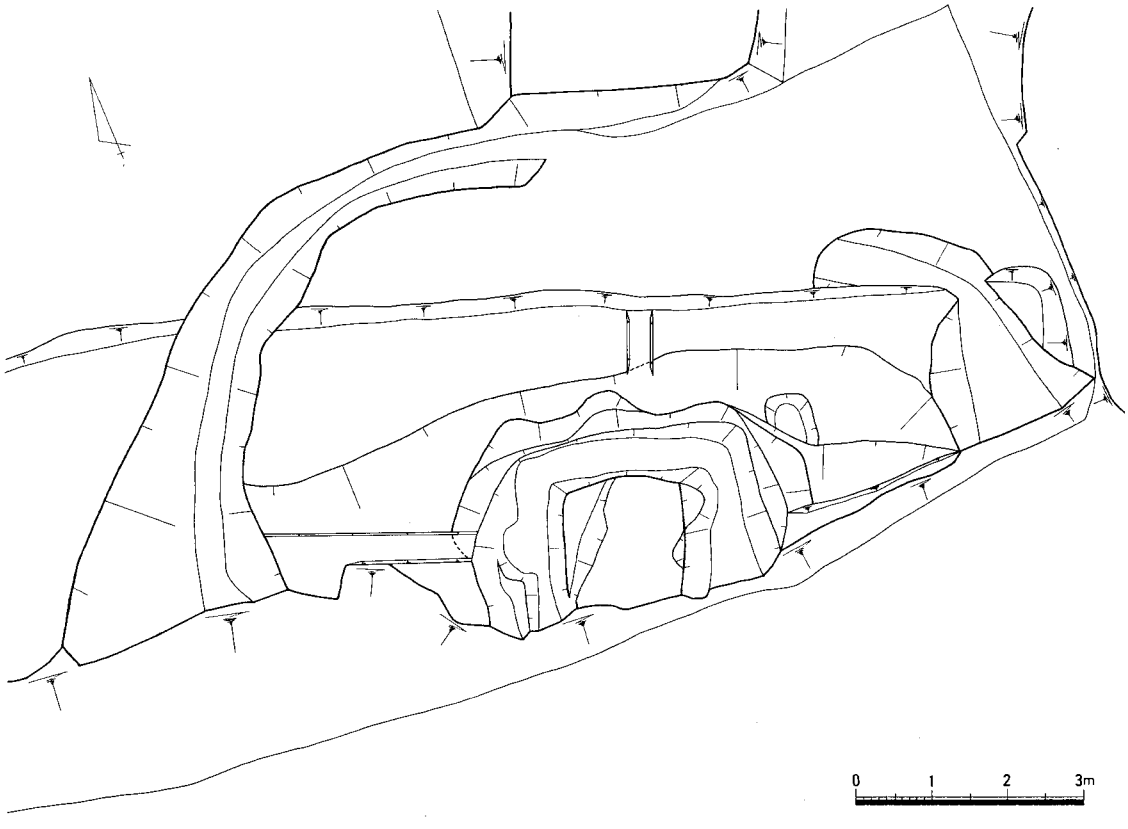


Fig.212　4号墳墓壙・地山整形実測図(1/100)

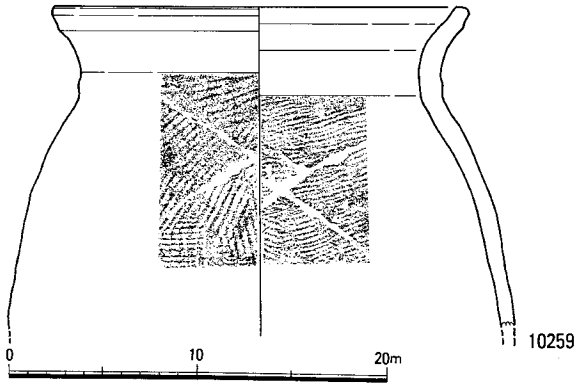


Fig.213　4号墳出土遺物実測図(1/4)

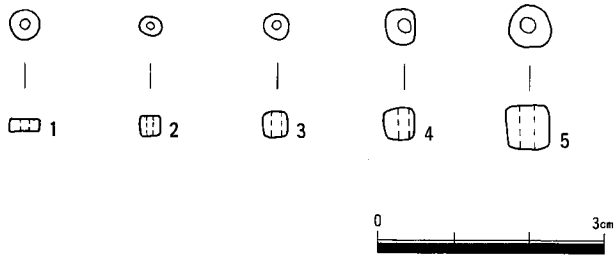


Fig.214　4号墳出土ガラス製品実測図(1/1)

6）玄　室

玄室は、平面形は不明であるが長方形である可能性が高い。床面は平坦である。奥壁幅1.6m、西側残存壁長2.1m、東側残存壁長1.9m、壁残存高1.7mを測る。床面の一部には板石があることから、玄室床面全面に板石が敷かれていた可能性が高い。奥壁は1.2m×1.6m、側壁は1.2m×0.7m前後の山石を配して腰石としている。

7）羨道・閉塞施設・墓道

削平により残存していない。

8）石室構築順序

残存する積み石と裏込めの墳丘土の堆積状況から古墳石室の構築順序を知ることができる。基本的には石室を一段積み上げるたびに裏込めの土を石の上端部まで突き固め、さらに石の倒壊を防ぐため石室内も土で充填する。この作業を天井石の設置まで繰り返し行い、天井石を据え付けた後に、石室内に充填させていた土を取り除く。

9）出土遺物

出土した遺物は土師器質の甕、ガラス玉、滑石製玉である。甕は西側周溝から、ガラス玉と滑石製玉は石室内から出土した。

甕　**10259**は口径21.8cm、胴部径26.8cmの土師器質の甕で、胴部下半を欠く。口縁部は直線的に外彎しながら立ち上がる。端部は横ナデ調整により丸く仕上げる。胴部には外面に平行叩き目、内面には当て具の痕跡が残る。

玉類　1は滑石製の平玉である。2～5は青色のガラス玉で外径が2.5mm～6mmを測る。

4．御飯ノ山城

（1） 位置と概要

香椎宮あたりから東へつづく谷には古代から中世の遺跡である香椎B遺跡が所在する。この谷に面する北側に標高91mの御ノ飯山（老ノ山）があり、山頂に御飯ノ山城が立地する。御飯ノ山は海岸線から1.5km、香椎宮から東に600mの位置にあり、宗像地域から博多への陸路に面するとともに、山頂からは立花山はもちろん、玄界灘、博多湾、福岡平野、津屋崎、大宰府を全望できる要所の地である。

調査では、山城の全容が明らかになった。主郭は単郭で、その周囲には堀切、竪堀、小郭の防御施設が配置される。主郭内には7棟の掘立柱建物や柵列、複雑な構造を呈する出入り口には門と櫓がある。また、山城の南麓に位置する舘と山城とを一条の竪堀・堀がめぐる。山城の最終形状は16世紀の第4四半世紀に整ったものであるが、山頂部の使用は遅くとも14世紀前半期には行なわれていることが出土遺物から明らかになった。

（2） 遺 構

1） 主 郭

造成地業

主郭は単郭で、長方形に近い敷地は東西50m、南北12mを測る。敷地は山頂部を基盤層の三郡山変成岩に達しても更に掘り下げ、その際に発生した排土を主郭の周囲、おもに西側の背上に水平に積み上げている。この工法は、掘削して造りだした敷地の他、排土を斜面に積み上げることによって新たな敷地も同時に得ることができ、最小限の労力でより高い効果を得ることができる。更にこの工法の利点は、排土の処理も同時に解決できる点にある。ちなみに、斜面に盛られた造成土で最も高いところは3mを測る。また、造成の際には、周縁部の斜面が反り返るように築造している。主郭の西と東の斜面には稜線がそれぞれに2カ所づつあり、隅角部を意識して築城している。造成土の最下部には炭が堆積し、造成土内からは12～14世紀の遺物が出土している。

柵（SA）

SA08（Fig.220, PL.102,103）

主郭中央の南辺、SB01の南に位置する。掘立柱の東西柵列で、南縁から1mほど内側を直線的に設けている。全長は21.4m（11間分）で、柱間は1.6～2.2mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径25～40cm、底面で径15～20cm、深さ40～50cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。

SA09（Fig.220, PL.102,103）

主郭中央の南辺、SB01の南に位置する。掘立柱の東西柵列である。全長は3.75m（2間分）で、柱間は1.82～1.95mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径29～34cm、底面で径17～20cm、深さ40～50cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。

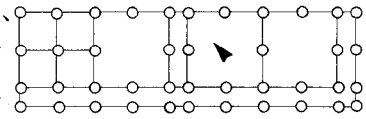
SA10（Fig.220, PL.102,103）

主郭東半部北辺、SB06の北に位置する。掘立柱の東西柵列で、縁から1～1.5mほど内側を直線的に設けている。全長は6.67m（4間分）で、柱間は1.65～1.80mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径27～34cm、底面で径12～18cm、深さ45～50cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である

掘立柱建物・門（SB）

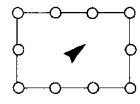
SB01（Fig.220, PL.102,103,104）

主郭の中央に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行9間(16.30m)、梁行2間(4.88m)の母屋の東と南の両面に廂がつく。桁側柱列の中央間が他の柱間の半分である。柱間寸法は桁行の中央間が0.95～1m、他の桁行は1.86～1.93m、梁行2.45～2.50mと不揃いである。廂の出は1.20～1.30m。廂の柱穴は母屋に比べて小型である。柱の掘形は円形の平面形を呈し、母屋の建物は上面で径50～60cm、底面で径25～35cm、深さ85～100cmを測り、廂は上面で径40cm、底面で径25～30cm、深さ60～80cmを測る。断面形はともに逆裁頭円錐形である。



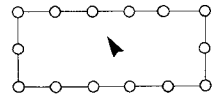
SB02（Fig.220, PL.102,103,105-1）

主郭の西半部中央、SB01の西に位置する南北棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.52m)、梁行2間(3.68m)で、柱間寸法は桁行1.71～1.95m、梁行1.74～1.92mと不揃いである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径22～30cm、底面で径15～20cm、深さ30～70cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。掘立柱建物SB03・05と重複する。



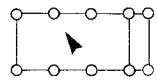
SB03（Fig.220, PL.102,103,105-2）

主郭西半部中央、SB01の西、SB05の南に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行5間(10.08m)、梁行2間(4.58m)で、柱間寸法は桁行1.88～2.10m、梁行2.20～2.36mと不揃いである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径40～50cm、底面で径22～30cm、深さ70～110cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。掘立柱建物SB02と重複する。



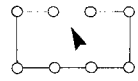
SB04（Fig.220, PL.102,103,105-4）

主郭の中央部に位置する東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.83m)、梁行1間(2.98m)の母屋の東面に廂がつく。柱間寸法は桁行1.90～2.00m、梁行2.20～2.36mである。廂の出は0.97mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径25～40cm、底面で径18～22cm、深さ55～88cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。掘立柱建物SB01と重複する。



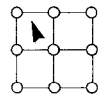
SB05（Fig.220, PL.102,103,105-5）

主郭の西半部北辺部、SB01の西、SB03の北にある東西棟の掘立柱建物である。桁行3間(5.82m)、梁行1間(2.98m)で、柱間寸法は桁行1.94m、梁行2.98mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径30～40cm、底面で径20～25cm、深さ70～92cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。掘立柱建物SB02と重複する。



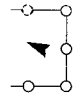
SB06（Fig.220, PL.102,103,105-3）

主郭東半部、SB01の東に位置する総柱の掘立柱建物である。桁行2間(3.90m)、梁行2間(3.90m)で、柱間寸法は桁行、梁行とも1.95mである。柱の掘形は円形の平面形を呈し、上面で径28～40cm、底面で径16～25cm、深さ25～60cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。SX11と重複する。



SB07（Fig.220, PL.102,103）

主郭西辺部、造成盛土の上に築造した掘立柱建物で、東妻柱側と桁側柱1間分を確認した。桁行2間以上(3.70m以上)、梁行2間(3.75m)で、柱間寸法は桁行1.85m、梁行1.85～1.90mである。柱の掘形は、円形の平面形を呈し、上面で径30～40cm、底面で径20～24cm、深さ52～60cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。



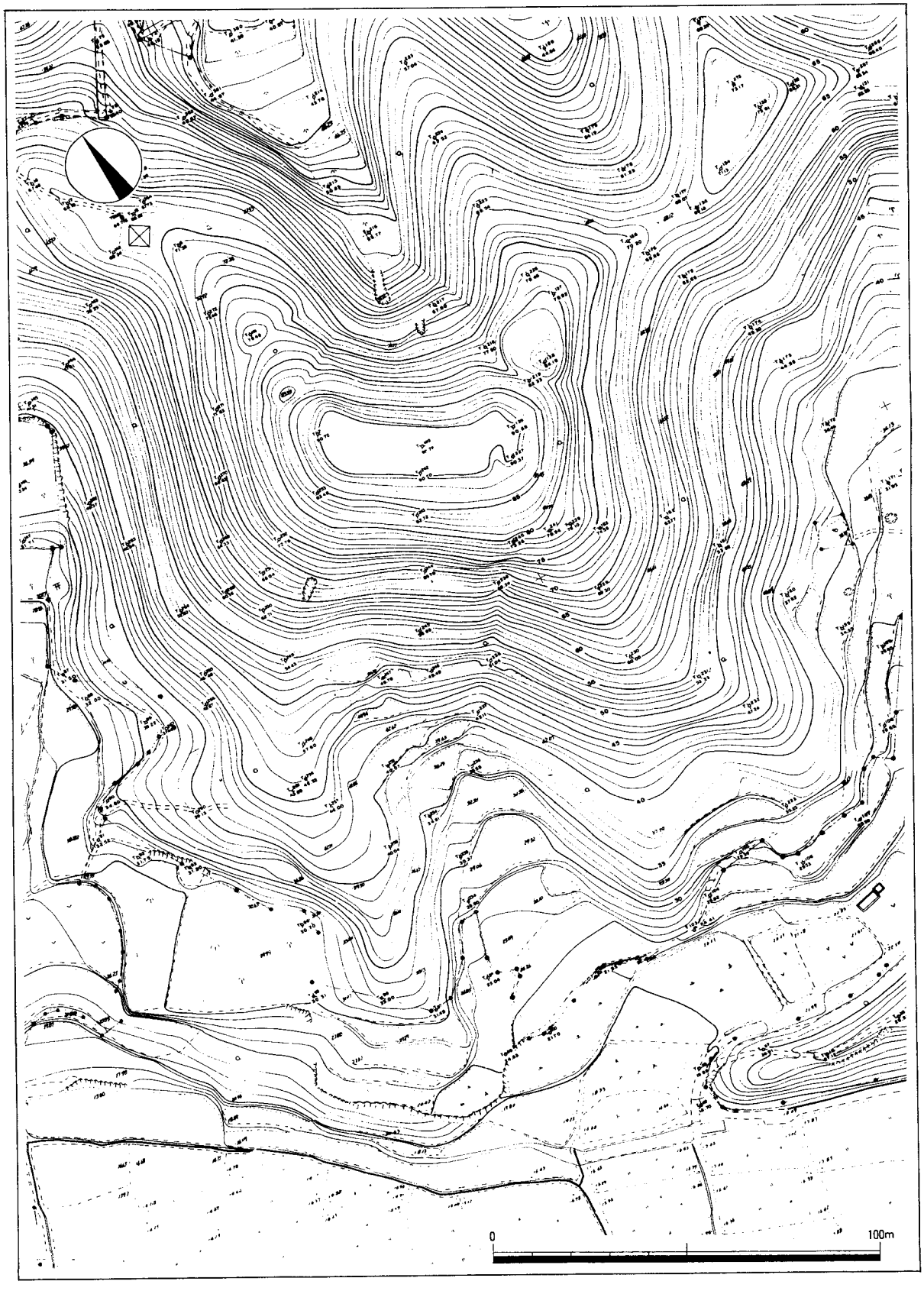


Fig.215　御飯ノ山城現況地形図(1/1,500)

Fig.216　御飯ノ山城地形図(1/1,500)

SB13 (Fig.220,227,230, PL.106-1,107-3・4)

虎口の第1平坦部と第2階段部との境にある二本の掘立柱からなる門である。階段壁際に円柱形の柱穴は、円形の平面形を呈し、上面で径80cm、底面で径55～60cm、深さ147cmを測る。2本の柱穴は内側に傾き、ハの字状となる。SB14と連結していたと考えるのが妥当であろう。

SB14 (Fig.220,227,230, PL.106-1,107-3・4)

虎口第2階段部の北半部に位置する掘立柱建物で、SB13と接合して一体化した施設と思われる。桁行2間(1.86～2.12m)、梁行1間(1.60～1.75m)である。柱間寸法は不揃で、桁行0.86～1.12m、梁

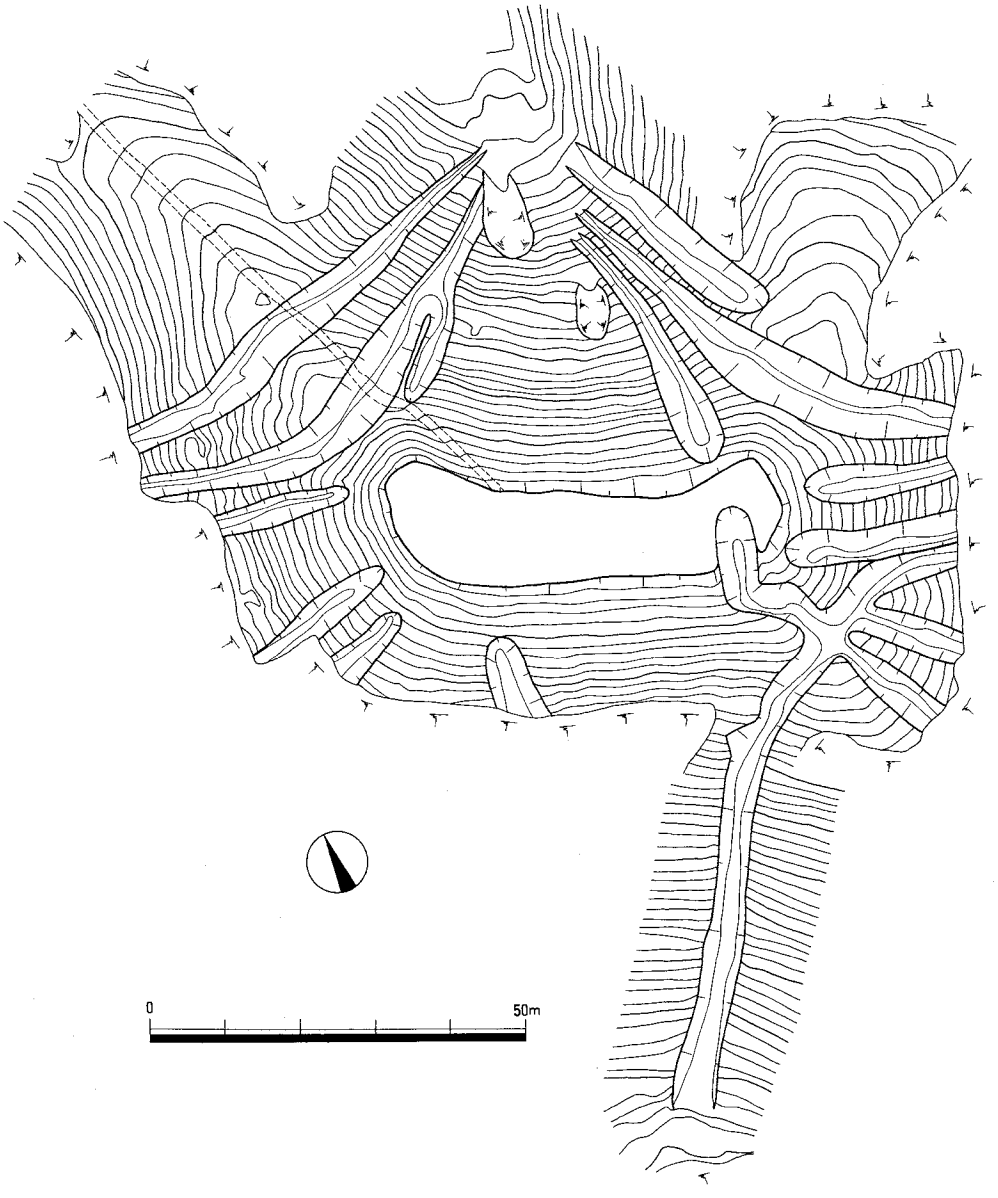


Fig.217 御飯ノ山城現況地形図(1/1,000)

行1.60～1.75ｍを測る。柱の掘形は、階段の壁際に沿って掘っている。円形の平面形を呈し、上面で径35～40cm、底面で径20～25cm、深さ45～70cmを測る。断面形は逆裁頭円錐形である。設置位置などから、この建物は門と一体化した櫓と考えられる。門からの出は2.52～3.01ｍである。

この門から張出す櫓の設置により、通路から攻め込む敵への攻撃機能が飛躍的に向上する。特に、第２平坦部の深い壁に身を隠すことを不可能にする。すなわち、この城の特色は、出櫓、折れ曲る通路、小郭２とを組合わせることにより、出入り口における防御機能の相乗効果を意識的に高めている点にある。

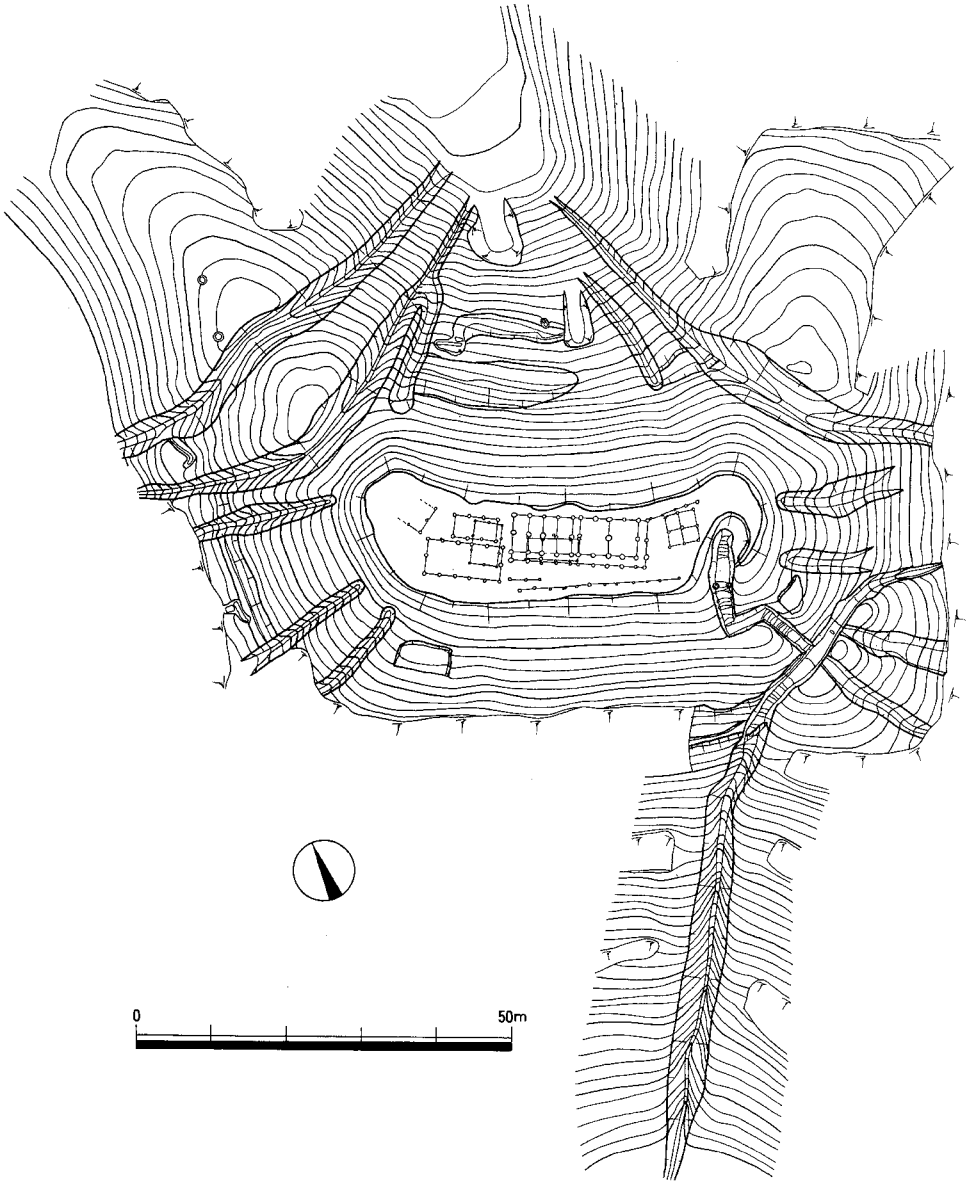


Fig.218　御飯ノ山城遺構配置図(1/1,000)

溝状遺構（SX）

SX11（Fig.220, PL.102,103）

主郭東半部中央、SB06の東側柱と重複する。主郭敷地の長軸方向と直交して、岩盤を断面形が半円形に掘り下げている。全長5.38m、幅30～40cm、深さ10～17cmを測る。

SX12（Fig.220, PL.102,103）

主郭東半部中央、SB06の東側柱と重複する。主郭敷地の長軸方向と直交して、岩盤を断面形が半円形に掘り下げている。全長5.38m、幅30～40cm、深さ10～17cmを測る。

SX13（Fig.220, PL.102,103）

主郭東半部中央、SB06の東側柱と重複する。主郭敷地の長軸方向と直交して、岩盤を断面形が半円形に掘り下げている。全長5.38m、幅30～40cm、深さ10～17cmを測る。

2）小　郭

小　郭　1（Fig.219, PL.97,99,115-1～3）

北斜面中位、竪堀20と21とに挟まれる位置にある。斜面を削り出して平坦地とする。小郭の規模は幅4.6m、奥行2.5mを測る。小郭の東は、堀切4と竪堀20との間に1.3mの段差がある。

小　郭　2（Fig.219, PL.115-6）

東斜面中位、虎口第3階段と竪堀17とに挟まれる位置にある。斜面を開削して造成しているが、小郭1ほどの明瞭な痕跡ではない。幅4.0m、奥行2.5mを測る。

小　郭　3（Fig.219, PL.115-7）

南斜面竪堀9の東、主郭周縁から6m下位に位置する。斜面を開削して造成しているが、小郭1ほどの明瞭な痕跡ではない。幅7.0m、奥行2.0mを測る。

3）虎　口（出入り口）（Fig.220,227, PL.101,103,106-1～5,107-1～8）

出入り口は主郭の東南部に位置し、地山岩盤を幅1.2m前後、深さ0.8m～2.1mの箱堀状に掘り下げて設けている。主郭東南隅と堀切3の中央部との比高差10.4mの間は、3箇所の削出し階段と2箇所の平坦部とを交互に組合せて構成する。途中の第2階段部と第2平坦部、第2平坦部と第3階段部のそれぞれの接合点では直に折れ曲がり、防御機能を高めている。第3階段部に面して小郭2があるのは、このためである。第1階段部は底幅1.0～1.3m・全長4.2m・比高差1.5m、第1平坦部は長さ3.1m・比高差0.3m、第2階段部は底幅1.3～1.9m・全長6.8m・比高差3.9m、第2平坦部は底幅1.1～1.2m・全長5.4m・比高差0.6m、第3階段部は底幅1.2～1.25m・全長8.8m・比高差4.1mを測る。第2階段部には門と櫓を設けている。

4）堀　切・竪　堀

堀　切　1（Fig.216,218,219, PL.108,109-1～3）

北側の尾根に設けた二重堀切の外側の堀で、地山岩盤の圭質変岩をV字形の断面形に掘り下げた薬研堀である。堀底は、幅が20cmを測り、堀北壁が急激に立ち上がるために人一人が通るのがやっとなほど狭い。堀は、両側の斜面ともに上部と下部とで傾斜角が異なっていることから堀の埋土がこれら堀斜面上部の崩落土であることは確かで、開削時の姿を残しているのは堀底だけである。規模は、堀底から北側堀肩までの斜距離3.81m、水平距離は2.85m、比高差2.55m、最大傾斜角度は69°、平均傾斜角度は45°。堀底から南側堀肩までの斜距離7.01m、水平距離は4.90m、比高差5.1m、平均傾斜角度

は55°。復原した堀の幅は6.4から7.2mである。

堀　切　2 (Fig.216,218,219, PL.108,109-4～7)

北側の尾根に設けた二重堀切の内側の堀である。堀は断面形がV字形を呈する、いわゆる薬研堀である。堀の規模は、堀底から主郭縁までの斜距離13.3m、水平距離9.5m、比高差9.3m。平均傾斜角度は45°を測る。堀底から堀岸（肩）の尾根を削り込んだ地点までの斜距離4.1m、水平距離は3.0m、比高差2.6m、平均傾斜角度は46°を測る。主郭縁から堀岸の尾根を削り込んだ地点、いわゆる堀の斜距離は14.2m、水平距離は12.5m、比高差6.7mを測る。堀切1と2との堀底間の距離は16.1mである。

堀　切　3 (Fig.216,218,219, PL.,110-1～3)

南側の尾根に圭質変岩の岩盤を掘り下げて設けた堀で、堀底が平坦面を呈する、いわゆる箱堀である。堀の壁は直に立ち上がる。山側での壁の高さは2.5～3.5mで、堀底の幅は1.2mを測る。山裾にある館から山城への通路の役割を有する。

堀　切　4 (Fig.216,218,219, PL.98,110-4～7)

東側の尾根に設けた堀である。堀は、断面形がV字形を呈する、いわゆる薬研堀である。堀の規模は、堀底から主郭縁までの斜距離15.27m、水平距離11.8m、比高差9.7m。傾斜角度は、底から高さ2.3mまでは51°、それ以上は40°を測る。堀底から堀岸（肩）の尾根を削り込んだ地点までの斜距離5.1m、水平距離は4.0m、比高差3.3m、平均傾斜角度は42°。主郭縁から堀岸の尾根を削り込んだ地点、いわゆる堀の斜距離は17m、水平距離は15.8m、比高差6.4mを測る。

竪　堀　1 (Fig.216,218,219, PL.92,111-1～2)

北側の尾根を横断して掘り下げた堀切1から西斜面直下に続く薬研堀である。幅は3.5～4m、底幅は0.5mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　2 (Fig.216,218,219, PL.92,108,111-3～4)

北側の尾根を横断して掘り下げた堀切1から東斜面直下に続く薬研堀である。幅は2.5～4m、底幅は0.3mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　4 (Fig.216,218,219, PL.92,111-5～6)

北側の尾根を横断して掘り下げた堀切2から西斜面直下に続く薬研堀である。幅は2.0～4.5m、底幅は0.5mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　5 (Fig.216,218,219, PL.108,111-7～8)

北側の尾根を横断して掘り下げた堀切2から東斜面直下に続く薬研堀で、斜面中位で竪堀7と合流する。幅は2.0～4m、底幅は0.3mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　6 (Fig.216,218,219, PL.92,112-1～2)

山城の西斜面、主郭周縁から6m下位から直下し、竪堀4と並行する薬研堀である。幅は1.5～4.0m、底幅は0.5～1.0mを測る。堀の両側に高まりは認められない。竪堀4との間隔、堀底間で6m。

竪　堀　7 (Fig.216,218,219, PL.92,108)

山城の北斜面、主郭周縁から6m下位から直下し、竪堀5と合流する薬研堀である。幅は3.5～4m、底幅は0.5～1.0mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　8 (Fig.216,218,219, PL.92,112-3～4)

山城の西斜面、主郭周縁から6m下位から直下する薬研堀である。幅は1.8～2.0m、底幅は0.5mを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　9 (Fig.216,218,219, PL.92,112-5～6)

山城の西斜面と北斜面との境、主郭周縁から６ｍ下位から直下する薬研堀である。幅は1.2～1.8ｍ、底幅は0.5ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　12 (Fig.216,218,219, PL.92,113-1～5)

堀切３から南斜面直下に続く薬研堀である。山裾で堀SD258となる。幅は3.5～4.5ｍ、底幅は0.5ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　14 (Fig.216,218,219, PL.92,98)

堀切３から東斜面を直下する薬研堀である。幅は２～2.5ｍ、底幅は0.5～1.5ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　15 (Fig.216,218,219, PL.92,98)

堀切３から東斜面を直下する薬研堀である。幅は1.5～３ｍ、底幅は１～1.5ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　16 (Fig.216,218,219, PL.92,98)

堀切３から東斜面直下に続き、箱堀から薬研堀になる。幅は1.5～２ｍ、底幅は0.5～1.2ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　17 (Fig.216,218,219, PL.92,98)

山城の東斜面、主郭周縁から６ｍ下位から直下する薬研堀である。幅は2.5～3.0ｍ、底幅は1.0ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　18 (Fig.216,218,219, PL.92,98)

山城の東斜面、主郭周縁から４ｍ下位から直下する薬研堀である。幅は2.5～3.0ｍ、底幅は1.0ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　19 (Fig.216,218,219, PL.92,114-1～2)

堀切４から西斜面直下に続く薬研堀である。幅は2.5～4ｍ、底幅は0.5～１ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

竪　堀　20 (Fig.216,218,219, PL.92,114-3～4)

堀切４から東斜面直下に続き、小郭１の東側縁を通る薬研堀である。幅は1.8～5ｍ、底幅は0.5～１ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

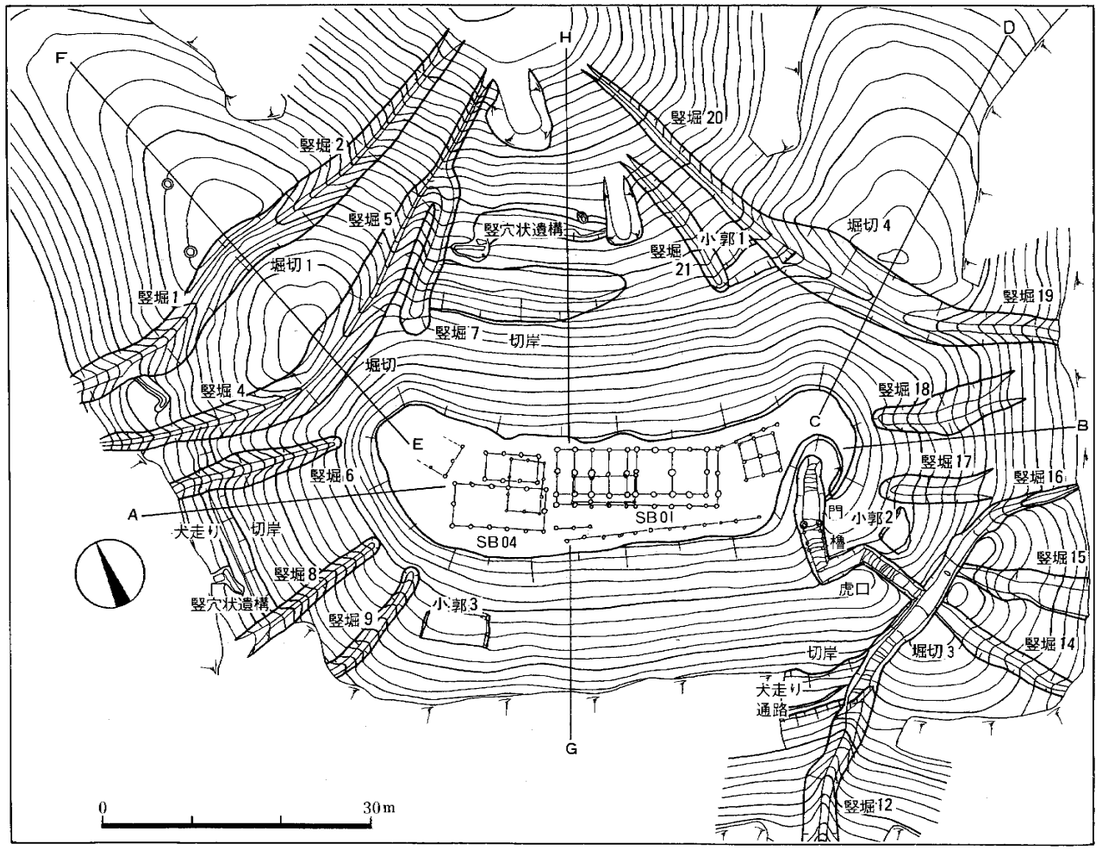
竪　堀　21 (Fig.216,218,219, PL.92,114-5～6)

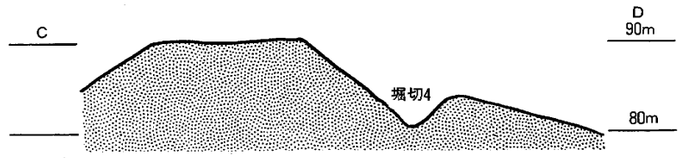
山城の北斜面、小郭１の西側縁から直下する薬研堀である。幅は2.0ｍ、底幅は0.5ｍを測る。堀の両側に高まりは認められない。

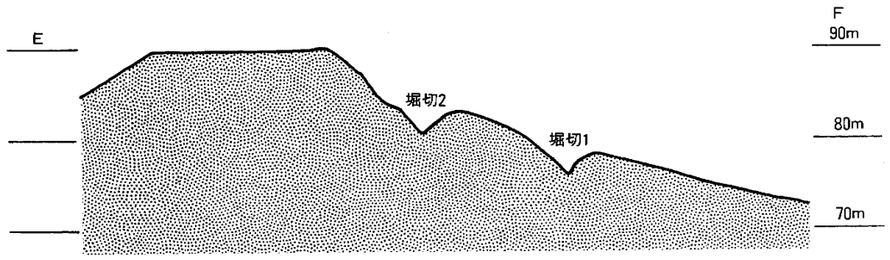
5)　切　岸 (Fig.216,218,219, PL.97,99,117)

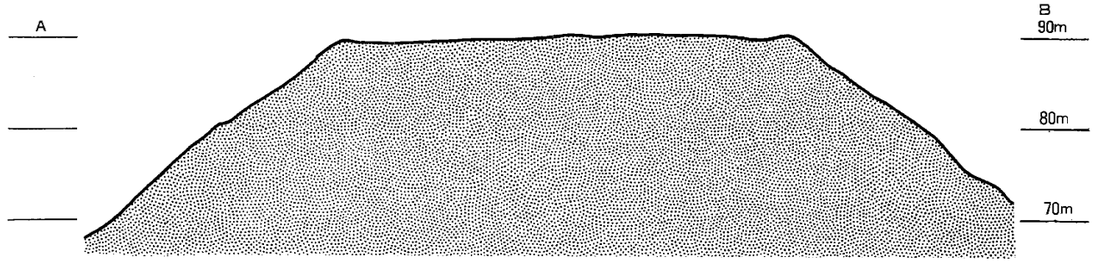
切岸は、山城の場所の違いにより２種類の工法を使い分けている。Ⅰ型は山肌の岩盤を急勾配に削り出すものである。したがって、この型の裾部には犬走りが伴う。南と西の斜面では、竪堀４から竪堀12までの標高72～74ｍの岩盤を高さ3.5～4ｍ、傾斜角度54°前後に削り出している。北斜面では竪堀７から東へ20ｍにわたって、標高77ｍの岩盤を高さ3.0ｍ、傾斜角度50°前後に削り出している。Ⅱ型は斜面に土・石などを積み上げて勾配を急にするもので、主郭周縁の直下に見られる。主郭の拡張事業に伴い発生する排土を周囲の斜面に積み上げて築造し、高さ4～5ｍ、傾斜角度55°前後を測る。西斜面を中心にその状況が良好に残っている。この工法では犬走りを伴わない。

斜面の傾斜角度は40°～47°であることから、切岸の斜面が急勾配であるかが判る。









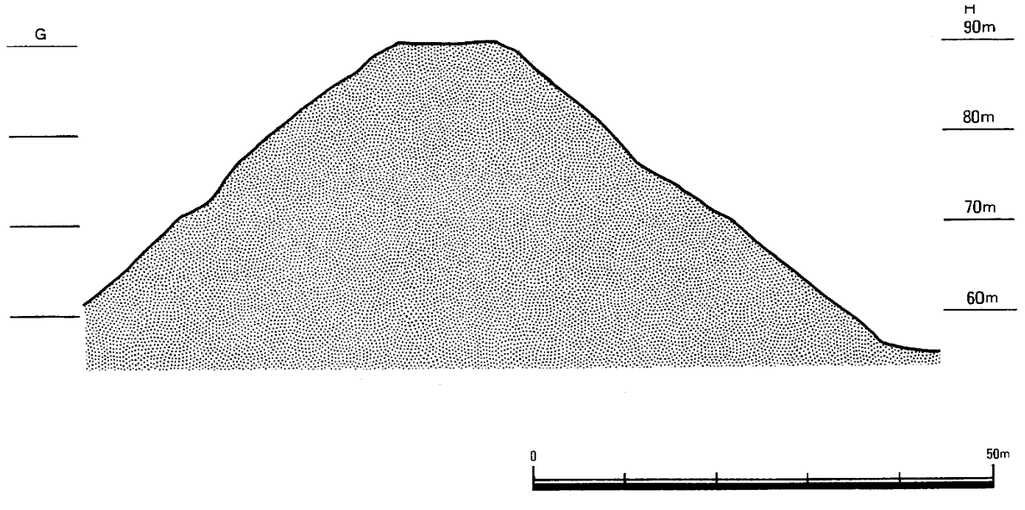


Fig.219　御飯ノ山城遺構配置図(1/700)

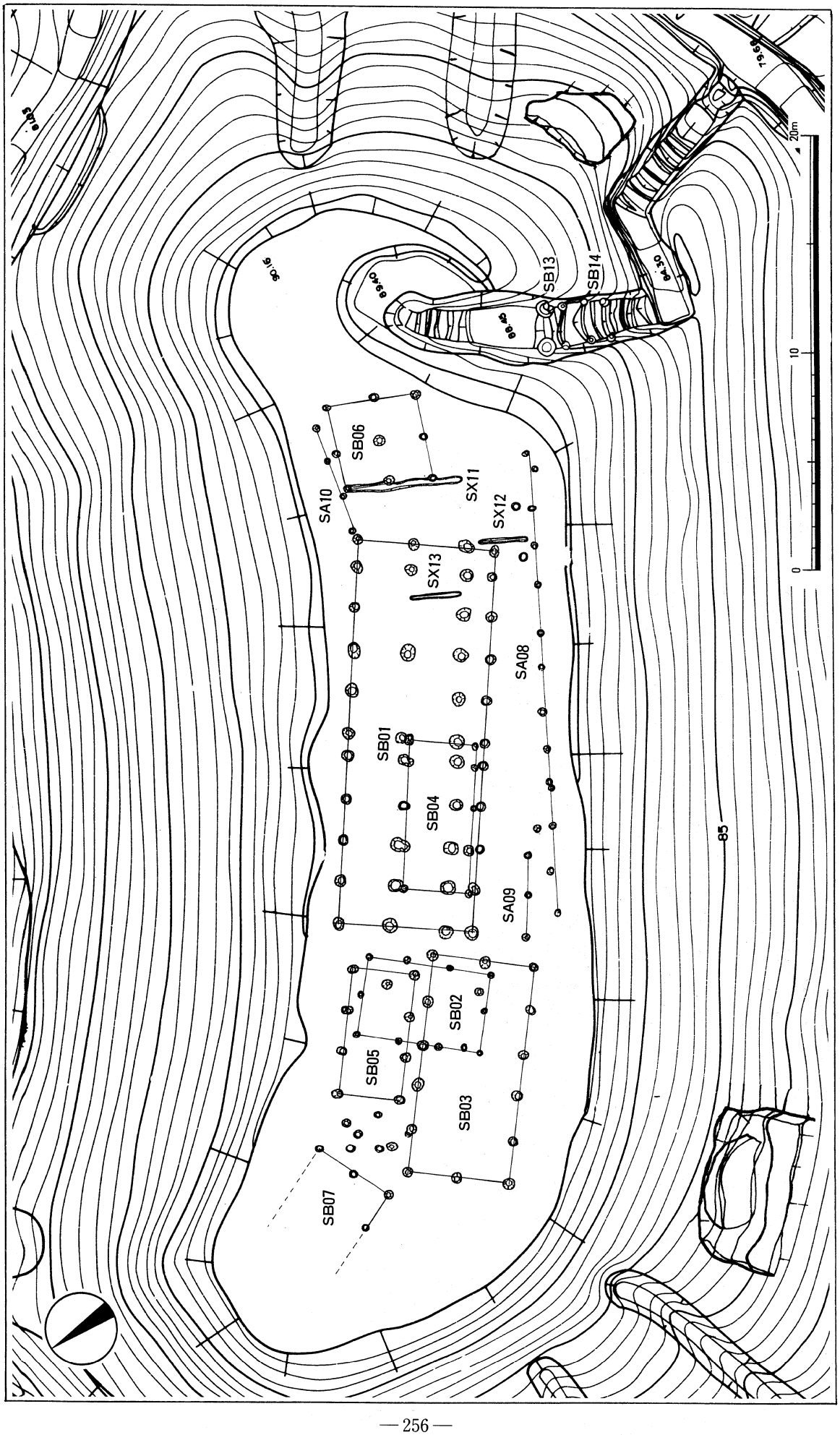


Fig.220　御飯ノ山城主郭遺構配置図(1/250)

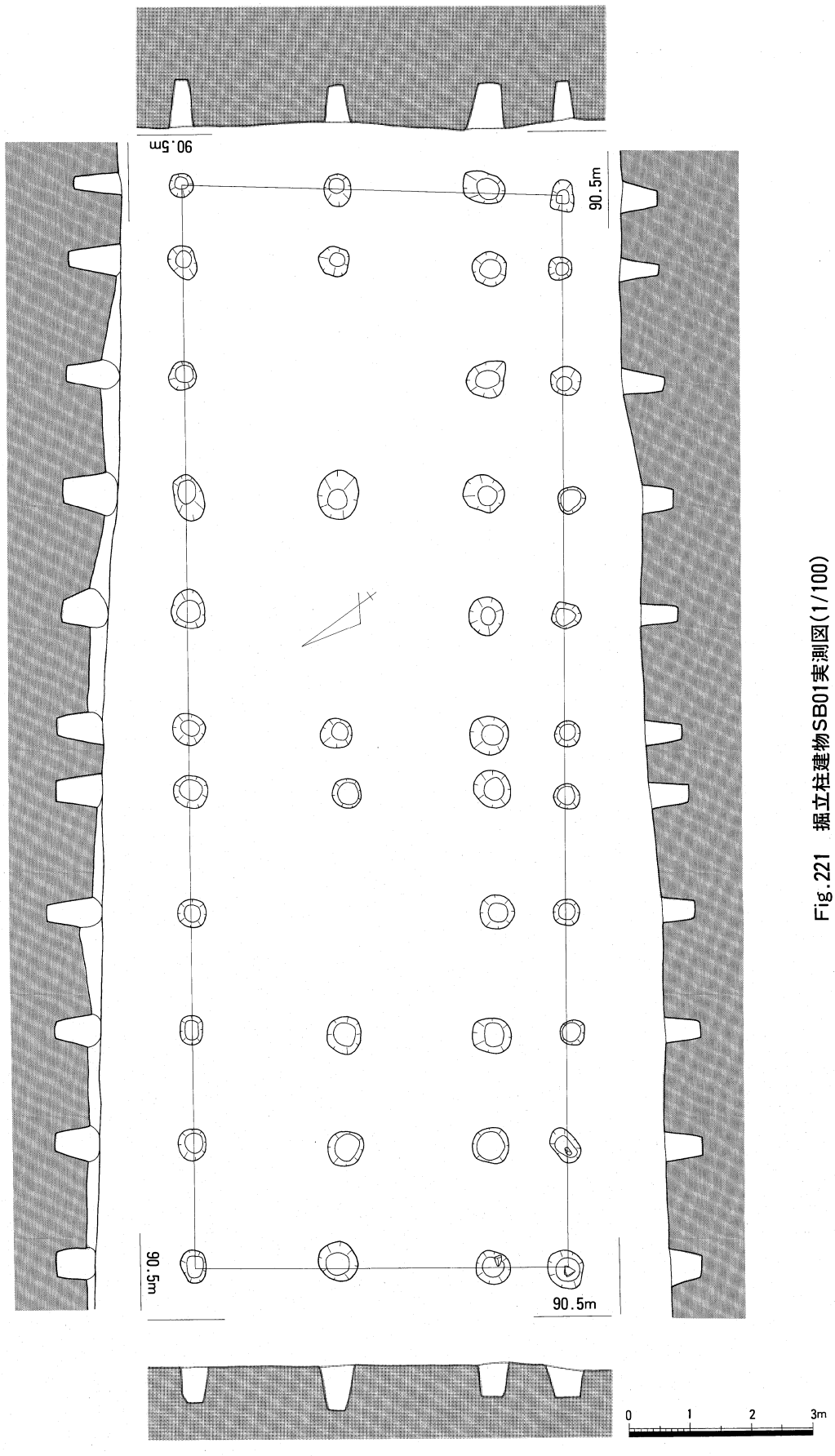


Fig.221　掘立柱建物SB01実測図(1/100)

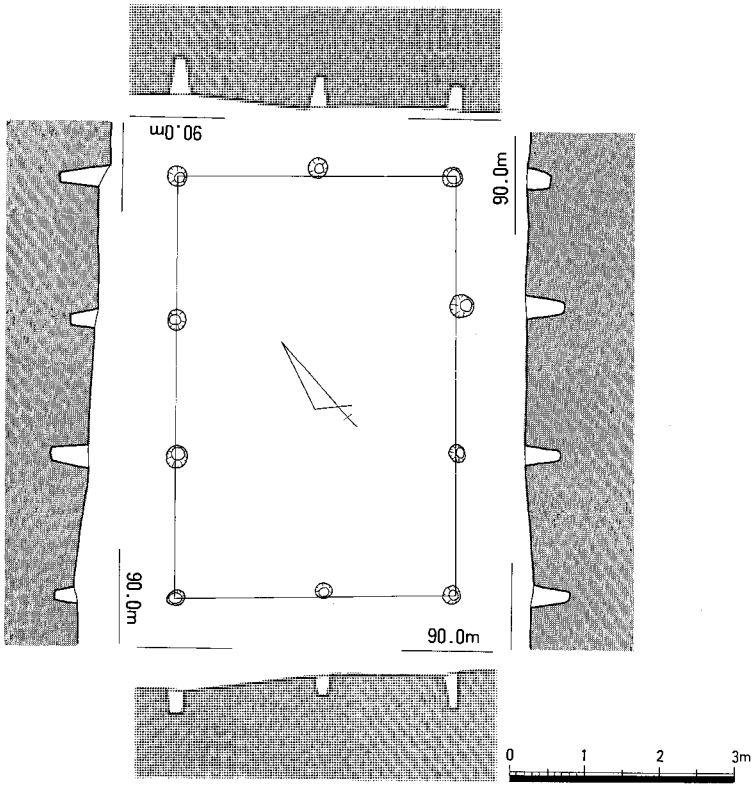


Fig.222　掘立柱建物SB02実測図(1/100)

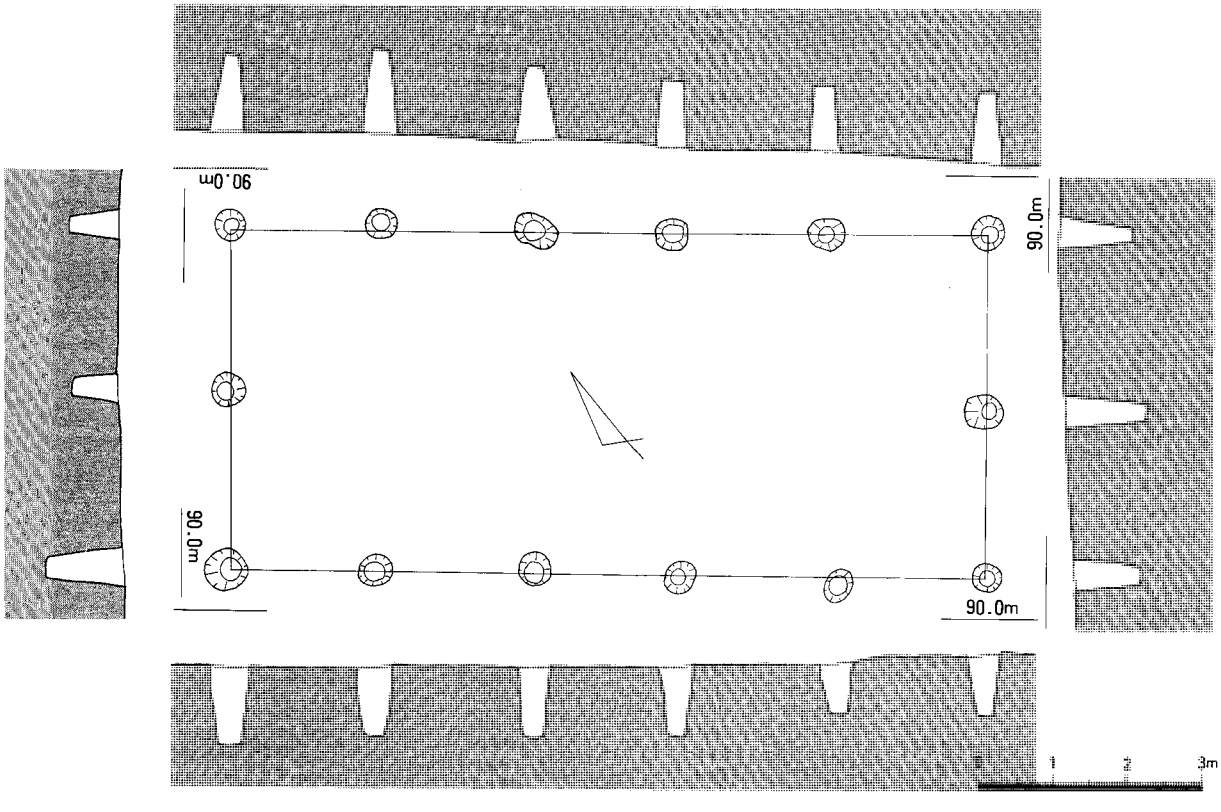


Fig.223　掘立柱建物SB03実測図(1/100)

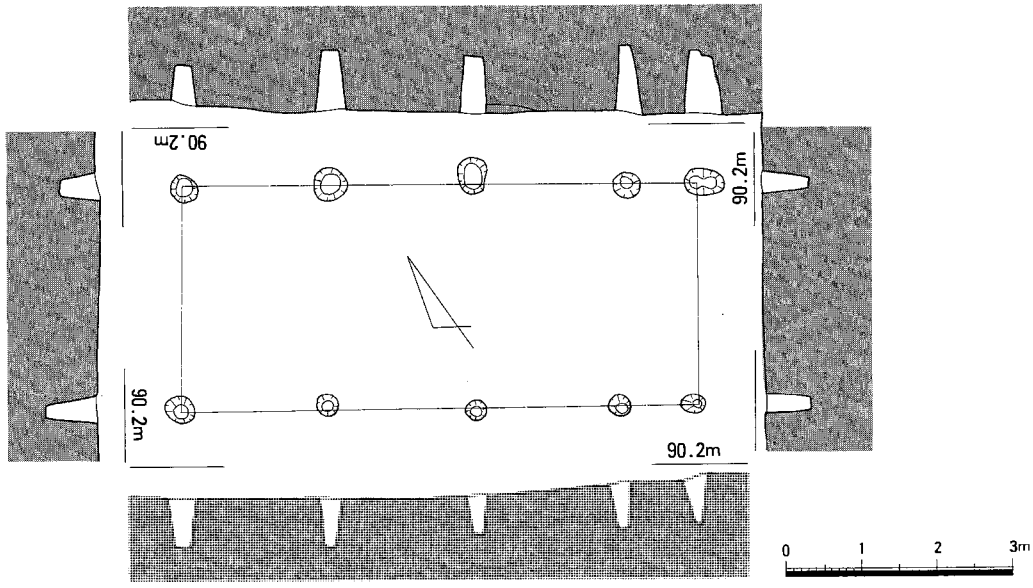


Fig.224　掘立柱建物SB04実測図(1/100)

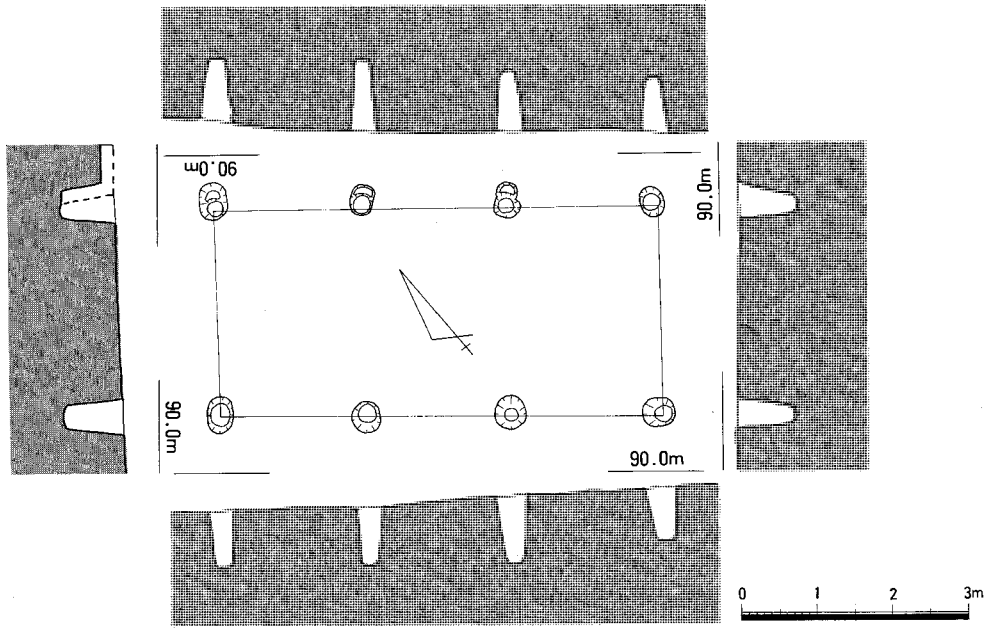


Fig.225　掘立柱建物SB05実測図(1/100)

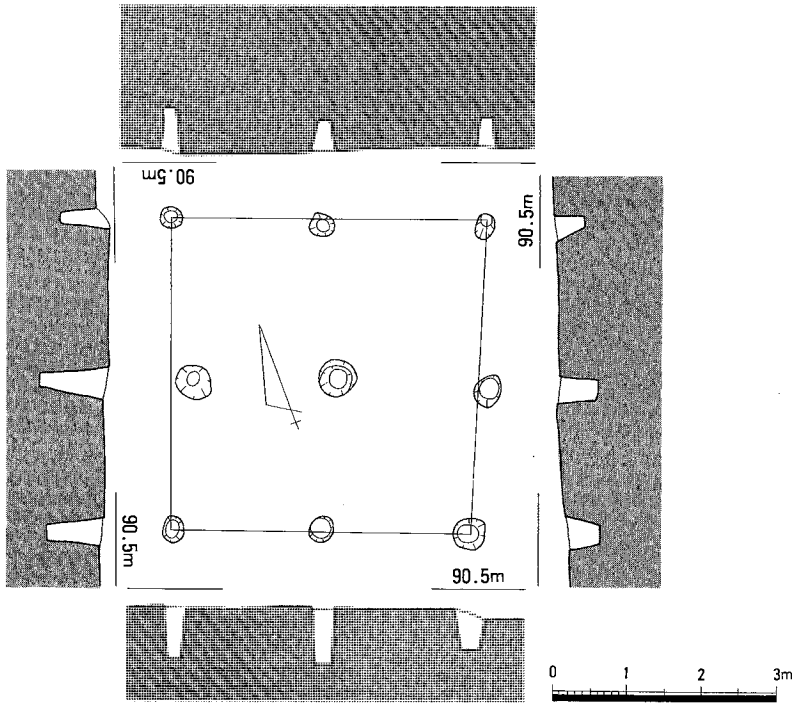


Fig.226　掘立柱建物SB06実測図(1/100)

6）犬走り（Fig.216,218,219, PL.97,99,117)

南と西の斜面、竪堀４から竪堀12までの標高72～74ｍに設けている切岸の下にある。幅は１ｍ前後を測る平坦面である。北斜面においても同様である。

7）通　路（Fig.218,219,227～229, PL.97,116)

南斜面において切岸、犬走りとは別に山肌の岩盤を巾45cm～60cmほど削り出している。西方向に向かって下がる狭い通路である。主郭の出入口から箱堀の通路を南に15ｍほど下がった地点で堀切がそのまま南斜面を直下する竪堀12と通路とに分岐する。分岐点を境に竪堀12は堀底面の勾配を急激に険しくし、形状も箱堀型から薬研堀型へと様相が変わる。堀の形状変化や主郭出入口との動線との関係から山城の南山麓に位置する里城（館）との通路と考えるのが妥当である。

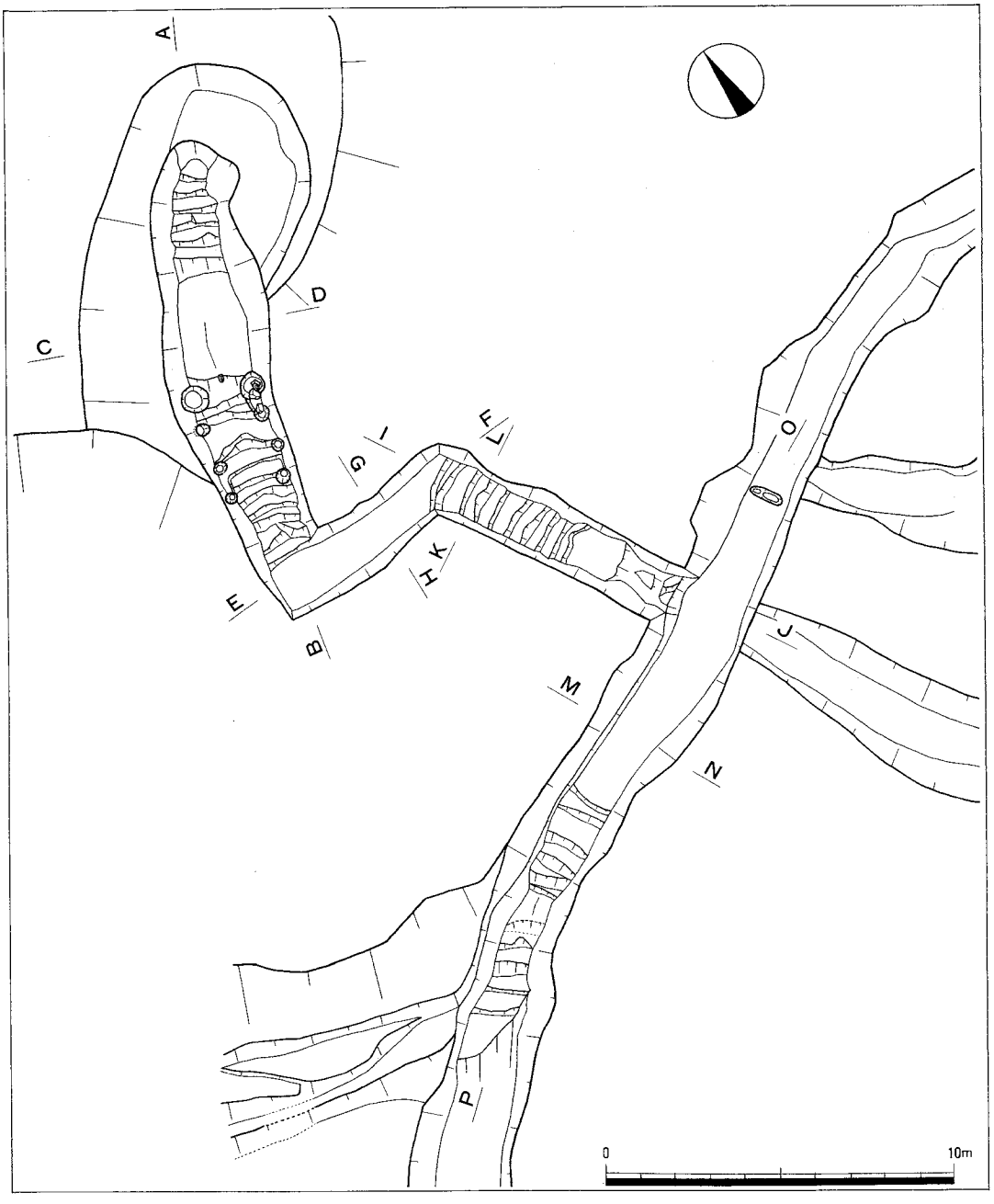


Fig.227　虎口・通路実測図(1/200)

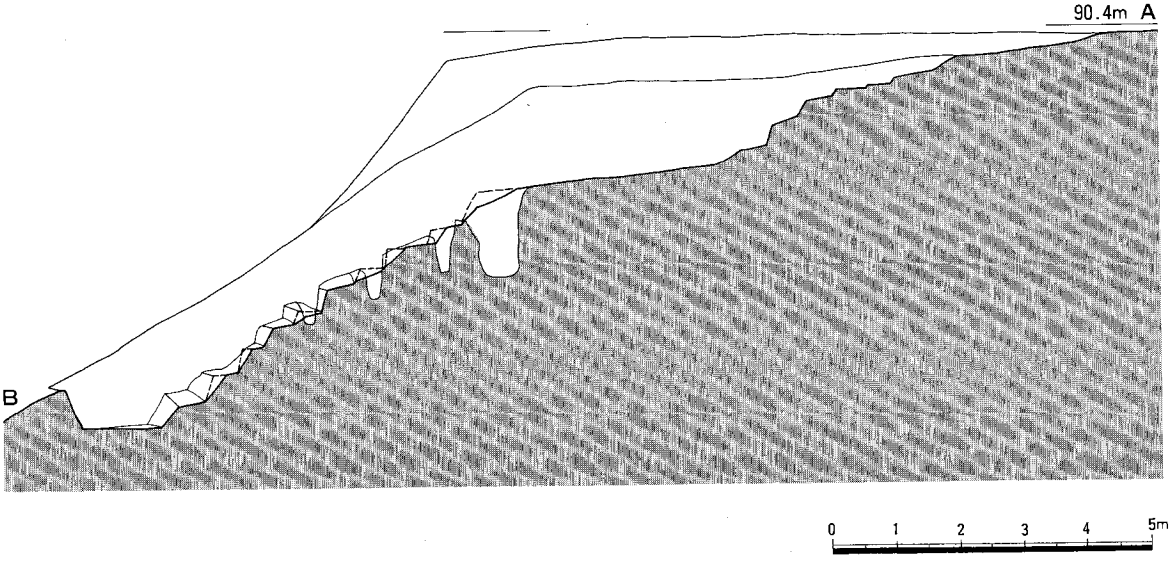


Fig.228　虎口断面実測図(1/120)

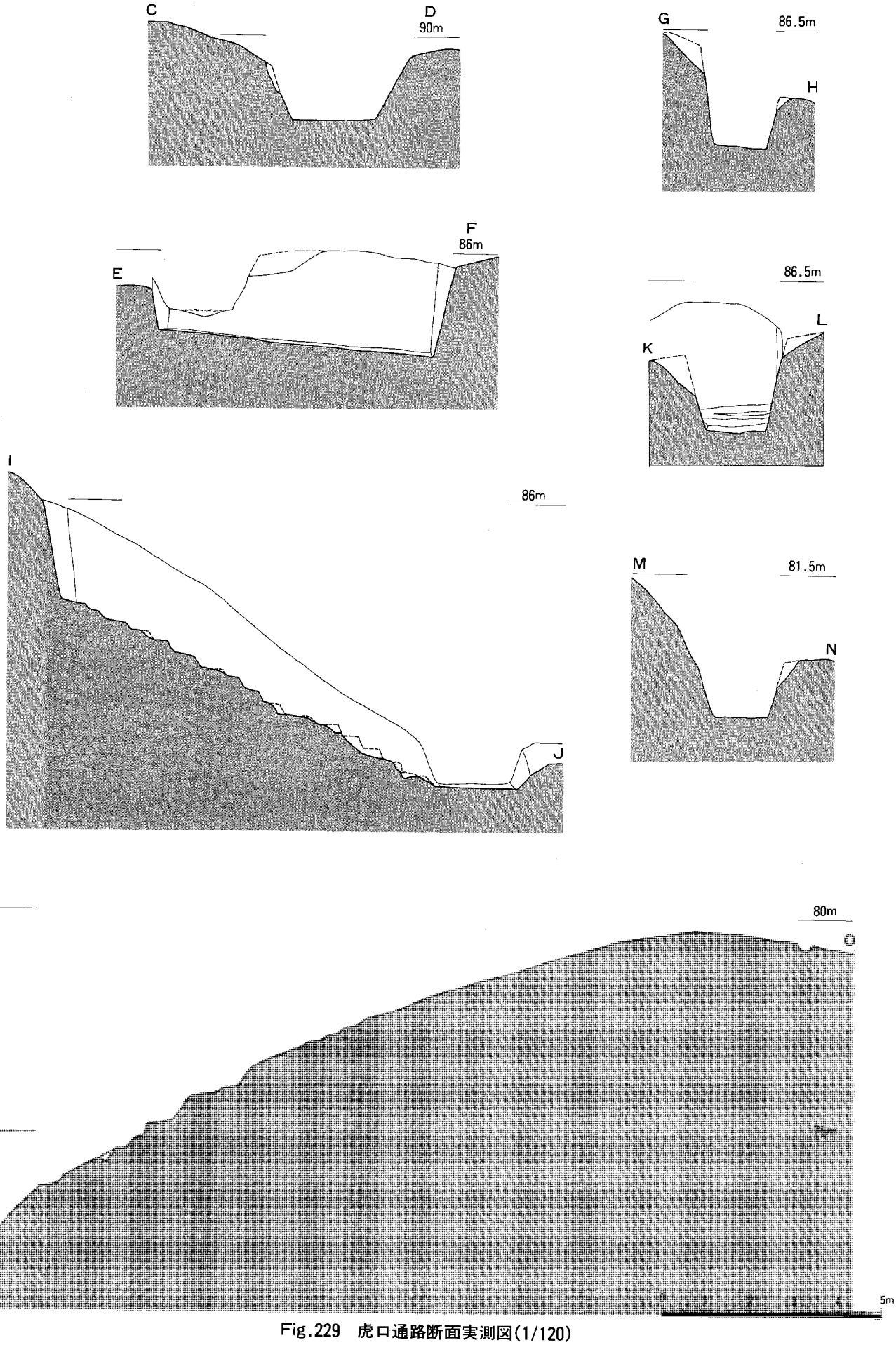


Fig.229　虎口通路断面実測図(1/120)

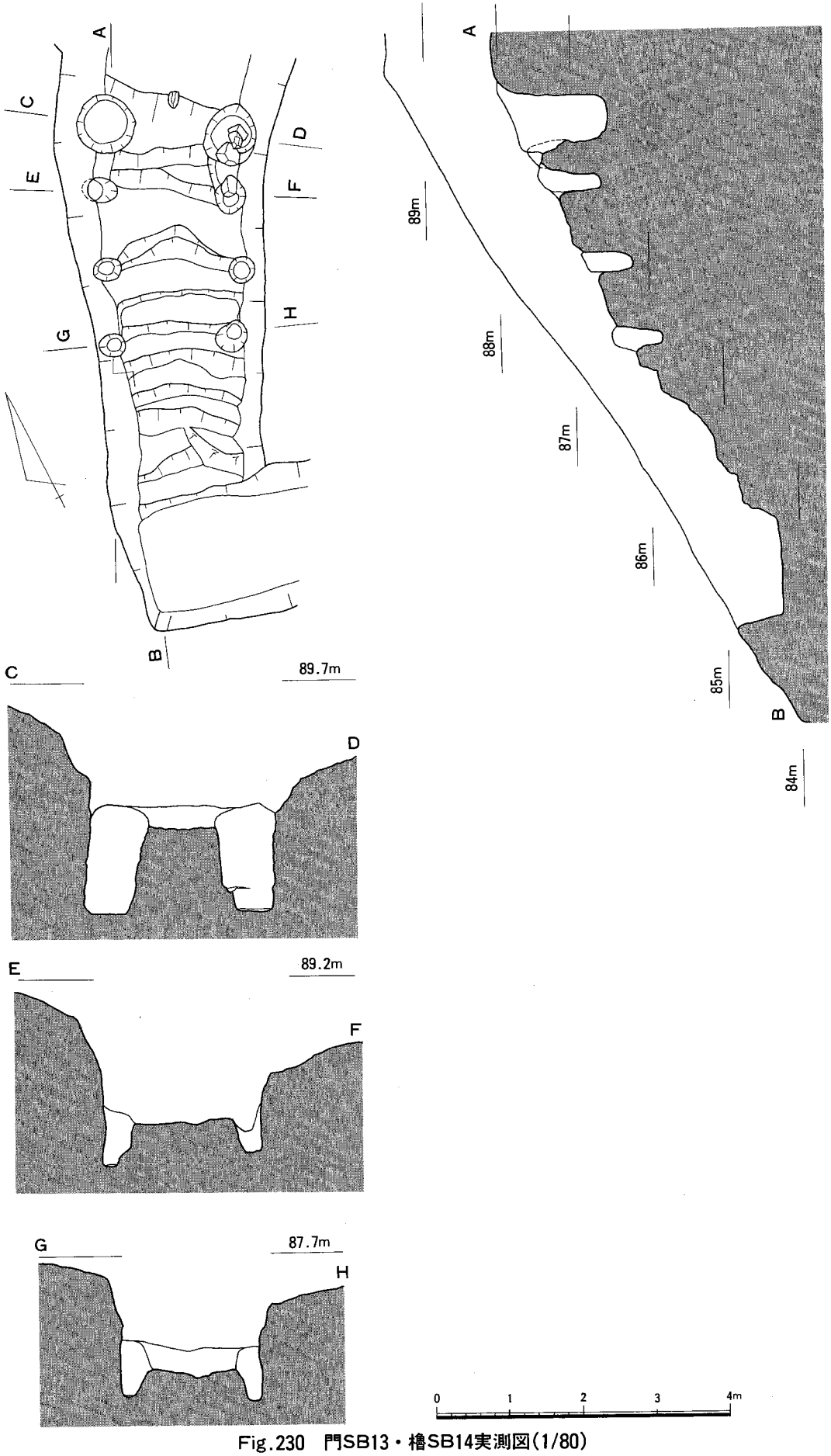


Fig.230　門SB13・櫓SB14実測図(1/80)

8）竪穴・溝状遺構

竪穴状遺構1（Fig.219，PL.118-1･2）

北斜面の中位、竪堀7の東に位置する土壙である。地山の岩盤を2.85mの深さに掘り下げ、片面に削り出し6段の階段を設けている。さらに底から0.9m上がったところを平面形がL字形を呈するように掘り下げている。南壁には径15cmの1個の穴が上縁近くにある。

竪穴状遺構2（Fig.219，PL.118-3～5）

西斜面の中位、竪堀6と8との間の犬走りに位置する土壙である。地山の岩盤を2.32mの深さに掘り下げ、片面に削り出し4段の階段を設けている。さらに底から0.85m上がったところを平面形がL字形を呈するように掘り下げている。東壁には径15cmの2個の穴が上縁近くにある。

溝状遺構3（Fig.219，PL.118-6）

竪堀1と4との間の斜面に位置し、平面形がL字形を呈する。全長7m･幅0.6～1m･深さ0.6～1mを測る。

9）放射性炭素年代測定

主郭の造成土層から出土した炭と造成後に建てた1棟の掘立柱建物の柱穴から出土した炭を試料として年代測定を行なった。本章の8でも報告しているが、造成土層出土の試料を3点、主郭では主殿につぐ規模の掘立柱建物SB03の異なる柱穴内から出土した試料を5点の計8点を測定試料とした。その結果、造成土層内出土の炭を試料とした測定では、補正炭素14年代では1440年±80年、1590年±50年、1600年±40年、補正炭素14年代値を過去の宇宙線強度の変動による大気中炭素14濃度への変動を補正することによって算出した暦年代では1425年、1505年・1585年、1515年・1595年の測定結果が出た。同様に掘立柱建物SB03の柱穴内出土試料では、補正炭素14年代では1560年±40年、1590年±70年、1660年±50年、1760年±50年、1840年±60年、補正した暦年代では1475年、1595年、1645年、1675年、1825年という時代幅のある結果を得た。

（3）遺　物

遺物は、柱穴、造成整地土、斜面、竪堀、遺構面から、土師器坏・皿・鍋・鉢、瓦器火舎、高麗青磁坏・皿、龍泉窯青磁碗、白磁碗、高麗青磁坏、褐釉壺、染付碗、備前焼すり鉢、常滑焼甕、銅銭、釵、玉石、焼壁土、投石などが出土している。これら遺物は12世紀～16世紀末に比定され、最も出土量の多かったのは16世紀末の製品である。16世紀末の出土品の内訳は生活雑器だけが占める。

SB03柱穴（Fig.233）

10138･10140は土師器の皿。底部には糸切り痕が残る。底部径は5cmと5.8cm。

SB04柱穴（Fig.234，PL.154）

10129～10131･10134は柱穴底から完形品で出土したものである。茶褐色を呈し、硬質である。口径･器高・底径は、**10129**は11.8cm・2.5cm・6.8cm、**10130**は10.4cm・2.1cm・6.8cm、**10131**は11.6cm・2.8cm・7.2cm、**10134**は12.2cm・2.5cm・7.7cmである。

堀切2（PL.172）

堀切の埋土から釵が出土している。**50019**は全長18.7cm、頭部1.35cmの水色を呈するガラス玉飾りがつく。本体の金具は銅製。

堀切4（PL.154）

10177は染付の碗である。高台は露胎、見込は輪状に釉を掻き取る。高台径は4.3cm。

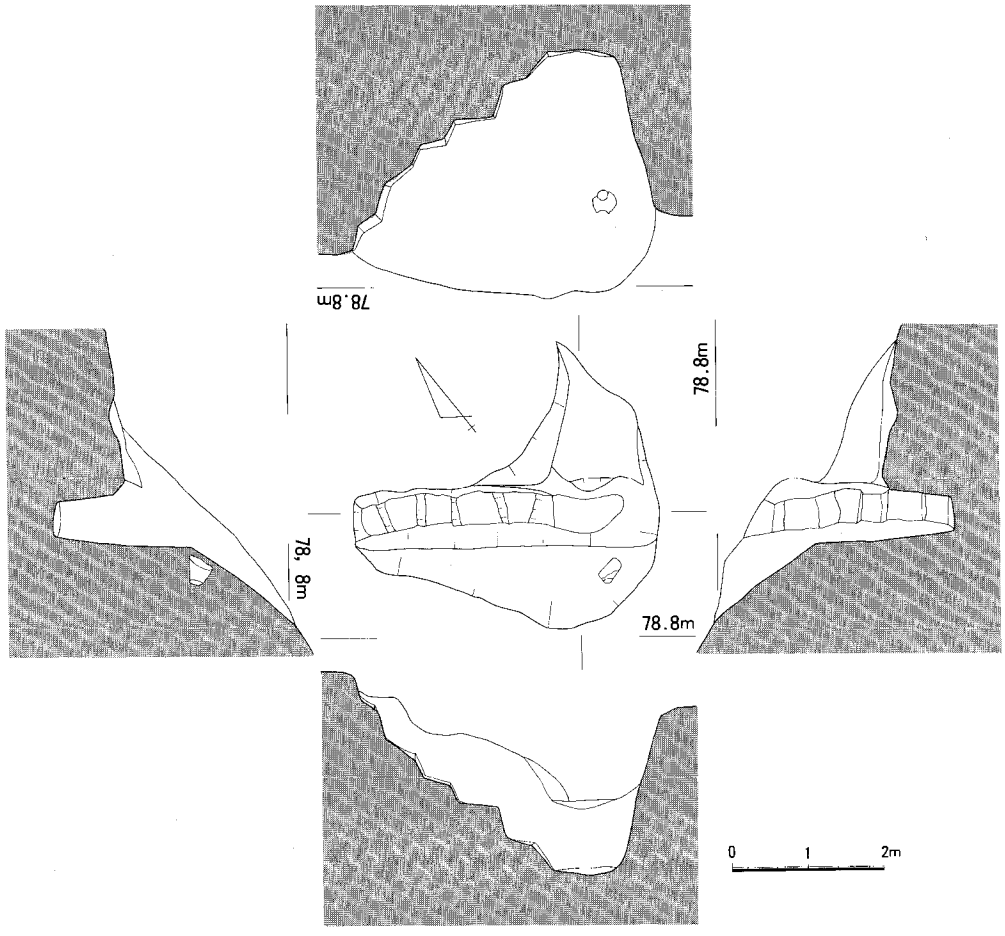


Fig.231　1号竪穴状遺構実測図(1/100)

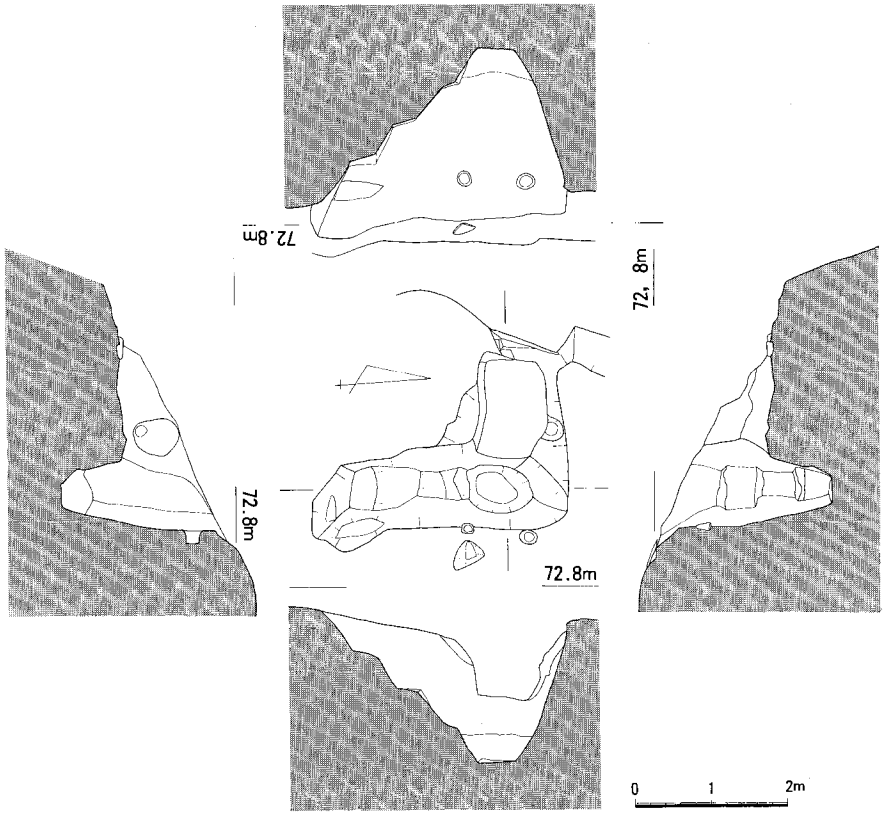


Fig.232　2号竪穴状遺構実測図(1/100)

竪堀12（Fig.235，PL.165～168,172）

埋土から土師器坏・皿、備前焼すり鉢、常滑焼甕、染付碗、龍泉窯青磁碗、銅銭、投石が出土している。備前焼すり鉢、常滑焼甕とも16世紀第４四半世紀の製品。投石は地山の山石、河原石の他に、五輪塔や板碑を割り細分して用いている。

竪堀16

常滑焼甕、砥石が出土している。

主郭整地土（Fig.236，PL.154,172）

主郭整地土・遺構検出面からは土師器坏・皿・鍋・鉢、瓦器火舎、高麗青磁坏・皿、龍泉窯青磁碗、白磁碗、褐釉壺、備前焼すり鉢、銅銭、玉石、焼壁土が出土している。

白磁碗は０－II類、II－１類、Ⅳ－２類、Ⅵ－１類が各数点出土している。12世紀からの製品。龍泉窯青磁碗は体部外面に鎬蓮弁文をめぐらす。13世紀の製品。**10188**は高麗青磁坏形の底部で、見込みの中心に白象嵌で二重圏文とその周縁に10個の如意頭文をめぐらす。灰色の胎土の器面全面に緑色を帯びた灰色の釉を施す。14世紀中ごろの製品。**10236・10237**の備前焼すり鉢は体部が直線的に外反し、口縁は直に立ち上がる。口縁端部は内傾する面をを持つ。**10236**は口径27.6cm、器高12.9cm、底径15cmを測る。**10237**は口径27.6cmを測る。16世紀第４四半世紀の製品。**10126・10239**は瓦器質の火鉢。

斜面（Fig.237，PL.154,165～168）

土師器鍋、常滑焼甕、投石が出土している。土鍋の外面には厚く煤が付着する。常滑焼の甕は16世紀第４四半世紀の製品。

（４）小　結

１）山城の改修期と初現期

出土遺物で最も年代の新しいのは16世紀第４四半世紀の製品である備前焼すり鉢、常滑焼甕、土師器坏である。これらの出土位置からも山城の最終改修が16世紀第４四半世紀に求められる。それでは、山頂部の使用がいつ頃から行なわれていたのかは、遅くとも14世紀前半期には行なわれていることを出土遺物の高麗青磁などが示している。とすると、この時期に山城が必要とされるのは、元寇に対する警備施設と考えるのが妥当であろう。確かに、山頂部からの視界は開けており、博多湾から福岡平野も一望できる。この時の施設がどのようなものであったかは詳らかにしえないが、本格的なものではなく監視的様相が強いものと思われる。さらに、遺物的には12～13世紀の時期が出土している。はたして、同時期にどのような施設が存在していたのかは、類例の出現を待って検討したい。

２）山城の特徴

御飯ノ山城は城というよりも砦に近い極めて小規模な城である。また、井戸なども備えておらず、常滑焼の甕の貯水に依存している状況は、時間的にも質量的にも限定された使用で事が足りたことを示している。しかしながら、城を取り巻く防御施設は他の本格的城と比べても見劣りしない。出入り口や通路を地山の岩盤を掘り下げて設ける手法は、九州の城の共通する特徴を示している。したがって、出入り口を複雑に折り曲げ、門と一体になった出櫓で防御するという特徴形態は、当時の九州における縄張りの共通認識たる基盤の上に出現したものと考えられる。また、山城と里城の舘とを一条の堀で共通して防御する特色は、小規模な城ゆえに可能にしたのであろうが、類例の出現を待って検討したい。

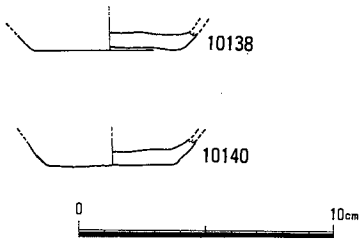


Fig.233　掘立柱建物SB03柱穴出土遺物実測図(1/3)

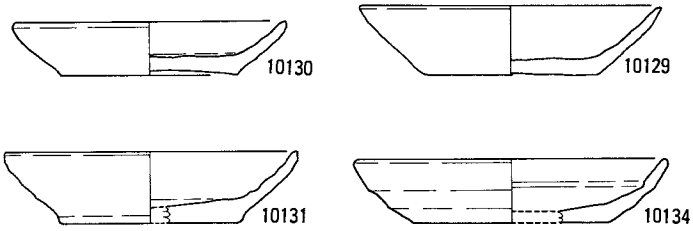


Fig.234　掘立柱建物SB04柱穴出土遺物実測図(1/3)

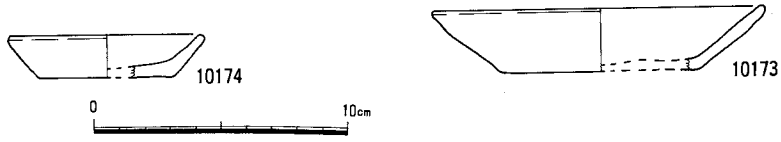


Fig.235　竪堀12出土遺物実測図(1/3)

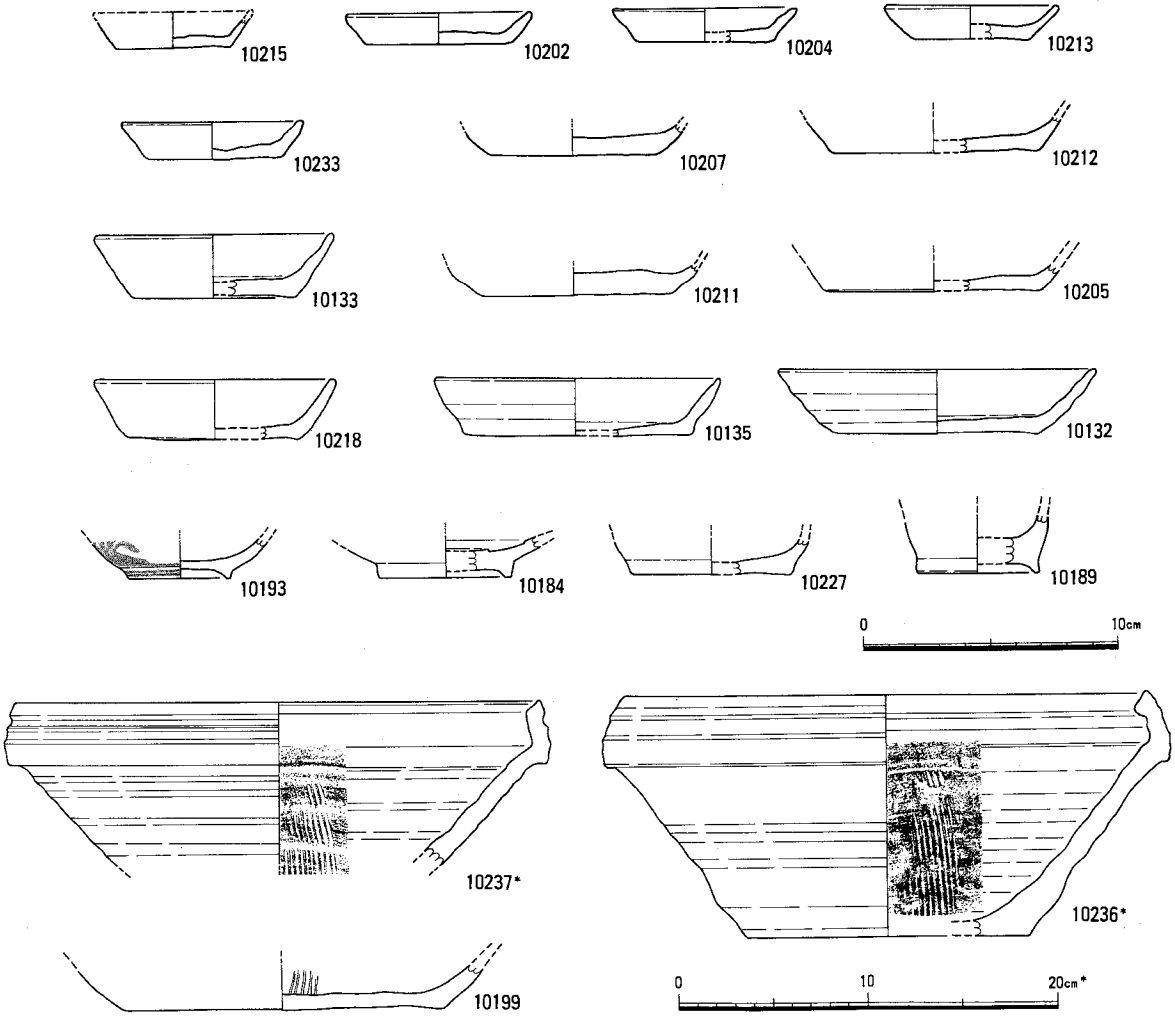


Fig.236　山城主郭整地土出土遺物実測図(1/3,1/4*)

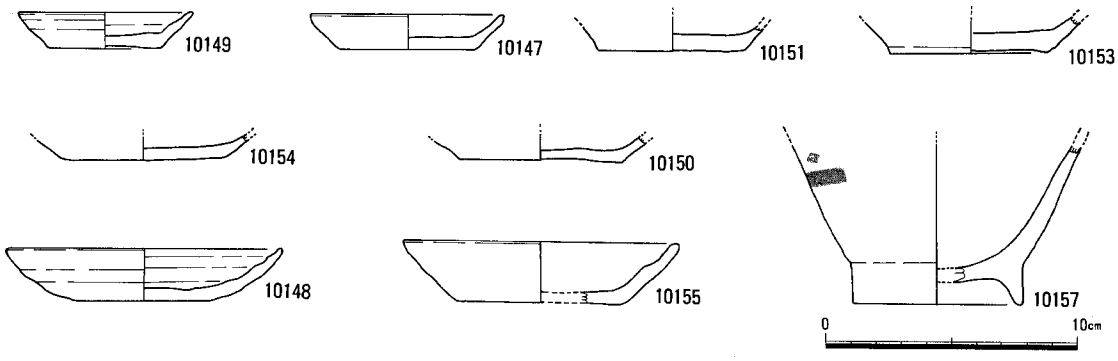


Fig.237　山城斜面出土遺物実測図(1/3)

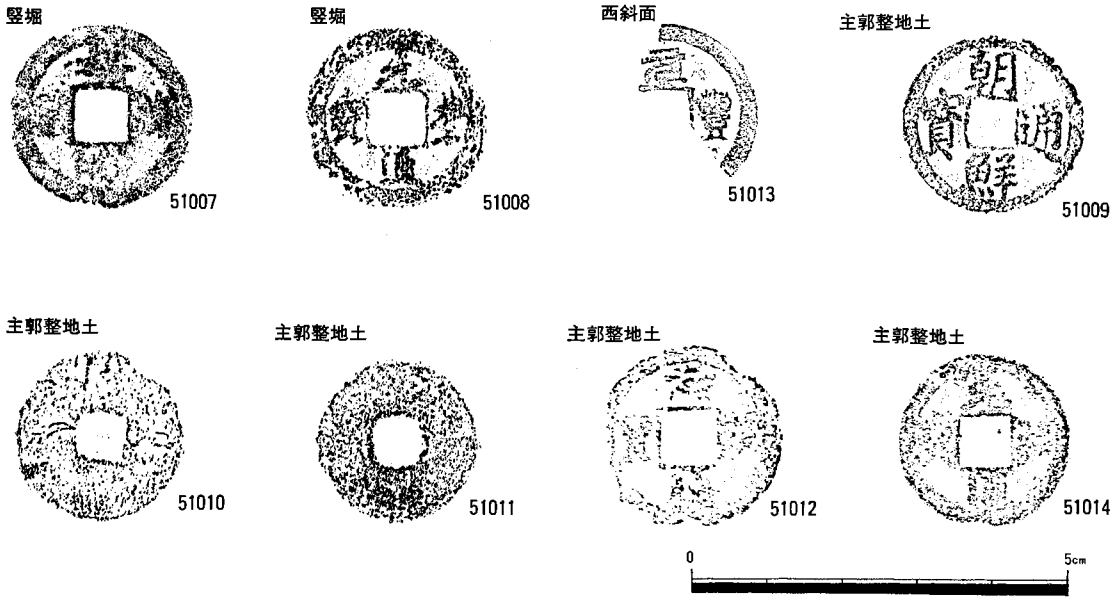


Fig.238　山城出土銅銭拓影(1/1)

遺物番号	貨銭名	出土遺構	初鋳造年	遺物番号	貨銭名	出土遺構	初鋳造年
50007	元豊通寶	竪堀12	１０７８年	50011	判読不明	―――	―――
50008	元豊通寶	竪堀12	１０７８年	50012	元豊通寶	整地土	１０７８年
50009	朝鮮通寶	整地土	１１１１年	50013	元豊通寶	西斜面	１０７８年
50010	判読不明	―――	―――	50014	元豊通寶	整地土	１０７８年

資料	岩　種	形状	縦×横×高さ(cm)	重量(kg)	資料	岩　種	形状	縦×横×高さ(cm)	重量(kg)
1	礫岩	転石	25×20×10	9.75	41	礫岩	転石	26×25×16	16.10
2	泥岩	山石	36×30×20	22.90	42	珪質変岩	山石	36×30×13	22.50
3	砂質変岩	山石	27×25× 9	10.90	43	玄武岩	転石	24×18×13	11.00
4	玄武岩	転石	34×26×14	14.50	44	玄武岩	転石	24×16× 2	2.65
5	礫岩	山石	25×20×16	15.00	45	礫岩	転石	23×15×10	5.20
6	中粒砂岩	転石	23×23×17	12.40	46	凝灰岩	転石	24×15× 8	4.60
7	珪質変岩	山石	24×25×15	14.50	47	礫岩	転石	20×15×12	5.00
8	玄武岩	転石	22×20×10	6.70	48	礫岩	転石	26×14× 9	5.25
9	礫岩	山石	25×21×17	14.55	49	礫岩	転石	19×16×13	8.10
10	玄武岩	転石	25×21× 8	4.40	50	中粒砂岩	転石	20×17×10	5.05
11	玄武岩	山石	31×32×10	16.65	51	粗粒砂岩	転石	16×22× 8	6.20
12	アクチノセンセキ岩	転石	28×39×14	22.10	52	中粒花崗岩	転石	20×18× 5	3.90
13	玄武岩	転石	26×30×15	13.80	53	蛇紋岩	転石	21×13×12	4.10
14	礫岩	山石	30×32×20	20.30	54	礫岩	転石	24×12×10	6.50
15	粗粒砂岩	転石	29×25×20	19.60	55	緑泥変岩	転石	25×10×10	3.70
16	玄武岩	転石	25×30×10	17.70	56	玄武岩	転石	32×30× 7	15.50
17	角礫岩	転石	22×13×14	5.40	57	玄武岩	転石	28×24×10	11.00
18	玄武岩	転石	37×17×13	13.60	58	珪質変岩	山石	23×12×10	3.90
19	アップライト	山石	20×19×20	10.70	59	玄武岩	転石	19×22×10	8.10
20	珪質変岩	山石	42×22×18	24.45	60	粗粒斑れい岩	転石	15×15×9	5.35
21	砂質変岩	山石	30×30×24	30.70	61	礫岩	転石	20×13×12	5.10
22	礫岩	山石	40×33×17	29.10	62	頁岩	転石	17×12× 8	3.00
23	礫岩	転石	32×17×14	9.20	63	玄武岩	転石	17×15×11	4.50
24	粗粒砂岩	転石	23×18×13	9.30	64	泥質変岩	山石	33×17× 8	6.75
25	玄武岩	転石	27×41×16	20.50	65	玄武岩	転石	26×19× 7	5.10
26	礫岩	転石	28×22×21	12.20	66	玄武岩	転石	17×12×10	4.10
27	礫岩	山石	25×21×14	12.50	67	玄武岩	山石	18×13× 9	3.45
28	礫岩	山石	25×28×18	14.00	68	泥質変岩	山石	16×12× 7	2.60
29	緑色変岩	転石	30×33×10	9.30	69	玄武岩	転石	23×17× 9	4.65
30	礫質砂岩	転石	25×34×21	17.80	70	玄武岩	転石	19×11×11	3.00
31	凝灰岩	転石	28×40×10	12.80	71	角閃岩	転石	42×32×23	18.20
32	珪質変岩	山石	13×19×11	4.50	72	礫岩	山石	22×21×10	7.25
33	礫岩	転石	21×28×13	6.50	73	珪質変岩	山石	29×20×14	11.05
34	礫岩	転石	33×20×11	6.95	74	玄武岩	転石	30×38×11	26.50
35	玄武岩	転石	23×20× 9	5.50	75	玄武岩	転石	27×15×11	7.80
36	玄武岩	転石	25×30× 9	11.00	76	蛇紋岩	転石	15×15×10	3.40
37	緑色変岩	山石	33×23×11	15.00	77	石英閃緑岩	転石	14×14×11	4.05
38	玄武岩	転石	20×17× 9	7.80	78	石英閃緑岩	転石	23×19×17	11.85
39	礫岩	転石	39×14×13	9.90	79	緑色変岩	山石	34×27×10	15.30
40	礫質砂岩	転石	18×14× 9	4.00	80	玄武岩	転石	15×17× 7	4.10

第1表　山城出土投石計測表

５．　香椎Ｂ遺跡第５次調査

（１）　位置と概要

調査地は、第１次調査地西辺部の生水調査区に接する西隣りの水田である。耕地の嵩上げに伴う擁壁設置工事に伴って実施した。このため、調査範囲は擁壁設置範囲となり、結果的には谷部を横断するようにトレンチを入れることとなった。標高は15ｍを測る。第１次調査の生水調査区では、整然と配置された掘立柱建物群や井戸、これらを区画する塀や溝からなる14世紀～15世紀の屋敷群の存在が明らかとなっている。

（２）　遺　構 (Fig.240, PL.119)

遺構は、地表下50cmの地山である黄褐色土層の上面で遺構検出した結果、中世の溝、柱穴の存在が確認された。SD01は南北溝、SD02～07は東西溝である。SD06と07に挟まれた地域には柱穴などは認められないことから、この間は道路である可能性が高い。

（３）　遺　物

遺物は、コンテナに１箱ほどが出土しているが、いずれも遺構検出土層の直上に位置する灰褐色土層からの出土による。遺物は、際立った遺物包含層が存在していなかったことなどからも、少量の土師器坏・皿、青磁碗、白磁碗の破片の出土にとどまる。

（４）　ま と め

今回検出した溝、柱穴は、調査地の東部に位置する第１次調査で確認された中世集落の溝につながる。したがって、この溝が集落敷地の区画溝であることが明らかであることから、香椎宮裏に展開する谷部には、古代～中世の遺跡が濃密に存在する可能性が極めて高いことが判明した。

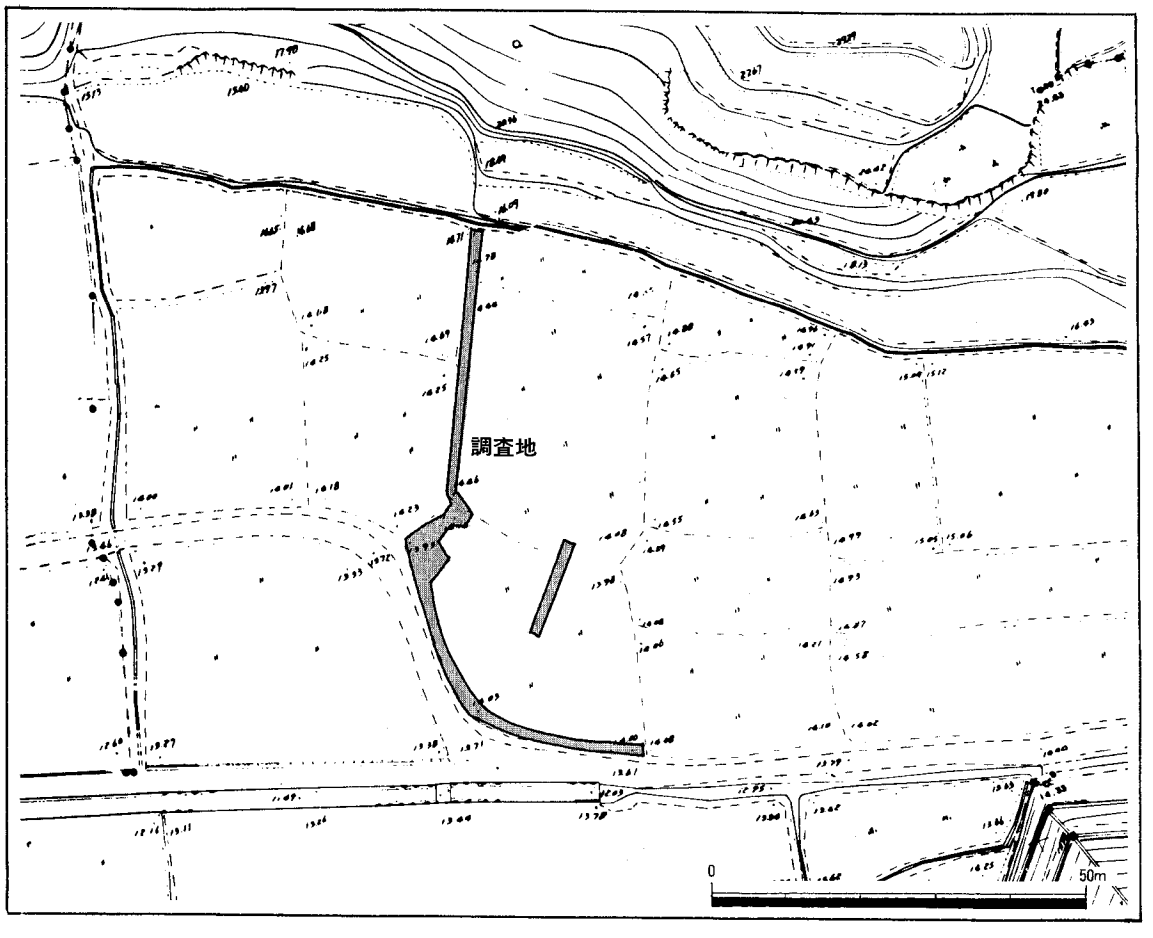


Fig.239　第５次調査区位置図(1/1,000)

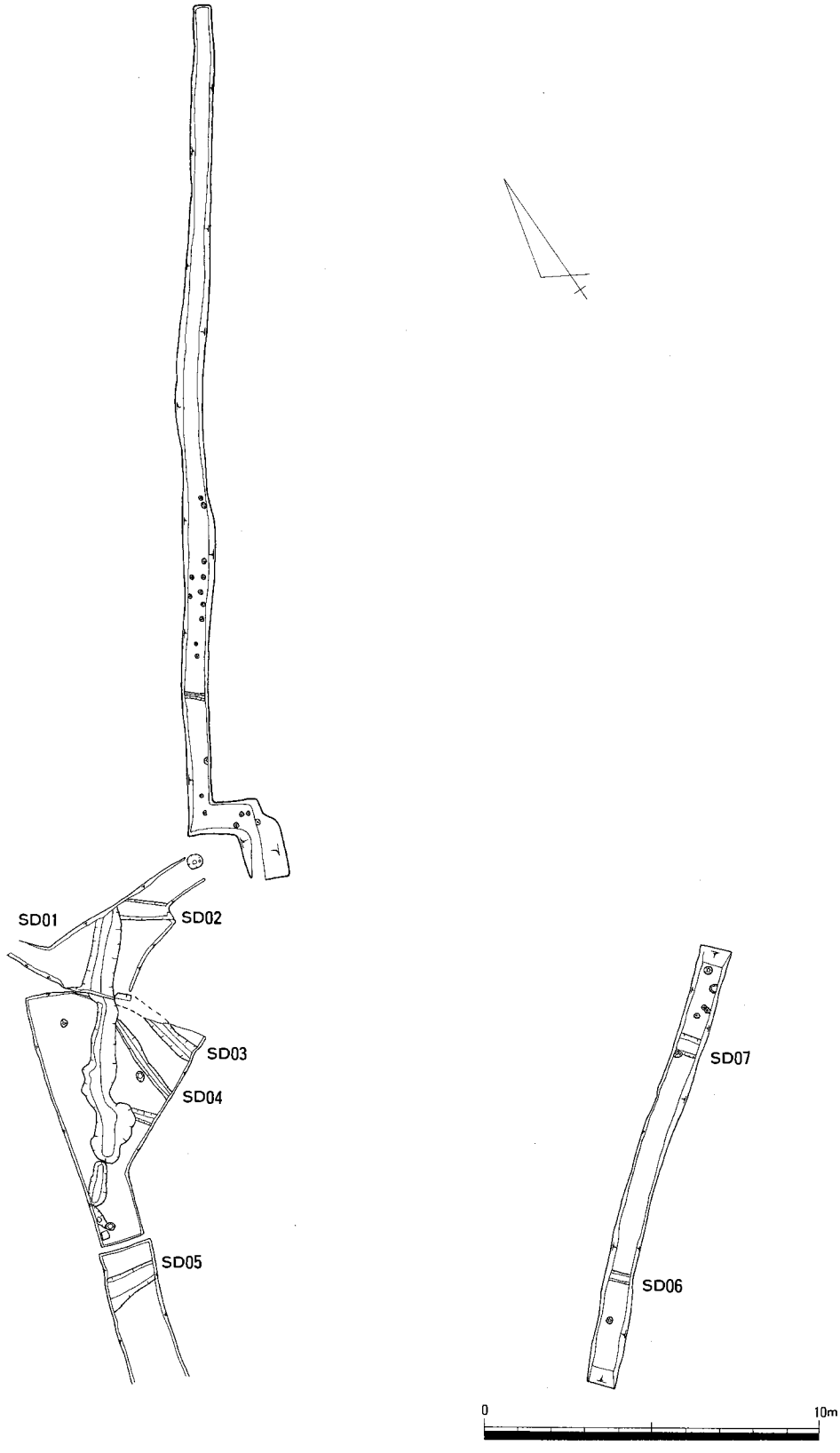


Fig.240　第５次調査区遺構配置図(1/200)

6． 香椎B遺跡第6次調査

（1） 位置と概要

調査地は、神亀元年(724)に創建とされる香椎宮(廟)から東北へ300ｍほど離れた山裾に立地し、東西70ｍ・南北60ｍを測る長方形の平坦な敷地である。伝承では、香椎宮(廟)の大宮司(廟司)職を務めた大膳紀宿禰（武内氏）とその子孫が居住したとされている。現在も41代当主である武内公磨氏とご家族が居住されている。調査は、大規模な擁壁工事により掘削した包含層から出土した遺物の採取にとどまる。

（2） 遺　構　　(Fig.241，PL.120)

調査地の地表下1.2～1.4ｍには灰色粘質土、黒色粘質土があり、これらの土層から大量の遺物が出土していた。調査時点では掘削工事が終了しており、新たに調査のための掘削は困難であった。このため、遺物的には遺構の存在、特に廃棄土壙、建物などの存在する可能性を強く示唆する。

（3） 遺　物　　(Fig.242･243，PL.155･188･189)

出土遺物は、大半が平安時代末から室町時代の土師器、瓦器、陶磁器、木製品で、コンテナ15箱ほど出土している。

1）土師器・瓦器・陶磁器

灰色粘土、暗灰色粘土層からは、土師器皿・坏、瓦器椀、白磁皿・碗などが出土している。**10264**の白磁皿の底部には「大」の墨書がある。**10260**の白磁碗の底部には「○」の墨書がある。

黒色土層からは、土師器皿・坏・椀などが出土している。底部はヘラ切り痕と糸切り痕とが混在する。

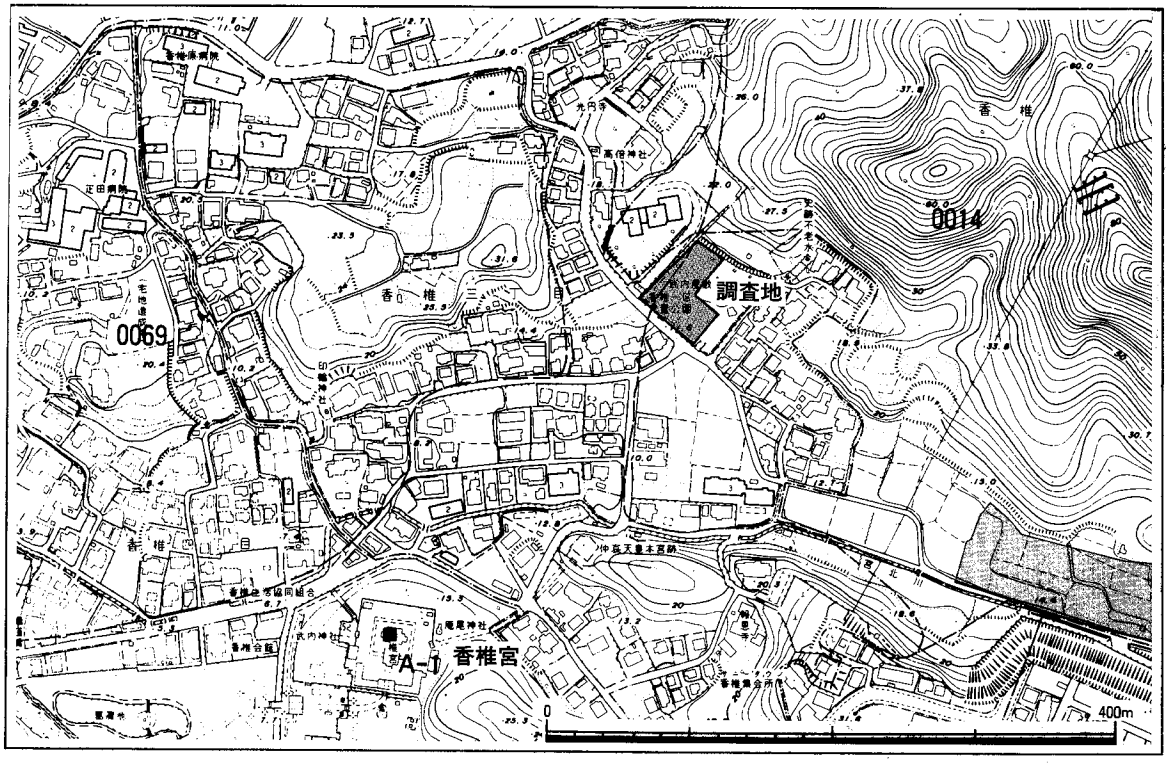


Fig.241　第6次調査区位置図

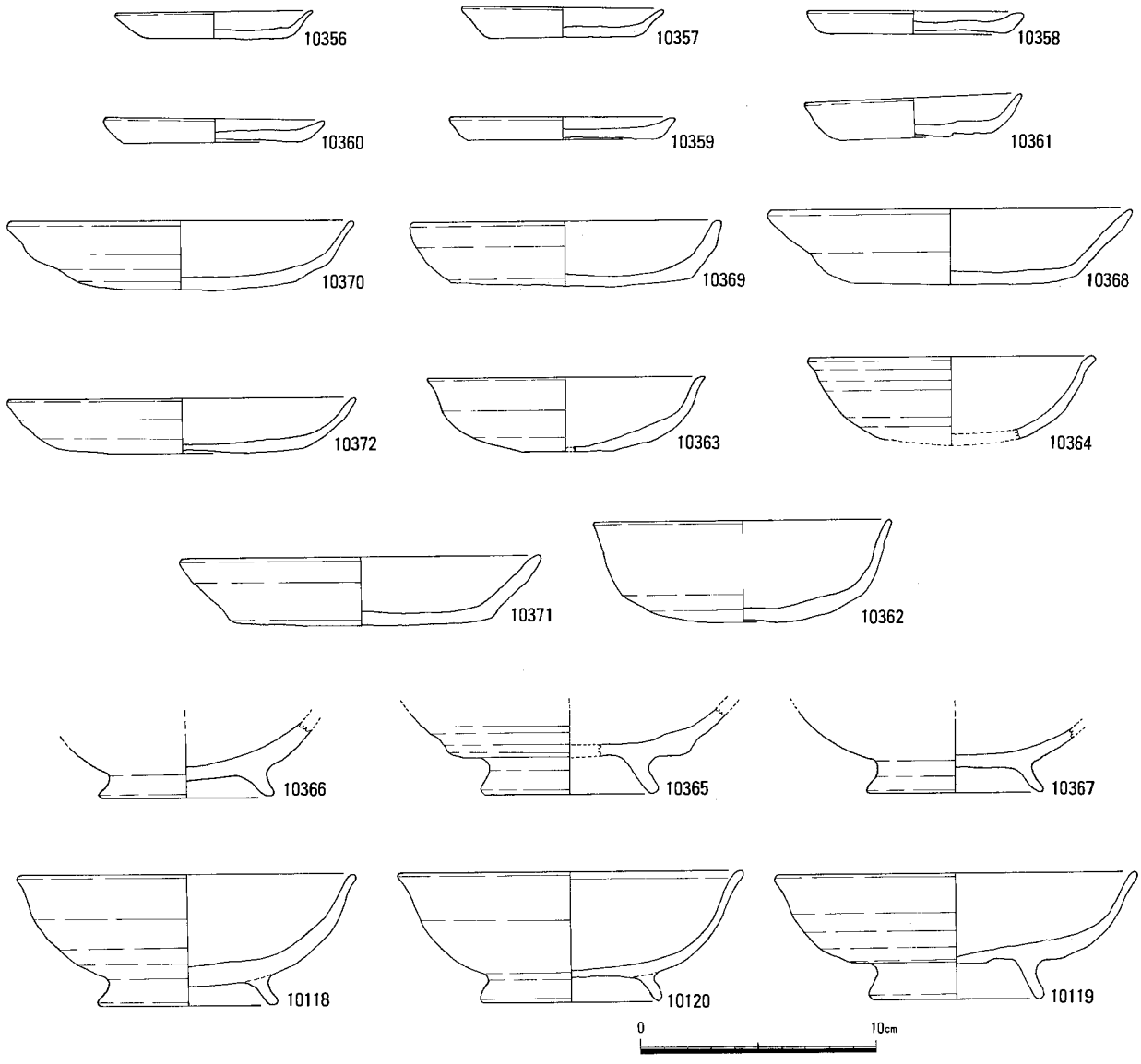


Fig.242　黒色土出土遺物実測図(1/3)

2）　木製品

下駄、櫛、箸、棒状木製品などが出土している。**30097・30098・30100**は台と歯が一木のつくりの下駄である。いずれも台の形は小判形、鼻緒孔の位置は前壺を台の中央に開け、後壺を歯の内側にあけている。歯は、形状がいずれも台と同じ幅で断面形が方形で、著しく磨滅している。**30097**は全長21.7cm、幅13.4cmを測る。**30098**は全長21.1cm、幅11.0cmを測る。**30100**は全長20.9cm、幅10.8cmを測る。**30143～30153**は箸であるが、出土条件から全長は不明。**30096**は櫛。**30099**は山形に加工した薄い板で、頂部近くに小孔が貫通する。**30102**は、端部を「L」字形を呈する。全長は34cm。

（4）　ま と め

掘削土からの豊富な出土遺物は、調査地が古代から特異な性格を有していた伝承を積極的に裏付けるものである。特に大量の土師器皿の出土は、大宮司家の特色を示すものであろう。

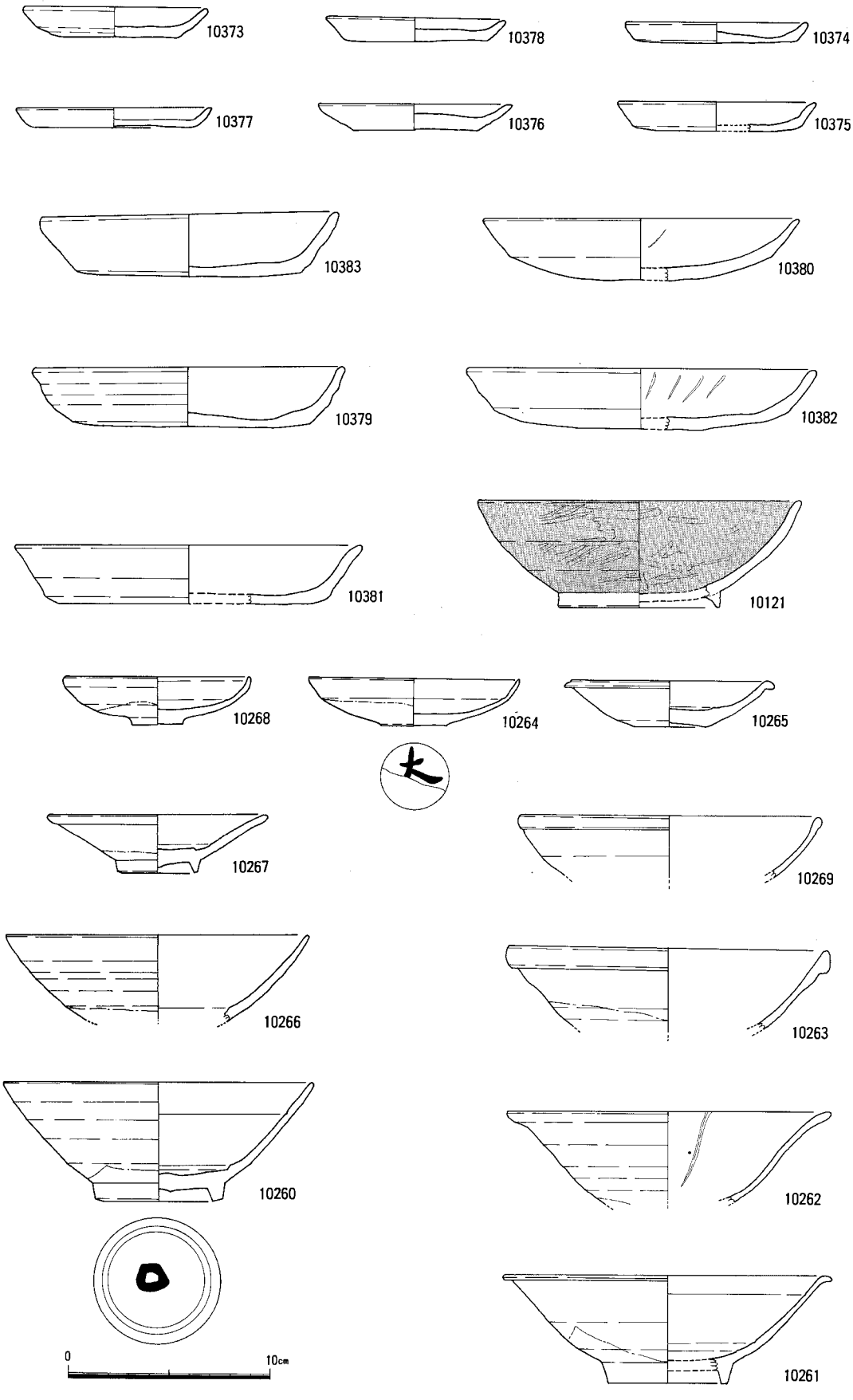


Fig.243　灰色粘土・暗灰色粘土出土遺物実測図(1/3)

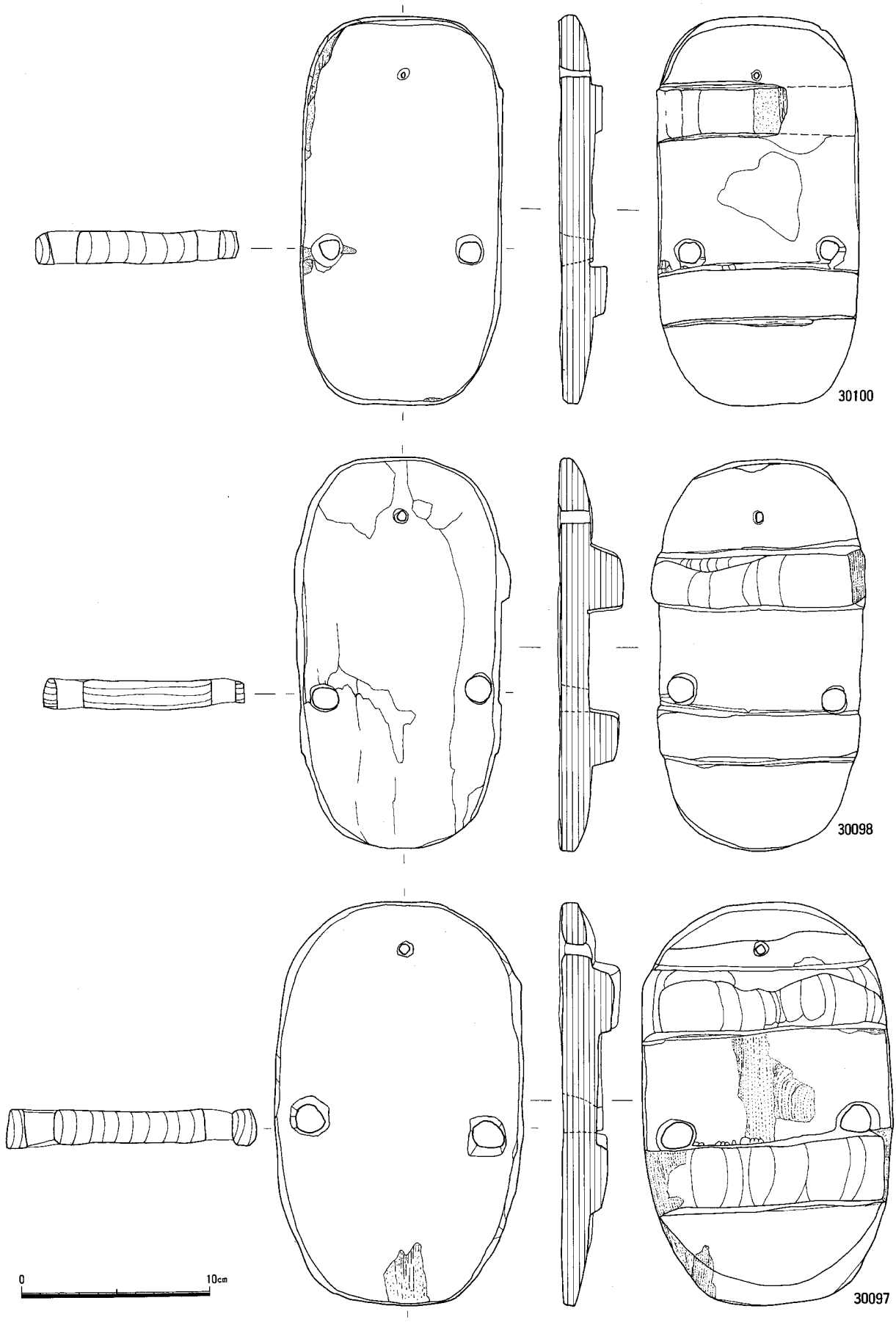


Fig.244　第６次調査出土木製品実測図１(1/3)

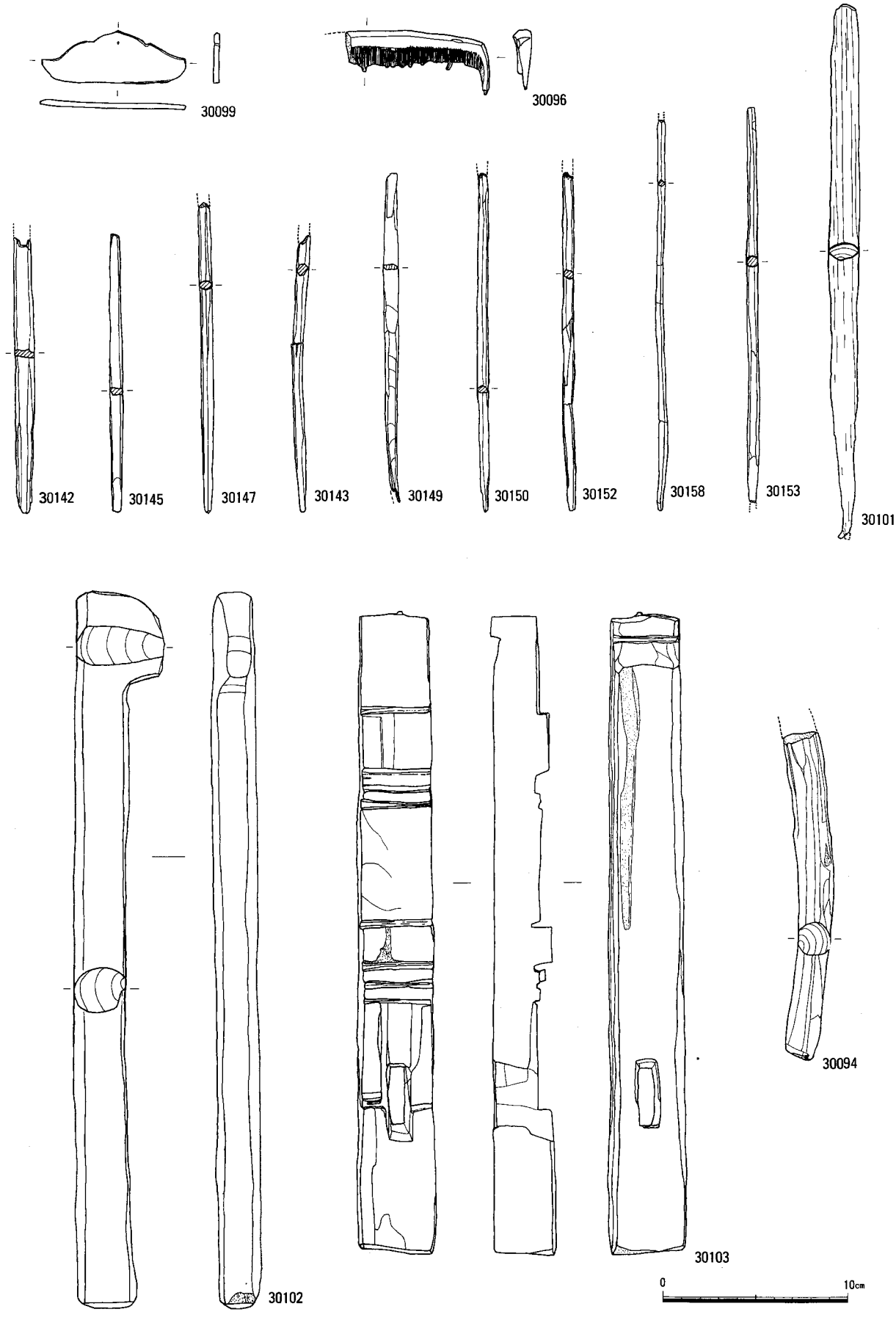


Fig.245　第6次調査出土木製品実測図2(1/3)

7． 香椎宮境内出土遺物

（1） はじめに

香椎宮(廟)は、神亀元年(724)に創建され、古くから異国降伏と本朝勅願所として、九州では宇佐神宮と同様に他の神社とは異なる待遇を朝廷から受けている。また、古代から中世においては歴史的拠点地であるにもかかわらず、建物配置をはじめとして解明されていない点も多い。このような中、香椎宮重要文化財収蔵展示館には、神社の宝物以外に瓦・陶磁器・銅鏡なども収蔵されている。銅鏡は三角縁神獣鏡で、近くの香住ケ丘古墳から出土したものが寄贈されている。瓦・陶磁器は、境内の防災施設設置工事や建物改築の際に出土したものを前の木下宮司によって収集されたものである。また、収蔵物には昭和22年に中山平次郎博士によって発見、寄贈された瓦も含まれている。

今回、香椎宮の上田宮司のご好意で収蔵されている瓦・陶磁器類の資料公開が許されたので、香椎B遺跡調査の関連資料として報告するものである。

（2） 土師器・須恵器・磁器 (Fig.246, PL.195)

土師器・陶磁器は40点ほどが収蔵されているが、今回は状態が良好な23点を掲載する。

A． 土 師 器

1～6は土師器の坏である。すべて平坦な底部から口縁が直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部は横ナデ調整を施し丸く仕上げている。底部外面には切離し痕跡の糸切り痕と乾燥台の板目圧痕が残る。胎土は橙灰色～淡橙白色を呈し、僅かに砂粒を含むものの精選されている。焼成は軟質のものが多い。1は口径15.6cm・底径10.2cm・器高2.6cm。2は口径15.6cm・底径9.6cm・器高3.4cm。3は口径16.0cm・底径10.1cm・器高2.7cm。4は口径16cm・底径12.2cm・器高2.9cm。5は口径16.4cm・底径10.8cm・器高3.2cm。6は口径18.4cm・底径13.1cm・器高2.6cm。7～9は土師器の椀である。高台は粘土紐を底部に貼り付けた後、横ナデ調整を施している。7・9は高台が底部から直下するのに対し、8は外へ開く。胎土は淡橙白色を呈し、僅かに砂粒を含むものの精選されている。焼成はやや軟質の物が多い。高台径は、7は8.2cm、8は7.6cm、9は8.8cmである。

B． 須 恵 器

10は須恵器の坏で、高台径は8.2cm。胎土は1㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。暗青灰色を呈し、焼き締まっている。

C． 磁 器

11は青磁の皿で、口縁は直線的に外反するが端部付近は肥厚である。見込は輪状に掻き取り、砂目が残る。高台は削り出しで、露胎する。畳附けにも砂目が残る。口径10.2cm・高台径5.0cm・器高2.8cmを測る。14・15・16・18は青磁の碗である。18は同安窯系の碗で、内面に櫛描が施されている。胎土は乳灰色で精選されている。釉は濁れたオリーブ色である。高台径は5.2cmである。12・13・17・19～23は白磁の碗である。12・13は口縁部に玉縁をもつ碗の高台である。17の口縁端部の玉縁は小振りである。口径は15.4cm。19の口径は18cm。20の口径は7.6cm・高台径5.3cm・器高5.7cm。21の口径は20cm。22の口径は17.2cm・高台径6.2cm・器高6.4cm。23の口径は17cm・高台径6.0cm・器高6.0cm。

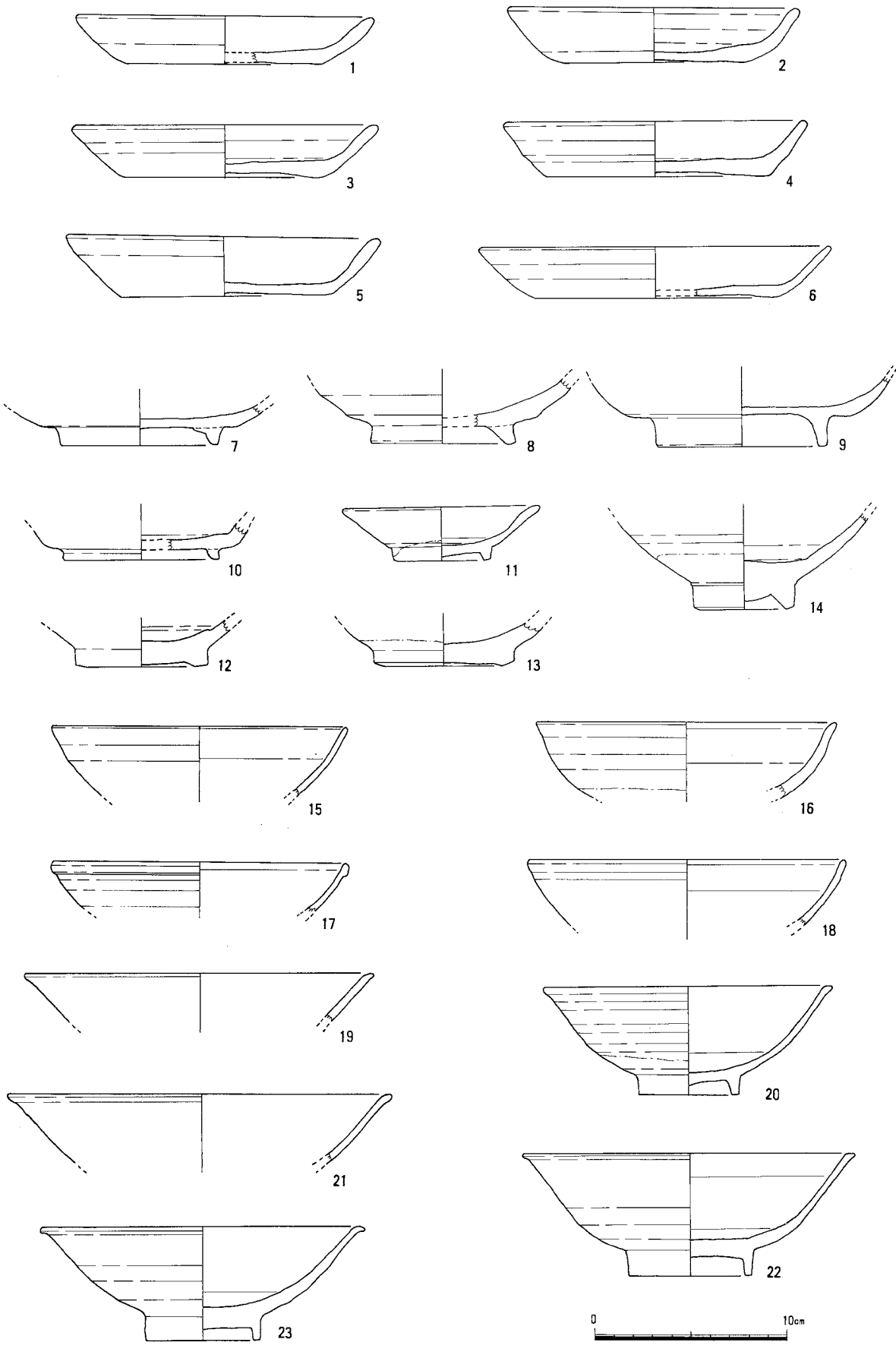


Fig.246　香椎宮境内出土遺物実測図(1/3)

（3）軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦

1） 軒丸瓦 (Fig.247, PL.196)

A．蓮華文軒丸瓦　1は中房を太い隆起線によって画し、中には大粒な蓮子を１＋４に配する。内区には単弁を配するが、各花弁の大きさは均一ではない。外区には大粒珠文を配する。瓦当全体に笵割れがみられる。同笵資料が安楽寺、福岡城、来木２号窯から出土している。

B．草花文軒丸瓦　2～4は中央部に花文を配し、周縁に細い隆起線をめぐらす。外縁は素縁で、わずかに直に立上り平坦面をなす。同系の軒丸瓦は博多遺跡群から多く出土している。

C．巴剣頭文軒丸瓦　中央部には右回りの三巴文を配し、外区との境は隆起線で画す。界線の周縁には外向する剣頭文をめぐらす。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。6・7は巴の頭部が中央で接合している。7は巴の尾が伸びて界線を形成する。同笵資料が観世音寺から出土する。

D．巴文軒丸瓦　8～13は中央部に左回りの三巴文を配し、外区との境は隆起線で画す。外区には珠文をめぐらす。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。11は外区珠文帯との間にさらなる隆起線の界線を配する。15～17は中央部に右回りの三巴文を配し、外区には珠文をめぐらす。外縁は素縁で、直に立上り平坦面をなす。15･16の外区との境は巴の尾が伸びた隆起線の界線で画す。

2） 軒平瓦 (Fig.248, PL.197･198)

A．偏行唐草文軒平瓦　1は内区に崩れた偏行唐草文、下外区には凸鋸歯文を配する。上外区には珠文。平瓦との接合方法は包み込みによる。2は上下外区に珠文を配し、内区には唐草文を配する。外区は無い。3・4も内区には唐草文を配する。外区は無い。5は右偏行唐草文の途中を分断し、支葉を向かい合わせて均整唐草文もどきとしている。顎は無顎。安楽寺から同笵資料が出土している。

B．重弧文軒平瓦　6は型引きによる三重の太い隆起線の中央線にヘラを押し当てた波状文と波状に折り曲げた顎端部からなる。桶巻つくりの粘土円筒の縁に粘土紐を巻きつけ、瓦当形成を行なった後に分割している。同系の軒平瓦は博多遺跡群や油山からも出土している。

C．剣頭巴文軒平瓦　9は互いに接する三個の剣頭文と六角形の界線が周縁をめぐる左回りの三巴文とを交互に配する。10は一組が互いに接しない３個の剣頭文と左回りの二巴文とを交互に配する。同笵資料が観世音寺から出土している。平瓦凸面には斜格子叩き目と二重格子叩き目が残る二者がある。両者ともに折り曲げ技法による。

D．均整草花文軒平瓦　中心飾りに桜、桐、橘などを配置する。18は桟瓦。

3） 鬼　瓦 (PL.198)

鬼瓦の右下顎部分である。

（4） おわりに

収蔵されている遺物の年代は、平安時代～近世と考えられ、中心となるのは12世紀～14世紀である。収蔵品に限れば、神亀元年(724)に建立されたとする香椎宮(廟)の創建期はもちろん、奈良時代の遺物は認められず、奈良時代における礎石建物の伽藍の存在は極めて低いと考えざるを得ない。詳しくは今後の調査を待たないといけないが、出土瓦が安楽寺や鴻臚館出土瓦と同笵であることから、平安時代においては香椎宮と大宰府との間において強い関係が存在することを示すものである。さらに、鎌倉時代においては、禅寺の存在が遺物的にも極めて高いことを示すとともに、禅寺を媒介とした中国などとの対外交易への香椎宮の思惑が見え隠れしている。

香椎宮の解明については、埋蔵文化財などからのさらなるアプローチが求められる。

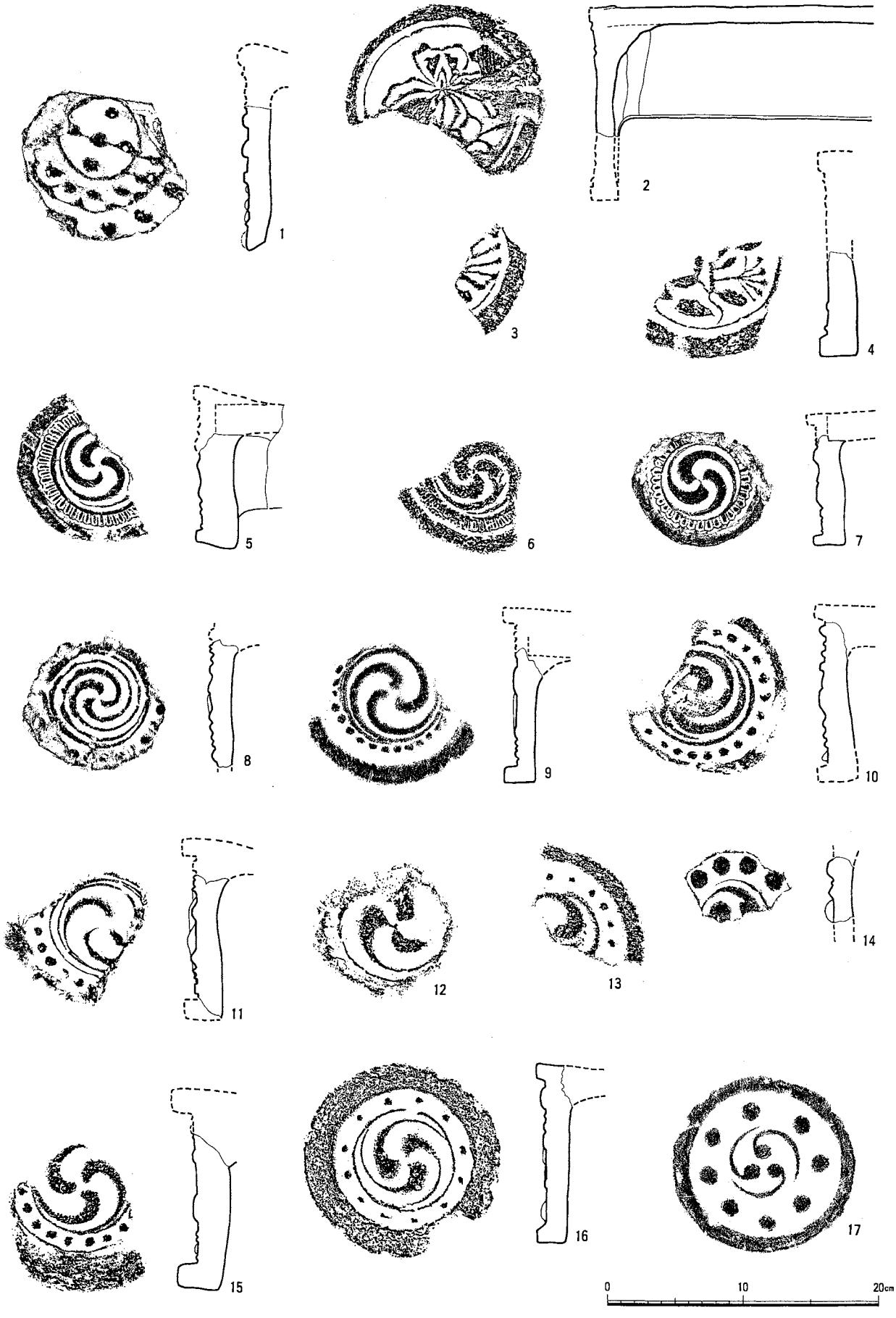


Fig.247　香椎宮境内出土軒丸瓦拓影・実測図(1/4)

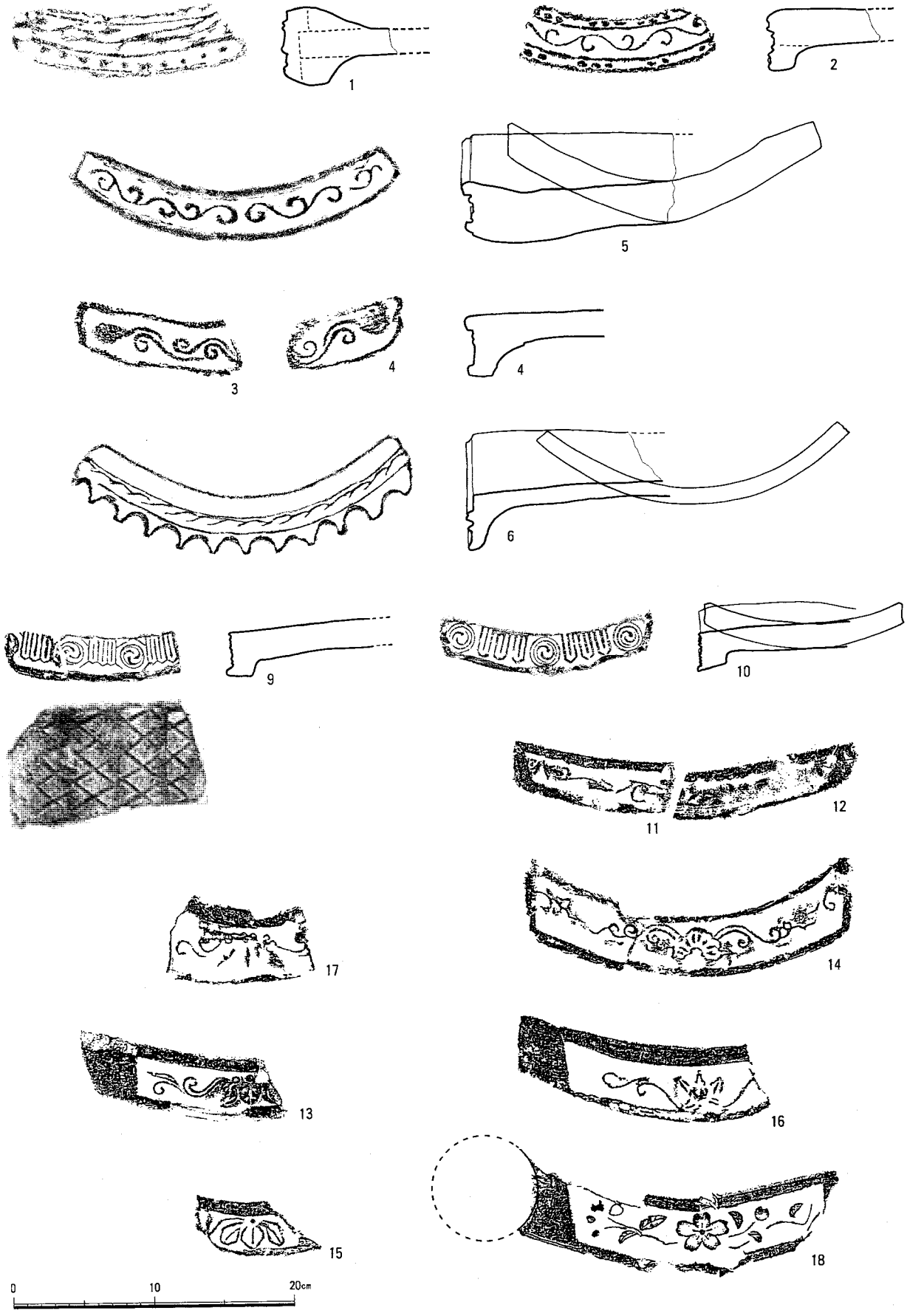


Fig.248　香椎宮境内出土軒平瓦拓影・実測図(1/4)

8．放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種　類	前処理・調整	測　定　法
No. 1	御倉谷調査区 焼土壙SK961	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 2	山城主郭整地土 北部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 3	山城主郭整地土 南西部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 4	山城主郭整地土 北西部	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法 (長時間測定)
No. 5	山城主郭柱穴 SB03 P-3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 6	山城主郭柱穴 SB03 P-5	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法
No. 7	山城主郭柱穴 SB03 P-10	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 8	山城主郭柱穴 SB03 P-11	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 9	山城主郭柱穴 SB03 P-12	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.10	里城調査区 焼土壙SK920	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.11	里城調査区 柱穴	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法 (長時間測定)
No.12	里城調査区 柱穴	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析(AMS)法
No.13	里城調査区 柱穴	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.14	里城調査区 窯SX918	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No.15	里城調査区 現代炭	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β線法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代 交点（1σ）	測定No. (Beta-)
No. 1	1020±60	-25.4	1010±60	AD1020 (AD990～1040)	114235
No. 2	440±50	-29.6	360±50	AD1505,1595,1655 (AD1460～1640)	114236
No. 3	400±40	-27.9	350±40	AD1515,1585,1625 (AD1475～1640)	114237
No. 4	540±80	-26.5	510±80	AD1425 (AD1400～1450)	114238
No. 5	240±50	-28.6	190±50	AD1675,1775,1800,1945 (AD1660～1690) (AD1735～1815) (AD1925～1950)	114239
No. 6	420±40	-26.9	390±40	AD1475 (AD1450～1515) (AD1585～1625)	114240
No. 7	390±70	-26.7	360±70	AD1505,1595,1620 (AD1450～1645)	114241
No. 8	140±60	-26.8	110±60	AD1825,1835,1880,1915 (AD1680～1755) (AD1805～1940)	114242
No. 9	280±50	-24.7	290±50	AD1645 (AD1520～1570) (AD1630～1660)	114243
No.10	1230±60	-29.6	1150±60	AD890 (AD855～980)	114244
No.11	1370±70	-27.6	1320±70	AD685 (AD655～780)	114245
No.12	1060±50	-27.3	1015±50	AD1015 (AD990～1035)	114246
No.13	900±50	-25.1	900±50	AD1170 (AD1040～1215)	114247
No.14	1570±70	-27.1	1540±70	AD550 (AD435～615)	114248
No.15	123.0%±0.9%	-30.3	124.3%±0.9%	modern	114249

1）^{14}C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）$\delta^{13}C$測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ値が表記される場合もある。

9．土　壌　分　析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．トイレ遺構検出分析

1．はじめに

トイレ遺構等の排泄物の堆積では、寄生虫卵、花粉、種実の各遺体が特徴ある群集および出現密度を示す。香椎B遺跡では土壙および大溝の堆積物を対象に分析を行い検討を加える。

2．試　料

分析試料は、15～16世紀とされる土壙（SK254）および大溝（SD51）内およびから採取された計15点である。SK254では暗青灰色粘質土（試料１～５）、SD51では、暗灰色粘質土（試料６、７、SK254の上流）、最下層暗青灰色粘質土（試料８、SK254の上流）、最下層暗青灰色粘質土（試料９、10、SK254の下位）、最下層暗青灰色粘質土（試料11、12、SK254の下流）である。

3．寄生虫卵分析

（1）方　法

寄生虫卵の分離抽出は以下のように行った。

1）サンプルを採量する。
2）脱イオン水を加え攪拌する。
3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
4）25％フッ化水素酸を加え30分静置。（２・３度混和）
5）水洗後サンプルを２分する。
6）片方にアセトリシス処理を施す。
7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
8）検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（2）結　果

SK254からは寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。SD51では試料６、８、10、11、12から、低い出現密度の回虫卵および鞭虫卵が検出された。明らかな消化残渣は検出されなかった。

表１　香椎B遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（寄生虫卵）

分類群		SK254					SD051						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Helminth eggs	寄生虫卵												
Ascaris	回虫卵								1			1	3
Trichuris	鞭虫卵						2				2	3	4
Total	計	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	2	(-)	1	(-)	2	4	7
試料１cc中の寄生虫卵数		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8 ×10	0.0	0.4 ×10	0.0	1.0 ×10	1.8 ×10	3.2 ×10
明らかな消化残渣		(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

4．花粉分析

（1）方　法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（2）結　果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉25、シダ植物胞子２形態の計51である。これらの学名と和名および粒数を表に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ－シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、ウルシ属、トチノキ、ブドウ属、ツタ、ハイノキ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、カラハナソウ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、キツネノマゴ、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

表2　香椎B遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（花粉）

分類群		SK254					SD051						
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Arboreal pollen	樹木花粉												
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	3	1	2		1	4	1	6		4	13	
Cryptomeria japonica	スギ				1	1	1		2	6	2	7	
Myrica	ヤマモモ属												1
Betula	カバノキ属	1									1		1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1										1	
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリ-シイ属-マテバシイ属	1	2	1	1	11		1	6	4	12	8	7
Fagus	ブナ属										1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1			3	2	2		2		3	3	4
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	1	1	1	3	4		2	12	3	7	8	3
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	6	3	3	4	2			1	1	5	6	3
Zanthoxylum	サンショウ属											1	
Rhus	ウルシ属				2	8					17	1	1
Vitis	ブドウ属								1				
Parthenocissus tricuspidata	ツタ					1						1	
Symplocos	ハイノキ属									1		1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属								2		2		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉												
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科				14	112	1	1	4	28	54	11	26
Rosaceae	バラ科								1				
Araliaceae	ウコギ科								11		1	2	
Nonarboreal pollen	草本花粉												
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属												1
Gramineae	イネ科	13	10	1	8	48	2	9	11	14	37	39	21
Oryza type	イネ属型	2	1	5	2	5			4		3	1	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1		1		2	1		2		2	1	1
Humulus	カラハナソウ属	2			13	107				11	47	4	25
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節					1			1	1	2	5	
Rumex	ギシギシ属						1						
Fagopyrum	ソバ属										1	3	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科				2	5	1	1	3		11	275	14
Caryophyllaceae	ナデシコ科			1					2		1		
Ranunculus	キンポウゲ属	1				3				1	1	2	
Cruciferae	アブラナ科	1				2			2		2	11	3
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属										1		
Apiodeae	セリ亜科								1			1	2
Labiatae	シソ科								3	2			
Justicia procumbens	キツネノマゴ					1						2	1
Plantago	オオバコ属				1								
Lactucoideae	タンポポ亜科										1		1
Asteroideae	キク亜科	2			2	6			1		5	2	2
Xanthium	オナモミ属									3		1	
Artemisia	ヨモギ属	3	4	2	12	21	3	2	12	4	45	335	27
Fern spore	シダ植物胞子												
Monolate type spore	単条溝胞子	4				1	12	10	2		1		3
Trilate type spore	三条溝胞子	1			2	3	17	3	9	1	7	4	1
Arboreal pollen	樹木花粉	14	7	7	14	30	7	4	32	15	54	50	20
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	14	112	1	1	16	28	55	13	26
Nonarboreal pollen	草本花粉	25	15	10	40	201	8	12	42	36	159	682	103
Total pollen	花粉総数	39	22	17	68	343	16	17	90	79	268	745	149
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	1	4	0	0	2	0	3	1	2
	試料1cc中の花粉数	1.4 $\times10^2$	8.8 $\times10$	6.8 $\times10$	2.7 $\times10^2$	1.5 $\times10^3$	6.4 $\times10$	6.0 $\times10$	3.6 $\times10^2$	3.5 $\times10^2$	1.4 $\times10^3$	3.3 $\times10^3$	6.7 $\times10^2$
Fern spore	シダ植物胞子	5	0	0	2	4	29	13	11	1	8	4	4

2） 土壙SK254

試料５より、比較的多くの花粉が検出された。樹木花粉の占める割合は極めて低い。樹木と草本を含むクワ科－イラクサ科の出現率が高く、草本花粉ではカラハナソウ属、イネ属型を含むイネ科、ヨモギ属の出現率が高い。

3） 溝SD51

SK254の下位および下流にあたる試料10、11、12から比較的多くの花粉が検出された。試料10、12では樹木花粉は低率で、クリーシイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、ウルシ属が低率に出現する。樹木と草本を含むクワ科－イラクサ科、イネ属型を含むイネ科、カラハナソウ属、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属の草本花粉の出現率が高い。試料11ではアカザ科-ヒユ科、ヨモギ属の出現率が極めて高い。

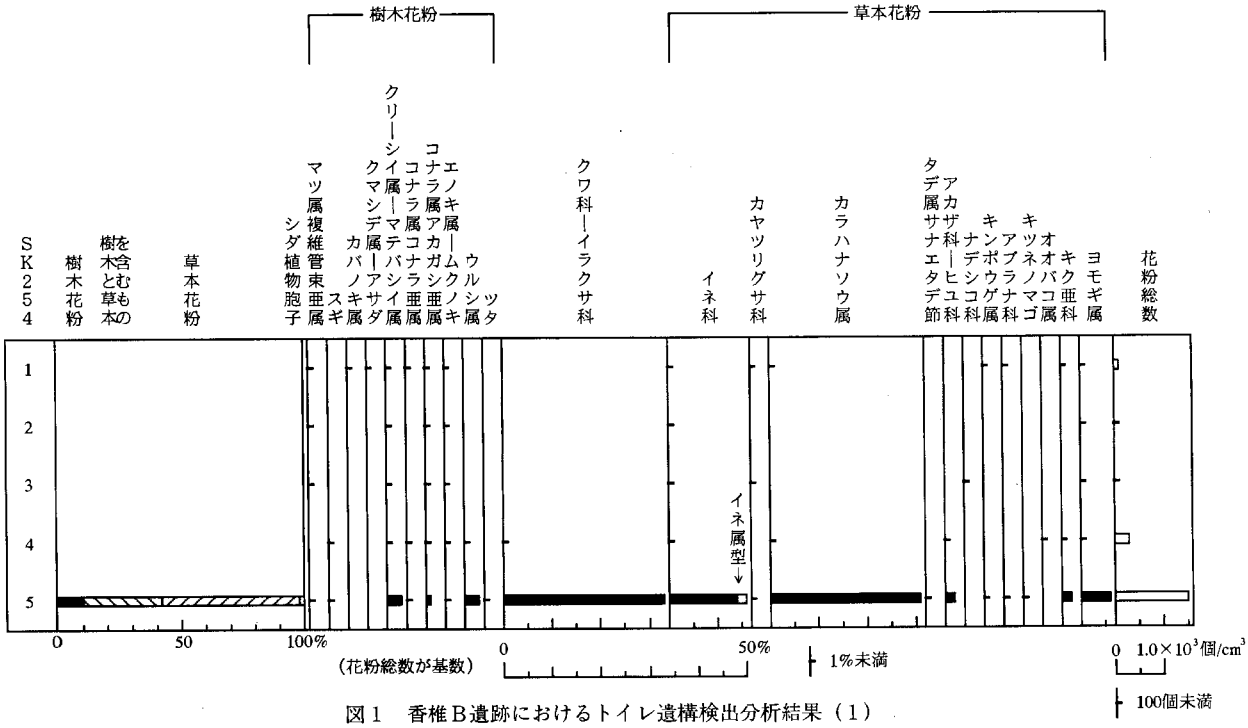


図１　香椎Ｂ遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（１）
（SK254の花粉ダイアグラム）

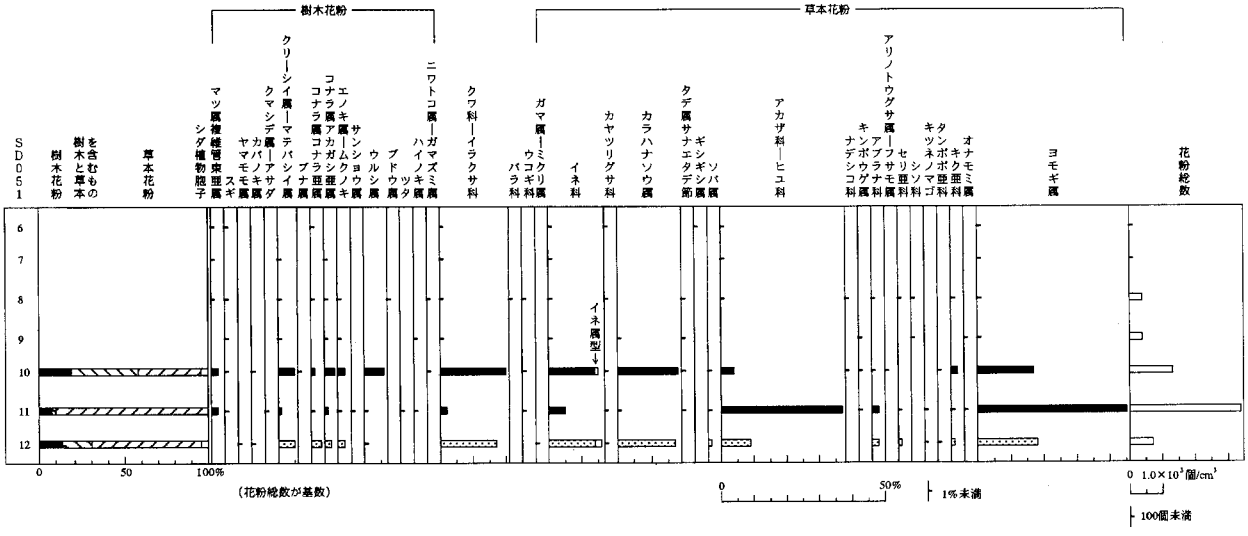


図２　香椎Ｂ遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（２）
（SD51の花粉ダイアグラム）

5．種実同定分析

（1）方　法

試料となる堆積物を秤量し、0.25mm目篩を用いて水洗し選別を行う。残渣を肉眼および実体顕微鏡で観察し、同定と計数を行う。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行う。

（2）結　果

1）出現した分類群

以下に出現した分類群とその特徴を列記する。

〔木　本〕

キイチゴ属

〔草　本〕

オオムギ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、クワクサ、カラムシ属、イラクサ科、タデ属A・B、ギシギシ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科、キンポウゲ科、ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属－キジムシロ属、カタバミ属、ノブドウ、シソ属、セリ科、シソ属、イヌコウジュ属、トウガン、スズメウリ、タカサブロウ、キク科

2）SK254

種実の出現密度は比較的低い。出現密度が低いため、傾向が現れにくいが、カラムシ属、タデ属、アカザ属、カタバミ属などが比較的多い傾向がある。

3）SD51

試料によってばらつきはあるが、キイチゴ属、カラムシ属、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、カタバミ属、セリ科が主に検出される。

表3　香椎B遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（種実）

分類群		（試料200cc中）	SK254					SD51						
学名	和名	部位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Arbor	樹木													
Rubus	キイチゴ属	核						4		7	8	2		11
Herb	草本													
Setaria	エノコログサ属	果実(穎)			1	2	1				6	3	1	
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実												
Gramineae	イネ科	果実(穎)				1					2			
Cyperus	カヤツリグサ属	果実						2		4				
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実									2			
Fatoua villosa Nakai	クワクサ	種子									1			
Humulus scandens Merr.	カナムグラ	種子					1							
Boehmeria	カラムシ属	種子	1	1		12	2	8	11	7	20	14		
Urticaceae	イラクサ科	種子											2	
Polygonum A	タデ属A	果実	1		1	7	7			3		4	3	1
Polygonum B	タデ属B	果実									54	2	10	14
Rumex	ギシギシ属	果実					1							
Chenopodium	アカザ属	種子			1	5	5				5		22	14
Amaranthus	ヒユ属	種子			1									
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	1	3			2			51	1		6	1
Ranunculaceae	キンポウゲ科	果実									3			
Duchesnea-Fragaria-Potentilla	ﾍﾋﾞｲﾁｺﾞ属-ｵﾗﾝﾀﾞｲﾁｺﾞ属-ｷｼﾞﾑｼﾛ属	種子									2			
Oxalis	カタバミ属	種子	1	1		9		1		4	19	8	6	6
Ampelopsis brevipedunculata Trautv.	ノブドウ	種子								1	1			
Umbelliferae	セリ科	果実				4				1	5		6	3
Perilla	シソ属	果実			1	1					3			1
Mosla	イヌコウジュ属	果実	1			1								
Benincasa cerifera	トウガン	種子									1			
Melothria japonica Maxim.	スズメウリ	種子				1								
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実									1			
Compositae	キク科	果実				5	1				2			
Total	合計		5	5	5	48	20	15	11	78	136	33	56	51
Unknown	不明		1	1	0	0	0	1	0	1	5	0	4	5

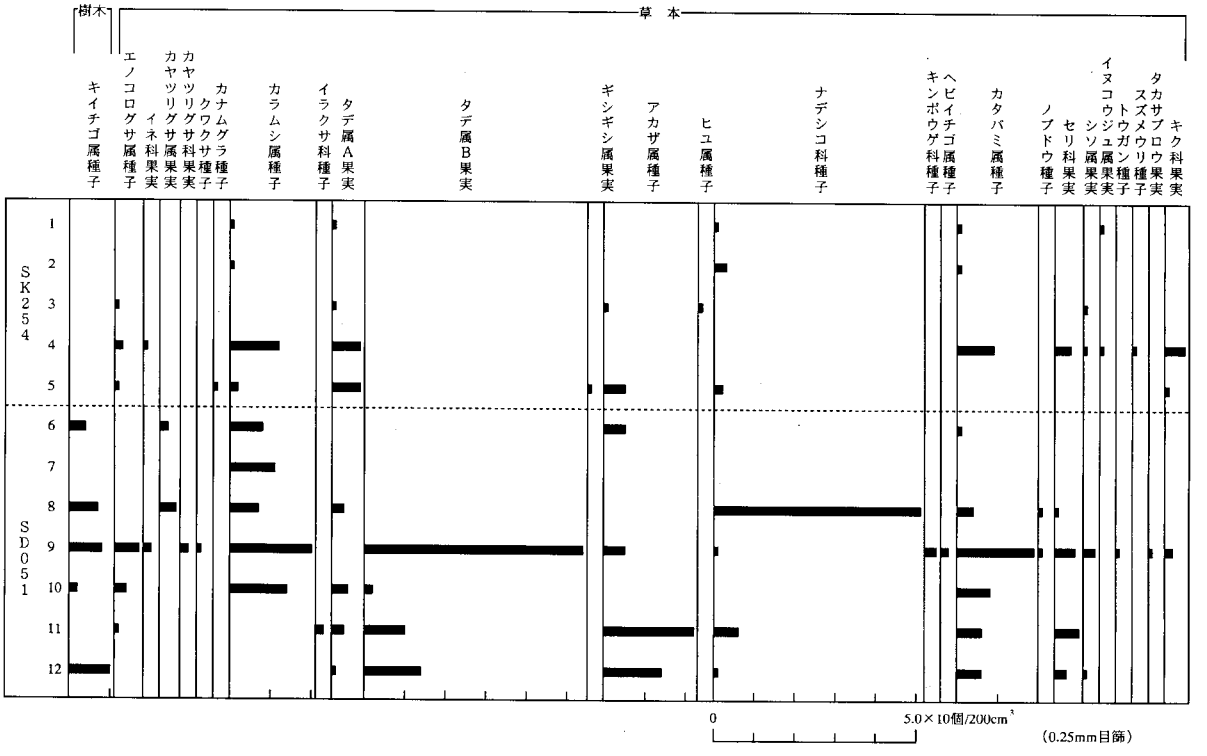


図３　香椎Ｂ遺跡におけるトイレ遺構検出分析結果（３）
（種実ダイアグラム）

６．トイレ遺構の可能性

SK254では寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、SD51では試料６、８、10、11、12から低い出現密度の寄生虫卵が検出された。花粉分析では、SK254の試料５とSD51の試料10、11、12から比較的多くの花粉が検出され、樹木花粉は低率であり、クワ科－イラクサ科、カラハナソウ属、イネ属型を含むイネ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属が中心に出現した。これらはいずれも乾燥した集落域に生育する人里植物である。種実同定ではSK254とSD51からカラムシ属、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、カタバミ属、セリ科が主に検出され、これらも乾燥した集落域に生育する人里植物である。なお、カラハナソウ属とカラムシ属は放棄地に多い。

以上から、SK254とSD51からは検出されないか低い密度の寄生虫卵が検出されるのみで、花粉群集と種実群集は乾燥した集落域に生育する人里植物が主体であった。SK254に集落周辺の溝の汚染程度の寄生虫卵が含まれてはいるが、SK254とSD51の堆積物に糞便が密度高く含まれているとはみなされない。水流による影響を考慮しなければならないが、分析結果からはSK254がトイレ遺構とみなす蓋然性はない。

植生および環境の復元は次項で併せてまとめる。

II．植物珪酸体分析

1．植物珪酸体分析について

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試料

分析試料は、15～16世紀とされる大溝（SD51）および土壙（SK254、SK219、SK223、SK306）から採取された計15点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4．分析結果

（1） 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表および図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ属型

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネ

ザサ節)、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属)、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属)、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）SD51

大溝の堆積物（試料６～12）について分析を行った。その結果、SK254より上流の暗灰色粘質土（試料６、７）およびSK254より下流の最下層暗青灰色粘質土（試料11、12）からイネが検出された。このうち、試料７では密度が5,300個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。また、試料６でも密度が4,500個/gと比較的高い値である。

その他の分類群では、部分的にウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型、マダケ属型、棒状珪酸体、ブナ科（シイ属)、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも少量である。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

２）SK254

土壙内の暗青灰色粘質土（試料１～５）について分析を行った。その結果、試料１、２、５からイネが検出された。密度は1,500～2,300個/gと比較的低い値である。その他の分類群では、部分的にウシクサ属型、クマザサ属型、棒状珪酸体、ブナ科(シイ属)、クスノキ科などが検出されたが、いずれも少量である。

３）SK219・SK223・SK306

灰黒色粘土（試料13～15）について分析を行った。その結果、各試料からイネが検出された。このうち、SK219（試料14）とSK223（試料15）では密度が6,800個/gと高い値であり、SK306（試料15）でも3,000個/gと比較的高い値である。その他の分類群では、部分的にウシクサ族型、ネザサ節型、マダケ属型、棒状珪酸体、ブナ科（シイ属)、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも少量である。

５．植物珪酸体分析から推定される植生、環境、農耕

15～16世紀とされる大溝（SD51）の堆積物のうち、上流側の暗灰色粘質土層からはイネが多量に検出され、下流側でも一部の試料からイネが検出された。また、土壙(SK219、SK223)内の堆積物からはイネが多量に検出され、その他の土壙でもほとんどの試料からイネが検出された。

以上のことから、当時は遺跡周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で大溝や土壙内にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が混入したものと推定される。とくに、SK219やSK223ではイネの密度がかなり高いことから、何らかの目的でイネ藁が利用されていた可能性も考えられる。

当時の遺跡周辺には、ブナ科（シイ属)、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの照葉樹林が分布しており、マダケ属などのタケ亜科も見られたものと推定される。

表４　香椎Ｂ遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	SK254 1	SK254 2	SK254 3	SK254 4	SK254 5	SD51 6	SD51 7	SD51 8	SD51 9	SD51 10	SD51 11	SD51 12	SK219 13	SK223 14	SK306 15
イネ科															
イネ	15	23			15	45	53				22	8	68	68	30
ススキ属型													8	30	
ウシクサ族型		8	7								7	8	8	8	8
タケ亜科															
メダケ節型															8
ネザサ節型								15			15		8		8
クマザサ属型		8	7							8					8
ミヤコザサ節型			7												
マダケ属型											15			8	
未分類等			7				8						15	8	23
その他のイネ科															
表皮毛起源						8		7						15	8
棒状珪酸体	38	8	30		7	53	45	15	8	38	15		38	84	30
未分類等	45	30	45		7	38	75	7	23	38	37		45	91	90
樹木起源															
ブナ科(シイ属)	8	8				8	15			15	7		23	15	45
クスノキ科					7	8				8					
マンサク科(イスノキ属)						8	15						23	8	8
その他	8				7		23	15		23		15	30	15	15
植物珪酸体総数	113	83	105		45	166	233	60	31	128	120	30	264	350	279

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）

イネ	0.44	0.67			0.44	1.33	1.54				0.66	0.22	1.99	2.01	0.89
ススキ属型													0.09	0.38	
メダケ節型															0.09
ネザサ節型								0.07			0.07		0.04		0.04
クマザサ属型		0.06	0.06							0.06					0.06
ミヤコザサ節型			0.02												

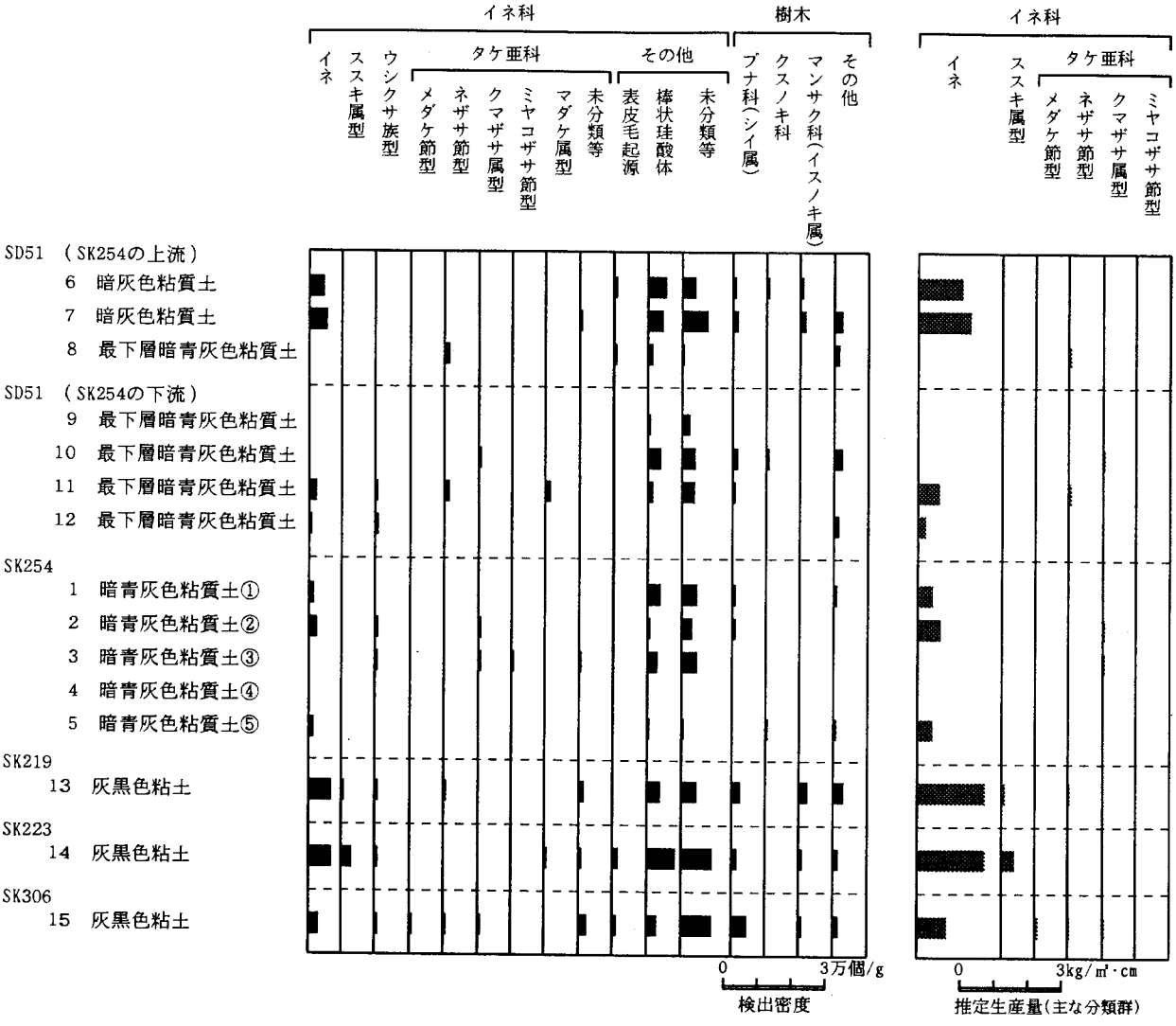


図4　香椎B遺跡における植物珪酸体分析結果

III. 花粉分析

1. 試　料

試料は、SK219の灰黒色土（試料13)、SK223の灰黒色土（試料14)、SK306の灰黒色土（試料15)の計3点である。

2. 方　法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
4）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
5）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

3. 結　果

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉13、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉17、シダ植物胞子２形態の計35である。これらの学名と和名および粒数を表に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クリ－シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、トチノキ、ハイノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、カラマツソウ属、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

4．花粉群集の特徴と推定される植生と環境

試料13、14、15はほぼ同じ花粉群集の特徴を示す。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属の出現率がやや高く、クリ－シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スギが中心に出現し、草本花粉ではイネ科が優占し、ヨモギ属やアカザ科-ヒユ科が伴われる。

以上から、周辺の森林は、マツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)、クリ－シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギが主要な構成要素としていた。マツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)がやや多いことから、二次林化が進んでいた。SK219、SK223、SK306の周囲には人里植物を多く含むイネ科を主し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科などの人里植物が生育していた。周辺は草本の生育する陽当たりのよい人為改変地の環境であった。

表5　香椎B遺跡における花粉分析結果

分類群		SK219	SK223	SK306
学名	和名	13	14	15
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	75	53	27
Cryptomeria japonica	スギ	20	24	5
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			1
Alnus	ハンノキ属	1		1
Betula	カバノキ属	1	2	3
Corylus	ハシバミ属	1		
Castanea crenata-Castanopsis-Pasania	クリ-シイ属-マテバシイ属	20	29	70
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	15	10	13
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	22	4	26
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ		1	1
Zanthoxylum	サンショウ属		1	1
Aesculus turbinata	トチノキ		1	
Symplocos	ハイノキ属			1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	3	12
Rosaceae	バラ科			1
Leguminosae	マメ科		3	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	99	200	147
Oryza type	イネ属型	3		15
Cyperaceae	カヤツリグサ科	28	13	25
Aneilema keisak	イボクサ	1		
Monochoria	ミズアオイ属			3
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1		1
Fagopyrum	ソバ属		3	2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	25	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	5	9
Thalictrum	カラマツソウ属		1	
Cruciferae	アブラナ科	1	11	
Hydrocetyloideae	チドメグサ亜科	3	5	2
Apiodeae	セリ亜科	1	2	1
Plantago	オオバコ属		1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	3	5	4
Asteroideae	キク亜科	1	7	8
Artemisia	ヨモギ属	10	34	30
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	22	30	23
Trilate type spore	三条溝胞子	48	38	17
Arboreal pollen	樹木花粉	155	125	149
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	6	13
Nonarboreal pollen	草本花粉	154	312	251
Total pollen	花粉総数	312	443	413
Unknown pollen	未同定花粉	4	2	1
	試料1cc中の花粉数	3.7 $\times 10^3$	3.5 $\times 10^3$	1.9 $\times 10^3$
Fern spore	シダ植物胞子	70	68	40
Helminth eggs	寄生虫卵			
Ascaris	回虫卵	1	6	1
Trichuris	鞭虫卵	6	8	
Metagonimus-Heterophyes	異形吸虫卵		1	
Total	計	7	15	1
	試料1cc中の寄生虫卵数	8.4 $\times 10$	6.0 $\times 10$	0.5 $\times 10$
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

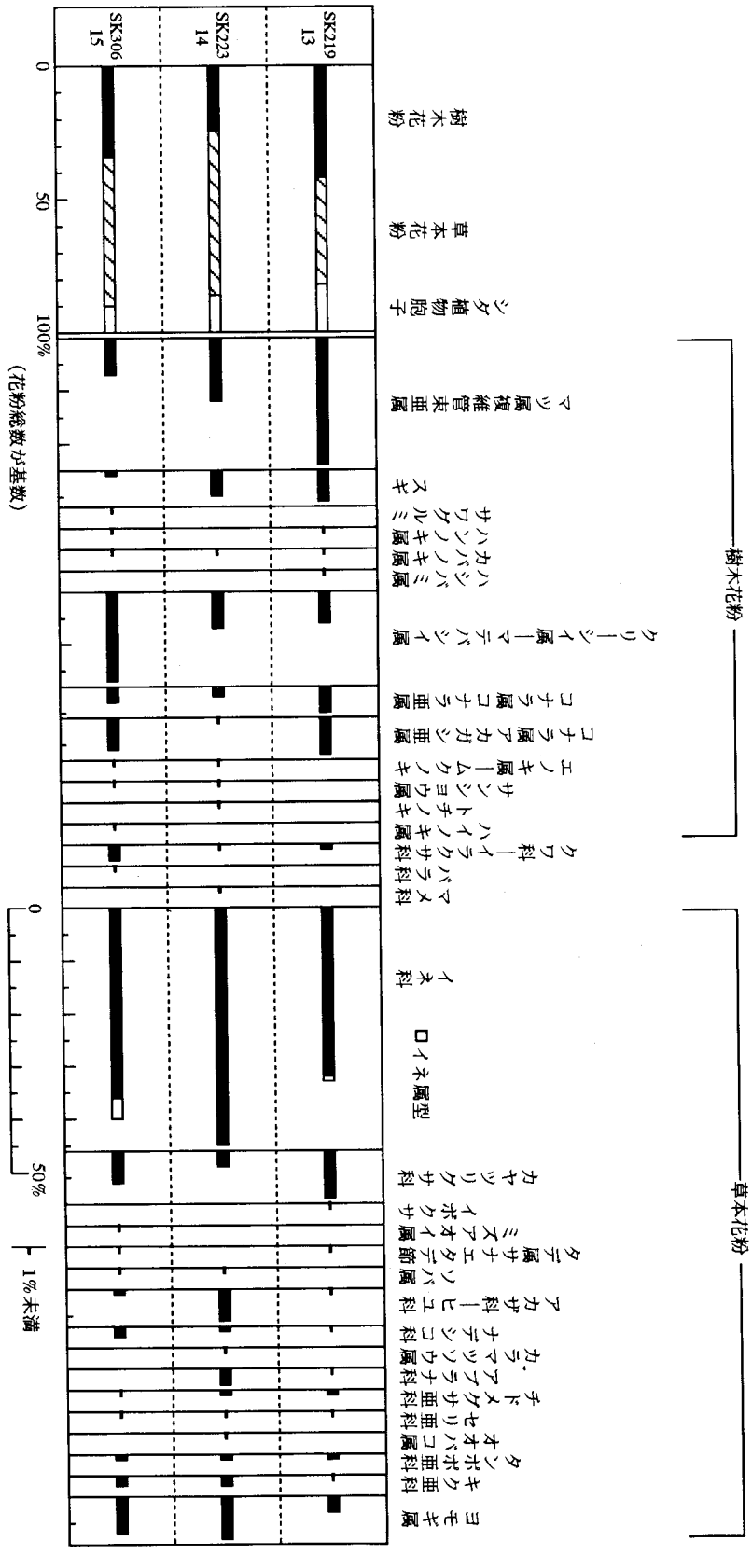


図5　香椎B遺跡における花粉ダイアグラム

Ⅳ．種実同定分析

1．試　料

SK219（試料13）、SK223（試料14）、SK306（試料15）から採取した灰黒色土である。

2．方　法

試料となる堆積物を秤量し、0.25mm目篩を用いて水洗し選別を行う。残渣を肉眼および実体顕微鏡で観察し、同定と計数を行う。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行う。

3．結果

1）出現する分類群

以下に出現した分類群とその特徴を列記する。

〔木本〕

キイチゴ属

〔草本〕

オオムギ、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カラムシ属、イラクサ科、タデ属、ギシギシ属、アカザ属、ヒユ属、ナデシコ科、カタバミ属、シソ属、ナス属、タカサブロウ、キク科

4．種実群集の特徴と推定される植生、環境

SK219（試料13）ではナデシコ科、ギシギシ属、タカサブロウが比較的多く検出され、SK223（試料14）ではナデシコ科、カタバミ属、カヤツリグサ属、ホタルイ属などがやや多い。SK306（試料15）ではタカサブロウが多い。栽培植物としてはオオムギが検出された。

周囲はナデシコ科、タカサブロウ、ギシギシ属、が生育し、これらは人里植物ないし農耕雑草であるため、周囲はこれらの生育する集落ないし農耕地であったと推定される。ギシギシ属、ホタルイ属、カヤツリグサ属はへ水湿地草本でもあり、試料採取地点の遺構ないし周囲に水湿地が存在していたと推定される。

表6　香椎B遺跡における種実同定結果

分類群		(試料100cc中)	SK219	SK223	SK306
学名	和名	部位	13	14	15
Arbor	樹木				
Rubus	キイチゴ属	核	2		1
Herb	草本				
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実	2		
Gramineae	イネ科	果実(穎)	4		
Scirpus	ホタルイ属	果実		3	
Cyperus	カヤツリグサ属	果実	2	6	1
Boehmeria	カラムシ属	種子			1
Polygonum A	タデ属A	果実	3	2	
Rumex	ギシギシ属	果実	13		
Chenopodium	アカザ属	種子	1	3	
Amaranthus	ヒユ属	種子	1		
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	51	24	2
Oxalis	カタバミ属	種子	2	4	
Perilla	シソ属	果実	1		
Solanum melongena L.	ナス	種子	2		
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実	6		13
Compositae	キク科	果実		2	
Total	合計		90	44	18
Unknown	不明		4	0	1

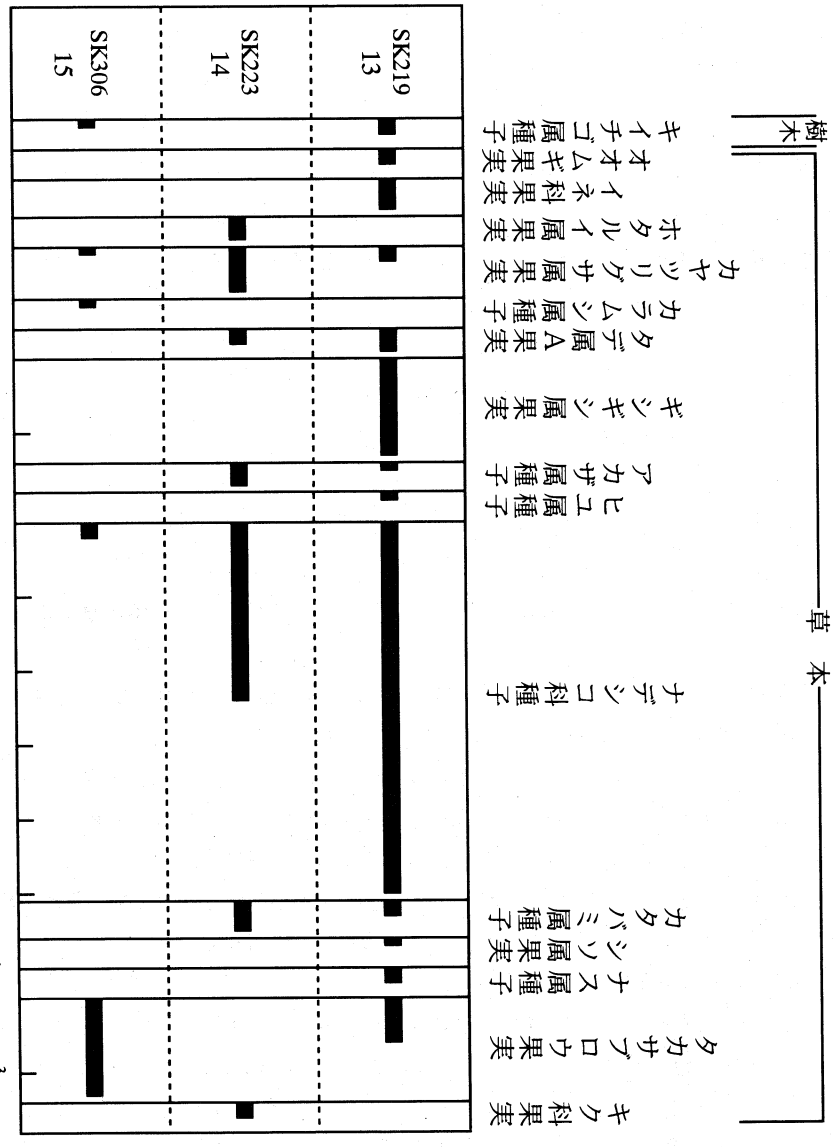


図６　香椎Ｂ遺跡における種実ダイアグラム

V. まとめ

香椎B遺跡において推定された植生および環境をまとめる。

（1）SK254、SD51の周囲とSK219、SK223、SK306の周囲では、植生がやや異なる。

（2）SK254、SD51の周囲ではカラムシ属、カラハナソウ属、イネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が生育し、放棄地に多い雑草が生育していた。

（3）SK219、SK223、SK306の周囲はナデシコ科、ギシギシ属、タカサブロウなどの人里植物および農耕雑草が生育し、集落域や農耕地の環境であった。

（4）周辺の森林植生は、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が比較的多く、クリ－シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、スギの照葉樹と針葉樹などが主要素であった。他にマダケ属などのタケ亜科も生育していた。マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が多いことから、二次林化が進行していた。

（5）イネの植物珪酸体（プラント・オパール）が多量に検出されることから、周囲で水田が営まれるか、遺跡でイナ藁が利用されていたと考えられる。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p.9-55.

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

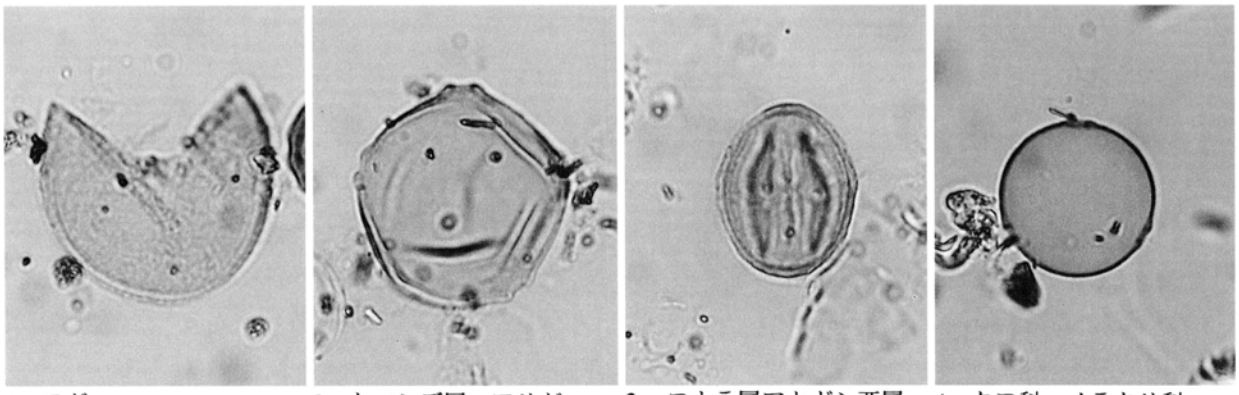
金原正明・松井章・金原正子（1994）便所堆積物から探る古代人の食生活．助成研究報告（平成４年度），財団法人味の素食の文化センター，p.35-48.

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号，p.27-37.

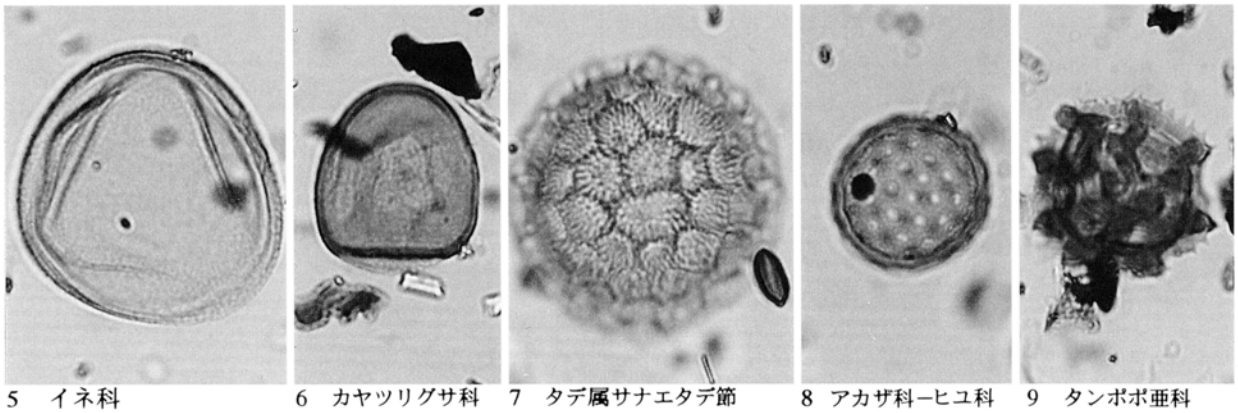
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

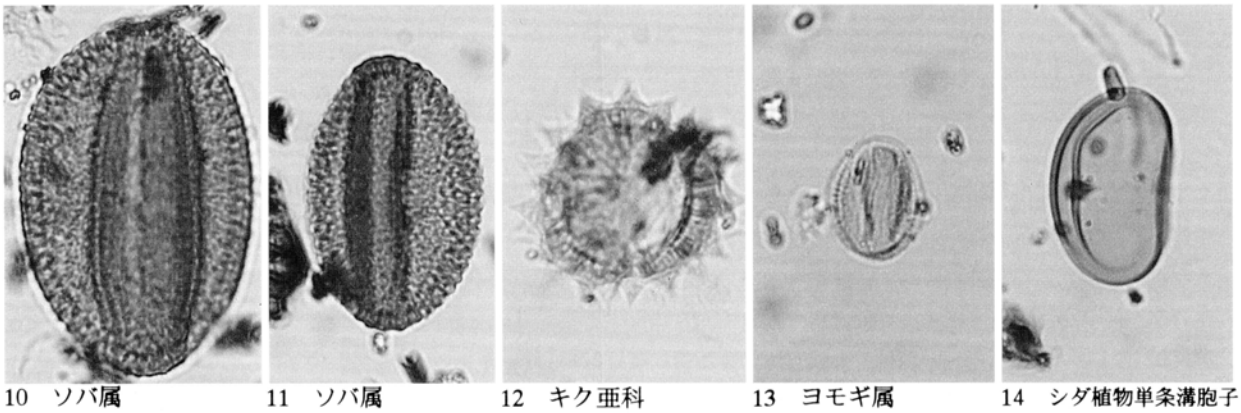
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.



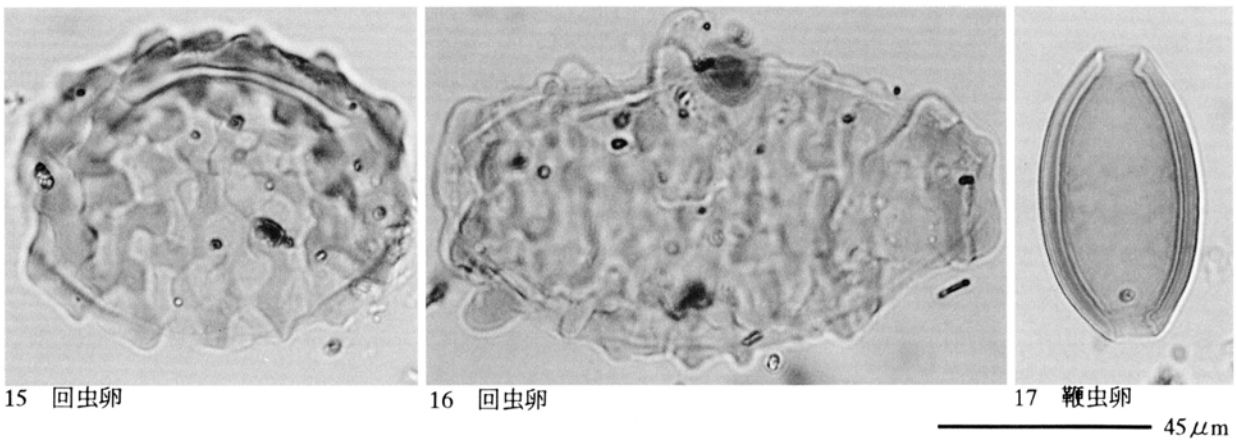
1　スギ　2　クマシデ属ーアサダ　3　コナラ属アカガシ亜属　4　クワ科ーイラクサ科



5　イネ科　6　カヤツリグサ科　7　タデ属サナエタデ節　8　アカザ科ーヒユ科　9　タンポポ亜科



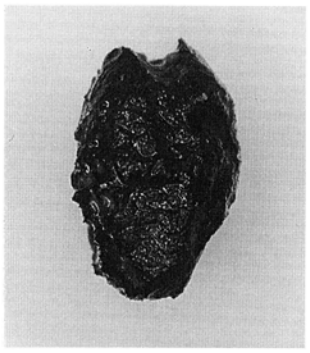
10　ソバ属　11　ソバ属　12　キク亜科　13　ヨモギ属　14　シダ植物単条溝胞子



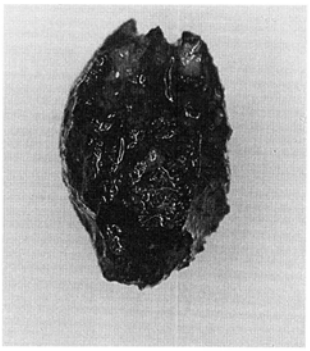
15　回虫卵　16　回虫卵　17　鞭虫卵

45 μm

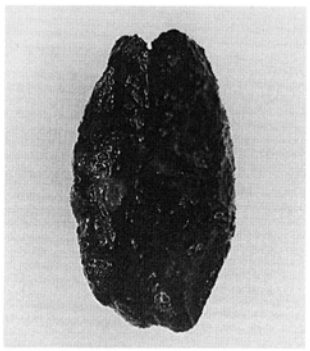
香椎Ｂ遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子遺体



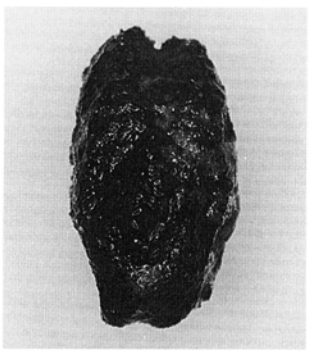
1a　オオムギ　果実



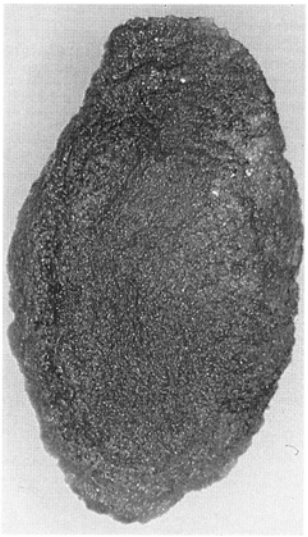
1b　同左　1.0mm



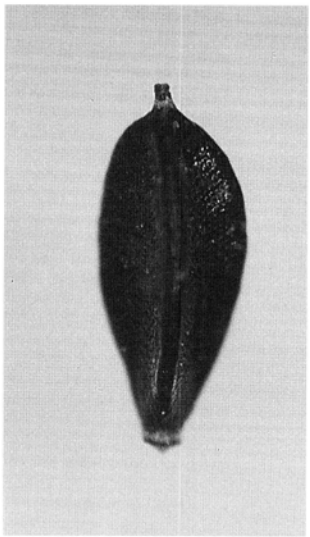
2a　オオムギ　果実



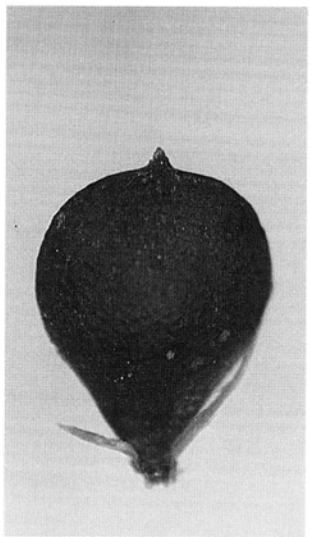
2b　同左　1.0mm



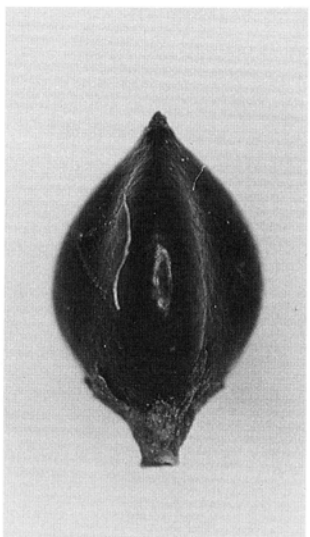
3　トウガン　種子　1.0mm



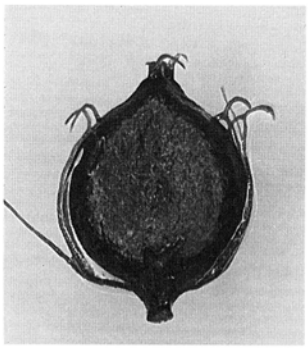
4　カヤツリグサ属　果実　0.5mm



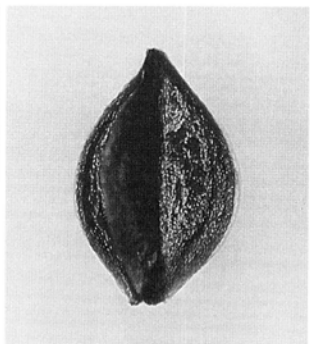
5　ホタルイ属　果実　0.5mm



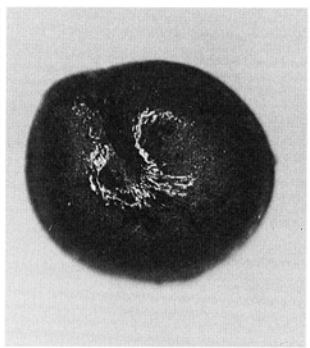
6　タデ属A　果実　1.0mm



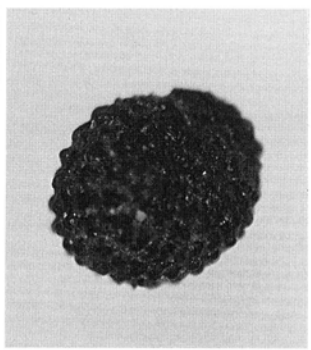
7　タデ属B　果実　1.0mm



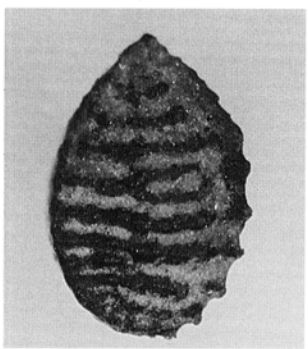
8　ギシギシ属　果実　0.5mm



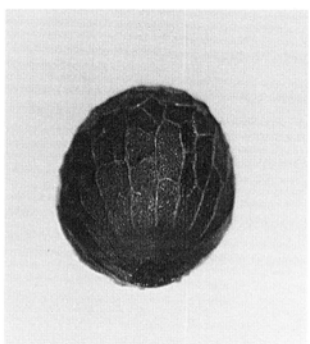
9　アカザ属　種実　0.5mm



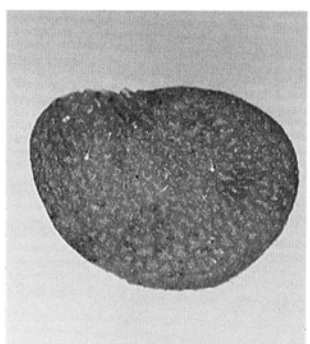
10　ナデシコ科　種子　0.5mm



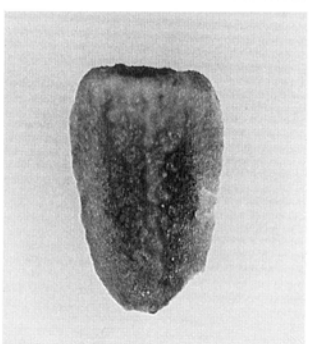
11　カタバミ属種子　0.5mm



12　シソ属　果実　1.0mm

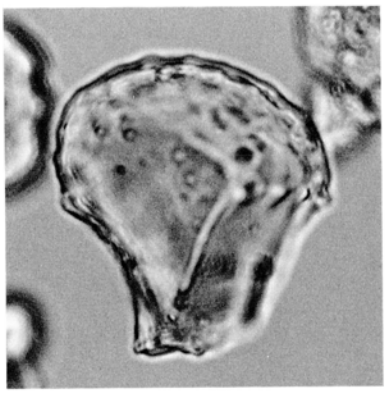


13　ナス属　種子　0.5mm

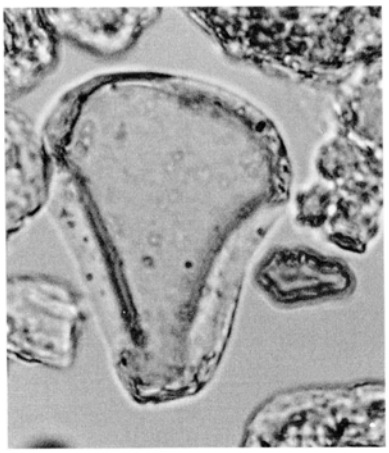


16　タカサブロウ　果実　1.0mm

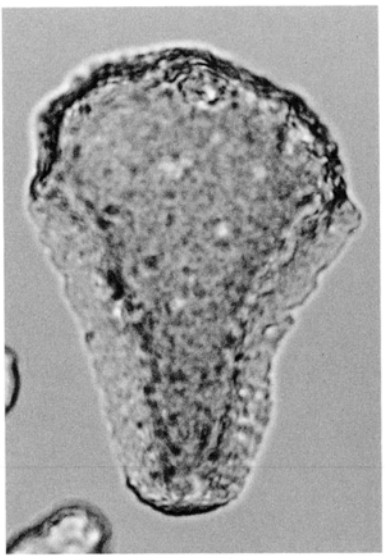
香椎B遺跡出土種実



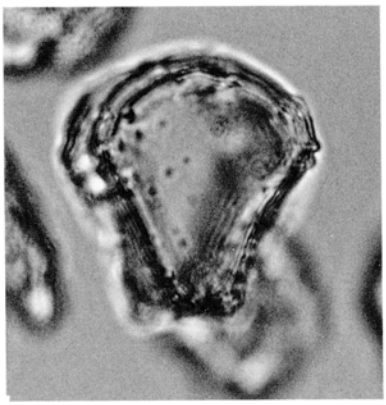
1　イネ



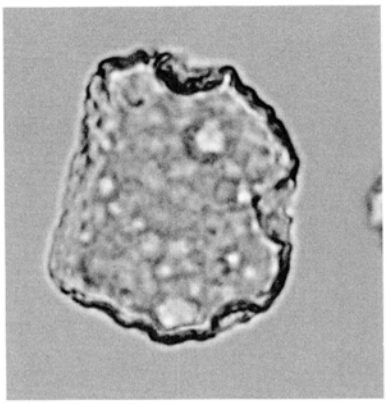
2　ススキ属型



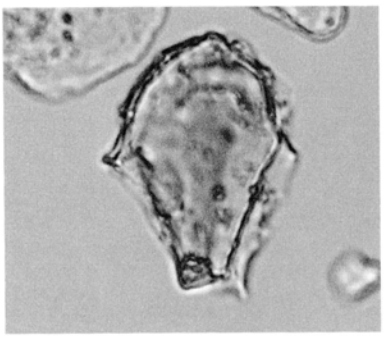
3　メダケ節型



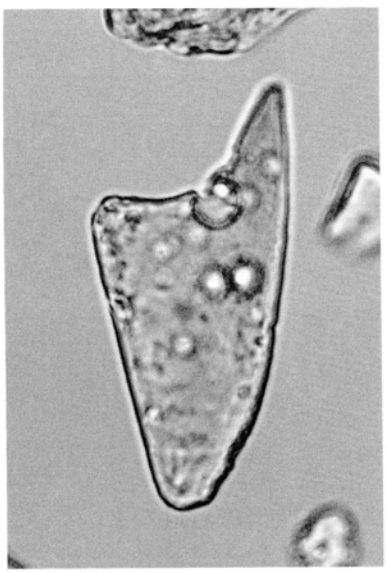
4　ネザサ節型



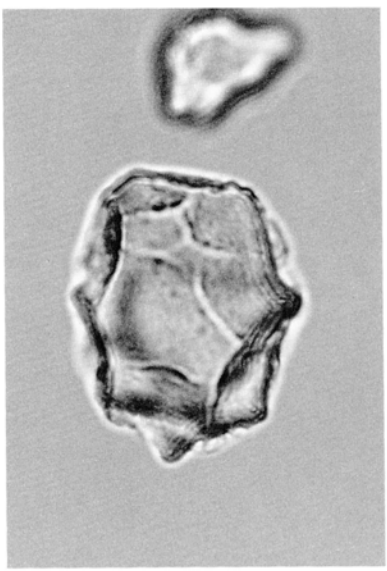
5　クマザサ属型



6　マダケ属型

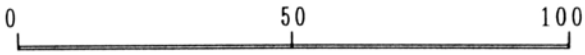


7　表皮毛起源



8　ブナ科（シイ属）

9　クスノキ科



香椎Ｂ遺跡出土植物珪酸体

第V章　小　結

1．はじめに

旧石器時代から戦国期までのあらゆる遺跡が複合する香椎B遺跡調査のまとめとしては、香椎B遺跡の変遷を中心に各遺跡ごとに問題点を上げ、今後の研究課題としたい。なお、香椎B遺跡の谷部の変遷については調査を担当した下村智氏（別府大学助教授）の見解に沿って述べるものである。

2．谷部における中世遺構の変遷

I　期（10世紀～11世紀末）

屋敷群が谷部に出現する直前期である。谷奥の稲戸前調査区では2棟の掘立柱建物が認められるものの、整然と区画された地割は出現せず、自然流路や溜り、一部には水田が残る。遺構は未確認ながら、自然流路や溜りから出土した軒丸瓦、軒平瓦、大型鬼瓦などをはじめとする瓦塼類の出土は、「壱岐嶋雑掌直成安」銘墨書の木簡出土と併せて、寺院もしくは官衙施設が寺熊調査区東半部や谷奥の大日調査区に存在していた事を強く示唆するものである。稲戸前調査区の掘立柱建物は、建物構造などから香椎宮に関係する倉庫の可能性が高い。今調査時には既に埋没していた稲戸前調査区の南側に倉庫群が展開していたと考えられる。

II　期（12世紀前半～12世紀後半）

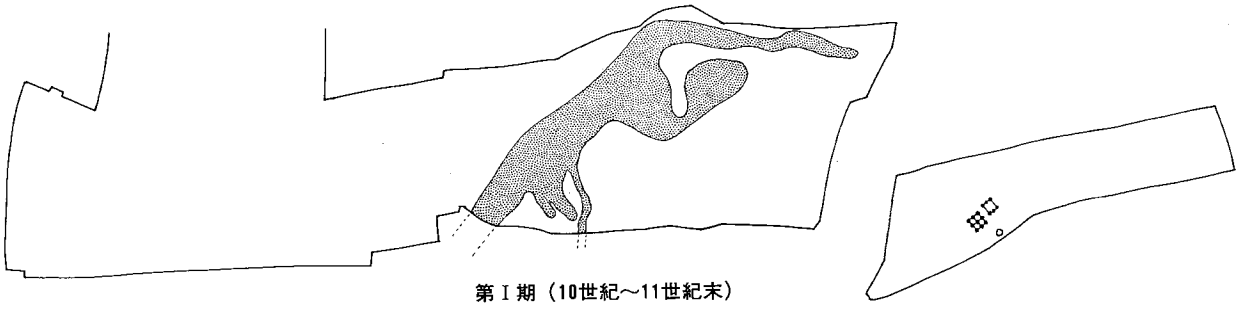
屋敷群の出現期で、谷の奥側になる寺熊調査区中央部から東半部を中心に形成されていく。11世紀後半、遅くとも12世紀初頭には丘陵を削って低地を埋め立てる本格的な整地作業が始まり、12世紀前半～12世紀後半には梁行6.2m、桁行11.7mの四面庇を持つ大型掘立柱建物を中心にして、その周囲には13棟の東西棟の掘立柱建物が棟筋を同じくして配される。また、寺熊調査区東半部には、大型掘立柱建物などとは軸線を異にし、巾2mの溝を方形にめぐらして敷地内に2棟の掘立柱建物を配した区画も出現する。広い範囲から中国産磁器が出土しているが、「王」、「陳」、「李」などの人名をはじめとして墨書された磁器が出土する地点は寺熊調査区の一角に集中する様相を見せている。墨書陶磁器については、その目的が多様であり、ここでは論じないが、出土状況は単に消費地的性格を示しているというよりも、宋商人もしくは交易に直接関係する人の屋敷の存在の可能性を示しているといえよう。当然、交易に介在する中心は香椎宮に他ならない。また、軒丸瓦、軒先瓦の出土状況から、禅宗の寺院が存在していたことは明らかである。

III　期（12世紀後半～12世紀末）

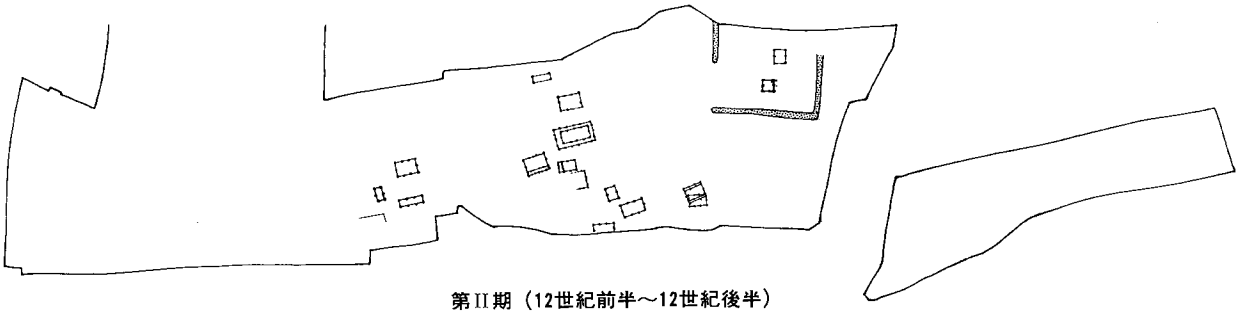
前期と同様に寺熊調査区中央部から東半部を中心に形成される。遅くとも13世紀には南北方向の溝や柵によって区画され、寺熊調査区中央部には梁行8.8m、桁行10.4mの四面庇を持つ大型掘立柱建物を中心として、建物の南側には苑池が、西側には8棟の掘立柱建物が東西方向に棟筋を同じくして配される。これらの建物群の棟筋はII期の建物群の棟筋より真の東西方向に近くなる。寺熊調査区東半部には5棟の南北棟の掘立柱建物が配列され、中心となる建物は梁行3.8m、桁行11.5mを呈する。建物群の南側では屋敷地内埋葬がおこなわれていたことを3基の箱式木棺墓と副葬されていた磁灶窯産の緑釉水注、短刀、青磁碗などで知る。また、軒丸瓦、軒先瓦の出土状況から、禅宗の寺院が存在していたことは明らかである。御飯ノ山山頂には何らかの施設が設置された可能性が高い。この時期に山頂を必要とする背景が、次期の屋敷群衰退期を招いた要因とは考えられないだろうか。

IV　期（13世紀前半～14世紀前半）

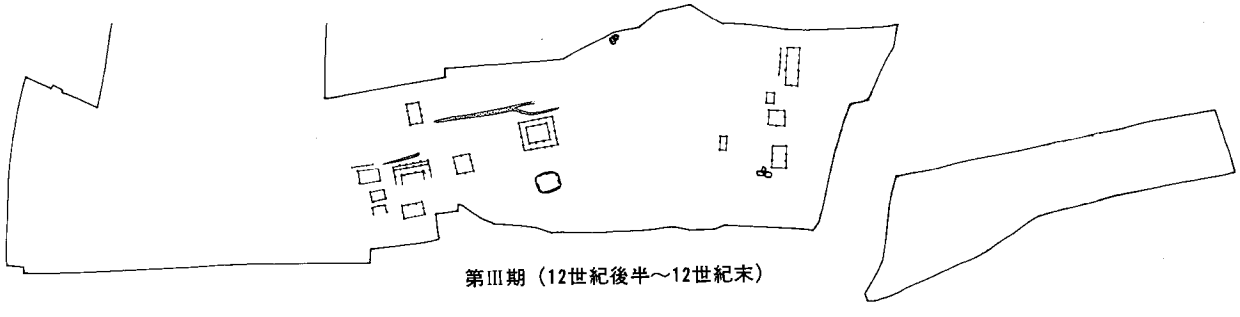
屋敷群衰退期。いくつかの掘立柱建物はあるものの、屋敷群は一時期の姿からは衰退する。ただし、



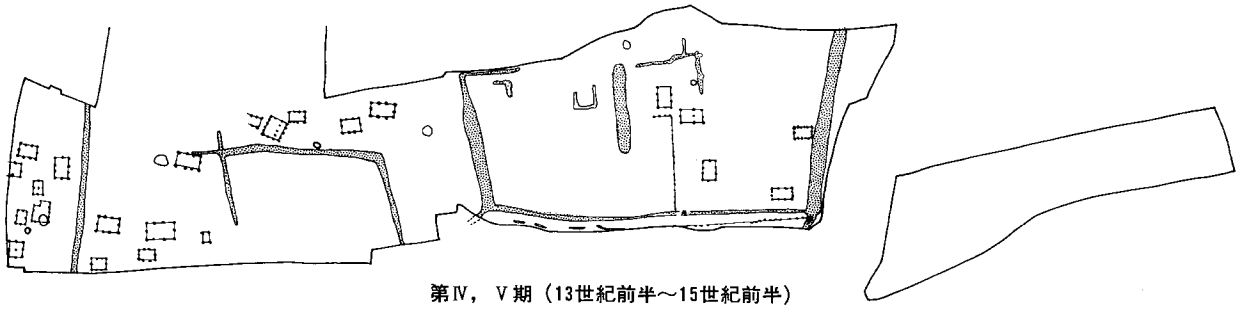
第Ⅰ期（10世紀～11世紀末）



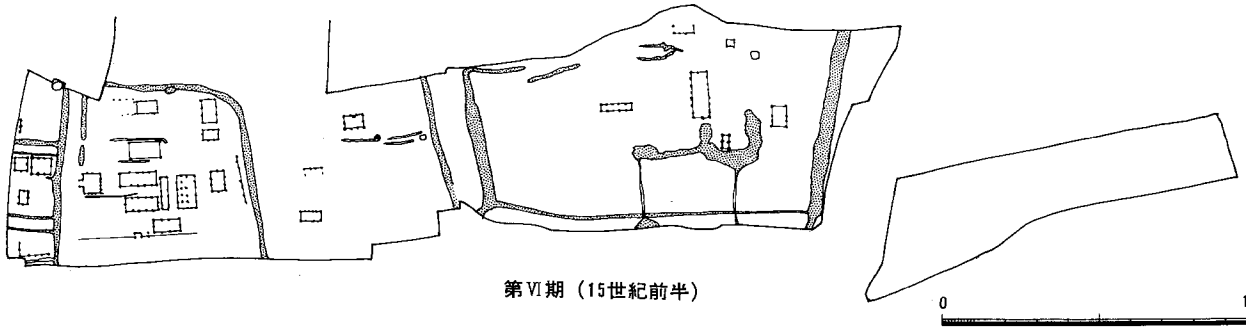
第Ⅱ期（12世紀前半～12世紀後半）



第Ⅲ期（12世紀後半～12世紀末）



第Ⅳ，Ⅴ期（13世紀前半～15世紀前半）



第Ⅵ期（15世紀前半）

0　100m

Fig.249　香椎Ｂ遺跡遺構変遷図

14世紀前半の高麗青磁や13世紀代の中国産の青磁碗も出土しており、北側の尾根を挟んである御倉谷調査区では寺熊調査区よりも活発な動きをしていることを出土遺物から見ることができる。特に、火葬墓の出現期がこの時期であることを考えると、図示した以上に人々が生活をしていたと捉えた方が出土遺物などの状況証拠と整合する。

Ⅴ　期（14世紀前半～15世紀前半）

屋敷群再開期。寺熊調査区を中心に大規模な敷地造成を行なった後、大溝や堀、さらには柵列で一町や半町ごとに区画した敷地に23棟の建物が現れる。これまで建物の配置が見られなかった生水調査区でも建物が造営され、屋敷群の中心となっていく。寺熊調査区にも建物は築造されるものの、極めて少数である。建物の大半は東西棟の掘立柱建物である。応永６年（1399）と応永28年（1421）銘や僧名および宗派を明示する文字が刻まれている板碑が出土していることから禅寺が存在していることは確かである。遺物的にも、12世紀末に建立された禅宗寺院の屋根を飾った瓦類とは趣きが異なるものの、禅宗寺院に如何にも合った軒瓦が多量に出土していることから、この時期に大規模な伽藍整備が行なわれている。谷部の背後に位置する御飯ノ山山頂では、軍事的目的の施設の築造がおこなわれている。

Ⅵ　期（15世紀前半～15世紀後半）

屋敷群の中心は生水調査区やその西側になる。生水調査区において、掘立柱建物の主屋、馬屋、仏堂、倉庫、雑舎を規則的に正しく配置した屋敷が出現する。屋敷地の南辺は中央に四本柱の櫓門を設置した柵列で区画し、他の三面は巾2ｍ、深さ1.5ｍの薬研堀で区画する。この屋敷は、建物配置などから当時の典型的な武士の館跡である。寺熊調査区は、巾４ｍの大溝で区画した敷地内には大規模な園池とその周囲には梁行4.8ｍ、桁行14.1ｍを呈する掘立柱建物を中心とした建物を築造する。また、寺熊調査区中央北部には小堂が建築される。この期間、敷地を区画する大溝や堀は幾度も開削しており、そのために敷地の規模は変遷している。

Ⅶ　期（16世紀）

屋敷群の消滅期。小規模な建物からなる集落となり、小堂も廃絶して墓地となる。17世紀には谷部の大半は水田となる。

以上のように、谷部に展開する中世屋敷群は、屋敷群が中断する13世紀前半～14世紀前半を境にして大きな違いを見せている。特に屋敷群が再興する14世紀後半以降の特色は、敷地を区画する施設や規模にある。敷地を区画する溝や堀は、巾が２～５ｍを測り、断面形はＶ字、Ｕ字形を呈していることから、敷地範囲の明示を第一義とするのではなく、防御施設として機能を発揮することを存在の第一義としていると言える。

14世紀後半の筑前および九州は、足利尊氏による室町幕府が成立した後も南朝方守護対北朝方守護、鎮西管領（九州探題）の一色氏対在地の有力守護などの緊張関係が継続しており、さらに足利直冬が九州へ逃げてきた正平４年（貞和５年、1349）以降は宮方（懐良親王派）、将軍方（足利尊氏派）、兵衛佐殿方（足利直冬派）の三者鼎立の状況となって激しい主権争いが続き、文中元年（応安５年、1372）に将軍方が大宰府攻略に成功後も、完全に安定したとは言えない状況であった。

このように不安定な社会情勢下においては、屋敷の形態も状況に応じた姿になるのは当然のことで、14世紀後半の屋敷における大溝や堀の出現は九州の社会状況を反映したものと言える。同様に、Ⅵ期の15世紀前半～15世紀後半における屋敷にみられる防御機能の強化は、永享3年（1431）の大内盛見による立花城攻略に代表される、大友氏と大内氏との間で繰り広げられる博多の支配権をめぐる抗争の状況を反映したものと言える。

3．中世火葬墓群

この墓群は、13世紀後半～15世紀に築造されたと考えられる火葬墓である。その根拠は乏しいが、数少ない遺物や周辺地における同型式の墓の出現期などからによる。B群墓は、細長い石で方形に縁を囲み、内側中央に一握りの火葬骨片を埋めた上に墓標を立て、縁石と墓標との間に玉石を敷きつめるのが一般的である。1区画に1人の埋葬が大半であるが、25号のように2人埋葬例もある。また、17・18号のように墓の一部を壊して新規の墓を築造している例が幾つか見られるのは、先の墓の存在が認識できないほど埋まっていたことを示すものであるならば、墓の造営期間が長期間である。また、墓の一部を壊して築造している新規の火葬墓は、いずれも共通して小規模で、墓標だけである。

これらの火葬墓に埋葬された人たちの生活空間は、墓の所在する御倉谷から出た寺熊調査区や生水調査区で見られる屋敷群に求めるべきであろう。

4．御飯ノ山城

出土遺物で最も年代の新しいのは16世紀第4四半世紀の製品である備前焼すり鉢、常滑焼甕、土師器坏である。これらの出土位置からも山城の最終改修が16世紀第4四半世紀に求められる。それでは、山頂部の使用がいつ頃から行なわれていたのかは、遅くとも14世紀前半期には行なわれていることを出土遺物の高麗青磁などが示している。とすると、この時期に山城が必要とされるのは、元寇に対する警備業務以外に考えられない。同様な目的を有した所は、本調査地以外にも存在が十分に考えられることから、今後の類例を待って検討する必要があろう。

竪穴状遺構1・2は、特異な構造を持ち、壁に残る痕跡から屋根が架かっていたようである。西と北の斜面の犬走りに築造しているが、はたして、山城に関係するのかは不明である。山城の施設であるならば、溜井ではないこの遺構は防御施設となるが、今後の類例を待って再検討したい。

5．寺熊窯跡と大日古墳群

寺熊窯跡1号窯は、出土遺物から7世紀第2四半世紀～第3四半世紀に営まれていた須恵器専業窯であることは明らかである。同時期の須恵器が、本窯跡から300mほど谷奥にある大日古墳群1号墳、2号墳から出土している。特に2号墳の副葬品である須恵器は、器形および手法からも寺熊窯跡1号窯で生産・供給した可能性が極めて高い。しかしながら、1号窯は長期間にわたって使用した痕跡を残存する窯体に残さない。何が問題で短期間に窯を廃棄したのかは今後の問題であるが、同様な窯跡が御倉谷調査区(SX962)と里城調査区(SX918)に1基づつある。いずれも後世の削平により焼成部の床面の一部だけを残すだけで、長期間にわたって使用した痕跡は認められない。遺物は出土していないが須恵器を生産していた窖窯といえる。SX918においては放射性炭素年代測定を行なった結果、暦年代でAD550年(AD435～615)を得ている。

6．今後の課題

香椎B遺跡の所在する谷には、第1～5次調査と谷の入口部にあたる地点で実施した第6次調査の結果から、全面にわたって中世を中心とした遺構が残っていることが明らかとなった。これまで、古代から中世における香椎宮については不明な状態が続いていたが、今回の調査では解明に向けた第一歩をしるすことができた。谷部の遺跡の残り状況からも重要な資料を得ることが可能であることから、今後の調査でも広範囲にわたって行なう必要がある。また、館跡と推定される里城地区はもちろん重要であるが、館を支える基盤層の武家集団の存在を明らかにする必要があろう。

Ⅴ　付　　論

１．御飯ノ山城の構造

２．御飯ノ山城の縦堀について

３．福岡市内の中近世城館

４．香椎Ｂ遺跡出土の木簡について

５．中世の香椎と香椎宮

６．福岡市博物館所蔵「三苫文書」

御飯ノ山城の構造

千田嘉博

1．御飯ノ山城の立地と歴史的環境

御飯ノ山城は標高91m、比高60m程の丘陵山頂に位置する。山頂からは博多湾・立花山城・福岡平野・大宰府を望むことができ、眺望は良好である。西山麓にはもともと幅100m程の谷筋が伸びており、後述するように12世紀から15世紀にかけた区画溝を伴う屋敷群(香椎B遺跡 生水・寺熊・寺熊東地区)を検出している。御飯ノ山城西麓のこの谷筋は北東600m程でこの地域の中心集落としても機能した香椎宮一帯につづいており、こうした立地は御飯ノ山城と香椎宮との関係を示唆している。

戦国期における筑前北部の軍事的中心は標高367mの立花山城であった。立花山城は14世紀第2四半期の創築とされ、15世紀から16世紀にかけて大友氏と大内氏、大友氏と毛利氏が城をめぐって激しく戦ったことが知られている。そして1587年(天正14)には立花氏が守る立花山城を島津氏が攻めている。

御飯ノ山城もこうした立花山城をめぐる攻防戦と無関係であったとは考えられず、積極的な支城網のひとつと位置づけてよいかはひとまず置くとしても、立花山城をとりまいた小規模な山城として、幾度もの軍事的緊張に遭遇したことは間違いないであろう。瀧本正志の教示によると、島津氏の立花山城攻めに際して香椎宮の大宮司・武内氏永の息子、氏続が御飯ノ山城に立て籠ったとの記録があり(『筑前國續風土記拾遺』)、御飯ノ山城の使用時期に関する知見を与えるとともに、立て籠もりの場としての役割を窺わせる。また発掘の成果もそうした歴史を裏付けている。

北部九州の戦国期城郭については綿密な踏査の成果をもとに小島孝之と中西義昌が的確に特色を指摘している【木島・中西1998】。それは(1)北部九州の有力国人の間では地域性に育まれた軍事構造と縄張りに対する意識が存在していた。(2)それらは軍事的文化圏として大友方・反大友方という政治的立場の上位に位置した。(3)大友氏権力下では有力国人衆の軍事構造や縄張りに対する意識を大きく規制するまでの軍事的規範を創出し得なかった、という3点にまとめられる。

木島と中西の指摘は広範な縄張り調査に基づいたもので傾聴すべき成果である。先述のとおり御飯ノ山城は立花山城に近接して所在しており、そうした地域的な縄張りの特色が具体的にどのように反映したか考慮しながら発掘の成果を検討していくことにする。

2．御飯ノ山城の構成

御飯ノ山城は基本的に東西50m、南北12mの曲輪を主体とした単郭の城であった。曲輪の周囲にはさまざまな堀を厳重に設けていた。北側の尾根に対しては2重の堀切を設け、曲輪直下の切岸からは竪堀を掘り降ろしている。この竪堀については存在を疑う見解もあると聞く。しかし発掘に先立ち御飯ノ山城を覆っていた樹木を伐開した段階の航空写真から竪堀をはっきりと見ることができ、発掘状況にも疑問点はないから、調査の成果は首肯されるべきである。

発掘では主郭の南東部に出入り口を検出した。この出入り口も地表面観察の段階から把握されていたが発掘の結果、門や櫓など細部の様相が判明した。まず城道を検討する。主郭の出入り口は堀切3の底につづいており、さらにこの堀切は南西側に下って竪堀状に伸びていた。この堀切つづきで竪堀になった底面には階段をつくり出していたから、この部分まで堀を遮断だけでなく城道として使用したことが確認できる。

竪堀はこののち自然の斜面に沿って急激に下って御飯ノ山城南西の派生尾根先端を囲い込んだ。こ

の尾根の先端部分は「里城」と呼ばれており、御飯ノ山城と組み合わさった山麓の館城部分と考えられる。城道も山麓のこの館城の里城から連絡したのが主要な道筋であっただろう。しかし主郭の出入り口から堀切3へ降り、そこから竪堀へと急激に下った階段のある傾斜転換点までは堀底を歩いたとして、そこから先の竪堀は傾斜が急すぎて通路としては使用できない。

そこで仔細に堀切3が竪堀に変化する辺りを観察すると、竪堀へと変わる階段のすぐ脇に通路として使用できる犬走りを見つけることができる。この犬走りは調査に先立って一部が失われており、すべてをたどる事はできないが、先に見た里城背後の尾根筋に斜面を伝って連絡することが可能であり、本来の城道は里城から背後の尾根を登り、さらに斜面を斜めに伝って堀切3底を経由して、竪堀から主郭出入り口に到達したと復原できるのである。

そしてこの城道は山腹を駆け下り、山上と山麓の里城とを一体化した長大な竪堀で完全に防御されたから、城兵側にとってひじょうに安全に維持することが可能であったと考えられる。山上と山麓を竪堀で一体化するという手法はいわゆる総構えの考え方の一種であり、16世紀後半の山城で各地に現れたものであった。御飯ノ山城のプランが最終的に出来上がった時期を推測するひとつの手がかりといえよう。

主郭の出入り口はひじょうに興味深いものである。先に見てきたように出入り口へのアプローチは竪堀底による城道であった。この竪堀は城ノ腰山の基盤層の岩盤を削って掘削しており、階段なども鮮やかに検出できたことは大きな成果であった。このアプローチをとりわけ印象的にしているのは、竪堀中ほどの大きなクランクである。第3階段を上がり切ると竪堀は一旦平らなところ(第2平坦部)に到達し、同時に西(左)に堀が屈曲する。堀の幅はおおむね1.2mほどで、正面は堀の切岸の急斜面に加え自然斜面が上に伸びていて、堀底の屈曲に従う以外まったく進みようがない。

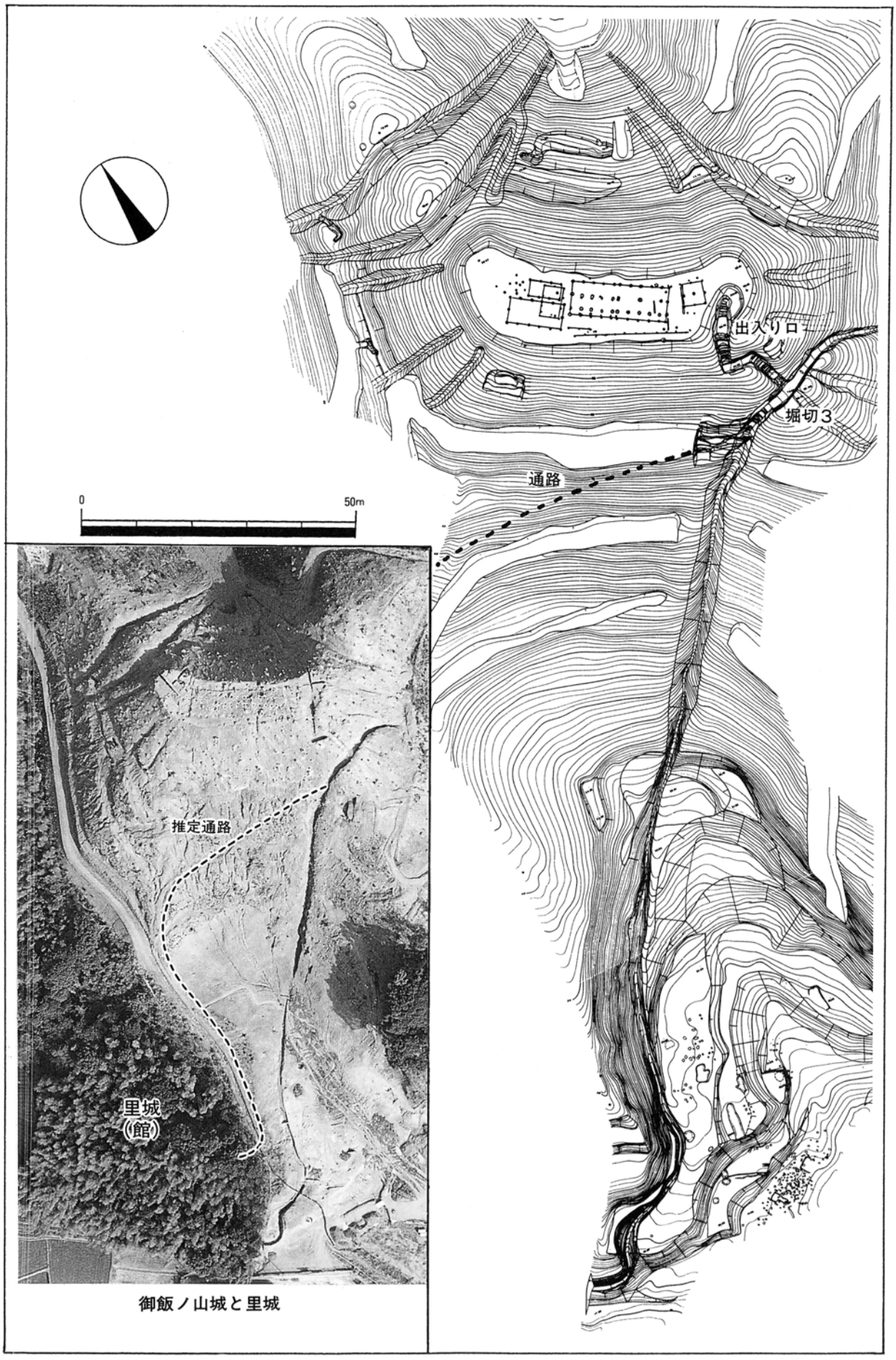
竪堀底に城道を設定することは攻め出すためには必ずしも最適なプランとはいえないが、防御力はきわめて高い設計であった。御飯ノ山城の場合、さらに明確なクランクを加味することで、堀底を城道としたものでは特に強力な防御力を発揮することができた。

出入り口に設けた門は第2平坦部を経て北に大きく曲がった階段の途中に設定していた。掘立柱の門の前には6本の柱で支えた櫓があった。櫓は1階部分を通路として使用しており、背後の門とともにセットとなって実質的な櫓門を構成した。この櫓の2階部分からは第2平坦部を見下ろすことが可能で、圧倒的な防御の要として機能したことは間違いない。

こうした出入り口をめぐる土木技術と建築技術の組み合わせは、近世につながる技法ではなかったが、戦国末期の北部九州における出入り口防御のひとつの到達点を示すものといってよい。北部九州地域では竪堀を城道として使用した山城が多く知られており、御飯ノ山城の調査知見はそうした多くの山城を考える上でも基準になるものであろう。

主郭内は必ずしも広くなく、城の性格が政治機能や日常生活機能などをあわせた拠点城郭ではなく、基本的に臨時の逃げ城であったことを予想させる。発掘調査でも長期の生活を円滑に行うための井戸などが主郭周辺に発見できないことは、そうした曲輪の様相から読み取れる城の性格を証するものである。

主郭内には倉、主屋、雑舎などが近接して建ち並ぶ。特に大型のSB01は中心の建物であり、東から南側にかけて縁をめぐらす。SB01の北側は塁線の際近くに迫っており、南側にわずかに通路空間を残している。そして南側の塁線側には柵を備えた。曲輪内にいくつもの建物を建てて空間地が狭くなったこととも関係したのか、戦国期の城であればあってもおかしくない土塁を主郭に見ることはできない。



御飯ノ山城と里城

御飯ノ山城(1/1000)

主郭内の建物は3回程度の重複が認められることから、SB01などは最終段階の建物とすることができる。遺物の年代観から少なくとも16世紀第3四半期には下るものと見てよいだろう。そして主郭出入り口の整った構成もこの時期まで下って改修され成立したものと見ることができる。

3．御飯ノ山城の形成史

御飯ノ山城の山麓の谷筋には12世紀から15世紀にかけた大規模な屋敷群を検出している。13世紀には屋敷の区画溝が確認され、13世紀から14世紀前半に一旦屋敷群は衰退したが、15世紀代には堀と櫓門をもち内部に庭園を備えた屋敷が成立した。御飯ノ山城の成立を考える上で、山麓の屋敷群を見過ごすことはできないであろう。

御飯ノ山城からは12世紀に遡る遺物が発見されており、谷筋の屋敷群の成立と期を一にして何らかの施設が山頂に設けられたと考えられる。そして谷筋の館群が再生する15世紀以降、背後の詰城として御飯ノ山城が城として整備されたと推測できよう。15世紀は全国的にも館とセットになった山城が日常的に維持されるようになった時期と考えられており、御飯ノ山城もそうした動きに沿って新しい画期を迎えたものと思われる。

その後、16世紀になると防御に適さない谷筋の館群は谷を見下ろす尾根先端の館城を核とした山麓部に再編されたと推測できる。そして16世紀第3四半期以降発掘で明らかになった堅固な山城への改修がさらに進んだと位置づけられる。この際、島津氏の立花山城攻めのときに御飯ノ山城に避難したという記録は注目される。遺物ではこの時期に下るものは発見されていないが、現況の遺構の使用期間と部分的改修は16世紀第4四半期に下った可能性も残ると思われるからである。

このように考えると最初に紹介した木島と中西の研究成果を矛盾なく御飯ノ山城を評価することもできそうである。つまり16世紀第3四半期までは木島と中西が指摘したような構造の城郭であったが、16世紀第4四半期を迎えてそれぞれの国人領主の城がそれまでの「軍事的文化圏」の枠組みにとらわれない、さまざまな技法を加味した独自な改修が行う例が出現したと考えることができるのである。

このことは北部九州における戦国期の最終段階にそれまでの地域的な築城にかかわる地域的な慣行が崩壊し、切迫した状況の中、従来は使うことがなかった隣接する「軍事的文化圏」に属する防御施設をも取り入れた改修を断行したとすることができよう。このことが竪堀やさまざまな技法を統合した地域的な築城技術の到達点を実現させることになったのである。そしてこれは、おそらく軍事面に限らない国人層の大きな変化の動きを示す証拠のひとつといってよいだろう。

御飯ノ山城は基本的に政治的な拠点としては機能しなかった軍事的な側面の強い山城であったが、地域の城郭構造の変化と合わせて御飯ノ山城の縄張りを読むことによって、戦国末期の筑前北部の政治状況と国人層の動向を色濃く反映した山城であったことを改めて確認することができたと思う。それにしてもこれ程の山城が山麓の屋敷群とともに調査後に消滅してしまったのは残念というほかない。ただし福岡市内をはじめ戦国期の山城はなお多く残されており、御飯ノ山城の成果をさらに活かすためには、こうした残された中世城郭をどのように解明し保護していくかにかかっていることを最後に指摘しておきたい。

文献

木島孝之・中西義昌　1998「天正中・後期における北部九州の城郭の様相」『戦国の城と城下町Ⅱ』鳥栖市教育委員会

（国立歴史民俗博物館　考古研究部）

御飯ノ山城の縦堀について

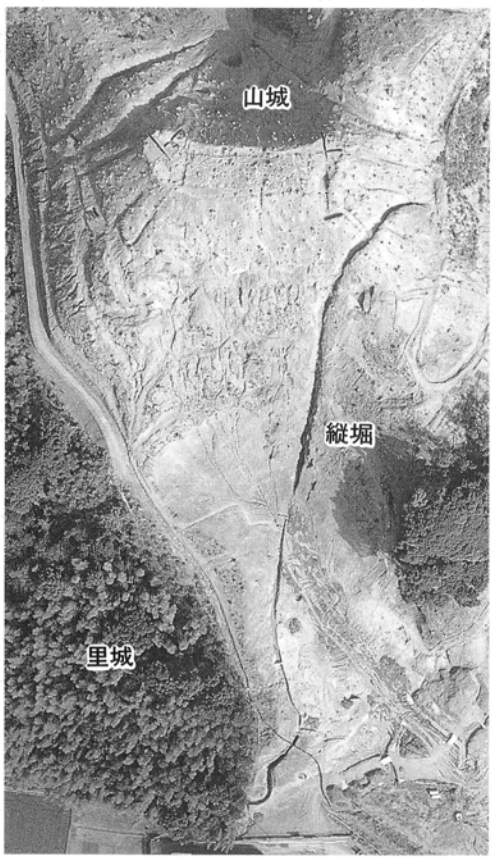
村田修三

今回山城としては異例の完掘による徹底的な調査が行われた御飯ノ山城は、虎口とそれに続く石段道をはじめ、従来検出され難かった貴重な内容を多数提供してくれた。とりわけ私が衝撃を受けたのは、石段道下端の掘切りから続く長い縦堀である。長さ130ｍ以上、山裾の平坦面に達してからも横堀に変じて延びるので、総延長は200ｍに達すると思われる。200ｍクラスの縦堀は神奈川県の津久井城をはじめいくつか例があって、それ自体は衝撃を受けるほどのことではない。私が問題にしたいのは、小規模な山城には不釣り合いな長さと横堀になってからも続く執拗さ、そして長さに比しての幅の狭さである。

私は当初、道が流水で掘り込まれたのではないかと疑った。最上部の掘切り部分までは石段道が来ていて、その先の下り道が問題の縦堀以外には見当たらないように思ったからである。しかし掘切り部分を過ぎてからは急峻で歩けそうにない。こういう単純な急斜面ではジグザグに歩くのが普通である。また麓に下りてからも掘り込まれていては、地表に上がれず道の役に立たない。このことは流水による掘り込みという想定も否定する。人工であり、それも道としてでなく空堀として掘られたと考えざるをえない。

それではなぜここまで執拗に掘り続ける必要があったのだろうか。この城では山上の曲輪の北西端を遮断する掘切りが東側山腹へ縦堀となって延び、谷底まで達している。山腹まで城域として確保し、厳しく防御する構えであることがわかり、その一環として問題の縦堀も長くなるという勢いは理解できるが、そのレベルの話では収まらない特別な意味があったはずである。祭祀的な意味の結界という可能性も無きにしもあらずだが、ここではまず軍事的・防御的な意味を考えてみることにして、結界説等は他の機会に譲りたい。

空堀の防御機能を解釈する際に最も重要なことは、空堀によって防御されている場が特定できるかどうかである。この空堀は縦堀から横堀に変わってからカーブし、西へ延び始めたところで埋没している。この先は発掘しないとわからないので、推測しかできないが、西側山麓の「里城」を包み込む勢いである。しかし、里城を防御するとして、何から守るのか。今回南麓で大規模な館群の一部が確認された。この館群の存在を知れば、人はまず御飯ノ山城との密接な関係―城郭史の通念に従って山の詰め城と根小屋の関係を当てようとするだろう。ところが問題の空堀はことさらこの館群との間を遮るように延びている。また周辺地形の大勢を見ると、城山の南の谷は西に香椎宮を経て海に開けているのに比べ、東は城の越山続きの丘陵に包み込まれている。普通に考えれば開けた西方からの侵入を警戒して、里城の西側をカバーするような防御ラインの方が理にかなっている。逆の東方にラインが設定されたのは、城の越山の塩坂越えの方を警戒するような事情があったのだろうか。それにしても空堀ラインの神経質なまでの回し込み



御飯ノ山城と里城

方は何事か。そこまでするにしては空堀が細くて防御力に乏しいのはなぜか。矛盾が出てきて疑問は尽きない。

結局手持ちの材料では答えは出せない。あきらめて結界説に振ってしまう前に、数多い山城の縦堀の中で評価の難しい事例を紹介しておこう。いずれも築城の歴史的背景と基本的な縄張りの評価の定まった山城である。

まず大和（奈良県）の龍王山城を取り上げよう。この城は天文10年(1530)ころに絶頂期を迎えた大和の有力国人領主十市氏が築き、永禄８年(1565)に松永氏が取って代って改修を加えた、大和最大規模の山城である。南北両地区に分かれており、図１は北城地区を示す。その北西部分にア、イ、ウの３本の縦堀がある。アは尾根Ｉからの侵入を遮断する掘切りの延長で、最も普遍的なタイプである。御飯ノ山城の縦掘りも基本的に同じタイプである。龍王山城のアの場合、右手だけが延びて縦堀になったのは、尾根道が回り込んで城内に向かう口をチェックするためである。虎口に準ずる地点である。曲輪列の先端③との位置関係も良い。イはこの口を越えた敵兵が直接③に迫るのを防ぐ備えである。大手道はIIから向きを変えて虎口Ａ（西に③から下ってきた大土塁）に至るが、その東の尾根の曲輪群の北下の虎口Ｃとの間に縦堀ウがある。ア・イの機能はオーソドックスで明瞭だったが、ウは一筋縄では行かない。

縦堀ウは何を何から守っているのか。虎口Ｃから見れば、ウが西南側を防護してくれるので北尾根Ⅳ方向に専念できる、という効用がある。虎口Ａから見ると、間にややだらけた山腹Ⅲがあって、このままではウは効いていない。(Ⅲはこの城の最大の弱点で、虎口Ａが締まらないため、奥のＢに虎口を再設定している。)それではウは虎口Ｃのためにだけあるのか。ところがウの上半分をくわしく見ると奇妙なことに気づく。ウによってＣの内側の帯曲輪（Ｃの作戦に必要）が途中で遮断されている。一段上の小曲輪の途中から掘り込まれていることから見ても、ウはＣ回りの構えが出来上がった後から、それらの機能の一部を損なうという犠牲を承知で、新しく掘られたものだということがわかる。あえてそうしたのはやはり虎口Ａの機能強化のためだったにちがいない。

そういう目で見ると、ウのＡ側の①②がクローズアップされる。②は当初は単なる土砂崩れの下端のように見えていたが、下りて調べてみると、カール状に掘り窪めた底に半ば隠されたテラスだった。そのテラスに立つと真下に虎口Ａが見下ろせた。これで①－②－Ａ－大土塁－③の連係プレイの存在が明らかになった。そのうち①②の機能を保証する障壁として縦堀ウが必要だったのである。虎口Ｃが突破されればこの連係プレイが崩れるので、Ｃを外とみなして内の①②をウで守ったというわけである。

ここまで詮索しなければ縦堀ウの意味は解けない。このケースよりも広い範囲に目配りしなければ解けない事例として、静岡市の丸子（まりこ）城を検討してみよう。

丸子城は東海道の要衝を押さえる山城で、武田系の縄張りの標本的な例として知られる。南東に東海道の通る丸子川の谷が、南西にその支谷・大鑓（たたら）が、北東に同じく支谷・泉ケ谷が位置する。根小屋のある泉ケ谷が城の表（大手）で道が通じ、大鑓は裏（搦め手）で道がない。その大鑓の谷の奥に向かって落ちる長大な（140ｍ） 縦堀アが今回のテーマである。縦堀は谷底まで達している。これは何を何から守っているのか。「何から」はすでに明らかにされている。西方、高天神城を落とした徳川勢が東海道を攻め上って来るとしたら、まず西裏の大鑓へなだれ込んでくるだろう、その攻撃から守るということである。(高天神城との関係は水野茂「的場城の武田流縄張の考察」『古城』39による)

では「何を」守るのか。谷を北上してきた徳川勢が縦堀を越えてなおも進軍するその先に、谷奥か

山腹に守るべき何かが隠されている、というのが大方の意見だった。私もその説に沿って山腹から谷奥を捜し歩いたことがあった。しかし何も見つからなかった。

それでは一般論として、背後から襲われるのを用心して背後空間に敵を寄せ付けないようにする、そのための備えなのか。たしかに遠ざけておくのに越したことはないが、肉薄してきたときの備えの厳しさ、二段備えの横堀ラインがこの城の特徴でもある。寄せ付けておいてこれをたたくことで、敵の兵力を疲弊させる、ということも必要な戦法である。敵が寄ってこなければ、逆に城兵の方から出撃して、損害を与えて引き上げる。そういう城外での戦闘時に敵の機動性を制約するために縦堀を設けるのである。しかし一本だけ異常に長いこの大縦堀は縦堀一般の機能に解消されていいのだろうか。この場所にこの方向で設けられたことに特別な意味はないのだろうか。

ここでこの城のもう一つの特徴である馬出しに注目してみよう。いろいろなタイプの馬出しが認められるが、とくに際立っているのが大鑓曲輪と呼ばれている丸馬出し③である。典型的な出撃用の馬出しで、大鑓の谷へゆるやかに下る尾根Ⅰに出撃する構えである。問題の大縦堀アはこの馬出し③を囲む三日月堀に接した地点から出発している。アの③との密接な関係がなぞを解くカギではなかろうか。

③は出撃用の曲輪だから、必要な時に相当数の城兵が城内から繰り出してきて、いったんこの中に集結し、機を窺って出撃するのである。この種の馬出しはたいてい城内側と土橋で直接結ばれているものである。ところが③の場合、城内側で対応する①との間に横堀から縦堀へと転ずる巨大な空堀イがあって、切り離されている。ただ堀底に一カ所だけ低く目立たない土橋がはすかいにあって、これを伝って②へ上がり、三日月堀との境の土橋を伝って土塁越しに③へ入ることができる。現在①から③へ直結する階段が付けられているが、これは史跡整備の悪例にすぎない。かくも不便な連絡しかできないのも、背後防御ラインの厳しさのゆえである。この連絡ルートは不便なだけではない。きわめて危険である。いったん上がり付く②は城外である。いつ襲われるかも知れない状況下では使えない。馬出しによる出撃法は城方の都合でその機を選べる点で優れているのである。防御を厳しくし過ぎたために馬出しのメリットを発揮できないでは困るではないか。このジレンマを解決したのが大縦堀アだったのである。

アによって山腹はⅠとⅡに仕切られる。迎撃してⅡから敵兵を駆逐した時に城兵が①から②を経て③へ入ることができる。アがなければ、駆除したつもりが漏れ落ちて、Ⅱに戻った敵兵が②を襲う危険がある。しかしアがあれば、しばらくはⅡを無敵状態に、②を安全圏にしておくことができる。その隙に出撃部隊が③に入ることができる。こう考えて初めて、この城の全国に誇る二大装置、大鑓曲輪（馬出し）と大縦堀の存在理由を無理なく説明できるのである。

空堀一本の意味を解くためにも、多元多次方程式を解くような手間がかかるものである。そのためには細かな調査によるデータの収集が必要である。御飯ノ山城については私はあまりにもデータ不足である。あの縦堀は何だったのか、もはや答えは出ないのかもしれない。

（大阪大学文学部）

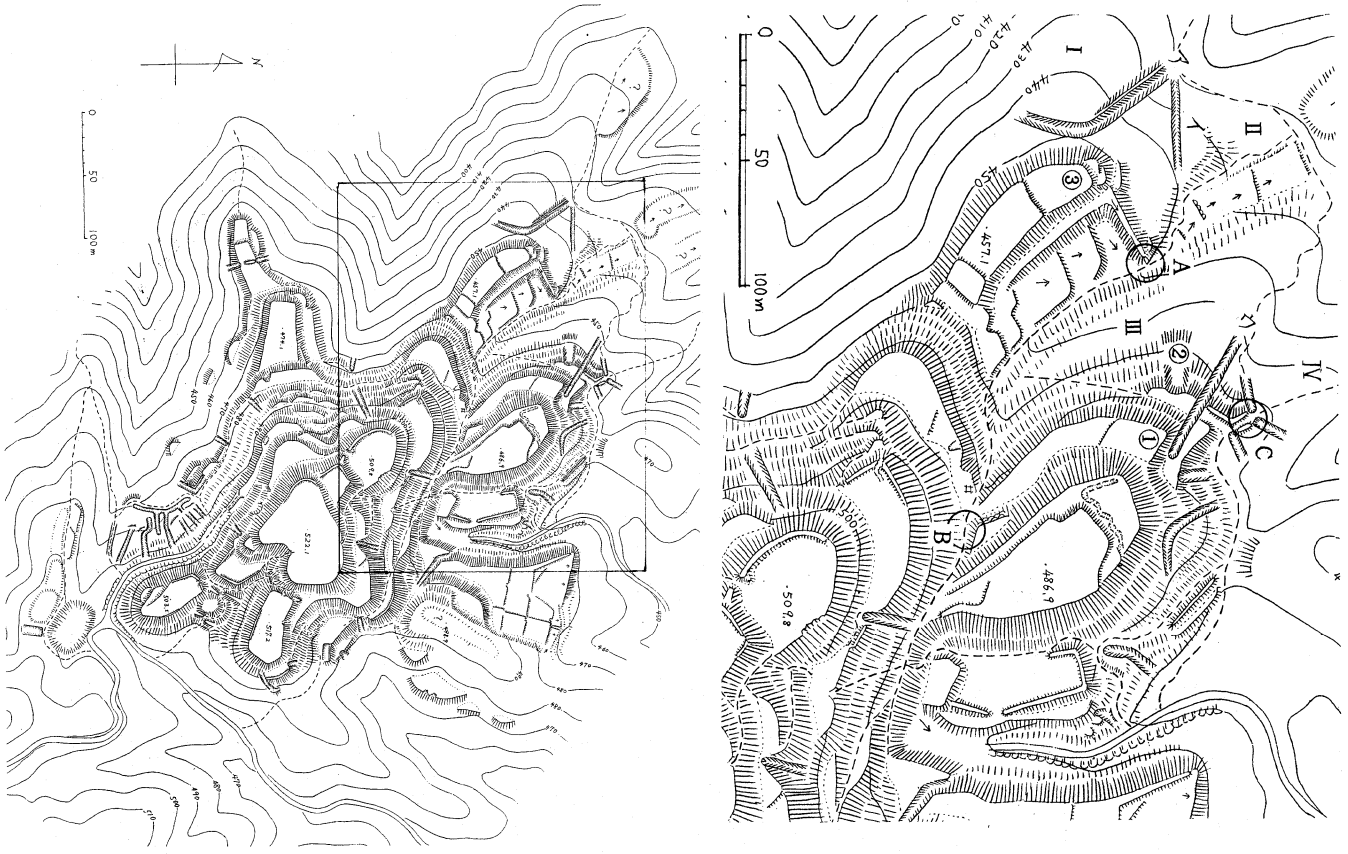


図1　龍王山城

図2　丸子城

福岡市内の中近世城館

山崎　龍雄

1．はじめに

市内における城館については、古くは貝原益軒の『筑前国続風土記』や青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』など江戸時代の地誌・記録類に書かれているが、本格的な調査記録としてそれらをまとめたのは福岡県教育委員会の九州縦貫自動車道の調査報告書が最初である。その後、広崎篤夫氏ら城郭研究者の地道な努力や、御飯ノ山城に見られるような大規模開発による発掘調査が行われるようになってきて、次第に城館の実態が分かりつつある。今回はそれらの成果をもとに、室町時代から江戸時代初めにかけての市内の城館について、簡単ではあるが紹介する。使用した縄張り図についてはあくまでも現状を略測したものであり、今後変更される可能性を有するものである。

2．市内の城館

便宜上現在の行政区をもとに紹介する。(図1．表1)

東区

旧糟屋郡地域である。この地域は蒙古襲来時に異国警護番役を、豊後国守護の大友氏が香椎・多々良地域を担当し、香椎に守護領が設定されて以来、大友氏とゆかりが深い地域である。

立花城（1．図2）は本市と新宮町・久山町の境界にある立花山の山頂367.1mに立地する、福岡を代表する大規模な山城である。建武年間、大友貞載が築いたといわれ、貞載はその後立花氏を名乗った。永禄11年（1568）立花鑑載の時期に毛利方につき、大友氏に反旗を翻したが、代々大友氏の筑前支配の拠点の一つであった。天正15年（1587）の秀吉の九州平定後、筑前に小早川氏が入り、翌16年（1588）から近くの名島に城を築き始めるが、それまでの居城として立花城が利用された。立花城は主峰の井楼山を主郭として、松尾岳、白岳の各峰を含む尾根筋に曲輪が展開する大規模なものである。『黒田家譜』にあるように小早川氏は大規模な改修を加えており、城の縄張りには大友氏時代と小早川氏時代の部分がある。小早川氏の改修は主郭の井楼山を中心に行われ、曲輪の斜面には石垣積みを施し、虎口も枡形プランを呈しており、在地の技術では見られない改修を加えている。小早川氏時代は名島城の支城として利用されるが、慶長5年（1600）の黒田氏入国後は廃城となる。

名島城（2．図3）は多々良川の河口に突き出た丘陵の先端に立地しており、立花城の支城として立花鑑載が天文年間（1532～55）に築いたといわれる。天正15年の小早川氏の筑前入国後の翌年から本格的な築城が始まる。三方を海で囲まれた東西方向の丘陵上に、西から天主台を持つ本丸、二の丸、三の丸と続き、南側から東側は堀で区画され、その南から東側は城下町となる。近世的な織豊系城郭の九州での初期的なものである。福岡城築城後、廃城となり、使用期間は13年と短いが、1990年に行われた調査では、石垣が改修された状況を確認している。

御飯ノ山城（3．図4）は香椎宮の北東の標高約90mを測る山の頂上に立地する城で、規模はそれ程大きくはない。『筑前国続風土記』「古城古戦場」では大友氏の家臣一万田弾正の籠もった城で立花城の端城であると書かれている。本書で報告する城である。

博多区

旧那珂郡と席田郡からなる。山城は少なく席田郡に稲居塚城と中山城がある。

稲居塚城（4、図5・6）は上月隈に所在する城である。『筑前国続風土記』には「上月隈村にあ

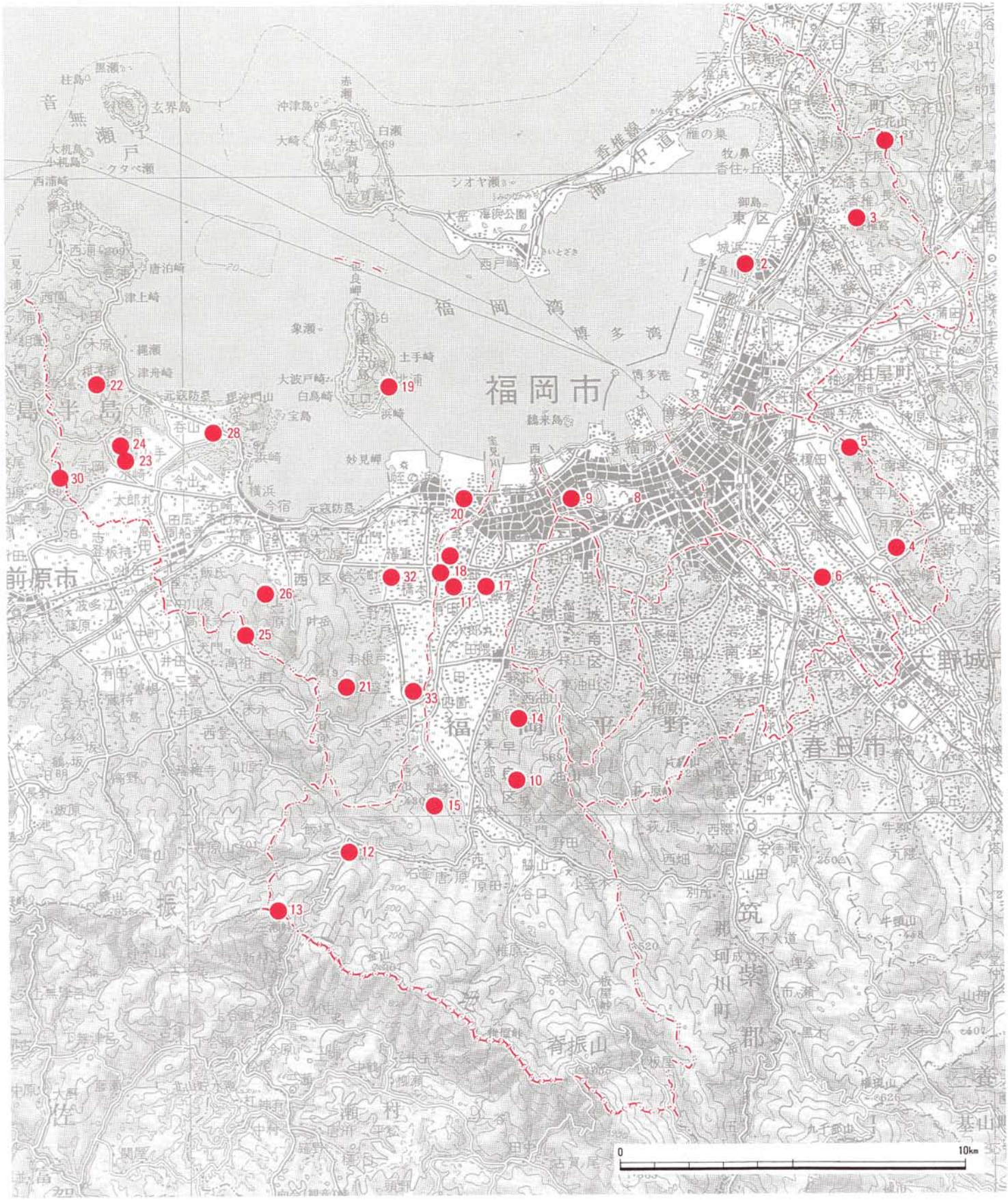


図1　福岡市内城館分布図（1/150,000）　※数字は表1と本文番号に一致する。

表1　福岡市内の城館一覧表

No.	名　称	所　在　地	立地	最大標高	築城時期	築城者	主要文献	その他の名称
1	立花城	東区立花山、糟屋郡新宮町	山上	367m	南北朝	大友貞載	①・②・③	立花山古城
2	名島城	東区名島	丘陵上	25m	天文年間	立花鑑載	②・③	名嶋古城、名島村古城
3	御飯ノ山城	東区香椎	山上	90m			①・②	老ノ山古城
4	稲居塚城	博多区上月隈	山上	84m			①・②・③	鐘塚城、金居塚城
5	中山城	博多区下臼井	丘陵上	42m			⑲・㉗	
6	諸岡館跡	博多区諸岡	台地上	13m	14世紀後半		⑩	
7	古野城	南区向野					①・③	古野古城
8	福岡城	中央区城内	平山城	15m	1601～07年	黒田長政	①	舞鶴城
9	鳥飼城	中央区鳥飼	冲積地上				①・③	鳥飼村古城
10	安楽平城	早良区東入部	山上	395m	15世紀		①・②・③・⑧	荒平古城、荒平城
11	小田部城	早良区有田	台地上	15m	15世紀		③・㉖	小田辺城、堀の内城築城
12	曲淵城	早良区曲淵	山上	250m			①・②・③	曲淵村古城
13	三瀬城	早良区三瀬峠	山上	643m			⑥	註3
14	茶臼城	早良区重留	山上				⑥	
15	本城	早良区内野	山上			龍造寺氏	①・③	内野村古城
16	陣ノ原古城	早良区西入部					③	
17	原遺跡群	早良区原	冲積地上	7m	15世紀		⑫	
18	有田遺跡群	早良区有田・小田部	台地上	15m	15世紀		⑬・⑭・⑮	下中薗屋敷
19	北浦城	西区能古島	島の丘陵上	22m	平安時代？		③・⑯	城ヶ崎古城、浦の城
20	筑前探題城	西区愛宕	山上	64m	鎌倉時代？		①・③	西国探題城、姪浜探題城
21	飯盛山城	西区飯盛	山上	382m	南北朝		①・③	
22	柑子岳城	西区草場	山上	254m			①・②・③	柑子岳古城
23	水崎城	西区元岡	山上	95m			③	水崎古城、元岡城
24	戸山城	西区桑原	山上	71m			③・⑲	
25	高祖城	西区今宿・前原市	山上	416m	鎌倉時代？	原田種次？	①・②・③	高祖古城
26	青木城	西区上原	山上	63m			㉔	
27	星山城	西区今宿青木	山上				③	生松原古城、直鳥城
28	臼杵端城	西区今津	丘陵上	15m			①・③	臼杵氏端城
29	鷺城	西区今津					①・②・③	鷺古城
30	志摩城	西区桑原・志摩町	山上	106m			①・②・③	馬場村古城
31	徳永城	西区徳永	丘陵上				㉑	細峯城
32	一町屋敷跡	西区拾六町	冲積地上	6m			㉓	
33	都地城	西区都地	台地上	30m	16世紀	細川光行？	㉓・㉕	

※なお主要文献の数字は参考文献の数字に一致する。

り。又は別所山とも云。郡士安河内筑前守と云者居たりしという。或云、立花の端城にて、戸次治郎兵衛と云者篭もりしと云。」とある。『筑前国続風土記拾遺』は更に詳しく、城の規模や天正年間に安河内筑前守又は光安筑後守が城主であり、この城の山の続きに金居塚城という城があり、これら二つの城は一つの同じ城と書かれている。地元では鐘塚山と呼ぶ標高約84ｍの山を城跡としており、頂上にはその記念碑がある。確かに頂上には平坦地があり、斜面は幅の狭い腰曲輪のような段造成がある。しかし全体が竹林で、後世の改変を大きく受けたように思われる。現在は地形の変容が激しく今は消滅してしまったが、古い地図（図５）を見ると、鐘塚山の北西側に標高32ｍ余りの独立した低丘陵がある。この丘陵は東側丘陵と幅50ｍの深い谷を挟んでおり、あたかも堀切のような感じを受ける。頂

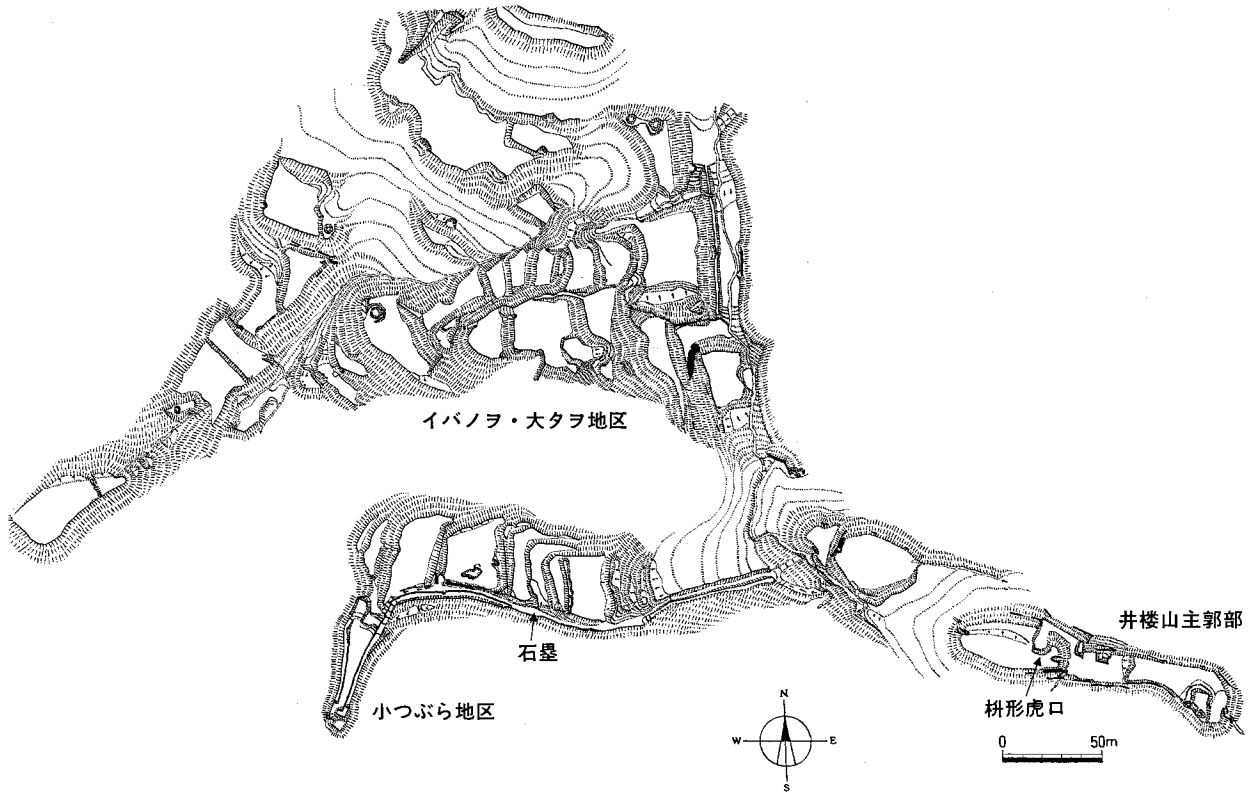


図２　立花城縄張り図（木島孝之・中西義昌調査・作成、参考文献⑧）

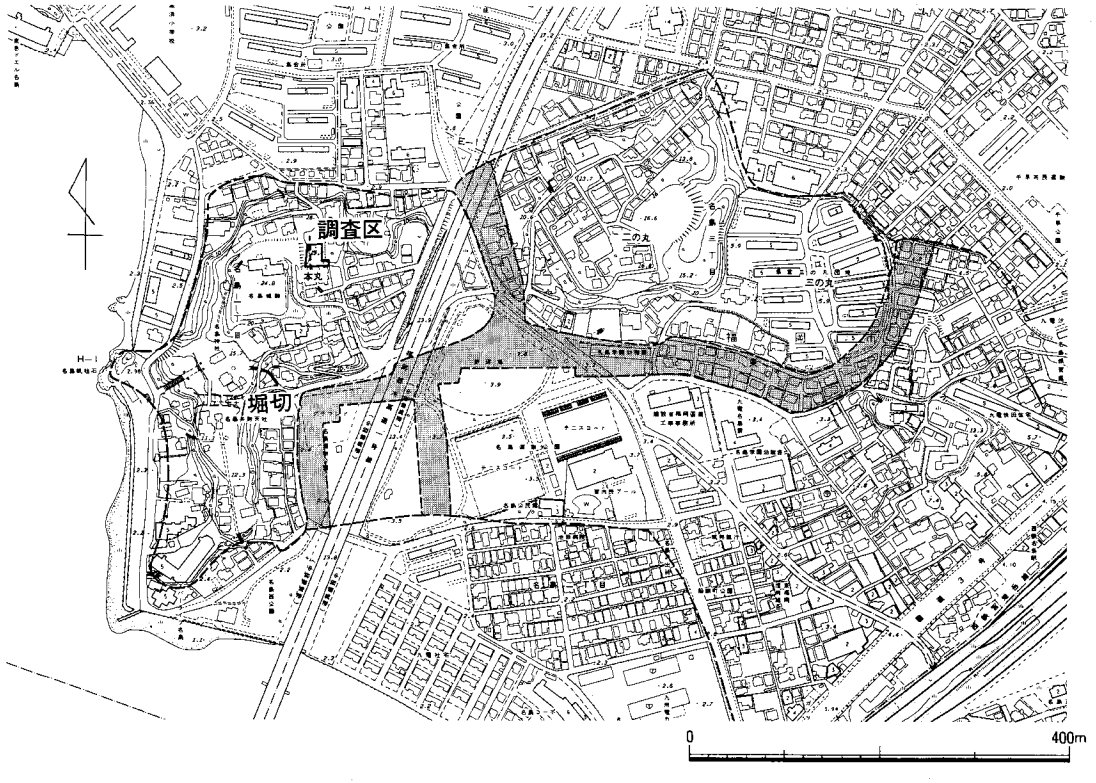


図３　名島城（1/8,000　参考文献⑨）

部は平坦で墓地と果樹園になっている。この丘陵の北側で発掘調査が行われ、斜面を区画するような薬研堀の空堀や堀切が見つかっている。遺構の時期は戦国時代の15世紀後半～16世紀頃である(註１)。戦国時代のもので、近くに残る居屋敷という小字名と併せてこの山も稲居塚城と関連があるかも知れない。

中山城（５）は下臼井に所在する城である。場所や城主、築城時期は不明であるが、1998年に行った志免町教育委員会の調査や、1992年に福岡市教育委員会が行った席田青木遺跡の調査で、城跡と思われる堀切や曲輪、竪堀などが確認されている。文献記録はないが、地元の伝承は残る。城名は志免町の遺跡名称から来ている。

平地の居館跡としては諸岡館跡がある。

諸岡館跡（６、図15）は諸岡川の左岸の標高11～12ｍを測る台地上に立地する。北側は地下げされ不明だが、西・南・東側の三辺に土塁が巡る。土塁の規模は東西約70ｍ、南北約55ｍを測る。その外側に幅2.5ｍ、深さ１ｍの堀が巡る。館は遺物、建物の建て替え状況から14世紀後半から16世紀中頃までの継続が考えられる。記録にはないが地域の有力者の館であろう。

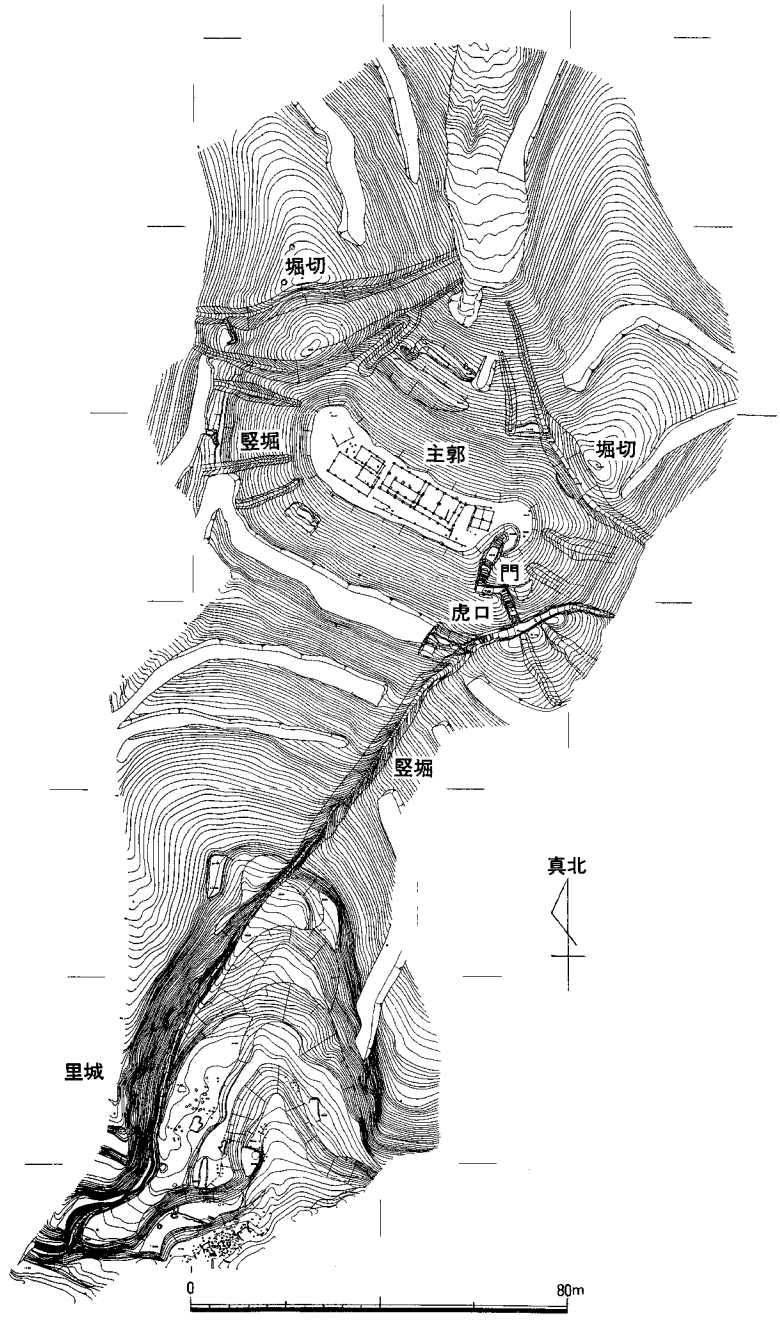


図４　御飯ノ山城全体図（1/1,600、参考文献㉘）

南区

旧那珂郡であるが、城の伝承としては古野城がある。

古野城（７）は『筑前国続風土記』には「三宅村のうしろの山より、東の方へ長く指出たる尾崎也。（中略）少々堀切あり。」とある。また『筑前国続風土記拾遺』では「古野の人家の上なる松山也。山上に石棺有。又丸尾山と云にも有。」とあり、古墳時代か弥生時代の石棺があった可能性がある。向野あたりと推定されているが、実態は不明の城であるが、記録を読む限り規模の小さな城であろう。

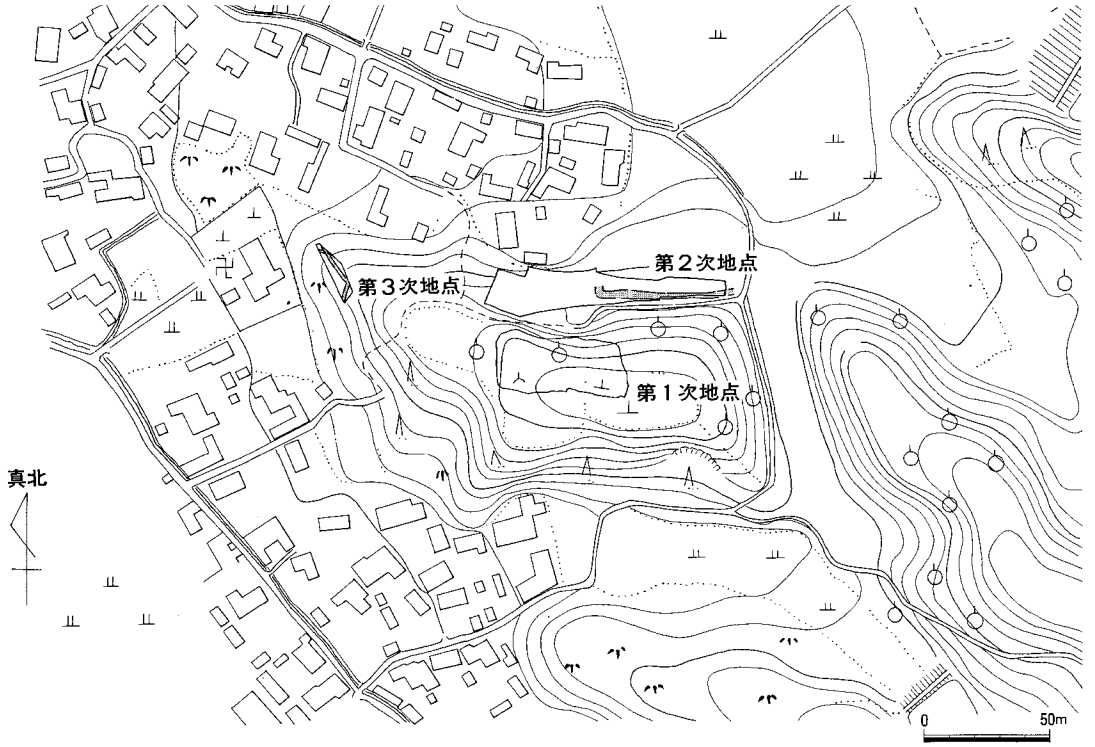


図５　上月隈遺跡戦国時代の溝（1/3,000、報文『上月隈遺跡』1990を基に作成）
※昭和初期の地図を使用、アミかけは戦国時代の溝

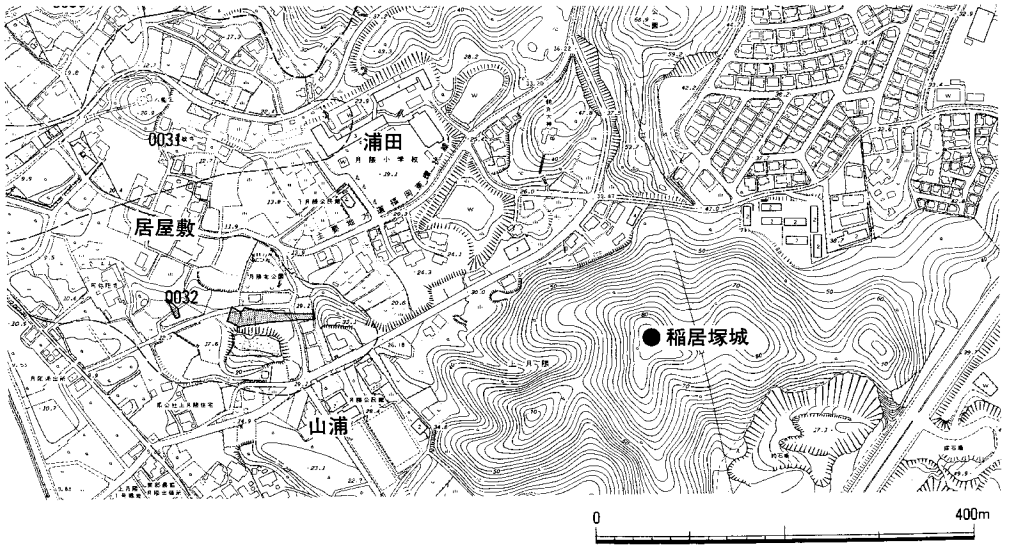


図６　稲居塚城位置図（1/8,000、参考文献㉒）

中央区

旧那珂郡と早良郡である。筑前国黒田藩の主城、福岡城と鳥飼に鳥飼城がある。

福岡城（８）は黒田長政が関ヶ原の戦い後の恩賞として筑前入国後、それまでの名島城の城下町が狭いとして、慶長６年（1601）から新たに７年の歳月をかけて、那珂郡警固村福崎の地を選んで築いた近世城郭である。赤坂の丘陵を造成した平山城といわれる形態のものである。築城を請け負ったのは黒田二十四騎の野口佐助と益田与助である。福岡城は天主曲輪、本丸、二の丸、三の丸の曲輪で構成される内城と東は那珂川、西は黒門川、南は中堀・肥前堀の外堀で区画される惣構の城下町とからなる大城である。東側の商人の町博多とは中島橋と枡形門で繋がる。昭和32年に国史跡となっている。

鳥飼城（9）は『筑前国続風土記拾遺』では鳥飼村古城で、『鎮西要略』などにもあり、「本村の東の方に御茶屋の内という所有。是城址なり。四方に高土手有。」と書かれている。『豊前覚書』には天正8年に戸次道雪が村に籠もった肥前方を破るとある。17世紀後半に書かれた『福岡御城下絵図』（福岡県立図書館蔵：市報文『福岡城の櫓』参照）を見ると、大堀の西側に土塁で囲まれた長方形の館らしきものが描かれており、位置的にいってもこれが鳥飼城の名残である可能性が高い。

早良区

旧早良郡である。戦国時代は大内氏、大友氏の支配を受けた地域である。

安楽平（荒平）城（10、図7）は油山西側の荒平山山頂（標高395m）立地する早良郡を治める拠点の城である。山頂部分が主郭となり、その東側尾根筋に細長い曲輪が連なり、一段高くなった曲輪2がある。その南斜面には高さ2m程の直立する石積みがある。主郭の西側には大きな堀切が入り、その西側に櫓台と思われる平場と、石積み基壇の土塁が残る。その先は小さな堀切が続く。規模的には南北約400m、東西350m程である。各曲輪の斜面は切岸で急斜面であり、高さ2m程の石積みも認められる。曲輪2、主郭西側では瓦が採集されている。築城時期は不明だが、『太宰管内志』に寛正6年頃（1465）に安楽平城についての記述が見られ、15世紀の中頃には既に築城されていたようである。大内時代には郡代、大友時代には城督が駐在している。この安楽平城は天正8年(1580)、城主小田部鎮元の時代に肥前の龍造寺氏に攻められて落城する。

小田部城（11、図8・17）は室見川の右岸の標高15mを測る独立中位段丘上に立地する。確実な文献はなく、築城時期・城主は不明であるが、『筑前国続風土記拾遺』では有田村の所で「村内に在。堀内といふ。堀址殘れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏の里城なるへし。(中略)又村南に築城といふ所あり。鎮西要略に小田邊城といふ見えたるは、是らをさしていふか。」とある。小田部氏は16世紀後半の安楽平城主であり、その里城が有田の地にあったということで、現在は有田集落の西應寺を中心に方100×140mの範囲が推定地となっている。この地点では「常丸」、「馬場」、「天神屋敷」などの地名も残り、土塁や堀が最近まで残っていた（註2）。江戸時代の『歴代鎮西志』にも小田部城についての記述がある。

この台地全体は有田遺跡群として現在まで190次を越える調査が行われており、調査の成果からこの推定地の北側に方形に溝を巡らす区画群が確認されている。一つの区画は溝まで含めると一辺が110m前後で、方1町に近い方形区画を基準に、その半分ほどの小区画が組合わさって、あたかも6個の大区画が重複しあう状況を示している。区画溝は幅が最大で9mと広く、深さは2m余りを測り、薬研堀で一部二重に巡るところもある。出土遺物から時期は15世紀後半から16世紀代にかけてであり、この範囲までを含めた南北500m、東西300mほどの範囲が小田部城であった可能性が高い。この小田部城については、近世城郭に見られるような主郭に求心性が見られず、それぞれの曲輪が同規模で独立している状況を示し、各曲輪に井戸があり、溝から日常雑器なども出土しており、居住性が強い。あえて言えば佐賀平野のクリーク地帯の姉川城や直鳥城などの形態に似ている。

曲淵城（12）は曲淵貯水池の南側、主郭が曲淵神社の境内となっている。社殿の裏側に堀切と曲輪がわずかに残っている。館部分は貯水池の中に沈んだという。築城・築城主は不明であるが、『筑前国続風土記』によれば、元亀・天正年間（1570～90）には原田氏の支配下にあり、曲淵河内守が城主であったようである。曲淵氏は早良郡南部を領した国人であるが、小早川氏入国後は浪人になったようである。

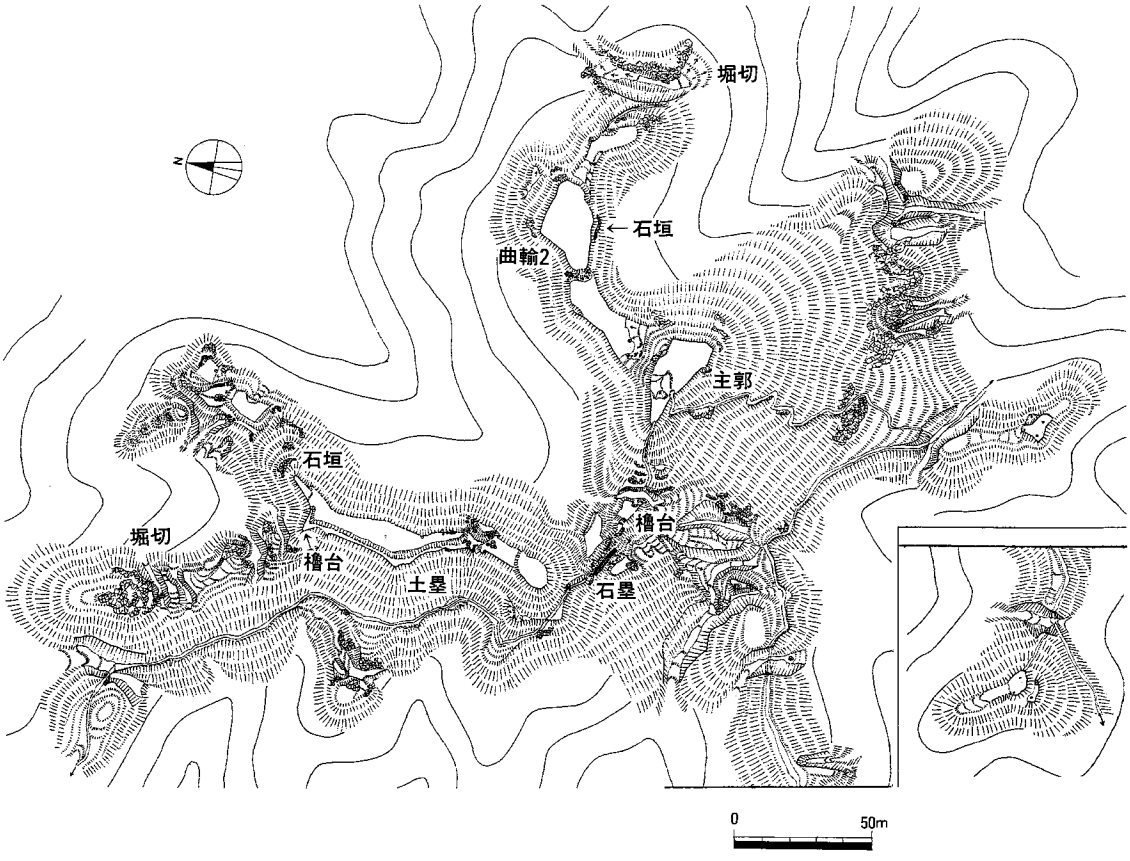


図７　安楽平城縄張り図（中西義昌調査・作図を一部加筆、参考文献⑧）

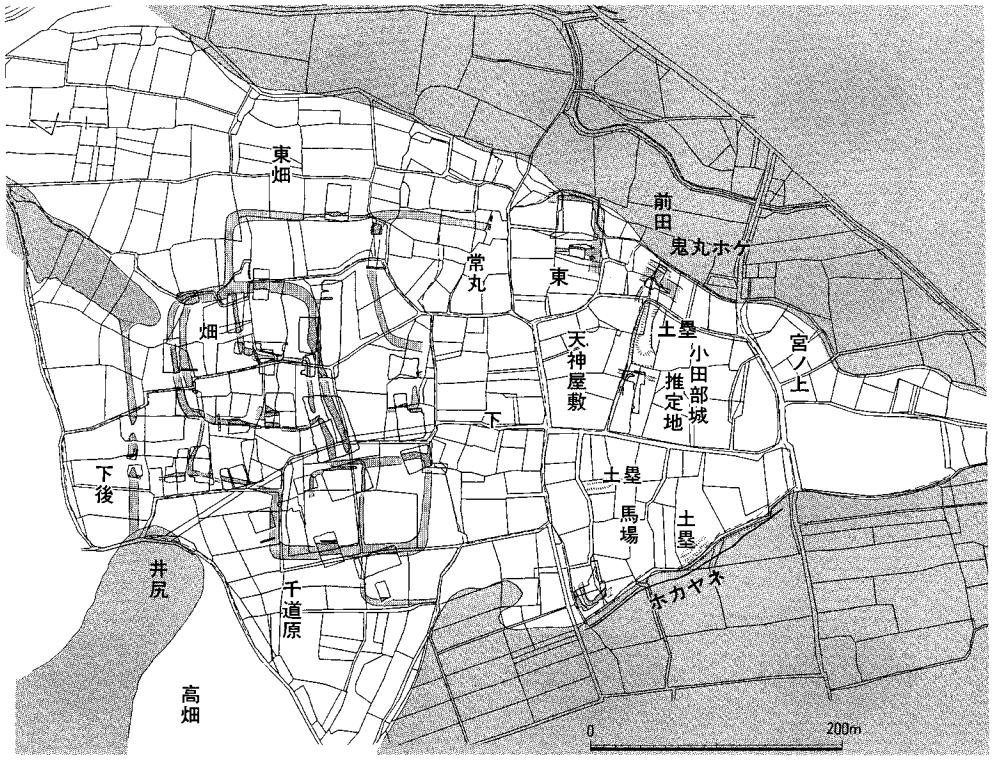


図８　小田部城全体図（1/6,000）

三瀬城（13）は佐賀県境の三瀬峠に所在する城である（註３）。

この他に重留にあったといわれる**茶臼城**（14）や、『筑前国続風土記拾遺』では**本城**（15、内野村古城）、**陣ノ原古城**（16）などがある。

居館跡としては原遺跡群、有田遺跡群で調査例がある。

原遺跡群（17、図16）は標高６～７ｍを測る沖積微高地上に立地する。第９次調査で居館の溝のコーナー部分を検出している。幅４～５ｍの溝が矩形に巡り、その規模は復元で南北90ｍ、東西60ｍを推定する。溝には水があったようである。調査では５棟の建物を検出している。出土遺物から15～16世紀代の時期であり、名主層の居館と考えられる。

有田遺跡群（18、図17～19）は小田部５丁目地区と有田３丁目地区で調査例がある。

小田部５丁目地区（図19）では幅が４～７ｍ、深さは1.4ｍを測る大溝で囲まれた、東西60ｍ以上、南北100ｍを測る区画で、その東側に溝の内側で東西40ｍ、南北80ｍを測る小区画が付属する可能性がある。この居館の南側には幅５～７ｍの堀切状の大溝がある。出土遺物から15～16世紀頃の時期である。この居館については『牛尾文書』の「飯盛宮行事屋敷小田部村地頭名注文案」（参考文献⑭）に、享禄２～天文16年（1529～47）の大内氏の早良郡代であった大村興景が小田部村に「中薗名」、「下中薗屋敷」を知行されており、この一帯の小字名が「中薗」であることから、その「下中薗屋敷」である可能性が強い。

小田部３丁目地区（図18）は幅の狭い台地先端に立地している。規模は推定で溝の内側で南北30ｍ、東西50ｍ、総面積は1500㎡を測る。出土遺物から13～15世紀の名主層の居館が考えられる。

西区

旧早良郡と怡土郡、志摩郡の範囲で、この地域は国人領主の原田氏や大内・大友氏が争った地域である。

北浦城（19、図13）は能古島の南東側の海岸を臨む丘陵先端にあり、交通の要所である。幅4.8ｍ、深さ4.5ｍを測る堀切と、その内側の曲輪よりなる。『筑前国続風土記拾遺』では「城ヶ崎古城」と記述され、藤原純友の家臣伊賀寿太郎が築いたとあるが、よく分からない。1992年の調査では、16世紀の明の青花磁器片が出土している。

筑前探題城（20）は姪浜の東、愛宕山上（標高64ｍ）にある城である。『筑前国続風土記』では「九州探題城跡」、『筑前国続風土記拾遺』では「西国探題城址」とあり、北条氏の探題の居城であると記述されている。山上が城跡と考えられるが、愛宕神社などの社殿があり、地形の改変がひどく状況はよく分からない。

飯盛山城（21、図14）は飯盛山（標高382ｍ）にある城である。山頂に主郭と思われる曲輪があり、その南側に腰曲輪がある。腰曲輪の周縁には土塁が巡り、その斜面には６条の竪堀がある。また西側斜面には１条の竪堀がある。主郭上には飯盛神社の上宮が祀られている。築城時期、築城者は不明であるが、『筑前国続風土記』によれば、『太平記』に南北朝時代の康安元年（1361）に城が出てくるという。戦国時代末には原田氏の支配下に入っている。麓の飯盛神社は鎌倉時代、社領73町を有した有力社であり、香椎の御飯ノ山城のように、この神社に関係があるのかもしれない。

柑子岳城（22、図9）は福岡市の西端部に位置する柑子岳（標高254.5ｍ）の山頂に立地する城であり、別名草場城とも呼ばれる。大友氏の志摩郡支配の拠点である。鎌倉時代、元寇の恩賞地として大友氏に志摩郡東部の地が与えられてから、大友氏の志摩地域が始まる。築城時期は不明だが、大友宗麟の時代に臼杵氏を城督として派遣した。臼杵氏の後は木付氏が城督となる。城の縄張りは山の最高

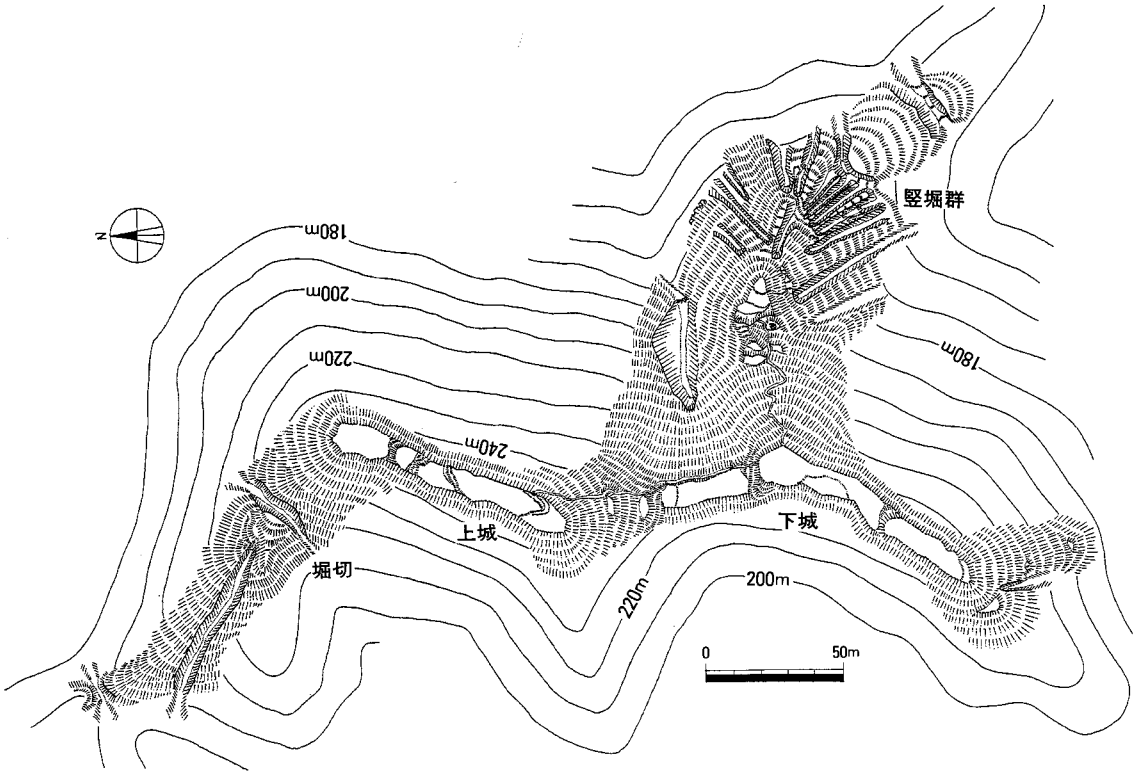


図９　柑子岳城縄張り図（中西義昌調査・作図、参考文献⑧）

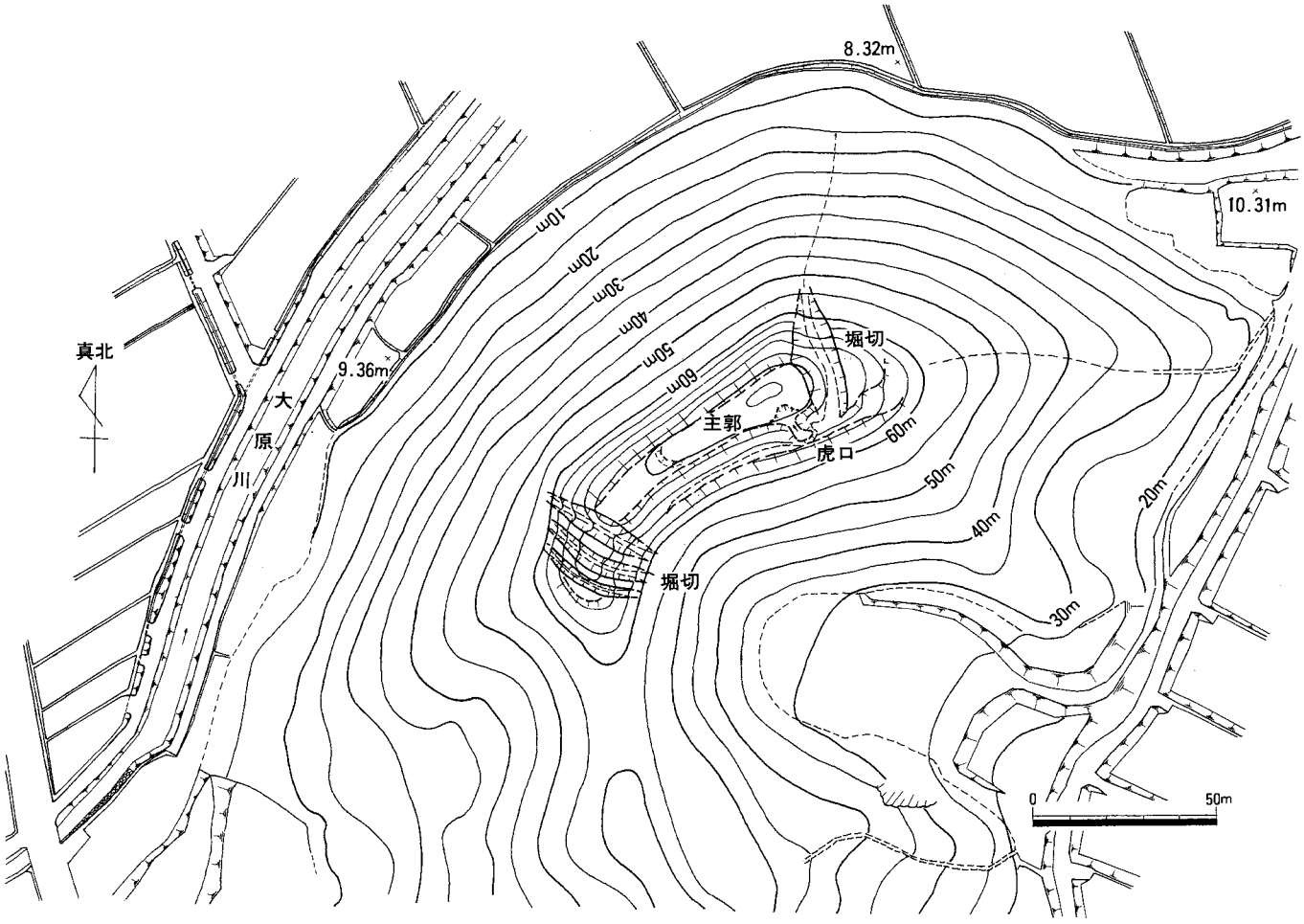


図10　戸山（仮称）城縄張り略測図（1/2,000　吉留氏作成分を加筆修正）

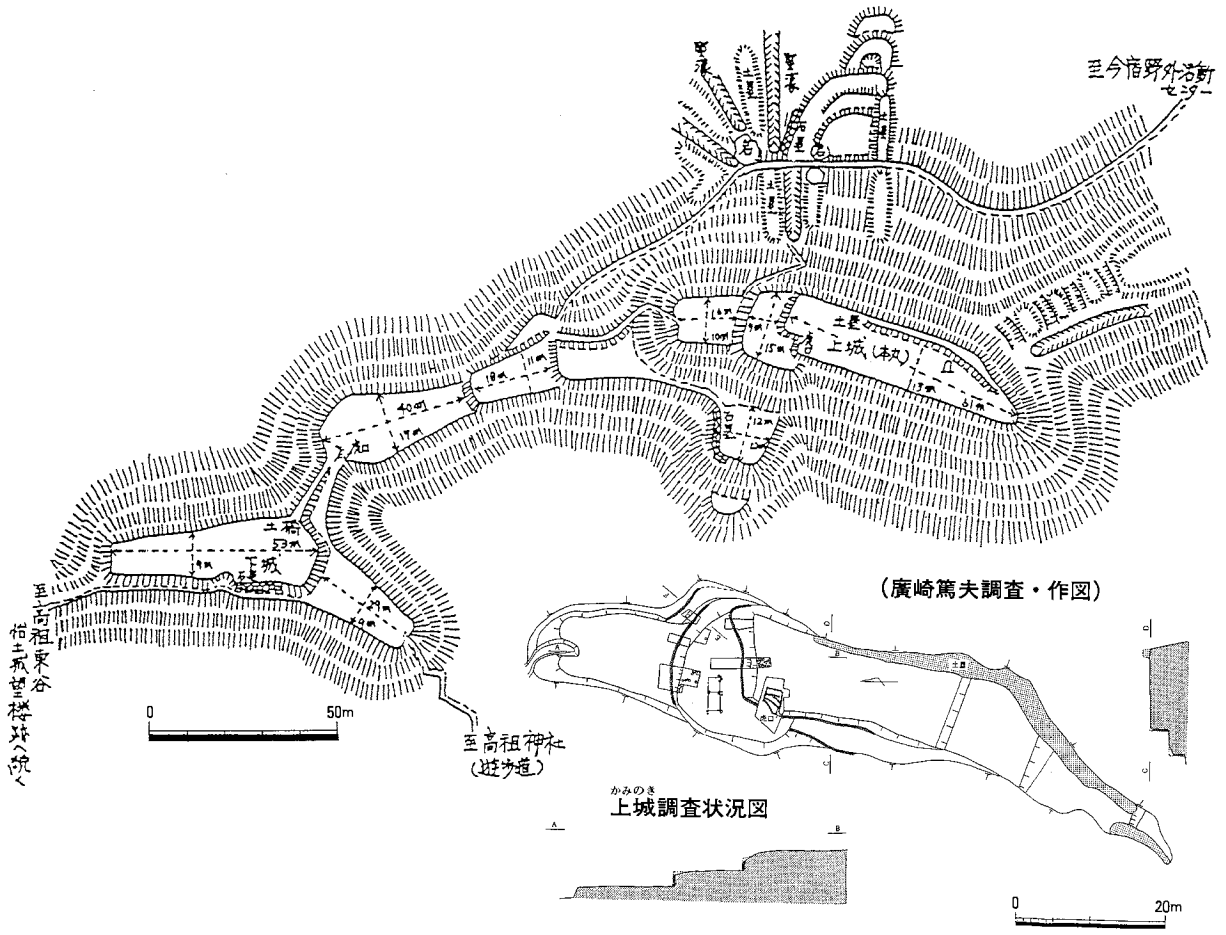


図11　高祖城縄張り図と上城調査状況図（1/2,000・1/1,000、参考文献⑦・⑳）

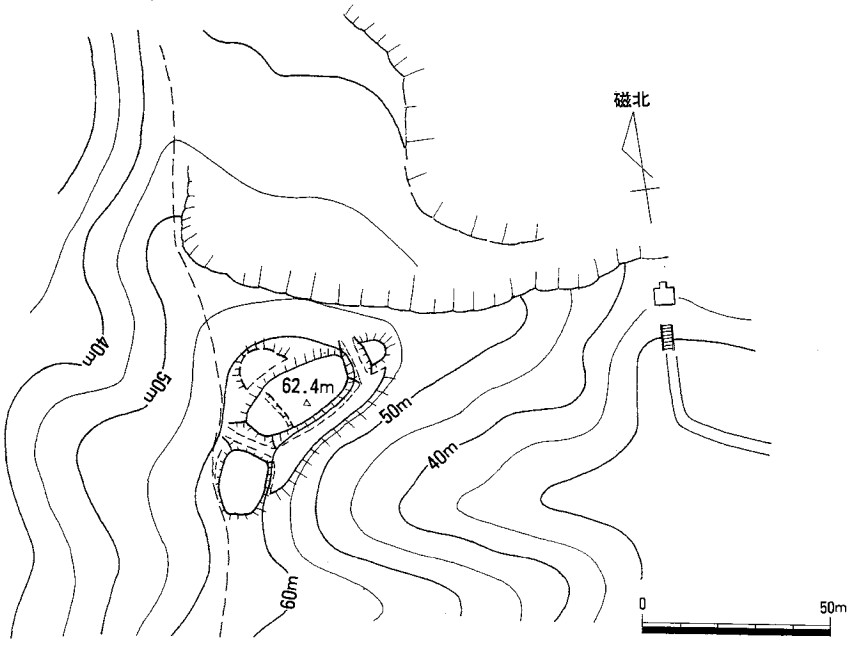


図12　青木城縄張り略測図（1/2,000、筆者測）

所部を含む尾根筋に曲輪を作り出している。山頂の細長い長さ約60m、幅8mを測る平坦地が主郭（上城）で、堀切のように切り下げられた長さ約40m、幅10mの平坦地を挟んで南側に細長い長さ約90m、幅10～17mの曲輪2（下城）がある。主郭の北側には二段の平坦地と堀切、竪堀があり、下城の東側には一段低い所に平坦地があり、その部分には畝状のような連続する竪堀があるようである。主郭、曲輪2の斜面は急であるが、石積みは確認出来ていない。

水崎城（23）は元岡の水崎山（標高95m）にある城である。水崎山城とも言うが、『筑前国続風土記拾遺』に記述がある。築城時期、築城者

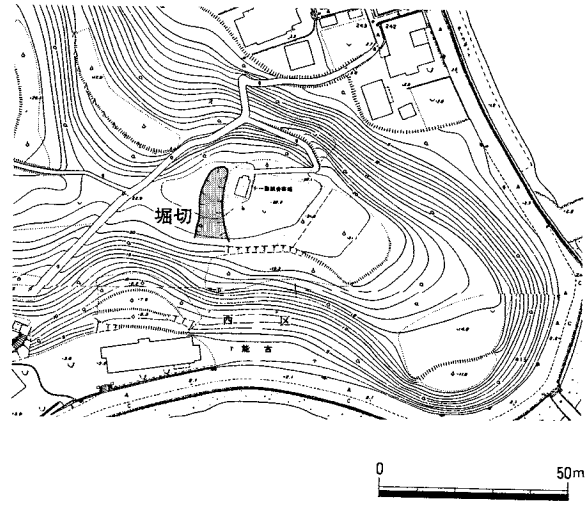


図13　北浦城跡（1/2,000、参考文献⑯）

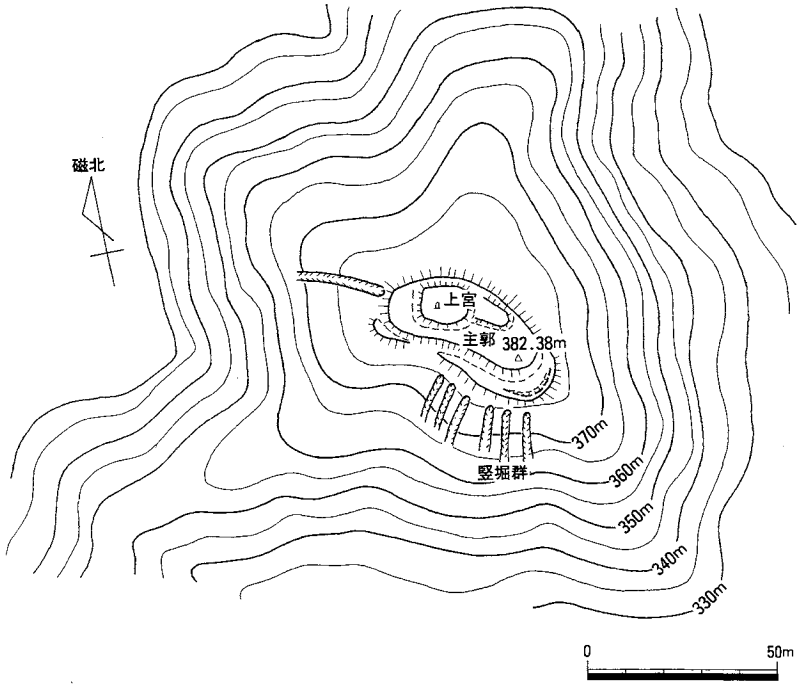


図14　飯盛山城縄張り略測図（1/2,000、筆者測）

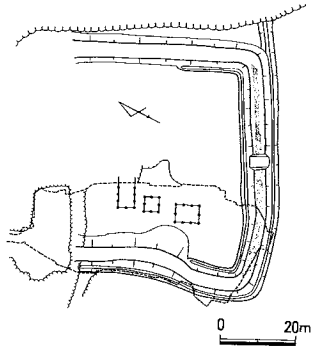


図15　諸岡館跡（1/1,000、参考文献⑩）

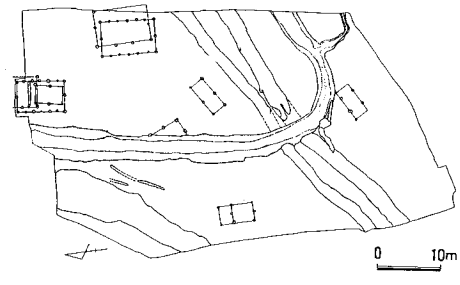


図16　原遺跡第9次調査区（1/1,200、参考文献⑫）

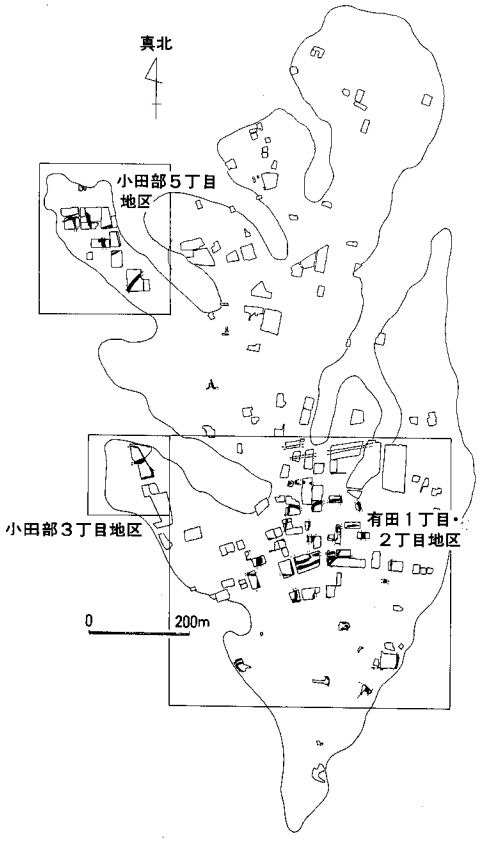


図17　有田遺跡群中世堀状遺構配置図（1/8,000）

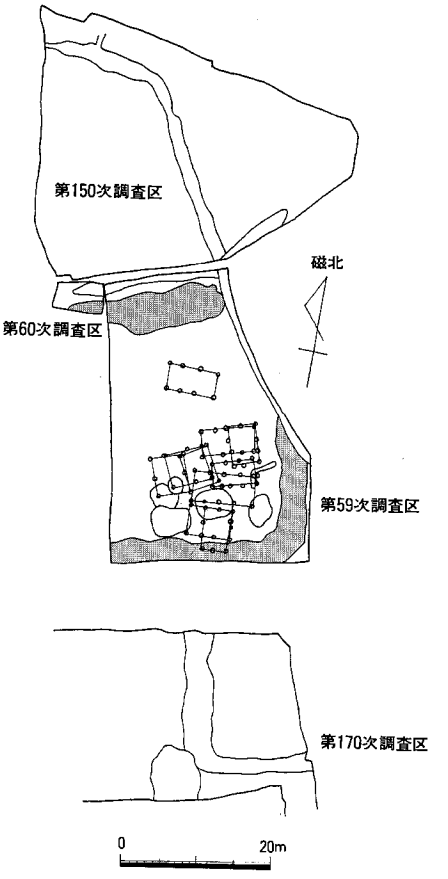


図18　小田部３丁目地区居館跡（1/1,000）

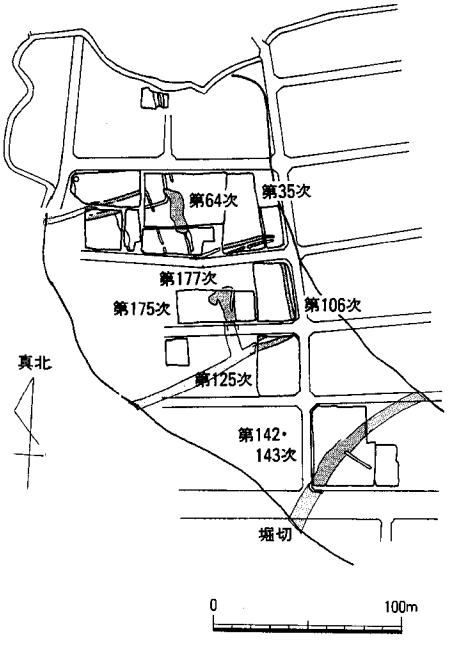


図19　小田部５丁目地区居館跡（1/4,000、参考文献⑮）

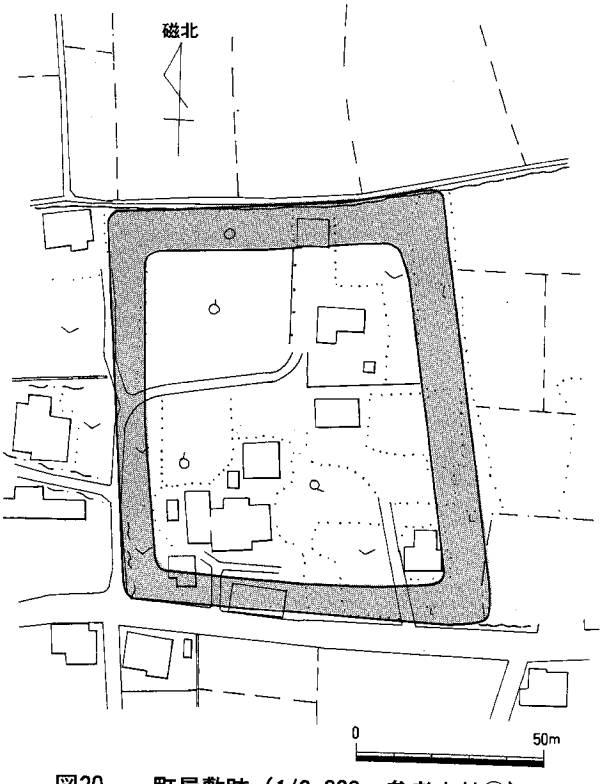


図20　一町屋敷跡（1/2,000、参考文献㉓）

は不明だが、城主に水崎氏がいたようだ。柑子岳城の支城であろう。丸山雍成氏は『筑前国続風土記』にある元岡城がこれに当たると比定している（註４）。

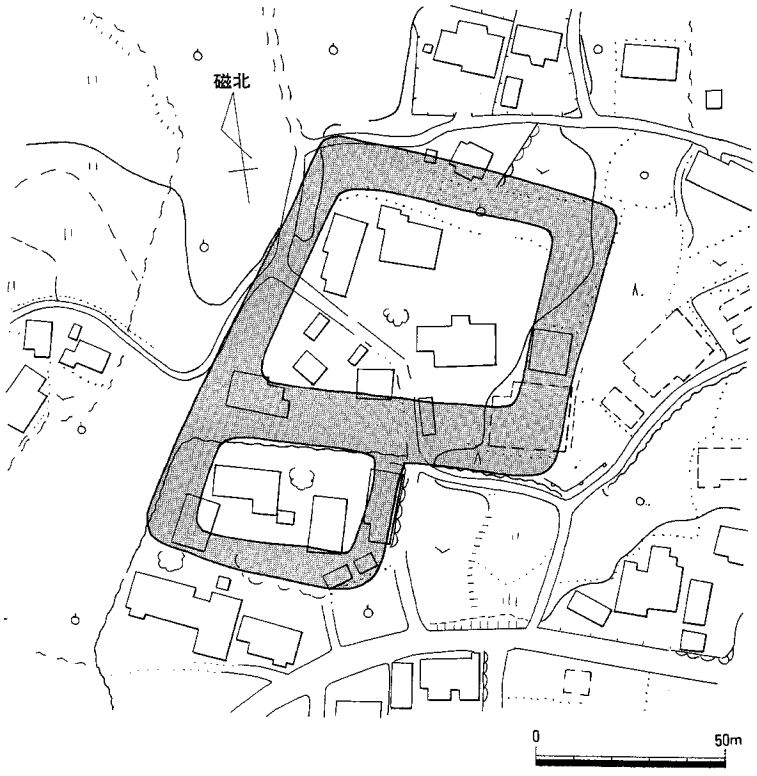


図21　都地城（1/2,000、参考文献㉓）

戸山（仮称）城（24、図10）は水崎山から北西約800ｍの地点にある、標高72ｍを測る尾根の頂上に所在する。福岡市の文化財分布地図では水崎城の範囲に入る。北に谷を臨む立地で、小字名は「別府」、又は「戸山」で、谷部は「前田」という。城としての残りは良好である。長さ約70ｍ、幅約６～11ｍを測る南西から北東に主軸を取る単郭の細長い曲輪がある。その南西側には３条の堀切、北東側には１条の大きな堀切がある。北側の堀切は主郭への通路のようで、堀切を突き当たり、右に折れて土塁を兼ねた通路を経て主郭に入る虎口がある。主郭の南側下には犬走り状の腰曲輪が付く。形態的に御飯ノ山城に近い例である。『筑前国続風土記拾遺』の桑原村の項に大友氏の家臣の大神出雲の居宅跡があったとあり、それがこれに相当するのであろう。

高祖城（25、図11）は前原市境の高祖山（標高416.1ｍ）の山上にある城である。古代山城の怡土城の外郭ラインを利用したもので、城域は東側土塁線と重なる。築城は鎌倉時代の建長元年（1249）原田種次によるとされている。原田氏は平安時代、大宰小弐であった大蔵氏が祖先であったといわれている。城の縄張りは山頂尾根筋に下城（北側）、上城（南側）という大きな曲輪があり、その間は３段の細長い曲輪で繋がる。上・下城とも斜面に高さ２ｍ程の石積みがある。1998年の上城の調査では虎口部分が確認され、瓦葺きの建物があったようで、多量の瓦が出土した。瓦は下城周辺でも散布している。また日常雑器も多数出土しており、山上で生活していたことが判明した。出土遺物は16世紀中頃のものが多い。天正14年（1586）の豊臣秀吉の九州平定時に、城主の原田信種は反抗するが、小早川隆景の圧倒的な軍勢の前に降伏した。その後原田氏は筑後に移り、高祖城は廃城となる。

青木城（26、図12）は今宿上原にある城である。長さ約30ｍ、幅約15ｍの主郭の前後に堀切があり、また主郭の東側には腰曲輪がある。築城時期、築城者は不明だが、高祖城の搦手を押さえる支城の可能性がある。

星山城（27）は今宿青木に所在する城で、『筑前国続風土記拾遺』には直鳥城、あるいは生松原古城と出てくる城である。すでに破壊されたようで、実態は不明。

『筑前国続風土記拾遺』には以上の他、**臼杵端城**（28）、**鷺城**（29）、**志摩城**（30）などが記載されている。また**徳永城**（31、註５）という城もあったとされる。

居館としては**一町屋敷跡**、**都地城**がある。

一町屋敷跡（32、図20）は十朗川の右岸の標高6ｍ前後の沖積微高地に立地する居館跡である。つい最近まで方形に巡る土塁と溝が現存していたが、いつのまにか開発で消滅した。単郭で規模は東西80ｍ、南北120ｍを測る。未調査で実態は不明だが、館の北側隣地で調査が行われ、13～14世紀前半を中心とする集落遺構が確認されている（註6）。

都地城（33、図21）は市内に現存する貴重な居館跡である。室見川左岸の標高30ｍ前後の河岸段丘上に立地している。一辺80ｍを測る方形の主郭の内側に、幅40×60ｍ程の副郭が付く。周囲には空堀が巡り、その内側には土塁が築かれる。『安楽平城物語』では天文元年（1532）将軍足利義輝（義晴か）の命により、京都から細川光行が下向し、当地に城を構えたという。時期的には16世紀頃であろうか。

3．まとめ

以上城館の概要を説明したが、ここではいくつか気づいた点を述べてまとめとしたい。

①　城館数は伝承のみのものも含めて、33カ所確認したが。分布の在り方については、早良・西区が多い。この地域は大友氏、大内氏、原田氏、龍造寺氏との勢力争いが頻繁に起こった地域であり、必然的に城が多く築かれるようになったと思われる。

②　城館については大きく3種類に区分することが可能である。Ⅰ類は地域の拠点となる大規模な城、Ⅱ類は拠点の城に付随する小規模な城、Ⅲ類は平地にあって居住性が強い城館である。

Ⅰ類は立花城、安楽平城、柑子岳城、高祖城、名島城、福岡城などである。これらは郡、国単位を治める拠点の城であり、大内・大友氏など戦国大名や、原田氏などの国人領主が直接支配した城である。規模も大きく、福岡城や織豊期の名島城を除けば、比較的標高の高い山頂にある。柑子岳城以外は石積みがあり、瓦葺き建物も存在した。ただし石積みは織豊系城郭に見られる本格的な高石垣の石垣ではなく、高さがせいぜい2ｍ程の、在地系の石積みである。

Ⅱ類は御飯ノ山城、中山城、稲居塚城、曲淵城、飯盛山城、青木城、水崎城などで、拠点の城の端城とされる城や、いわゆる「村の城」（註7）といわれる武装した村が築いたと思われる城である。これらはⅠ類の城に比べて一般に標高の低い山に築かれている。縄張りも単純で規模は小さく、主郭と副郭で構成される程度で、堀切や竪堀なども少ない。石積みや瓦葺き建物はない。

Ⅲ類は平地や台地上にある城館である。諸岡館跡、鳥飼城、小田部城、原遺跡群、有田遺跡群、一町屋敷跡、都地城などがある。土塁と堀を持つが、軍事的側面よりは居住的性格が強い。規模的には大きくても一辺が方一町程度である。地域の有力者の日常生活の場であろう。ただ小田部城については館と見るよりは規模が大きく、城と考えた方が良いと考える。

③　城の築城時期については伝承では平安時代、鎌倉時代と言われるものもあるが、そういう古い時期の城は縄張り調査では確認出来ていない。古くても南北朝期以降であろうか。

④　山城城主の日常生活の場については御飯ノ山城以外はよく分かっていない。ただ高祖城の原田氏については西側の高祖神社の上側に推定されている。小田部城が伝承通りであれば、安楽平城主の居館であろうか。

力不足からか、雑駁なまとめとなってしまったことをお許し願いたい。福岡市、あるいは県下における中世城館の調査・研究はまだ始まったばかりであり、不明な点も多い。城跡のリストもれもあると思われる、今後色々お教えいただけたら幸いである。まだ現在は開発が山城まで及んでいないが、将来は開発の波に襲われることは充分予想される。しっかりとした基礎調査が望まれところである。

なお戸山城については大規模調査等担当の二宮課長を初め、松村・吉留両氏、稲居塚城については埋蔵文化財課の榎本氏に貴重な資料の提供を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

註

註1　第1次調査は『上月隈遺跡』(福岡市埋蔵文化財報告書第257集1990)、第2・3次調査は埋蔵文化財課、榎本義嗣氏にご教示を受けた。今年度報告予定。

註2　山口津氏著の『福岡市有田郷土史』(有田歴史研究会　1973)によれば、「村の西側にホカヤネと云う幅1間(2メートル)余り長さ90間(160メートル)の濠があり、東側にも鬼丸ホゲと云う小さな濠がある。」と書かれている。

註3　福岡市の分布地図では伝三瀬城跡である。現地を見ていないので、実態はよく分からないが、同名の城が隣接する佐賀県三瀬村宿にある。この城は国人領主神代氏の居城である。標高560mを測る山頂上にあり、四周を石積みを持つ土塁で囲まれた連郭式の本格的な山城である。

註4　「中世後期の北部九州の国人領主とその軌跡－原田とその支族波多江氏を中心として－」『大蔵姓原田氏編年史料』(文献出版　2000)396・397頁

註5　同上　394頁

註6　平成元年(1989)に調査。(『拾六町亀田1・次郎丸高石4・田村13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集　1999)を参照のこと

註7　井上哲朗氏の論文「村の城について」(中世城郭研究2　1988)の中で提唱されたものである。各地に残る伝承、文献記録のない小規模な城は必ずしも、戦国大名が作ったのでなく、武装した村が、名主層中心に村を守る為に城を作ったとする考えである。

参考文献

① 貝原益軒　『筑前国続風土記』　(復刻第二刷、1988)

② 加藤一純・鷹取周成　『筑前国続風土記付録(上・中・下)』(復刻、1977)

③ 青柳種信編　『筑前国続風土記拾遺(上・中・下)』　(復刻、1993)

④ 城戸清種　『博多・筑前史料　豊前覚書』　(復刻、1978)

⑤ 伊藤常足　『太宰管内志(上)筑前国』　(復刻、1969)

⑥ 福岡県教育委員会「付録　福岡県中世山城」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XXIX』1979

⑦ 廣崎篤夫　『福岡県の城』1995　海鳥社

⑧ 木島孝之・中西義昌　「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」『戦国の城と城下町II』1998　鳥栖市教育委員会

⑨ 福岡市教育委員会　『名島城跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第318集　1993

⑩ 福岡市教育委員会　『諸岡遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集　1984

⑪ 福岡市教育委員会　『福岡城の櫓』1994

⑫ 福岡市教育委員会　『原遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集　1986

⑬ 福岡市教育委員会　『有田・小田部』第1～34集　1980～2000

⑭ 吉良国光　「小田部氏関係資料」『福岡市博物館研究紀要　創刊号』1991

⑮ 山崎龍雄　「福岡市早良区有田遺跡における戦国期曲輪状遺構の検討」『国分直一博士米寿記念論文集　ヒト・モノ・コトバの人類学』　1996　慶友社

⑯ 福岡市教育委員会　『能古島』福岡市埋蔵文化財調査報告書第354集　1993

⑰ 山崎龍雄　「糸島地方の中世山城採集資料について」『福岡市博物館研究紀要　第8号』1998

⑱ 堀本一繁　「戦国期博多の防御施設について～「房州堀考」～」『福岡市博物館研究紀要　第7号』1997

⑲ 服部英雄編　『筑前国怡土庄故地現地調査速報』地理史料叢書4　1999

⑳ 前原市教育委員会　『高祖城(上の城)発掘調査概要』1998

㉑ 油比章祐　『怡土志摩地理全誌』　第2刷　1999

㉒ 福岡市教育委員会編『福岡市文化財分布地図(東部I)』1996

㉓ 福岡市教育委員会編『福岡市文化財分布地図(西部I)』1994

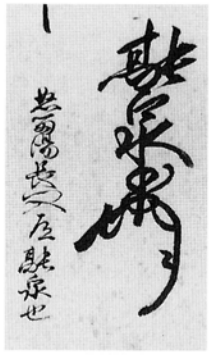
㉔ 福岡市教育委員会編『福岡市文化財分布地図(西部II)』1995

㉕ 石津司　『安楽平城物語　その2』

㉖ 近藤瓶城編　『歴代鎮西要略』　明治16年　(復刻、1976)

㉗ 福岡市教育委員会『席田青木遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集　1993

㉘ 福岡市教育委員会『御飯ノ山城現地説明会資料』1997


30※

28

27

26

24

35

32

31

29

38

36

42

41

40

39

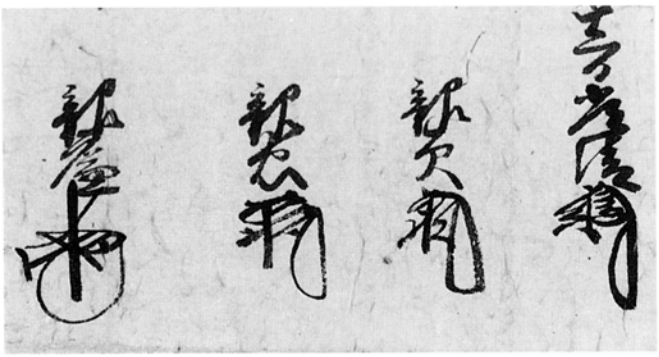
48

46

45

44

花押集


5

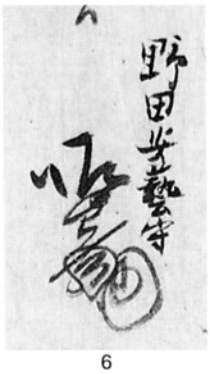
2

1

9※

8※

7


6

3

17

16

15

14※

10

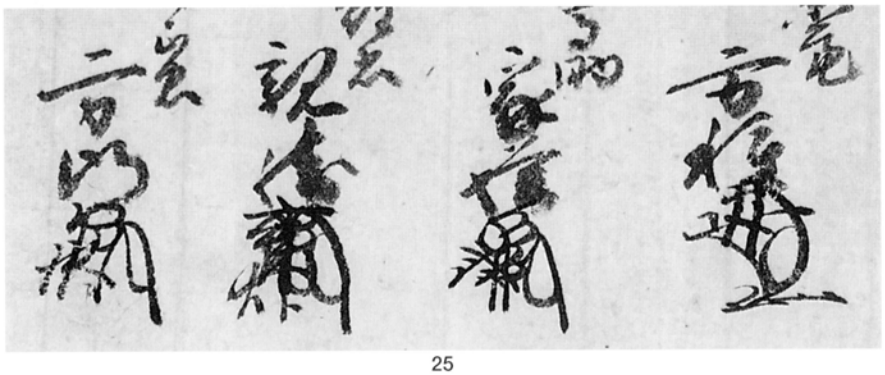
22

21

20

19

18


25

23※

＊　各図版の番号は、釈文および「三苫文書編年目録」の通番号と一致する。
＊　配列は原則として通番号順であるが、割り付けの都合上、一部前後する。
＊　番号に※を付したものは、花押影であることを示す。

番号	文書名	和暦	西暦	月・日	差出	宛所	紙質	形態	法量	目録	写1	写2	備考
36	香椎一社中連署書状	（年未詳）		三月廿八日	三苫式部少輔鎮宣（花押）・勧進坊良秀（花押）・遍照院良意（花押）・御灯坊勢円（花押）・座主坊良因（花押）・香椎大宮司氏永（花押）	安東紀伊介 田尻河内入道 吉木加賀入道	楮紙	継紙	一六・一×五四・九	27		32	封紙（一六・〇×六・九）あり
37	香椎宮神事用途注文案	元亀四年	一五七三	十二月廿一日	（ナシ）	（ナシ）	楮紙	継紙	二五・七×二〇二・八	19			巻子装
38	某書状	（年未詳）		十一月十五日	□□（花押）	三苫式部輔	楮紙	切紙	一四・二×三六・二	39			
39	足立連安書状	（年未詳）		十二月十六日	連安（花押）	三苫長門守	楮紙	切紙	一五・二×三八・七	42			封紙（一五・四×九・一）あり
40	足立連安書状	（年未詳）		十二月廿四日	連安（花押）	三苫長門守	楮紙	切紙	一三・三×三七・八	44		30	封紙（一三・四×九・七）あり
41	由布雪下・小野鎮幸連署書状	（年未詳）		二月十八日	雪下（花押） 鎮幸（花押）	香椎一社中	楮紙	切紙	一七・〇×三七・二	23		31	封紙（一七・二×六・三）あり
42	青木鑑学書状	（天正二年カ）	一五七四	十月十日	鑑学（花押）	御灯坊	楮紙	切紙	一四・九×三七・六	37		22	封紙（一五・〇×六・二）あり
43	戸次道雪官途状写	（天正七年）	一五七九	正月十四日	道雪	三苫三郎	楮紙	端紙	二四・二×一六・三	未収			
44	大友義統感状	（天正八年）	一五八〇	十一月廿八日	義統（花押）	三苫宮内少輔	斐紙	切紙	一一・二×三一・八	40			封紙（一一・四×三・九）あり
45	政吉書状	（年未詳）		七月十八日	政吉（花押）	（宛所欠）	楮紙	竪紙	二七・〇×三三・七	28			
46	政吉書状	（年未詳）		七月廿七日	政吉（花押）	（宛所欠）	楮紙	竪紙	二六・八×三一・四	30			
47	香椎宮領坪付注文（断簡）	（年未詳）		（月日未詳）	——	——	楮紙	継紙	二六・〇×①四三・四 ②四三・八③四二・三	45			断簡、現状三紙残存、巻子装
48	小早川氏家臣連署書状	天正拾五年丁亥	一五八七	七月廿一日	堀之内三郎右衛門（花押）・未述弥十郎（花押）・忠仕次郎左衛門（花押）	香椎御一社中	楮紙	竪紙	二六・二×三七・七	20		33	

番号	文書名	和暦	西暦	月・日	差出	宛所	紙質	形態	法量	目録	写1	写2	備考
16	豊饒永源書状	「天文八年」	一五三九	八月廿二日	永源(花押)	三苫中務少輔 三苫宮内太輔 勧進坊	楮紙	竪紙	二六・三×三一・一	9		12	封紙(一二七・〇×九・九)あり
17	大友義鑑書状	「天文十年」	一五四一	二月三日	義鑑(花押)	三苫中務少輔	楮紙	竪紙	二六・九×三五・五	10		13	封紙(一二七・四×八・六)あり
18	怒留湯直方書状	「永禄貳年」	一五五九	卯月廿九日	直方(花押)	香椎一社中	楮紙	竪紙	二五・六×三二・〇	11		14	封紙(一二七・一×一〇・五)あり
19	怒留湯直方書状	(永禄二年カ)	一五五九	十月五日	直方(花押)	香椎一社中	楮紙	竪紙	二六・四×三三・九	36		18	封紙(一二六・六×八・六)あり
20	怒留湯鑑貞書状	(年未詳)		十一月十一日	鑑貞(花押)	香椎一社中	楮紙	切紙	一四・九×四〇・〇	38		15	封紙(一二五・〇×六・二)あり
21	豊饒鑑富書状	「永禄四年」	一五六一	三月拾日	鑑富(花押)	三苫善次	楮紙	切紙	一六・二×三七・五	13		17	封紙(一一六・二×七・八)あり
22	豊饒鎮富書状	「永禄四年」	一五六一	三月拾日	鎮富(花押)	三苫善次	楮紙	竪紙	二四・一×三六・〇	12		16	封紙(一二四・〇×一二・五)あり
23	奈多鑑基書状写	永禄五年	一五六二	二月廿三日	鑑基(花押影)	三苫善次	楮紙	端紙	二六・四×三九・〇	14		19	
24	怒留湯融泉書状	永禄六年	一五六三	十月廿九日	融泉(花押)	三苫善次	楮紙	竪紙	二二・六×三八・八	16		20	封紙(一二・八×一〇・五)あり
25	怒留湯融泉書状案	永禄六年	一五六三	十月廿九日	融泉　在御判	三苫三郎	楮紙	竪紙	二七・〇×三九・七	15		21	封紙(一一七・二×七・七)あり
26	臼杵鎮賡書状	(年未詳)		七月廿六日	鎮賡(花押)	香椎宮一社中	楮紙	竪紙	二三・六×三三・二	29		23	
27	臼杵鎮賡書状	(年未詳)		八月十七日	鎮賡(花押)	香椎一社中	楮紙	竪紙	二六・六×三六・八	32		24	封紙(一一七・〇×一三・〇)あり
28	高賡家副状	(年未詳)		八月十七日	賡家(花押)	香椎一社中	楮紙	切紙	一五・九×三七・二	33		25	封紙(一一五・八×六・四)あり
29	臼杵鎮勝・高賡家連署書状	(年未詳)		九月二日	鎮勝(花押) 続家(花押)	香椎一社中	楮紙	切紙	一四・四×二六・九	34		26	封紙(一一四・三×五・八)あり
30	怒留湯融泉奉書写	永禄十年	一五六七	十二月十八日	融泉(花押影)	三苫式部太輔	楮紙	端紙	二六・四×三九・〇	17		27	
31	吉弘鑑理書状	(永禄十二年)	一五六九	十二月三日	鑑理(花押)	香椎社中衆	楮紙	切紙	一五・五×三五・〇	41		28	封紙(一一五・六×六・六)あり
32	戸次鑑連書状	(元亀二年)	一五七一	七月廿九日	鑑連(花押)	三苫式部少輔・ 勧進坊・大宮司	楮紙	竪紙	二三・九×二七・八	31		29	封紙(一二四・二×九・四)あり
33	領家勤仕神物社役注文案	(元亀二年)	一五七一	九月十三日	(ナシ)	(ナシ)	楮紙	継紙	二三・八×二〇〇・四	18			巻子装
34	百姓中申状	(元亀二年カ)	一五七一	十二月十七日	百性中	(宛所欠)	楮紙	切紙	一五・七×三八・〇	43	○		
35	安東連続書状	(年未詳)		二月廿九日	連続(花押)	勧進坊 三苫式部少輔	楮紙	切紙	一四・一×三六・八	24			封紙(一四・二×五・八)あり

三苫文書編年目録

＊法量：縦×横、単位はcm。
＊目録：福岡市博物館建設準備室『昭和六十年度収集収蔵品目録3』（一九八八年）所収「三苫重義資料」の通番号を示す。
＊写1：福岡市博物館所蔵、青柳種信関係資料一九六一号「糟屋郡古文書」十六号香椎宮三苫氏所持大友義統感状写に付載された文書目録に所見することを示す。
＊写2：福岡市博物館所蔵、青柳種信関係資料一九六七号「古文書写」所収。番号は福岡市立歴史資料館編集・発行『青柳種信関係資料目録』（一九八六年）の文書番号を示す。

番号	文書名	和暦	西暦	月・日	差出	宛所	紙質	形態	法量	目録	写1	写2	備考
1	大友親治書状	「大永三年」	一五二三	正月廿九日	親治(花押)	三苫新太郎	楮紙	竪紙	二四・一×三五・〇	1		2	封紙(二四・〇×六・〇)あり
2	聖龍書状	(年未詳)		九月廿二日	聖龍(花押)	三苫新太郎	楮紙	継紙	二六・六×五八・六	35		9	封紙(二六・六×五・三)あり
3	大友義鑑書状	「大永五年」	一五二五	正月廿九日	義鑒(花押)	三苫新太郎	楮紙	竪紙	二七・〇×四一・七	2		3	封紙(一九・八×七・二)あり
4	大友義鑑書状写	(年未詳)		三月十二日	義鑒　判	津久見備中守 田北大和守 田口伊賀守 入田丹後守	楮紙	継紙	二七・〇×二八・〇	26		4	封紙(二七・二×七・六)は正文
5	大友氏加判衆連署副状	(年未詳)			常清(花押) 親員(花押) 親忠(花押) 親廉(花押)	大和右衛門大夫	楮紙	折紙	二六・八×四七・四	25		5	
6	野田昭宣書状	「享禄三年」	一五三〇	三月廿一日	昭宣(花押)	三苫	楮紙	小切紙	一四・九×二二・八	3			
7	大友義鑑書状	「享禄五年」	一五三二	正月廿九日	義鑒(花押)	三苫新太郎	楮紙	竪紙	二七・三×三〇・六	4		7	封紙(二七・三×八・七)あり
8	大友義鑑書状写	(年未詳)		正月廿六日	義鑑(花押影)	三苫新太郎	楮紙	端紙	二六・四×三九・〇	21		8	
9	大友義鑑書状写	(年未詳)		正月廿八日	義鑒(花押影)	三苫新太郎	楮紙	端紙	二六・四×三八・九	22		6	
10	饗庭有頼書状	「享禄六年」	一五三三	十二月廿五日	有頼(花押)	三苫式部少輔	楮紙	切紙	一七・九×三四・九	5			
11	大内氏奉行人連署奉書写	天文四年	一五三五	六月七日	丹後権守・大蔵丞・三河前司	(宛所欠)	楮紙	端紙	二四・二×三二・九	6			
12	三苫清宣・同重宣連署坪付写	天文七年	一五三八	九月廿一日	清宣・重宣	(宛所欠)	楮紙	端紙	二四・二×三二・八	未収			13号の後に一紙に写す
13	三苫清宣・同重宣連署坪付写	天文七年	一五三八	拾月十三日	三苫中務少輔清宣・三苫宮内大輔重宣	(ナシ)	楮紙	端紙	——	未収			12号の前に一紙に写す
14	大友義鑑書状写	「天文八年」	一五三九	八月一日	義鑑(花押影)	三苫中務少輔	楮紙	端紙	二六・四×三九・〇	7		10	
15	入田親廉副状	「天文八年」	一五三九	八月一日	親廉(花押)	三苫中務少輔	楮紙	竪紙	二四・〇×三四・一	8		11	封紙(二三・九×九・九)あり

四八　小早川氏家臣連署書状

今度御社領分田数付之儀、被仰聞候之条、付記進上申候之処、右之田員余不足相違之躰御座候付而、至御百性中（マヽ）、向後御社中御大綱御迷惑可罷成之由、種々御口能之旨、被仰聞候、尤之儀候、若従　公儀、事六ヶ敷之儀被仰候者、各罷出御理可申紛（分）之条、御社中御越度罷成間敷候、殊、如前々御社中分諸納所等、乍勿論無沙汰御座有間敷候、為堅捧一通候、恐惶謹言、

七月廿一日　　堀之内三郎右衛門（花押）
天正拾五年丁亥　香椎御一社中　進上　　末述弥十郎（花押）
　　忠仕次郎左衛門（花押）

参考史料

(1)「古文書写」（抄録）

○福岡市博物館所蔵
青柳種信関係資料一九六七号

○香椎宮社職之事、嫡子八郎依大病相煩、当社職・同本地之事、不残段歩、次男六郎譲与云々、於子々孫々、社奉公可勤者也、仍、譲状如件、

大中臣朝臣三苫長門入道善阿

永正十四年丁丑十一月六日

上包
三苫譲状案文

○「古文書写」一号三苫善阿譲状写、番号ハ福岡市立歴史資料館編集・発行『青柳種信関係資料目録』（一九八六年）ニ拠ル、原本所在不明

(2)「糟屋郡古文書」（抄録）

○福岡市博物館所蔵
青柳種信関係資料一九六一号

○香椎宮　三苫氏所持

道雪事、到筑後表越山之条、留守之儀、被仕存候（気）処、其方被残置之由、（「候」脱）攻口同前之辛労令推察候、弥無油断堅固之格護肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

二月廿二日　　義統（花押影）

三苫長門守殿

○天正七、正月十八日　　道雪（花押影）

三苫式部少輔殿

○天正十五年七月十一日　　一社中、田数坪付

○正月廿七日　　統虎

香椎社中

○元亀二、十二月十七日　　ぬまくち
　　百姓中

三苫殿

○大友義統感状写ハ「糟屋郡古文書」一六号トシテ『青柳種信関係資料目録』ニ掲出、原本所在不明、コレトホボ同文ノ大友義統感状ガ（天正十二年）九月二十八日付デ木下掃部助ニ出サレテイル（「木下文書」）、コノ写ノ日付ニ誤リガナケレバ天正十三年ノ発給トナル、コノ義統の花押ハ天正十三年二月二十二日（「柳川新田文書」）マデ使用サレタ

○大友義統感状写ニ付載サレル四点ノ目録ハ、『青柳種信関係資料目録』ニハ記載ガナイ、コノ内、四条目ハ本稿三四号百姓中申状ニ該当スルノデハナカロウカ

以上、弐段一丈、米三斗弐舛五合

（紙継目）

ふしやてん 正月十七日免田
一所壱段大　弐斗五舛　隼人助抱
ミそ、へ
一所大　壱斗　同人
まい木のまへ
一所大　壱斗　同人

以上、三段、米四斗五舛

ふるかわ
一所大　壱斗　孫左衛門抱

以上

も、た
一所一段半　弐斗二舛五合　神三郎抱

以上

くりうち
一所壱段大　三斗　七郎抱
からすた
一所大　壱斗三舛七合　同人
かわら
一所大　壱斗　同人

以上、四段半、米五斗三舛七合

かわら 天神免田
一所壱段　壱斗五舛　新左衛門抱
いれう
一所大　壱斗　かめ
天神の ふしやてん
一所大　壱斗　彦兵衛抱
にれ
一所壱段半　壱斗五舛　同人
山のうら
一所壱段半　弐斗二舛五合　同人
ミとめ
一所壱段　壱斗五舛　同人

以上、四段大、米五斗弐舛五合（マヽ）

（紙継目）

（中欠）

（紙継目）

□□
一所小　□□（五舛カ）　□□（同人）

以上、四段一丈、米五斗九舛七合

つはき
一所壱段大　壱斗六舛七合　三郎抱
も、た
一所小　五舛　同人
いほめ
一所一段半　壱斗五舛　同人
くりうち
一所壱段　壱斗五舛　同人
ひるふさ
一所半　七舛五合　同人

以上、五段、米五斗九舛弐合

おうまち
一所壱段　壱斗　源三郎抱
いれう
一所弐段　三斗　同人
ひるふさ
一所半　七舛五合　同人
（マヽ）くるうち
一所大　壱斗　同人
ミそ、へ
一所半　五舛　同人

以上、四段大、米六斗弐舛五合

おてかはし
一所壱段　新大郎抱（マヽ）
とととと
山かした
一所大　六舛七合　同人
まつもと
一所大　六舛七合　同人
ゑのきまち
一所半　同人
なりくに
一所大　壱斗三舛七合　同人

（紙継目）

（後欠）

四四　大友義統感状

（封紙ウワ書）
「三苫宮内少輔殿　　義統」

従去々年、至好士岳、遂籠城、忠貞之覚悟、殊、去冬以来於立花、令在城、折々軍労之次第、旁以感入候、（戸次）道雪・（木付）鑑実申談、弥可被励馳走事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

（天正八年）十一月廿八日　　義統（花押）

三苫宮内少輔殿

四五　政吉書状

今旦者、於路次少々得御意、過当存候、向後毎事可申談内存候、猶、以面拝万可得尊意候、恐々謹言、

七月十八日　　政吉（花押）

四六　政吉書状

被懸御意忝存候、即、御報可申入候を、堀勝殿御上国之御暇乞ニ参上之故、延引令迷惑候、猶、自是可申入候、恐々謹言、

七月廿七日　　政吉（花押）

四七　香椎宮領坪付注文（断簡）

（前欠）

（紙継目）

とねかうら
一所大　六舛七合　同人

以上、三段大、米三斗四舛弐合

つちあな
一所三段大　五斗五舛　新四郎抱
にれ
一所壱段半　壱斗五舛　同人
あふてき
一所半　七舛五合　同人

以上、五段大、米七斗七舛五合

せいしけ
一所弐段一丈　三斗弐舛三合　清兵衛抱
谷くち
一所大　壱斗　同人
あふてき
一所大　壱斗　同人

以上、三段半、米五斗弐舛三合

おほまち
一所壱段　壱斗　又三郎抱
とねかうら
一所大　壱斗　同人
まい木のまへ
一所壱段　壱斗五舛　同人
にれ
一所大　六舛七合　同人

以上、三段小、米四斗壱舛七合

まい木のまへ
一所壱段大　弐斗五舛　孫兵衛抱
ゑの木まち
一所小　同人
ひるふさ
一所半　七舛五合　同人

不存別儀候、年内之儀既及月迫候条、先以御息御事於御帰宅者、改候而双方之儀具承合、何様可申談候、可御心安候、委細彼御両人江令口上候条、先閣筆候、恐々謹言、

十二月廿四日　　（追筆）「足立対馬守」連安（花押）

三苫長門守殿参御報

四一　由布雪下・小野鎮幸連署書状

（封紙ウワ書）「　小野和泉守
由布美作入道
雪下　」

香椎一社中御報

（端裏）「（切封墨引）」

御札之趣、具令披閲候、然者、山田之郷検断物之儀、新為御寄進、至一社中任御内意差渡申候、就其、足弱親類之者、遂御詫言候之由、至此方茂雖申越候、更代物之儀者、此方両人聊不存候之由申聞候ッ、併、於被成沽却者、可然様、親類江被差遣候而も不苦候哉、自今以後之儀者不存候、各御分別之外有間敷候、尚、期後喜候、恐々謹言、

二月十八日　　（追筆）「由布美作入道」雪下（花押）
（追筆）「小野和泉守」鎮幸（花押）

香椎一社中御報

四二　青木鑑学書状

（封紙ウワ書）「　青木対馬守
□□□参貴報　鑑学　」

（端裏）「（切封墨引）」

追而、五明壱本、得御意候、畏入候、

如御芳翰之、近日ハ無音、誠本懐之外候、併、御同前ニ蒙仰候条、目出候、仍、灯油免儀蒙仰候、如御書面之、従此前渕底存候条、至可真（原田）、斯比以次精申伸候、早々可被成御所務候、其折節、又々可真へ可申述候条、可御心安候、此由可得御意候、恐惶謹言、

（天正二年カ）十月十日　　（追筆）「青木対馬守」鑑学（花押）

御灯坊参貴報

○封紙ノ上部ハ、本紙ノ縦長ニ合ワセ切断サレル

四三　戸次道雪鑑連官途状写

宮内大輔御望之由、必可遂披露候、恐々謹言、

正月十四日　　道雪

三苫三郎殿　　戸次

天正七年

三八　某書状

（端裏）
「（切封墨引）」

返々、御被官同前之者ニ候間、便し度もつかひ事可申候〳〵、必々以面可申述候、

如仰、先日ハ就御書状候、折節他行仕候て、御報さへ不申候、不及是非令申候、然者、借用令申候銀子之儀、今迄無沙汰申候、被仰候事尤存候、殊ニ、当年之儀ハ、日そん仕、爰元之儀しかとこつしきに相定申候、爰元へ逗留仕候ハヽ、何様無沙汰有間敷候、必々以面委可申述候、猶々彼御使へ申入候、恐々謹言、

十一月十五日

三苫式部輔（少脱）殿参
御報

三九　足立連安書状

（封紙ウワ書）
「三苫長門守殿参
御報」

足立対馬守
連安

（端裏）
「（切封墨引）」

御同報為念候、返々令申候、造次等延引申候段、重々百性（マヽ）一雅意之段、不及是非候、対其方申、何様此通可申付候、将又、当秋ハ旅し、被成御出候へ共、無調法之至不及申候、其後無音申候、殊、不寄存候御樽肴送給候、過分之至候、

御懇札之趣、具令披見候、仍、至山田之郷、御催促被仰付候哉、尤存候、当年之儀者、損耗故、百性等迷惑仕候間、然々之御所務有間敷段、致校量候、於某、何篇無沙汰候て不存候、涯分御心長敷御催促可被召候、至百性衆、自是以一人随分可申付覚悟、可安御心候、為御存知候、恐々謹言、

十二月十六日

三苫長門守殿参
御報

（追筆）「足立対馬守」
連安（花押）

四〇　足立連安書状

（封紙ウワ書）
「三苫長門守殿参御報」

足立対馬守
連安

（端裏）
「（切封墨引）」

返々、百姓共前代之姿申旨共候へ共、年内之儀無余日候間、改年、御意之趣申聞、御心閑可申承候、乍勿論不有緩疎候、已上、

追而、山田御社領之儀付而、御細書具令披見候、然者、御納所等依不相調、御息御在郷之由候、余無沙汰申候条、以壱人御礼儀申入候処、被聞召付、御懇之御使畏存候、殊、御所務等之様躰、百姓共一雅意之儀申候哉、不及是非候、先代被仰付砌、相互御一通共御座候由承候条、百姓へ申聞、憲法之旨雖

中きうてん
二月三日、三代之郷松丸名御供米白米六斗三舛、宮舛、もちゐ十弐まい、御ちやうさかしほ八舛、くた物の米六舛、木かよふ、此内とうへひハ三苫とのゟ出候、御供のかわらけ四百六十、座のかわらけ四百六十、松丸名のかいやく、

（紙継目）
同月五日、惣御供米壱石三舛、とうへゐ一双、こちやうさかしほ八舛、にゑまもりのたい者壱斗、二日木かよふ、みそ、しほ、かいしき紙、以上、惣宮政所皆役、弐斗もり二膳、壱斗もり六膳、五舛もり十膳八所、弐舛もりゐんやく、壱舛もり二膳、浜尾くんせい四舛、小神所弐舛、殿上のはかり八舛、けんきうニ弐斗、新入ニ壱斗、宮政所三舛、こしきつけ三舛、かよふ二人壱舛、をひしめし五合、

同月六日、御供米六斗八舛、とうへい一双、なめおかミのたる一ツ、かなのなふらい樽一ツ、みかすたうのミ筋紙、宮政所皆役、木かよふ、御にゑ鯛六こん、みかき六連、あふひ丗五はい、さゝゐ丗五、うに七十五ゐんやく、同瓶一双、もちの米白一斗壱舛、こちやうさかしほ八舛、山のいもすこ弐ツ、ところ三舛、たい〳〵丗五、大豆三舛、小豆三舛、みそ三舛、しほ三舛、はし五束、四十枚きりの紙三ちよう、大こん三束、くしかき一れん、かよふ弐人、薪三十六わ、両家より納候、

同月十五日、御供米六斗三舛、もちゐ十弐枚、とう瓶一双、こちやうさかしほ八舛、くた物の米六舛、はし五束、四十枚きりの紙二帖、薪三十六わ、たい〳〵七十五、大こん弐そく、ところ三舛、同八ヶ座（紙継目）社役有之、三代之郷松丸かいやく、

中きうてん
四月十七日、大宮司とのよりかいやくなり、

五月五日、山田之郷御供米壱石、請取五斗八舛、宮政所ゟ御ちやうさかしほ八舛、原上之郷より小豆壱斗、むめすこ一ツ、ひわすこ一ツ、竹の子三十五わ、かよふ一人、八ツのくさひ、

七月七日、御神事、さうめん宮政所より、こゝろふとすこ五ツあひの嶋より、うり・なすひ三苫之郷ゟ納候、

八月十五日、御供米六斗八舛、とうへい一さう、こちやうさかしほ八舛、はし・かミ・みそ・しほ、和しろ郷より、もちの米白壱斗一舛、八ツのくさひ、木かよふ弐人、

九月九日、御供米六斗八舛、とうへい一双、こちやうさかしほ八舛、ミそ・しほ・はし・紙、宮政所、此分ハ山田之郷、もちの米白壱斗一舛、八ツのくさひ、薪丗六わ、かよふ弐人、

十月十五日、惣御供米六斗八舛、とうへい、餅米壱斗一舛、こちやうさかしほ八舛、木かよふ、宮政所かいやく、

霜月五日、御供米壱石三舛、宮舛、同瓶一双、木かよふ、にゑまもりのたい者何も二月五日同前、

（紙継目）
同月六日、惣御供米六斗八舛、とうへい一さう、こちやうさかしほ八舛、二月六日同前勤候、木かよふハ多々良之郷ゟ出候、たい六こん、みかき六れん、あわひ三十五はい、さゝゐ三十五、五うに七十五（合点、或イハ抹消符号カ）、三苫とのより出候、

十二月廿九日、御供米白六斗三舛、宮舛、もちの米白壱斗一舛、こちやうさかしほ八■舛、たい〳〵三十五、紙・はし・みそ・しほ・木かよふ、いつれも三苫（合点、或イハ抹消符号カ）とのよりかいやく、くハし四ツ、とうへい壱双、大宮司とのより、

正月一日、御かゝみ六枚参候、

御神事之時、もち壱斗一舛、此内壱舛ハあれめし、四舛つき三枚、三舛つき弐枚、宮政所へ三ツ、ほたけニ三ツ、けんきうニ一ツ、両かよふニ一ツ、

元亀四年十二月廿一日

安東紀伊介殿参御宿所

三苫三ヶ村之立柄預御尋候、於彼郷、御神領歴々御座候、其外勤候社役等、多々有之儀候、殊、海上之事、従往古社領無紛候、就夫、社家政所之御事ニ候之条、従前々郡役御存知之儀無其隠候、聊小田部方所勘之分、近年不入之執沙汰共御座候、右之申事、当社茂御知見之前、聊非偽候、恐々謹言、

三月廿八日　（紙継目）　三苫式部少輔　鎮宣（花押）

勧進坊　良秀（花押）
遍照院　良意（花押）
御灯坊　勢円（花押）
座主坊　良因（花押）
香椎大宮司　氏永（花押）

安東紀伊介殿
田尻河内入道殿
吉木加賀入道殿
参御宿所

三七　香椎宮神事用途注文案

（端裏書、朱書）
「香椎
郡宗
（以下、端裏書読メズ）
（天明六年）丙午十一月一日見合□、

午ノ閏十月廿二日写了、
忠次殿
（前欠）
皆役、六膳八九舛（もカ）□
十膳壱舛もり、はまおぐんせひ四舛、殿上のはかり八舛、小神前弐舛、けんきう壱斗八舛、新入九舛、宮政所弐舛五合、こしきつけ弐舛五合、かよふ二人一舛、をひしめし五合、
同月六日、六斗三舛、宮舛、もち米白米壱斗一舛、とうへい一双、こちやうさかしほ八舛、八ツのくさゐ、はし五束、四十まいきりの紙二ちよう、薪三十六わ、かよふ二人、清との方皆役、
同月七日、惣御供米六斗八舛、もち米白米壱斗一舛、木かよふ、八ツのくさゐ、上下苻よりとうへい一双、かい敷かミ、みそ、しほ、はし、惣御供米内より御供のめしはかり、惣御供同前、
同月十五日、御かゆうの米壱斗、惣御供米小豆五舛、立花口きうはく方八ツのくさゐ、○八三代之郷（木かよふ）より出候、
同月十六日（朔やう）、ふしやの神事、惣御供米六斗　（紙継目）　八舛、とうへい一双、ミそ、しほ、紙、はし、惣御供米より、木かよふ、もち十弐まい、八ツの供菜（くさい）、新張より出候、
同月廿日、御供米七斗三舛、もちの米白米壱斗一升、とうへい一さう、こちやうさかしほ八舛、八ツの供菜（くさい）、ミそ壱舛、しほ一舛、はし五束、へいかミ、かい敷かミ、かよふ両人、薪三十六わ、以上、三苫とのよりかいやく、六膳壱斗もり十膳、五舛もり八所、弐舛もりゐんやく、壱舛もり弐膳、はまおくんせい四舛、小神所弐舛、殿上のはかり八舛、けんきうニ弐斗、新入ニ壱斗、宮政所ニ三舛、こしきつけ三舛、かよふ両人ニ壱舛、おひしめし五合、

舛請取之、
一、於和しろ之郷、清料百文、つのりとして定使請取之、
一、於八田之郷、米弐斗六舛、定使請取之、
九月十三日
（後欠）

（紙継目）

（五紙目紙背）
「右之御神物・同御社役等之儀、従前々領家為御役、御勤候目録如件、
元亀弐年九月十四日　」

三四　百姓中申状

（端裏）
「（切封墨引）」

返々、爰許郷内躰、御使見られ候様、悉はうし申入仕候間、為御心得申候、
御書状趣、具拝見申候、仍、きやうせん米儀、蒙仰候、当年之儀ハ数年御弓矢砌候間、悉ク不作仕、就其、御土貢めいわく仕候て、多分百性（マヽ）中他出仕候、社家分両人罷居候、御神慮之儀候間、銀子五（八）文め（と）、彼御使渡申候、於後年、郷中調候ハヽ、御社米之儀候間、ふさたあるましく候、恐々謹言、
（元亀二年カ）
十二月十七日　　百性中
（後欠）

○福岡市博物館所蔵、青柳種信関係資料一九六一号「糟屋郡古文書」十六号香椎宮三苫氏所持（天正十三年）二月二十二日付三苫長門守宛大友義統感状写ニ付載サレタ文書目録ノ中ニ「○元亀二十二月十七日　ぬまくち百姓中ゟ三苫殿」ノ記載アリ、本文書ハコレニ該当スルカ、後掲参考史料(2)

三五　安東連続書状

（封紙ウワ書）
「三苫式部少輔殿　　安東伊賀守
勧進坊　御報　　連続」

就御神物之儀、預貴札候、巨細令披閲候、尤候、旧冬以来如形も致御調度候処、諸郷調等無然候歟、心外御義（儀）候、無是非存候、必御かゝふと御少年御替名之儀者、今年中可致調候、就中、御たゝミの事ハ、来中旬之比者、可遂社納様、為御存知候、恐々謹言、
二月廿九日　　（追筆）「安東伊賀守」連続（花押）
勧進坊
三苫式部少輔殿御報

三六　香椎一社中連署書状

（封紙ウワ書）
「吉木加賀入道殿　　香椎一社中
田尻河内入道殿　　鎮宣
とゝとゝとゝとゝ」

一、御ゆかの半畳、ふたへり
一、礼盤のたゝミ二、ふたへり
一、供僧座さまの紙一そく
一、正月一日、印鑰へ御かゝミ一かさね、同樽壱双、同燈明、　修理行事取続之、
同日、御供米、ミや舛にて弐舛、是ハ節会ことに納候、御供送候時、かゝミ一かさね、
一、正月五日、御吉書の札送申候時、かゝミ一重、同釿立之事、あての木弐本、けつりそめの木二本、大工衆・寄行事・修理行事・池田之郷散使、此衆酒飯在之、ようとうの時ハ膳料壱貫文目、
一、同月七日、白馬御神事、馬壱疋（同舎人）、秣の米、白米弐舛、白馬催促之時、至寄行事、かゝミ一かさね、
一、同月十一日、樽五、肴一折（めはる、）、検校（左伶請取之）
一、同月十二日、御修正（印餅・大餅同灯明）
（紙継目）
一、同月十三日、踏哥御神事、鏡一重、新入請取之、
一、正月十六日、歩射の札木、ひわのこう壱まい、的ノちやうなか五十丁、同絵の具米壱斗、おこし炭一俵、樽一双、めはる一折、
一、同月廿日、心経会、布施物之、
一、二月六日、御神事、贄請取候時、（神人衆）酒肴在、
一、とうへいの樽四ツ、同大工清鑽の時、樽一双之事、
一、二月六日、御贄、一、鯛六こん、一、鮒六れん、
一、蛸三十五、栄螺三十五、うに七十五
一、鯛六こん
一、鮒六れん
（紙継目）
一、さゝゐ三十五
一、うに七十五
一、あわひ三十五
一、やまのいもすこ弐
一、ところ三舛
一、たい〳〵三十五
一、くしのかき二れん
一、かいしきのかミ四十枚きり一帖
一、ひらきの大豆三舛
一、小豆三舛
一、みそ三舛、しほ三舛
一、大根三そく
一、はし五そく
一、もちいの米、白米壱斗壱舛
（紙継目）
一、たんこの米八舛
一、さかしほの米■（参）舛
一、牛腸、白米五舛
一、たきもの三十五把
一、■■（かよ）う二人
右之前、検校・（左伶請）請取之取之、
一、八月十三日、御社役之事、
一、印鑰社造営之事、
一、於山田之郷つのりとして米五斗二舛、左ノ伶仁請取之、同定使米弐斗六（三斗）舛請取之、
一、於多々良之郷つのりとして米五斗六（二）舛、右ノ伶人請取之、定使米弐斗六

三一　吉弘鑑理書状

（封紙ウワ書）
「
香椎
社中衆
御報

吉弘左近大夫
鑑理」

（端裏）
「（切封墨引）」

就在陳之儀、御祈念之巻数并樽肴送給候、御懇情之至候、此表之事、倍属　御案中候条、社中衆早速以帰郷、御神慮可有崇敬才覚専一候、鑑理方分之首尾、殊、　御下知之旨候之間、御造営等一両年中相調候様、申談馳走不可有緩候、猶、御使僧可被申候、恐々謹言、

（永禄十二年）
十二月三日

（追筆）「吉弘左京太夫」近
鑑理（花押）

香椎
社中衆
御報

三二　戸次鑑連書状

（封紙ウワ書）
「
大宮司殿
勧進坊
三苫式部少輔殿　御報

戸次伯耆守
鑑連
」

立花西御城督之儀、蒙仰候、然者、一社中為祝儀、巻数一朶、並酒肴送給候、祝着之至候、猶、期来喜令省略候、恐々謹言、

（元亀二年）
七月廿九日

三苫式部少輔殿
勧進坊
大宮司殿　御報

鑑連（花押）

三三　領家勤仕神物社役注文案

（端裏書、朱書）
「香椎

『即不志』（青書）
（天明六年）
午閏十月廿四日写了
（以下、端裏書読メズ）
□□
香椎□□
」

従領家御勤候御神物・同社役之事

一、からかね御供御鉢大小数十九
一、からかね御瓶子壱双
一、御はん廿二
一、御供うちおいのきぬ
一、御供御からうと　二かう
一、御供の御ふね壱
一、まないた弐、なかさ七尺、あつさ八寸
一、もりいた壱
一、御神物からうと二
一、御神物入物緒のかハの事
一、御内殿のたゝミ（ふたへり、上ハにしき下ハきぬなり）……（紙継目）……

追而、樽肴送給候、大慶之至候〳〵、
御札具令披閲候、仍、神領九町分之儀、為新祈(寄)進返遣候、郡役其外之儀者、
如前々、従此方可申付候、為御存知候、猶、高左京亮可申候、恐々謹言、

八月十七日　　(追筆)「臼杵新介」
香椎一社中御報　　鎮賡（花押）

二八　高賡家副状

(封紙ウワ書)「
香椎一社中　　高左京亮
参御報　　賡家　」

(端裏)「（切封墨引）」

追而、御樽肴送給、畏入候、
就御社領之儀、両度預御音札候、具至(臼杵)鎮賡申聞候処、被致分別候、目出度候、
我々茂如此脇者其表可罷越間、以面上可申達候、恐々謹言、

八月十七日　　(追筆)「高左京亮」
香椎一社中参御報　　賡家（花押）

二九　臼杵鎮勝・高賡家連署書状

(封紙ウワ書)「
香椎一社中　　臼杵刑部少輔
高左京亮
鎮勝」

態用一書候、就御社領之儀、至両人数度承候、其儀申候処、于今致一着、目
出度存候、就夫、従一社中一折被進候歟、此様成題目致一着候へハ、聴而御
調候て社、能々如何候、于今延引候、急度御調無申迄候事候、恐々謹言、

九月二日　　(追筆)「臼杵刑部少輔」
鎮勝（花押）
(追筆)「高左京亮」
続家（花押）

香椎一社中

三〇　怒留湯融泉直方奉書写

山田社米之事、鑑種(高橋)押領之内、百姓無道之事、去年迄之儀者、此方就意見可
差捨之由可然候、従当年乱入之内者、可為半納候、御静謐候者、如前々稠敷
被申閉目、可有拝領候、自然、下役・同百姓申掠事候者、政所江子細承、正路
之拵別儀有間敷之状、執達如件、

永禄十年
十二月十八日
三苫式部太輔殿

融泉（花押影）
怒留湯長門入道融泉也

三苫分就屋敷儀、両方以目安被申候、彼屋敷依為質券之内、一万田方対和泉守扶持之由聞之候、さてハ従善次方、今程ハ無被申事候哉、雖然、質券過半返進候、同香椎郷内社家屋敷分返進之由、於当城(立花城)申渡候之間、此砌、和泉守方も無異儀被申談候て可然之由申候之処、則、以分別有光屋敷事、融泉可為存分之儘候、別所屋敷之事ハ、今ノ分致所勘度之由被申候、何共可然候、さてハ有光ニ少まるめ、至其方付進之候、然者、質券之内三苫分可有之候之間、悉至社家還補之砌ハ、三苫分之事ハ、田地毛頭無別儀、一万田方如被定置、半分ッ、無異儀可有所勘候、為後日、融泉又注置候、恐々謹言、

永禄六年
十月廿九日　　融泉（花押）

三苫善次殿

二五　怒留湯融泉直方書状案

（封紙ウワ書）
「『上』（押紙）

三苫三郎方へ之御一通案文」

（端裏書）
「　三苫三郎方へ之御一通案文」

別所屋敷之事ハ、如今無相違可被相抱候、
三苫分就屋敷之儀、両方以目安被申候、彼有光屋敷事、融泉可為存分儘之由被申候、則、至善次(三苫)方付遣候、一入志候、然者、三苫分之内杉山田壱反、至其方進之候、後日質券悉還補之砌者、一万田方如被定置、田地毛頭無別儀、半分ッ、可進候、為後日、融泉至両方書注進置候、恐々謹言、

永禄六年
十月廿九日　　融泉在御判

三苫三郎殿

為後日候之間、御一通案文ニ
判形仕進之候、

原藤左京亮　方種（花押）
甲斐左馬助　家増（花押）
田原刑部丞　親勝（花押）
田尻弾正忠　方明（花押）

二六　臼杵鎮賡書状

御懇札畏入候、仍、原上社領之儀承候、得其意候、弥御社役等之儀無緩可申付候、聊不可有疎意候、猶、期来喜令省略候、恐々謹言、

七月廿六日　　鎮賡（花押）

香椎宮一社中
御報

二七　臼杵鎮賡書状

（封紙ウワ書）
「

香椎一社中
御報

臼杵新介
鎮賡　」

二一　豊饒鑑冨書状

（封紙ウワ書）
「『永禄四年』（追筆）
三苫善次殿まいる
御報

豊饒中務少輔
鑑冨
」

（端裏）
「（切封墨引）」

返々、御祈禱之巻数忝被申候、弥御祈念之事、頼上存候〳〵、
如御札、未申通候、仍、三代之内御社領ふしやう町壱町之内五反分之事、至
宝積寺質券地候処、此前至（豊饒）鑑述依御口能、被致分別候由、蒙仰、存其旨候、
随而、至鎮冨所、御樽殊、巻数被懸御意候、祝着之段、御報被申候、於私も
御樽十送給候、忝存候、尚、連々可申承候、可得御意候、恐々謹言、

三月拾日　　鑑冨（花押）

三苫善次殿
まいる御報

二二　豊饒鎮冨書状

（封紙ウワ書）
「『永禄四年』（追筆）
三苫善次殿　御報

豊饒孫三郎
鎮冨
」

御札令披閲候、仍、三代之郷ふしやう町之内五反分、　於宝積寺質券之地之
事、（怒留湯直方）長門守を以、祖父至美（鑑述）濃守、御口能候歟、分別之由承候、得其心候、然
上者、御祈念之事不及申候、随而、巻数一枝并御樽被懸御意候、如注文到来
候、目出度候、尚、重々可申承候、恐々謹言、

三月拾日　　鎮冨（花押）

三苫善次殿
御報

○福岡市博物館架蔵写真帳（一九八〇年、三苫重義氏蔵本ヲ吉良国光氏撮影）ニ本文書ノ写アリ、コノ写ハ宛所ノ上部ニ「此書判ハ自筆ニアラス、今ノ印ノ如ク、木ニ彫タルヲ捺シタリ、又、天文八年八月入田親廉ヨリ三苫中務少輔ニ充タル書モ亦彫タル書判ナリ、此頃ヨリ印判ハ初リシナランカ」トノ注記アリ、前掲一五号入田親廉副状ト同様ニ、花押ハ花押印ガ捺サレテイル

二三　奈多鑑基書状写

就　御進発、御祈念之巻数并御樋肴　御進上尤存候、則、令披露候、御祈念之
事、弥御油断有間敷候、於私、樽肴送給候、大慶存候、精者、重々可申候条、
不能書載候、恐々謹言、

永禄五
二月廿三日　　奈多
鑑基（花押影）

三苫善次殿
御報

二四　怒留湯融泉直方書状

（封紙ウワ書）
「

怒留湯長門入道
融泉」

三苫善次殿

一七　大友義鑑書状

（封紙ウワ書）
「『天文十年』（追筆）
三苫中務少輔殿　　義鑑」

為当年之儀、巻数并樽以下、以注文送給候、祝着候、猶、入田丹後守（親廉）可申候、
恐々謹言、

二月三日　　義鑑（花押）
三苫中務少輔（清宣）殿

一八　怒留湯直方書状

（封紙ウワ書）
「『永禄貳』（追筆）
香椎一社中　　怒留湯長門守
直方」

今度就牢人（筑紫惟門）現形ニ、社家衆一味同心ニ従最前以籠城、度々防戦被疵、御忠儀之段、無比類候、然者、直方存知之郡之内百町、涯分御取合可申候、自然無然々候者、当時相抱堅見分可返進候、後日之為壱通ニ令申候、恐々謹言、

卯月廿九日　　直方（花押）
香椎一社中

一九　怒留湯直方書状

（封紙ウワ書）
「香椎一社中　　直方」

御社頭大破之条、至社中徳政之儀、被成　御下知候、弥社奉公不可有御油断候、恐々謹言、

（永禄二年カ）十月五日　　直方（花押）
香椎一社中

二〇　怒留湯鑑貞書状

（封紙ウワ書）
「香椎一社中御報　　怒留湯主殿助
鑑貞」

今度親候者以御同心、長々御籠城、御辛労察申候、殊、御社内御大破之由承候、令推察候、直方（怒留湯）上国候条、可被申上候、折々之儀不可有無沙汰候、急便候条、先閣筆候、恐々謹言、

十一月十一日　　（追筆）「怒留湯主殿助」
鑑貞（花押）
香椎一社中御報

一三　三苫清宣・同重宣連署坪付写

若宮御灯分坪付之事

当知行、五町大

天文七年拾月十三日　　三苫中務少輔　清宣
　　三苫宮内大輔　重宣

三苫宮内大輔預り

○冊子ノ端紙ニ一二号トトモニ写ス、一二号ノ前ニ記ス

一四　大友義鑑書状写

為社職安堵之祝儀、巻数并太刀一腰・鳥目・樽肴送給候、祝着候、従是茂一振被進(マヽ)之候、猶、入田丹後守(親廉)可申候、恐々謹言、

天文八年　八月一日　　義鑑（花押影）

三苫中務少輔(清宣)殿

一五　入田親廉副状

（封紙ウワ書）「『天文八』（追筆）

三苫仲務(マヽ)少輔殿　　入田
御報　　親廉」

為社職御安堵之御祝儀、種々御進上之趣、令披露候之処、御祝着之段、即被仰遣候之条、珎重候、仍、御巻数并樒貳肴両種送給候、快然候、将又、鳥目百疋被懸御意候、御丁寧之儀、不及申候、恐々謹言、

（追筆）「天文八年」
八月一日　　親廉（花押）

三苫中務少輔殿
御報

○花押ハ、手書キニアラズ、花押印ヲ捺シタモノ

一六　豊饒永源書状

（封紙ウワ書）「『天文八』（追筆）

豊饒美作入道
香椎　社中まいる御報　　永源」

就三代御還附之儀、為御祝儀、樒十練送給候、祝着之至候、猶、彼使僧可被申達之条、令省略候、恐々謹言、

八月廿二日　　永源（花押）

三苫中務(清宣)少輔殿
三苫宮内(重宣)太輔殿

勧進坊　まいる　□(御)報

九　大友義鑑書状写

為今年之儀、棰肴以注文到来、悦入候、猶、津久見備中守(常清)可申候、恐々謹言、

正月廿八日　　義鑒（花押影）

三苫新太郎殿

一〇　饗庭有頼書状

（端裏）「（切封墨引）」

追而、塩入之事、至御使令申候之条、可被得御意候、殊、度預御尋候へ共、無礼失面目候、必歳暮之儀、可申伸候、

三苫郷之内、御社領三ヶ所之儀、依御意、去春以来至百姓衆申理之事、定而可有御存知候、就中、石王丸之儀、所務之事、落着已前者、至双方、馳走仕間敷之由、■(堅)申渡候、御催促候ハヽ、以其上可致一着候哉、従此方茂昨日山崎玄蕃方雇進入候、右之内両所之儀、任侘言之旨、御分別所仰候、猶、用口上候、恐々謹言、

（追筆）「享禄六年」(マヽ)

十二月廿五日　　（追筆）「饗庭又七郎」　有頼（花押）

三苫式部少輔殿参御報

一一　大内氏奉行人連署奉書写

（前欠）

言上之、因茲、課書之事、両方以類判之経衆許候処、已譲状類判四通帯明白也、所謂、右旨趣雖多枝葉候、対清宣(三苫)相続無之、匠作(マヽ)匠作裁許之事、被寄置畢、述重於譲状者、炳然也、但、対房宣与奪状雖無之、云由緒、云先証、不及猶予者乎、仍之、付沙汰於房宣畢者、件両職事令執沙汰、於社役以下者、可守先例之由、依仰執達如件、

天文四年
六月七日

（宛所欠）

丹後権守（吉見頼郷）
大蔵丞（沼間）
三河前司（杉興重）

一二　三苫清宣・同重宣連署坪付写

三苫分半分坪付之事

池田郷の内

杉山田やくし所
一所半

同所かきそへ
一所大

以上、八町(マヽ)

天文七年つちのへいぬ　清宣
九月廿一日　　重宣

（宛所欠）

○冊子ノ端紙ニ一三号トトモニ写ス、一三号ノ次ニ記ス

○コノ写デハ、一ツ書キヲ一行ニ記スモ、原本ノ形態ヲ推測シテ改メタ

○封紙ハ正文、封紙ノ簀ノ目、横方向ニ走ル、或イハ端裏書ヵ

五　大友氏加判衆連署副状

香椎郷内三苫職三十貳町分并若宮御灯職事、至新(三苫)太郎、御還附之段、被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

三月十二日

常清(津久見)（花押）
親員(田北)（花押）
親忠(田口)（花押）
親廉(入田)（花押）

大和右衛門大夫殿

「(奥ウワ書)
入田丹後守
田口伊賀守
田北大和守
津久見備中守」

○福岡市博物館架蔵写真帳（一九八〇年、三苫重義氏蔵本ヲ吉良国光氏撮影）ニ本文書ノ写アリ、コノ写ハ宛所ノ下ニ「此名当ノ間、甚タ広シ、今紙ノ都合ニ依リテ当名ヲ近附、又此本紙ハ奉書二ツ折リ也」トノ注記アリ
○折紙ノ奥ウワ書部分ハ、切リ取リ反転サセテ元ノ位置ニ収メル

六　野田昭宣書状

御奉書相調候間、与一方へ渡進入候、此間長々御在国候て、御案(安)堵目出候、先々相応之義(儀)、不可有無沙汰之儀候、恐々謹言、

三月廿一日

昭宣（花押）
「(追筆)野田安芸守」

三苫殿
まいる　御宿所

七　大友義鑑書状

「(封紙ウワ書)『享禄五年』(追筆)

三苫新□□□(太郎殿)

為今年祝儀、樽以下到来、祝着候、猶、津久見備中(常清)守可申候、恐々謹言、

正月廿九日

義鑒（花押）

三苫新太郎殿

「(追筆)享禄三年」

義鑒

八　大友義鑑書状写

為今年之儀、樽已下給候、快悦候、猶、津久見備中(常清)守可申候、恐々謹言、

正月廿六日

義鑑(鑒)（花押影）

三苫新太郎殿

一　大友親治書状

（封紙ウワ書）
「上　三苦新太郎殿　　親治」

今年之慶詞珎重候、仍、樝已下到来、令悦喜候、尚、豊饒常陸介可申候、恐々謹言、

（追筆）
「大永三年」
正月廿九日　　親治（花押）

三苦新太郎殿

二　聖龍書状

（封紙ウワ書）
「三苦新太郎殿御返報　　聖龍」

御状披見申候了、新三昧御社領之事、右並（小原）様御存知之由候而、渡辺五郎兵衛方知行候、無其蔵候、必仰被（マヽ）談、御知行肝要候、若内々儀共、無御存知候者、重而可預示候、不可有無沙汰候、就中、饗膳之事承候、田分ニ所務（紙継目）なク候時者、社役者社領より可召候、寺役者従寺領仕（可）候、御分別前候、恐惶謹言、

九月廿二日　　聖龍（花押）

三■（苦）新太郎殿
御返報

○二紙目ハ礼紙

三　大友義鑑書状

（封紙ウワ書）
「『大永四年』（五と）（追筆）
三苦新太郎殿　　□□（義鑒）」

為今年之儀、樽以下到来、令悦喜候、猶、本庄伊賀守可申候、恐々謹言、

正月廿九日　　義鑒（花押）

三苦新太郎殿

四　大友義鑑書状写

（封紙ウワ書）
「（墨引）
入田丹□（後）守殿
津久見□（備）中守殿　　義鑒
」

上書　入田丹後守殿
津久刀（マヽ）、、殿　　義鑒（紙継目）

三苦職事、至新太郎（三苦）還附之段、可被申聞候、恐々謹言、

三月十二日　　義鑒　判

津久見備中守殿
田北大和守殿
田口伊賀守殿
入田丹後守殿

を務めたといわれるが、立花氏の関係文書は伝存しない。怒留湯直方(法名融泉)は永禄初年、立花鑑載の加勢として新たに派遣され、『筑前国続風土記』巻二十七「立花山古城」によると、直方は本城の西方にある白岳に在城したとされる。鑑載と直方は、戦闘に際しては共同して出陣しているが、香椎宮に対して両名がどのように支配の権限を分掌したのか不明である。直方は、一八・一九号において香椎宮領の還補や、社頭大破につき大友氏が命じた社中徳政を取り次いでいる。四一号では、香椎宮領の検断物の処分を戸次鑑連の被官が行っており、城督の検断権の存在を示している。二四号では、三苫一族内における所領相論の裁決を立花城において申し渡したことが述べられ、城督の裁判権の一端を窺わせる。また、大友氏は立花城督とは別に香椎代官を置いて香椎の直轄領を支配したが、五号は、大友氏加判衆が香椎代官大和氏に対して、三苫新太郎に香椎郷内三苫職三十二町分等が還付されたことを報じたものである。

受給者は、三苫氏単独と香椎一社中(祠官連名)とに大別される。前述したように、本文書の大半は親宣の次男清宣系統の文書群であるが、二一～二四号は親宣の長男重宣の息基宣(善次)宛文書である。これは二四・二五号にみられる三苫分屋敷をめぐる両系統の相論の関係で流入したものであろうか。三苫氏の所領・所職は、香椎郷内三苫職分三十二町・若宮御灯職(四・五号)、三代郷内ふしやう町五反(二一・二二号)、三苫分屋敷(二四・二五号)等が知られる。三三号領家勤仕神物社役注文案・三七号香椎宮神事用途注文案は、戦国期における香椎宮の年中行事、および宮領内の諸郷の負担の在り方を示している。戦国期の香椎宮は、しばしば戦乱に巻き込まれて罹災し、祠官は立花城等に籠城して戦闘に参加した(一八・二〇・四四号)。高橋鑑種の挙兵によって、山田郷(粕屋郡久山町)の社米を百姓が対捍し、怒留湯融泉(直方)により便宜的に「半納」の措置が採られている(三〇号)。三四・三五・三九・四〇号は百姓の年貢対捍に関する内容で、宮領の経営が円滑にすすまなかったこと、あるいは、戦乱や損毛を理由に抵抗をみせる村落の動向等が窺える。

【凡　例】

一　配列は編年順である。無年号文書も年次を比定し、適宜該当箇所に収めた。推定した年次は日付の右傍に記した。記載がないものは、年未詳であることを示す。

一　原則として、新字体を用いた。変体仮名は旧仮名を用いた。但し、助詞に用いられた変体仮名はそのまま残し、「者」以外は級数を落とした。使用した変体仮名・異体字は左記の通りである。

江(え)・尓(に)・者(は)・茂(も)

与(より)・椎(樽)・珎(珍)・苻(府)・勲(勤)

一　字配りは、原本の記載通りではない。追而書については、上段および本文中の行間に記されたものについても、一括して本文の前に配置した。

一　校訂注は〔　〕、その他の事項についての傍注は(　)を用いた。

一　語句に誤りがあるか、もしくは解し難い箇所や衍字は、右傍に(マヽ)と付した。

一　脱文・蠹蝕は、字数を推定して□を用いた。字数の推定ができない場合は、□□で示した。原文の抹消について、判読できない文字は■、読み得る文字は該当する文字の左傍にヽヽを加えて、右傍に書き改められた文字を記した。

一　注記は各文書毎に適宜記し、本文の後に掲げた。本文と区別するために、級数を落とし、漢字・片仮名交じりで表記した。

一　通番号は、後掲「三苫文書編年目録」の最上段の番号と一致する。各文書の紙質・形態・法量等はここに記した。

目録」に示した。東京大学史料編纂所架蔵影写本「三苫文書」(架蔵番号：三〇七一・九一―五五)は、一九一六年、三苫重種氏の所蔵時に四十六点を影写したものである。

福岡市博物館の所蔵状況は、福岡市博物館建設準備室編集『昭和六十年度収集収蔵品目録3』(福岡市教育委員会発行、一九八八年)に示され、三苫重義資料として四十五点を掲げている。ただし、本稿で翻刻する一二・一三・四三号は記載洩れで、所蔵文書の合計は四十七件四十八通となる。原本は三十五通、案文は三通で、残りの九件十通は写である。これら写の原本は伝存しないので、原本同様に重要である。四号以外の写は元来、書冊であったものを一枚ずつばらしたもので、筆跡や料紙の大きさ・紙質から二種類の写本があったことが窺える。一一・一二・一三・四三号と八・九・一四・二三・三〇号とに分かれる。

三苫文書に関する目録は、福岡市博物館に所蔵される以前から刊行されてきた。竹内理三「筑前の古文書(一)」(『九州文化史研究所紀要』五号、一九五六年)は前述した東京大学史料編纂所の影写本に基づいて四十四点を掲げている。『福岡県文化会館所蔵福岡県近世文書目録』第三集(福岡県文化会館、一九七三年)は中世史料四十七点の他、近世史料十九点も紹介する。その他、『福岡市歴史資料所在確認調査報告書』(福岡市立歴史資料館、一九八二年)に四十四点、福岡市教育委員会編集・発行『福岡市の文化財(書跡・典籍・古文書)』(一九八六年)に福岡市の有形文化財に指定された四十五点、広渡正利『香椎宮史』(文献出版、一九九七年)に四十六点、をそれぞれ記載する。

公刊は、近年、中世文書がまとまって前掲広渡正利『香椎宮史』によってなされている。編年史料の部に適宜収める他、森山みどり氏の校訂により附録「香椎大宮司　大中臣氏三苫家文書」として中世文書四十六点を一括して翻刻する。ただし、福岡県立図書館架蔵のマイクロ複写からの翻刻であるためか、写を正文として扱う等利用に際し種々問題を有している。森山氏には別に三苫文書を紹介した「三苫文書について」(『地方史ふくおか』九二、一九九五年)がある。部分的には、一九八二年に刊行された『神道大系』神社編四十四(神道大系編纂会)に、三三・三七号が「従領家御勤候御神物同御社役之事」「香椎宮年中御膳所目録」と題して収録されている。北村慶子「香椎宮と三苫文書について」(『神道大系月報』二五、一九八二年)は、これらを素材に社役や年中行事の概説を行っている。

二　内容

文書の残存状況は、戦国期における三苫氏および香椎宮の在り方をよく示している。発給者毎にみると、大友氏関係で四十八通中三十四通を占め、大友氏以外では、大内氏・小早川氏が各一通、香椎宮関係六通となっている。発給者に即せば、大友氏関係史料と言えよう。大友氏は鎌倉後期に豊後守護として香椎の石築地役・異国警固番役を分担し、このことを契機として香椎社領が大友氏の所領となったと考えられる。「大友文書」貞治三年(一三六四)二月付大友氏時当知行所領所職注進状案に「筑前国香椎社付諸郷」、同文書永徳三年(一三八三)七月十八日付大友親世当知行所領所職注文案にも同様に「筑前国香椎社領付諸郷」とみえる。南北朝期の初めには香椎の後背地に立花城が築かれている。室町・戦国期には少弐氏・大内氏が筑前守護を務めたが、その間においても香椎の領有は継続し、志摩郡・博多息浜とともに大友氏の筑前支配の拠点となった。

大友氏当主の発給文書は九通あり、三苫職を還補した四号、籠城の軍功を賞した四四号以外は、進物到来に対する礼状である。大友氏の家臣では、とくに筑前支配上の軍事拠点であった立花城督とのつながりが深い。怒留湯氏六通、戸次氏六通がある。立花城は大友貞載の築城以来、代々立花氏が城督

〈史料紹介〉

福岡市博物館所蔵「三苫文書」

堀本一繁

一　概要

三苫文書は、香椎宮(福岡市東区香椎所在)の旧社家三苫家に伝来した戦国期を中心とする文書群である。一九八二年三月一日に中世文書四十五点が福岡市の有形文化財に指定されている。これらは一九八六年、三苫重義氏から福岡市博物館に寄贈され、現在、同館の所蔵である。近世・近代文書、および、寄贈された中世文書原本と重複する写は、三苫氏の手許に残されている。本稿で翻刻紹介するのは、福岡市博物館が所蔵する中世文書群である。

三苫氏は、代々香椎宮の神官を務め、本姓を大中臣氏と称し、筑前国粕屋郡三苫郷(福岡市東区三苫)を名字の地とする。伊藤常足『太宰管内志』筑前之九「香椎廟」の項には、「大中臣朝臣、此家を世々三苫氏と称す、今両家あり、共に権大宮司に任ず、古は四党の其一にして世々大宮司たり」とある。参考史料(1)として掲げた永正十四年(一五一七)十一月六日付三苫善阿(親宣)譲状写において、嫡子八郎の大病につき次男六郎に社職・本地が譲与されているように、戦国期にも一時期、三苫氏は両家に分立した。本稿で翻刻する三苫文書は、次男清宣の系統、すなわち、清宣(六郎・新太郎・中務大輔)―鎮宣(三郎・式部少輔・長門守)―鎮栄(三郎・宮内少輔)の三代に関する史料である。

中世以前の香椎宮に関する史料は、その由緒の古さに比すれば、極めて乏少と言わざるをえない。このような残存状況において、戦国期に限定されるが、三苫文書に中世史料がまとまって伝存していることは貴重である。この他の香椎宮関係史料は、中牟田文書十二通、木下文書七通、秦文書一通といった社家伝来の文書が知られる。社外文書については、工藤敬一「大積系門司氏文書」(『日本歴史』二八〇号、一九七一年)がある。これは熊本市内の某古書店から売りに出された文書五点を、表題のもと図版を付して紹介したものであるが、この内二点が香椎宮に関係する。康永四年(一三四五)五月日付香椎社雑掌満職重言上状、(年未詳)二月十九日付三苫宮内大輔宛大友義鑑書状の二点で、後者は三苫親宣の長男重宣(匡基)が受給した文書である。前者は、一九九三年に刊行された『新熊本市史 史料編第二巻 古代・中世』に「松本雅明氏所蔵文書」として翻刻されているが、一九九六年、北九州市立歴史博物館が購入し、現在、同館の所蔵となっている。

三苫文書の写本は、青柳種信関係資料(福岡市博物館所蔵)に二種収められている(福岡市立歴史資料館編集・発行『青柳種信関係資料目録』(一九八六年)参照)。ともに近世後期の写で、一九六七号「古文書写」は、三苫文書の他、木下文書等の香椎宮関係文書三十八通を写している。この内三十三通が三苫文書の写で、参考史料(1)永正十四年十一月六日付三苫善阿譲状は原本が伝存しない。一九六一号「糟屋郡古文書」には、「香椎宮三苫氏所持」として(天正十三年)二月二十二日付三苫長門守宛大友義統感状を写すが、これも原本は伝存しない。また、これに添えて四点の文書目録が付載されている。ともに参考史料(2)として翻刻した。これらと原本との対照は、後掲「三苫文書編年

(29) 益永文書延文四年十一月日宇佐宮神官等申状案（瀬野精一郎編『南北朝遺文九州編』第四巻四一五九号。以下、『南遺』四―四一五九のごとく略す）。

(30) 大友文書永仁七年五月二十二日北条実政裁許状（『宮史』二八七～二八八頁）。

(31) 石清水文書正和三年三月一日鎮西御教書（『宮史』二九五頁）。

(32) 川添昭二『蒙古襲来研究史論』二七六～二七七頁、雄山閣出版、一九七七年。

(33) 「諸家文書纂」所収文書（『宮史』二八四頁）。

(34) 太宰府天満宮文書弘安七年三月十一日少弐経資書下（『鎌倉遺文』二十巻一五一一四号）。

(35) 佐伯弘次「鎮西探題館の位置と構造―文献史料からみた―」（『法哈噠』一号、一九九二年）。

(36) 注(21)前掲史料。

(37) 「花園天皇日記」正和三年閏三月十九日条（『宮史』二九六頁）。

(38) 大友文書建武元年四月三十日後醍醐天皇綸旨（『宮史』二九七～二九八頁）。

(39) 熊本大学所蔵文書康永四年五月日香椎社雑掌満職重申状（『宮史』三〇一～三〇二頁）。

(40) 志賀文書後欠大友氏泰注進状案（『南遺』一―一〇一九）。

(41) 大友文書貞治三年二月日大友氏時所領所職注進状案（『宮史』三〇三頁）。

(42) 大友文書永徳三年七月十八日大友親世所領所職注進状案（『宮史』三〇四頁）。

(43) 「梅松論」（『宮史』二九九～三〇〇頁）。

(44) 門司文書康安二年十一月日門司親尚軍忠状（『南遺』四―四四三五）、同貞治三年三月日門司親尚軍忠状（同前四―四五三〇）、同貞治四年四月日門司親尚軍忠状（同前四―四五七一）。

（九州大学文学部）

注

(1) 『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会、一九九六年。

(2) 佐伯弘次「博多出土墨書陶磁器をめぐる諸問題」(前掲『博多遺跡群出土墨書資料集成』)。

(3) 注(1)前掲書。

(4) 「百練抄」保延六年六月二十日条、「石清水文書」建久八年五月三日太政官符(広渡正利『香椎宮史』二一六～二一七頁、文献出版、一九九七年、以下『宮史』と略し引用するが、史料解釈については独自に検討した)。

(5) 飯田久雄「平家と九州」(竹内理三博士還暦記念会編『荘園制と武家社会』吉川弘文館、一九六九年)、小島鉦作『小島鉦作著作集一　神社領知制の研究』第三章第八節、吉川弘文館、一九九五年。

(6) 小島前掲書。

(7) 同前。

(8) 以下、栄西に関する事績は、主として多賀宗隼『栄西』(人物叢書)吉川弘文館、一九六五年、による。

(9) 多賀前掲書八三～八四頁。

(10) 森克己『新訂日宋貿易の研究』二四五～二四六頁、国書刊行会、一九七五年。

(11) 「本朝無題詩」巻七(『宮史』二一八頁)。

(12) 「小右記」万寿二年二月十四日条、長元二年三月二日条、長元五年十二月七日条(『宮史』二〇〇～二〇六頁)。

(13) 「色定法師一筆一切経」(『宮史』二四七～二四八頁)。

(14) 「石清水八幡宮御修理造営之記」建久四年八月十五日条、「菊大路文書」八(『宮史』二四六～二四七頁)。

(15) 「玉葉」建久七年正月十八日、同二十三日、二十四日条(『宮史』二四八～二四九頁)。

(16) 石清水文書建久八年五月三日太政官符(『宮史』二五〇～二五一頁)。

(17) 「平戸記」寛元二年十月十日条、「猪隈関白記」正治元年十月十三日条、「後愚昧記」応安四年五月十三日条(『宮史』二五二～二五六頁)。

(18) 「石清水八幡宮記録」正治元年七月二十日太政官符(『宮史』二五八～二五九頁)。

(19) 「猪隈関白記」正治二年七月十一日条(『宮史』二六〇頁)。

(20) 「続左丞抄」所収承久二年九月日幸清解(『宮史』二六七頁)。

(21) 「宮寺縁事抄」所収天福元年五月日石清水八幡宮所司等申状(『宮史』二七一～二七二頁)。

(22) 「薩藩旧記前編」巻五所収建治元年十二月三日官宣旨案(『宮史』二八二頁)。

(23) 「百練抄」承暦元年四月三日条(『宮史』二〇八頁)。

(24) 「続左丞抄」所収承久二年九月日香椎宮検校幸清解(『宮史』二六七頁)。

(25) 「宮寺縁寺抄」所収建治二年十一月二十七日太政官符(『宮史』二八五頁)。

(26) 「新編追加」所収条々(『宮史』二八六頁)。

(27) 「民経記」裏文書承久二年十月日壱岐島解(『宮史』二六八～二六九頁)。

(28) 「宮寺縁寺抄」所収天福元年五月日石清水八幡宮所司等申状(『宮史』二七一～二七二頁)。

府の成立にとっても重要な合戦であった。この多々良川合戦の直前に足利尊氏・直義兄弟は香椎宮を訪れ、神人から笠印として杉の枝を受け取っている。[43]香椎宮が国内の戦乱と無縁でなくなったことを象徴的に示す出来事である。

貞治元年（正平十七、一三六二）十一月ごろ、香椎・立花付近で南北両朝間の合戦が起こった。北朝は九州探題斯波氏経・少弐冬資・宗像大宮司氏俊らが、南朝は征西将軍宮懐良親王・菊池武光・大内弘世らが直接・間接に関わるものであった。

北朝についた豊前の門司親尚の軍忠状[44]によると、九州探題斯波氏経が南朝討伐のため出陣したので、門司氏も豊前国規矩城に向かった。これは菊池武光の配下が規矩郡に城郭を築き立て籠ったので、その攻略が目的であった。菊池勢の落城も目前に迫った時、周防の大内弘世が南朝方として九州に渡海してきたので、親尚は「一所懸命之地」を捨て、橘・香椎から宗像に移動し、南朝勢力と戦った。この香椎付近での合戦を、それぞれの軍忠状では、「香椎・立花寺并宗像御陣」「橘・香椎両陣」「香椎・立花・金生合戦」と称している。香椎・立花付近で、小規模ながら南北朝の合戦が行われたのである。香椎地域は豊前北部・筑前遠賀・宗像地方と博多・大宰府を結ぶ中継地に位置したため、南北朝合戦の激化に伴い、戦略上の重要性が増したものと推定される。とくに注目されるのは、香椎とともに立花が登場することである。同時代の軍忠状による限り、立花に城郭が築かれたか否かは確認できないが、軍事上の要衝として城郭が築かれ、北朝―大友氏側の軍事的拠点となった可能性がある。

おわりに

以上、鎌倉・南北朝期の香椎と香椎宮について、概観してきた。これらを通観すると、当該地域の歴史には、いくつかの大きな画期があることがわかる。第一の画期は、平安末の荘園制の確立とそれと相前後する日宋貿易の活発化である。香椎には日宋貿易に従事する宋人が居住した可能性があることを指摘した。その検証や香椎宮と日宋貿易の関係究明は、今後の課題である。

荘園制の側面では、本家・領家の問題がいまだ課題である。また、石清水八幡宮の香椎宮支配は南北朝後期まで確認されるというが、同じく石清水社領となった筥崎宮と石清水八幡宮の関係は、戦国末期まで継続する。近隣にあり、ほぼ同時期に末社化した両社にこのような差異が出たのはなぜであろうか。その主たる原因は、大友氏による香椎宮の所領化によると考えたい。大友氏の香椎宮支配は、石清水八幡宮の介入を許さないほどの一円領化を志向したものであったのではあるまいか。

第二の画期は、鎌倉後期の蒙古襲来である。これによって香椎宮は幕府の神領興行法の対象になり、社領回復の機会に恵まれたが、一方で大友氏の進出を推進し、最終的に大友氏領化する結果をももたらした。大友氏の支配は中世末期まで継続することから、蒙古襲来の当地域に対する規定性は極めて大きいといえよう。

第三の画期は、南北朝期である。この時期、香椎宮とその社領は大友氏領として明確化するが、一方で、戦乱の激化・恒常化により、香椎地域も戦場となる。とくに立花城は、室町・戦国期大友氏の重要な軍事拠点であり、その萌芽は南北朝期にあるといえよう。

蒙古襲来は神国思想を高揚させ、異国降伏の祈禱が活発に行われる中で、神領興行法を始めとする厚い神社保護が加えられた。このエピソードは、こうした状況を敏感に反映した天満宮側の思考と活動の一端を物語っている。香椎宮も、こうした時流に乗り、自らの経済的基盤の確保と回復を達成しようとしたと考えられる。それは鎌倉時代初期以降続いていた衰退化の流れを大きく変える格好の機会であった。

四　南北朝時代の香椎と香椎宮

蒙古襲来は、香椎宮の経済的・イデオロギー的地位の回復と大友氏の進出という次元の相異なる二つの潮流を生み出した。そうした動向が南北朝期にどのように継続もしくは方向転換するのかを見ていきたい。

（一）　香椎宮と大友氏

建武政権が成立すると、次のような文書が政権から出された[38]。

筑前国香椎宮殿上大宮司職・同給免有次名田畠山野屋敷并奈多有次名田等、大宮司氏光当知行不可有相違者、天気如此、悉之、以状、

建武元年四月三十日　　式部大丞（花押）

大宮司氏光に香椎宮殿上大宮司職とその所領を安堵した、後醍醐天皇綸旨である。大宮司氏光は、鎌倉後期の大宮司氏盛と同系統の人物であろう。氏光は、建武政権から香椎宮大宮司の所職・所領が安堵され、新政権下での地位と権益を確保したのであるが、今ひとつ問題となるのは、本文書が大友氏の家文書に伝来していることである。後述するように、南北朝中期には明らかに香椎宮及びその社領は大友氏領化している。本綸旨がいつ大友文書中に伝来したかは不明であるが、貞治三年（一三六四）以前であることは間違いあるまい。あるいは文書発給と同時である可能性もある。

南北朝期に特徴的なことは、大友氏一族による香椎宮領の押領行為である。康永四年（一三四五）五月、香椎社雑掌満職は重ねて言上し、大友宗匡の非法行為を訴えた[39]。香椎社領であった筑前国席内・橘口両郷の地頭であった大友宗匡が神用米を対捍したため、香椎社雑掌が「任去月七日御下知、遂結解、可究済」と訴えたのである。訴えた先は、訴状に「為預御施行」とあることから、九州探題か筑前守護であると考えられる。大友氏一族の宗匡が香椎宮領の両郷地頭職を有していることは、この時すでに香椎宮とその社領が大友氏領化していることを示している。またその所職は地頭職であったことも判明する。南北朝初期の大友氏泰注進状[40]に、大友氏一族入田士寂（泰親）の所領の中に筑前国香椎社領隅郷がある。これも大友宗匡と同様の事例と考えられる。

大友文書に南北朝中後期の所領注文があることはよく知られている。その中の貞治三年（一三六四）の大友氏時所領所職注進状[41]には、「筑前国香椎社付諸郷」とある。永徳三年（一三八三）の大友親世所領所職注進状[42]にも同様の記述がある。すなわち南北朝中期にはすでに香椎宮及びその社領は大友氏領化していた。その時期は先述のごとく、康永四年まではさかのぼるが、今津と大隅守護領の関係からすると、鎌倉期までさかのぼる可能性もある。その契機は、蒙古襲来に伴う異国警固番役の開始と石築地の国別分担築造である。

（二）　戦乱と香椎

南北朝期は戦乱の時代であり、とくに九州はそれが激しかった。当然、香椎・香椎宮もその影響を蒙った。建武三年（一三三六）三月、筑前国多々良川付近で南北両朝の激しい合戦が行われた。多々良川の合戦である。これに勝利した足利尊氏は、上洛して室町幕府を開創したため、この合戦は室町幕

命令を意味する。つまり香椎宮は、蒲池が両名の神用米を香椎宮に納入しないことを、鎌倉幕府の神領興行法に則って訴えたのである。

鎮西探題は、これに対して、通常形式の裁判を行わず、神領興行法により、神用米を香椎宮に納入せよと命じた。この北条政顕の文書は、伝達文書である鎮西御教書であるが、実際には裁許状的な機能を有していた。ただし、実際に蒲池が探題の命令に応じたか否かについては不明である。

(四) 蒙古襲来と大友氏の進出

文永十一年(一二七四)と弘安四年(一二八一)の二度にわたる蒙古襲来は、九州の御家人や寺社に大きな影響を与えた。香椎地域及び香椎宮も例外ではなかった。

まず文永の役後、九州御家人が博多湾岸を定期的に警備する異国警固番役の制度が整備された。それと相前後して、博多湾岸には、今津から香椎まで石築地(元寇防塁)が国別の分担によって築造された。石築地の築造は、建治二年(一二七六)三月から八月の間とされる。その結果、異国警固は、担当石築地の場所で当該国が行うようになる。

従来、香椎地域の石築地築造分担国は不明であったが、豊後生桑寺所蔵大般若経裏打文書の発見によって、豊後であることが明らかになった[32]。建治二年三月、豊後守護で鎮西東方奉行であった大友頼泰は、次のような文書を出している[33]。

異国用心事、為其沙汰、今月拾五日以前、以子息可令差遣代官給候、
恐々謹言、
建治二年三月五日　　於香椎宮中、可有其聞事、
前出羽守(大友頼泰)(花押)

この文書は、大友頼泰が、「異国用心」すなわち異国警固のため、三月十五日までに子息を代官として派遣するように命じたものである。文言は「異国用心」しかないが、石築地の築造時期と一致しており、また「於香椎宮中、可有其聞事」と香椎宮に行くことが記されているので、単なる異国警固命令ではなく、石築地築造のための派遣命令と見た方がよいのではなかろうか。

こうして香椎地区の石築地は豊後国の武士によって築造され、豊後国の御家人により異国警固がなされた。それを指揮したのが守護大友氏であった。このような関係によって、香椎及び香椎宮と大友氏及び豊後国御家人の関係が緊密となった。今津が石築地築造分担国大隅の守護千葉氏領となり[34]、姪浜も同分担国肥前の守護領(鎮西探題領)となった可能性がある[35]ように、石築地築造・異国警固番役分担地が当該国の守護領化する傾向があった。香椎及び香椎宮と大友氏の関係も同様の関係であったと考えてよいだろう。

正和元年(一三一二)、九州の大社を対象とした神領興行法(鎮西五社興行令)が発布された。沽却・質入れ等によって神社領(神領)からはずれていた鎮西五社の元社領を、五社に返付するという徳政令である。その契機が蒙古襲来にあることは論をまたない。鎮西五社とは、宇佐宮・香椎宮・筥崎宮・太宰府天満宮・高良社の五社である。香椎宮が五社の一つに加えられたのは、古代以来、朝廷の崇敬が厚く、かつ同宮が「三韓征伐」伝承に因む仲哀天皇・神功皇后を祭神とし、神功皇后を「異国降伏之尊神[36]」と称したからであろう。香椎宮が、この神領興行法に則り、蒲池余一入道を訴えたのは、前述の通りである。

神領興行法が発布された直後、筑前国青木庄に勧請されていた北野社で、傷ついた蛇が出現した[37]。そして北野社の神が巫女に託して、「異国が襲来したので、香椎・筥崎・高良・我らが合戦し、香椎宮はすでに半死半生である」「祈禱してくれれば、再び出発し、異国を征伐する」と述べた。この話を伝聞した花園天皇は、「偏仰仏神之冥助許也」という感想を記している。

事」を朝廷に訴えた[28]。これによると、香椎社領野坂庄（宗像郡カ）はすでに地頭請になっており、地頭は毎年百三十石を社家に上納することになっていた。ところが二年前から地頭がこれを押領したため、仏神事用途が欠如してしまったというのである。これは鎌倉期の荘園に一般的な地頭による押領行為の一事例であるが、野坂庄が比較的早く地頭請化している点は注目される。

なお、この香椎宮領筑前国野坂庄は、南北朝期に宇佐宮領としての所見があり、筑前守護少弐頼尚の被官人香椎土佐又三郎・同助太郎が宇佐宮領野坂庄を濫妨している[29]。この土佐両名は「香椎」を苗字の上に冠しており、領主香椎宮との関係が想定される。

③　筑前国怡土庄

先述のごとく、建治造営の際、筑前国怡土庄が香椎宮造営料所に指定された。したがって怡土庄は純然たる香椎社領ではないが、造営が長引いたこともあって、香椎宮側がある種の既得権を有していた形跡がある。

永仁七年（一二九九）五月二十二日、鎮西探題北条実政は筑前国怡土庄友永方地頭代有慶・重清と香椎宮大宮司氏盛の相論を裁許した[30]。その裁許状によると、論地は怡土庄友永方重松名内田地八段（筒口と号す）と作稲であった。訴人は地頭代両名で、論人は香椎宮大宮司氏盛であった。友永方地頭は豊後守護大友氏である。事の発端は、重松名を氏盛が押領したことにある。地頭代はこれを鎮西探題に訴えた。探題は、永仁六年（一二九八）十一月二十七日、同十二月十一日、永仁七年二月十二日の三度にわたり、氏盛に召文を下したが、氏盛は探題の法廷に出頭しなかった。そこで探題は、肥後師景・加治俊員の両名を使節として氏盛に派遣して尋問させたところ、氏盛はやっと請文と陳状（反論書）を提出した。その陳状の内容は次の通りであった。

当庄〈怡土・志摩・友永・稲吉〉者為造営料所、致社家所務之間、名主等中訴出来之時、令取沙汰之状先例也、爰鬼塚入道々蓮、件田地四段六十歩為別相伝之処、空証〈重松名主〉称重松名内、寄事於御徳政、濫妨之間、致尋沙汰之許也、点置作毛、令朽損由事、存外也、

氏盛は、「怡土庄は香椎宮造営料所として、香椎宮の社家が知行してきたが、名主らが訴訟した時には、香椎宮が裁判を管轄するのが先例である。鬼塚道蓮は論地の四段六十歩を代々知行してきた。ところが重松名主空証が、永仁徳政令に事寄せてこれを押領したので、領主として尋問しただけである。作毛（作稲）を没収し、それを無にしたというのはいわれないことである」と主張しているのである。ここで注目されるのは、氏盛が名主の裁判を管轄すると主張している点である。これは香椎宮が荘園領主裁判権を主張していると考えられる。本来、怡土庄は造営料所であるから、そうした領主権に属する裁判権は有しないはずであるが、造営の長期化により、怡土庄が香椎宮領であるとの意識が香椎宮側に形成されていたのであろう。

こうした氏盛の陳状に対し、鎮西探題は、氏盛の召文違背の科を重視し、氏盛の相論を停止し、作毛は糾返せよと裁許した。つまり地頭側の勝訴であり、香椎宮は敗訴したのである。探題は、造営料所の進止権という一時的な権限よりも、地頭本来の進止権を重要視し、このような判決を下したと考えられる。

④　筑後国本吉庄

鎌倉後期に香椎宮は、宮領筑後国山門郡本吉庄をめぐり、在地領主蒲池余一入道と相論を行った。訴人は本吉庄雑掌の慶実と能光で、論地は本吉庄内の吉里・弘安両名の神用米であった。蒲池余一入道と本吉庄の関係は不明であるが、同庄もしくは近隣の在地領主と考えられる。正和三年（一三一四）三月一日、鎮西探題北条政顕は、慶実・能光の重訴状を蒲池余一入道に渡し、「早任彼状、可被致沙汰」と命じた[31]。重訴状の内容は、「背興行下知状、不究済」というものであった。「興行下知状」とは、後述する正和の神領興行法の

(二) 造営

香椎宮は、朝廷から派遣された宇佐使が同時に奉幣したことからもわかるように、朝廷の厚い保護を受けていた。したがってその造営も国家的な事業であった。

建治元年（一二七五）の官宣旨[22]に引用された薩摩国天満宮・国分寺所司等奏状には、「粗訪鎮西神社造営例、宇佐宮者九州被宛之、正八幡宮者被宛三箇国、香椎宮者被准宇佐宮例、筥崎宮者被寄役国之上、猶宛国中庄公催之、千栗宮又以同前」と記している。宇佐宮の造営は九州全体に賦課し、大隅正八幡宮は南九州三カ国に賦課し、香椎宮は宇佐宮の事例に準じ、筑前筥崎宮と肥前千栗宮は「役国」を寄付し、かつ筑前国中（千栗宮は肥前国中）の荘園・公領にも賦課するというのである。この史料から、香椎宮の造営は宇佐宮の造営に準じて、九州一円に造営料を賦課していたことが推察される。平安後期の承暦元年（一〇七七）の火災による香椎宮造営に際し、朝廷は「治安元年宇佐宮例」に準ずべきことを決定している[23]。平安後期においては、建治元年の官宣旨の記述と同様であったことがわかる。鎌倉期においても、造宇佐宮役は九州一円に賦課されたが、造香椎宮役が九州一円に賦課されたか否かについては確認できない。

中世において香椎宮は度々炎上し、造営が行われた。承久二年（一二二〇）、香椎宮検校幸清は朝廷に対して、「当宮（香椎宮）造営者、先例依為公家之御沙汰、雖為管国之勤役、国対捍之間、只有宣下之名、更無造営之実」と述べている[24]。荘園領主側の石清水八幡宮社家も、香椎宮造営は「公家之御沙汰」すなわち朝廷による造営であり、「管国之勤役」つまり九州各国の課役であったと認識していた。また、ここで述べているように、「国対捍」つまり九州各国の造営役不勤によって、九州各国への造営役賦課が不可能になっていた状況も知りうる。鎌倉前期には、すでに九州一円への造香椎宮役の賦課は困難になっていたのである。

文永七年（一二七〇）に香椎宮は焼失し、造営が必要となった。建治二年（一二七六）十一月、朝廷は香椎宮正殿を造立すべきことを大宰府に命じた[25]。一応、前代以来の朝廷による造営の原則は踏襲されたが、実際の造営は、蒙古襲来という大事件もあり、なかなか進捗しなかった。朝廷は九州全体に造宮役を賦課するのではなく、筑前国怡土庄を造営料所に指定し、造営を行おうとしたが、弘安七年（一二八四）に至っても造営は完了していない[26]。鎌倉時代のある時期に香椎宮造営は、九州各国賦課から造営料所設定へと大きく変化したのである。しかも新たな方式すらも順調には機能しなかった。こうした状況に変化をもたらしたのが、蒙古襲来に起因する鎌倉幕府・朝廷の神社保護政策であったと推測される。

(三) 社領

先述のごとく、鎌倉初期において、香椎宮領三十六カ所が石清水八幡宮の成清に給与された。しかし、その具体的な所領の全貌については明らかに出来ない。以下、断片的に検出される鎌倉期の香椎宮領について述べていきたい。

① 壱岐島

承久二年（一二二〇）、八幡別当法印代官香椎并本堂社司等が壱岐島公田の内、十五町を押領した[27]。具体的には、当年所当能米六十石と造内裏用途能米四十五石の計百五石が未納という状態になった。どのような関係から香椎宮社司が壱岐島公田を押領したのかは不明であるが、香椎宮領が壱岐に存在した可能性がある。

② 筑前国野坂庄

天福元年（一二三三）五月、石清水八幡宮所司は「筑前国香椎社地頭濫妨

三　鎌倉時代の香椎と香椎宮

（一）　荘園制的関係

ここでは香椎宮の荘園制的領知関係を検討したい。建久四年（一一九三）八月、朝廷より石清水八幡宮別当成清に対して、放生大会の際の「一日御修理」の賞として香椎宮領三十六カ所が与えられた[14]。これ以降、香椎宮は石清水八幡宮の門跡相伝となった。こうして香椎宮は石清水八幡宮の荘園制的支配を受けることになった。

しかし、香椎宮は順調に石清水八幡宮の支配下に入ったわけではなかった。建久七年（一一九六）正月、朝廷で「香椎事」が論じられた。これは、「以香椎廟、可為石清水領之由」が論じられたのである[15]。つまり香椎宮を石清水社領にしたこと自体が、朝廷における相論の対象となったのである。ここで誰が訴えたのかは明記されていないが、本家であった蓮華王院もしくは領家の池大納言家であろうか。その結果も不明であるが、その後の動向からして、石清水八幡宮側の主張が認められたものと推定される。

翌建久八年（一一九七）五月三日、朝廷は太政官符を大宰府に下し、香椎宮を石清水八幡宮に付し、法眼幸清をもって社務を執行せしむべきことを命じた[16]。これは同年三月二十日の成清解状の申請に応じたものである。この太政官符によって石清水八幡宮の香椎宮に対する荘園制的支配は一応の確立をみたと考えられる。

建久九年（一一九八）十一月十四日、香椎宮神人宗友・貞正等が同宮の神殿内に乱入し、自害するという事件が起こった[17]。これは、香椎宮検校幸清の留守慶禅が宮領を検注した時、宗友を追捕しようとしたところ、宗友等は社内に逃げ入り、自害したのである。恐らく事の発端は、慶禅の香椎宮領検注に神人等が抵抗したことにあるだろう。このことは、石清水八幡宮の支配に対抗する勢力が、蓮華王院―池大納言家というかつての荘園領主グループだけではなく、支配を受ける香椎宮内部にも存在したことを物語っている。

正治元年（一一九九）七月三十日、朝廷は太政官符を大宰府に下し、石清水八幡宮寺権別当法眼幸清を香椎社検校職に任じ、社務を執行せしめた[18]。これは、同年七月十三日幸清奏状に応じて、建久八年五月三日の太政官符を再確認したものである。幸清は奏状の中で、建久八年五月の太政官符が下された後、「無道濫奏之輩」が「垂迹之本末」を論じたり、「先例之存否」を称したりしていると述べている。つまり石清水八幡宮の香椎宮に対する支配が朝廷から認められてから、それに異を唱える者がいたのである。この一年後の史料に「香椎宮神官与八幡宮寺所司相論」[19]とあるので、正治元年の相論も香椎宮神官と石清水八幡宮の相論であったと考えられる。この両者の相論は、朝廷の崇敬を利用した石清水社の攻勢の前に石清水側の勝訴という結果をもたらしたと考えられる。

承久二年（一二二〇）には、石清水八幡宮が香椎宮の造営に関して朝廷に言上しているし[20]、天福元年（一二三三）には、石清水八幡宮所司が香椎社領の地頭濫妨について上申している[21]。これらはいずれも香椎宮側の主張を代弁したものと考えられ、石清水八幡宮の香椎宮支配が深化したことを物語っている。

石清水八幡宮で香椎宮の支配権を有した者は、その弟子を香椎宮検校に任じて社務を執行させた。これは同じく石清水社領となっていた筥崎宮に対する支配のあり方と同様であった。香椎宮検校は自身が下向したわけではなく、代官として留守を香椎宮に派遣して、代官支配を行わせた。留守の重要な機能の一つが検注であったと考えられる。

ある。[8] 栄西の入宋は、仁安三年（一一六八）（同年帰国）と文治三年（一一八七）（一一九一年帰国）の両度にわたる。「元亨釈書」によれば、平頼盛が栄西の旦那であって、第二次入宋時は頼盛に援助の意志があったという。第一次入宋の直前に栄西は、九州諸社で航海安全を祈願しているが、その中に香椎宮も入っていた。また、第二次入宋中の建久元年（一一九〇）には、栄西は宋から菩提樹を日本に送り、これを香椎宮境内に植えたという。さらに帰国後の建久三年（一一九二）、香椎社の側に建久報恩寺を建立し、ここで初めて菩薩大戒の布薩を行った。このように、すでに指摘されていることではあるが、栄西と香椎宮の関係も緊密であった。とくに平頼盛との関係の深さが、栄西と香椎宮をより緊密に結びつけたという指摘は妥当であろう。[9] 栄西の周辺には、李徳昭ら博多在住の宋商人がいたが、香椎宮―平頼盛―博多宋商―栄西という連関は、決して偶然的なものではなく、日宋貿易と密接に結びついたものと考えられる。

さて、香椎及び香椎宮と日宋貿易に関しては、すでに森克己氏の次のような指摘がある。[10]

この香椎宮の神領にも貿易船が著岸したことは、正嘉元年東巌安禅師が香椎宮で入宋のために便船を待ってゐること（東巌安禅師行実）、また弘長二年には、南都白毫寺注文の一切経を載せて宋の明州を発した商船も、香椎の浦に著岸してゐる実例（南都白毫寺一切経縁起）等によって知ることが出来る。

この指摘によれば、一三世紀半ばの香椎は、博多ほどではないが、日宋貿易の一拠点であったということができる。平安末期の香椎には、「客船数隻」を繋ぐ港があり、[11] 貿易港としての条件をある程度有していた。また、万寿二年（一〇二五）から長元五年（一〇三二）にかけて香椎宮司武行は、京都の藤原実資に対して、唐綾・紫金膏・可梨勒・檳榔子・絹などの唐物を贈っている。[12] これは香椎宮司武行が日宋貿易を直接行ったことを必ずしも意味するものではないが、香椎宮司の日宋貿易品入手の事実は指摘できる。この時代は博多で本格的な貿易が行われる直前の時期であり、鴻臚館貿易で流入した唐物を入手した可能性が高いが、香椎宮司の日宋貿易品に対する欲求は看取することができる。

また建久五年（一一九四）二月一日から三月二十四日にかけて、僧良祐は、「香椎宮中于報恩院寺」「香椎報恩院」「香椎別処報恩院寺」において一筆一切経の一部を書写している。[13] この香椎報恩院寺とは、栄西建立の建久報恩寺と考えられるが、これらの経典の「本経主」は「綱首張成」であった。張成は博多綱首の一人と考えられているが、張成と香椎宮及び建久報恩寺との間接的な関係が知られる。

以上のような文献史学の成果と、一節で述べた考古学的所見を総合すると、香椎と日宋貿易の関係はどのように総括することができるだろうか。すでに香椎及び香椎宮と日宋貿易の関わりは、文献史料から明らかにされている。これと香椎B遺跡出土の墨書陶磁器を重ね合わせると、香椎B遺跡の寺熊地区には、日宋貿易を担う宋商が居住していた可能性があると考えたほうがよい。しかもそれは、陶磁器の年代から、建久報恩寺が建立される以前の十二世紀代にさかのぼるのであり、博多に宋人居留地が形成される時期とほぼ同時期であるといえる。博多の唐房＝大唐街のみに宋人が集住したわけではなく、近隣地域にも宋人は居住したのではないか。十二世紀から十三世紀半ばにかけて、香椎にも、香椎宮や大宰府有力者・領家等の承認によって、なにがしかの宋人が居住し、さらにある場合には香椎宮の神人化して、貿易活動に従事していた可能性があると、現在のところ考えておきたい。

あるという理解になる。両者は全く異なる解釈であり、①～③のいずれが正しいのか、もしくはいまだ正解が出ていないのかをにわかに判断できないのが研究の現段階である。しかし、いずれにせよ、これらの墨書陶磁器が日宋貿易と構造的に深く関わっていることでは一致している。したがって、宋人名墨書陶磁器の出土は、これら宋人の香椎居住を物語るものでは必ずしもないが、香椎、特に寺熊地区が日宋貿易と深く関わる場であることは指摘することができる。

第二の類型は、上・中・下の文字を記した陶磁器である。少なくとも「上」が七点、「中」が一点、「下」が三点ある。また「上」の残画らしきものが三点ある。この上・中・下に類するものとして、「大」が二点ある。博多遺跡群では、墨書輸入陶磁器一二七四点の中に、「上」及び「上（花押）」が二二点、「下」が五点、「大」及び「大（花押）」が九点ある[3]。「中」と記したものは確認されていない。「上」が圧倒的に多いことは博多と香椎で共通する。しかし、博多遺跡群の場合、上・中・下よりも中国人名を記したものが圧倒的に多いことと比べると、香椎B遺跡の場合、この類型の多さが特徴であるといえる。ただし上・中・下・大がそれぞれ何を意味するのかについては、不明である。

第三の類型は、その他の漢字である。「天」が二点、「安」が一点、「山」が一点、「一」が一点ある。「一」以外は博多遺跡群で出土例がなく、これも香椎B遺跡の出土墨書陶磁器を特徴づけている。

第四の類型は、花押らしきもので、文字として判読が難しいものである。花押タイプ以外にも、墨書の汚れや破損等で判読できないものがある。

香椎B遺跡出土墨書陶磁器の類型と特徴は以上の通りであるが、その正確な意味は別として、日宋貿易の構造と何らかの形で深く関わるものということができる。

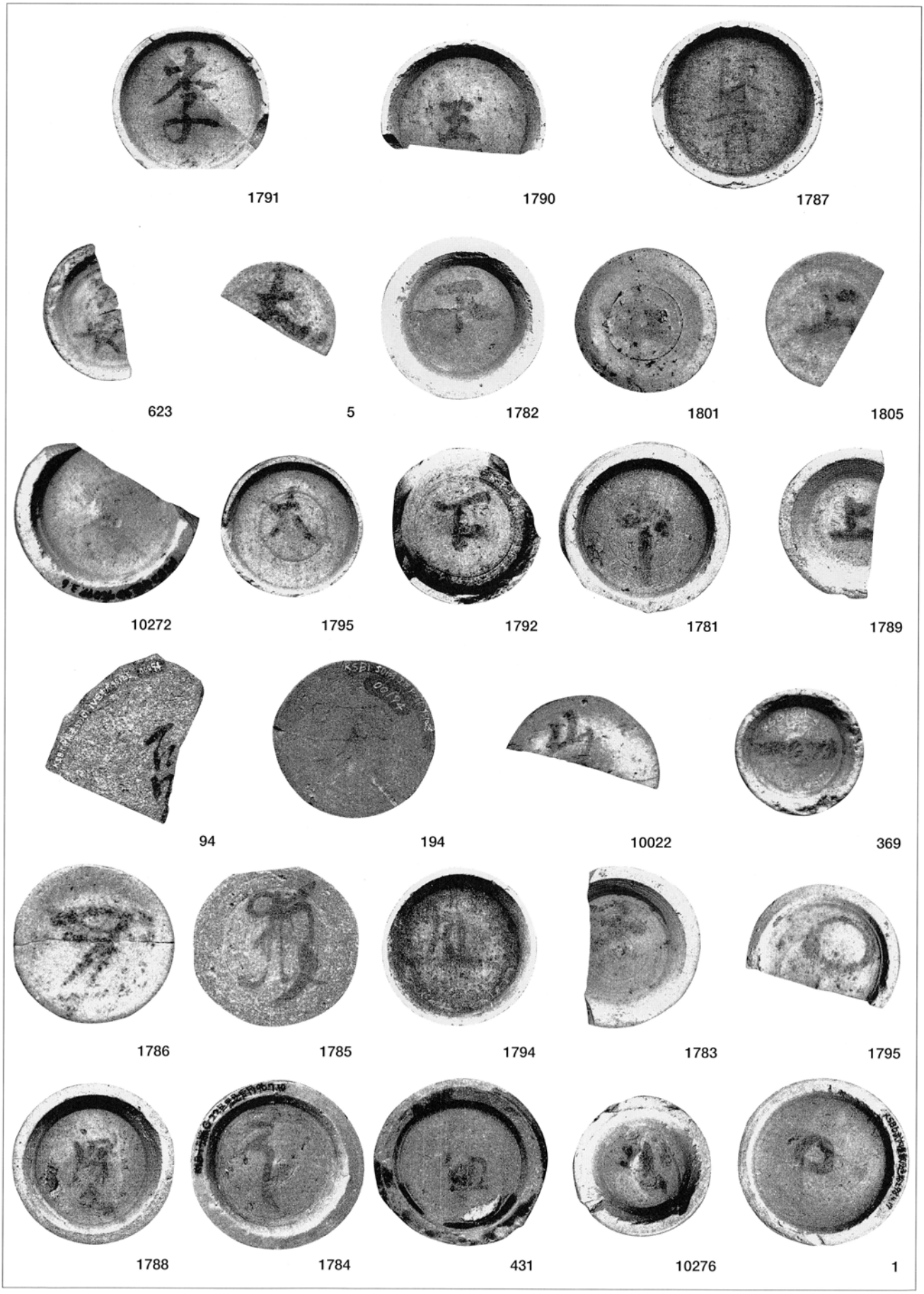
二　日宋貿易と香椎

第一節において、香椎B遺跡出土の墨書陶磁器は、この地区と日宋貿易との深い関わりを表すものであるとした。第二節では、このことを前提として、日宋貿易と香椎の具体的な関係について検討したい。

香椎自体と日宋貿易の関係は史料的によくわからないが、香椎宮と日宋貿易の関係は、断片的ながら判明する。香椎宮は本来香椎廟として朝廷の崇敬を受けていたが、保延六年（一一四〇）閏五月五日、大山寺・香椎宮・筥崎宮の神人らが大宰府と対立し、大宰府已下屋舎数十家を焼き払ったことにより、香椎・筥崎両社は大宰府に付けられた[4]。筥崎宮はその後、石清水八幡宮領となるが、香椎宮は、大宰大弐として仁安元年（一一六六）大宰府に下向した平頼盛によって、蓮華王院（三十三間堂）に寄進された[5]。この時頼盛は同宮の領家であったとされる。その後、平家の衰退によって、寿永三年（一一八四）四月、平頼盛領も平家没官領の注文に載せられたが、頼盛の母池禅尼がかつて源頼朝を助けた功により、頼盛は赦され、筑前国香椎庄を含む家領は返付された[6]。鎌倉初期に香椎宮は後白河法皇より石清水八幡宮に寄進され、南北朝後期まで石清水八幡宮の荘園制的支配が続く[7]。

以上のような流れの中で、日宋貿易との関係で注目されるのは、大宰大弐平頼盛の香椎宮領家職掌握であろう。平氏は日宋貿易への志向性が強く、頼盛の兄清盛は、先例を破って宋船を兵庫大輪田泊に引き入れたほどである。また大宰府は対外関係をつかさどる役所であり、大宰大弐はその実質的な最高責任者であった。具体的な事実関係までは不明であるが、日宋貿易と香椎宮の接点の一つは、平頼盛にあったと推定される。

また、香椎宮と日宋貿易の関係を考える際、入宋僧栄西との関係も重要で



香椎B遺跡出土墨書陶磁器

中世の香椎と香椎宮

佐伯弘次

はじめに

本稿は、平安末から南北朝時代までの香椎及び香椎宮に関する問題を取り扱う。具体的には、まず香椎B遺跡から出土した墨書陶磁器を紹介し、香椎と日宋貿易の関係を推論的に検討する。次に、鎌倉期における香椎と香椎宮に関して、荘園制的領知関係、香椎宮の造営と社領、蒙古襲来と大友氏の進出等について検討する。さらに南北朝期の香椎と香椎宮について検討を加え、室町・戦国期への展望を示したい。

一　出土墨書陶磁器と日宋貿易

香椎B遺跡からは、少なくとも四十五点の墨書中国陶磁器が出土している。いずれもB遺跡の寺熊地区から出土したものであり、寺熊の中でも出土地点は比較的集中しているという。また、いずれも中国宋代の陶磁器の外底部に墨書があり、陶磁器の年代は十二世紀代のものが殆どであるという。

中国陶磁器の底部に墨書した陶磁器は、博多遺跡群で大量に出土している。[1] しかし、博多以外の地域では殆ど出土例がなく、博多で行われた日宋貿易に深く関わる遺物と考えられている。古代における政治・外交の中心であった大宰府でも、宋代の陶磁器が大量に出土している。しかし、墨書陶磁器は数点しか確認されておらず、日宋貿易における博多と大宰府の性格の相違を考古学的に物語っている。

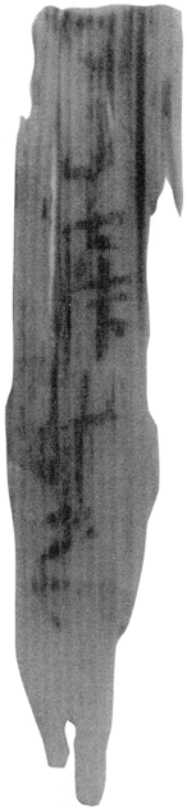
香椎B遺跡寺熊地区において出土した墨書陶磁器四十五点という数量は、博多に次ぐ量である。これは、博多遺跡群の出土量にははるかに及ばないが、大宰府より多いという点で注目される。十二世紀代前後における香椎と日宋貿易の関係が想定されうる量といってよいだろう。

四十五点の墨書陶磁器は、墨書の内容からいくつかのグループに分けることができる。まず第一は、中国人の名前（姓）を記したもので、「陳□」「王」「李」などがある。こうした中国人の姓名を記した墨書陶磁器は、博多遺跡群で数多く出土している。宋代の出土陶磁器自体が日宋貿易の所産であるが、墨書陶磁器は日宋貿易の構造と深く関わるものと推定される。しかし、墨書陶磁器の性格（墨書の意味）については、いまだ見解の一致を見ていない。例えば、陶磁器に墨書する意味として、①個人の所有物を表す、②組織体の備品を表す、③商品の所有者を表す、の大きく三通りの解釈がある。[2] ①②の見解では、墨書は博多でなされたとするが、③の見解では、日本に渡海する以前の中国でなされたとする。前者の解釈を香椎B遺跡出土墨書陶磁器に当てはめると、陳・王・李といった宋商人が香椎の寺熊に居住していたことになるが、後者の解釈では、出土陶磁器が陳・王・李といった宋商人の積荷で

12

11

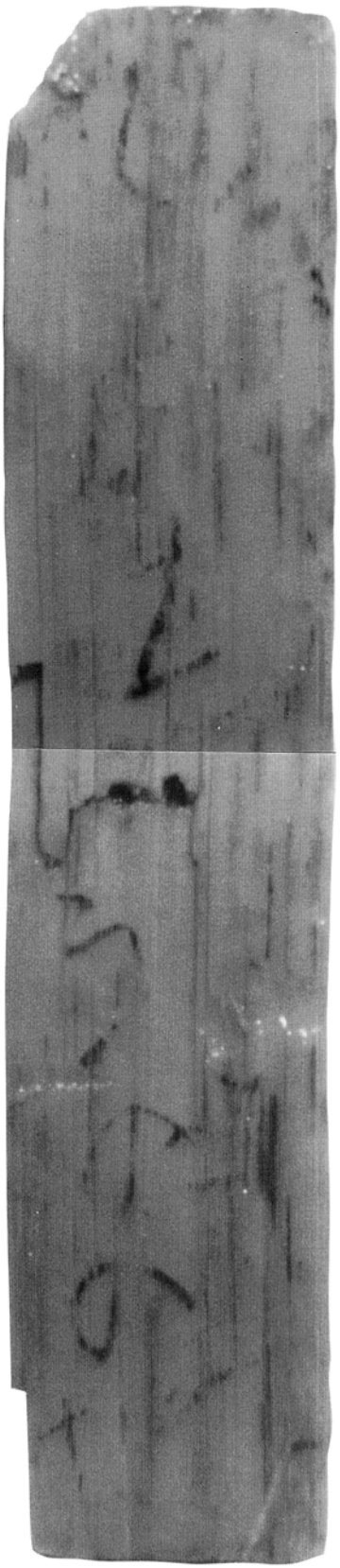
香椎B遺跡出土木簡(原寸)



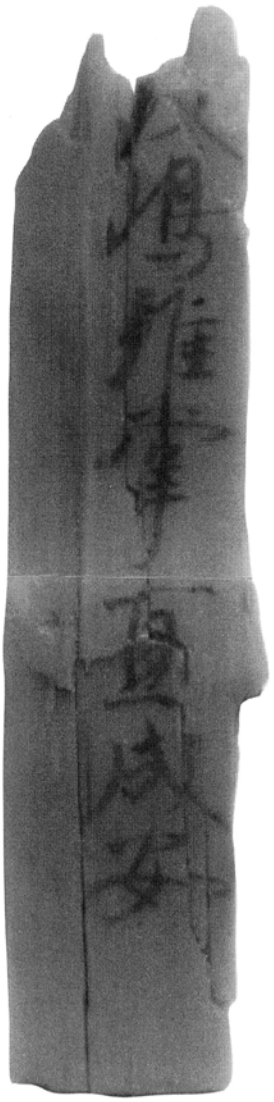
10

9

香椎Ｂ遺跡出土木簡(原寸)

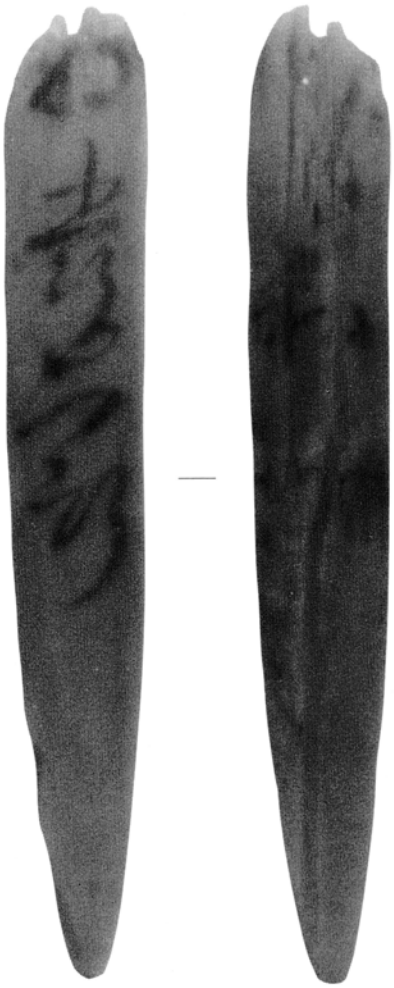


8



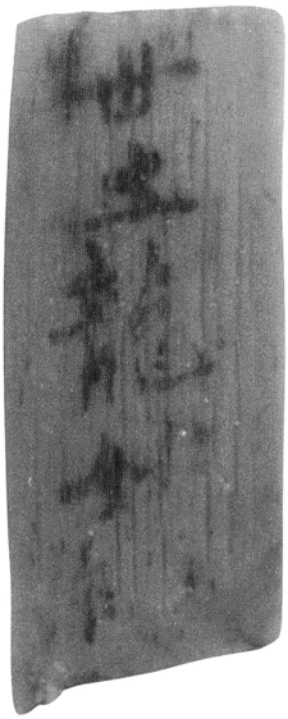
7

香椎Ｂ遺跡出土木簡（原寸）

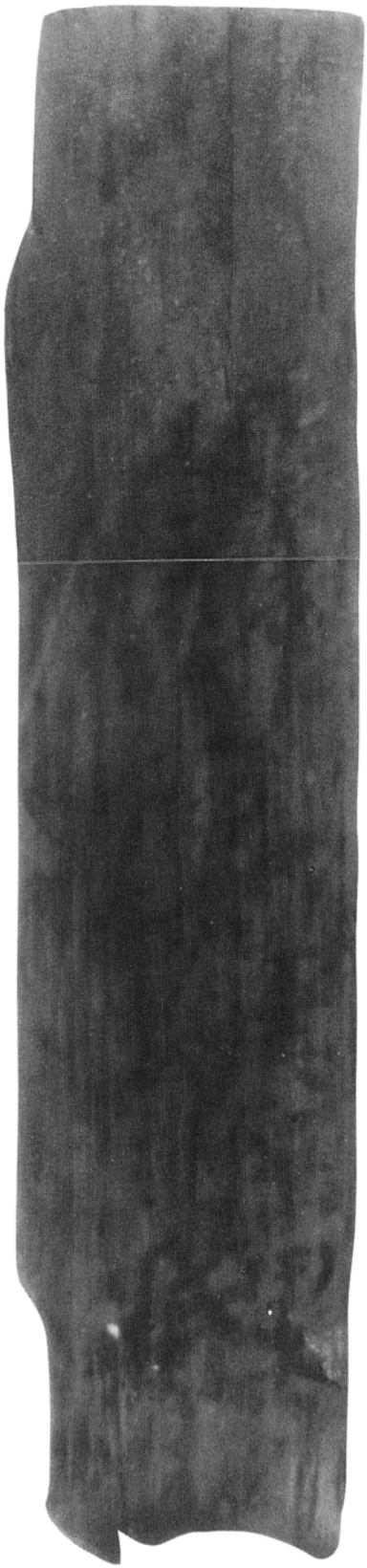


5

香椎Ｂ遺跡出土木簡(原寸)　6

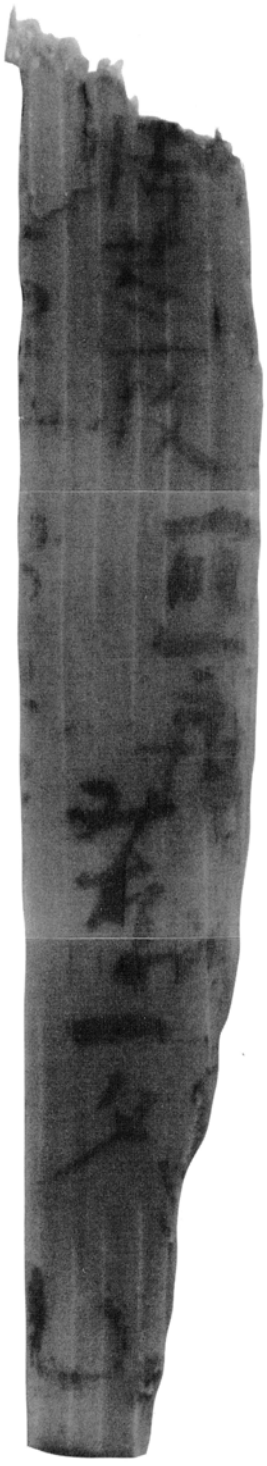


4



3

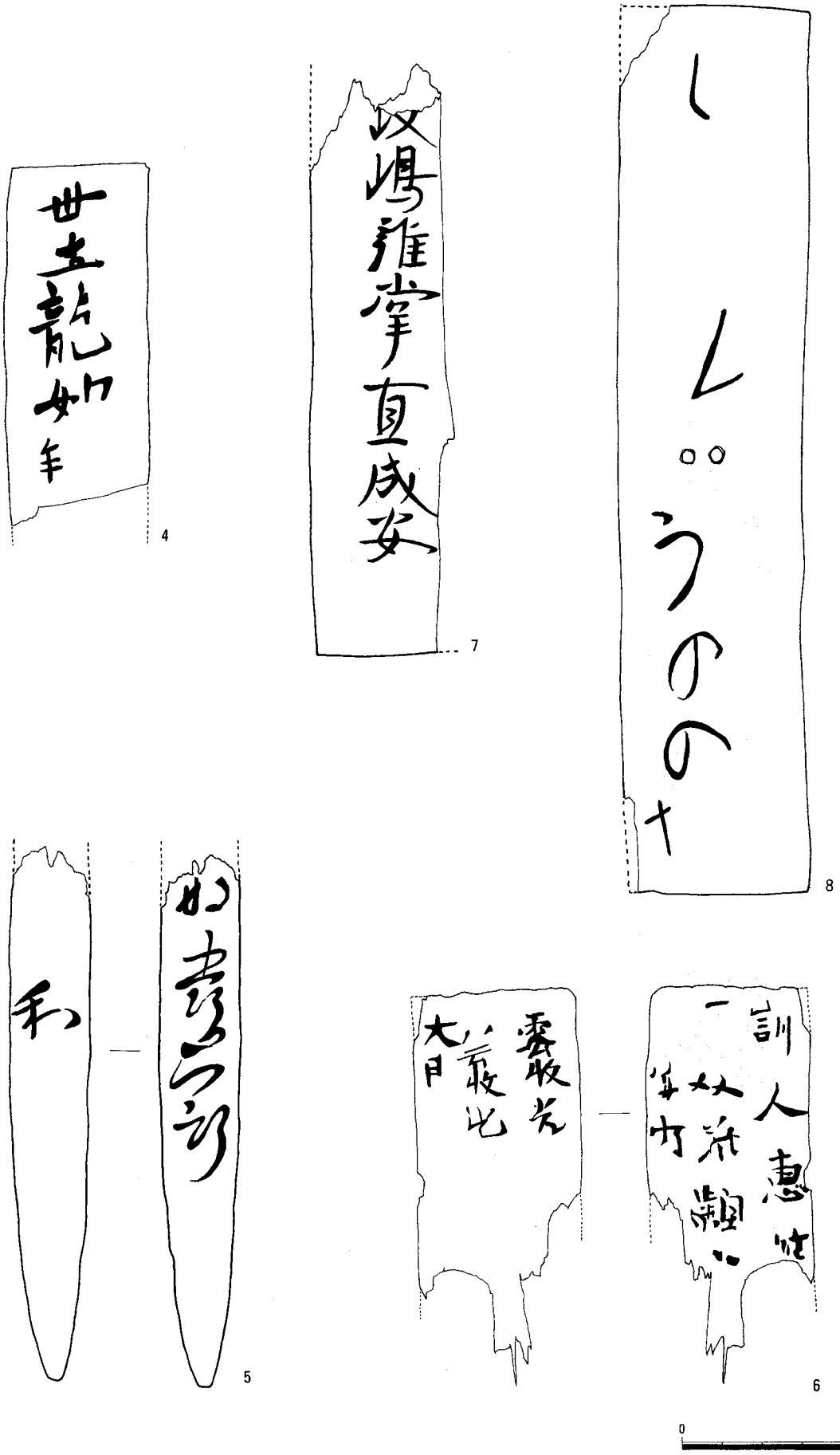
香椎Ｂ遺跡出土木簡(原寸)



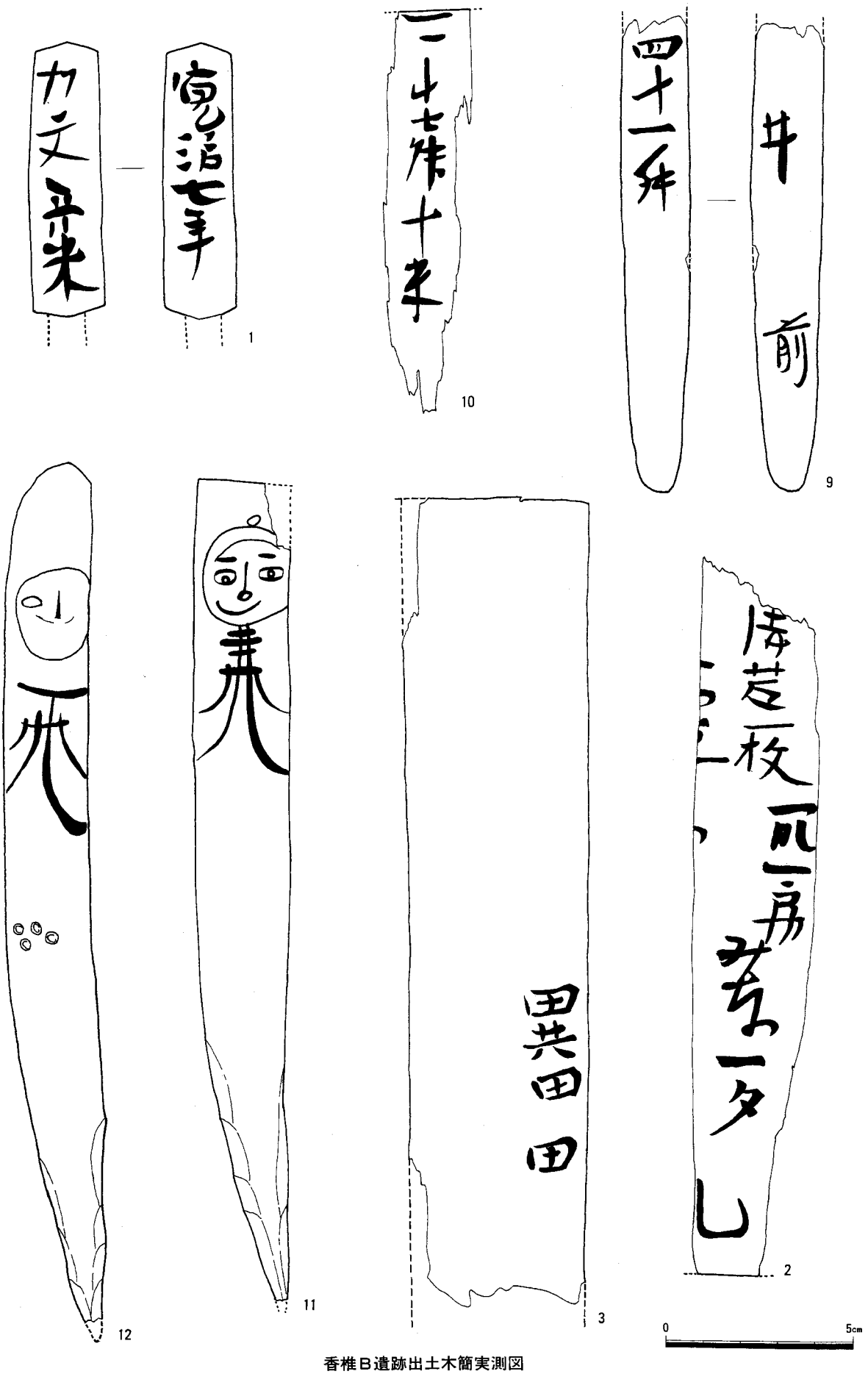
2

1

香椎Ｂ遺跡出土木簡(原寸)



香椎B遺跡出土木簡実測図



香椎B遺跡出土木簡実測図

集』、長和五年（一〇一六）の筑前守兼大宰少貳源同済（『源同済集』）、長暦元年（一〇三七）大宰権帥藤原隆家（『金葉和歌集』九）などの例が知られる。こういった参拝の時には、大宰府の官人（府官）が随従したと想像されるが、その一行に、管内諸国島の雑掌クラスが混じっていた可能性も無いとはいえない。その参拝の際にでも用いられた名札かもしれない。ただ、そうなると、いかに自然流路からの出土とはいえ、類品が全く見えないのは気になるところである。

付札木簡　(9)(10)の両木簡は、いずれも上端を欠くが、下端を尖らせており、俵にでも詰められた穀物の容積を記したものと思われる。(9)「四斗一升」については、同量を記した木簡が、平城京左京二条二坊六坪・大宰府跡不丁地区（二点）・長岡京左京南一条二坊十一町・平城京左京三条二坊（二条大路濠状遺構・南）から出土している。前四者では、具体的な品種が不明で、食料かと推測されていたのみであるが、二条大路木簡の場合は、「大炊寮　米一斗　糯米三斗　秣禾四斗一升　已上五月料」とみえ、稲米ではない何らかの穀物のようである。「一升」の下は判読不能であるが、書風から見て異筆と推測される。また表面の「井」は、「中」である可能性もあり、次の文字は木偏である。その次の文字の下半分は「寸」に見え、「尊」「寺」「等」などの文字である可能性があるが、委細は不明である。

(10)「三斗七升□〔半カ〕」については、「三斗七升半」と記された木簡が、いわゆる長屋王邸から二点出土しており、おそらくは米かと推測される。平安時代後期の斗量は正確には分からないが、奈良時代には近代の斗量の約〇・四倍であったとされており、時代がやや下るので、これより若干多めと考えておくのが穏当であろう。この量は、たとえば二升五合×一五日（ないし八）というふうに、基準量に日数なり人数なりを乗じたものであろうが、詳細は不明である。

なお形態からいえば、(5)「五郎二郎」木簡も、同様の付札の形をしている。同様の人名は、例えば福岡県北九州市八幡西区馬場山の辻田西遺跡出土木簡「御倉籾四斗三郎太郎□□」が報告されているが（『木簡研究』四号）、この木簡は鎌倉時代後期のものと見なされている。試みに『平安遺文』の人名索引に当たってみても、太郎以下、九郎（たとえば源九郎義経）・五郎その他多数の数字＋郎の人名の例が知られるが、連称する例は『平安遺文』の中では見出せない。こうした点から見て、(5)木簡は一三世紀以降のものと判断して良いだろう。ただ、(9)(10)木簡に見える容量は、意外にも古い時代のものに共通するものが見いだせるので、果たしてこれら二点も中世以降に下るのかどうかは不明とせざるをえない。

まとめ　今回報告した木簡は、残念ながら遺構や香椎宮と明白にむすびつくものではない。しかし、これらの木簡の出土した場所は、広い意味での香椎宮の境内であり、出土地点の上流に、香椎宮関連の収納施設が存在した徴証として、及びこの近辺で何らかの祭祀が行われていたことを示唆するものとして評価することができる。更に香椎の地と壱岐島との関連など、平安後期北部九州の歴史の解明にも資するところ大であると思われる。

本報告の執筆に当たっては、特に釈読の面で橋本義則（山口大学）・佐伯弘次（九州大学）・渡辺晃宏（奈良国立文化財研究所）各氏よりご意見を頂き、内容について森公章（高知大学）・鈴木景二（富山大学）両氏の、出土状況について瀧本正志氏（福岡市教育委員会）のご教示を得ることができた。また、全体にわたって広渡正利『香椎宮史』（前掲）及び奈良国立文化財研究所の木簡データベースより、多大の恩恵を受けたことを付記する。

（九州大学文学部）

已上百五石

右、件押領公田所当并造内裏用途不被貢済者、当島所課中隔瓦垣、進一本無可造築之力、且□□濫行之輩等、可被処罪科之状如件、

承久二年十月　日

次は、『経俊卿記』の建長八年（一二五六）四月二〇日条、

参院、以頭中将奏条々事

（中略）

隆清僧都申、香椎宮神官訴申、壱岐島守護代狼藉事可賜関東之院宣之由申之仰、可仰相国、

である。これらの史料は、香椎宮側が香椎宮領と主張する所領が壱岐島にあったことを示しているが、この主張の根拠については不明である。また、『壱岐郷土誌』所収「吉野家略譜考」によれば、弘安の役の終了後に壱岐島内の諸社に神領を寄進したが、そのうち香椎宮聖母大明神については、

可須郷　香椎宮領田、香椎村・新城村・中郷村・長嶺村・百次郎村・津甫村・有安村九十四町也

とみえている。可須郷は、現勝本町付近であるが、ここに香椎宮領があり、香椎宮聖母大明神が勧請されていたようである。そもそも可須という郷名の由来を、香椎大明神鎮座地にちなんで、香椎と称していたが、転化して可須になったものとする説もあるが（広渡正利『香椎宮史』二八頁。文献出版、一九九七年）、可須の郷名は、既に一〇世紀前半の和名抄において、壱岐郡可須郷と見えており、この時点以前に香椎が可須に転訛するとは考えがたい。ただ、先掲の文書・記録によれば、中世初期に香椎宮領が壱岐島に存在していた可能性は大きい。

というわけで、その書風から見て平安後期を下らないであろう当該木簡の時期の、香椎宮と壱岐島とを直接的に結びつける史料はない。ただ香椎宮の封戸が壱岐島に置かれていた可能性は無いではない。

香椎宮の封戸については、『新抄格勅符抄』には見えないが、『延喜式』民部省に「香椎宮　守戸一烟」とあり、更に、藤原（小野宮）実資の日記である『小右記』の長徳三年（九九七）六月一三日条には、高麗国からの牒状を承けて警戒感を強めた朝廷の会議で、「香椎廟内大臣封」に二五戸を加え寄せることが諒承されたことを記している。ここでいう「内大臣」は、既に『続日本後紀』承和五年三月二七日条に「香襲宮二人、大臣一人」に度者を給うとある「大臣」、また『延喜式』式部省上に「凡橿日廟宮舎人一人、大臣武内宿祢資人一人、預得考之例」とある、その「大臣」のことで、武内宿祢を指している。これらの封がどこに設定されていたかは全く分からないが、壱岐島に設定されていた可能性もあろう。

封戸からは、調庸その他の、本来国家に納入されるべき税が封主に納入されるが、その納入に際して、日常的には大宰府に詰めている雑掌が、香椎宮に出向し、納入と、返抄などの受領を監督した可能性はある。そう考えると、出土地点よりやや上流の稲戸前地区において、平安時代末と推定される掘立柱建物で、二間×二間の倉庫の可能性がある総柱建物が発見されていることが、あるいは関連があるのかも知れない。

以上は、平安時代後期の香椎宮と壱岐との関連を想像してみたもので、幾つもの仮定の上にたったものである。右のような雑掌としての活動の中において、この木簡がどういう役割を果たしたものか、よくわからないが、あるいは荷札か文書木簡の一部と考えるべきであろうか。

もう少し単純に、壱岐島雑掌の香椎宮参拝といった儀礼の際に用いられた可能性を考慮するべきかも知れない。文献に見える香椎廟の初見は、『万葉集』巻六の神亀五年（七二八）一一月の大宰帥大伴旅人らの参拝であり、以降、大宰府官人の香椎宮参拝は、天慶四年（九四一）五月の大宰少貳某（『桧垣媼

帳・調帳は、税帳に準じて当国の雑掌をして勘申せしめ、すなわち雑掌に附し、大帳の返抄並びに調帳損益等を収めしめよ。朝集帳及び自余の国島の四度の公文は、府の雑掌をして勘がへしめよ）

と規定されている。つまり、ほかの畿内及び六道諸国にあっては、各国の税帳そのほかの文書は直接太政官（の中の弁官）に送付されるのに対して、大宰府管内の諸国島にあっては、いったん大宰府において監査がおこなわれていたのであって、中でも壱岐などの三国二島にとっては、そこでしか弁明の機会がなかった。壱岐島雑掌は、壱岐島司から派遣された島司代理として、こういった大宰府との間で折衝に当たっていたのである。

直成安　「直」はもともとは壱岐直と称していた壱岐の豪族の姓であり、『新撰姓氏録』右京神別に「天児屋命九世孫雷大臣之後也」とある壱岐直の同族と見られ、早く『続日本紀』宝亀三年（七七二）一二月壬子条に、壱岐島壱岐郡の人直玉虫女が見えている（佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証篇第三、吉川弘文館、一九八二年、二九六頁、高野晋司「壱岐島分寺と壱岐直」小田富士雄編『風土記の考古学5』所収、同成社、一九九五年、など参照）、「成安」は名であるが、文献に見える国雑掌の多くは「成安」ないし「安成」を名としているので、これは縁起を担いだ仮の名であることが分かる。前述のような面倒な折衝がうまくいきますように、という願いを込めたものである。

この木簡は、文字面の左側面と下端が原形をとどめているものと見られる。従って名の下には、もともと何も記されていなかったと思われる。一方上端は、欠損しており、元来の長さは不明である。

壱岐と香椎　問題は、壱岐島雑掌直成安の名を記した木簡が、香椎宮の近傍で出土したことの意味である。前述のように、壱岐島を含む西海道の諸国島の雑掌は、基本的に諸国島と大宰府の官人との間の折衝に当たった。従って西海道諸国島の雑掌は、大宰府に常駐していたはずである。もっとも壱岐と大宰府との間の経路にあった博多の津に一時的に滞在したり、納入先として指定された場所、例えば鴻臚館等に出向くこともあったであろう。そういった活動の一環として島雑掌が香椎に来たことがあったとすれば、それにはどういう経緯が考えられるだろうか。

ここで問題となるのが香椎と壱岐島との関連である。

『香椎宮編年記』所収の「香椎廟建立縁起」という史料には、

詔て神境を付し玉ふ。東は鴨山（現、筑前国鞍手郡のうち若宮町。以下の現地比定は広渡正利後掲著による）、西は壱岐、南は住吉（筑前国那珂郡のうち）、北は尾呂（筑前国志摩郡のうち小呂島）、これを四限とせり。また神領を玉ふ。池田郷田百二十町、山田郷田八十町、和白郷七十町、三苫郷七十町、三代郷三十町（以下略。すべて粕屋郡の地名）

と香椎宮の所領について記述しており（詔の出された年次は無い）、香椎宮の所領が壱岐にまで及んでいたという伝承の存在が知られる。ただ『香椎宮編年記』の史料としての性格には、かなり問題があり、慎重に扱う必要がある。というのは当該書の筆者は大中臣重国とされ、彼は寛平七年（八九五）正月香椎廟司に初任、延喜一九年正月再任、延長三年（九二五）任終とされているが、同書所引の貞観六年（八六四）の「綸命」では「依天気如此、仍執達如件」と結んでいるなど、文書様式から見て、当該書の古い時期の記事には、中世の造作が混在していることが明白だからである。

壱岐と香椎との関係の確実な初見は、左の『民経記』寛喜三年（一二三一）八月巻紙背文書の壱岐島公田押領注進状（『鎌倉遺文』二六六四号）であり、

壱岐島公田内
　八幡別当法印代官香椎并本堂社司等押領拾五町
　　当年所当能米陸拾石四斗代
　造内裏用途能米肆拾五石段別三斗

を指す。当該木簡の「土龍」が、かかる中国の古典に見えるところと同義であるかは、なお慎重な検討を要するが、一考に値しよう。なお「土龍」が熟語であるとすれば、これは日本での出土例がこれまでに無い。四字目は女偏であり、残画からは「妙」か「如」あたりかと思われる。

(6)木簡は、その裏側に二行に渉って「雲収光」云々とあるので、こちらは習書に用いられたと見られる。これに対して表面には、「新嘗」云々の文字が判読でき、これはその内容から見て、この木簡が本来の目的で使用される際に記された文字であろうと推測される。つまり、この木簡は、初め嘗稲の収取に関する記述がある、一種の記録簡ないし文書簡であったが、その後不要となり、習書に用いられたとみるのである。表裏の判断は、これによる。但し一次利用の際の文字は、これ以上の判読が不能である。裏面の習書の内容は不明であるが、「大日」が大日如来を指すとすれば、仏典ないし仏家の著述でろう。

この意味では、(2)木簡の「講筵」も、僧侶の講説の場を指すとみることができる点、関連があるかも知れない。香椎宮でも中世には神仏習合の状況が看取されるし、また自然流路からは、瓦も出土しているため、寺院ないし仏堂の類が近くに存在していた可能性が指摘されている。(2)(6)の両木簡は、これらの遺物を理解するための貴重な史料たりうる。

壱岐嶋雑掌　次に、SX七一七から出土した(7)木簡を取り上げる。

「壱岐嶋」は古代の行政区分としての大宰府管内九国三島（のち二島）のうちの一島、即ち玄界灘に浮かぶ壱岐島を指す。「壱岐嶋」と記された木簡は、これが初の出土である。

次の「雑掌」は、国衙（島衙）の下級役人の就く役職の一つであり、ここでは国と同格の行政単位である島に所属する雑掌である。国及び島の雑掌は、木簡に記されたものとしてはこれが初例であるが、文献史料に見える国雑掌の例をみると、京に配置されて、諸国と太政官ないしその下の各部局との間の折衝に当たっていることが知られる。折衝の内容は、調庸その他の納入及びそれに対する返抄（受領証）の取得の指揮、また国司の代理として中央政府の様々な監査に対応することであった。（松崎英一「国雑掌について」『九州史学』三七・三八・三九合併号、一九六七年。のち林陸朗編『論集日本歴史3　平安王朝』所収、有精堂、一九七六年）。

『類聚三代格』巻十二諸使並公文事に収める寛平九年（八九七）六月十九日の太政官符によれば、京での監査に当たっては、大宰府管内諸国島の公文は次のように弁申（監査に対して弁明すること）せよとされている。

	筑前以下の三前三後	壱岐島などの三国二島
税帳（正税帳）	国雑掌による弁申	府雑掌による弁申
大帳（計帳）	同右	同右
朝集公文（考選文など）	府雑掌による弁申	同右

また、『延喜式』民部省上においても、

凡大宰府管内諸国島大帳・調帳・税帳、令府雑掌勘申。但筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後等国、副当国雑掌、各得勘弁。

（凡そ大宰府管内諸国島の大帳・調帳・税帳は、府の雑掌をして勘申せしめよ。ただし筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後等の国は、当国の雑掌を副へて、各勘弁することを得）

『同』主計寮下にも、

凡大宰管内筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後等六箇国大帳・調帳者、准税帳、令当国雑掌勘申、即附雑掌、収大帳返抄并調帳損益等。朝集帳及自余国島四度公文、令府雑掌勘之。

（凡そ大宰管内の筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後等の六カ国の大

溜りSX七一七

(7) 「□〔岐カ〕嶋雑掌直成安」　(145)×(36)×4　081

南北溝SD七一〇

(8) 「□　□　う□の□」（中央に小穴あり）　220×46×3　011

南北溝SD一〇〇

(9) ・　井□寺前　」　(133)×(19)×5　059

・四斗一升□□」

(10) 「三斗七升□〔半カ〕米」　(108)×(22)×3　081

出土遺構と木簡の年代観　自然流路SD一〇三は、谷部が一二世紀以降に屋敷地として大規模に造成される以前に存在したものであり、埋没時期は、一二世紀と判断されている。この溝からは、箸・椀・曲物などの大量の生活具、小型卒塔婆・舟形・刀形などの祭祀関係品、人物（仏？）を描いた斎串と思われる木製品二点（図版(11)(12)）が出土している。この溝から出土した唯一の紀年銘木簡には「寛治七年」、すなわち一〇九三年とあり、右に記した発掘担当者の年代観に合致している。SX七一七は、この自然流路に伴う溜まりである。

またSD七一〇は、一二世紀の初期造成時の区画溝であり、SD一〇〇は、一五・六世紀の区画溝であるが、ここから出土している木簡は、SD一〇三からの紛れ込みの可能性がある、とされている。

以上の所見では、出土木簡はすべて一二世紀ころ以前のものと判断されていることになる。しかし、(5)「五郎二郎」という人名は、いかにも中世風であり（後述）、ひらがな木簡の伴出と合わせ考えれば、自然流路SD一〇三は、後世における数度の溝の開削時に、幾分かの木簡の紛れ込みを認めなければならないだろう。

とすれば、今回取り上げる木簡については、出土の状況からは、一二世紀前後から一六世紀くらいまでの間に堆積したものという、漠然とした年代観しか得られないと考えておくのが穏当のようである。

寛治七年題籤軸　当遺跡出土木簡は、遺構との直接的な関連を把握し難いので、専ら個々の木簡の内容・形態等の検討から情報を引き出すことが必要となる。まず、表側に寛治七年の年記のある木簡(1)であるが、これは下端の形状からみて題籤軸（だいせんじく）と見られる。題籤軸というのは、巻物の軸の上端を平らに整形したり、小口を調製して、巻軸に糊付けされている書物や文書の内容を記しておくもので、奈良時代の題籤軸の伝世品が正倉院に保存されており、また、発掘調査によって出土した例も多い（北條朝彦「古代の題籤軸――正倉院伝世品と地方官衙関連遺跡出土品――」皆川完一編『古代中世史料学研究』上巻所収、吉川弘文館、一九九八年、参照）。当該木簡の場合は、裏面に巻物の内容を記していたはずであるが、残念ながら文字の判読が完全にはできない。一字目は「廾」のようにもみえ、また、三字目は「立」もしくは「直」のように見える。「直」であれば「直米」と熟し、何かの価格（購入品ないし売却品）に関する文書を貼り継いだものかと想像される。

土龍木簡と雲収木簡　次に同じく自然流路から出土した(4)と(6)について検討する。(4)木簡の一字目は「世（さんじゅう）」と読めるが、解釈としては「世」の意味でもありうる。「土龍」は、日本ではモグラ（モグラモチ）ないしはミミズの意味になるが、漢字本来の意義は、『淮南子（えなんじ）』説山訓に「為土龍以求雨」（土龍（どりゅう）を為（つく）り以て雨を求む）、『後漢書』礼儀志中に「其旱也、公卿官長、以次行雩礼、求雨。閉諸陽、衣皁、興土龍、立土人。舞僮二佾、七日一変、如故事」（其れ旱なるや、公卿官長、次を以て雩（雨乞い）礼を行ひ、雨を求む。諸ての陽を閉ぢ、皁を衣、土龍を興て、土人を立つ。舞僮二佾、七日に一変すること、故事の如し）とあるように、雨乞いの祭祀に用いる「土で作った龍」

香椎B遺跡出土木簡について

坂上康俊

出土木簡の釈文　香椎B遺跡から出土した木簡の出土位置とその釈文は、以下の通りである。

自然流路SD一〇三

(1)・「寛治七年　（題籤）　(74)×20×6　061
・「□文□米

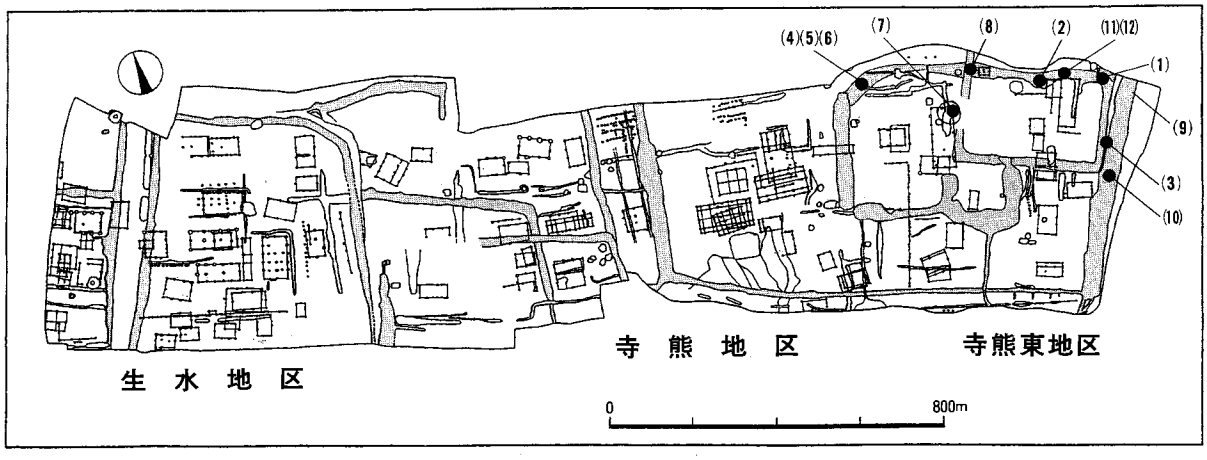
(2)　講筵一枚衆一房みな一夕　□
□□　」　(194)×(34)×6　081

(3)　「異異異（他にも判読不明の重書あり）　(220)×49×2　019

(4)　「丗土龍〔妙カ〕□□　(97)×38×7　019

(5)・□五郎二郎　」　(132)×20×3　059
・　□（花押カ）」

(6)・「訓人恵□　(98)×41×4　019
□□〔以新穎カ〕□□□
□□□□
・「雲収光□□□
雲収光
大日□□□



木簡出土位置図

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第六二一集

香椎B遺跡

平成十二年三月

福岡市教育委員会

香椎B遺跡
—本文編—
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書
〈第621集〉

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8－1
平成12年3月31日
☎092（711）4667

印　　刷　寿印刷株式会社
福岡市西区小戸4丁目5－42

KASHII－B SITE

THE REPORT OF THE SIX ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
OF THE KASHII-B SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

Editor Tadashi Takimoto
Contributors Shuzo Murata
Yasutoshi Sakaue
Koji Saeki
Yoshihiro Senda
Kazushige Horimoto
Tatsuo Yamazaki
Hidetoshi Yoshitome
Yuichiro Tagami
Tadashi Takimoto

March 2000
THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY